

洲本市

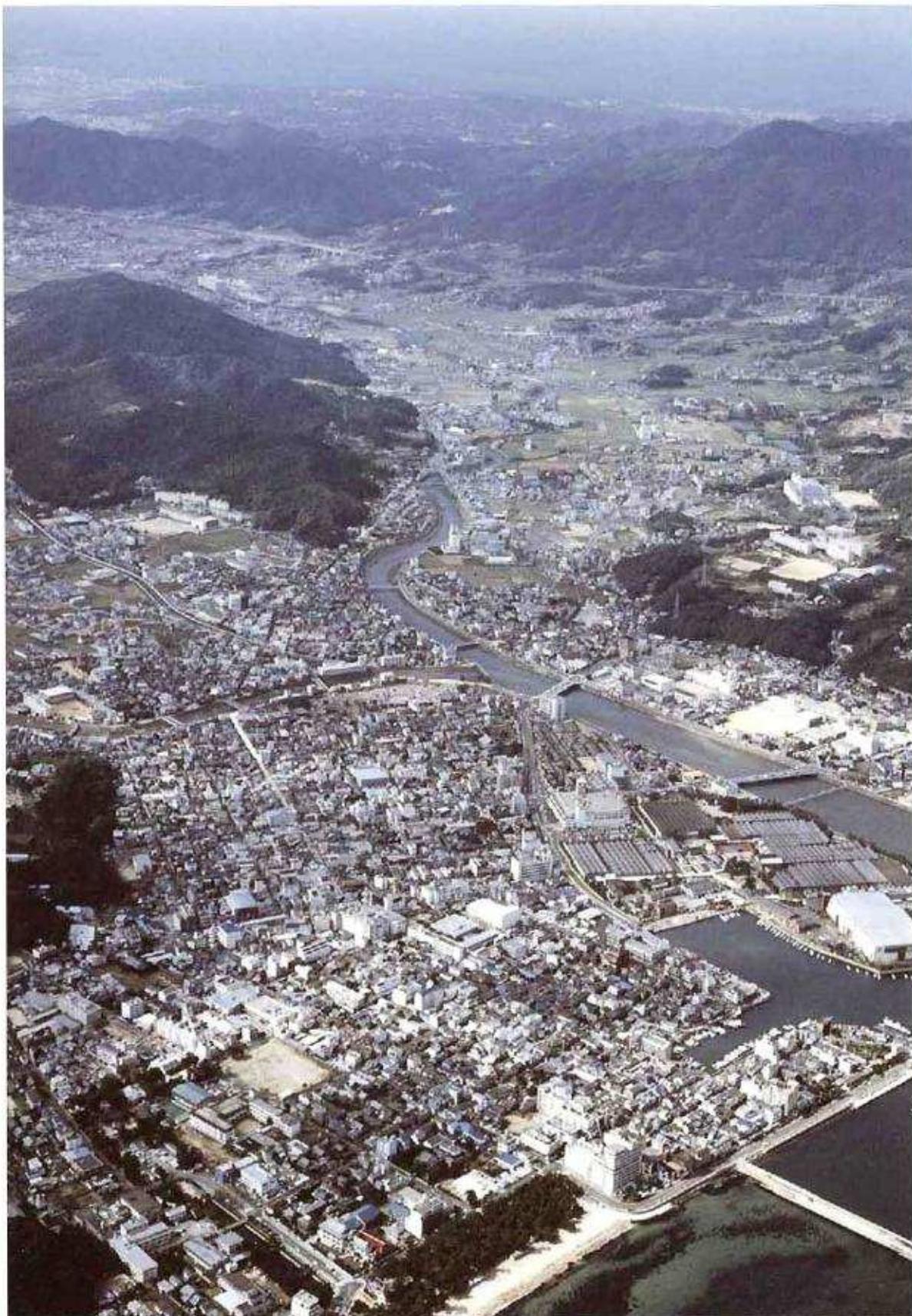
しも ない ぜん
下 内 膳 遺 跡

1996.3

兵庫県教育委員会



洲本平野全景（東から）



洲本平野全景（東から）



下内膳遺跡（調査前 東から）



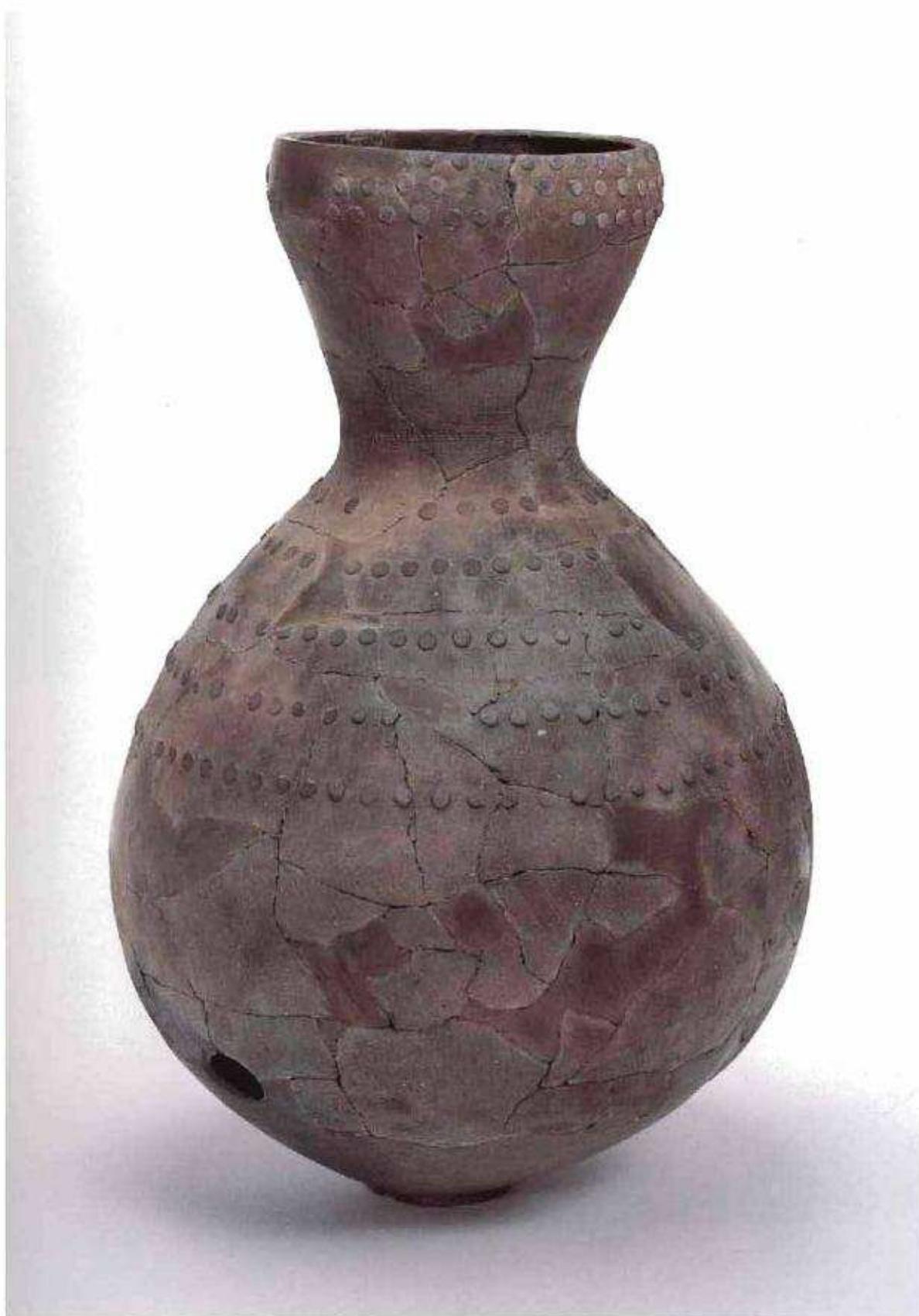
下内膳遺跡（調査後 東から）



1区第2面 掘立柱建物跡群（西から）



6区第6面 水田跡（南西から）



搬入された弥生中期の壺



弥生中期の各器種



弥生後期の壺



弥生後期の壺



弥生後期の鉢



弥生後期の高坏



弥生後期の器台

例　　言

1. 本書は、洲本市下内膳に所在する下内膳遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、一般県道上内膳津名線特殊改良第一種事業に先立つもので、兵庫県洲本土本事務所の委託を受け、兵庫県教育委員会が平成3年度に確認調査を、平成4年度に全面調査を実施した。確認調査は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 山田清朝・菱田淳子・中村 弘が、全面調査は同山田清朝・中村 弘・長濱誠司・所崎明雄が担当した。
なお、全面調査は、淡路土建株式会社と請負契約を結び実施した。
また、確認調査の道路調査番号は910007、全面調査の遺跡調査番号は920088である。
3. 遺構の実測・写真撮影は調査員が行った。なお、空中写真撮影については、㈱写測エンジニアリングに委託した。
4. 調査にあたって、奈良国立文化財研究所飛鳥資料館学芸課長 工藤普通氏、立命館大学文学部助教授 高橋 学氏には現地にて御指導をいただいた。また高橋氏からは、調査地での所見をもとに玉稿をいただいた。
5. 整理作業は、平成5年度から兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて実施した。
6. 遺物の接合・実測・トレース・復元については整理普及班で行い、遺物写真については㈱吉田カラーフォト商会に委託した。また、本製品の保存処理については、同事務所にて、整理普及班 藤田 淳が行った。
7. 頸椎器の胎土分析については奈良教育大学教授 三辻利一先生に依頼し、玉稿をいただいた。
8. 調査は、兵庫県洲本土本事務所の一般県道上内膳津名線特殊改良第一種事業に伴う多角点座標とともに国土地標を求める、これを基準とした。なお、調査地は第V系に位置する。
9. 本書に用いた方位は、座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。
なお、本文中においては、記述の簡略化を図るため、調査区の長辺を東西方向、短辺を南北方向として報告することにし、必要に応じて正確な方位を記すこととする。
10. 本書に用いた遺物番号は、本文・図版・挿図ともに統一している。
11. 本書の編集は松本 謙の補助を得て山田が行い、山田・中村・長濱が執筆した。
12. 本報告にかかる遺物は兵庫県教育委員会魚住分館（明石市魚住町清水）に、写真は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に保管している。
13. 最後に、発掘調査および報告書の作製にあたっては、以下の方々の御援助・御指導・御教示を頂いた。記して深く感謝の意を表するものである。

浦上雅史（洲本市教育委員会）・林部 均（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館）

目 次

第1章 下内膳遺跡

第1節 地理的環境（山田）	1
第2節 歴史的環境（長濱）	7
第3節 以前の調査（山田）	10

第2章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯（山田）	13
第2節 調査の経緯（山田）	13
第3節 整理作業（山田）	15

第3章 調査の結果

第1節 1区の遺構と遺物（中村・山田）	17
1. 概要	17
2. 第1面の遺構と遺物	22
3. 第2面の遺構と遺物	27
4. 第3面の遺構と遺物	41
5. 第4面の遺構と遺物	45

第2節 2区の遺構と遺物（中村・山田）	51
1. 概要	51
2. 第1面の遺構と遺物	55
3. 第2面の遺構と遺物	59
4. 第3面の遺構と遺物	69
5. 第5面の遺構と遺物	73
6. 第6面の遺構と遺物	93

第3節 3区の遺構と遺物（中村・山田）	97
1. 概要	97
2. 第1面の遺構と遺物	101
3. 第2面の遺構と遺物	104
4. 第3面の遺構と遺物	107
5. 第4面の遺構と遺物	123
6. 第5面の遺構と遺物	131
7. 第6面の遺構と遺物	137
8. 第7面の遺構と遺物	141

第4節 4・5区の遺構と遺物（長濱・中村・山田）	147
1. 概要	147
2. 第1面の遺構と遺物	151
3. 第2面の遺構と遺物	161

4. 第3面の遺構と遺物	167
5. 第4面の遺構と遺物	199
6. 第5面の遺構と遺物	203
第5節 6区の遺構と遺物（中村・山田）	219
1. 概要	219
2. 第1面の遺構と遺物	223
3. 第2面の遺構と遺物	231
4. 第3面の遺構と遺物	233
5. 第4面の遺構と遺物	237
6. 第5面の遺構と遺物	241
7. 第6面の遺構と遺物	243
第6節 7区の遺構と遺物（長濱・中村・山田）	249
1. 概要	249
2. 第1面の遺構と遺物	253
3. 第2面の遺構と遺物	255
4. 第3面の遺構と遺物	257
5. 第4面の遺構と遺物	259
6. 第5面の遺構と遺物	261
第4章 自然科学的分析	263
第1節 下内膳遺跡出土須恵器の蛍光X線分析（三注利一）	263
第2節 淀本川流域の地形環境分析（高橋一学）	271
第3節 下内膳遺跡出土木製品の樹種（伊東隆夫）	279
第5章 出土遺物のまとめ	283
第1節 弥生土器（山田）	283
第2節 奈良時代の土器（中村）	319
第3節 中世以降の土器（長濱）	321
第6章 遺構のまとめ	325
第1節 層序について（中村）	325
第2節 弥生時代の遺構（山田）	329
第3節 奈良時代の遺構（中村）	337
第7章 まとめ（山田）	341
第1節 遺構の変遷	341
第2節 地形環境の変化と土地利用の変遷	352
第3節 下内膳遺跡における位置付け	357
第4節 総括	359

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置(Ⅰ)	1	第36図 SB06柱根	35
第2図 淡路鉄道路線図	2	第37図 SB07	36
第3図 淡路鉄道	2	第38図 SB07出土土器	36
第4図 遺跡の位置(Ⅱ)	3	第39図 柱穴内出土土器	36
第5図 遺跡の位置(Ⅲ)	3	第40図 SD08	39
第6図 遺跡周辺の微地形	4	第41図 SD08出土土器	39
第7図 周辺主要遺跡	6	第42図 1区第3面	40
第8図 曲田山古墳	9	第43図 1区第3面出土土器	41
第9図 下内膳遺跡	10	第44図 SD11	42
第10図 確認調査の位置	12	第45図 SD12出土土器	43
第11図 地区割図	12	第46図 1区第4面	44
第12図 確認調査風景	13	第47図 1区第4面出土土器	45
第13図 実測風景	15	第48図 SB08	46
第14図 1区の遺構	16	第49図 SD14出土土器	47
第15図 1区の調査	17	第50図 SD17出土土器	48
第16図 1区土層断面(南面)	18	第51図 2区の遺構	50
第17図 1区第1面	20	第52図 2区の調査	51
第18図 1区第1面出土土器	21	第53図 2区土層断面(南面)	52
第19図 SD02・04出土土器	24	第54図 2区第1面	54
第20図 動溝出土土器	25	第55図 2区第1面出土土器	55
第21図 1区第2面	26	第56図 SD20	56
第22図 1区第2面出土土器(1)	27	第57図 土鍤	56
第23図 1区第2面出土土器(2)	27	第58図 SD21	57
第24図 SB01出土土器	29	第59図 2区第2面	58
第25図 SB01	29	第60図 2区第2面出土土器(1)	59
第26図 SB02	30	第61図 2区第2面出土土器(2)	59
第27図 SB02出土土器	30	第62図 SB09	61
第28図 SB02柱根	31	第63図 SB10	61
第29図 SB03	32	第64図 SB11	62
第30図 SB03出土土器	32	第65図 柱穴出土土器	62
第31図 SB04	33	第66図 杓	63
第32図 SB04出土土器	33	第67図 SK07	64
第33図 SB05	34	第68図 SK08	64
第34図 SB06	34	第69図 SK09	65
第35図 SB06出土土器	35	第70図 SK62出土土器	65

第71図	SD24	66
第72図	2区第3面	68
第73図	2区第3面出土土器	69
第74図	P7出土土器	70
第75図	SK10出土土器	70
第76図	2区第5面	72
第77図	2区第5面出土土器(1)	74
第78図	2区第5面出土土器(2)	75
第79図	S1	75
第80図	SD28	77
第81図	SD28出土土器	78
第82図	SD29出土土器(1)	81
第83図	SD29出土土器(2)	82
第84図	SD29出土土器(3)	83
第85図	SD29出土土器(4)	85
第86図	SD29出土土器(5)	86
第87図	SD29出土土器(6)	87
第88図	2区第6面	92
第89図	2区第6面出土土器	93
第90図	SD32出土土器	95
第91図	SD33出土土器	95
第92図	3区の遺構	96
第93図	3区の調査	97
第94図	3区土層断面(南面)	98
第95図	3区第1面	100
第96図	3区第1面出土土器	101
第97図	SB12	101
第98図	SB13	102
第99図	SD34出土土器	103
第100図	3区第2面	105
第101図	3区第3面	106
第102図	3区第3面出土土器(1)	108
第103図	3区第3面出土土器(2)	109
第104図	土器群A出土土器	110
第105図	土器群B出土土器	111
第106図	土器群C出土土器	112
第107図	土器群D出土土器	113
第108図	土器群E出土土器(1)	114
第109図	土器群E出土土器(2)	115
第110図	土器群F他出土土器	116
第111図	SD39出土土器	121
第112図	3区第4面	122
第113図	3区第4面出土土器	124
第114図	SK15出土土器	127
第115図	SD40出土土器	128
第116図	3区第5面	130
第117図	3区第5面出土土器	131
第118図	3区第6面	136
第119図	3区第6面出土土器	137
第120図	3区第7面	140
第121図	S2	141
第122図	SH01	142
第123図	P2出土礎板	142
第124図	SD62	144
第125図	SD62出土土器	144
第126図	4・5区の遺構	146
第127図	4・5区の調査	147
第128図	4・5区土層断面(南面)	148
第129図	4・5区第1面	150
第130図	4・5区第1面出土土器(1)	151
第131図	4・5区第1面出土土器(2)	151
第132図	4・5区第1面出土土器(3)	152
第133図	SB14	153
第134図	SB15	154
第135図	SB16	155
第136図	P6柱根	155
第137図	P11出土焼土塊	156
第138図	P12出土土器	156
第139図	P13出土石器	156
第140図	SD69	158
第141図	SD71	158
第142図	SD75	159
第143図	4・5区第2面出土土器(1)	162
第144図	4・5区第2面出土土器(2)	163
第145図	4・5区第3面	166
第146図	4・5区第3面出土土器(1)	168

第147図	4・5区第3面出土土器(2)	169
第148図	4・5区第3面出土土器(3)	170
第149図	S 4	172
第150図	SH03	176
第151図	SH03出土土器	176
第152図	SH04	177
第153図	SH04遺物出土位置	178
第154図	SH04出土土器	179
第155図	SH04出土磨石	181
第156図	SH04出土台石	181
第157図	SH04出土砥石	182
第158図	SH05	183
第159図	SH05出土土器	183
第160図	S 10	184
第161図	SK21	185
第162図	SK21出土土器(1)	186
第163図	SK21出土土器(2)	188
第164図	SK21出土石器	188
第165図	SD77出土土器	193
第166図	SD81出土土器	195
第167図	SD82出土土器	196
第168図	SD84出土土器	196
第169図	4・5区第4面	198
第170図	4・5区第4面出土土器	199
第171図	第4面水田跡	201
第172図	4・5区第5面	202
第173図	4・5区第5面出土土器	203
第174図	第5面出土柱根	204
第175図	SK48出土土器	208
第176図	SK50	209
第177図	SK50出土土器	209
第178図	SK51出土土器	210
第179図	SK56出土土器	213
第180図	SK57	215
第181図	SK57出土土器	215
第182図	6区の遺構	218
第183図	6区の調査	219
第184図	6区土層断面(南面)	220
第185図	6区第1面	222
第186図	6区第1面出土土器(1)	223
第187図	6区第1面出土土器(2)	224
第188図	S 13	225
第189図	P 18・P 19出土土器	226
第190図	SK60出土土器	227
第191図	SD95・SD97出土土器	228
第192図	6区第2面	230
第193図	6区第2面出土土器	231
第194図	6区第3面	232
第195図	6区第3面出土土器	233
第196図	6区第3面出土土器(2)	233
第197図	6区第3面水田跡	234
第198図	6区第4面	236
第199図	6区第4面出土土器	237
第200図	6区第4面水田跡	238
第201図	水田面直上出土土器	238
第202図	6区第5面	240
第203図	6区第6面	242
第204図	6区第6面出土土器	243
第205図	SD112	243
第206図	SD112出土土器	244
第207図	SD113出土土器	244
第208図	第6面水田跡	245
第209図	SD113と大畦畔	246
第210図	7区の遺構	248
第211図	7区の調査	249
第212図	7区土層断面図(南面)	250
第213図	7区第1面	252
第214図	7区第1面出土土器	253
第215図	SD114出土土器	253
第216図	7区第2面	254
第217図	7区第2面出土土器	255
第218図	7区第3面	256
第219図	第3面水田跡	257
第220図	7区第4面	258
第221図	7区第4面出土土器(1)	259
第222図	7区第4面出土土器(2)	259

第223図	第4面水田跡	259	(器高：口径).....	303
第224図	7区第5面	260	第254図	壺の法量の変遷
第225図	第5面出土土器	261	(口径：体部最大径).....	303
第226図	第5面水田跡	261	第255図	壺の法量の変遷
第227図	旧「先山駅」ホーム	262	(口径：体部最大径).....	303
第228図	分析対象窯跡の位置	264	第256図	壺の法量の変遷
第229図	庄慶窯出土須恵器の Rb-Sr分布図	265	(器高：体部最大径).....	304
第230図	土生寺窯および新宮窯出土 須恵器のRb-Sr分布図	265	第257図	壺の変遷(1).....
第231図	木戸窯出土須恵器の Rb-Sr分布図	265	第258図	壺の変遷(2).....
第232図	戸川池窯・汁谷窯出土 須恵器のRb-Sr分布図	265	第259図	壺の変遷(3).....
第233図	奥の池窯・角床窯出土 須恵器のRb-Sr分布図	265	第260図	壺の変遷(1).....
第234図	佐礼尾窯出土須恵器の Rb-Sr分布図	265	第261図	壺の変遷(2).....
第235図	下内膳遺跡出土須恵器の Rb-Sr分布図	266	第262図	壺の変遷(3).....
第236図	土師器のRb-Sr分布図	266	第263図	鉢の変遷(1).....
第237図	地域概念図	274	第264図	鉢の変遷(2).....
第238図	縄文海進最盛期の洲本平野	275	第265図	高坏の変遷.....
第239図	縄文時代晩期 -弥生時代前期の洲本平野	276	第266図	蓋台の変遷.....
第240図	下内膳遺跡の地形環境	277	第267図	主な須恵器.....
第241図	顕微鏡写真(1)	281	第268図	壺類分類図.....
第242図	顕微鏡写真(2)	282	第269図	須恵器壺B法量図.....
第243図	弥生中期の壺の分類	283	第270図	須恵器壺A法量図.....
第244図	弥生中期の壺の分類	284	第271図	主な土師器.....
第245図	弥生後期の壺の分類(1)	288	第272図	土師器壺A法量図.....
第246図	弥生後期の壺の分類(2)	289	第273図	淡路の各窯出土の主な須恵器.....
第247図	壺の法量(口径：体部最大径)	290	第274図	土層断面図(南壁1区～3区).....
第248図	壺の法量(口径：器高)	290	第275図	土層断面図(南壁4～5区～7区).....
第249図	壺の法量(器高：体部最大径高)	290	第276図	水田跡の変遷(1).....
第250図	壺の分類	291	第277図	水田跡の変遷(2).....
第251図	鉢の分類	293	第278図	配置図.....
第252図	高坏・蓋台の分類	295	第279図	掘立柱建物跡.....
第253図	壺の法量の変遷		第280図	掘立柱建物方位図.....

第285図 第Ⅲ期・第Ⅳ期の遺構	(4・5区～7区).....	349
第286図 第Ⅴ期・第Ⅵ期の遺構	(1区～3区).....	346
第287図 第Ⅴ期・第Ⅵ期の遺構	(4・5区～7区).....	347
第288図 第Ⅶ期・第Ⅷ期の遺構	(1区～3区).....	348
第289図 第Ⅸ期・第Ⅹ期の遺構		
第290図 第Ⅸ期・第Ⅹ期の遺構	(1区～3区).....	350
第291図 第Ⅸ期・第Ⅹ期の遺構	(4・5区～7区).....	351
第292図 地形環境の変化模式図(1).....		353
第293図 地形環境の変化模式図(2).....		355
第294図 上内膳遺跡における景観の変遷		358

表 目 次

第1表 周辺主要遺跡	7
第2表 1区土層注記	18
第3表 1区第1面出土土器観察表(1).....	22
第4表 1区第1面出土土器観察表(2).....	23
第5表 SD02・04出土土器観察表	24
第6表 錫溝出土土器観察表	25
第7表 1区第2面出土土器観察表(1).....	28
第8表 1区第2面出土土器観察表(2).....	28
第9表 SB01出土土器観察表	29
第10表 SB02出土土器観察表	31
第11表 SB03出土土器観察表	32
第12表 SB04出土土器観察表	33
第13表 SB06出土土器観察表	35
第14表 SB07出土土器観察表	36
第15表 柱穴内出土土器観察表	36
第16表 SD08出土土器観察表	39
第17表 1区第3面出土土器観察表(1).....	41
第18表 1区第3面出土土器観察表(2).....	42
第19表 SD12出土土器観察表	43
第20表 1区第4面出土土器観察表(1).....	45
第21表 1区第4面出土土器観察表(2).....	46
第22表 SD14出土土器観察表	47
第23表 SD17出土土器観察表	48
第24表 2区土層注記	52
第25表 2区第1面出土土器観察表	56
第26表 2区第2面出土土器観察表(1).....	60
第27表 2区第2面出土土器観察表(2).....	60
第28表 柱穴出土土器観察表	63
第29表 SK62出土土器観察表	65
第30表 2区第3面出土土器観察表	69
第31表 P7出土土器観察表	70
第32表 SK10出土土器観察表	70
第33表 2区第5面出土土器観察表(1).....	75
第34表 2区第5面出土土器観察表(2).....	76
第35表 SD28出土土器観察表	79
第36表 SD29出土土器観察表(1).....	88
第37表 SD29出土土器観察表(2).....	89
第38表 SD29出土土器観察表(3).....	90
第39表 SD29出土土器観察表(4).....	91
第40表 2区第6面出土土器観察表	94
第41表 SD32出土土器観察表	95
第42表 SD33出土土器観察表	95
第43表 3区土層注記	98
第44表 3区第1面出土土器観察表	101
第45表 SD34出土土器観察表	103
第46表 3区第3面出土土器観察表(1).....	116
第47表 3区第3面出土土器観察表(2).....	117
第48表 3区第3面出土土器観察表(3).....	118
第49表 3区第3面出土土器観察表(4).....	119
第50表 3区第3面出土土器観察表(5).....	120
第51表 3区第3面出土土器観察表(6).....	121
第52表 SD39出土土器観察表	121

第53表	3区第4面出土土器観察表(1).....	125
第54表	3区第4面出土土器観察表(2).....	126
第55表	SK15出土土器観察表.....	127
第56表	SD40出土土器観察表(1).....	128
第57表	SD40出土土器観察表(2).....	129
第58表	3区第5面出土土器観察表.....	132
第59表	3区第6面出土土器観察表.....	137
第60表	SD62出土土器観察表.....	144
第61表	4・5区第1面出土土器観察表(1)....	152
第62表	4・5区第1面出土土器観察表(2)....	152
第63表	P12出土土器観察表.....	156
第64表	4・5区第2面出土土器観察表(1)....	164
第65表	4・5区第2面出土土器観察表(2)....	165
第66表	4・5区第3面出土土器観察表(1)....	173
第67表	4・5区第3面出土土器観察表(2)....	174
第68表	4・5区第3面出土土器観察表(3)....	175
第69表	SH03出土土器観察表.....	176
第70表	SH04出土土器観察表.....	180
第71表	SH05出土土器観察表.....	181
第72表	SK21出土土器観察表(1).....	189
第73表	SK21出土土器観察表(2).....	190
第74表	SD77出土土器観察表(1).....	193
第75表	SD77出土土器観察表(2).....	194
第76表	SD81出土土器観察表.....	195
第77表	SD82出土土器観察表.....	196
第78表	SD84出土土器観察表.....	197
第79表	4・5区第4面出土土器観察表.....	199
第80表	4・5区第5面出土土器観察表.....	203
第81表	SK48出土土器観察表.....	208
第82表	SK50出土土器観察表.....	210
第83表	SK51出土土器観察表.....	211
第84表	SK56出土土器観察表.....	214
第85表	SK57出土土器観察表.....	215
第86表	6区第1面出土土器観察表(1)....	225
第87表	6区第1面出土土器観察表(2)....	226
第88表	P18・P19出土土器観察表.....	226
第89表	SK60出土土器観察表.....	227
第90表	SD95・SD97出土土器観察表.....	228
第91表	6区第2面出土土器観察表.....	231
第92表	6区第3面出土土器観察表(1)....	233
第93表	6区第3面出土土器観察表(2)....	233
第94表	6区第3面水田跡一覧表.....	235
第95表	6区第4面出土土器観察表.....	237
第96表	6区第4面水田計測表.....	238
第97表	木川面直上出土土器観察表.....	239
第98表	6区第6面出土土器観察表.....	243
第99表	SD112出土土器観察表.....	244
第100表	SD113出土土器観察表.....	244
第101表	6面水田跡一覧表.....	247
第102表	7区土層注記.....	250
第103表	7区第1面出土土器観察表.....	253
第104表	SD114出土土器観察表.....	253
第105表	7区第2面出土土器観察表.....	255
第106表	7区第4面出土土器観察表(1)....	259
第107表	7区第4面出土土器観察表(2)....	259
第108表	7区第5面出土土器観察表.....	261
第109表	法路の窓跡出土須恵器の 分析データ(1).....	267
第110表	法路の窓跡出土須恵器の 分析データ(2).....	268
第111表	下内膳遺跡出土土器の 分析データ(1).....	269
第112表	下内膳遺跡出土土器の 分析データ(2).....	270
第113表	下内膳遺跡出土木製品の 樹種同定一覧表.....	280
第114表	主要一括資料の時期.....	299
第115表	時期別出土型式一覧表(壺).....	300
第116表	時期別出土型式一覧表(鉢).....	301
第117表	時期別出土型式一覧表(高杯・器台).....	302
第118表	時期別出土型式一覧表(甕).....	304
第119表	掘立柱建物跡一覧表.....	340
第120表	時期別遺構面対照表.....	341
第121表	ステージ別土地利用の変遷表.....	356

図版目次

卷首図版 1

洲本平野全景(東から)

卷首図版 2

下内膳遺跡(調査前 東から)

下内膳遺跡(調査後 東から)

卷首図版 3

1区第2面 挖立柱建物跡群(西から)

6区第6面 水田跡(南西から)

卷首図版 4

搬入された弥生中期の壺

卷首図版 5

弥生中期の各器種

弥生後期の壺

卷首図版 6

弥生後期の壺

弥生後期の鉢

卷首図版 7

弥生後期の高杯

弥生後期の器台

図版 1 遺跡

1. 洲本平野(東から)
2. 下内膳遺跡遠景(東から)
3. 下内膳遺跡全景(東から)

図版 2 遺跡

1. 洲本平野(西から)
2. 下内膳遺跡遠景(西から)
3. 下内膳遺跡全景(西から)

図版 3 遺跡

1. 洲本平野(南から)
2. 下内膳遺跡遠景(南から)
3. 下内膳遺跡全景(南から)

図版 4 遺跡

1. 下内膳遺跡近景(南から)
2. 調査前(西から)
3. 調査前(東から)

図版 5 1区第1面

1. 東地区(西から)
2. 西地区(西から)

図版 6 1区第2面

1. 東地区(西から)
2. 東地区(西から)
3. SK05(東から)

図版 7 1区第2面

1. SB01~SB04(西から)
2. SB01~SB04(東から)

図版 8 1区第2面

1. SB01(北から)
2. SB03(南から)
3. SB04(南から)

図版9 1区第2面

1. SB02(西から)
2. SB02P 4
3. SB02P 4
4. SB02P13
5. SB02P 3

図版10 1区第3面

1. SD11(西から)
2. SD11(東から)
3. SD11断面(南から)

図版11 1区第4面

1. 全景(東から)
2. SD14(東から)
3. SD14断面(南から)

図版12 2区第1面

1. 全景(西から)
2. 全景(東から)

図版13 2区第2面

1. 全景(西から)
2. 全景(東から)

図版14 2区第2面

1. SB09(北から)
2. SK07(南から)
3. SK07(東から)

図版15 2区第5面

1. 全景(西から)
2. 全景(東から)

図版16 2区第5面

1. SD28断面(西から)
2. SD28上器出土状況(西から)
3. SD28上器出土状況(南から)

図版17 2区第5面

1. SD29上器出土状況(西から)
2. SD29上器出土状況(西から)
3. SD29上器出土状況(西から)

図版18 2区第6面

1. 全景(西から)
2. SD32・SD33(西から)
3. SD32断面(南から)

図版19 3区第1面

1. 全景(西から)
2. 全景(東から)

図版20 3区第2面

1. SD38(西から)
2. SD38(南から)

図版21 3区第4面

1. 全景(西から)
2. 全景(東から)

3. SK16断面(南から)

図版22 3区第3面

1. 全景(西から)
2. 全景(東から)

図版23 3区第3面

1. 土器群全景(東から)
2. 土器群E(南から)
3. 土器群F(南東から)

図版24 3区第3面

1. 土器群B(西から)
2. 土器群D(西から)
3. 土器群D(南から)

- 図版25 3区第3面
1. 土器群D(南から)
 2. 353出土状況
 3. 土器群B
 4. 356出土状況
 5. 土器群A
- 図版26 3区第5面
1. SD44断面(南から)
 2. SD52断面(南から)
 3. SD51断面(南から)
- 図版27 3区第6面
1. SK17断面(北から)
 2. SD58断面(西から)
 3. SD59断面(東から)
- 図版28 3区第7面
1. 全景(西から)
 2. 全景(東から)
- 図版29 3区第7面
1. SH01焼失状況(西から)
 2. SH01(西から)
 3. SH01 P 2(西から)
 4. SH01 P 2(西から)
 5. SH02(北から)
- 図版30 4・5区第1面
1. 全景(西から)
 2. 全景(東から)
- 図版31 4・5区第1面
1. SB14(北から)
 2. SB14 P 5(北から)
 3. P20(西から)
 4. SB14 P 3(北から)
 5. SB14 P 4(北から)
 6. SB14 P 1(西から)
 7. SB14 P 8(東から)
- 図版32 4・5区第1面
1. SD69断面(北から)
 2. SD71断面(北から)
 3. SD73断面(南から)
- 図版33 4・5区第3面
1. 全景(西から)
- 図版34 4・5区第3面
1. 全景(西から)
 2. 全景(東から)
- 図版35 4・5区第3面
1. 住居跡群(北東から)
 2. SH05(南から)
 3. SH03(南から)
- 図版36 4・5区第3面
1. SH04焼失状況(南から)
 2. SH04(南から)
 3. SH04土器出土状況(北から)
 4. SH04土器出土状況(西から)
- 図版37 4・5区第3面
1. SB16(北から)
 2. SB16 P 7(西から)
 3. SB16 P 6(西から)
 4. SD77断面(東から)

- | | | | |
|--------------|--------------------|--------------|-----------------|
| 図版38 4・5区第4面 | 1. 全景(西から) | 図版46 4・5区第5面 | 1. 全景(西から) |
| | 2. 全景(東から) | | 2. P15断面(西から) |
| | | | 3. P16断面(西から) |
| 図版39 4・5区第4面 | 1. 畦畔(南から) | 図版47 6区第1面 | 1. 6-1区全景(東から) |
| | 2. 畦畔(東から) | | 2. 6-II区全景(西から) |
| | 3. 畦畔(西から) | | |
| 図版40 4・5区第4面 | 1. 畦畔断ち割り断面(南から) | 図版48 6区第1面 | 1. 6-1区全景(東から) |
| | 2. SD85(北から) | | |
| 図版41 4・5区第5面 | 1. 全景(西から) | 図版49 6区第3面 | 1. 6-II区全景(西から) |
| | | | 2. 6-1区全景(東から) |
| 図版42 4・5区第5面 | 1. 全景(西から) | 図版50 6区第3面 | 1. 足跡(北から) |
| | 2. 全景(東から) | | 2. 水田跡(西から) |
| | | | 3. 水田跡(東から) |
| 図版43 4・5区第5面 | 1. 土壌群(東から) | 図版51 6区第4面 | 1. 水田跡(東から) |
| | 2. SK51(南から) | | 2. 水田跡(西から) |
| | 3. SK47断面(南から) | | |
| | 4. SK55断面(南から) | 図版52 6区第4面 | 1. 水田跡(東から) |
| 図版44 4・5区第5面 | 1. SK51土器出土状況(南から) | | 2. 水田跡(西から) |
| | 2. SK51土器出土状況(南から) | 図版53 6区第5面 | |
| | 3. SK51土器出土状況(南から) | | 1. SD108(東から) |
| | 4. SK50土器出土状況(南から) | | 2. SD108断面(南から) |
| 図版45 4・5区第5面 | 1. SK57(北から) | 図版54 6区第6面 | 1. 全景(西上空から) |
| | 2. SK56土器出土状況(北から) | | |
| | 3. SK56土器出土状況(南から) | 図版55 6区第6面 | |
| | 4. SK56土器出土状況(北から) | | 1. 全景(西から) |

- 図版56 6区第6面
 1. 6-1区全景(東から)
 2. SD112断面(北から)
- 図版57 6区第6面
 1. 6-1区西半全景(西から)
 2. 6-1区東半全景(東から)
- 図版58 6区第6面
 1. 獣歎(東から)
 2. 獣歎(北から)
- 図版59 6区第6面
 1. 大畦畔と水田跡(西から)
 2. 大畦畔と水田跡(東から)
 3. 大畦畔(東から)
- 図版60 6区第6面
 1. 大畦畔(北から)
 2. SD113断面(北から)
 3. 大畦畔とSD113(南から)
- 図版61 7区第1面
 1. 全景(西から)
 2. SD114(東から)
 3. SD114断面(北西から)
- 図版62 7区第3面
 1. 畦畔(南から)
 2. 畦畔(東から)
 3. 畦畔(西から)
- 図版63 7区第4面
 1. 全景(西から)
 2. 水田跡(東から)
 3. 水田跡(南東から)
- 図版64 7区第5面
 1. 全景(西から)
 2. 水田跡(東から)
- 図版65 先山駅ホーム
 1. 調査前(南東から)
 2. 調査前(南西から)
 3. 調査後(南西から)
- 図版66 先山駅ホーム
 1. 調査後(東から)
 2. 調査後(南東から)
 3. 調査後(南から)
- 図版67 1区出土遺物
 第1面出土土器(4・7・18~21・23~25・27)
 第2面出土土器(30)・第4面出土土器(70)
- 図版68 1区出土遺物
 第1面出土土器(26・28)
 第2面出土土器(32・35~38・44・46)
- 図版69 1区出土遺物
 第2面SB02出土柱根(W1)
 第2面SB06出土柱根(W5)
- 図版70 2区出土遺物
 第2面出土土器(91・92)
 第3面出土土器(112)
 第5面出土土器(124・126~128)
- 図版71 2区出土遺物
 第5面出土土器(131・141・145・146)
 第5面SD28出土土器(149・158・160・161)
- 図版72 2区出土遺物
 第5面SD28出土土器(159・162・165・166)
 第5面SD29出土土器(167)

图版73 2区出土遗物 第5面SD29出土土器 (168·169·171·174·176·181·184)	图版82 3区出土遗物 第3面土器群E出土土器(333·337·339)
图版74 2区出土遗物 第5面SD29出土土器 (182·196~199·203·204)	图版83 3区出土遗物 第3面土器群E出土土器(346~351) 第3面土器群F出土土器(354)
图版75 2区出土遗物 第5面SD29出土土器 (209·212·226·237~240)	图版84 3区出土遗物 第3面土器群F他出土土器 (352·353·356·357) 第4面出土土器(361·363~367·387)
图版76 2区出土遗物 第6面出土土器(246·250~252) 第1面出土土器(89) 第2面出土土器(97·99)	图版85 3区出土遗物 第4面SD40出土土器(391·393) 第5面出土土器(407·409·414·415) 第6面出土土器(420)
图版77 2区出土遗物 第2面出土土器(100·103·108~111) 第2面出土木制品(W.6) 第5面出土石器(S.1)	图版86 3区出土遗物 第7面出土石器(S.2) 第7面SH01出土木制品(W.7)
图版78 3区出土遗物 第3面出土土器 (278·282·287·292·293·296·300·301)	图版87 4·5区出土遗物 第2面出土土器 (459·461·465·472~475)
图版79 3区出土遗物 第3面土器群A出土土器(302·304·305) 第3面土器群B出土土器(309·310)	图版88 4·5区出土遗物 第2面出土土器(476~480·486~490)
图版80 3区出土遗物 第3面土器群B出土土器 (311·313·315·316·318·319)	图版89 4·5区出土遗物 第3面出土土器 (493·498·500·504·509·511·512·514)
图版81 3区出土遗物 第3面土器群C出土土器(321·323·325) 第3面土器群D出土土器(328·331·332)	图版90 4·5区出土遗物 第3面出土土器(516·528·529·531~534·536~539·541·543)

- 图版91 4·5区出土遗物
第3面出土土器(544~547·549·553)
第3面SH04出土土器(558·559·566·573)
- 图版92 4·5区出土遗物
第3面SH04出土土器
(557·560·562·565·568·569·572·574)
- 图版93 4·5区出土遗物
第4面SD87出土土器(726~729)
第5面出土土器(637)
第5面SK48出土土器(639)
第5面SK50出土土器(641·642)
- 图版94 4·5区出土遗物
第5面SK51出土土器(643~646)
第5面SK56出土土器(648)
- 图版95 4·5区出土遗物
第5面SK56出土土器
(647·649·650·653·656)
- 图版96 4·5区出土遗物
第5面SK57出土土器(657)
第5面出土柱根(W9·W10)
- 图版97 4·5区出土遗物
第1面P13出土石器(S3)
第3面柱穴出土石器(S14)
第3面出土石器(S4)
- 图版98 4·5区出土遗物
第3面SH04出土石器(S5~S7·S9)
- 图版99 4·5区出土遗物
第3面SH04出土石器(S8)
第3面SH05出土石器(S10)
第3面SK21出土石器(S11·S12)

第1章 下内膳遺跡

第1節 地理的環境

1. 地理的環境

淡路島

下内膳遺跡の所在する洲本市は、兵庫県の南部にあたる淡路島の南東部に位置する。淡路島は、瀬戸内海に浮かぶ幾つかの島の一つで、大阪湾の西側に位置する。南西部は鳴門海峡を挟み徳島県と、南東部は紀淡海峡を挟み大阪府・和歌山県と接しており、近畿と四国を結ぶ位置にある。南北約54km、東西約28km、面積約596km²と、瀬戸内海最大の島である。

島内は、1市10町からなり、洲本市は地理的にも、経済的にもその中心的位置にある。東側は大阪湾を望み、南側は紀伊水道に面している。また西側は五色町・緑町・三原町・南淡町と、北側は津名町と境をなしている。

洲本市

洲本市は、南北約20km、東西約10kmと南北に長いが、南半部は急峻な諭鶴羽山地となっており、北半部の洲本平野およびその周辺の高位段丘面上が生活域となっている。特に北東部の洲本港および旧洲本城下に形成された城下町を中心とした洲本平野を中心をなしている。

古代においては南海道が当市域を通っていたと推定されている（詳細は第6章）。その後、津名郡津名町から旧洲本城下を避ける形で「四国街道」が福良へと通じ、当遺跡がその通過地点となっていた。その後、「四国街道」に変わる形で、明石と徳島を結ぶ国道28号線が開通した。この国道は、本州側の明石・神戸・大阪から岩国港・津名港あるいは洲本港への海路と鳴門海峡とを結び、関西と四国を結ぶ交通の中継地点となっている。淡路縦貫自動車道が津名から鳴門までしか完成していない現在（平成8年）も、この役割に大きな変化はない。

淡路鉄道

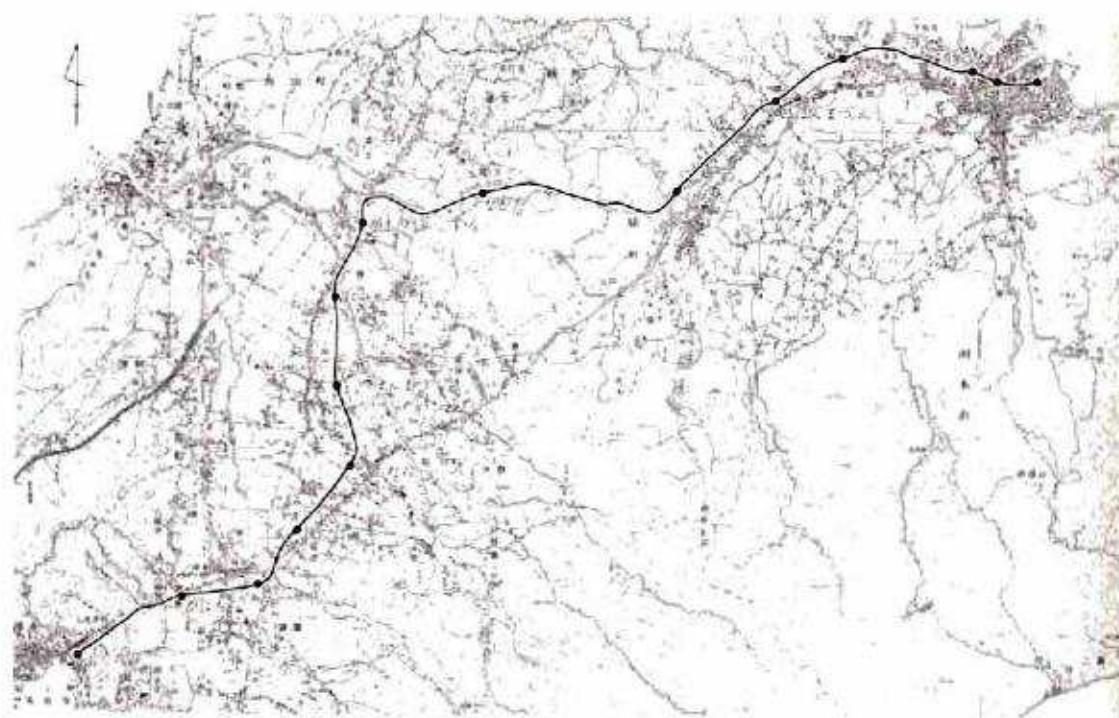
また、道路交通以外に鉄道交通の起点としての役割も担っていた。それは、洲本と南淡町福良を結ぶ民営の淡路鉄道（第2図・第3図）で、大正11年から昭和41年まで営業されていた。ちなみに、この鉄道の駅の一つで「すもと」駅から4番目に「せんざん」駅があり、この駅の北西部に、下内膳遺跡が広がっている。そして、この旧「せんざん」駅から西へ400mの間の軌道敷部分が今回の調査対象地である。

先山

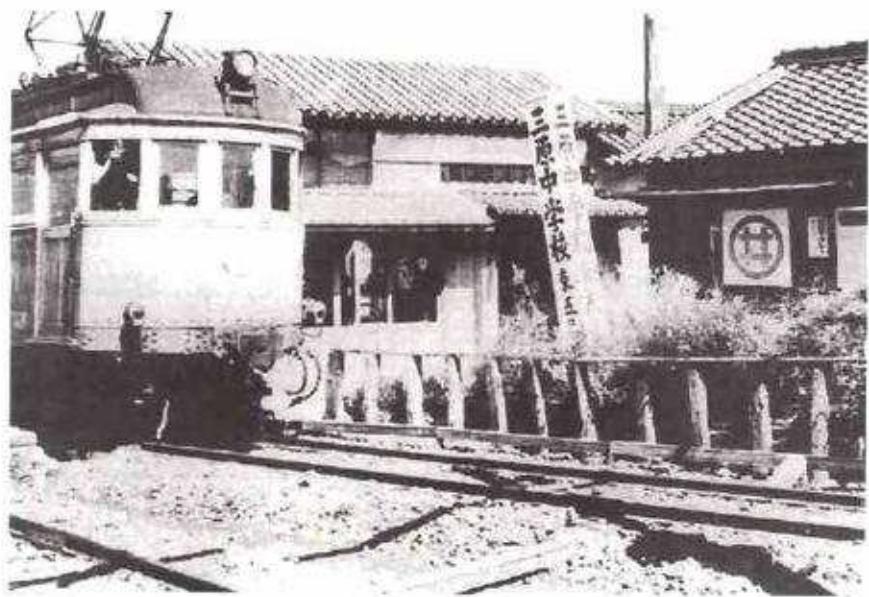
この下内膳遺跡の位置は洲本市の北西部にあたる。洲本川を中心に形成された洲本平野は基本的には東西方向に細長くのびるが、洲本川の中流域から上流域にかけてわずかに



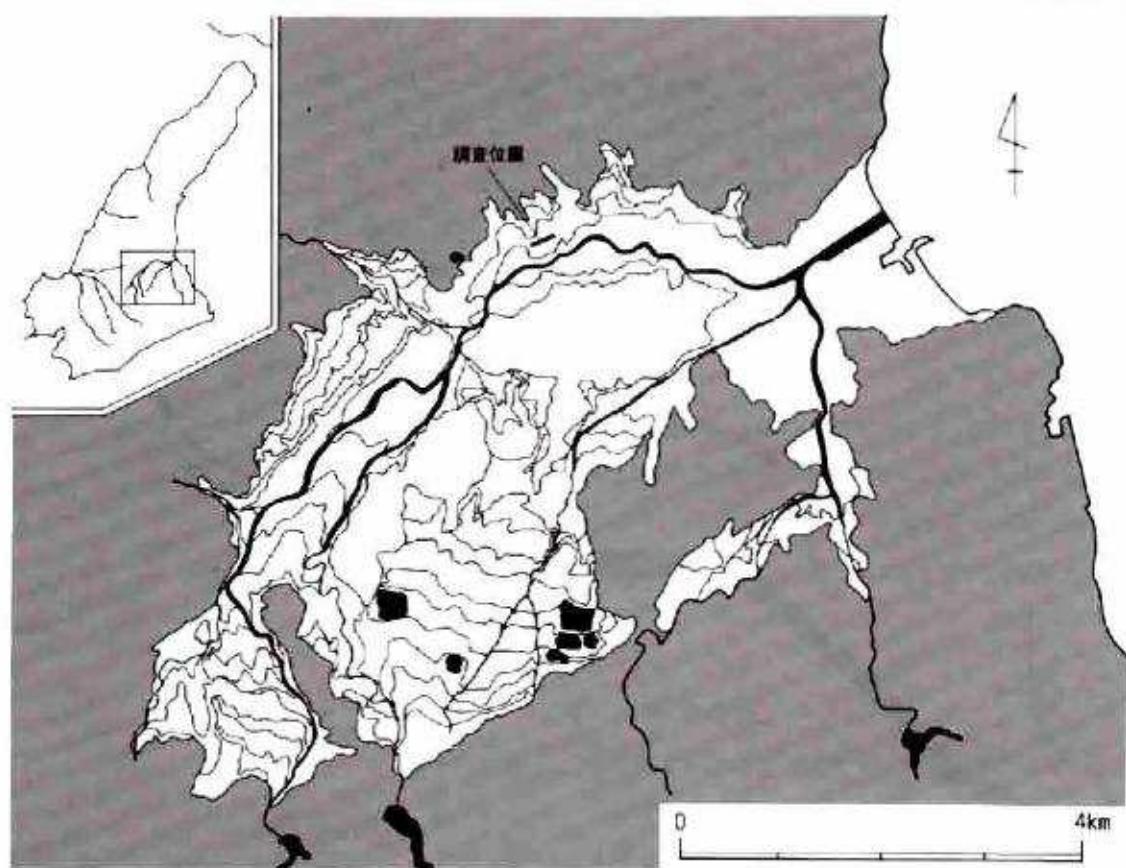
第1図 遺跡の位置(1)



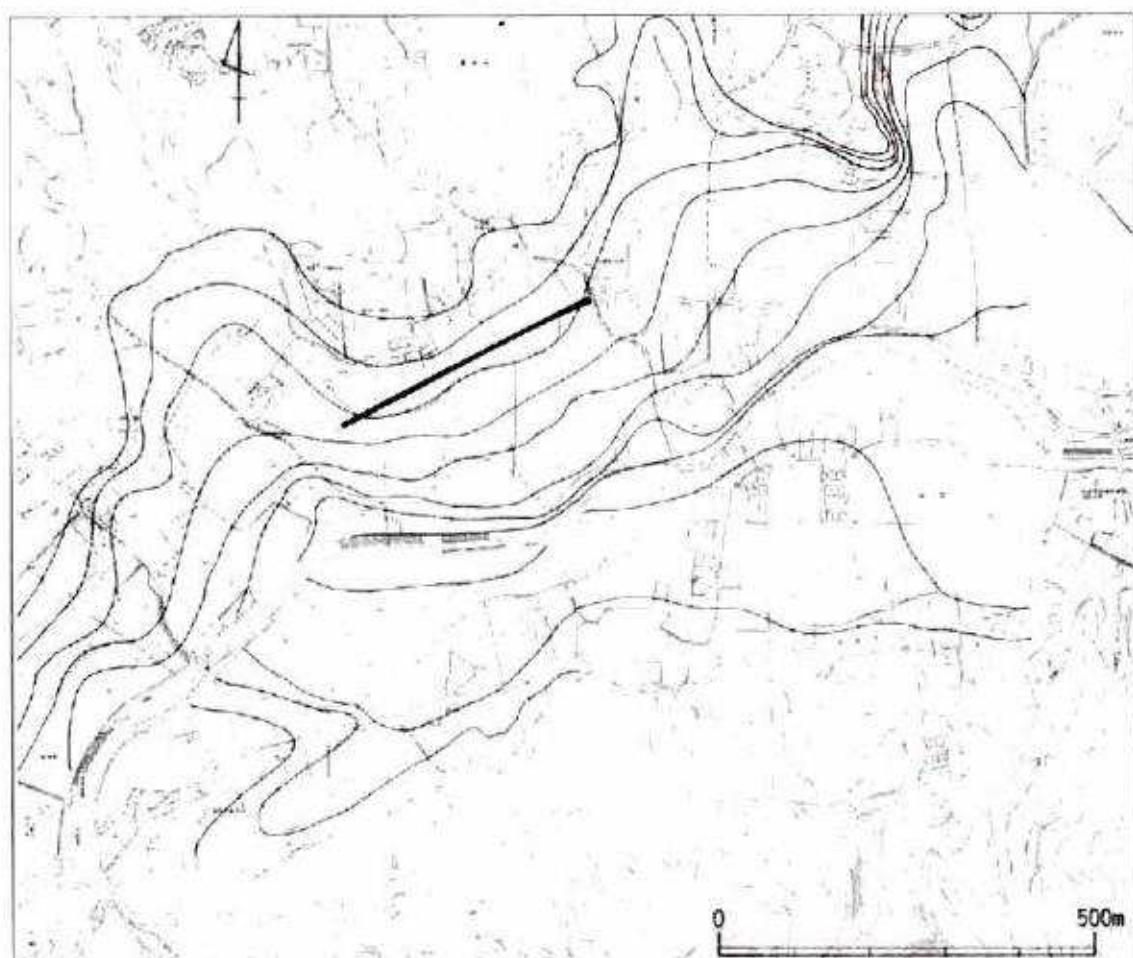
第2図 満路鐵道路線図



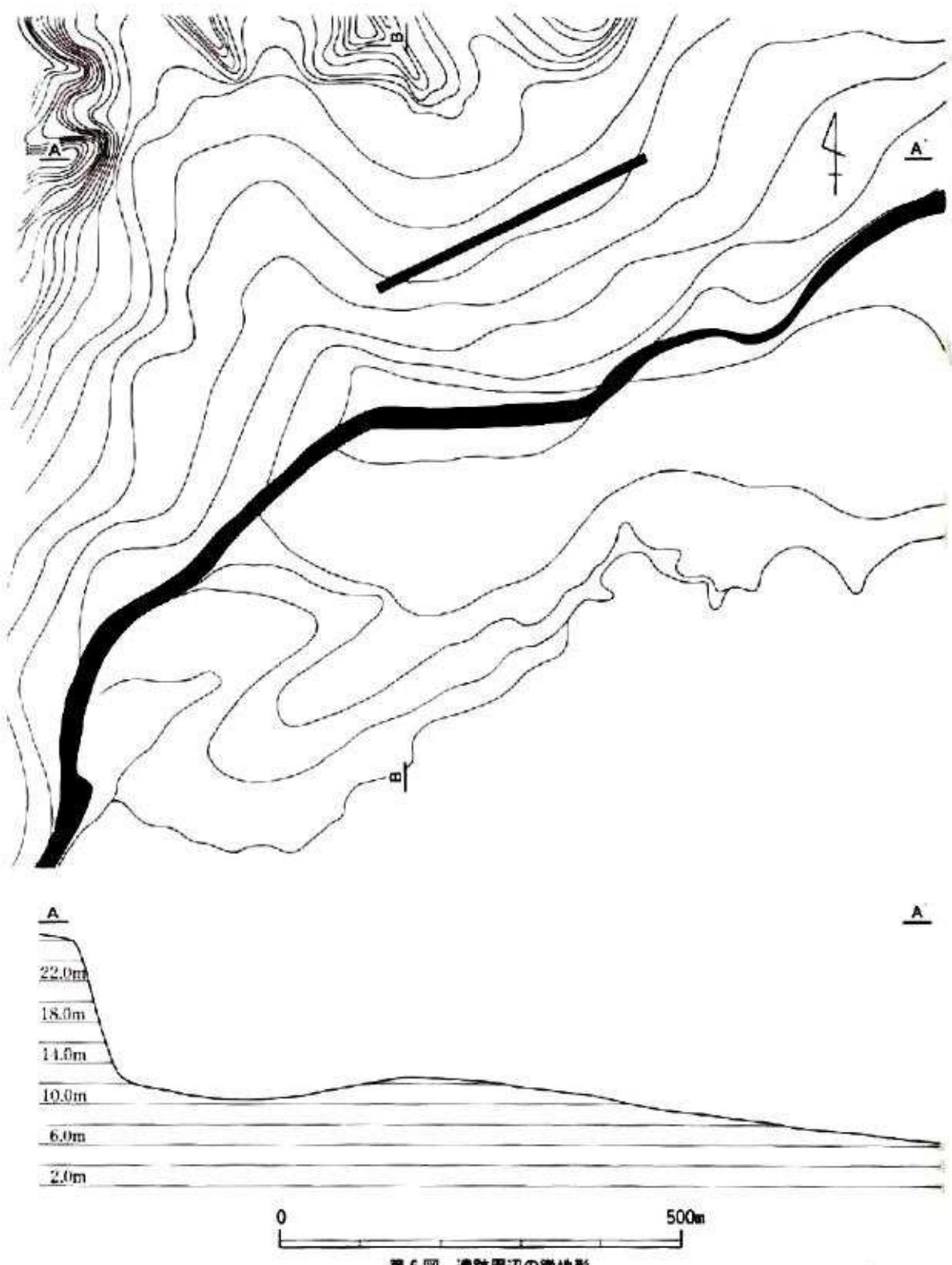
第3図 満路鐵道



第4図 遺跡の位置（II）

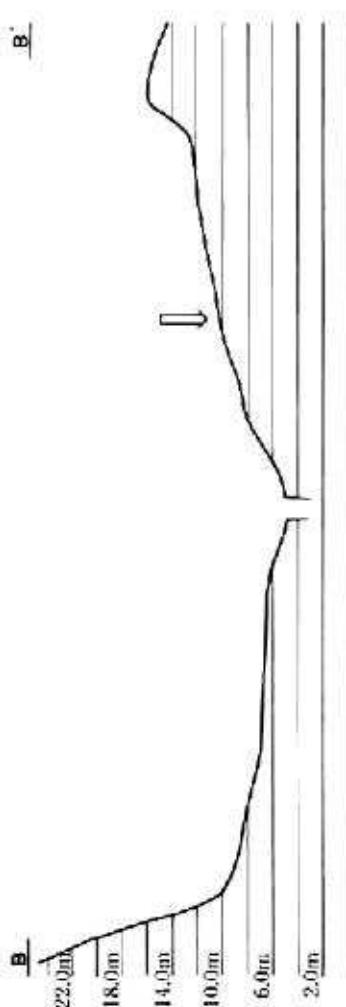


第5図 遺跡の位置（III）



第6図 遺跡周辺の微地形

北東-南西方に屈曲する。この屈曲部の北西側に淡路富士と称される先山（標高448m）があり、先山と洲本川に挟まれた所、つまり先山南東麓に下内膳遺跡がある。先山の山頂には千光寺があり、多くの信仰の対象となっていた。このため、淡路鉄道の「先山」駅が千光寺への最寄り駅となっていた。

**遺跡の現況**

淡路鉄道廃止後は、軌道敷部分は農道として機能していたに過ぎないが、付近の道路は洲本市と五色町あるいは緑町・三原町を結ぶ交通の要衝としての役割となっていた。さらに、昭和59年に鳴門大橋の開通とともに、当遺跡の西2kmに淡路縦貫自動車道の洲本インターチェンジが建設され、この役割が一層たかまっできている。

調査対象となった軌道敷部分は下内膳集落の南側に位置し、周囲は農地となっており、稲作と畠作（玉葱）の二毛作が行われている。下内膳集落の一角に洲本市立加茂小学校があり、ここを中心下内膳遺跡が広がっている。

2. 地形的環境**遺跡の立地**

下内膳遺跡の北西に位置する先山の南麓にはいくつかの南東方向にのびる扇状地が広がっている。先山は領家花崗岩帶上にあたるが、その南麓に位置する下内膳遺跡は大阪層群上にあたり、この花崗岩の風化した「マサ土」の二次堆積によって扇状地が形成されている。これらの扇状地のひとつに下内膳遺跡が立地している。また、他の扇状地上にも東西方向に走る淡路縦貫自動車道の建設に伴う調査で、多くの遺跡が明らかとなっている。

駅道堂川

扇状地間は明瞭な谷地形となっており、下内膳遺跡の立地する扇状地の東側の谷の中央部には駅道堂川が流れている。西側についても、大きな谷が入り込んでいる。

扇状地

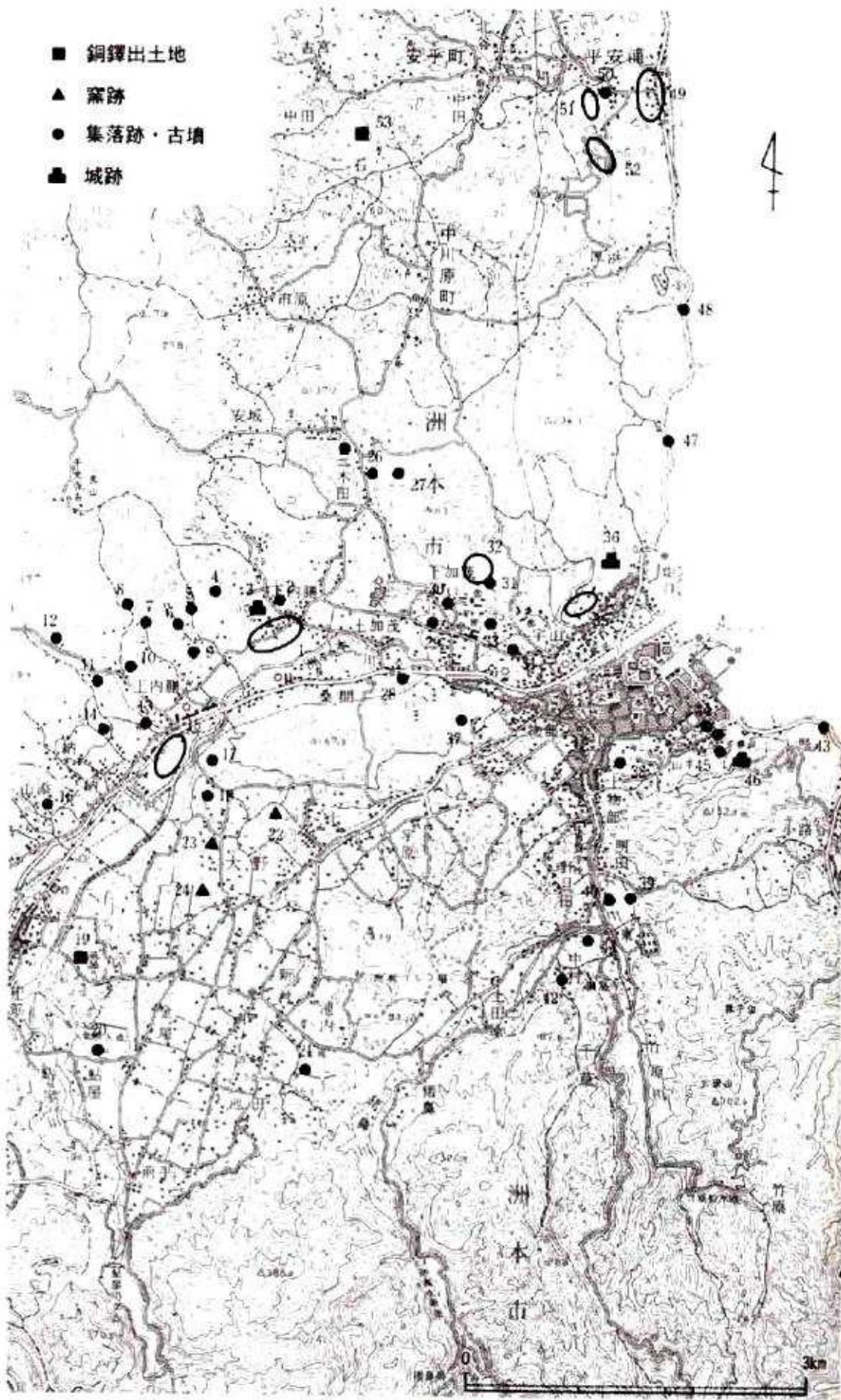
扇状地の南側には東西方向（西→東）に洲本川が流れしており、この流れによって、扇状地の扇端部は段丘化している。この段丘面における標高は6mで、洲本川の現氾濫原面とは約1mの比高をなしている。調査地の現地表面における標高は12.5mである。また、扇状地の東側・西側の谷と扇央部の比高は約2.7mを測り、主軸方向における傾斜角は約15°である。

調査は、この扇状地の中央部を扇状地の主軸に直交する方向にトレンチをあけた形となっている。

なお、より詳細な地形環境については、第4章で高橋一学氏が分析しているので参照されたい。

〔註〕

新見貴次『洲本市史』洲本市役所 1974



第7図 周辺主要遺跡

第2節 歴史的環境

- 旧石器** 旧石器時代の遺跡は島内では知られておらず、若干の採集遺物があるのみである。
- 縄文時代** 縄文時代の遺跡として武山遺跡(34)があげられる。洲本川下流の沖積地に立地し、道構は検出されなかったものの、縄文前期～中期の土器を中心にまとまって出土しており、近隣に集落の存在が想定されている。
- 弥生時代** 武山遺跡(34)では縄文時代に引き続いだ集落が存続する。弥生時代各期の遺物が出土した他、前期の堅穴状道構、中期の周溝墓等が検出されている。下内膳遺跡とともに洲本平野の拠点的集落であったと推定される。
- 前期** その他の前期の遺跡としては武山遺跡の背後の平野を望む山頂に立地する空の谷遺跡(33)があり、前期新段階の遺物が出土している。波毛遺跡(15)は洲本川中流域の沖積地に立地し、前期の土器を含む上層が検出されている。また、洲本平野の北約5kmの小平野部に位置する安乎間所遺跡(50)は集落の環濠と思われる溝が検出され、前期新段階の土器、石包丁等が出土している。
- 中期以降** 弥生中期以降洲本平野では遺跡の分布が拡大する。これまで遺跡の希薄であった洲本川

第1表 周辺主要遺跡

順	名 称	順	名 称	順	名 称
1	下内膳遺跡	19	伝堂丸銅鐸出土地	37	亀谷古墳
2	道下池遺跡	20	金尾池遺跡	38	垂田山古墳
3	安宅遺跡	21	池内大池遺跡	39	明田丸山古墳
4	野神遺跡	22	庄慶窯跡	40	明田遺跡
5	大森谷遺跡	23	土生寺窯跡	41	野上遺跡
6	大森谷浜田遺跡	24	新宮窯跡	42	丁遺跡
7	尾筋丸山遺跡	25	西ノ下遺跡	43	宮崎遺跡
8	ハタ遺跡	26	清間遺跡	44	山下居屋敷遺跡
9	大森谷里池遺跡	27	三木田池遺跡	45	旧城内遺跡
10	森遺跡	28	尾崎遺跡	46	洲本城
11	大西遺跡	29	下加茂遺跡	47	石ヶ谷遺跡
12	薬師遺跡	30	下加茂岡遺跡	48	名子の浜製塩遺跡
13	寺中遺跡	31	下加茂コヤダニ古墳	49	安乎堤入遺跡
14	鶴根原遺跡	32	下加茂岡古墳群	50	安乎間所遺跡
15	波毛遺跡	33	空の谷遺跡	51	八幡浦古墳群
16	城福寺廻遺跡	34	武山遺跡	52	厚浜古墳群
17	先山遺跡	35	字山牧場古墳群	53	伝中川原銅鐸出土地
18	栗林遺跡	36	堀口城	54	洲本城武家屋敷跡

中上流域にも遺跡がみられる。波毛遺跡(15)からは前期に引き続き中期後半に属する住居跡、掘立柱建物跡の他、工房跡と推定される遺構、水田に伴う水路等が検出されている。下加茂岡遺跡(30)からは中期後半～後期の住居跡が検出されている。この時期には大森谷遺跡(5)をはじめとして、先山山麓の丘陵上に集落が数多く営まれる。大森谷遺跡は先山山麓の丘陵に立地し、中期末～後期初頭・後期後半の住居跡が検出されている。また、出土した土器は生駒西麓産のものや瀬戸内東部の影響を受けたものもみられる。寺中遺跡(13)は段丘端に立地し、中期後半の住居跡、建物跡、後期末の住居跡、方形周溝墓が検出されている。森遺跡(10)では中期後半の住居跡が検出され、中期後半と後期後半の遺物が出土している。

淡路島の弥生時代を語る上で注目されることは銅鐸の出土量の多さである。これまで島内では13遺跡から20個の出土が報告されている。このうち洲本平野からは緑町広田堂丸(19)で扁平鉢式6区製表櫛文銅鐸、洲本市中川原(53)で菱環鉢式2区横帶文銅鐸が出土している他、出土地点不明の扁平鉢式6区製表櫛文銅鐸がある。

古墳時代 淡路島に古墳は少なく、前方後円墳が所在しない。この傾向は洲本平野も同様である。前期古墳は下加茂コヤダニ古墳(31)が唯一で、出土状況が不明だが、淡路で唯一三角縁神獣鏡が出土している。宇山牧場1号墳(35)からは五銖銭・素文鏡が出土し、前期に遡る可能性がある。

中期古墳は現在確認されておらず、所在する古墳の大半は後期古墳である。しかし、後期を特徴づける群集墳は横穴式石室6基より構成される下加茂岡古墳群(32)が唯一で、他の古墳は疎らに分布している。その中で曲田山古墳(38)は島内では最大規模の横穴式石室をもつ。

古墳時代の集落は弥生時代に引き続き波毛遺跡(15)がある。前期に属する隅丸方形住居跡5棟、掘立柱建物跡3棟が検出されている。中期～後期の集落として森遺跡(10)がある。また、製塙遺跡では旧城内遺跡(45)・山下町居屋敷遺跡(44)の他、海岸砂堆上に位置する安乎塙入遺跡(49)、海岸に製塙土器の散布する石ヶ谷遺跡(47)、名子の浜製塙遺跡(48)がある。

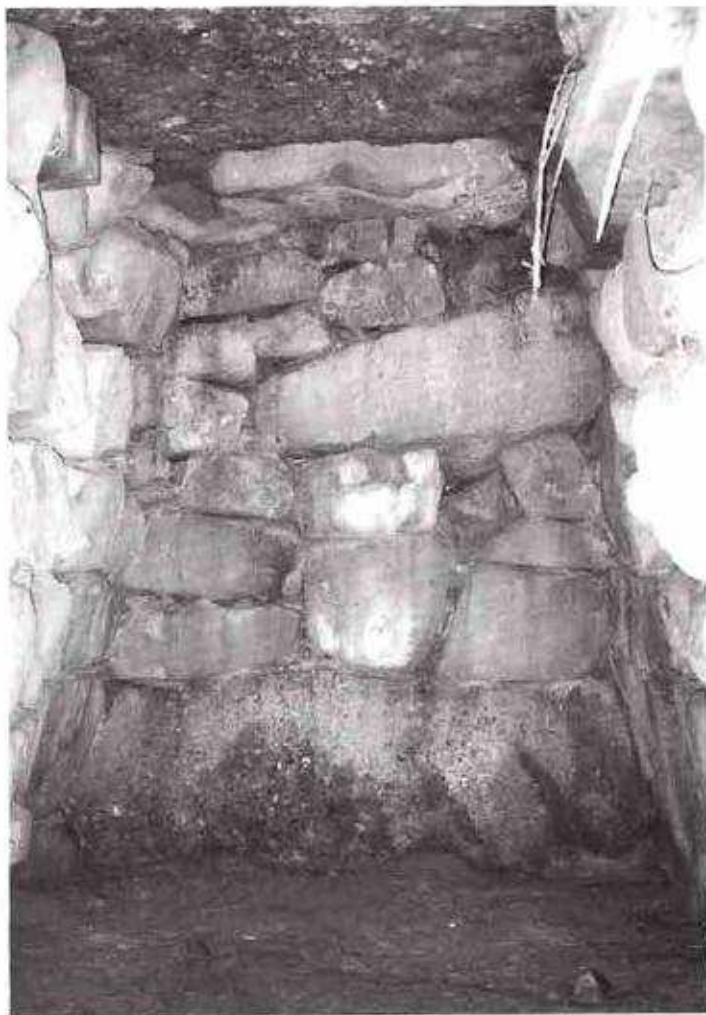
奈良・平安 淡路島は「淡路」一国で南海道に編入される。洲本平野は津名郡に属し、下内膳遺跡付近は賀茂里に属すると推定される。平城京出土木簡の中に「淡路國津名郡賀茂里人」と書かれたものがある。南海道はそのルートは明らかでないが、島内に由良・大野・福良の3駅が設置され、このうち大野駅家は洲本平野に所在する可能性が高い。大野付近には7世紀中頃より操業を開始する庄慶窯跡(22)、をはじめ、土生寺窯跡(23)、新宮窯跡(24)があり、平安時代まで須恵器とともに瓦・鏡を生産していた。

中世以降 中世に入ると佐々木氏、次いで細川氏が守護として淡路を支配する。細川氏は三好氏に滅ぼされ、淡路も三好氏の支配下に入る。その一方で淡路の国人層も台頭する。安宅氏は洲本城(46)、炮口城(36)を居城とするが、16世紀後半豊臣秀吉によって滅ぼされる。

中世の遺跡は、大森谷遺跡(5)、寺中遺跡(13)等で建物跡が検出されている。また下内膳遺跡(1－平成2年度洲本市教育委員会調査)では建物跡の他、埋納錢が発見されている。

参考文献

- 兵庫県教育委員会「原始・古代の淡路」－淡路縦貫道に伴う埋蔵文化財速報展－ 1986
兵庫県教育委員会・兵庫県淡路文化会館・兵庫県文化協会
下内膳遺跡調査団「下内膳遺跡」1978 洲本市教育委員会
岡本 稔「淡路の弥生式時代の考察」－洲本川流域の遺跡を中心として－『淡路考古学研究会誌』第2号 1974 淡路考古学研究会
兵庫県教育委員会「大森谷遺跡」1985 兵庫県教育委員会
兵庫県教育委員会「寺中遺跡」1989 兵庫県教育委員会
兵庫県教育委員会「森遺跡」1989 兵庫県教育委員会



第8図 曲田山古墳

第3節 以前の調査

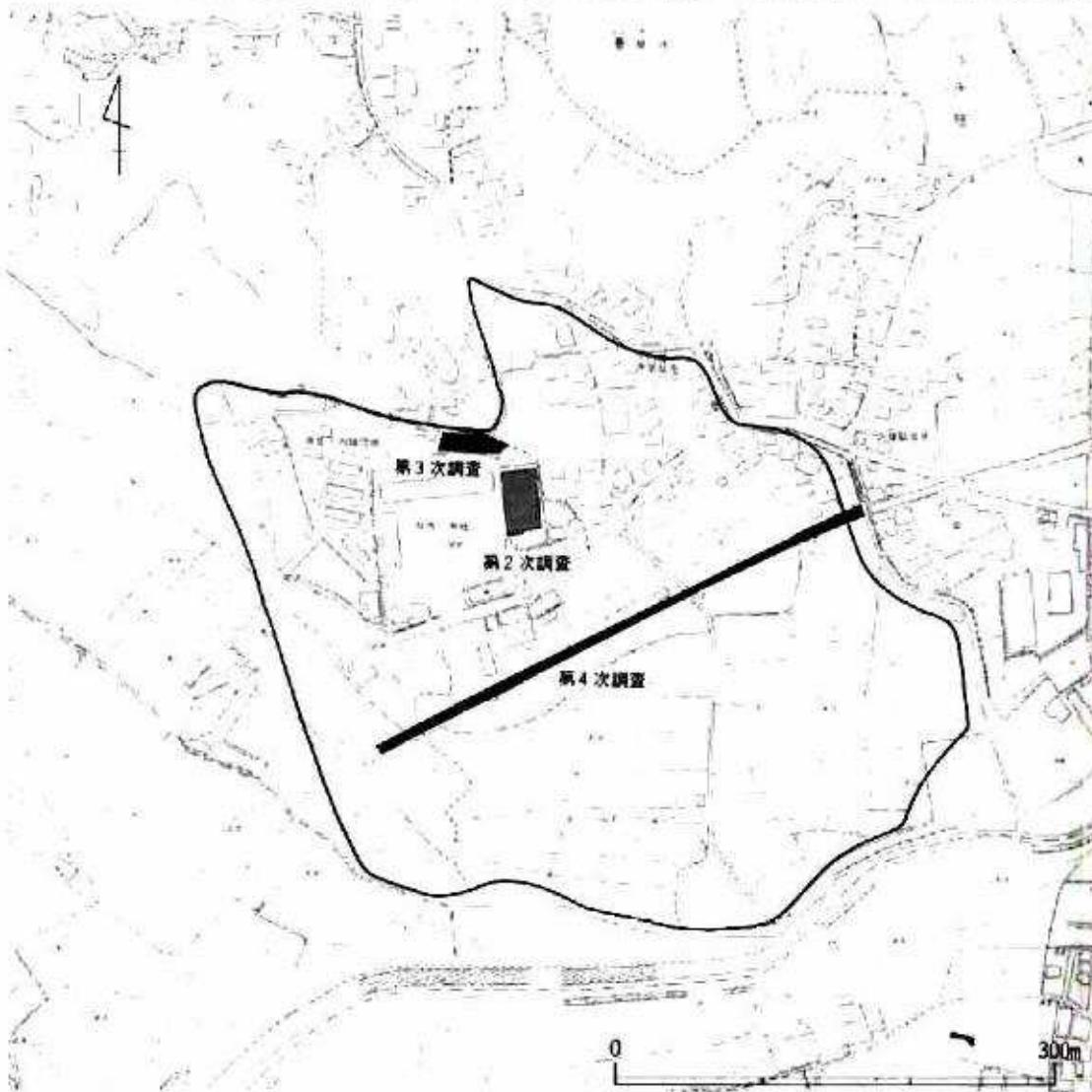
1. はじめに

下内膳遺跡の調査は、今回報告対象となる調査が初めてではない。古くは昭和17年まで遡る。以来、加茂小学校を中心に数次にわたりて調査が行われてきている。そこで、その概要をまとめておきたい。また、それぞれの調査位置を第9図に示した。

2. 以前の調査概要

第1次調査 昭和17年に加茂小学校（当時国民学校）の移転のため、現加茂小学校校庭を調査した。弥生時代中期・後期の土器を中心に多量の土器が出土したほか、土鍤・投弾・石道なども出土している。なお、当時の出土品は現在加茂小学校に保管されている。

第2次調査 昭和53年に、加茂小学校の体育館建設に伴い、洲本市教育委員会が主体となり、体育館建設予定地の調査を行った。この結果、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物跡、



第9図 下内膳遺跡

弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての堅穴住居跡2棟、弥生時代中期の溝などを検出するとともに、弥生時代中期・弥生時代後期～古墳時代初頭を中心に、弥生時代前期から中世にかけての土器が多量に出土している⁽¹⁾⁻⁽⁸⁾。

分布調査 昭和55年度に、洲本市教育委員会が国庫補助事業として洲本市内の遺跡分布調査を実施した。この際、下内膳遺跡の範囲の確認を行っている。調査は、現地表面における遺物を採集し、この散布状況をもとに遺跡の範囲の確定を行った。この結果、下内膳遺跡は、第9図に図示した南北約400m、東西約500mの範囲（約20ha）に広がることが明らかとなつた⁽¹⁾⁻⁽⁸⁾。

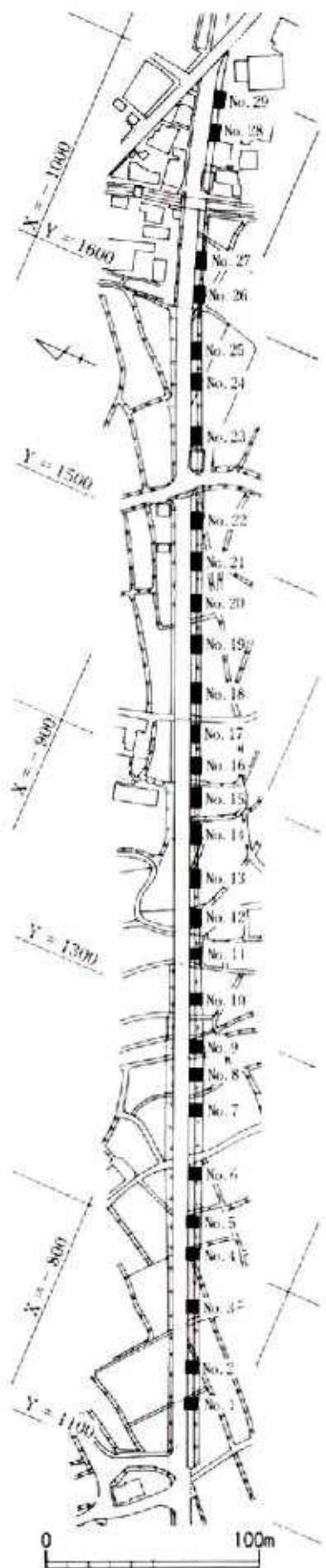
第3次調査 平成2年度から3年度にかけて、洲本市教育委員会が加茂小学校の増改築に伴い、全面調査を実施した⁽¹⁾⁻⁽⁸⁾。調査地は、第2次調査が行われた地区の北西側に位置し、下内膳遺跡の最北部と考えられている所である。

調査の結果、5面にわたって遺構が検出されている。上から、第1遺構面では平安時代の掘立柱建物跡2棟等が検出され、線刻土器・墨書き器・耳皿などが出土している。第2遺構面では、弥生時代末の住居跡・水田跡・溝・噴砂等が検出され、弥生時代末の土器が多量に出土している。第3・4遺構面は水田跡が検出されている。そして最終の第5遺構面においては弥生時代中期の方形周溝墓群が検出されている。

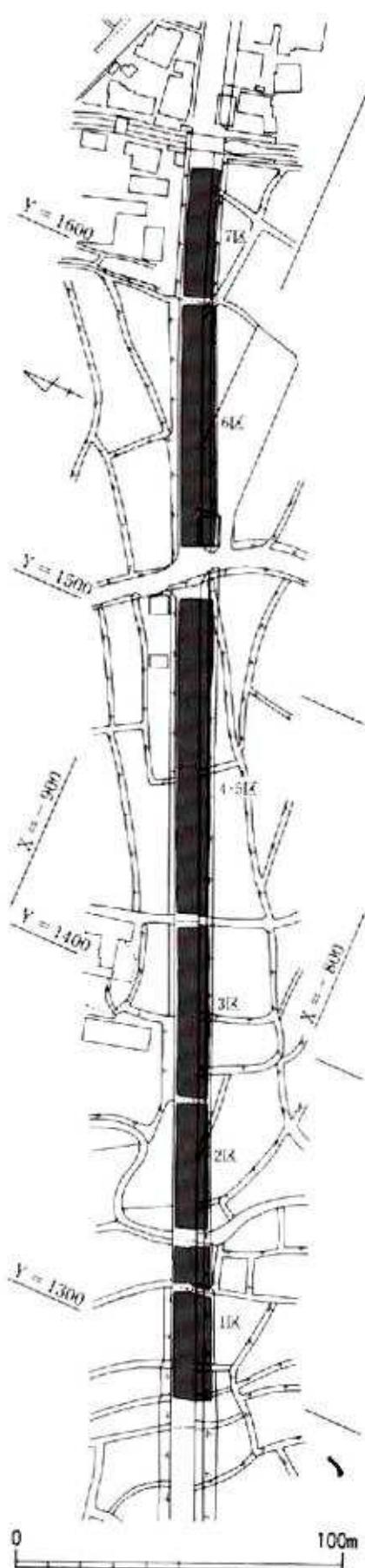
第4次調査 今回報告の対象となる調査である。詳細は次頁以下で報告する。

【注】

- (1) 沖田真一「下内膳加茂校遺跡出土品について」『淡路地方史研究会々誌』1966
- (2) 下内膳遺跡発掘調査団『下内膳遺跡発掘ニュース』第1号 1977
- (3) 下内膳遺跡発掘調査団『下内膳遺跡発掘ニュース』第2号 1977
- (4) 下内膳遺跡発掘調査団『下内膳遺跡発掘ニュース』第3号 1978
- (5) 洲本市教育委員会「洲本市内遺跡分布調査概報！」（洲本市文化財報告 第3集）1981
- (6) 洲本市教育委員会「下内膳遺跡発掘調査V」1990
- (7) 洲本市教育委員会「下内膳遺跡発掘調査V 略報2」1991
- (8) 洲本市教育委員会「下内膳遺跡発掘調査V 略報3」1991



第10図 確認調査の位置



第11図 地区割図

第2章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

調査の経緯

下内膳遺跡については、前節で紹介したように、以前から洲本平野を代表する遺跡として周知されていた。当遺跡内を走る県道上内膳津名線の交通量が急増したため、旧淡路鉄道の軌道敷箇所にバイパス建設が計画されることになった。

以上のことから、確認調査を実施し、全面調査を実施することになった。

第2節 調査の経緯

1. 確認調査

調査の目的

下内膳遺跡は前章で紹介したように、洲本市教育委員会が実施した分布調査によって、その範囲がある程度明らかとなっていた。このため、一般県道上内膳津名線道路改良の対象が、周知されている下内膳遺跡のほぼ中央部を東西に横断することは明らかであった。ただし、調査にあたっては、以下の3点の問題が残されていた。①道路改良地が旧淡路鉄道の軌道敷を含むため、淡路鉄道の建設によって既に遺跡の一部が破壊されている可能性が考えられる、②下内膳遺跡の西側および東側へ実際にどこまで広がるのかについて、分布調査の精度でしか把握できていない、③遺構が確認される地区について、実際に遺構面が何面あるのか明らかではない、の3点である。



第12図 確認調査風景

調査の結果	そこで、以上の3点を解決するため、確認調査を実施することになり、平成2年度に第一次確認調査、平成3年度に第二次確認調査と2回に分けて確認調査を実施した。
第1次	確認調査対象地域の西側約200m分を対象とした。2m×2mのグリッドを計11箇所（No.1～No.11）設定し、調査を行った。調査の結果、No.11において遺構及び遺物の包含を確認した。
第2次	第一次確認調査の対象地以外を対象とした。道路延長約400m分である。計18箇所（No.12～No.29）に2m×4mのトレンチを設定（第10図）し、調査を行った。この結果、No.28・29を除く全てのトレンチにおいて、遺構および遺物包含層あるいは水田土壤層が認められた。
調査体制	なお、第1次確認調査および第2次確認調査の調査体制は以下の通りである。
第1次	調査主体 兵庫県教育委員会 調査担当 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 西口 和彦
第2次	調査主体 兵庫県教育委員会 調査担当 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 山田 清朝・菱田 淳子・中村 弘

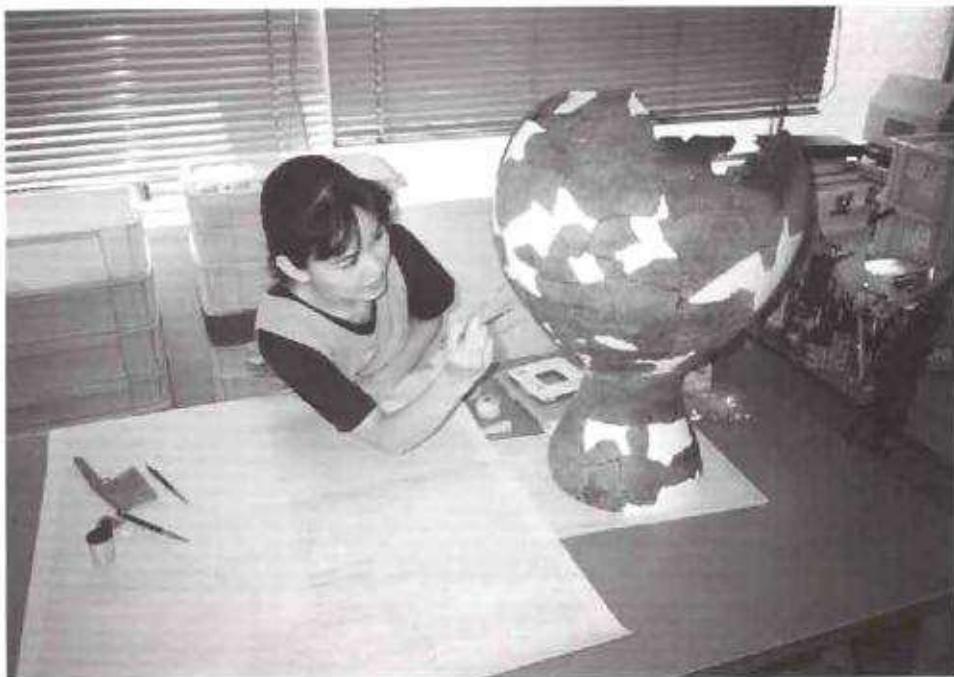
2. 全面調査

調査範囲	確認調査で遺構および遺物の確認された、No.10からNo.27の範囲を全面調査の対象範囲とした。ただし、後述するが、調査区の西端部において、遺構の広がりが確認されたため、一部調査範囲を拡張した。最終的な調査面積は3883m ² である。
地区割	しかし、調査対象範囲内には、農道・サイフォンを含む用水路等が数箇所で調査対象地を南北に横断していた。用水路については調査時期が農繁期と重なること、私道については工事の際に掘削しないこと等の理由から、調査対象外とした。したがって、調査はこれらの箇所を境として、西側から7つの地区（1区～7区）に分割して調査することとなった。その後、4区と5区の境をなす用水路については、調査が可能となつたため、一括して調査することとなった。そして、この地区を「4・5区」と呼称することにした。
6区	さらに、6区については、当地区内の旧軌道敷が以前から農道として機能しており、調査が農期と重なつたため、2地区に細分（6-1区・6-II区）して調査を行なつた。
調査順序	当初は1区から調査を進めていく予定であったが、調査開始時に作物の刈り入れが済んでいなかつたこと等から、6区から調査を進めていくこととなつた。以下、1区→2区→3区→4・5区→7区の順に調査を行つた。
調査方法	調査にあたつては、表土層のみ重機により掘削したが、以下については全て人力により掘削していった。 なお、全面調査の調査体制は以下の通りである。
調査主体	兵庫県教育委員会
調査担当	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 山田 清朝・所崎 明雄・中村 弘・長濱 誠司

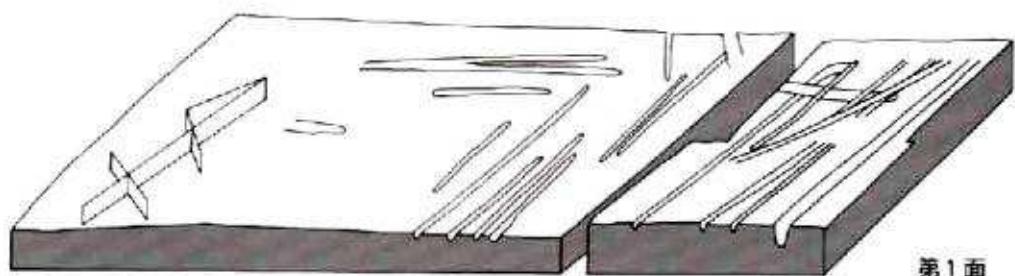
第3節 整理作業

整理作業は、平成5年度から実施した。

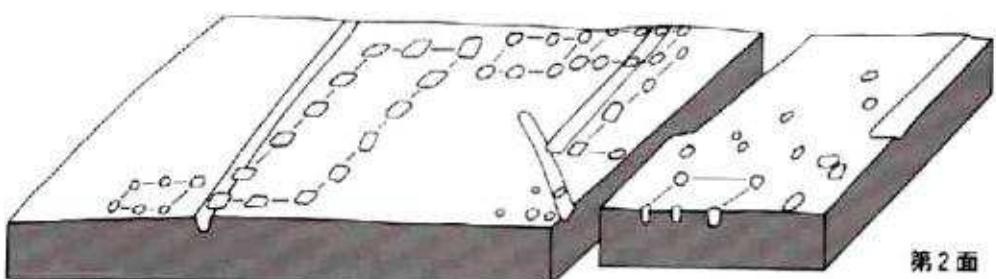
- 平成5年度 兵庫県教育委員会魚住分館にて遺物の接合を行った。
- 平成6年度 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて遺物の実測および一部の遺物についての復元・写真撮影を行った。合わせて遺構図の整理を行った。また、本製品の保存処理を魚住分館にて実施した。
- 平成7年度 前年度に引き続き上器の復元・写真撮影を行い、遺構図と合わせてトレース・編集作業を行った。
- 各年度の整理体制は以下の通りである。
- 平成5年度 整理普及班 主査 山下 史朗
嘱託員 西原美知代・伊藤ミネ子・衣笠 雅美・川上 啓子・家光 和子
長谷川洋子
- 平成6年度 整理普及班 主査 吉誠 雅仁
嘱託員 松本 瞳・古谷 章子・真田美恵子・島田 増里・松浦 郁子
茨木恵美子・中田 明美・木村 淑子・早川 幸紀・藏 幾子
茅原加寿代
- 平成7年度 整理普及班 主査 吉誠 雅仁
嘱託員 松本 瞳・酒井喜美子・岡崎 樹子・尾崎比佐子・萩原 智美
中田 明美・藏 幾子・茅原加寿代・鈴木まさ子



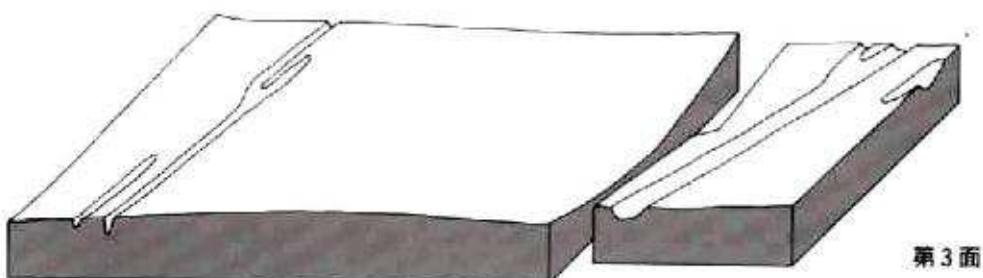
第13回 実測風景



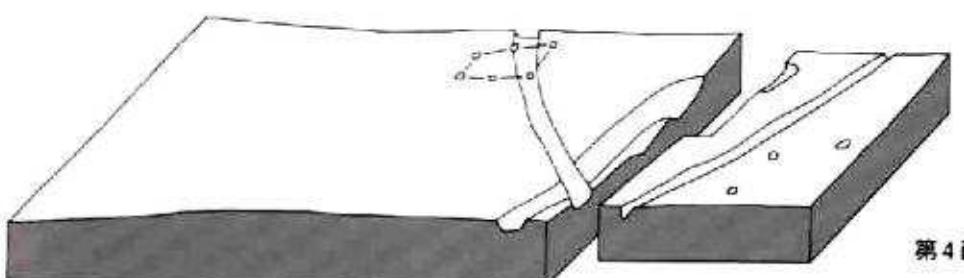
第1面



第2面



第3面



第4面



第14図 1区の遺構

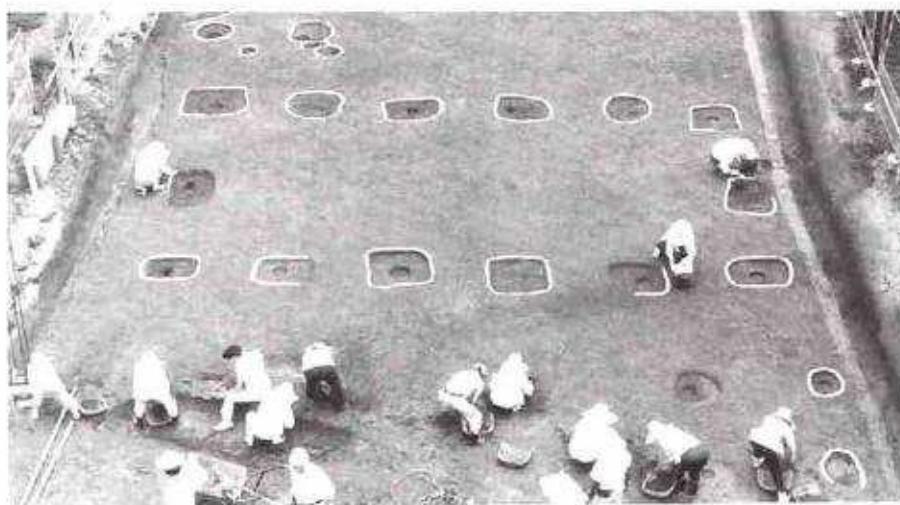
第3章 調査の結果

第1節 1区の遺構と遺物

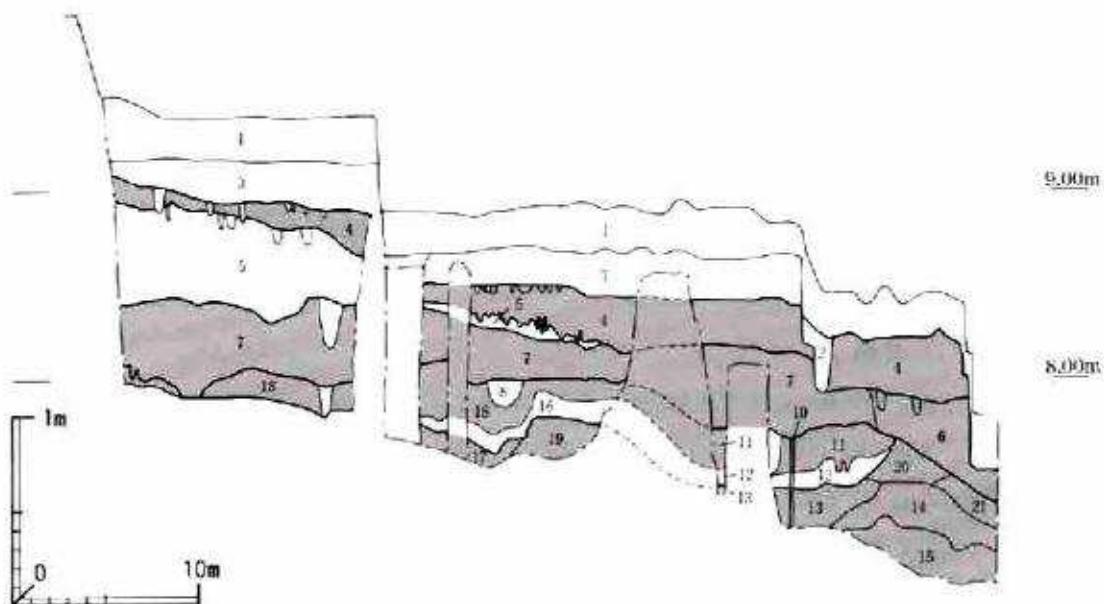
1. 概要

(1) 概略

- 位置** 調査対象地のなかで最も西側に位置する調査区で、東側の2区とは農道を境とする。
- 旧鐵路鉄道** 当地区においては盛土によって施設されていた。したがって、他の地区に認められるような鉄道工事による削平は東側の一部に認められる程度である。しかも、その影響は第1面に限られる。
- サイフォン** 当調査区の東側2／3あたりをサイフォンが横切る。このサイフォンは調査時に撤去することができなかつたため、当調査区はこのサイフォンを境に東西に分断（西地区・東地区）されることになった。
- 遺構の検出** 第1面から第4面の4面にわたって遺構を検出した。
- 第1面** 古墳時代～奈良時代にかけての溝と、中世以降と考えられる衢溝を検出した。
- 第2面** 掘立柱建物跡7棟・溝4条・土塁5基を検出した。掘立柱建物跡については奈良時代と時期を明確にできるが、他の溝・土塁については時期を明確にできない。第2面を検出する際に弥生時代の土器も出土していることから、一部はこの時期の遺構であることを考えられる。
- 第3面** 溝4条を検出した。遺物を伴わない遺構もあるが、全て弥生時代後期と考えられる。
- 第4面** 掘立柱建物跡1棟と溝7条を検出した。いずれも弥生時代後期と考えられる。



第15図 1区の調査



第16図 1区土層断面(南面)

第2表 1区土層注記

番号	色調	土色番号	砂粒の大きさ	備考
1	現耕作土			
2	明青灰色	5B7/1	粗砂～細砂	
3	灰色	N6/	粗砂～細砂	
4	青灰色	5PB5/1	粗砂～細砂	
5	浅黄色	5Y7/3	極細砂～シルト質極細砂	
6	暗赤灰色	2.5YR3/1	粗砂～シルト質極細砂	中疊混じる。須恵器含む
7	黒褐色	5YR3/1	粗砂～シルト質極細砂	
8	灰色	N4/	粗砂～細砂	中疊混じる。
9	暗灰色	N3/	粗砂～細砂	
10	青黑色	10BG1.7/1	極細砂～粗砂	柱穴
11	18と同じ			
12	16と同じ			
13	17と同じ			
14	暗青灰色	5BG3/1	細砂～粗砂	
15	青灰色	5PB5/1	シルト	
16	灰オリーブ色	7.5Y6/2	極細砂質シルト	
17	暗青灰色	10BG4/1	シルト	極細砂質シルト混じる。
18	灰白色	10YR7/1	細砂～極細砂	粗砂混じる。
19	灰色	5Y4/1	極細砂～粗砂	
20	にぶい黄色	2.5Y6/4	シルト	シルト質極細砂混じる。
21	暗赤灰色	2.5Y3/1	シルト質極細砂	粗砂～細砂混じる。

(2) 基本層序と遺構の検出

1区は下内蔵遺跡の所在する畠状地の中でも西端に位置しており、土層の堆積状況でも西側が下がる傾向にある。

上層の堆積は、第16図および第2表に示したように、21層から成るが、基本的な層序としては、上層から順にⅠ層からⅤ層の5つに分けることができる。これらの5つの層はその上面に遺構面をもち、Ⅰ層は現地表面、Ⅱ層は第1面、Ⅲ層は第2面、Ⅳ層は第3面、Ⅴ層は第4面にそれぞれ対応する。

なお、現在の用水路が存在するところより西側については整面を破壊することなく調査できたが、それを挟んで東側では壁面が崩壊したため、土層観察が不可能であった。よって、土層図に示したのは、遺構面の高さから復元したものである。

Ⅰ層

このⅠ層は、今回の調査対象外と判断したため、機械により掘削した。

当遺跡の全てを覆う調査時の地表面を構成する層であり、水田、及び畠地として利用されている。調査区の中央では旧淡路鉄道により搅乱されているが、この構造物をも含んだ層である。

表土の下は粗砂～細砂の堆積があるが、この層も1区全体に認められる広範囲に供給された層である。

Ⅱ層

Ⅱ層の上面が第1面である。

上層との間に中世の遺物を挟んでおり、中世の段階には、水田として利用されていた層である。

Ⅲ層

Ⅲ層の上面が第2面である。

上層との間に奈良時代の遺物を挟んでおり、掘立柱建物跡などが検出されていることから、奈良時代の段階には生活面として利用されていた層であるといえる。

このⅢ層は土壤化が著しく、遺構の検出には困難を極め、最終的に土壤化が少ないⅤ層上面（第4面）まで掘削して全体の状況が明らかとなった。よって、第2面の時期の掘立柱建物跡でも、写真図版（図版11）では第4面として写されている掘立柱建物跡がある。しかし、第4面になって明らかとなった掘立柱建物跡を構成する柱穴の一部は、既にこの第2面で検出されており、写真図版以外では第2面の遺構として扱っている。

Ⅳ層

Ⅳ層の上面が第3面である。

上層との間に同じく弥生時代後期の遺物を挟んでおり、溝が検出されている。

次の第4面でSD17としてはほぼ同じ位置に検出されたSD11があるが、それについてSD17の上層としての位置づけが可能である。

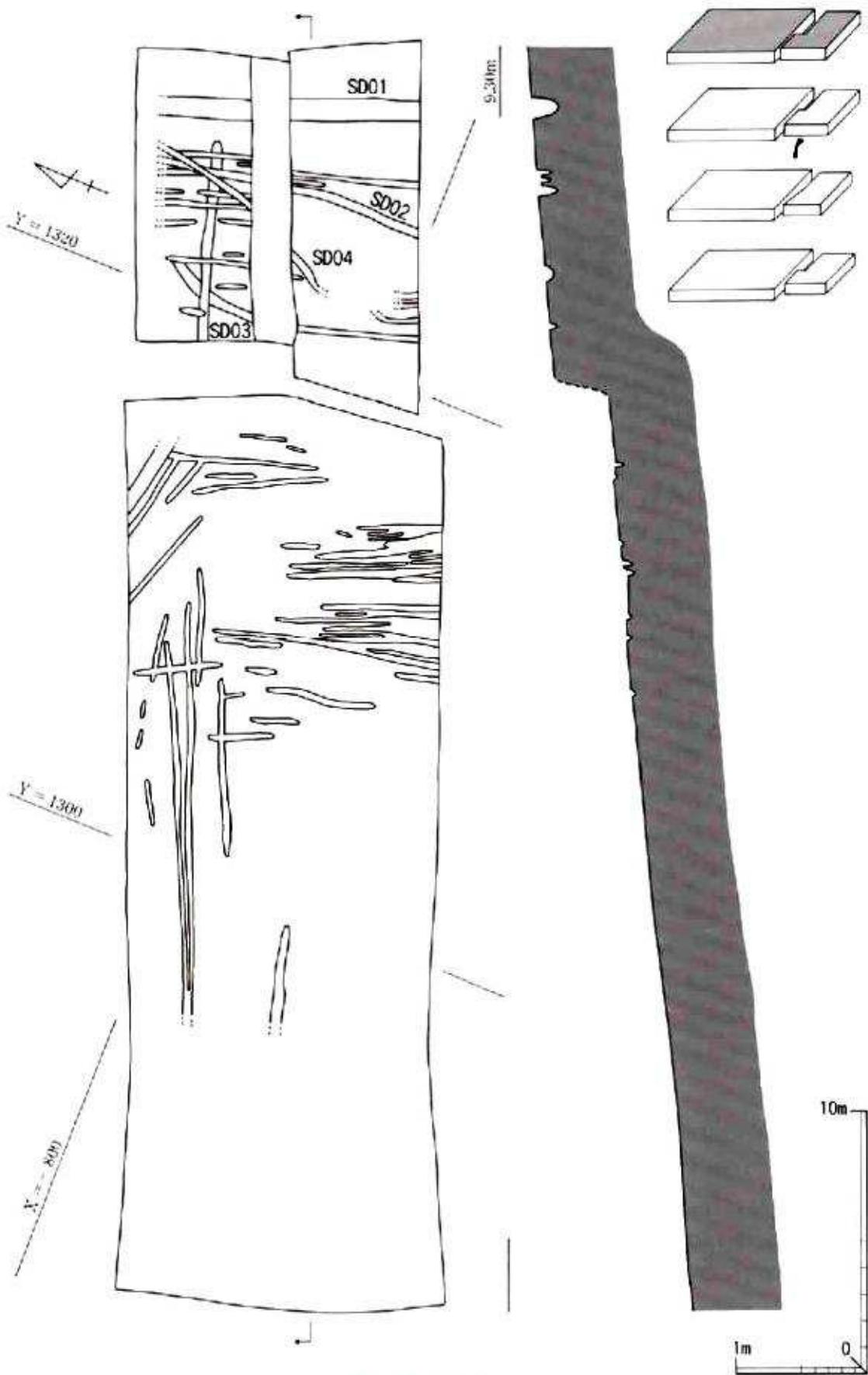
Ⅴ層

Ⅴ層の上面が第4面である。

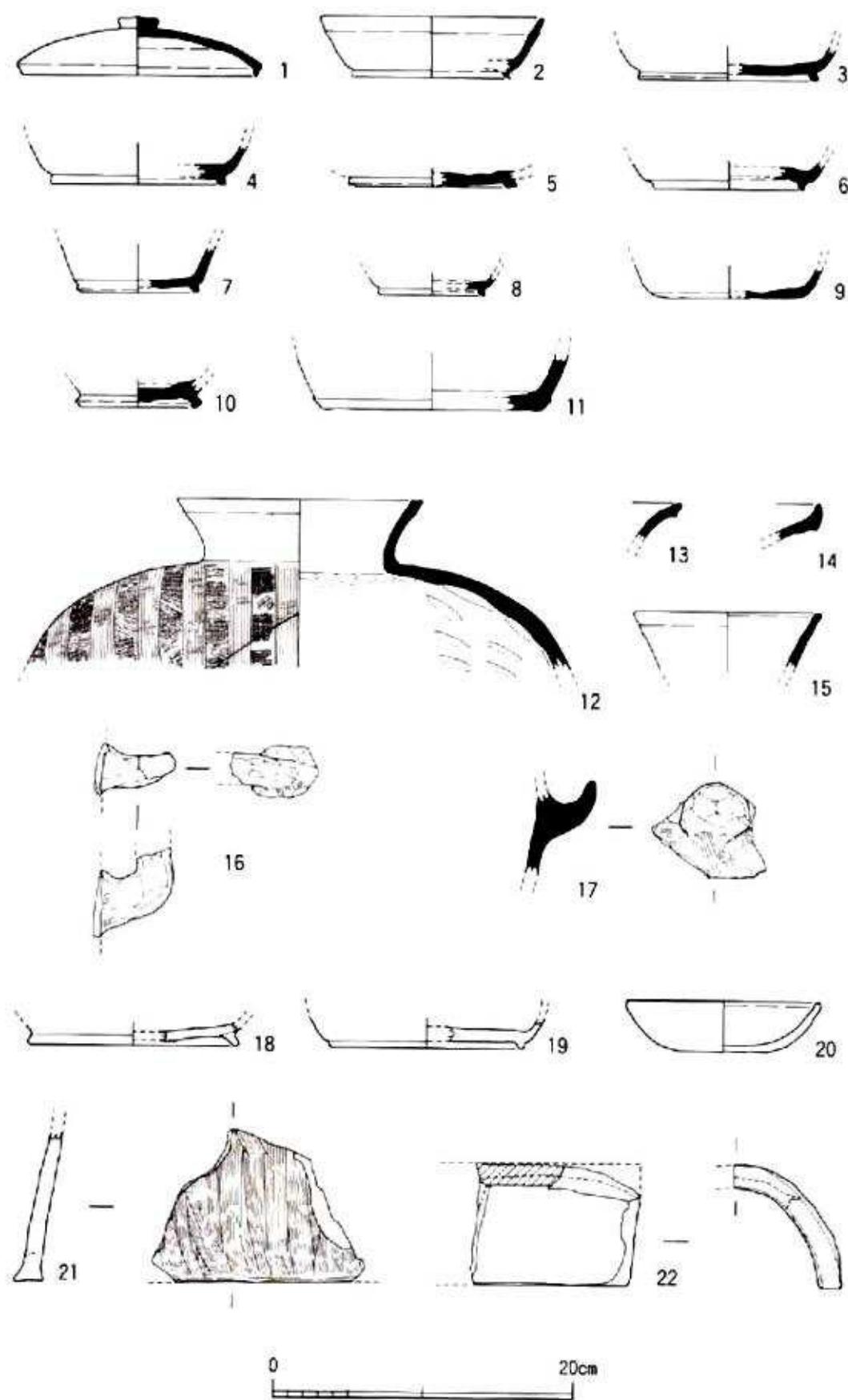
上層との間に弥生時代後期の遺物を挟んでおり、溝と掘立柱建物跡が検出されていることから、生活面として利用されていた層であることがわかる。

Ⅴ層として一つにまとめたが、この層は特に西側において多くの層から構成されている。

第1節 1区の遺構と遺物



第17図 1区第1面



第18図 1区第1面出土土器

2. 第1面の遺構と遺物

(1) 第1面出土遺物

出土遺物

いずれも遺存状況は悪く、ほとんどが小片で出土している。

古代

須恵器、土師器、それ以外に瓦が出土している。

須恵器

壺B蓋と壺B、壺、横瓶、把手が出土している。

壺B蓋はほぼ完形に復元できるもの(1)が出土した。壺身は壺B(2~8)と、壺A(9)の両者があり、前者は高台の形状にはらつきがある。壺は高台の付いた小型の10と高台の付かない大型の11がある。横瓶は12の1点のみ出土した。ほぼ半分が残存しており、外側は平行タタキの後、カキメにより調整されている。内面は無文のあて具の痕跡が認められる。把手は、何に伴うものかは明らかではないが、勝溝から出土しているこしきに伴うものである可能性がある。しかし、把手の形態には2種あり、断面が棒状で、ほぼ直角に屈曲する16と、体部が軽く彎曲し、偏平な把手をもつ17がある。

土師器

壺Bと壺A、壺が出土している。

いずれも破片で、詳細は不明であり、暗文の状況などは不明である。壺A(18~19)と、椀状に体部が彎曲したもの(20)がある。壺は底部の破片のみである。

その他

瓦が出土しており、丸瓦の端部である。

中世

須恵器の碗と捏鉢の小片が出土している。

第3表 第1面出土土器観察表(1)

報告番号	種別	器種	法面(北)						外側面	残存状況	調査	前述の特徴	備考
			寸法	基部	底径	高さ	柄径	最大幅					
1	須恵器	壺蓋	15.8	1.3	3.0	—	—	—	内:灰 外:灰	11縫跡1/4	回転ナメ。外側天井部は回転ナメナメアリ。	全体に縫跡を中心に彎曲し、口縫跡部は下方へ彎曲する。	
2	須恵器	壺身	14.8	1.0	—	—	—	—	内:灰 外:灰	11縫跡1/6	回転ナメ。	体部は直線的に外傾し、高台は底部端で鋭く折損する。	
3	須恵器	壺身	—	—	11.7	—	—	—	内:灰 外:灰	底足なし	回転ナメ。外側底部は回転ナメナメアリ。	底部から体部へ縫跡を中心に彎曲。高台は既に外方に傾く。	
4	須恵器	壺身	—	—	—	21.7	—	—	内:灰 外:灰	底足なし	回転ナメ。	底足は現り、高台は既に若干外方に傾く。	
5	須恵器	壺身	—	—	—	—	—	—	内:灰 外:灰	底足なし	回転ナメ。外側底部は回転ナメナメアリ。	高台は既に外方に傾く。	
6	須恵器	壺身	—	—	—	20.6	—	—	内:灰 外:灰	底足なし	回転ナメ。外側底部は回転ナメナメアリ。	底部は既に外方に傾く。	
7	須恵器	壺身	—	—	—	—	—	—	内:灰 外:灰	底足なし	回転ナメ。	底部から体部へ大きめ彎曲。高台は既に外方に傾く。	
8	須恵器	壺身	—	—	—	—	—	—	内:灰 外:灰	底足なし	回転ナメ。	高台は既に若干外方に傾く。	
9	須恵器	壺身	—	—	—	9.5	—	—	内:灰 外:灰	底足なし	回転ナメ。底盤外側はハサウエーリング調整。	底盤は平。体部へ縫跡を中心に彎曲し、外方に傾く。	
10	須恵器	壺	—	—	—	—	—	—	内:灰 外:灰	底足なし	回転ナメ。外側底部は回転ナメナメアリ。	底盤内側はやや凹む。高台は外方に傾き出し、底盤は底部下る。	
11	須恵器	壺	—	—	—	13.9	—	—	内:灰 外:灰	底足なし	回転ナメ。外側底部は回転ナメナメアリ。	底盤は平。体部へ大きく彎曲し、地は底をもつ。	
12	須恵器	横瓶	16.3	—	13.0	—	—	—	内:灰 外:灰	11縫跡1/4	11縫跡回転ナメ。外側外縫跡ナメナメアリ。内面無文ある具。	11縫跡底部は底をもつ。体部は縫跡のため左右の違いは不明。	
13	須恵器	壺	—	—	—	—	—	—	内:灰 外:灰	11縫跡1/6	回転ナメ。	縫跡附近に彎曲三脚形の縫跡空字がある。	
14	須恵器	捏鉢	—	—	—	—	—	—	内:灰 外:灰	11縫跡1/6	回転ナメ。	縫跡は上方へつまみ上げる。	
15	須恵器	楕	12.4	—	—	—	—	—	内:灰 外:灰	11縫跡1/6	回転ナメ。	直線的・彎び。縫跡は丸い。	

第4表 1区第1面出土土器観察表(2)

報告番号	種別	器種	寸法(目)						色調	残存状況	調査	形態の特徴	備考
			口径	基部	底径	高さ	最大径	指数					
16	須恵器	把手	-	-	-	-	-	-	内: 黄白 外: 黑	把手のみ	把手の複合構造は、内調整、把手は複合把手。	棒ひで裏面は堅方形、丸きこ軽微する。	
17	陶器	把手	(21.5)						内: 黄 外: 黑	把手のみ	軽微ハケ、把手と内面は複合把手。	全体に偏平で、上方へ大きくなる。	
18	土師器	片身		(3.7)					内: 浅黄 外: 灰	純潔手	円軌手	底部はやや凹む、肩台は高く、外方へ張り出す。	
19	土師器	片身		(2.6)					内: 浅黄 外: 浅黄	底部手	圓軌手	底部は厚く、高さは断面が手内側で進行元、体部は頗る骨端	
20	土師器	片身	(12.7)	(3.3)	5.6	-	-	26	内: 棕 外: 灰	(1種部)/10 底部/14	よこ手	底部は平て、体部へ繋ぐかに弯曲する。口縁部内面に浅溝。	
21	土師器	壺	-	-		-			内: 棕 外: 灰	壺	外面ハケ、内面小雨。	体部はやや外傾する。壺部は内側に若干抵抗する。	
22	土	丸瓦	-						内: 棕 外: 黄白	破片	丸瓦調整?	現さは壺部で1.4cmを測る。	

(2) 溝

SD01

検出状況 1区の東端部で検出した。南北方向にはほぼ直線的にのびる溝である。両端とも調査区外まで伸びている。

形状・規模 検出した長さは9.80mである。断面U字形をなし、検出面における幅は60cm~86cmを測る。検出面からの深さは12cmである。底部の標高は北側で9.90m、南側で9.80mを測り、わずかに南側に傾斜している。

埋土 1層からなり、中砂~粗砂混じり暗灰褐色シルトが堆積していた。

出土遺物 出土していない。

SD02

検出状況 1区の東端部、SD01の西側で検出した。南北方向にわずかに弧状をなしてのびる溝である。両端とも調査区外まで伸びている。SD03・SD04・鑿溝と切り合った関係にあり、これらの遺構を切っている。

形状・規模 検出した長さは10.1mである。断面U字形をなし、検出面における幅は30cm~35cmである。検出面からの深さは12cmである。底部の標高は北側で9.90m、南側で9.80mを測り、わずかに南側に傾斜している。

埋土 SD01と同じく、中砂~粗砂混じり暗灰褐色シルト1層が堆積していた。

出土遺物 須恵器と土師器が出土している。

須恵器 壺B蓋と壺が出土している。壺Bの蓋(23)はつまみのみ図示できた。甕(24)について6小片で全体の形状は不明であるが、外面に波状文が巡ることが確認できる。

土師器 壺B(25)が出土しているが、破片のため詳細は不明である。

SD03

検出状況 1区の東北部で検出した。ほぼ東西方向に直線的にのびる溝で、西端は当地区を横断するサイフォンの所で切られており、西地区では検出されなかった。東端は、SD01の西側

で自然に収束している。SD02・SD04・鑿溝と切り合い関係にあり、これらに切られている。

形状・規模 検出した長さは7.20mである。断面U字形をなし、検出面における幅は32cm~40cmを測る。検出面からの深さは7cmである。底部の標高は東側で9.90m、西側で9.80mを測り、わずかに西側に傾斜している。

埋土 1層からなり、暗灰褐色中砂~粗砂が堆積していた。

出土遺物 出土していない。

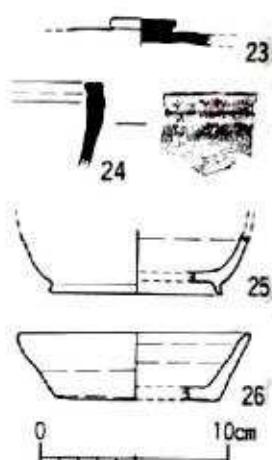
SD04

検出状況 1区の東部で検出した。ほぼ南北方向に直線的にのびるが、調査区南端部において南東方向に屈曲している。両端とも調査区外までのびている。SD02・SD03・鑿溝と切り合い関係にあり、これらの溝を切っている。

形状・規模 検出した長さは11.2mである。断面U字形をなし、検出面における幅は16cm~34cmを測る。検出面からの深さは8cmである。底部の標高は北側で9.90m、南側で9.80mを測り、わずかに南側に傾斜している。

埋土 1層からなり、暗灰褐色中砂~粗砂が堆積していた。

出土遺物 土師器の壺Aが1点(26)のみ図示できた。



第19図 SD02・04出土土器

第5表 SD02・04出土土器観察表

報告番号	種別	基盤	法面(cm)						色調	現存状況	測定	形態の特徴	備考
			上縁	凹凸	底縁	側縁	側入縁	複数					
23	排水器	水差							内:灰 外:灰	つまみのみ 回転ナギ。外縁元井路は回転ナギ。	横みは扁平で、幅が広い。半 周部が右下盛り上がる。	SD02	
24	排水器	裏	-	-	-	-	-		内:灰 外:灰	回転ナギ。外縁に木本(1.1 cm)の波状文がある。	回転部は手な面をもつ。	SD02	
25	土器	环身		-9.0		-	-		内:灰白 外:灰白	回転ナギ。	表面は円形で、腰部は薄く、左右へ開く。	SD02	
26	土器	环身	(12.4)	3.4	(7.7)			27	内:灰 外:灰	底部1/4以降 回転ナギ。底部は6mm ほり穴有	底部から体部は大きくなり直角 に、体部は直線的。	SD04	

鑿溝

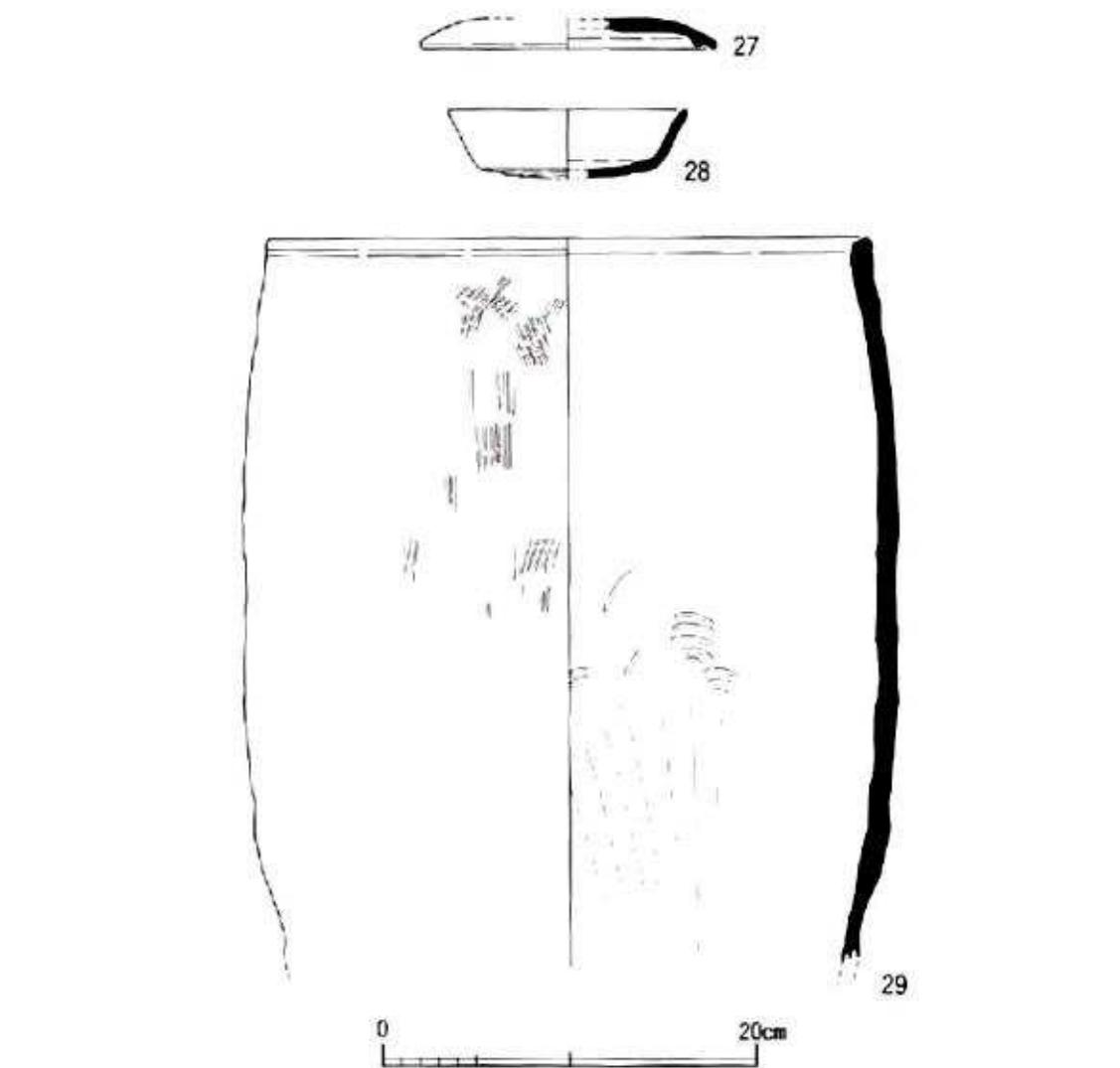
検出状況 1区の西端部を除いた地区で数十条まとまって検出した。調査区の方向と一致あるいはその直交方向にのびるのが大半であるが、一部東西方向のものも認められる。いずれも直線的にのびている。鑿溝相互の切り合い関係は確認できなかった。

各溝相互の間隔は一定しておらず、数箇所に集中する傾向が認められる。

形状・規模 規模・断面形はほぼ一定している。断面U字形をなし、検出面における幅15cm~20cmを測り、検出面からの深さは10cmである。

埋土 いずれも同じで、黄灰色シルト混じり砂の1層が堆積していた。

出土遺物 いずれも遺存状況は悪く、完形に復元できるものはわずかで、ほとんどが小片で出土している。すべて須恵器で、器種は壺蓋、壺身、こしきがある。



第20図 鍋溝出土土器

环蓋

内面にかえりのあるもの(27)が認められる。

环身

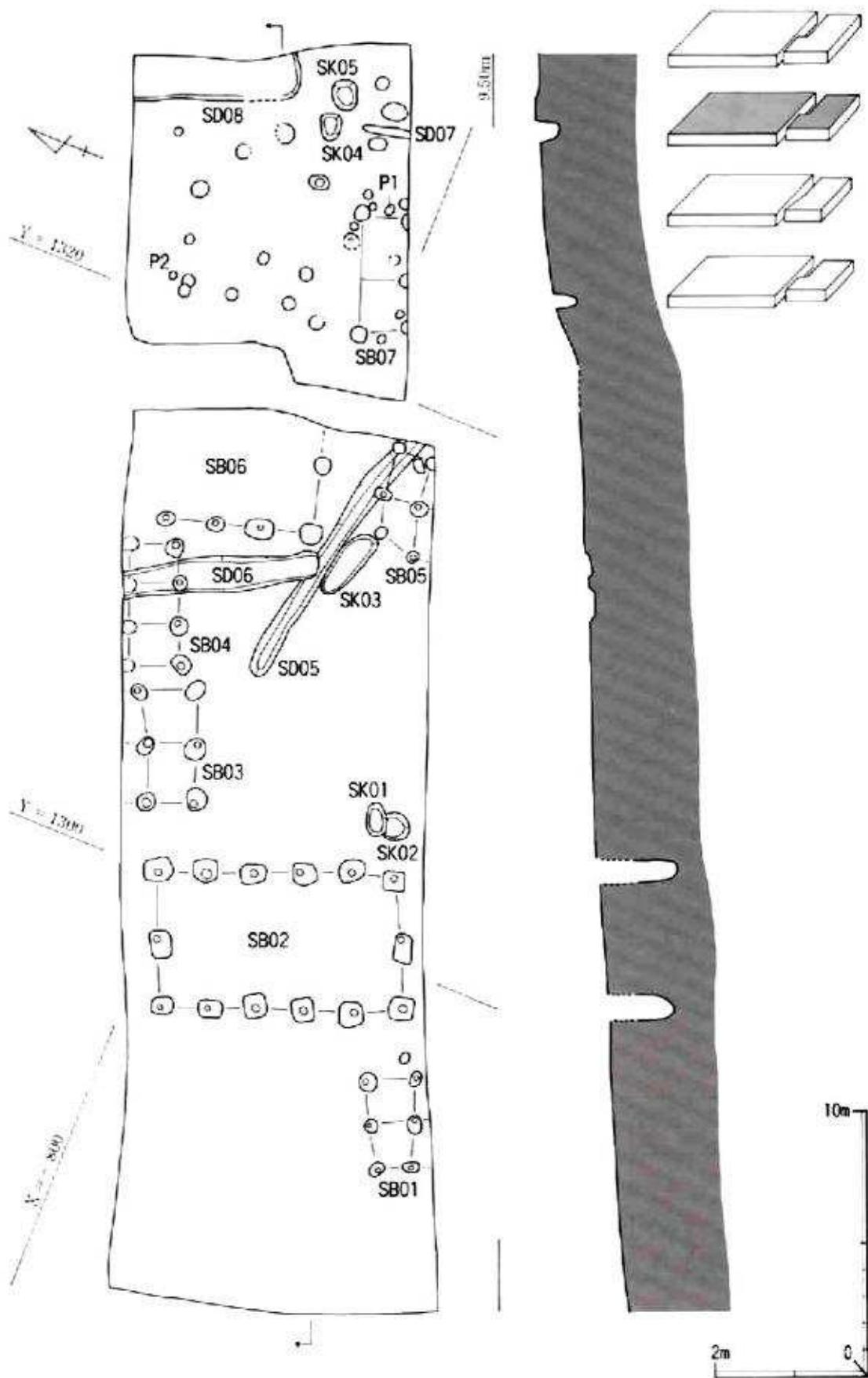
环 A (28)のみ図示できた。

こしき

底部を除く部分が破片で出土している。把手の形状については不明であるが、1区第1面の包含層から把手が出土しており、そのいずれかがこのこしきに伴うものである可能性がある。

第6表 鍋溝出土土器観察表

番号	種別	器種	法量(cm)						手溝	残存状況	調査	特徴の特徴	備考
			口径	器高	底径	厚さ	最大径	出数					
27	環巣器	环蓋	(15.7)						内:灰白 外:灰白	口縁部1-8 口縁部1-8	粗粒ナメ、外面と内面同軸ルカゲ式	天井部は歪みのため、やや凹む。 かわりは瓶體、瓶底で鋭い。	
28	環巣器	环身	(2.7)	(3.7)	(4.3)			-	内:灰白 外:灰白	口縁部1-4	粗粒ナメ、瓶底部は粗粒ルカゲ式	瓶底はぐれ込みをもつ。全体へ 彎曲し、体部は直線的に聞く。	
29	環巣器	こしき	(22.0)	-				-	内:灰白 外:灰白	口縁部1-8 内面上部同心円文	外面平行テリキ、内面上部同心 円文、下部は若干丸みナメ	体部は直線的に延び、口縁部 瓶底は曲をもつ。	



第21図 1区第2面

3. 第2面の遺構と遺物

(1) 第2面出土遺物

出土遺物

当面を検出するにあたって、弥生時代と奈良時代の土器が出土している。

弥生時代

鉢と底部片を図化した。

鉢

ほぼ完形に復元できる個体である。突出した底部から体部が内湾気味にたらあがり、口縁部を外側に折り返すようにして作りだしている。このため、内面の口縁部と体部の境にわずかに棱が認められる。口縁端部には刺み目が施されている。

底部

壺の底部片と考えられる。底部外縁部を外方に突出し、底部は高台状を呈している。

奈良時代

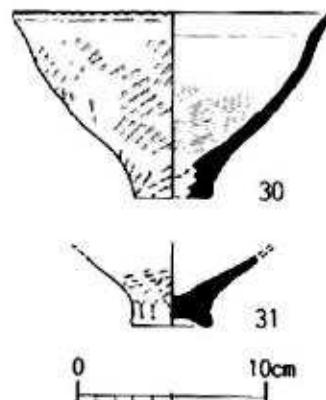
須恵器とそれ以外に瓦が出土している。

須恵器

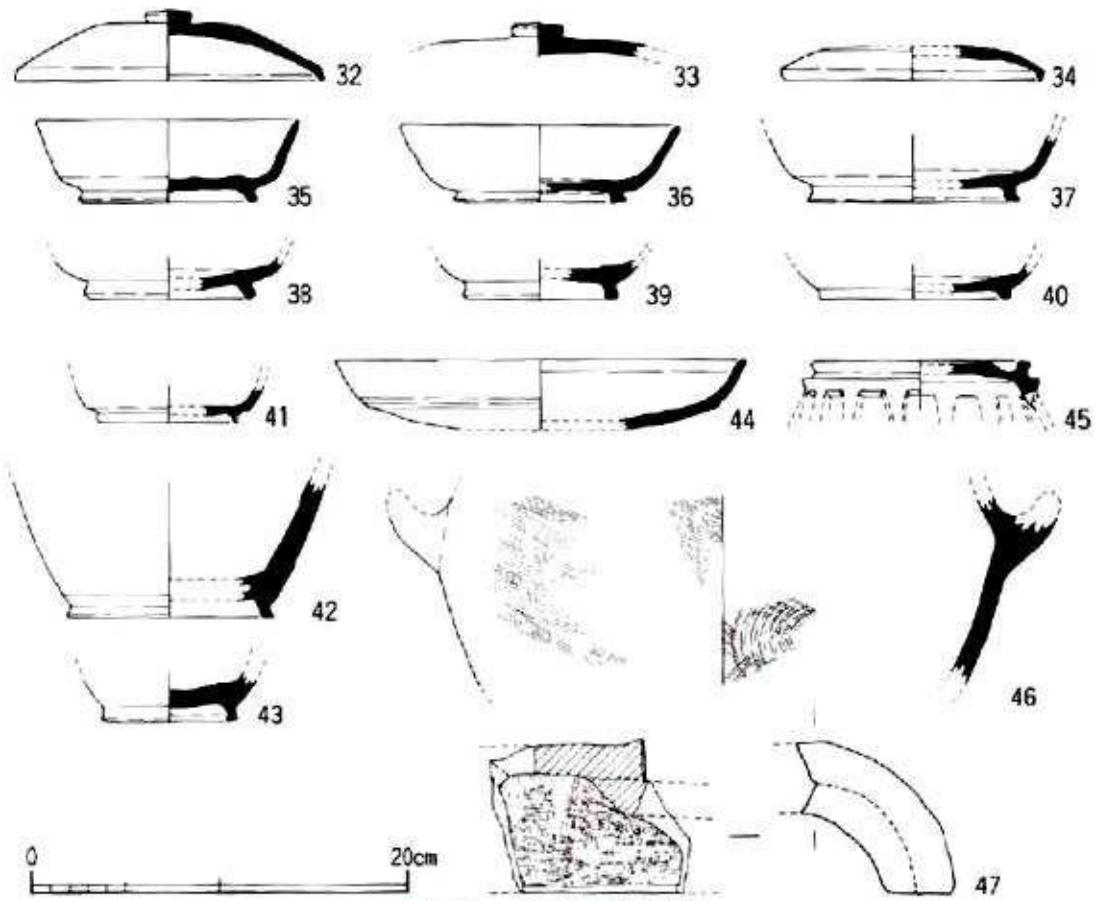
杯B蓋と杯B、壺、皿、円面鏡、甕を図化した。
杯B蓋は32が高さがあり、34は偏平な感がある。杯Bは径の大きい37から、小さい41まで認められる。円面鏡は小片であり、全体の形状は不明であるが、透かしは13箇所であると復元することができる。甕は、胴部が膨らむもので、把手が付く。

その他

上縁継ぎの丸である。内面には布目が認められるが、外面は磨滅のため不明である。



第22図 1区第2面出土土器(1)



第23図 1区第2面出土土器(2)

第7表 1区第2面出土土器観察表(1)

番号	器種	基盤(cm)	調査・目立	色調	残存率	備考
30	鉢	口径116.7 底径14.2 高さ9.8 幅広	外面: 丸形容形後半を調整。口縁部2/3を成形後半で せんし。 内面: 丸形容形後半を調整。口縁部2/3をせんし。	外面: 淡青 内面: 淡青	底部- 口縁部3/4	
31	甌	口径14.3 底径13.8 高さ	外面: 既成スリットで、体部叩き坂削後ハサモ調整 内面: 製成の跡不明。	外面: 淡青 内面: 淡青	底部3/4	

第8表 1区第2面出土土器観察表(2)

番号 番号	種類	器種	基盤(cm)					色調	残存状況	調査	器種の特徴	備考
			口径	底径	高さ	厚径	最大径					
32	埴毛器	口縁	(16.4)	13.6	-	-	-	内: 淡青 外: 淡青	口縁部1/4 底部1/4	回転ナメ。	天井部は平ら、下方へ緩やかに傾斜し、体部は直線的。	
33	埴毛器	口縁			-	-	-	内: 淡青 外: 淡青	底みぞみ	回転ナメ。外由天井部は回転 ハサモアリ。	底みぞは幅狭で深めだった。中 央がやや盛り上がる。	
34	埴毛器	口縁	(13.7)					内: 淡青 外: 淡青	口縁部1/4 底部1/4	回転ナメ。外由天井部は回転 ハサモアリ。	全体に偏平で、体部は緩やかに 傾斜。口縁部底みぞ1/4へ傾斜。	
35	埴毛器	口縁	(13.9)	13.3	7.0	-	-	内: 淡青 外: 淡青	口縁部1/4 底部1/4	回転ナメ。外由天井部はハサモ アリを調整。	底部から体部へ大きく傾き る。高台は外方へ開く。	
36	埴毛器	口縁	(14.8)	14.1	7.9	-	-	内: 淡青 外: 淡青	口縁部1/4 底部1/4	回転ナメ。	底部から体部へ緩やかに傾斜 高台は近く偏平で、外方へ傾く。	
37	埴毛器	口縁			(11.1)			内: 淡青 外: 淡青	底部1/4	回転ナメ。外由天井部は回転ハ サモアリ。	底部から体部は大きくなっている が、高台は低く、外方へ開く。	
38	埴毛器	口縁			8.4			内: 淡青 外: 淡青	底部1/4	回転ナメ。内由天井部は不定方 向のナメ。	高台は大きく、外方へ開く。	
39	埴毛器	口縁			7.5			内: 淡青 外: 淡青	底部1/4	回転ナメ。外由天井部はハサモ アリを調整。	底部は平ら、高台は高く、外方へ開く。	
40	埴毛器	口縁	-	-	(10.9)	-	-	内: 淡青 外: 淡青	底部1/4	回転ナメ。	高台は低く、外方に不ぞろい	
41	埴毛器	口縁	-	-	(7.2)			内: 淡青 外: 淡青	底部1/4	回転ナメ。	全体に高い、底部から体部へ 傾斜し、高台は低く傾く。	
42	埴毛器	口縁			(10.9)			内: 淡青 外: 淡青	底部1/4	回転ナメ。	全体に高い、体部は外方へ傾斜す る。高台は高く、外方へ開く。	
43	埴毛器	口縁	-	-	9.3	-	-	内: 淡青 外: 淡青	底部1/4	回転ナメ。外由天井部はハサモ アリを調整。内面は螺旋状のナメ。	高台は面をもつ。やや外方へ 開く。底部は厚い。	
44	埴毛器	口縁	(21.8)	18.5				内: 淡青 外: 淡青	口縁部1/10	回転ナメ。外由天井部は回転ハ サモアリ。	全体に渦巻き状に傾斜し、体部 と口縁部の端に凸縁がある。	
45	埴毛器	円錐形	(11.6)					内: 淡青 外: 淡青	縁から底に かけて1/4	回転ナメ。透しあはハサモアリに より切り取られるが、角は残る。	片は低く、底での厚さは薄い 透かしあはは窓所と復元される。	
46	埴毛器	甌					(10.4)	内: 淡青 外: 黄褐色 内: 淡青 外: 黄褐色	底部1/4	体部丸玉 各面ハサモアリ。内面同心丸。	側部は若干張り出す。	
47	丸	上縁押 丸足						内: 淡青 外: 黄褐色 内: 淡青 外: 黄褐色	底	内面収口部。外面は堅膜のた め不明。	本体部は大きく段をもつ。	

(2) 掘立柱建物跡

SB01

検出状況 1区の最も西側で検出された。調査区の制限により、さらに南方に延びる可能性がある。

建物の方位は、他の掘立柱建物跡とはほぼ同じである。

形状・規模 N-68°-Eに棟軸の方向をとる桁行2間、梁行1間の掘立柱建物跡であるが、さらに南方向に延びる可能性があるので、詳細は不明である。

桁行方向が4.45m、梁行方向が1.50mであり、面積は6.68m²である。柱穴間の心々距離の平均値は桁行方向が2.23m、梁行方向が1.50mであり、桁行方向が長い。

柱穴 平面形は全て円形で、他の掘立柱建物と比較して、規模は小さい。最も大きいもので40cm、

最も小さいもので24cmを測る。

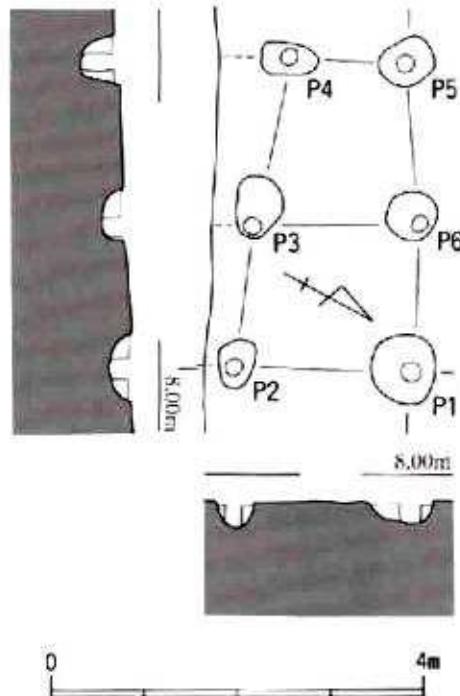
柱痕の直径は20cm程度で、深さは28cm～20cm程度である。確認できたいずれの掘り方も柱穴の底まで達しているが、柱根が依存していた柱穴では柱根は掘り方の底から若干浮いている。

出土遺物

P5の掘り方から土師器壺の破片が、P3の掘り方から須恵器壺と壺蓋の破片が、P5・P6からは土師器片が、P1の掘り方から須恵器壺蓋と土師器壺身がそれぞれ出土している。このうち図示し得たのはP3から出土した壺蓋のみである。



第24図 SB01出土土器



第25図 SB01

第9表 SB01出土土器観察表

番号 者名	種別	器種	正 品 (cm)						色調	残存状況	測 定	形態の特徴	備考
			口径	器高	底径	脚付	最大径	枚数					
16	須恵器	壺蓋	17.0	-	-	-	-	-	内 黄 外 黄	1脚部少 回転ナシ	-	壺底は若干傾曲するのみ。	P3

SB02

検出状況

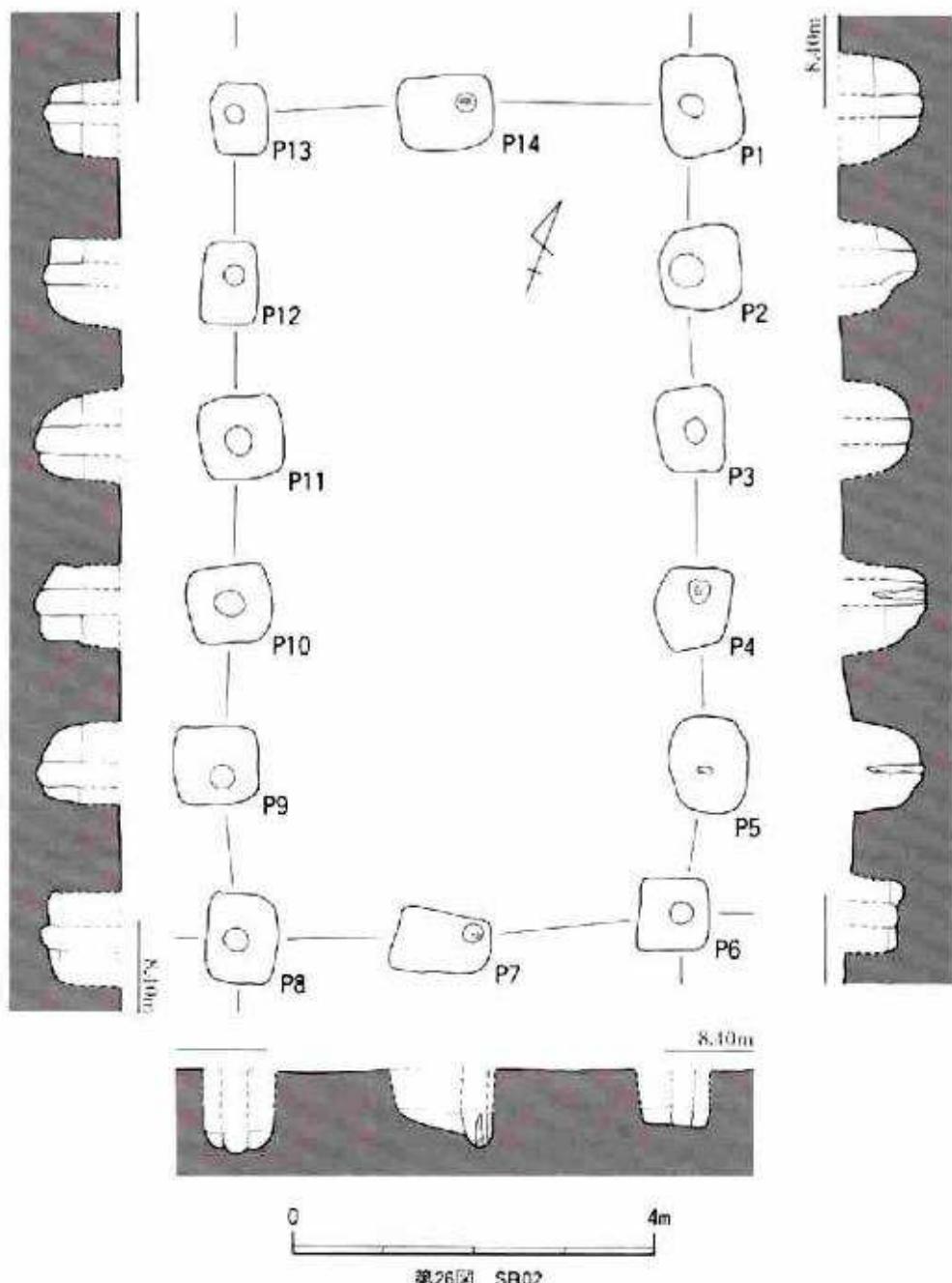
1区のやや西寄りで、下内膳遺跡の立地する扇状地の西端で検出された。建物の方位は、向きが異なるものの、1区で検出された他の掘立柱建物跡と同じである。

形状・規模

N-22°-Wに棟軸の方向をとる桁行5間、梁行2間の掘立柱建物跡である。規模は桁行方向が8.80m・9.00m、梁行方向が4.90mであり、面積は44.1m²である。柱穴間の心々距離の平均値は南側が2.45m、北側が2.50m、東側が1.76m、西側が1.80mであり、個々の柱穴間の距離とは大きいもので20cm程度の差がある。

柱穴

いずれの柱穴の掘り方も隅丸方形で、最も大きいもので1.12m、最も小さいもので64cmを測る。柱痕の直径は20cm～36cm、深さは60cm～92cmを測る。いずれの柱痕も掘り方の底まで達している。



第26図 SB02

柱根

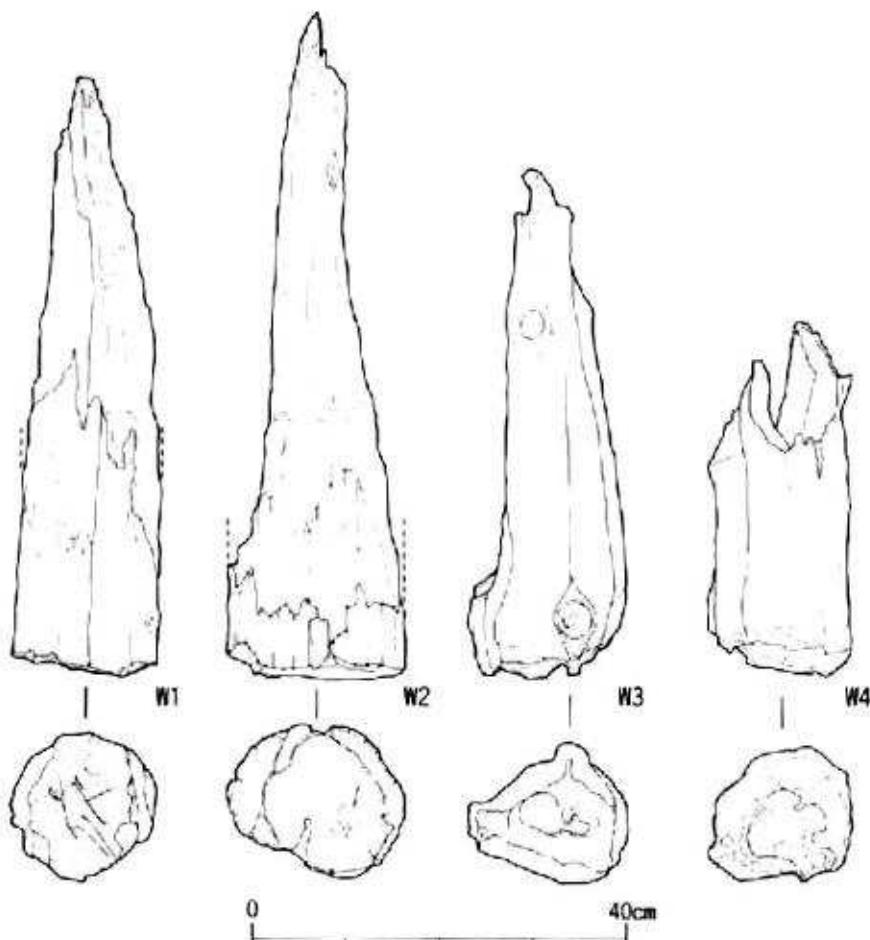
P 4・P 5・P 7・P 14において柱根が遺存していた。それぞれの基部における最大径はW 1が15.7cm、W 2が18.6cm、W 3が16.8cm、W 4が15.3cmである。最も長く遺存しているW 2で長さは70.7cmを測る。遺存状況のよいW 1の外面には、面取りの加工が観察でき、その幅は5cmで、10面に復元できる。底面の加工はW 1が最も良好に観察でき、直線的な切削痕が多方向から認められる。

出土遺物

いずれも掘り方から出土している。P 1・P 3・P 7・P 9・P 10・P 11・P 14から土師器が、P 7・P 12から須恵器と土師器が出土している。このうち、器種が判明したのはP 7の須恵器壺身と、P 9の土師器の壺のみであり、図示し得たのはP 7出土の杯身(49)のみである。



第27図 SB02出土土器



第28図 SB02柱根

第10表 SB02出土土器観察表

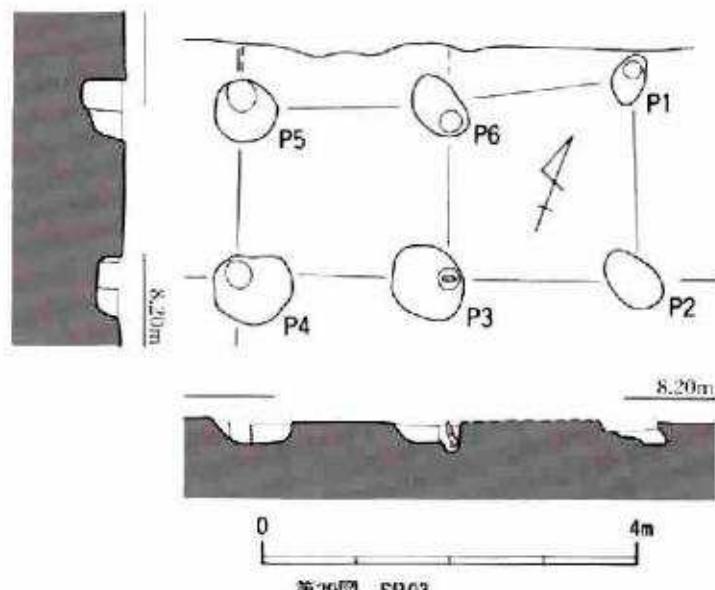
報告 番号	種別	部類	法 量(m)					色 調	残存状況	調 査	形態的特徴	備考
			辺 幅	面 積	延 長	間 隔	最大 辺					
SB	縦堀器	灰陶	9.8	12.9	4.2		30	内 灰 外 灰	口縁直角 底盤1枚	同軸・イ 各部も井戸はへり 切り出抜キテ	全体に丸く、口縁部は凹曲 F22.2.1号方一帶出土する	F27

SB03

検出状況 1区のはば中央の北寄りのところで検出された。調査区の制限により、さらに北方に延びる可能性がある。建物の方位はSB02及びSB04とはほぼ同じで、東西に並んでいる。SB06とは方位は近いが向きは異なる。

形状・規模 N-68°-Eに棟軸の方向をとり、桁行2間、梁行1間の矩柱の掘立柱建物跡であるが、さらに北方向に延びる可能性があるので、詳細は不明である。規模は桁行方向が4.15m、梁行方向が1.90mであり、面積は7.89m²である。柱穴間の心々距離の平均値は南側が2.08m、北側が2.10m、東側が2.20m、西側が1.90mであり、個々の柱穴間の距離は30cmほどの一塊がある。特に東側の柱穴間が広いため全体に歪な形となっている。

柱穴 掘り方の平面形は全体に歪であり、円形、梢円形、隅丸方形などがある。このうち隅丸方形の柱穴が大きい傾向にある。規模は平面の大きさが36cm-84cmで、深さは20cm-



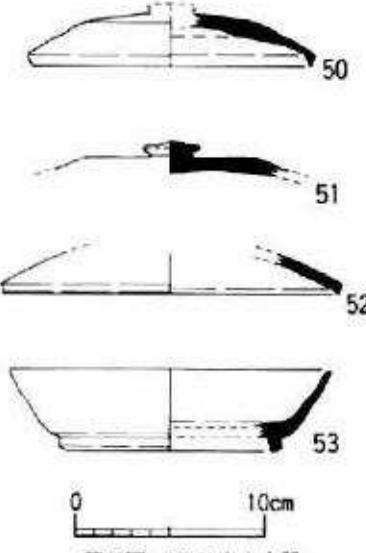
第29図 SB03

44cmである。柱痕の直径は20cm-30cm程度で、深さは掘り方と同じである。

柱根 P3において柱根が遺存していたが、遺存状況は悪く、図示し得なかった。

出土遺物 いずれも掘り方から出土している。P1からは土師器のみが、P2・P3・P4・P5・P6から須恵器と土師器が出土している。

このうち、器種が判明したものはP2の須恵器坏身・坏蓋、P3・P4の須恵器坏蓋、P5の須恵器甕、P6の須恵器坏身のみであり、図示し得たのはP2・P3・P4出土の50-53のみである。



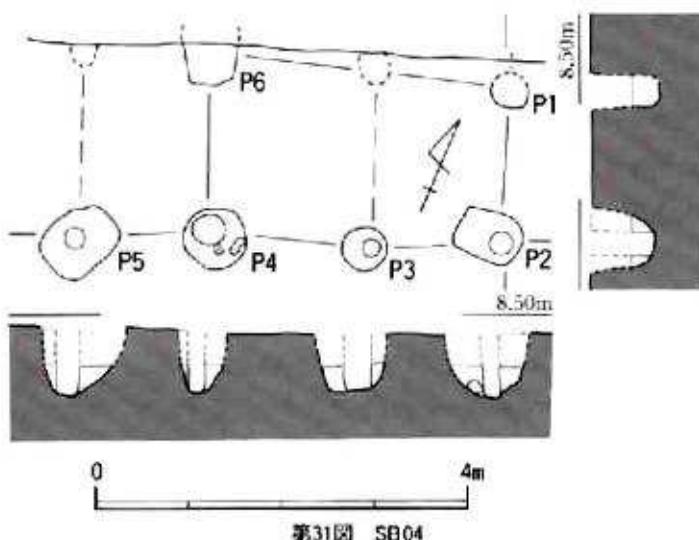
第30図 SB03出土土器

第11表 SB03出土土器観察表

目次 番号	種類	器種	測定値(cm)						色	調査	形状	柱根の外側	備考
			内径	外径	底径	高さ	最大幅	沿数					
50	須恵器	坏蓋	(11.6)						内) 青灰 外) 青灰	1縁部1/4	回転ナメ。外周天端部は回転ハラタスリ。	全体に滑らかに費盡し、1縁部端部は上方へ屈曲する。	P3
51	須恵器	坏蓋	-	-	-	-			内) 内 外) 灰	縫合のみ	回転ナメ。外周天端部は回転ハラタスリ。	縫合は偏平で、天井部はやや盛り上がる。55方へ張り出す。	P4
52	須恵器	坏蓋	(17.7)						内) 灰白 外) 白	1縁部1/4	回転ナメ。	体部は直線的に延び、縫合部は下方へ強く屈曲する。	P5
53	須恵器	坏身	(16.9)	(4.2)	(11.8)				内) 黄褐色 外) 黄褐色	1縁部1/8	回転ナメ。	縫合から体部にかけて尾突し、体部は直線的。高台は丸み。	P2

SB04

検出状況 1区の中央からやや東寄りで検出された。調査区の制限により、さらに北方に延びる可能性がある。建物の方位はSB03とはほぼ同じで、東西に並んでいる。東側にはSB06があり、方位は近いが、向きが異なる。

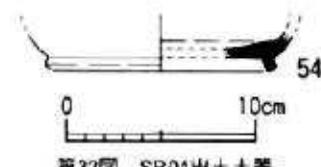


第31図 SB04

形状・規模 N-68°-Eに棟軸の方向をとり、桁行3間、梁行1間の總柱掘立柱建物跡であるが、さらに北方向に延びる可能性があるので、詳細は不明である。規模は桁行方向が4.55m、梁行方向が1.60mであり、面積は7.28m²である。柱穴間の心々距離の平均値は南側が1.52m、北側が1.53m、東側が1.60m、西側が2.20mであり、個々の柱穴間の距離は40cmほどとの違いがある。特に西側の柱穴間が広いため全体に歪な形となっている。

柱穴 掘り方の平面形は全体に歪であり、円形、隅丸方形などがある。このうち隅丸方形の柱穴が大きい傾向にある。平面の大きさは48cm~80cmで、深さは60cm~76cmである。柱痕の直径は20cm~36cm程度で、深さは掘り方と同じである。

出土遺物 いずれも掘り方から出土している。P4・P5から須恵器と土師器が、P2から須恵器が、P3からは土師器のみが出土している。このうち、器種が判明したものはP2の須恵器环蓋・甕、P4の甕、P5出土の环身のみであり、図示し得たのはP5の环身のみである。



第32図 SB04出土土器

第12表 SB04出土土器観察表

番号 番号	種類	寸幅	寸幅	寸 量(cm)					色 調	残存状況	調 査	取扱いの特徴	備考
				上辺	脚高	通厚	側径	最大径					
54	須恵器	环身	-	-	11.5	-	-	-	内:灰白 外:灰白	底盤1/4	回転手	体部はやや厚く、高台は大きく、外方へ開く	P5

SB05

検出状況 1区の中央やや西寄りの南端で検出された。調査区の制限により、さらに南方や東方に延びる可能性がある。建物の方位は、他の掘立柱建物跡と若干異なっている。

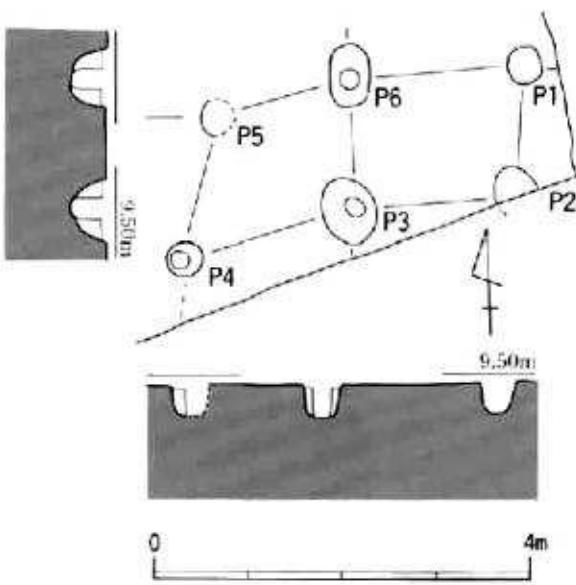
形状・規模 N-81°-Eに棟軸の方向をとる桁行2間、梁行1間の掘立柱建物である。規模は桁行方向が3.30m、梁行方向が1.35mであり、面積は4.46m²である。柱穴間の心々距離の平均値は桁行方向が1.70m、梁行方向が1.50mであり、桁行方向が長い。

柱穴

平面形が円形の掘り方が多いが、若干隅丸方形に近いものもある。大きさは最も大きいもので60cm、最も小さいもので35cmを測る。柱痕の直径は20cm程度で、深さは35cm~40cm程度である。確認できたいずれの掘り方も柱穴の底まで達している。

出土遺物

P6の掘り方から土師器片が出土しているが、器種、形態などは不明である。



第33図 SB05

SB06

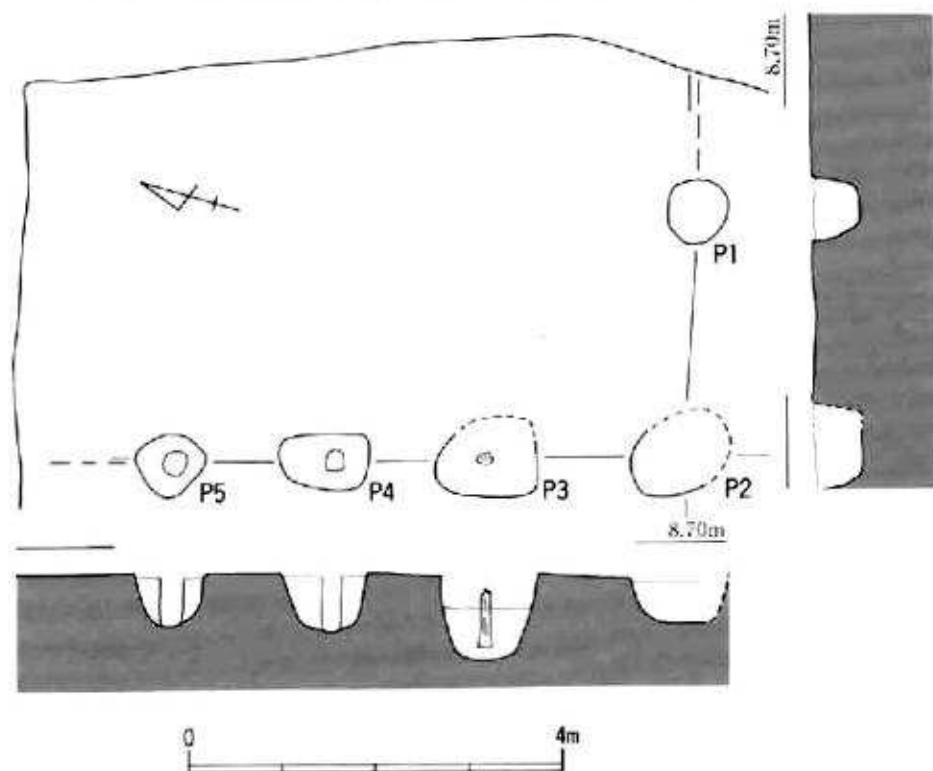
検出状況

1区の中央からやや東寄りで検出された。調査区の制限により、さらに北方や東方に延びる可能性がある。建物の方位は西側に接するSB02と近いが、向きが異なる。

形状・規模

N-17°-Wに棟軸の方向をとり、桁行3間、梁行1間の掘立柱建物跡であるが、さらに北方向や東方向に延びる可能性があるので、詳細は不明である。

桁行方向が5.45m、梁行方向が2.50mであり、面積は13.63m²である。柱穴間の心々距離の平均値は南側が2.50m、西側が1.82mであり、梁行方向の方が柱穴間の距離が長い。桁行方向の個々の柱穴間の距離は40cmほどの違いがある。



第34図 SB06

柱穴

掘り方の平面形は全体に歪であり、隅丸方形を基本とするものの、円形に近いものもある。

規模は平面の大きさが60cm~108cmで、深さは48cm~88cmである。柱痕の直径は24cm~28cmを測る。柱痕は掘り方の底まで達しているが、柱根の残っているP-3は掘り方の底まで達しておらず、検出面から80cmの深さまでである。

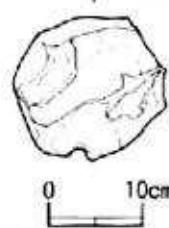
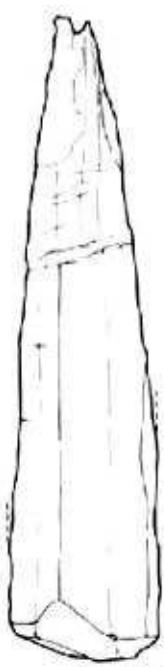
柱根

P-3において柱根(W-5)が遺存していた。基部における直径は16.0cmを測り、長さは68.7cmを測る。外面は比較的遺存状況が良く、面取りが観察できる。各面の幅は約5cmで、10面程度に復元できる。底面の加工は遺存状況が悪いため、観察できない。

出土遺物

いずれも掘り方から出土している。P-1・P-2・P-3から須恵器と土師器が、P-4・P-5から土師器が出土している。

このうち、器種が判明したのはP-3出土の須恵器环身と土師器甕のみであり、そのうち図示し得たのは須恵器环身のみである。



第35図 SB06出土土器

第36図 SB06柱根

第13表 SB06出土土器観察表

報告 番号	種 類	器 種	法 面(cm)					形 式	残存状況	調 査	断面の特徴	備 考	
			L寸	幅	高さ	底径	最大径						
SB	須恵器	环身	(12.0)	3.5	5.6		-	角	内:弧 外:直	II腰部1/10 底部1/4	30mmナギ。底部外側はハラ切 リを調整す	底部は平で、体部は上斜方へ 直線的に開き。	P-3

SB07

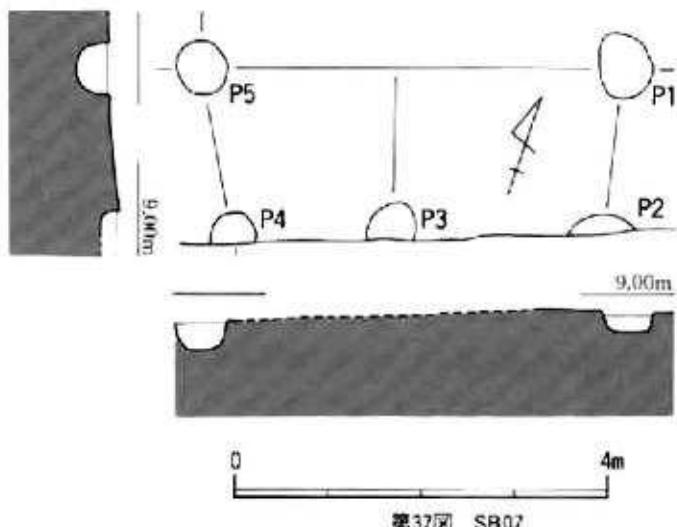
検出状況 1区の東端の南側で検出された。調査区の制限により、さらに南方に延びる可能性がある。建物の方位は、他の掘立柱建物跡とは異なっており、正方位に近い。

形状・規模

N=68° - Eに棟軸の方向をとる桁行2間、梁行1間の掘立柱建物であるが、さらに南方向に延びる可能性があるので、詳細は不明である。また、北側については、中央の柱穴が検出されていないため、調査区内で検出された部分は、掘立柱建物の本体ではなく、庇などの掘立柱建物に伴う付属施設である可能性も否定できない。全体の平面形は北側が大きく広がり、歪である。規模は桁行方向が北側で4.56m、南側で4.00m、梁行方向が1.80mであり、面積は7.70m²である。柱穴間の心々距離の平均値は桁行方向が2.23m、梁行方向が1.50mであり、桁行方向が長い。

柱穴

平面形は全て円形で、他の掘立柱建物跡と比較して、大きさは小さい。最も大きいもので直径55cm、最も小さいもので50cmを測る。柱痕については確認できなかった。深さ



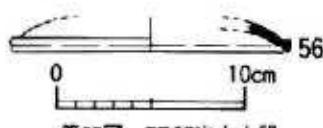
第37図 SB07

は北西角が最も深く35cmを測り、最も浅いものは20cmを測る。

出土遺物

P5の掘り方から土師器と弥生土器が、P3から須

患器坏蓋が、P1からは土師器がそれぞれ出土しているが、須患器坏蓋以外は、小片のため、器種は不明である。



第38図 SB07出土土器

第14表 SB07出土土器観察表

部 分 番 号	種 別	器 種	法 量(cm)						色 調	残存状況	調 査	形態の特徴	備考
			口径	器高	底径	無径	最大径	指數					
56	須患器	坏蓋	(14.6)				-	-	内:灰 外:灰	口縫部1/10 底基1/10	回転ナギ	体部は緩やかに斜面。口縫部 端部で上方へ傾曲。 P3	

その他の柱穴

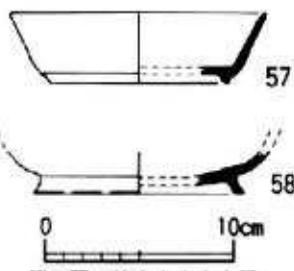
検出状況

上記の建物を構成する以外の柱穴で、東地区のいくつかの柱穴において時期を明確にできる土器が出土している。

出土遺物

1区の東側に散在する柱穴群の内、P1・P2から遺物が出土した(第39図)。

P1・P2からは坏Bが出土した。57の坏身の高台は短いのに対し、58の高台は外方へ開き長い。



第39図 柱穴内出土土器

第15表 柱穴内出土土器観察表

部 分 番 号	種 別	器 種	法 量(cm)						色 調	残存状況	調 査	形態の特徴	備考
			口径	器高	底径	無径	最大径	指數					
57	須患器	坏身	(11.4)	3.6	(9.5)			28	内:灰 外:灰	口縫部1/10 底基1/10	回転ナギ	底部から体部にかけて屈曲し、 体部は直線的。高台は低い。	P1
58	須患器	坏身			(11.0)				内:灰 外:灰	底基1/3	回転ナギ。外周道部は回転ハ ラケナギ。	高台は高く、外方へ大きく開 いて。	P2

(3) 土壌

SK01

検出状況	西地区のほぼ中央部南側で検出した。SK02と切り合い関係にあり、SK02を切っている。
形状・規模	平面楕円形を呈し、北東-南西方向に主軸をとる。主軸方向で1.26m、その直交方向で71cmを測る。断面逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは16cmである。
埋土	1層からなり、シルト質細砂-中砂（オリーブ里）が堆積していた。
出土遺物	全く出土していない。

SK02

検出状況	西地区のほぼ中央部南側で検出した。SK01と切り合い関係にあり、SK01に切られている。このため、当土壌の北側約1/4を欠く。
形状・規模	平面楕円形を呈し、北西-南東方向に主軸をとる。北側をSK01に切られているため、主軸方向で検出できたのは85cmで、その直交方向は98cmである。断面逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは21cmである。
埋土	1層からなり、自然堆積と考えられる極細砂混じり粗砂-小礫（黒褐色）が堆積していた。
出土遺物	全く出土していない。

SK03

検出状況	西地区の東端部南側で検出した。当土壌の北側掘り方がSD05の掘り方と接しているが、両者の切り合い関係は明確にできなかった。
形状・規模	平面長楕円形を呈し、主軸を東西方向にとる。主軸方向で2.75m、その直交方向で1.05mを測る。断面逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは8cmである。
埋土	1層からなり、自然堆積によると考えられるシルト質細砂-中砂（暗茶褐色）が堆積していた。
出土遺物	全く出土していない。

SK04

検出状況	東地区の東端部南側で検出した。SK05の西20cmに位置するが、他の遺構との切り合い関係は認められない。
形状・規模	平面楕円形を呈し、主軸を北東-南西方向にとる。主軸方向で1.05m、その直交方向で82cmを測る。断面逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは7cmである。
埋土	1層からなり、自然堆積と考えられるシルト質中砂-細砂（オリーブ黒）が堆積していた。
出土遺物	全く出土していない。

SK05

検出状況	東地区の東端部南側で検出した。SK04の東20cmに位置するが、他の遺構との切り合い関係は認められない。
形状・規模	平面梢円形を呈し、主軸を北東一南西方向にとる。主軸方向で1.15m、その直交方向で1.02mを測る。断面はやや深い皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは14cmである。
埋土	1層からなり、自然堆積と考えられるシルト質中砂～細砂（灰）が堆積していた。
出土遺物	全く出土していない。

(3)溝

SD05

検出状況	西地区の東端部南側で検出した。ほぼ東西方向にのびる溝で、東側は調査区外までのび、西側は調査区中央部で収束している。SB05・SD05と切り合い関係にあり、両者に切られている。この他、SK03とは掘り方を接しているが、切り合い関係は明確ではない。
形状・規模	検出した長さは10.6mである。断面U字形をなし、検出面における幅は60～90cmを測る。検出面からの深さは20cmである。底部の標高は、西側で9.07m、東側で9.25mと西側へ傾斜している。
埋土	3層からなる。最下層の極細砂～細砂（灰オリーブ）と中層の中砂～粗砂（灰）が自然堆積後、中央部を幅50cmの規模で再掘削されている。その後上層の粗砂～小礫（黒）が堆積している。
出土遺物	全く出土していない。

SD06

検出状況	西地区の東端部南側で検出した。北西一南東方向にのびる溝で、北西側は調査区外までのび、南東側は後述するSD05と切り合う所で収束している。SB04・SD05と切り合い関係にあり、SB04に切られ、SD05を切っている。
形状・規模	検出した長さは7.35mである。断面形は浅い逆台形をなし、検出面における幅は1.00m～1.30mを測る。検出面からの深さは5cmである。底部の標高は、北西側で9.35m、南東側で9.25mを測り、わずかに南東側へ傾斜している。
埋土	1層からなり、自然堆積と考えられるシルト質細砂～中砂（灰）が堆積していた。
出土遺物	全く出土していない。

SD07

検出状況	東地区の南東部で検出した。ほぼ南北方向にのびる溝で、南側は調査区外までのび、北側は調査区内で収束している。他の遺構との切り合い関係は認められない。
形状・規模	検出した長さは1.76mである。断面形はU字形をなし、検出面における幅は20～25cmを測る。検出面からの深さは13cmである。底部の標高は北側で9.83m、南側で9.86mとわずかに北側へ傾斜している。

埋土 1層からなり、自然堆積と考えられる細砂～中砂（暗灰黄）が堆積していた。

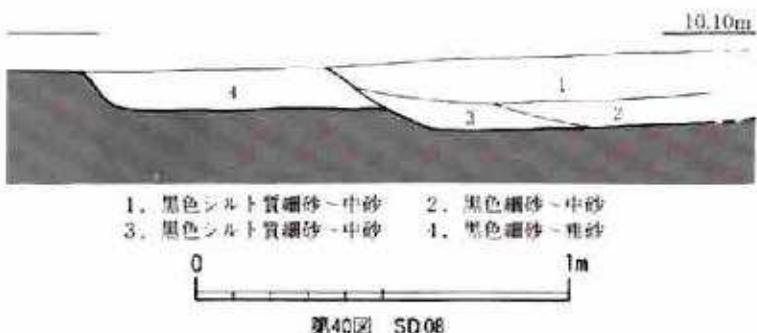
出土遺物 全く出土していない。

SD08

検出状況 東地区の北東部で検出した。北西～南東方向にのびる溝で、北西側は調査区外までのび、南東側は調査区中央部で収束している。また、北東側の肩は調査区内では検出できず、調査区外と推定される。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模 検出した長さは2.53mである。断面形は、北東側が未検出であるため明確にできないが、逆台形を呈するものと考えられる。検出面における幅は60～66cmを測る。検出面からの深さは8cmである。底部の標高は、北西側・南東側ともに9.90mと同じである。

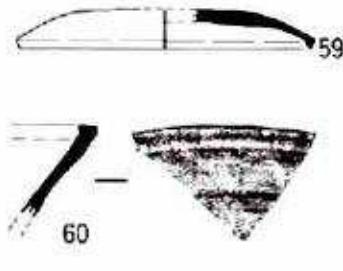
埋土 4層からなる。第4層堆積後再掘削され、その後第3層～第1層の順に堆積している。第2・3層が自然堆積によるものと考えられるのに対して、第1層は人為的に埋められた層と観察できる。



出土遺物 須恵器の杯蓋、及び壺の口縁部が出土した。

杯蓋 59はつまみ部分がないが、復元によりほぼ完形に図示できた。全体に扁平で、口縁部は下方に屈曲する。

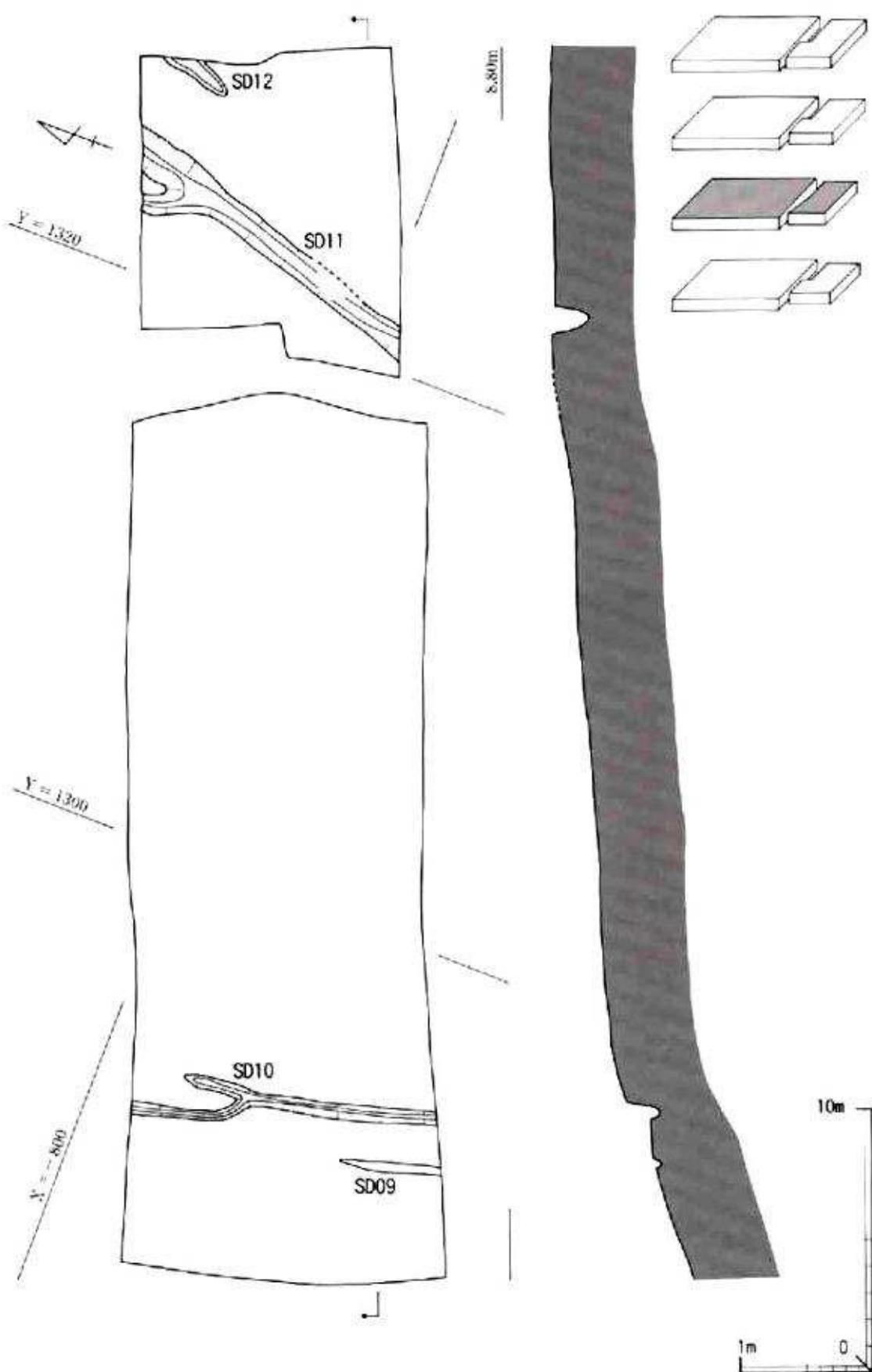
壺 60は口縁部の小片のみ出土しており、内側に折り返した端部と波状文が特徴的である。



第41図 SD08出土土器

第16表 SD08出土土器観察表

調査番号	性別	年齢	法寸量(cm)						色調	残存状況	構造	利用目的	曲率
			山頂	若森	筑波	御室	若大河	若狭					
59	須恵器	杯蓋	(1, 2)						内) 黄白 外) 淡白	1.9mm±1.5	円転ナギ。外周は自然縫など で表面が覆われる。	天井部はほぼ平らで、口縁部 にかけて縦やかに彫磨する。	
60	須恵器	壺							内) 黄白 外) 淡	1.9mm±1.5	屈転ナギ。底吹支は丁寧に 彫磨する。	底部は平らで、内側に短巻する。	

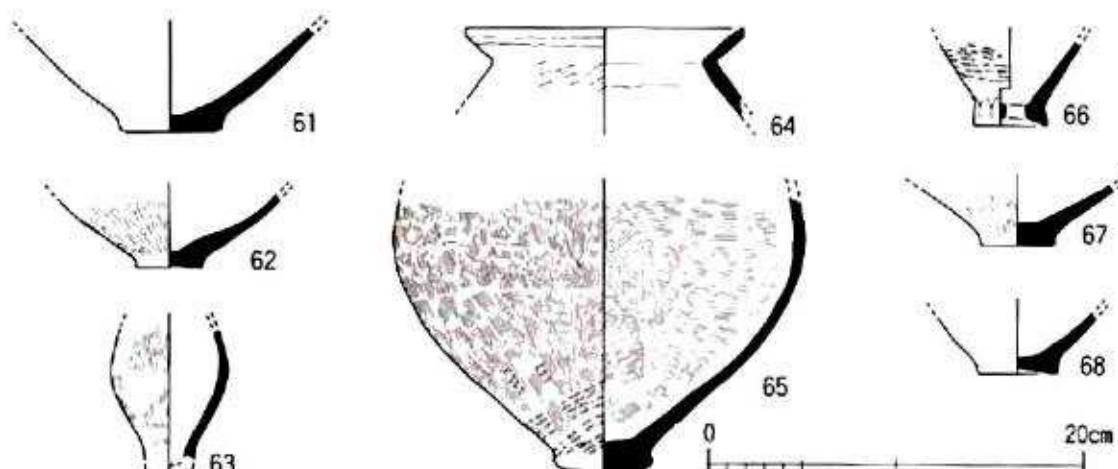


第42図 1区第3面

4. 第3面の遺構と遺物

(1) 第3面出土遺物

- 出土遺物** 弥生時代後期の壺・甕・鉢の各器種が出土している。
- 壺** 図化できたのは4個体(61~63・67)である。63を除いては全て底部片である。3個体の底部は、いずれも外面をハラミガキにより仕上げている。63は体部のみ残存する。法量的に小型で、ミニチュアの壺と考えられる。
- 甕** 64と65の2個体を図化した。64は口縁部から肩部にかけて残存するもので、いわゆるV様式系甕に分類されるものである。体部から頸部まで作りだした後、粘土を練ぎ足して口縁部を成形しており、その練ぎ目が外面に顕著に認められる。
- 65は体部中位以下が残存するもので、比較的大型に分類される甕である。叩き成形後、内外面ともには全面にわたってハケ調整により仕上げられている。
- 鉢** 66と68の2個体を図化した。66はいわゆる有孔鉢と推定されるもので、底部のみ残存する。底面中央部に焼成前に穿たれた径9mmの穿孔が認められる。68は、体部がわずかに内湾気味にたちあがることから鉢と判断した。



第43図 1区第3面出土土器

第17表 1区第3面出土土器観察表(1)

番号	器種	直 径(cm)	調査・作 法	外 面	残存率	備考
61	壺	口径:5.5 腹径:4.5 高さ:3.5	外面:底部ハラミガキによる調整、体部ハケ調整後ハラミガキ。 内面:ナメ調整。	外面:にごい擦 内面:にごい擦	底面1/4	
62	甕	口径:11.0 腹径:11.0 高さ:1.5	外面:底部ハラミガキ、体部ハケ調整。 内面:底部ハラミガキ、体部ハケ調整。	外面:明暗从 内面:明暗从	底部半周充満	
63	甕	口径:5.5 腹径:5.0 高さ:2.0	外面:ハケ調整後ナメ調整。 内面:ナメトナ調整。	外面:にごい擦 内面:にごい擦	体部1/3	
64	甕	口径:13.0 腹径:13.0 高さ:3.0 高さ:3.0	外壁:体部埋立成形、腰窓、口縁部叩き成形後擦ナメ調整 内面:体部ナメ調整、腰窓、口縁部擦ナメ調整。	外壁:にごい擦 内面:にごい擦	口縁部1/3	

第18表 1区第3面出土土器観察表(2)

番号	形 様	底 面(cm)	調 査 方 法	色 調	残存率	備 注
65	甌	口径: 5.3 底径: 11.7 高さ: 12.6	外面: 陶器カビ有り、体部叩き成形核ハリ調整。 内面: 陶器カビ有り、体部ハリ調整。	外面: に赤い緑 内面: に赤い緑	底部1/2 体部中段焼付	
66	甌	口径: 11.0 底径: 11.0 高さ:	外面: 成形ユリオサ有り、体部叩き成形。 内面: 体部ハリナギ調整。	外面: に赤い緑 内面: に赤い緑	底部ほぼ完全	
67	甌	口径: 11.0 底径: 11.0 高さ:	外面: 底部横ナギ調整、体部ハリナギ有り。 内面: 底部ハリオサ有り、体部ナギ調整。	外面: に赤い緑 内面: に赤い緑	底部1/3	
68	甌	口径: 11.3 底径: 11.3 高さ:	外面: 底部ハリオサ有り、体部ハリ調整。 内面: 底部ハリナギ調整。	外面: に赤い緑 内面: に赤い緑	底部完	

(2)溝

SD09

検出状況 西地区の西端部で検出した。北西—南東方向にのびる溝で、北西側は調査区内で収束し、南東側は調査区外までのびる。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模 検出した長さは3.83mである。断面はU字形をなし、検出面における幅は22~30cmを測る。検出面からの深さは5cmである。底部の標高は、北西側・南東側とも同じで、7.60mである。

埋土 1層からなり、自然堆積と考えられるシルト質細砂・中砂（暗灰）が堆積していた。

出土遺物 全く出土していない。

SD10

検出状況 西地区の西端部で検出した。SD09の東側に位置し、SD09とはほぼ平行する溝である。北西—南東方向にのびる溝で、北西側はY字形に分岐している。北西側の西側の溝と南東側は調査区外までのび、北西側の東側の溝は調査区内で収束している。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模 検出した長さは12.3mである。断面形はU字形を呈し、検出面における幅は38~52cmを測る。検出面からの深さは9cmである。底部の標高は、北西側・南東側ともに7.62mと同じである。

埋土 1層からなり、自然堆積と考えられるシルト質細砂・中砂（暗灰）が堆積していた。

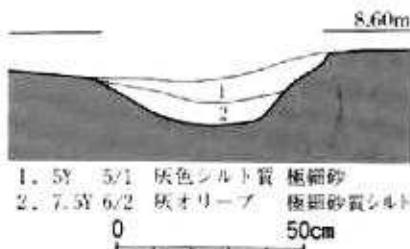
出土遺物 全く出土していない。

SD11

検出状況 調査区の東側で検出された。東側にはSD12があり、ほぼ同じ方向である。

北側から南側に向いた溝である。調査区の北側ではもう一本の溝が合流している。

形状・規模 断面の形状はU字形を呈している。検出された長さは12.3m、幅は84cm~1.43m、平均幅



1. 5y-5/1 灰色シルト質 極細砂

2. 7.5y-6/2 黄オリーブ 極細砂質シルト

0 50cm

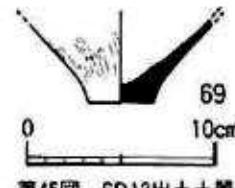
第44図 SD11

は1.14mで、深さは23cm、底部での幅は25~43cmを測る。

- 埋土** 埋土はいずれもレンズ状に堆積している。調査区北側で合流する細い溝は灰色を中心としたシルト質極細砂~極細砂質シルトの比較的細かい粒子の層が堆積している。しかし太い方の溝は、上流側の断面を観察すると、灰色を中心とした細かいシルト系の層と褐色系の粗い層が、交互に堆積していることが明らかである。さらに下流側の断面を観察すると、最下層が極細砂質シルトで細かい粒子の層が堆積しているが、それより上層は粗砂~細砂で、粗い砂が堆積している。
- 出土遺物** 弥生時代後期の壺の口縁部と体部片が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

SD12

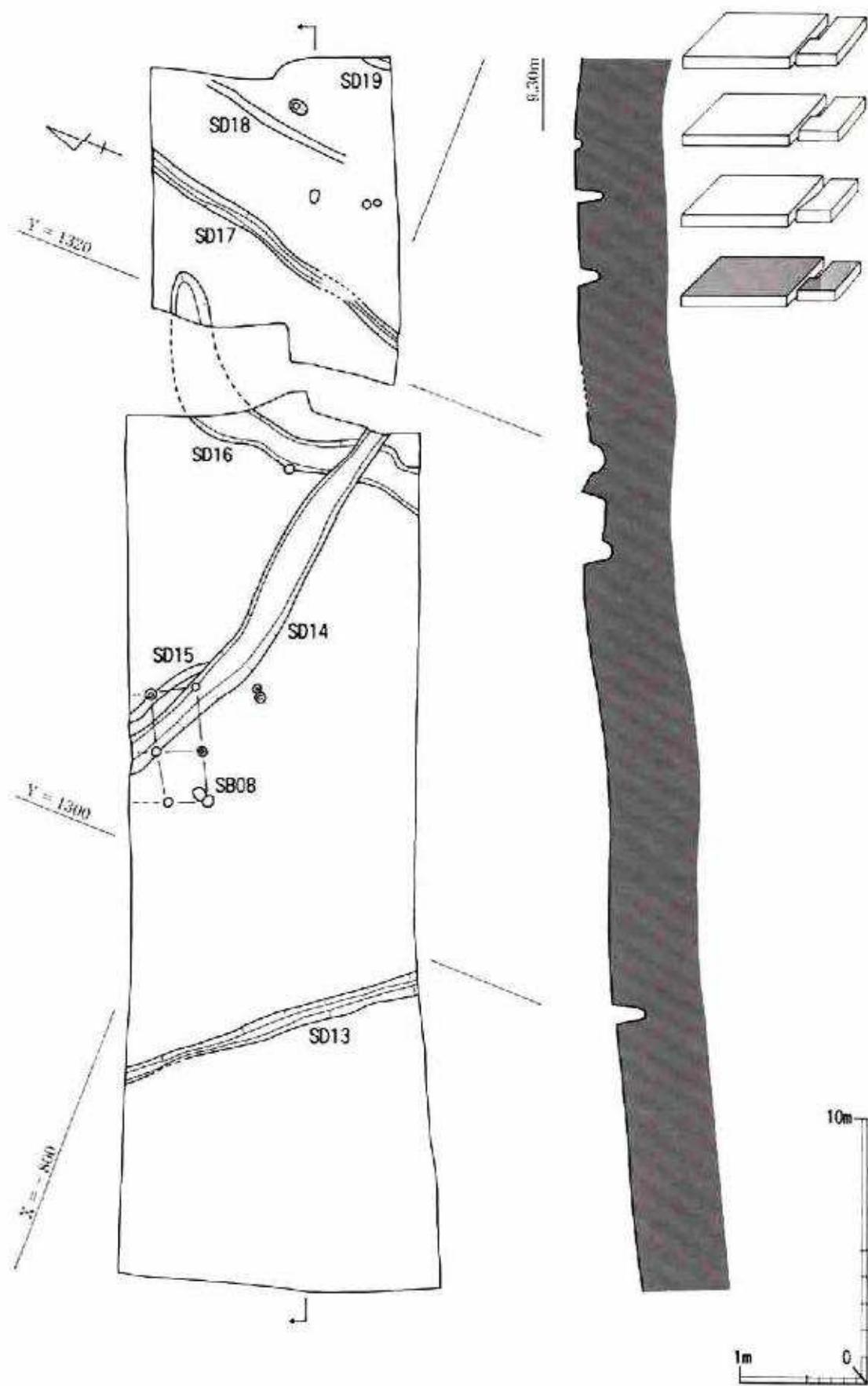
- 検出状況** 調査区の東側で検出された。西側にはSD11があり、ほぼ同じ方向である。
- 形状・規模** 南側から北側に向いた溝である。調査区の制限により全体の状態は不明である。
- 断面の形状はU字形を呈している。検出された長さは2.80m、幅は38cm~75cm、平均幅は56cmで、深さは8cmと浅い。
- 埋土** 埋土は灰オリーブ色極細砂の1層の堆積のみ確認できた。
- 出土遺物** 弥生時代後期の壺の底部片が出土している。外面をハラミガキによって仕上げていることから壺に分類したが、鉢の可能性も否定しきれない。



第45図 SD12出土土器

第19表 SD12出土土器観察表

番号	器種	法 番(cm)	調 整・技 法	色 調	残存率	備考
印	壺	口径: 実径:3.6 周径: 3.5 腹径:	外面:底延長ナガ調整。体部ハラミガキ。 内面:ハケ調整後ナガ調整。	外面:淡赤橙 内面:淡赤橙	底部生存	

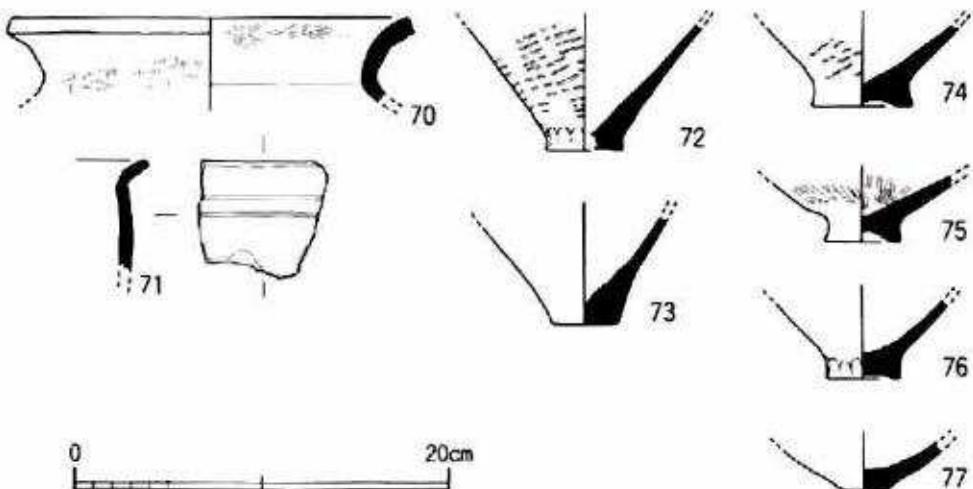


第46図 1区第4面

5. 第4面の遺構と遺物

(1) 第4面出土遺物

- 出土遺物** 弥生時代前期と後期の土器が出土している。
- 前期** 壺の口縁部片1点(71)が出土している。いわゆる如意形を呈する口縁部で、頸部に2条のヘラ彫沈線紋が施されている。
- 後期** 壺・壺・鉢が出土している。
- 壺** 77の1個体のみである。底部はわずかに平底を呈する。鉢に分類される可能性も否定できない。
- 壺** 70は口縁部から頸部まで残存するものである。口縁部の成形は丁寧とはいえず、外面に粘土を縱方向に薄く引き延ばして成形した痕が顕著に認められる。(図版67)
- 72~74は底部から体部にかけて残存するものである。74は底部輪台技法によって成形されている。
- 鉢** 75・76の2個体が出土している。2個体とも外下方につまみ出すようなユビオサエにより成形されている。



第47図 1区第4面出土土器

第20表 1区第4面出土土器観察表(1)

番号	器種	法 異 (cm)	調 査 上 特 徴	外 観	残存率	備考
70	壺	口径: 12.1 底径: 117.7 高さ: 5.6 厚さ:	外面: 頚部ハケ調整、口縁部ハケ調整後横ナリ調整。 内面: 頚部ハケ調整、口縁部ハケ調整後横ナリ調整。	外面: にぶい擦 内面: にぶい擦	口縁部1/4	
71	壺	口径: 12.1 底径: 117.7 高さ: 5.6 厚さ:	外面: 体部ナリ調整、口縁部スジオサエ。 内面: 体部横減の為不明、口縁部ユビオサエ。	外面: にぶい黄擦 内面: 橙	口縁部着子	
72	壺	口径: 14.2 底径: 11.1 高さ: 4.2 厚さ:	外面: 底部ユビオサエ、体部叩き成形。 内面: 底部ハリナリ調整、体部ナリ調整。	外面: 淡赤擦 内面: 淡赤擦	底部1/4	
73	壺	口径: 12.2 底径: 11.2 高さ: 5.2 厚さ:	外面: ハリナリ調整。 内面: 底部オサエナリ、体部ナリ調整。	外面: 橙 内面: 橙	底部完全	
74	壺	口径: 15.4 底径: 11.1 高さ: 4.4 厚さ:	外面: 底部ユビオサエ、体部叩き成形後ナリ調整。 内面: ハリナリ調整。	外面: にぶい擦 内面: にぶい擦	底部1/4	
75	鉢	口径: 14.1 底径: 12.5 高さ: 4.4 厚さ:	外面: 頚部ユビオサエ、体部ハリナリ。 内面: 底部ユビオサエ、体部ハリナリ。	外面: にぶい擦 内面: にぶい擦	底部完全	
76	鉢	口径: 14.1 底径: 12.5 高さ: 4.4 厚さ:	外面: 頚部ユビオサエ、体部ハリナリ。	外面: にぶい擦 内面: にぶい擦		

第21表 1区第4面出土土器観察表(2)

番号	器種	直 基(cm)	調 檢 方 法	色 調	残 存 率	備 考
26	鉢	口径: 直径14.0 脚径: 直径13.3 腹径:	外面: 脚部エゴサセ、体足サイズ調整。 内面: サイズ調整。	外面: に赤い模 底部: 2		
27	壺	口径: 直径12.1 脚径: 直径12.2 腹径:	外面: 脚部エゴサセ、体足形状の為不明。 内面: 容量の為不明。	外面: 明黄褐 内面: 棕	底部充合	

(2) 挖立柱建物跡

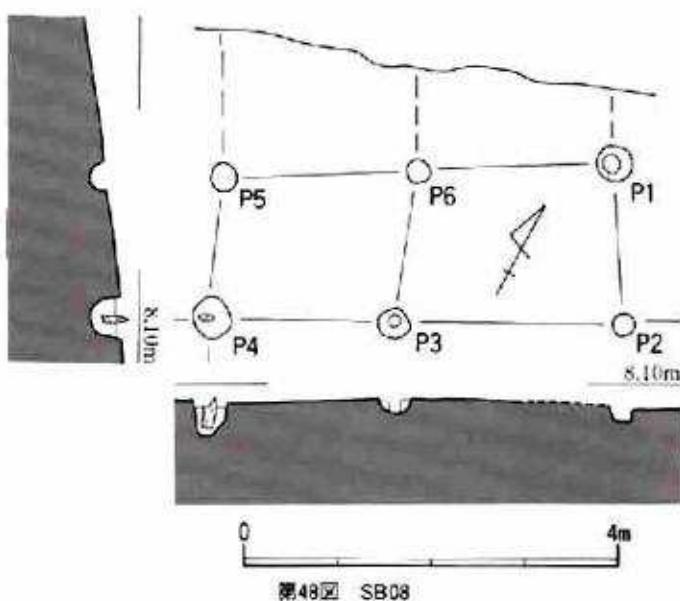
SB08

検出状況 西地区のはば中央部北側で検出した。建物跡の一部を検出したにとどまり、他は調査区の北側へのびている。SD14・15と切り合い関係にあり、両造構を切っている。

形状・規模 南柱行方向を基準とすると、N=62°=Eを指向する。検出範囲が一部に限られるため、乗行方向・航行方向を明確にできない。東西方向で2間、南北方向で1間もしくは1間+α残存する。東西方向で4.45mを測り、柱穴間の距離はP2-P3間で2.45m、P3-P4間で2.00mである。南北方向で3m残存し、柱穴間(P3-P4)の距離は1.50mである。

柱穴 円形の掘り方からなり、径は25~40cm、検出面からの深さは15~35cmを測る。P4においては、柱そのものが遺存していた。

出土遺物 掘り方内から、土器片が出土しているが時期・器種を特定できるものは認められない。当遺構検出面からは弥生時代前期と後期の土器が出土していることを考慮に入れ、かつ土器の胎土から判断して弥生時代後期の土器片と考えられる。



第48図 SB08

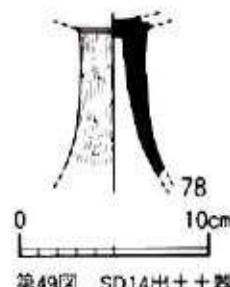
(3) 溝

SD13

検出状況	調査区の西側で検出された。調査区の中央から東側には溝、掘立柱建物があるが、このSD13付近は周囲に遺構が認められない。
形状・規模	北西から南東に向いた直線的な溝である。断面の形状はU字形を呈する。規模は、検出された長さ11.87m、幅40cm~82cm、平均幅61cmで、深さは30cmを測る。
埋土	埋土は下層が暗灰色細砂混じり極細砂で、上層が暗灰色粗砂~細砂で、上層が下層より構成する粒子が粗い。
出土遺物	遺物は出土しなかった。

SD14

検出状況	調査区のはば中央で検出された。SD15・SD16を切っており、SB08に切られている。SD16はほぼ直交しているのに対し、SD15は近い方向を向き、接するようである。このSD15とSD14と同時に存在した可能性もある。
形状・規模	東から西に向き、やや彎曲するもののほぼ直線的な溝である。断面の形状は全体的にはU字形を呈するが、溝底の西側にはさらに1段溝状に窪んでいる。検出された長さは15.40m、幅は82cm~1.54m、平均幅は1.18mで、深さは深いところでも30cmで、浅いところでは25cmである。
埋土	埋土は上流側が暗青灰色細砂・粗砂混じりのシルト質極細砂で、下流側が暗青灰色細砂・粗砂であり、下流側の方が層の粒子が粗い。
出土遺物	高壙の脚部1個体が出土している。脚部と体部の境に2条の擬凹線が施されている。



第49図 SD14出土器

第22表 SD14出土土器観察表

番号	器種	法 量/cm	調 査 一 括 法	外 面	内 面	残存率	備 考
78	壺	口径: 35.0 腹径: 35.0 底径: 35.0	外面: 壁部いわき 内面: 壁部上半調査 体部内底の為不明	外側: 横 内側: 横	脚部2/3		

SD15

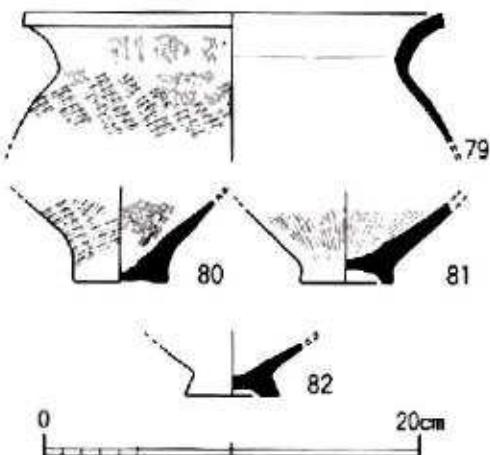
検出状況	調査区のはば中央の北側で検出された。SD14に切られているが、同時に存在した可能性もある。
形状・規模	ほぼ東西方向に向き、やや彎曲するもののほぼ直線的な溝である。溝底の標高は、検出された部分では両端ともほぼ同じで、東西との方向に向かっているかは明らかにできなかった。断面の形状はU字形を呈する。規模は検出された長さが3.49m、幅が23cm~30cm、平均幅が26cmで、深さは深いところでも5cmと浅い。
埋土	灰色粗砂混じり細砂の1層の堆積のみ確認できた。
出土遺物	遺物は出土しなかった。

SD16

- 検出状況** 調査区のやや東寄りで検出された。SD14に切られており、ほぼ直角に交わっている。東側に存在するSD17・SD18・SD19と同じ方向を向いているが、北側で大きく彎曲する。
- 形状・規模** 北から南方に向くが、北側で大きく彎曲している。断面の形状は底が平な台形状を呈する。規模は検出された長さが13.60m、幅が1.02m~1.60m、平均幅が1.31mで、深さは深いところでも10cmと浅い。
- 埋土** 灰色粗砂の1層の堆積のみ確認できた。
- 出土遺物** 遺物は出土しなかった。

SD17

- 検出状況** 調査区の東寄りで検出された。SD18・SD19と同じ方向を向いており、SD14とは直交する方向である。
- 形状・規模** 北から南方に向くほぼ直線的な溝である。断面の形状はU字形を呈する。規模は検出された長さが11.05m、幅が42cm~63cm、平均幅が53cmで、深さは深いところでも16cmと浅い。
- 埋土** 埋土は黒色細砂の1層の堆積のみ確認できた。
- 出土遺物** 壺と鉢が2個体ずつ出土している。
- 壺** 79は比較的大型の壺である。80は底部から体部にかけて残存するものである。底部内面には、ハラ状工具により胎土を搔き出して成形した痕が顕著に認められる。
- 鉢** 2個体とも底部が輪高台状を呈する。



第50図 SD17出土土器

第23表 SD17出土土器観察表

番号	器種	外径(cm)	調査記述	色調	残存率	備考
79	壺	口径:22.0 底径: 高径:18.5 脚径:	外面:体部叩き成形。頭部叩き成形後ハラ調整。口縁部オモ萬 整。 内面:体部ハラ調整ナマ調整。	外面:橙 内面:橙	口縫部1/6	
80	壺	口径: 底径: 高径:	外面:底部オモ萬ナマ調整。体部叩き成形 内面:底部ハラ調整後ナマ調整。	外面:灰赤 内面:橙	底部完存	
81	鉢	口徑: 底径: 脚径:	外面:底部オモ萬ナマ調整。体部ハラナマ 内面:ハラナマ	外面:紅褐色 内面:紅褐色	底部完存	
82	鉢	口径: 脚径: 脚径:	外面:底部オモ萬ナマ調整。体部ナマ調整。 内面:ナマ調整。	外面:橙 内面:紅褐色	底部完存	

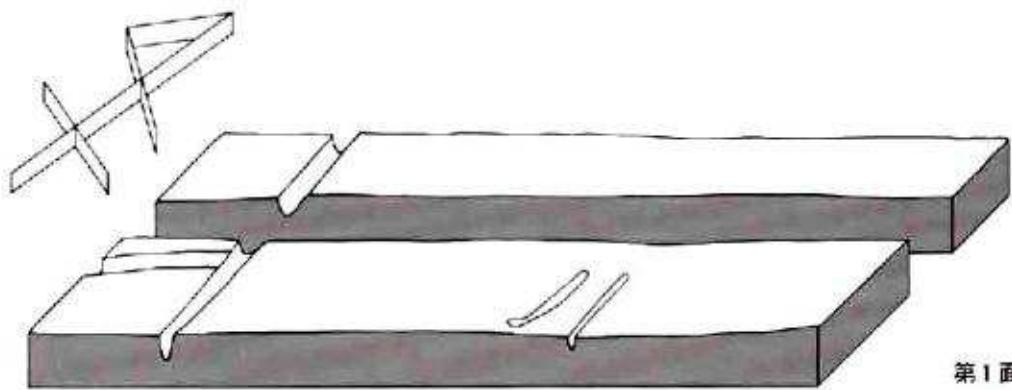
SD18

検出状況	調査区の東側で検出された。SD17・SD19と同じ方向を向いており、SD14とは直交する方向である。
形状・規模	北から南方向に向きは直線的な溝である。断面の形状はU字形を呈する。規模は、検出された長さ6.05m、幅20cm~28cm、平均幅29cmを測り、深さは深いところでも7cmと浅い。
埋土	黒色中砂~細砂の1層の堆積のみ確認できた。
出土遺物	遺物は出土しなかった。

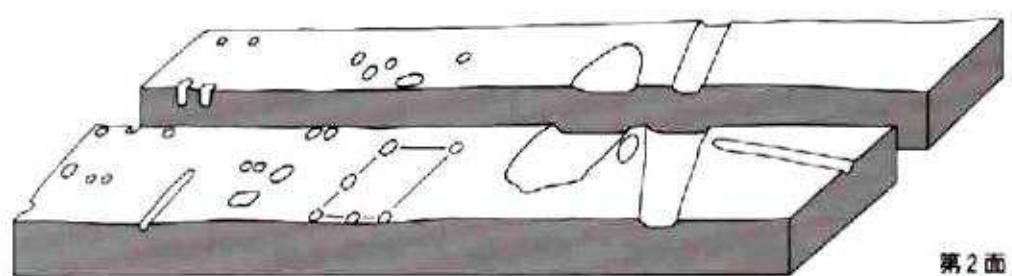
SD19

検出状況	調査区の南東端で検出された。SD17・SD18と同じ方向を向いており、SD14とは直交する方向である。
形状・規模	検出された部分では南から北方向に向くように見えるが、調査区の制限から全体の形状は不明である。断面の形状はU字形を呈する。規模は、検出された長さ1.15m、幅20cm~26cm、平均幅23cmを測り、深さは深いところでも6cmと浅い。
埋土	オリーブ黒色細砂~極細砂の1層の堆積のみ確認できた。
出土遺物	遺物は出土しなかった。

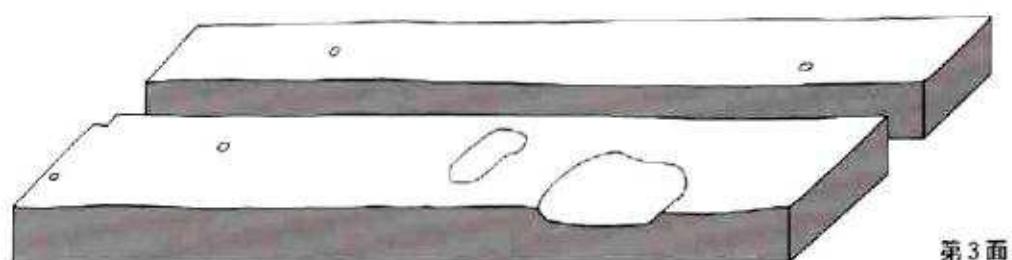
第2節 2区の遺構と遺物



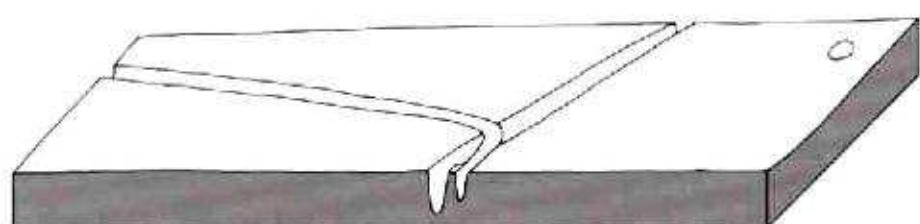
第1面



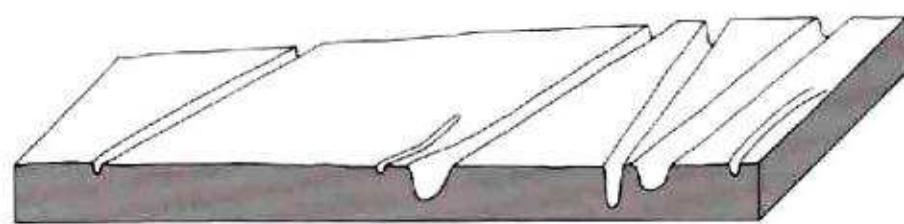
第2面



第3面



第5面



第6面



第51図 2区の遺構

第2節 2区の遺構と遺物

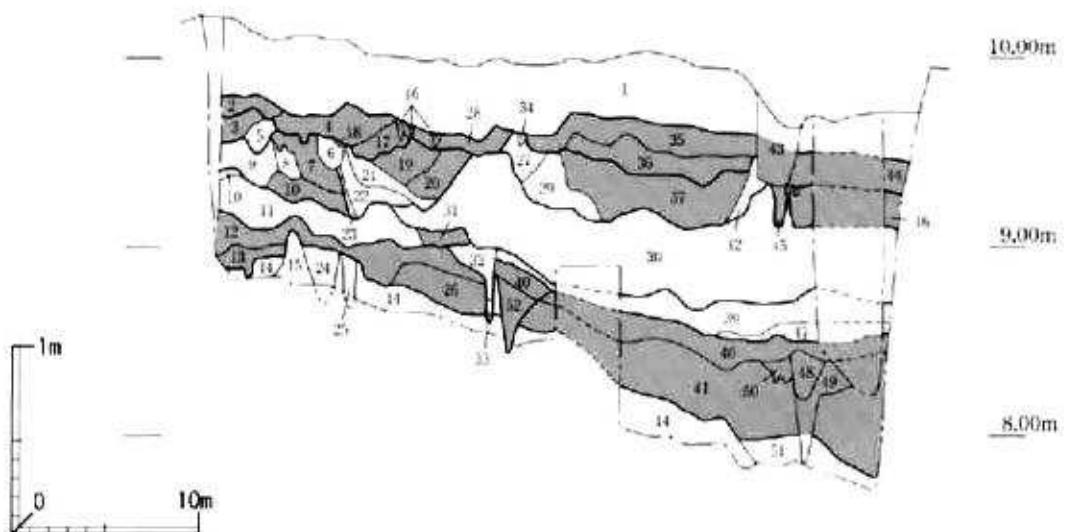
1. 概要

(1) 概略

- 位置** 1区の東側、3区の西側に位置する調査区である。1区とは農道を境とし、3区とはサイフォンを境とする。
- 旧淡路鉄道** 旧淡路鉄道建設に伴う影響は、1区同様少ない。第1面の北側が全面削平を受けている。この他、淡路鉄道に伴う側溝が調査区の中央部を東西に掘削されており、第3面までその影響が認められる。
- 遺構の検出** 第1面から第6面の6面にわたって遺構を検出した。遺構面が下層になるほど東側から西側への傾斜が顕著となっている。
- 第1面** 検出した遺構は溝に限られる。奈良時代～中世にかけての溝を検出した。
- 第2面** 掘立柱建物跡3棟・溝6条・土壙4基を検出した。これらの遺構は、出土遺物から判断して、古墳時代から中世にかけての時期が考えられる。
- 第3面** 上壙2基と柱穴数穴を検出したにとどまる。柱穴についてはいくつかまとまって検出されたが、建物を復元することはできない。
- 第4面** 調査区南側の断面の上層観察において土壤層を確認し、1区で検出した第3面ないし第4面に対応するのではないかと考えられたことから、この層の上面および下面を面的に調査した。しかし、遺構面としての成果は得られなかった。
- 第5面** 上壙1基と溝2条を検出した。2条の溝からは比較的まとまった量の土器が出土している。なかでもSD29出土の壺(200)は、河内地方から搬入されたと判る弥生時代中期の土器であるが、後期の土器に混ざって出土している。
- 第6面** 住居跡1棟(SH01)と溝4条を検出した。
- SH01については、次節で報告する3区第7面の南西隅で検出した住居跡に対応するものと考えられる。したがて、当遺構については次節で報告することにする。



第52図 2区の調査



第53図 2区土層断面(南面)

第24表 2区土層注記

番号	色調	上色番号	砂粒の大きさ	備考
1	規耕作土			
2	にぶい褐色	7.5YR5/4	粗砂～細砂	
3	褐灰色	7.5YR6/1	粗砂～細砂	
4	褐色	10YR4/6	シルト質極細砂	細砂混じり
5	灰白色	10YR7/1	粗砂	
6	褐灰色	10YR5/1	粗砂	中礫～大礫含む
7	褐灰色	7.5YR5/1	粗砂	
8	にぶい黄褐色	10YR5/4	細砂	極細砂混じり
9	黄褐色	10YR5/6	粗砂～細砂	中礫混じり
10	黄褐色	2.5Y4/4	粗砂～細砂	
11	浅黄色	2.5Y7/3	粗砂～細砂	弥生土器包含
12	黒褐色	10YR3/2	細砂～シルト質極細砂	
13	黒色	2.5Y2/1	極細砂	細砂混じり
14	灰白色	2.5Y7/1	極細砂	
15	明黄褐色	10YR6/6	粗砂～小礫	
16	明赤灰色	7.5R4/1	粗砂～極細砂	
17	にぶい黄褐色	10YR5/4	細砂	粗砂混じり
18	褐灰色	7.5YR5/1	細砂	中礫混じり
19	灰黄褐色	10YR5/2	細砂	
20	黄褐色	10YR5/6	シルト質極細砂	細砂混じり
21	黄褐色	2.5Y5/4	極細砂～シルト質極細砂	
22	黄灰色	2.5Y4/1	粗砂～細砂	灰、弥生土器包含
23	にぶい黄色	2.5Y6/4	細砂	
24	灰色	10Y4/1	細砂～極細砂	
25	黒褐色	7.5YR3/1	シルト質極細砂	粗砂混じり
26	赤灰色	2.5YR4/1	シルト質極細砂	極細砂混じり
27	明褐灰色	7.5YR7/1	粗砂	中礫～大礫混じり
28	4と同じ			
29	褐色	10YR4/1	粗砂～中礫	
30	にぶい黄褐色	10YR6/4	粗砂～極細砂	中礫含む
31	灰黄褐色	10YR5/2	粗砂	
32	明黄褐色	10YR6/6	粗砂	
33	明褐灰色	7.5YR7/1	極細砂質シルト	粗砂混じり、土器多い
34	4と同じ			
35	にぶい黄色	2.5Y6/4	細砂	
36	にぶい黄褐色	10YR5/4	細砂	
37	褐灰色	7.5YR4/1	粗砂～極細砂	
38	黄灰色	2.5Y4/1	極細砂～細砂	粗砂混じり
39	灰黄褐色	10YR6/2	極細砂～粗砂	
40	黒褐色	10YR3/2	極細砂質シルト	粗砂混じり
41	黒褐色	2.5Y3/1	細砂～極細砂	
42	灰黄色	2.5Y6/2	細砂～極細砂	
43	攪乱			
44	黄褐色	2.5Y5/3	粗砂～細砂	小礫混じり
45	にぶい黄褐色	10YR5/3	細砂	粗砂混じり
46	灰赤色	2.5YR4/2	粗砂～極細砂	粗砂混じり
47	灰白色	10Y8/2	極細砂	
48	暗灰色	N2/	極細砂質シルト	細砂混じり
49	暗緑灰色	10GY3/1	シルト	
50	暗オリーブ灰色	2.5GY4/1	極細砂質シルト	細砂混じり
51	灰色	5Y5/1	シルト質極細砂	
52	暗緑灰色	10GY3/1	極細砂質シルト	粗砂混じり

(2) 基本層序と遺構の検出

2区は下内臓遺跡の所在する扇状地の中ではやや西側に位置しており、土層の堆積状況でも西側が下がる傾向にある。特に下層に下がるほどその傾向は強く、上層では下層の傾斜を平坦化させるような堆積を示している。

上層の堆積は、第53図および第24表に示したように、52層からなるが、基本的な層序としては、上層から順にⅠ層からⅦ層の7つに分けることができる。これらの7つの層はその上面に遺構面をもつが、Ⅰ層は現地表面、Ⅱ層は第1面、Ⅲ層は第2面、Ⅳ層は第3面、Ⅴ層は第4面、Ⅵ層は第5面、Ⅶ層は第6面にそれぞれ対応する。

Ⅰ層

この層は、今回の調査対象外と判断したため、機械により掘削した。

当遺跡の全てを覆う調査時の地表面を構成する層であり、水田及び壇地として利用されている。調査区の中央では旧淡路鉄道により擾乱されているが、この構造物をも含んだ層である。

表土・床土の下はすぐに第1面がある。

Ⅱ層

Ⅱ層の上面が第1面である。

上層との間に中世（後半）の遺物を挟んでおり、溝が検出されていることから水田として利用されていた層であると判る。

Ⅲ層

Ⅲ層の上面が第2面である。

上層との間に古墳時代から中世（前半）の遺物を挟んでおり、獨立柱建物跡などが検出されていることから、当該期には生活面として利用されていた層であるといえる。

このⅢ層は、中央のやや西側付近の窪みに堆積した層（19層～21層）が最も砂粒が細かく、東側、西側は粗砂～極細砂を中心とした砂粒の粗い層が堆積している。特に、中央付近では中～大礫も含んでいる。

Ⅳ層

Ⅳ層の上面が第3面である。

上層との間に弥生時代後期の遺物を挟んでおり、柱穴、土壤が検出されている。

Ⅳ層は東端と中央から西側の大きく2つにわけることができる。両者とも砂粒は粗いが、前者は上層の堆積が複雑であるのに対し、後者は大量の砂が一度に堆積している。前後関係は、後者の中央から西側がまず堆積し、下層でみられた地形の傾斜を埋め、その後前者の砂が堆積している。

Ⅴ層

Ⅴ層の上面が第4面である。

上層との間に弥生時代後期の遺物を挟んでいるが、明確な遺構は検出されなかった。層の堆積は中央部では堆積が確認できず、東側と西側では細砂から極細砂が堆積している。

Ⅵ層

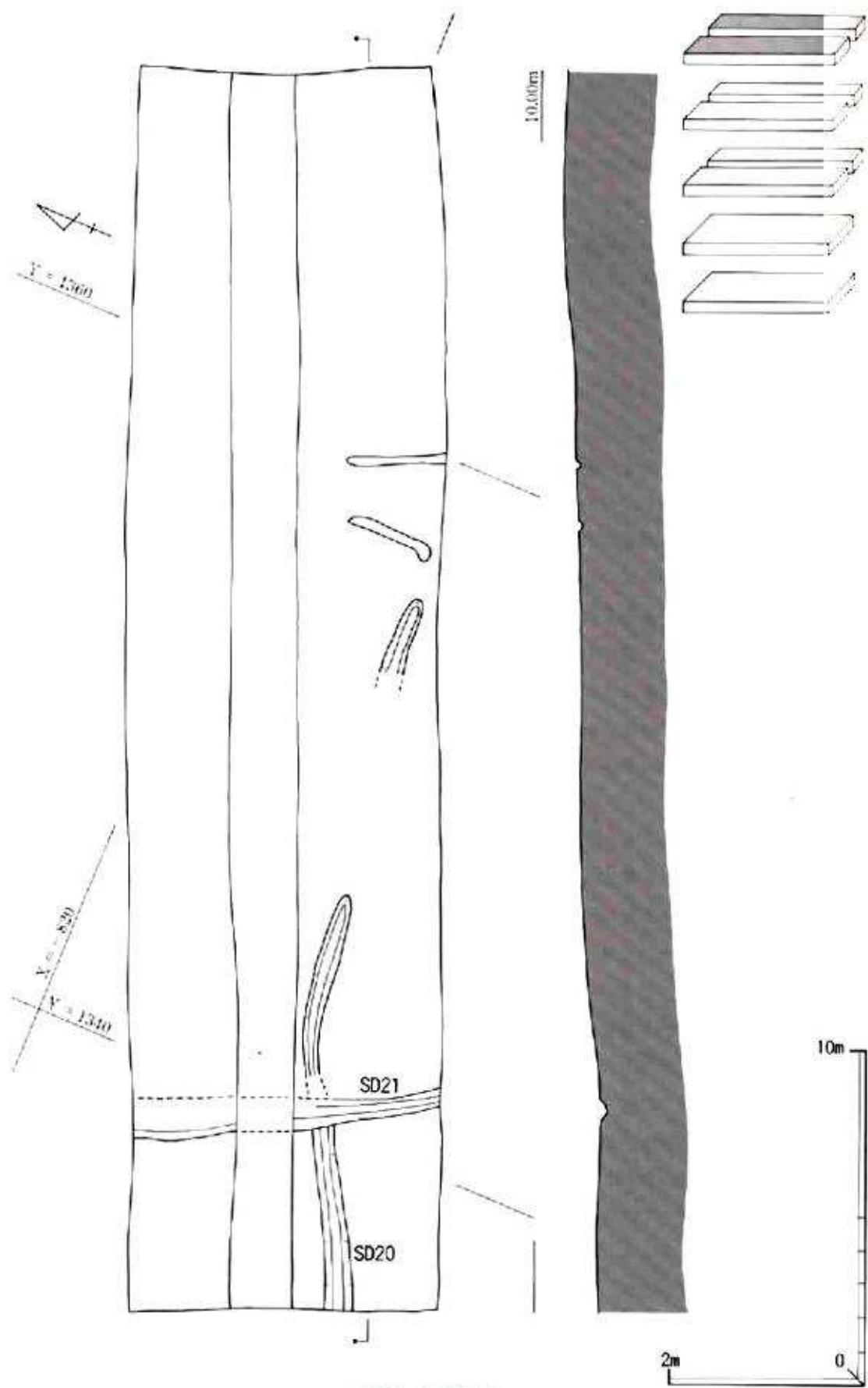
Ⅵ層の上面が第5面である。

上層との間に弥生時代後期の遺物を挟んでおり、溝が検出された。層の堆積は細砂から極細砂を中心に大きく2回の堆積が観察できる。

Ⅶ層

Ⅶ層の上面が第6面である。

上層との間に弥生時代中期～後期初頭の遺物を挟んでおり、溝が検出された。層の堆積は14層の極細砂が広範囲で認められ、西端の低いところにはシルト質極細砂が堆積する。

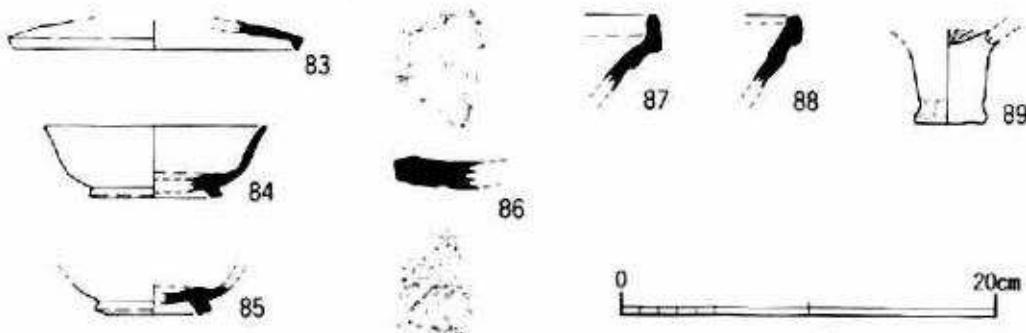


第54図 2区第1面

2. 第1面の遺構と遺物

(1) 第1面出土遺物

- 出土遺物** 包含層から出土した遺物は、いずれも遺存状況は悪く、完形に復元できるものはわずかで、ほとんどが小片で出土している。奈良時代と中世の土器が出土している。
- 奈良時代** 須恵器と土師器が出土している。
- 須恵器** 坂B蓋と坂Bが出土している。蓋の83は全体に平らで縁部は下方に折り返している。坂Bはいずれも高台が厚く、外方に大きく開いている。ほぼ完形に復元できた84を見ると、体部は上方に緩やかに弯曲し、外方にやや内側しながら延び、口縁端部で外反して開いている。85については、高台しか残存していないが、高台の形状は84とはほぼ同じで、若干85の方が底径が小さく、高台が厚いように観察できる。
- 土師器** 破片で多くの土師器が出土しているが、いずれも細片で、図示できなかった。唯一、製塙土器が1点図示できた。
- 製塙土器は脚部のみ残存しており、全体の形状は明らかではない。脚部は、下方がやや細くなった中実で、底径3.5cm、高さ4.2cmを測る。基本的にはナデにより調整されているが、端部付近は指押さえの痕跡が確認できる。
- その他** 平瓦が出土している。破片であるため全体の形状は明かにできないが、外面が繩目、内面が布目の痕跡が残っている。焼成は須恵質であり、硬い。
- 中世** 須恵器のみ図示できた。
- 須恵器** 提鉢のみ図示できた。いずれも端部のみの出土であり、かつ遺存状況が悪いので、口径が復元できず、断面のみ図示した。
- 87と88は形態が異なっている。87は端部が上方に大きく拡張され、外面には平らな面が出来上がっているのに対し、88は全体に丸く仕上げられており、外面に平らな面を持たない。焼成は87の方が良好で、灰色を呈しているのに対し、88は焼成が悪いためか、灰白色を呈している。
- その他** 小片ではあるが、白磁・青磁の碗が出土している。



第55図 2区第1面出土土器

第25表 2区第1面出土土器観察表

報告 番号	種類	器種	法 量(cm)					色 調	底石状況	測 定	形態の特徴	備考
			口径	基高	底径	縦径	最大径					
83	埴輪器	环基	(15.5)	—	—	—	—	—	内:灰 外:灰	口縁部1/5 底部1/4	鉛軸ナギ	全体に偏平。口縁部端部は断 面V字形で下方へ屈曲。
84	埴輪器	环身	(11.7)	(2.8)	(9.4)	—	—	32	内:灰 外:灰	口縁部1/4 底部1/4	鉛軸ナギ	体盤は扁く内側し、外方へ開 く。底盤は厚く、両面は開く。
85	埴輪器	环身	—	—	(5.0)	—	—	—	内:灰 外:灰	底盤1/4	鉛軸ナギ	底盤は厚く、外方へ開く。
86	瓦	平瓦	—	—	—	—	—	—	内:灰白 外:灰白	透光	外面縁目タキ。内面素目瓦。	端部内面に縁を持つ。
87	埴輪器	把杯	—	—	—	—	—	—	内:灰 外:灰	口縁部1/10	鉛軸ナギ	口縁部端部は上方へ大きく膨 張する。
88	埴輪器	型杯	—	—	—	—	—	—	内:灰白 外:灰白	口縁部1/8	鉛軸ナギ	口縁部は丸く、外側にわずかに膨 張し、口縁部端部に横線ある。
89	土器	質地 土器	—	—	3.5	—	—	—	内:灰 外:灰	觸部のみ	ナギ。觸部端部付近は微細さ 上のすばらしさ。口縁部の觸部。 体部は大きくな。	—

(2) 溝

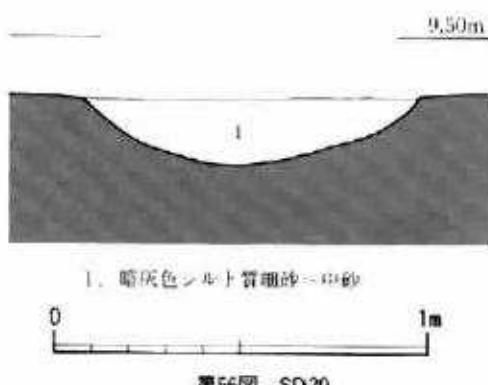
SD 20

検出状況 2区の西南部で検出した。西から東へわずかに屈曲してのびる溝である。西側は調査区外までのび、東側は調査区内で収束している。SD21と切り合い関係にあり、SD21に切られている。

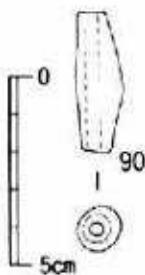
形状・規模 検出した長さは12.6mである。断面U字形をなし、検出面における幅は38cm~80cmを測る。検出面からの深さは15cmである。底部の標高は西側で9.16m、東側で9.45mと西側へ傾斜している。

埋土 1層からなり、暗灰色シルト質細砂~中砂が堆積していた。

出土遺物 土器は出土しなかったが、完存する土鍤1点が出土している。時期は限定できない。土鍤は、全長3.7cm、径1.2cm、穴径4mmで、中央部の一方が彫られた歪な形である。穴は、上下とも同じ径であり、真っ直ぐ通っている。



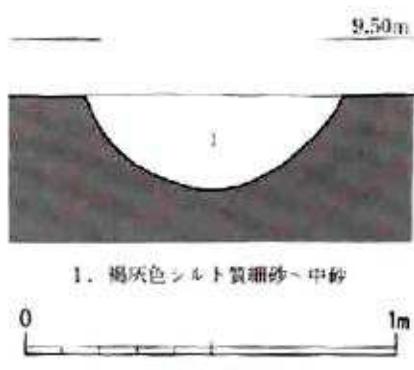
第56図 SD20



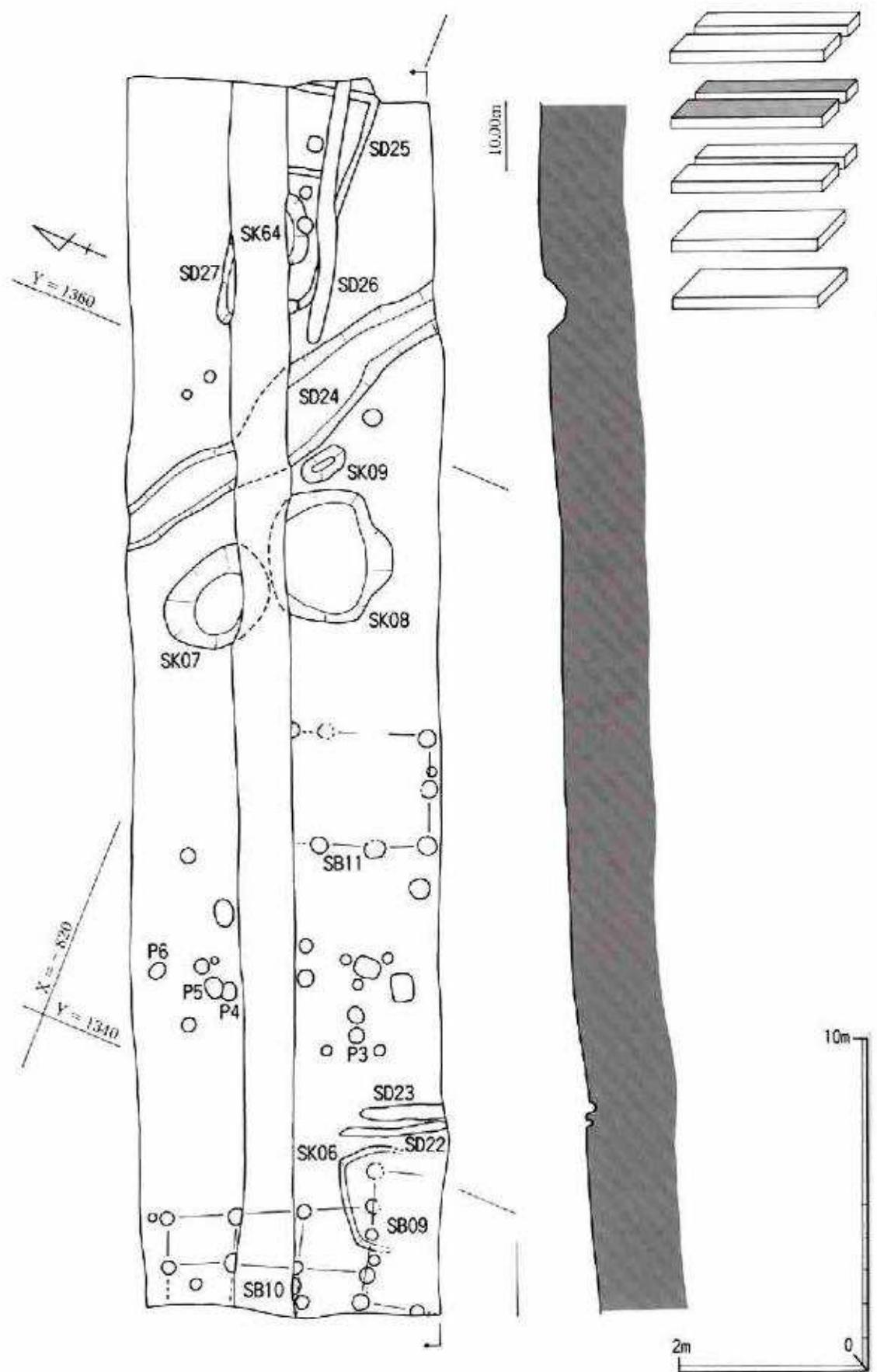
第57図 土鍤

SD21

- 検出状況** 西部で検出した。北から南へは直線的にのびる溝である。両端とも調査区外までのびている。SD20と切り合い関係にあり、SD20を切っている。
- 形状・規模** 検出した長さは9.27mである。断面U字形をなし、検出面における幅は50cm~70cmを測る。検出面からの深さは9cmである。
- 埋土** 1層からなり、褐色灰色シルト質細砂~中砂が堆積していた。
- 出土遺物** 全く出土していない。



第58図 SD21



第59図 2区第2面

3. 第2面の遺構と遺物

(1) 第2面出土の遺物

出土土器

古墳時代前半の遺物と奈良時代および中世の遺物が出土している。

古墳時代

確認調査で出土した土器である。図化できたのは、壺と高杯の1個体ずつである。

壺

体部は球形を呈し、く字形に口縁部がとりつく。口縁部はほぼ直線的であるが、わずかに内湾傾向にあり、縁部を丸くおさめる。底部は残存しないが、丸底を呈するものと考えられる。

高杯

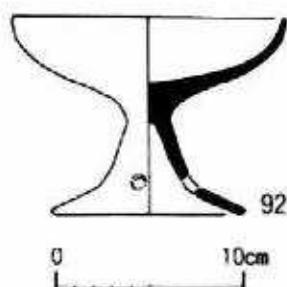
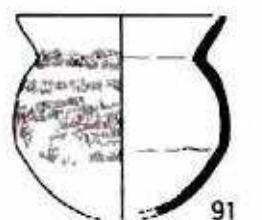
ほぼ完形に復元できる高杯である。杯部は浅い皿形を呈する。体部から口縁部にかけての屈曲は緩やかで、外面上に明確な棱は認められない。脚部には径9mmの円透が3箇所に穿たれている。

奈良時代

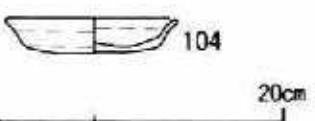
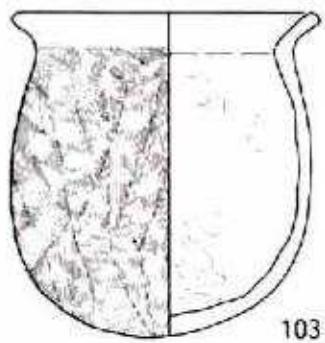
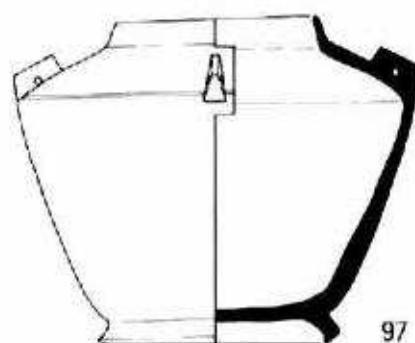
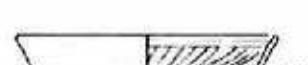
包含層から出土した遺物は、いずれも遺存状況は悪く、完形に復元できるものはわずかで、ほとんどが小片で出土している。

須恵器

壺B蓋と壺B、壺が出土している。



第60図 2区第2面出土土器(1)



第61図 2区第2面出土土器(2)

环B蓋は93の1点のみ図示できた。環Bは、高台が外方に開き底径の大きい94と高台が狭く直立し、底径の小さい95がある。

壺は高台のあるものと高台のないものに大別でき、高台のあるもののうち97は四耳壺である。98は高台がなく、底径が大きい。

土師器 壺A、壺、小皿がある。

壺Aは暗文が認められるもの(99~101)と認められないもの(102)がある。暗文は1段の放射状の暗文と底部の螺旋状暗文がある。暗文のあるものはさらに口径の大きいもの(99)と小さいもの(100・101)に分かれる。

第26表 2区第2面出土土器観察表(1)

番号	器種	法 量(cm)	調 査 方 法	色 調	残 存 状 況	備 考
91	壺	口径:11.1 基部: 底径:	外面:体部ハサモリナナモ調整、底部:口縁部横ナナモ調整。 内面:	外面:土手有 内面:	口縁部 体部1/3	
92	壺	口径:14.3 基部:12.3 底径:10.5 身径:9.7	外面:唇部の左右側。 内面:脚部横ナナモ調整、口部ナナモ調整	外面:橙 内面:橙	口縁部 脚部2/3	

第27表 2区第2面出土土器観察表(2)

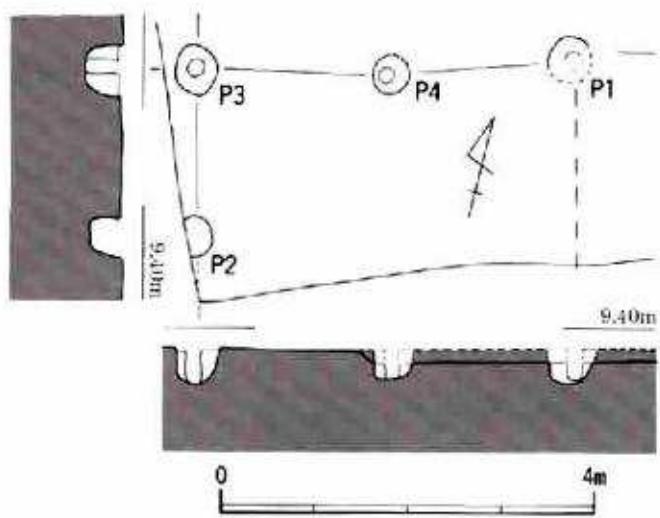
番号 番号	種 類	器 種	法 量(cm)					色 調	残 存 状 況	調 査	形態の特徴	備 考
			口径	基部	底径	側径	身丈					
93	埴輪器	环壺	15.8	—	—	—	—	(内) 橙 外) 橙	口縁部1/4 回転ナナモ		全体に偏平で、縫やかに内縫すら、縫部は断面三角形で屈曲。	
94	埴輪器	环身	—	—	9.8	—	—	(内) 橙青灰 外) 橙青灰	底部1/4 回転ナナモ		高台は外方に開き、縫部は若干内側に押り込まれる。	
95	埴輪器	环身	—	—	7.9	—	—	(内) 橙 外) 橙	底部1/6 回転ナナモ		高台は狭く、縫部は内側へ屈曲する。	
96	埴輪器	壺	—	—	(7.7)	—	—	内) 橙 外) 橙白	底部1/2 回転ナナモ、外側底部はヘリ切削調整。		底部は縫やかに屈曲、高台は外方に開き、縫部は内側へ屈曲。	
97	埴輪器	壺	10.6	(7.0)	(11.1)	—	(21.3)	(内) 橙 外) 橙	口縁部1/10 回転ナナモ、内側底部に傷あり、蓋を被せていた跡跡あり。		縫部は縫やかに動かし、把手は4方向、高台は大きく開く。	
98	埴輪器	壺	—	—	12.3	—	—	(内) 橙 外) 橙	底部1/10 回転ナナモ、底部外表面は指輪へカタツリ、底はナナモ。		底部は平で、体部へ屈曲し、体部は主外方に開く。	
99	土師器	环壺	(24.0)	3.7	15.2	—	—	15 (内) 橙 外) 橙	口コナモ、内面に放射状、螺旋状暗文、外側底部に木製支。底部1/1		体部は縫やかに屈曲し、口縁部で外方に屈曲、縫部は内側へ折り返す。	
100	土師器	环身	(15.5)	(2.6)	9.7	—	—	17 (内) 橙 外) 橙	口縁部1/4 回転ナナモ、外側底部は不定方向のハナケタナナモ		体部は縫やかに屈曲し、口縁部内面は縫い沈線が進む。	
101	土師器	环身	(13.6)	—	—	—	—	(内) 橙 外) 橙	口コナモ、内面に放射状の暗文。		体部は縫やかに屈曲し、口縁部で若干屈曲、縫部は内側へ折り返す。	
102	土師器	环身	—	—	18.8	—	—	内) 橙白 外) 橙白	底部1/4 回転ナナモ		底部は平で、体部へ屈曲し、体部は直線的に上半方へ開く。	
103	土師器	壺	(35.2)	(17.2)	(—)	(—)	(75.7)	(内) 橙 外) 橙	口縁部1/2 回転横ナナモ、体部外表面はハナケタナナモ、内面は指輪ナナモ。		底部は丸く、口縁部は厚く直線的に屈曲する。	
104	土師器	小皿	(8.9)	(1.8)	(1.4)	—	—	20 (内) 橙 外) 橙	口縁部1/6 回転ナナモ、外側底部に一方向のハナケタナナモ。		底部は平で、体部へ屈曲し、口縁部は外傾する。	

(2) 据立柱建物跡

SB09

検出状況

調査区の南西部で検出した。検出できたのは建物の一部に限られ、他は調査区外まで広がっている。このため、南側へ広がることは間違いない、西側へもひろがる可能性も考えられる。梁行・柱行方向ともにその規模を確定できない。SK06と切り合い関係にある。しかし、SK06検出後当建物の柱穴を確認しているものの、その前後関係は明確にできな



第62図 SB09

い。また、SB10とも平面的に重複するが、当遺構との前後関係も明確にできない。

形状・規模

全体を検出できていないため、梁行・桁行方向を明確にできないが、東西方向を桁行とし、この方向を基準とすると N-75°-E を指向する。桁行方向で 2 間残存し、梁行方向で 1 間 + a 残存する。

桁行方向の規模は、残存する P1-P3 の間で 4.05m を測る。梁行方向では、P3-P2 間で 1.80m を測る。

柱穴

円形の掘り方からなる。径は 35cm ~ 55cm、検出面からの深さは 30cm ~ 45cm を測る。

出土遺物

掘り方内から土師器片が出土しているが、器種・時期の特定はできない。

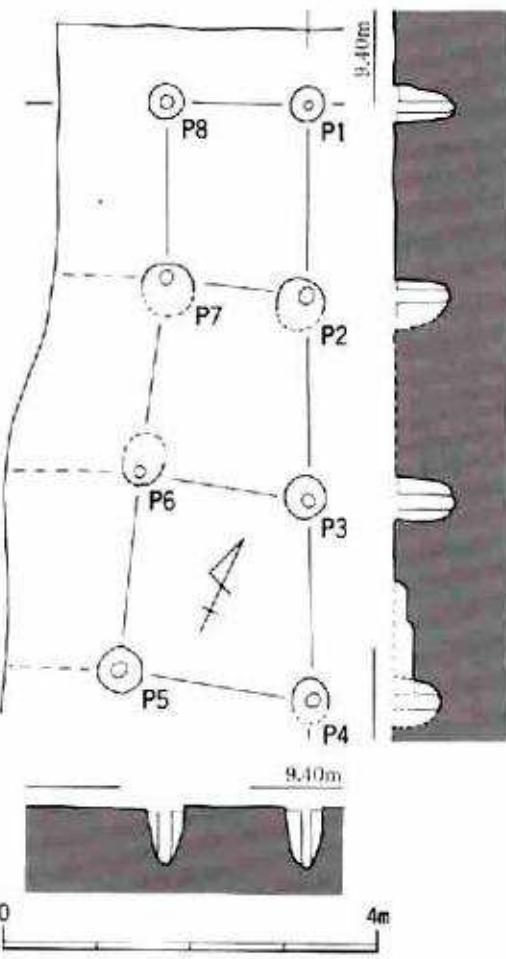
SB10

検出状況

調査区の西端部で検出した。建物の一部を検出したにとどまり、西側への伸びことは間違いないが、北側への伸び可能性も考えられる。SK06と切り合い関係にある。しかし、SK06検出後当建物の柱穴を確認しているものの、その前後関係を明確にすることはできない。また、SB09とも平面的に重複するが、当遺構との前後関係も明確にできない。

形状・規模

全体を検出できていないため、梁行・桁行方向を明確にできないが、南北方向を桁行とし、この方向を基準とする N-25°-W を指向する。桁行方向



第63図 SB10

で3間残存し、梁行方向で1間+α残存する。

桁行方向の残存する規模は、P1-P4間で6.35mを測り、柱穴間の平均距離は2.11mである。梁行方向は、P4-P5間で1.50mを測る。

- 柱穴** 円形の掘り方からなる。径は35cm~60cm、検出面からの深さは40cm~65cmを測る。
出土遺物 掘り方内から弥生時代後期の土器片が出土している。器種を特定できるものは認められない。

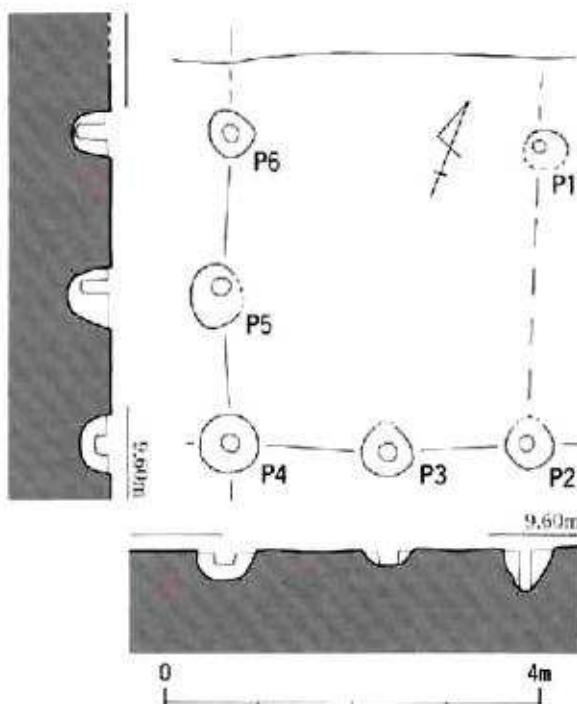
SB11

- 検出状況** 調査区のはば中央南側で検出した。旧淡路鉄道の側溝の掘削に伴い、当建物北側の一部はすでに残存していない。他の遺構との切り合い関係は認められない。

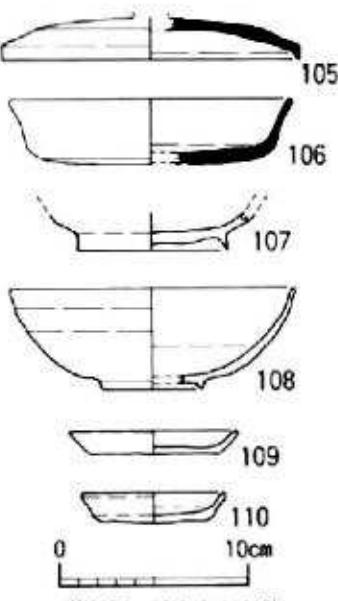
- 形状・規模** 東北東-西南西方向に梁行方向をとる。柱間は2間で、その距離は3.20mを測る。柱間距離はP2-P3間で1.45m、P3-P4間で1.75mである。桁行方向は北側が失われているため、2間残存するにとどまるが、当初は3間あったものと考えられる。桁行方向の推定距離は約5mである。建物の主軸方向は、西桁行を基準とするとN-23°-Wを指向する。

- 柱穴** 円形の掘り方からなる。径は45cm~65cm、検出面からの深さは15cm~45cmを測る。

- 出土遺物** P6掘り方内から須恵器の壺が出土している。他の柱穴からは土師器片が出土しているが、器種・時期の特定は困難である。



第64図 SB11



第65図 柱穴出土土器

他の柱穴

上記以外の建物にならなかった柱穴からも土器が出土している。以下、図化できたものについて報告する。

- 出土遺物** 2区の西側に散在する柱穴群の内、P3-P4-P5-P6からは、図示できる遺物が出土した。時期的にはP5が最も古く、須恵器の壺蓋と环身が出土してい

る。それ以外は、P 6 からは黒色土器B類碗が、P 4 からは瓦器の碗が、P 3 からは土師器の小皿がそれぞれ出土している。これらの柱穴以外にも遺物が出土した柱穴があるが、いずれも小片のため、器種さえも不明である。

第26表 柱穴出土土器観察表

柱穴 番号	種 類	器 種	直 径(cm)					形 調	残存状況	直 観	所 在	所 在の概要	備 考
			口径	器底	底付	脚付	最大径						
P6	土器	杯盤	15.7					内: 壁 外: 壁	口縁部1/2 底部1/2	回転ナギ。外側大口部は回転 ナギカズリ。内面は不定方向	直線的に延びる体部で、端部 は下方に屈曲する。	P6	
P7	瓦きび	杯盤	14.6	(3.5)				内: 壁白 外: 壁白	口縁部1/2 底部1/2	回転ナギ。外側底部は回転ナギ カズリ。	平らな底盤から緩やかに弯曲 する形方。開口。	P7	
P8	土器 小皿	碗	-		(8.0)			内: 壁白 外: 残荷物	底部1/2	回転ナギ。	底白は窓部が凹む。足部か ら体部にかけて緩やかに弯曲	P8	
P9	土器	碗	15.0	(5.3)	(5.3)			内: 壁 外: 壁	口縁部1/4 底部1/4	回転ナギ。底白は刷り付け。器 表面は全体に荒れている。	断面、角部の窓口。体部は深く 窓やかい大きさを弯曲している。	P9	
P10	土器	小皿	8.8	(1.2)	(6.0)			内: 壁 外: 壁	口縁部1/4 底部1/4	回転ナギ。	全体に平ら。端部は丸い。	P10	
P11	土器	小皿	7.4	(1.6)	(5.5)			内: 壁白 外: 残荷	口縁部1/4 底部1/4	回転ナギ。	全体に凹凸があり、深である。 底部は丸い。	P11	

(3) 土壙

SK06

検出状況 調査区の南西端で、確認トレンチに削られた状況で検出された。SB09・SB10と切り合
い関係にあるが、その前後関係は明確にできなかった。

形状・規模 平面形は方形で、検出面における長さは長軸で3.05m、短軸で1.03mを測る。横断面
は底が平らで、長細い逆台形状を呈する。検出面からの深さは13cm、底部における規模
は2.57m×85cmを測る。

埋土 黒褐色粗砂～細砂の1層のみである。

出土遺物 須恵器・土師器が出土している。

須恵器 瓦蓋の小片、短頭壺の小片、壺の胴部が出土している。

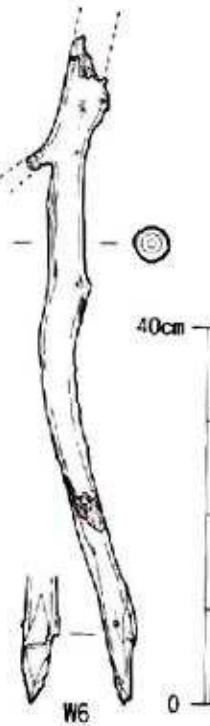
土師器 壺と思われる小片が出土した。それ以外に製塙土器が出土した。

SK07

検出状況 調査区の中央やや東よりに位置し、旧淡路鉄道の建設に伴い半
分近くが削平されている。その擾乱を挟んですぐ南側にはSK08
が存在する。他の遺構との切り合いは認められない。

形状・規模 平面形は隅丸方形を呈し、検出面における長さは長軸で3.22m、
短軸で2.22mを測る。横断面は底が丸く、船底状に弯曲する。検出
面からの深さは49cm、底部における規模は1.27m×93cmを測る。

土壙の周囲には竹とそれをとめる杭（第66図-W6）が方形に
並っており、西南の角では、方形の角を落とすように竹を置いて
いる。竹の置かれた幅は約20cm程度で、外側に傾斜しながら横方
向に置かれている。杭は長さ80cmで、多種の材からなる（第4章）。



第66図 杭

竹を覆き、杭を打ち込んでいるのは、土壌中に埋土が一度堆積してからで、土壌が掘削された時期とは若干差が認められる。

埋土 竹が置かれる前の土層は灰色極細砂～細砂で、竹が置かれた後は暗オリーブ灰色粗砂混じり極細砂質シルトが堆積している。

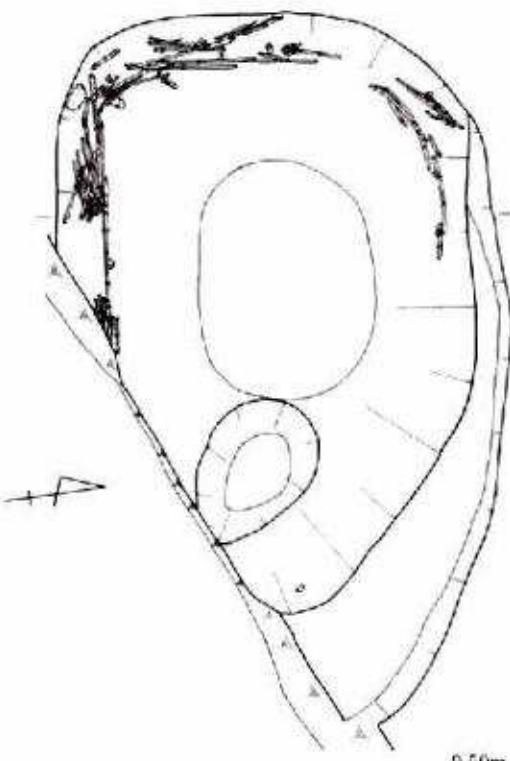
出土遺物 异生土器と須恵器、土師器が出土している。

須恵器 壺の腹部破片が出土している。

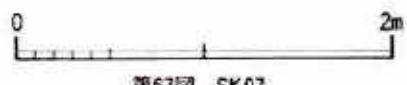
土師器 奈良時代と思われる口縁部の破片が出土している。

异生土器 壺・甕・鉢・高杯の各器種が出土している。

甕は、底部片と口縁部片が出土しており、口縁部片の口縁端部には刺み目が施されている。



1. 灰色 N6/ 粗砂・細砂

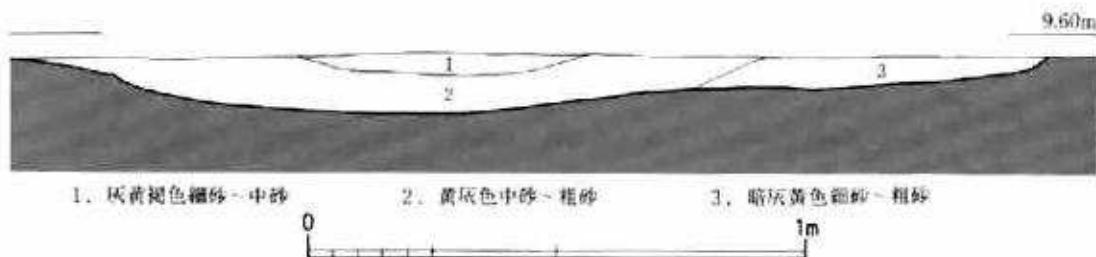


第67図 SK07

SK08

検出状況 調査区中央部や東側で検出した。SK07の南東側、SK09の西側に位置する。旧淡路鉄道に伴う側溝により、一部を欠く。当遺構と確実に切り合い関係にある遺構は認められない。

形状・規模 扰乱に切られていることもあり、整った平面形をなさない。擾乱の影響を受けない東西方向で3.94mを測り、その直交方向で3.63m残存する。断面は2段の浅い皿状をなし、最



第68図 SK08

深部における検出面からの深さは14cmである。

- 埋土** 3層からなる。下から、細砂～中砂（灰）、中疊を多量に含む中砂～粗砂（黄灰）、細砂～中砂（灰黃褐）の順に堆積していた。
- 出土遺物** 全く出土していない。

SK09

- 検出状況** 調査区中央部や東側で、ほぼ完全な形で検出した。SK08の北東側、SD24の西側に位置するが、各遺構との切り合い関係は認められない。

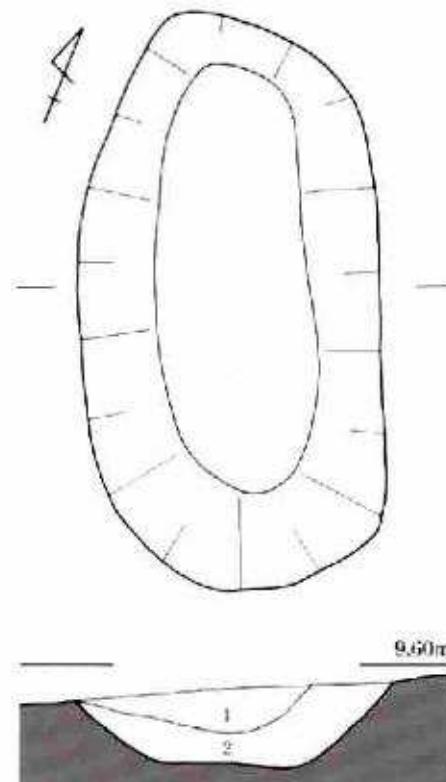
- 形状・規模** 平面椭円形をなし、北西～南東方向に主軸方向をとる。主軸方向で1.50m、その直交方向で83cmを測る。断面逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは23cmである。

- 埋土** 2層からなり、下から中砂～細砂（黄灰色）、シルト質細砂～中砂（黄灰色）の順に堆積していた。いずれも自然堆積によるものと考えられる。

- 出土遺物** 弱生土器と須恵器が出土している。

- 弱生土器** 器種の特定できるのは後期と考えられる壺に限られる。円形浮文と波状文を加飾した口縁部片と体部片が出土している。

- 須恵器** 壺の体部の小片が出土している。



第69図 SK09
1. 黄灰色シルト質 細砂～中砂
2. 黄灰色 中砂～粗砂

SK62

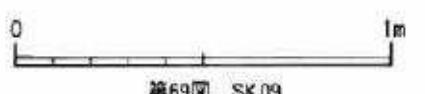
- 検出状況** 調査区東部で検出した土壤であるが、大半を旧淡路鉄道の建設に伴い削平されている。このため、検出したのは土壤の一部に限られる。

また、当土壤は柱穴に切られている。

- 形状・規模** 一部しか残存しないため、平面形・断面形を明確にできない。平面形は隅丸方形もしくは長楕円形を呈するものと考えられる。

なお、最深部における検出面からの深さは10cmである。

- 出土遺物** 土師器の小皿が出土している。



第70図 SK62出土土器
0 10cm

第29表 SK62出土土器観察表

報告番号	種類	器種	法面寸法(cm)						色調	残存状況	特徴	形態の特徴	備考
			山根	谷底	底径	頂径	最大径	指数					
III	土師器	小皿	17.2	14.7	4.5			24	内: 淡褐色 外: 深褐色	口縁丸形 底盤平坦	口縁ナリ。外縁底部に一方向 凸ハサメ。	底盤は平で厚く、体部は短く、 外方へ開く。	

(4) 溝

SD22

検出状況 調査区南西部で検出した。南北方向にはば直線的にのびる溝で、南側は調査区外までのび、北側は調査区内で収束している。当遺構と切り合い関係にある遺構はないが、SD23が約20cmの間隔ではば平行している。

形状・規模 検出した長さは3.20mである。断面形はU字形をなし、検出面における幅は20cm~25cmを測る。検出面からの深さは7cmである。底部の標高は、北側・南側ともに9.22mと一定である。

埋土 1層からなり、粗砂混じり極細砂（褐色）が堆積していた。

出土遺物 須恵器の坏と考えられる小片が1点出土している。

SD23

検出状況 調査区南西部で検出した。南北方向にはば直線的にのびる溝で、南側は調査区外までのび、北側は調査区内で収束している。当遺構と切り合い関係にある遺構はないが、SD22が約20cmの間隔ではば平行している。

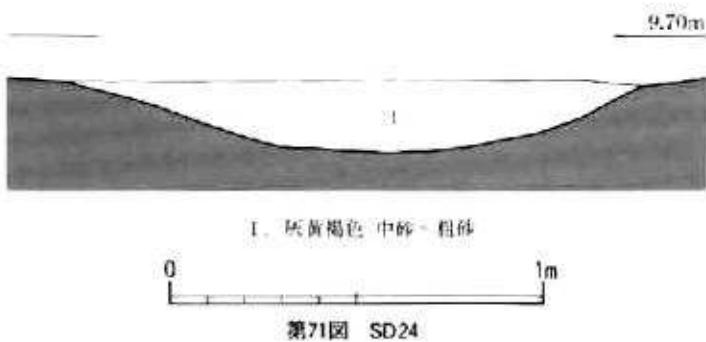
形状・規模 検出した長さは2.50mである。断面形はU字形をなし、検出面における幅は26cm~44cmを測る。検出面からの深さは8cmである。底部の標高は、北側で9.27m、南側で9.20mとわずかに南側に傾斜が認められる。

埋土 1層からなり、粗砂混じり極細砂（黒灰）が堆積していた。

出土遺物 土師質の土器片が1片出土しているが、器種及び時期は特定できない。

SD24

検出状況 調査区東部で検出した。北西~南東方向にはば直線的にのびる溝で、両端ともに調査区外までのびている。当遺構と切り合い関係にあるものは認められないが、西側はSK09とほぼ接している。

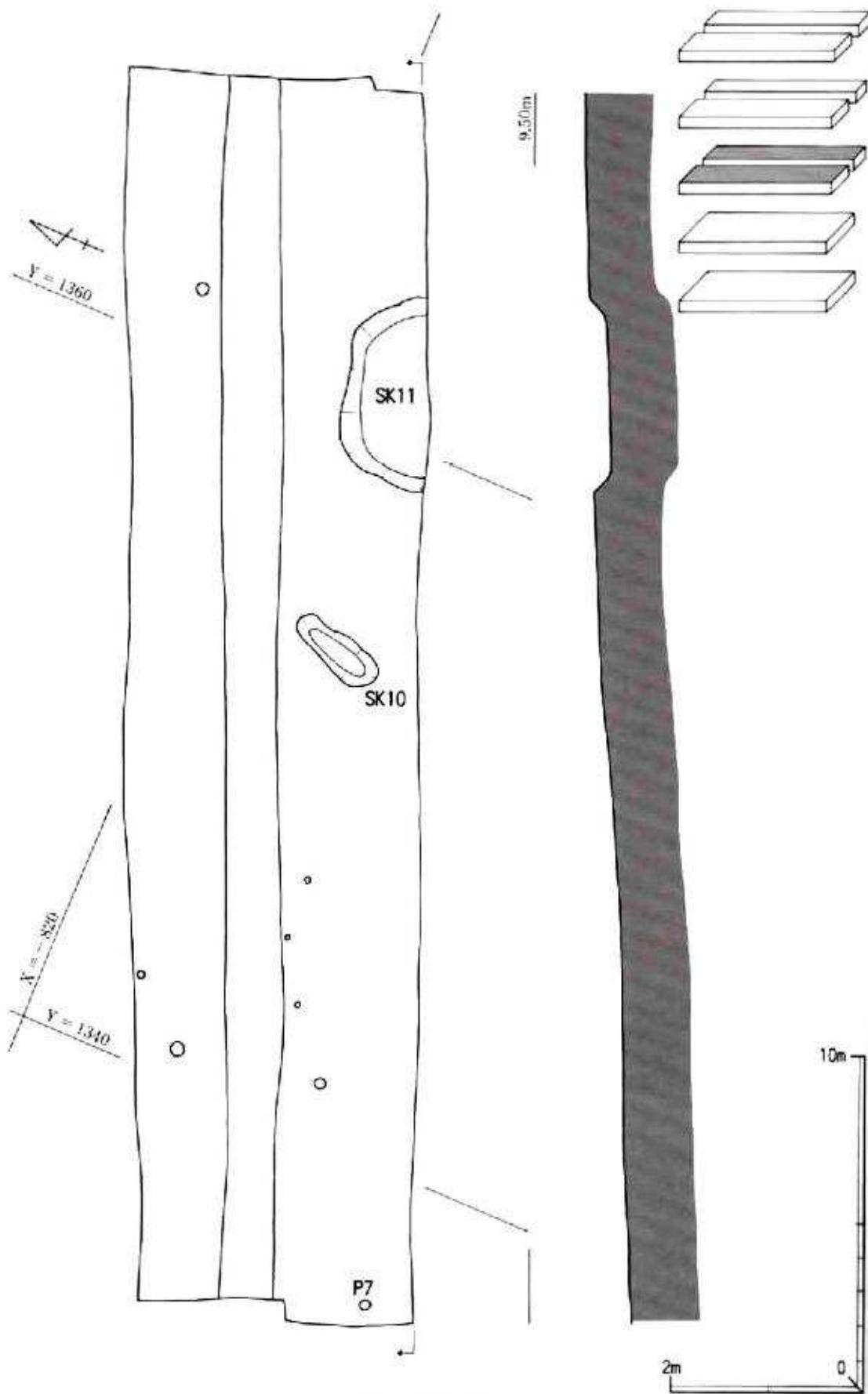


第71図 SD24

形状・規模 検出した長さは11.6mである。断面形はU字形をなし、検出面における幅は1.20m~1.55mを測る。検出面からの深さは13cmである。底部の標高は北西側で9.37m、南東側で9.42mと北西側へわずかに傾斜している。

埋土 1層からなり（第71図）、自然堆積によると考えられる中砂・細砂（灰黄褐色）が堆積していた。

出土遺物	弥生土器と須恵器が出土しているが、いずれも小片のため同化できなかった。
弥生土器	壺・甕・鉢の各器種が出土している。
壺	広口壺の口縁部片が出土している。
甕	体部と口縁部片が出土している。
鉢	脚付鉢に分類されるタイプの底部が出土している。
須恵器	壺・甕・壺の小片が出土している。



第72図 2区第3面

4. 第3面の遺構と遺物

(1) 第3面出土の遺物

出土遺物

弥生後期の壺と甕が出土している。

壺

112の口縁部片と115の底部片が出土している。

112は二重口縁壺と考えられる。2次口縁外面には、ハケ調整後、ヘラ彫による鋸歯文を施し、鋸歯文と鋸歯文の間の底角が接する箇所に円形浮文を貼り付けている。また、2次口縁外面中位に、この円形浮文に対応させて竹管文が施されている。

115の底部は、丸底に近いが、わずかに突出し平底を呈する。

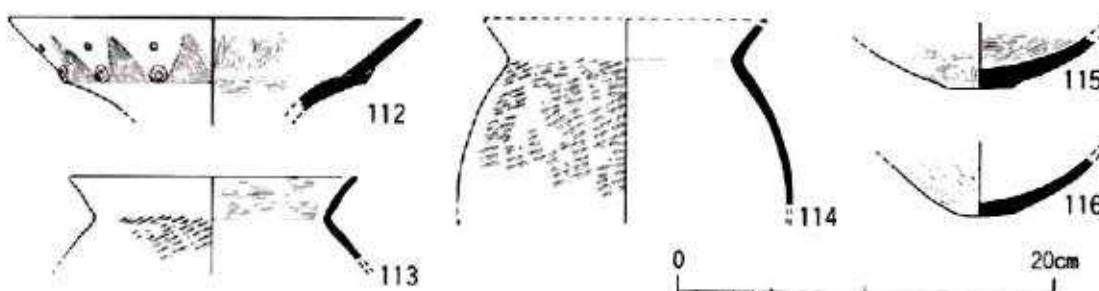
甕

113の口縁部片と、114の体部片、116の底部片が出土している。

113は、同タイプの甕と比べて比較的薄く仕上げられている。

114は、体部上半は口縁部まで残存するが、口縁端部を欠く。体部から口縁部まで叩き上げ、その後口縁部を折返して成形している。

116は、わずかに平底の痕跡をとどめるがほぼ丸底状をなす。外面を縱方向のヘラ削りによって仕上げている点が、当遺跡出土の甕のなかでは特異である。



第73図 2区第3面出土土器

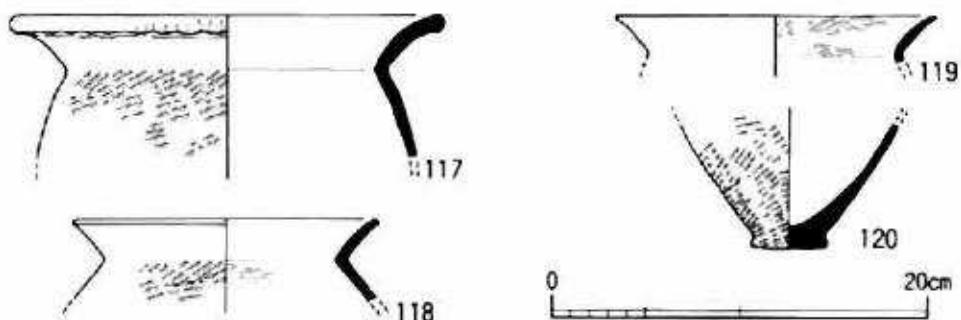
第30表 2区第3面出土土器観察表

番号	器種	法 量(cm)	調 査 ・ 絵 法	外 面	残 存 事	備 考
112	壺	口径: 21.8 底径: 高さ: 腹径:	外面: 底部端子ハケ調整。口縁端子ハケ調整。 内面: 底部・口縁部ハリニガキ。	外面: 黄褐色 内面: 稲	口縁部1/2	
113	甕	口径: 15.2 底径: 高さ: 腹径:	外面: 体部叩き成形。口縁部横十字調整。 内面: 体部ハケ調整。口縁部ハケ調整。	外面: に赤い斑紋 内面: 稲	口縁部1/6	
114	甕	口径: 底径: 高さ: 腹径:	外面: 体部叩き成形。底部・口縁部横十字調整。 内面: 体部ハケ調整後十字調整。口縁部横十字調整。	外面: 赤い斑紋 内面: に赤い斑紋	体部1/6	体部 - 側出塗付着
115	壺	口径: 底径: 高さ: 腹径:	外面: ヘラ彫	外面: 稲 内面: 明鏡	底部3/7	
116	甕	口径: 底径: 高さ: 腹径:	外面: 底部・体部ヘラ削り後十字調整。 内面: 底部・体部ハケ調整後十字調整。	外面: に赤い斑紋 内面: に赤い斑紋	残部完存	

(2) 柱穴

数穴検出したが、建物は復元できなかった。このなかで、P7から比較的まとまって土器が出土しているので、ここに報告する。

出土した土器はいずれもV様式系壺である。



第74図 P7出土土器

第31表 P7出土土器観察表

番号	器種	法 量(cm)	調 整 方 法	色 調	残 存 状	備 考
117	壺	口径: 22.6 底径: 17.3 高さ: 17.6 腹径:	外側: 体部埋込部付近、口縁部上にマゼン。 内側: 体部・口縁部上部調整。	外側: 暗 内側: 淡い緑	口縫部 底縫部付近	
118	壺	口径: 16.1 底径: 13.2 高さ: 15.5 腹径:	外側: 体部埋込部付近、口縁部上部調整。 内側: 体部ハサク調整後上部調整、口縁部上部調整。	外側: 暗 内側: 緑	口縫部付近 内面僅付着	
119	壺	口径: 16.8 底径: 13.5 高さ: 12.6 腹径:	外側: 体部埋込部付近、口縁部上部調整。 内側: 口縁部上部調整。	外側: 暗 内側: 暗	口縫部付近	
120	壺	口径: 13.9 底径: 10.1 高さ: 16.1 腹径:	外側: 体部埋込部付近、口縁部上部調整。	外側: 淡い緑 内側: 緑	底縫部 底縫部付近	

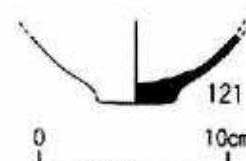
(3) 上塙

SK10

検出状況 調査区のほぼ中央部南側で検出した。本遺構と切り合ひ関係にある遺構はない。

形状・規模 平面輪円形を呈し、南北方向に主軸をとる。主軸方向で3m、その直交方向で1.10mを測る。断面逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは15cmである。

出土遺物 弥生後期の壺の底部が出土している(第75図)。底縫から体部へかけての残存で、底部は突出した平底をなす。跡に分類される可能性も完全には否定できない。



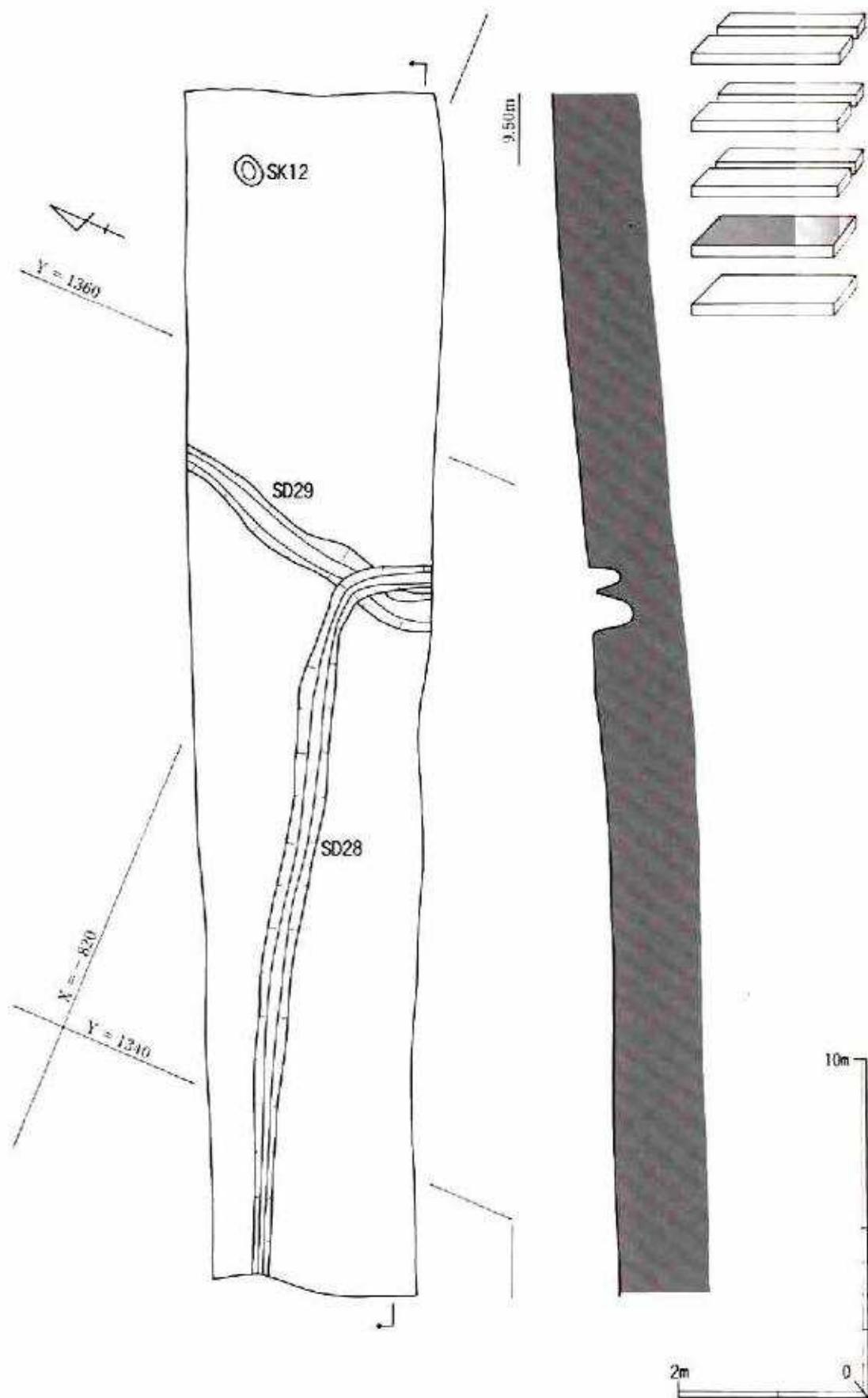
第75図 SK10出土土器

第32表 SK10出土土器観察表

番号	器種	法 量(cm)	調 整 方 法	色 調	残 存 状	備 考
121	壺	口径: 13.8 底径: 10.1 高さ: 16.1	外側: 体部埋込部付近、口縁部上部調整。 内側: ハサク調整。	外側: 暗 内側: 緑	底縫部 底縫部付近	

SK11

- 検出状況** 調査区南東部で検出した。一部が調査区外までひろがるため、全体の約1／2を検出したにとどまる。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** 平面形は隅丸方形を呈するものと推定される。調査区南側の壁面において、検出面における幅は5.70mを測り、その直交方向で2.33m検出した。断面逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは9cmである。
- 埋土** 5層からなるが、各層ともシルト質細砂～中砂を主体し、基本的には大差ないものと考えられる。
- 出土遺物** 全く出土していない。



第76図 2区第5面

5. 第5面の遺構と遺物

(1) 第5面出土遺物

出土遺物

弥生後期の土器と石器が出土している。

土器

壺・甕・鉢・高杯・器台の各器種が出土している。量的にも比較的まとまって出土している。

壺

3個体図化している。

122は広口壺の口縁部である。口縁部は強い横ナデ調整によりわずかに受口状をなす。頭部はハケ調整後、比較的幅の広い単位の縱方向のヘラナデ調整が施されている。

123も広口壺の口縁部である。縁部に粘土紐を貼付けることにより端面をつくり、円形浮文を貼り付けている。2個一対とし2箇所確認できるが、全体で6箇所あったものと推定される。

124は直口壺である。口縁端部に外方にわずかにつまみ出す傾向が認められる。

甕

底部片も含めると量的にまとまって出土している。これらの甕は全ていわゆるV様式系壺の範疇に分類されるものである。

細部をみると、口縁端部に刻み目を施すもの(125・126・129・131)と施さないものとが認められる。体部は全て叩き成形によって仕上げられている。129・130・133のように、叩き成形後一部ハケ調整を施すものも認められる。

鉢

図化できたのは3個体である。

141はいわゆる有孔鉢の1タイプと考えられるものである。一般的な有孔鉢とは異なり、底部中央部の垂直方向の穿孔(径6mm)に加えて、底部から体部への変換部に水平方向に別の穿孔(径7mm)が施されている。底部が完存していないため、後者の穿孔が貫通しているかどうかは確認できない。

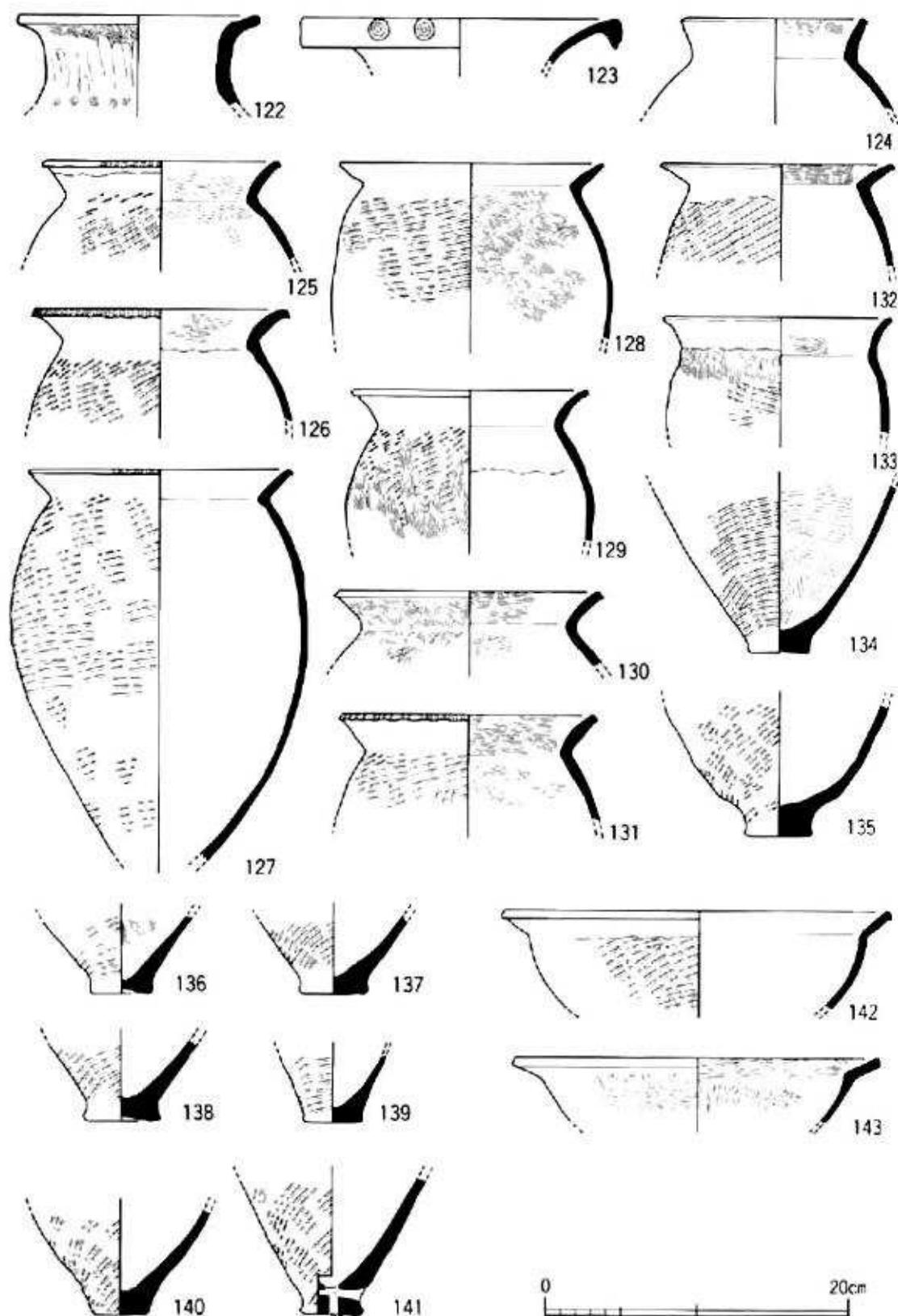
142・143は形態的には同タイプに分類できるもので、深い鉢形の体部に外方に屈曲する口縁部が付く。ただし、細部においては異なる特徴が認められる。つまり、143は体部内外面および口縁部内面をヘラミガキによって仕上げている。これに対して、142は体部内面にヘラミガキが施されているだけで、特に体部外面には叩き成形痕が顕著に残存する。また、142は口縁端部を横ナデ調整によりわずかに下方につまみ出しているのに対して、143は端部を拡張せずに端面をつくっている。さらに、142は仕上げは丁寧とはいえず、体部と口縁部の変換部外面に接合痕が観察できる。

高杯

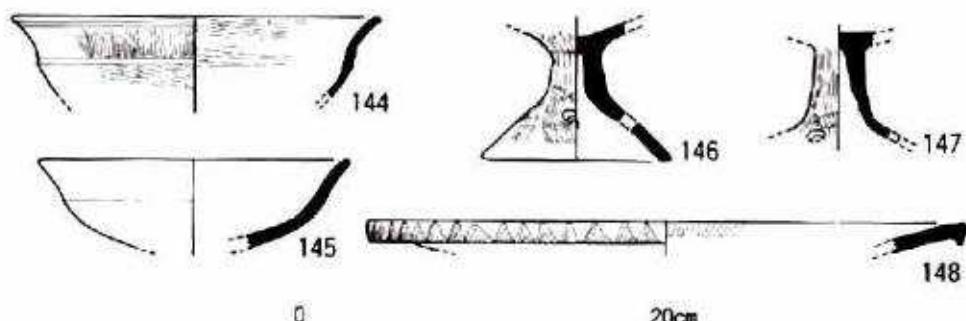
体部2個体と脚部2個体を図化した。

体部は2個体とも同タイプに分類できる。杯部が、内湾する体部に対して短く外反する口縁部がつくタイプである。ただし、144は体部と口縁部の変換部外面に擬凹線を1条施し、体部から口縁部への屈曲が明瞭である。これに対して145は擬凹線も施されず、変換部が144ほど明瞭ではない。

脚部は2個体とも短脚傾向にあり、外面は両者ともヘラミガキによって仕上げられている。146は裾部下半が内湾傾向にあり、4箇所に穿孔されている。逆に147の裾部下半は外湾傾向にある。



第77図 2区第5面出土土器(1)



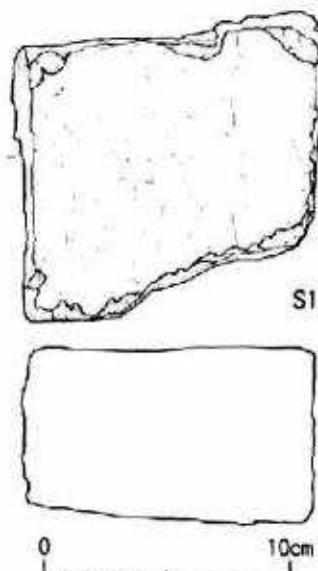
第78図 2区第5面出土土器(2)

器台 148は口縁部の一部がわずかに残存するのみである。端部をわずかに下方に拡張して端面をつくり、ヘラ掃による銅衝文が施されている。銅衝文は丁寧に施文されたとはいえず、各々の形態は一定していない。

石器 台石1点(S1)が出土している。

上部・下部の一部を欠損するが、ほぼ直方体を呈する。上面は広範囲に使用したようで、全面に光沢が認められる。側面には、この石を半分に叩き割ろうとした際の割りつけ痕がみられる。

長さ12.5cm、幅12.6cm、厚さ7.1cm、重さ1890gを測る。



第79図 S.1

第33表 2区第5面出土土器録表(1)

番号	器種	法量(cm)	調査技法	外観	残存部	備考
122	壺	口径:11.5 底径: 高さ:5.5 厚さ:	外面:体部ハサク調整、底部ハサク調整後ハサクオイ調整、口縁部ハサク調整後ハサクオイ調整 内面:體感の為不明	外面:口縁部 内面:粗	口縁部1/2	
123	壺	口径:10.6 底径: 高さ:12.5 厚さ:	外面:頂部磨滅の為不明、口縁部ハサク調整 内面:頭部ハサク調整後磨滅の為不明	外面:粗 内面:改善程	口縁部1/4	
124	壺	口径:11.6 底径: 高さ:11.0 厚さ:	外面:体部ハサク調整、口縁部ハサク調整後ハサクオイ調整 内面:体部ハサク調整後ハサクオイ調整、口縁部ハサク調整後ハサクオイ調整	外面:粗 内面:粗	口縁部1/3	
125	壺	口径:12.1 底径: 高さ:16.1 厚さ:	外面:体部叩き成形、頭部ハサク成形接合ハサクオイ 内面:体部ハサク調整、口縁部ハサク調整	外面:口縁部 内面:口縁部	口縁部1/4	
126	壺	口径:15.0 底径: 高さ:13.0 厚さ:	外面:体部叩き成形、頭部ハサク成形接合ハサクオイ調整、口縁部ハサク調整後ハサクオイ調整 内面:体部ハサクオイ調整、口縁部ハサク調整後ハサクオイ調整	外面:粗 内面:口縁部	口縁部1/2 口縁部外側 頭付部	
127	壺	口径:17.0 底径: 高さ:17.5 厚さ:19.6	外面:体部叩き成形、口縁部ハサクオイ 内面:体部ハサク成形後ハサクオイ、口縁部ハサク成形後ハサクオイ調整、体部上半部ハサクオイ、口縁部ハサクオイ調整	外面:粗 内面:粗	近部以外 口縁部在 体部中段付着	
128	壺	口径:12.1 底径: 高さ:15.3 厚さ:18.1	外面:体部叩き成形、頭部叩き成形後ハサクオイ、口縁部ハサク成形後ハサクオイ調整 内面:体部ハサク調整、口縁部ハサクオイ、ハサク調整	外面:粗 内面:粗	口縁部1/2 頭付部	
129	壺	口径:15.2 底径: 高さ:9.9 厚さ:16.0	外面:体部叩き成形後ハサクオイ調整、口縁部ハサク成形後ハサクオイ調整 内面:体部ハサク調整、口縁部ハサク成形後ハサクオイ調整	外面:粗 内面:粗	口縁部1/4 体部中段付着	

第34表 2区第5面出土土器觀察表(2)

番号	器種	法量(cm)	調査・特徴	色調	残存率	備考
120	甕	口径:17.6 底径:14.1 高さ:14.9 腹径:	外側:体部叩き成形後ハケ調整、頭部・口縁部ハケ調整。 内側:体部・口縁部ハケ調整。	外側:灰青色 内側:暗褐色	口縫部1/4	
121	甕	口径:16.3 底径:13.9 高さ:13.9 腹径:	外側:体部叩き成形、頭部・口縁部ハビオサエ。 内側:体部ハビオサエ後ハケ調整、口縁部ハビオサエ後ハケ調整。	外側:灰青色 内側:褐	口縫部1/3	
122	甕	口径:16.3 底径:12.2 高さ:9.0 腹径:	外側:体部叩き成形、頭部・口縁部叩き成形後ハビオサエ。 内側:体部ハケ調整、口縁部ハケ調整。	外側:褐色 内側:灰青色	口縫部1/4	
123	甕	口径:15.2 底径:13.6 高さ:12.5 腹径:	外側:体部叩き成形後上手ハケ調整、口縁部ハケ調整後横子ハケ調整。 内側:体部ハケ調整、口縁部ハケ調整後横子ハケ調整。	外側:褐色 内側:灰青色	口縫部1/6	
124	甕	口径:13.8 底径:11.9 高さ:11.9 腹径:	外側:底部一休部叩き成形後、底部ハビオサエ。 内側:体部ハケ調整。	外側:多様・褐色 内側:褐・褐色	底盤完存	体部外周僅付着
125	甕	口径:4.1 底径:6.7 高さ:6.7 腹径:	外側:底部一休部叩き成形後、底部ハビオサエ。 内側:底盤の為不明。	外側:浅褐色 内側:褐	底盤完存	
126	甕	口径:11.1 底径:5.6 高さ:5.6 腹径:	外側:底盤・修整叩き成形後、底部ハビオサエ。 内側:底盤横子ハケ調整、体部ハケ調整。	外側:褐色 内側:灰青色	底盤完存	
127	甕	口径:14.2 底径:13.1 高さ:13.1 腹径:	外側:底部一休部叩き成形後、底部ハビオサエ。 内側:ハサカナハケ調整。	外側:灰青色 内側:灰青色	底盤完存	
128	甕	口径:7.1 底径:5.2 高さ:5.2 腹径:	外側:外底・底盤・体部叩き成形後、底部ハビオサエ。 内側:ハサカナハケ。	外側:灰・浅黄 内側:褐	底盤完存	
129	甕	口径:2.8 底径:1.1 高さ:1.1 腹径:	外側:底盤・体部叩き成形後。 内側:ハサカナハケ調整。	外側:褐・墨跡 内側:灰青色	底盤完存	
130	甕	口径:13.9 底径:11.9 高さ:11.9 腹径:	外側:底盤・体部叩き成形後、底部ハビオサエ。 内側:底盤ハケ調整。	外側:明褐色 内側:灰青色	底盤完存	
131	甕	口径:4.2 底径:5.1 高さ:5.1 腹径:	外側:底部・休部・体部叩き成形後、底部ハビオサエ。 内側:底盤・休部ハケ調整。	外側:褐色 内側:灰青色	底盤完存	
132	甕	口径:12.5 底径:11.1 高さ:11.1 腹径:	外側:休部・口縁部叩き成形後、頭部・口縁部ハビオサエ。 内側:休部ハケ調整後ヘリトガタ・口縁部ハケ調整。	外側:褐色 内側:灰青色	口縫部1/2	
133	甕	口径:13.8 底径:12.0 高さ:12.0 腹径:	外側:休部・口縁部ハビオサエ、頭部・口縁部ハビオサエ調整。 内側:休部・口縁部ハビオサエ。	外側:灰青色 内側:灰青色	口縫部1/4	
134	甕	口径:19.4 底径:13.3 高さ:13.3 腹径:	外側:休部・口縁部ハビオサエ。 内側:休部・口縁部ハビオサエ。	外側:灰青色 内側:灰青色	口縫部1/3	
135	甕	口径:16.2 底径:12.8 高さ:12.8 腹径:	外側:休部の為不明。	外側:褐	口縫部1/3	
136	甕	口径:7.6 底径:6.6 高さ:6.6 腹径:	外側:底部ハリ・ガラス、底部ハビオサエ調整。 内側:休部・口縁部ハビオサエ。	外側:灰青色 内側:灰青色	底部は切欠存	
137	甕	口径:2.8 底径:2.8 高さ:2.8 腹径:	外側:休部ハリ・ガラス、底部ハビオサエ。 内側:休部・口縁部ハビオサエ。	外側:灰青色 内側:灰青色	底部は切欠存	
138	甕	口径:13.6 底径:11.1 高さ:11.1 腹径:	外側:受取ハケ調整、口縫部横子ハケ調整。 内側:休部ハケ調整後上手ハケ調整、口縫部横子ハケ調整。	外側:灰青色 内側:浅褐色	口縫部1/2	

(2) 土壙

SK12

検出状況

調査区の東端、やや北上りに位置し、調査区を南北に区切る溝以外は、周囲に關係する遺構は存在しない。

形状・規模

平面形は円に近い、隅丸方形で、長軸が92cm、短軸が63cmを測る。断面の形状は圓形で、検出面からの深さは40cmを測る。長軸の方向はN26°20'Eである。

出土遺物 壺の体部片と甕の体部片がわずかに出土している。弥生後期と考えられるが、これ以上の細かい時期は特定できない。

(3) 溝

SD 28

検出状況 調査区の西側で検出された。SD29を切っている。

形状・規模 西から東方向に直線的にのびる溝であるが、東側で南方向に大きく屈曲する。断面の形状はU字形を呈する。規模は検出された長さが23.04m、幅が46cm~98cmで、深さは32cmを測る。

埋土 下層は浅黄色極細鉢の土器が多く含む層で、やや西側に傾いて堆積している。上層は黄褐色粗砂~細砂である。

出土遺物 壺・甕・鉢・高環・器台の各器種が出土している。当遺構の東半部の下層からまとめて出土している(図版16)。

壺 広口壺・ミニチュア壺・底部が出土している。

149は底部を欠くが、完形に近い広口壺である。当該期の壺としては頸部が長い傾向にある。また、体部上半に叩き痕が顕著に認められるが、中位はハラミガキにより仕上げられている。

152は短頭直口壺のミニチュアである。

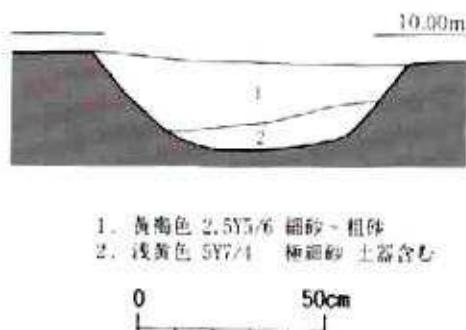
甕 口縁部から底部まで残存するものはないが、いずれもV様式系甕に分類されるものである。153は、口縁部の器壁が厚く、明瞭な端面をもち刻み目を施している。154は、体部から口縁部にかけて叩き上げ後、粘土紐を貼り足して口縁端部を形成している。この貼り足しは丁寧とはいはず、外面にこの跡が明確に観察できる。155は、口縁端部をわずかに拡張し、1条の擬凹線を施している。

鉢 小型の鉢と有孔鉢に大別できる。

小型鉢は、158と159~161に細部できる。158は口縁部をく字形に屈曲させるもので、底部は明瞭な平底である。159~161は、橢形の体部に口縁部が直口するタイプで、底部はユビオサエにより高台状を呈している。3個体ともつくりは丁寧とはいはず、特に口縁部はユビオサエにより成形しているが、粗雑でユビオサエ痕が顕著で、口縁端部のラインは著しく歪んでいる。

162の有孔鉢は、体部は砲弾形を呈し、底部はわずかに平底傾向にあるが、尖底に近い。口縁部は直口傾向にあるが、わずかに外方につまみ出すようにユビオサエが施されている。ユビオサエ後ナデ調整等は施されていないため、全体的に粗雑な仕上がりとなっている。底部は焼成前に穿孔されており、その径は1.3cmを測る。

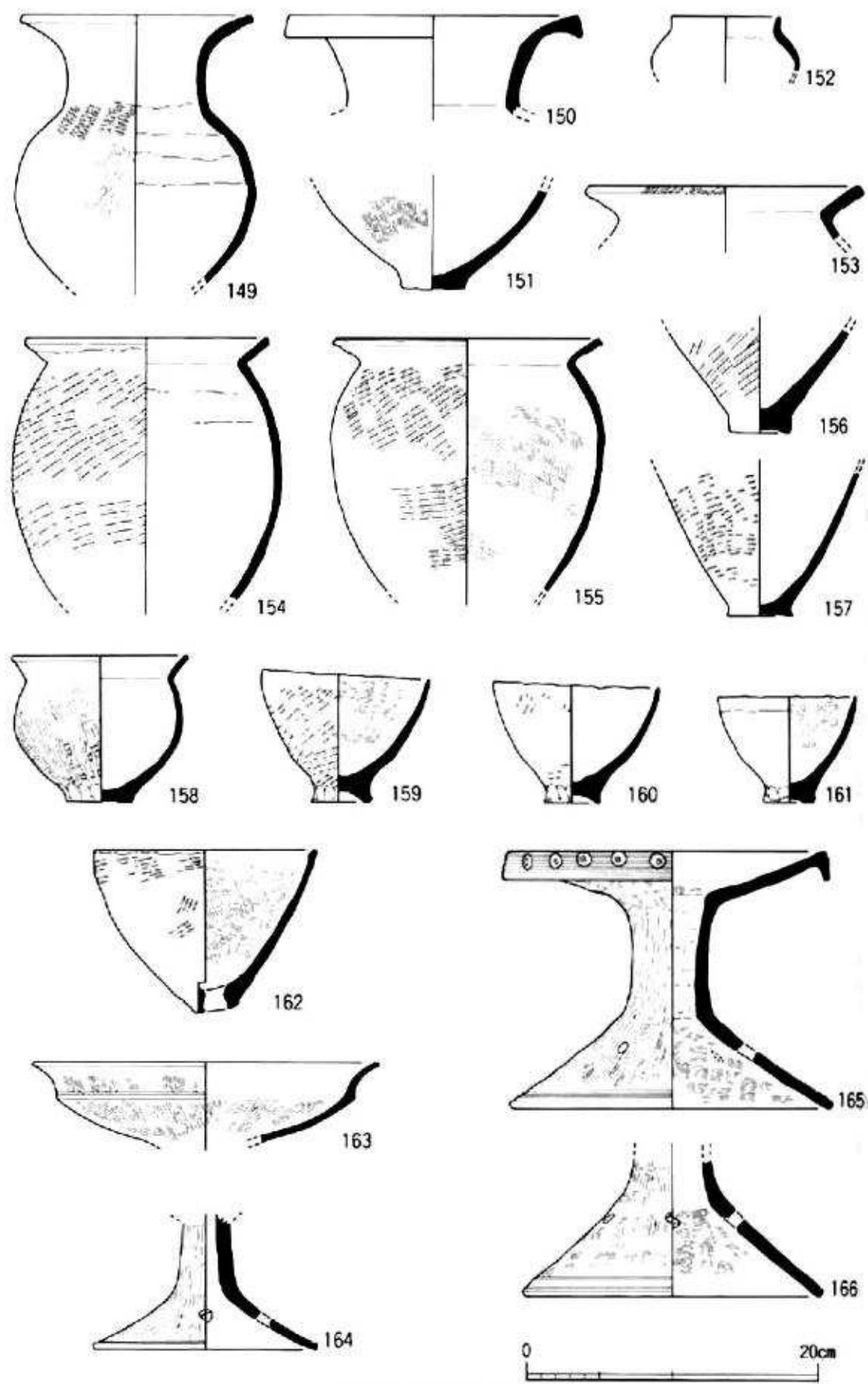
高環 体部と脚部各1個体を図化した。163は、内湾傾向にある体部に口縁部が短く外反するもので、体部から口縁部への変換部外面には1条の擬凹線が施されている。



1. 黄褐色 2.5Y5/6 細砂・粗砂
2. 浅黄色 5Y7/1 極細砂 土器含む

0 50cm

第80図 SD28



第81図 SD26出土土器

器台

ほぼ完存する165と脚部1個体(166)を図化した。166は165と同タイプの器台の脚部と考えられる。165は、口縁端部を拡張し端面を造り、全面に擬凹線を施した後円形浮文を貼り付けている。脚端部にも3条の擬凹線が施されている。脚部の透孔は3穴残存するが、当初は6穴あったものと推定される。

第35表 SD28出土土器観察表

番号	種類	法 量(cm)	調 整 方 法	色 調	残 存 状	備 考
149	器	口径:14.5 頸径:9.5 脚径:15.6 器高:18.7	外側:体部タキ成型後ハラミガキ。施部から口縁部ヨコナ子調整。 内面:体部下子ナ子調整。体部ヨコナビヨリニ。施部から口縁部ヨコナ子調整後。ヨコナ子調整。	外面に赤い斑模 内面に赤い斑	口縁部1/3 内面に赤い斑	体部的面模行者
150	器	口径:19.2 頸径:11.8 脚径:	外面:開拓ナ子調整。口縁部ヨコナ子調整。 内面:開拓ナ子調整。口縁部ヨコナ子調整。	外面に赤い斑模 内面に赤い斑	口縁部1/6	
151	器	口径: 頸径: 脚径:	外側:施部ヨコナ子。体部ハナ子調整後。体部下子ナ子調整。 内面:ナ子調整。	外面に赤い斑模 内面に赤い斑	底部完存	
152	器	口径:17.2 頸径:17.4 脚径:10.1 器高:13.7	外側:体部表面が調節不明。口縁部ヨコナ子調整。 内面:体部上子ナ子調整。口縁部ヨコナ子調整。	外面に赤 内面:赤	口縁部1/4	
153	器	口径:18.2 頸径:14.7 脚径:	外面:開拓ヨコナ子調整後ヨコナ子調整。 内面:開拓ヨコナ子調整後ヨコナ子調整。	外面に赤い斑 内面に赤い斑	口縁部1/2	
154	器	口径:16.2 頸径:13.7 脚径:18.6 器高:17.8	外側:体部川字成形。頭部・口縁部ヨコナ子後ヨコナ子調整。 内面:体部ナ子調整。口縁部ハナ子調整後ナ子調整。	外面に黒模 内面に赤い斑模	口縁部1/4 内面に赤い斑	体部的面模行者
155	器	口径:17.8 頸径:14.7 脚径:18.2 器高:17.2	外側:体部タキ成形。頭部・口縁部ヨコナ子後ヨコナ子調整。 内面:体部ハナ子調整。口縁部ハナ子調整後ナ子調整。	外面に赤 内面に赤い斑模	口縁部 体部1/5	
156	器	口径: 頸径: 脚径:	外側:底部ヨコナ子。体部叩き成形。 内面:体部ナ子調整。	外面に赤い斑 内面に赤い斑模	底部完存	
157	器	口径: 頸径: 脚径:	外側:底部ヨコナ子。体部叩き成形後ナ子調整。 内面:体部ナ子調整。	外面に赤い斑 内面に赤い斑	底部2/4	体部的面模行者
158	器	口径:12.0 頸径:10.3 脚径:	外側:体部叩き成形後ハラミガキ。口縁部ヨコナ子調整。 内面:体部ナ子調整。ヨコナ子ナ子調整。	外面に赤い斑 内面に赤い斑	1/2	
159	器	口径:11.1 頸径: 脚径:	外側:底部・口縁部叩き成形後。体部ナ子調整。口縁部ヨコナ子。 内面:体部ヨコナ子調整後ナ子調整。口縁部ヨコナ子。	外面に赤い斑 内面に赤い斑	1/12完存	
160	器	口径:11.3 頸径: 脚径:	外側:成形・ヨコナ子調整後。体部ヨコナ子。体部ナ子調整。 内面:成形・ヨコナ子調整。体部・口縁部ナ子調整。	外面に赤い斑 内面に赤い斑	1/12完存	
161	器	口径:9.6 頸径: 脚径:	外側:成形・口縁部叩き成形後。底部ヨコナ子。体部ナ子調整。口縁部ヨコナ子。 内面:成形・ヨコナ子調整。体部ハナ子調整後ナ子調整。	外面に赤い斑 内面に赤い斑	1/12完存	
162	器	口径:15.1 頸径: 脚径:	外側:底部・山腹部叩き成形後。底部ヨコナ子。体部ナ子調整。口縁部ヨコナ子。 内面:成形・ヨコナ子調整。体部ハナ子調整後ナ子調整。	外面に赤い斑 内面に赤い斑	1/12完存 体部2/3	
163	高杯	口径:12.0 脚径: 底径:	外側:体部・ヨコナ子。 内面:内面・体部ハナ子。ヨコナ子調整。	外面に赤い斑 内面に赤い斑	口縁部1/6	
164	高杯	口径: 頸径: 底径:	外側:脚部・今上ナ子。脚部ヨコナ子調整。 内面:脚部ヨコナ子調整。	外面に赤 内面に赤い斑模	脚部1/2	
165	器台	口径:21.2 頸径:10.2 底径:21.2 器高:17.0 足径:13.6	外面:施部・口縁部ハナ子調整後。施部・体部ナ子。足部。 内面:施部ハナ子調整。口縁部ハナ子調整後ナ子調整。	外面に黒 内面に赤い斑模	1/4	
166	器台	口径: 頸径: 底径: 足径:17.0	外面:施部ヨコナ子調整後ナ子。足部。 内面:施部ヨコナ子調整。体部ナ子調整。	外面に赤い斑 内面に赤い斑	施部1/12完存	

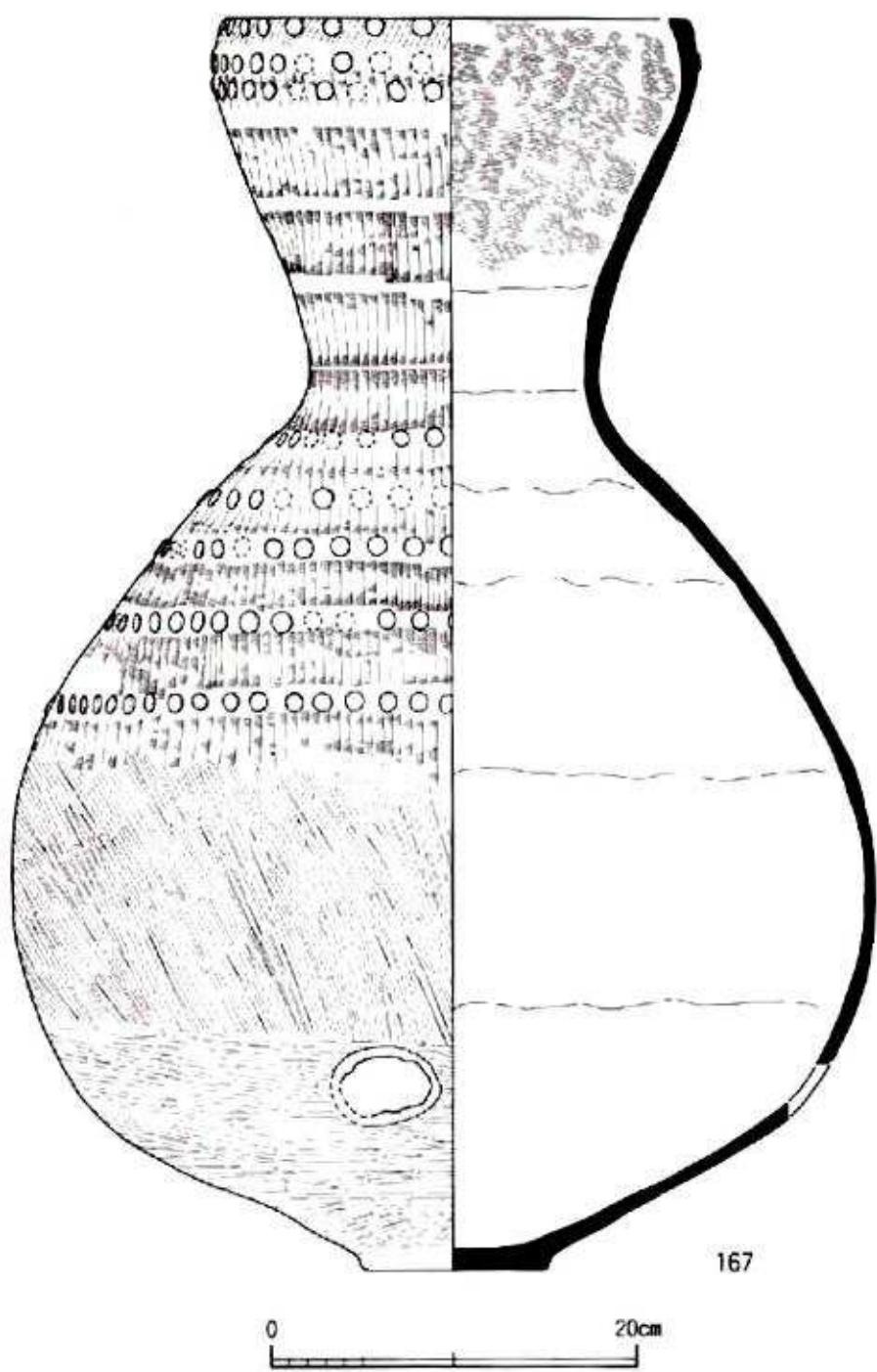
SD29

- 検出状況** 調査区の西側で検出された。SD28に切られている。
- 形状・規模** 南北方向の直線的な溝であるが、調査区の南端付近で若干東側に湾曲している。断面の形状は口字形を呈する。規模は検出された長さが8.86m、幅が62cm~1.17m、平均幅が90cm、深さは38cmを測る。
- 出土遺物** 当遺構内からは、量的にまとまった土器が出土している。溝内にぎっしりつまつた状態(図版17)で、ほとんどが破片として出土している。かなり一括性の高い資料と考えられる。壺・甕・鉢・高杯・器台の各器種が出土している。
- 細頸壺・二重口縁壺・広口壺・短頸壺・直口壺・長頸壺・底部が出土している。
- 細頸壺** 167の1個体が出土している。大型細頸壺に分類されるものである。体部下半の一部を除きほぼ完存する土器である。体部中位以下をヘラミガキによって仕上げているが、下半を横方向、上半を左上がり方向と磨き分けている。ミガキは全面に施されているが、ミガキの単位は明瞭に観察できる。体部中位以上から口縁端部にかけて、簾状文と円形浮文を施文している。まず簾状文を13段に渡って施し、口縁部では簾状文の上に3段、体部では簾状文を施文しない所に5段、それぞれ貼り付けている。簾状文の幅は3~4cmである。体部下半には、4.8cm×3cmの焼成後の穿孔が認められる。胎土は明らかに生駒系荒尾である。
- 伝世** なお、この土器の示す時期は中期であることは明らかである。これに対して、他の土器はすべて後期に位置付けられる土器で、中期の土器片は全く出土していない。したがって、この土器の出土は違和感を感じさせるものである。しかし、この土器がこれらの土器と一緒に出土したことは明らかである。よって、当節では、当地において伝世されていたこの土器が後期になって、一緒に廃棄されたものと考えたい。
- 二重口縁壺** 168の1個体である。頸部から外反する口縁部に短く外反する2次口縁を付けている。体部と頸部の境に凸帯を貼り付け、凸帯上に刻み目を施している。またこの凸帯の下側には6条の櫛描波状文が施されている。さらに、この下側にも刻み目が施されている。
- 広口壺** 口縁端部を大きく拡張し端面をつくり加飾するものと、端部を明確に拡張しないもののタイプに分類できる。
- 169は、口縁部を拡張し、端面に4条の擬凹線を施した後、その上に竹管円形浮文を貼り付けている。円形浮文については19個確認できるが、全体では30個あったものと推定される。体部と頸部の境には凸帯文を貼り付け、刻み目を施している。また、この下側には櫛描波状文が施文されているが、磨滅のため条数は明確にできない。なお、この土器は当遺跡に一般的な土器とは異なり、胎土中には雲母・角閃石が比較的多く含まれ、色調も茶褐色系である。他地域から搬入された可能性が高い。
- 170も口縁端部を拡張し、端面の上端と下端に列点文を施し、端面中央部に竹管円形浮文を貼り付けている。6個確認できるが、全体では13個あったものと推定される。171も端面を拡張し、端面に3条の擬凹線を施している。173は、口縁端部を上方にわずかに拡張させ端面をつくり、竹管文を施文している。174も端部を拡張し端面をつくり、上端と下端に各1条の擬凹線を施し、この間に7条の櫛描波状文を施文し、この上に竹管円形浮

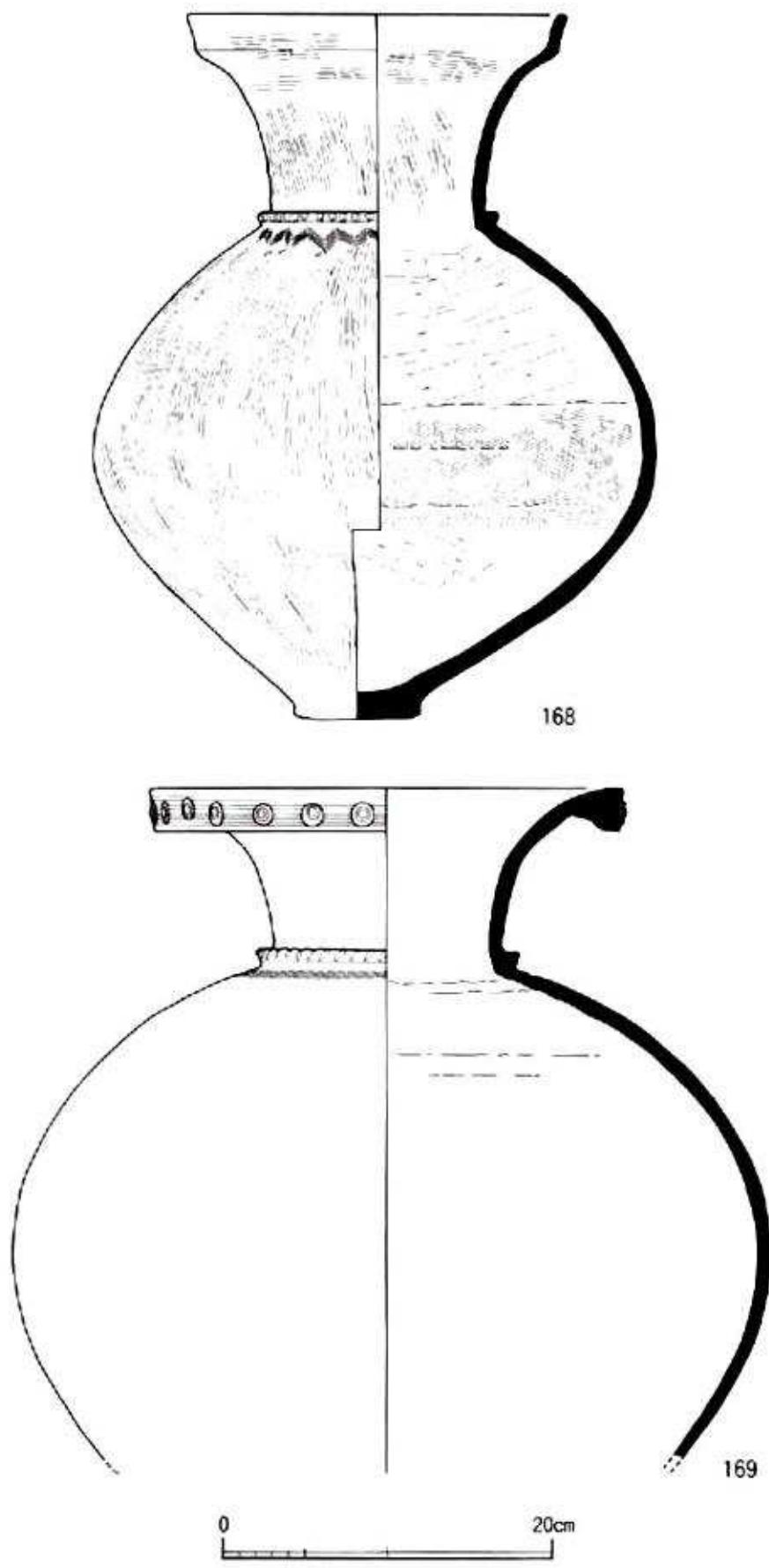
文を貼り付けている。

この他172と176についても、口縁部が残存しないため明確に分類することはできないが、おそらく口縁部を拡張するタイプの広口壺になるものと考えられる。176は、体部から頸部にかけて、下から、6条の櫛描直線文・列点文・4条の櫛描波状文・4条の櫛描直線文2帯の順に施文されている。

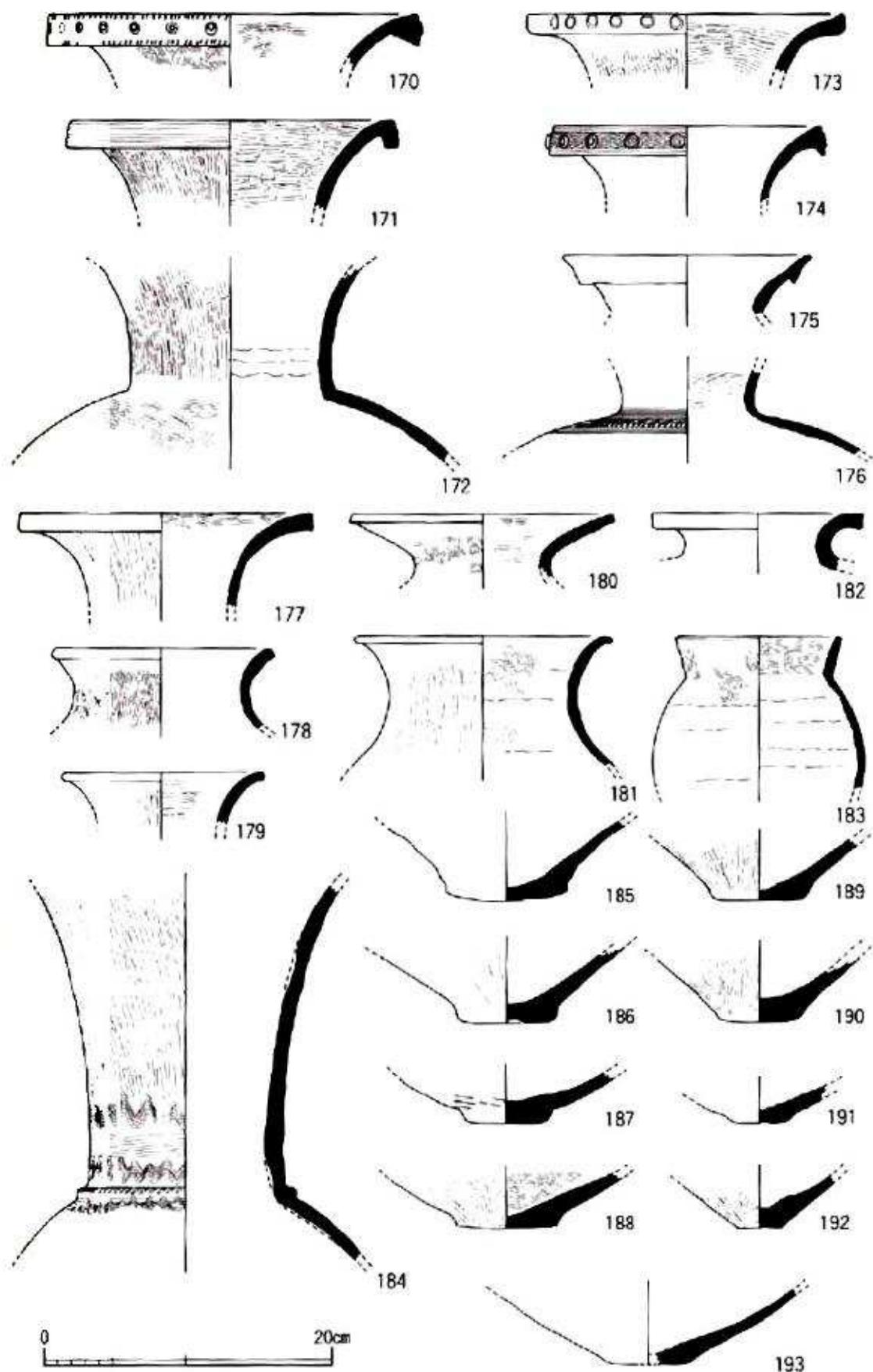
口縁部を拡張しないタイプとして、177~179・181がある。これらの土器は、頸部から口縁部にかけて大きく外反させている。



第82図 SD29出土土器(1)

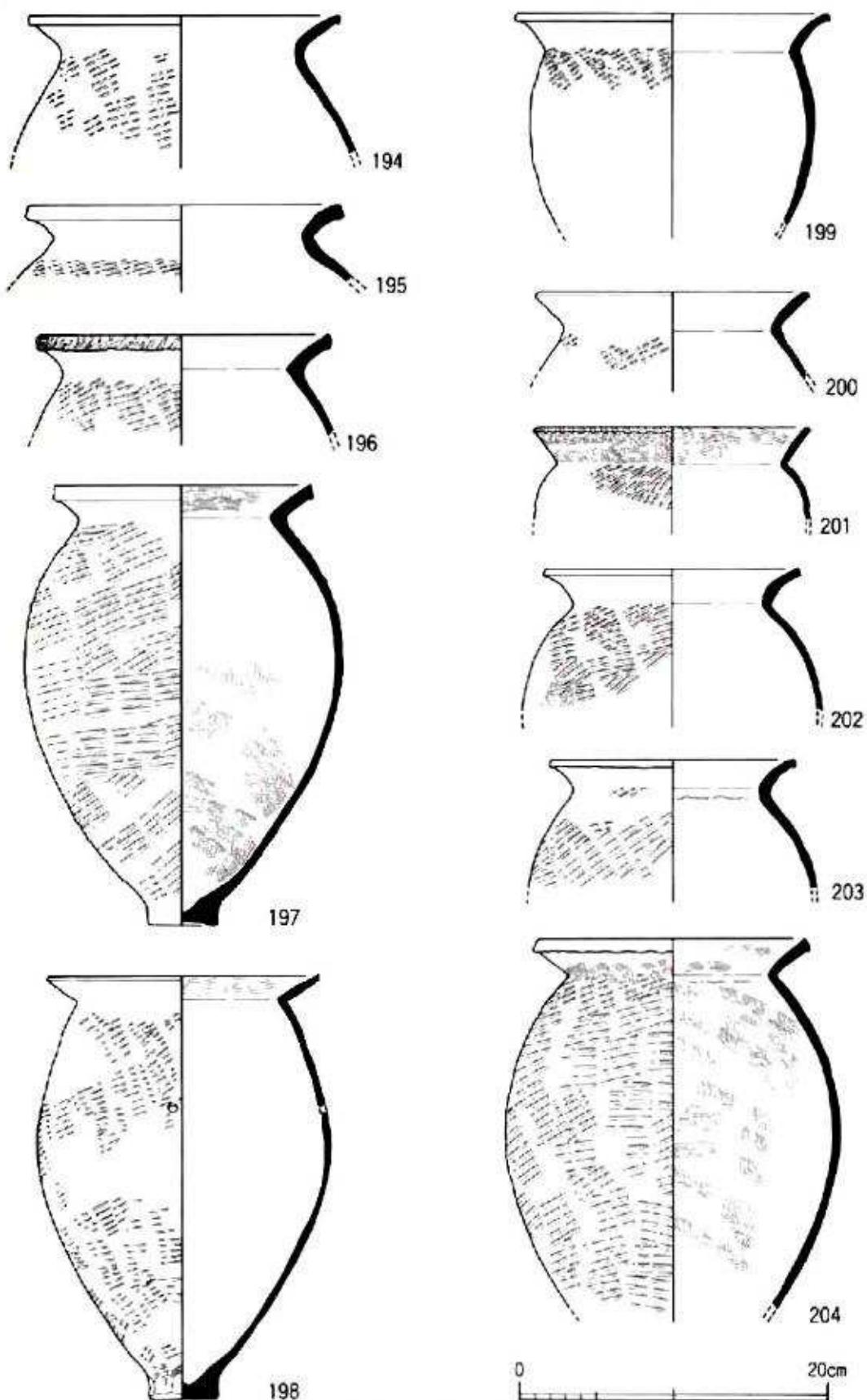


第83図 SD29出土土器(2)

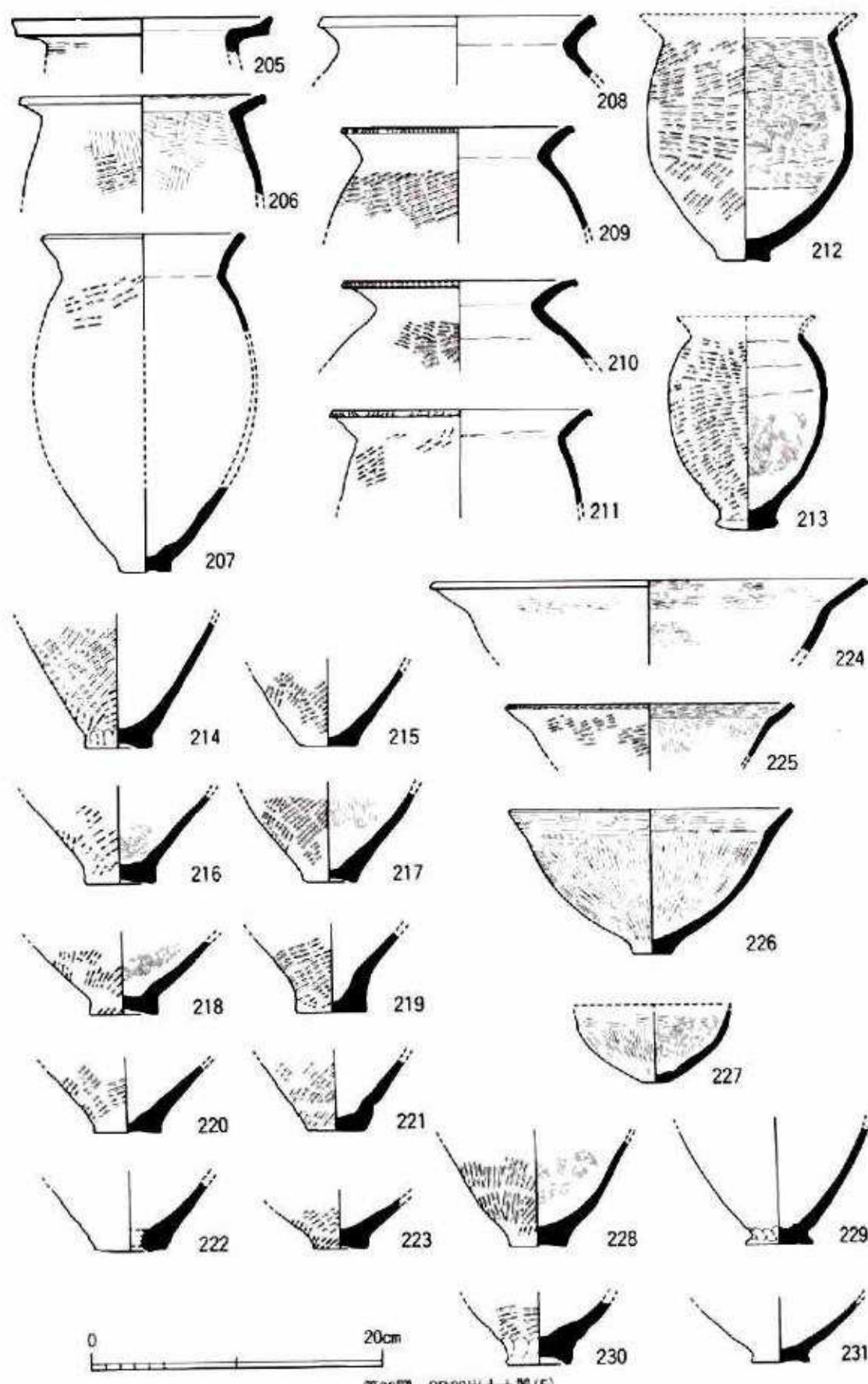


第64図 SD29出土土器(3)

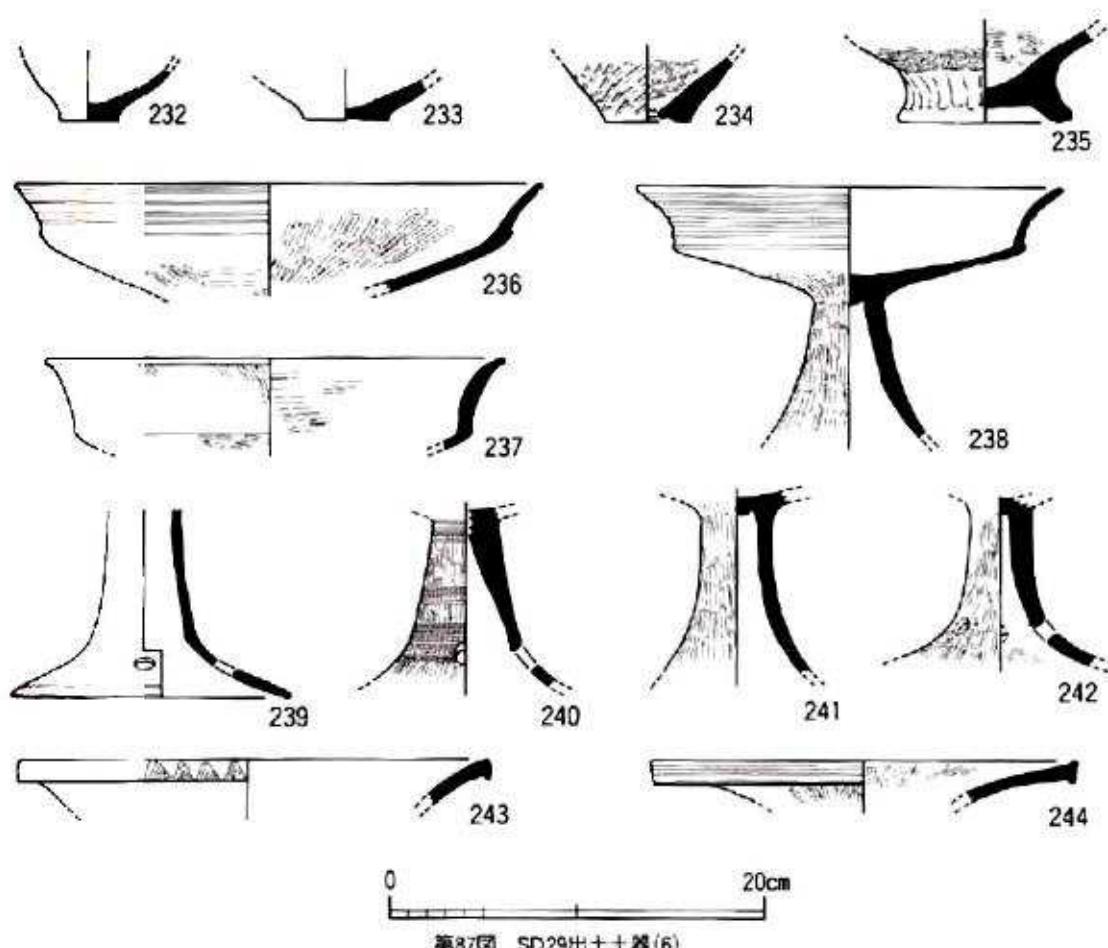
- 短頸壺** 180と182が該当する。180については、広口壺とも考えられるが、当タイプに分類しておく。
- 直口壺** 183の1個体である。口縁部はく字形に屈曲し、短く直線的にのびる。縁部は、外側からつまむようなユビオサエにより成形されている。体部のつくりは丁寧とはいえず、粘土組の痕が顕著に観察できる。
- 長頸壺** 184の1個体である。口縁部を欠く。体部から頸部への変換部に凸帯を貼り付け、その上に刻み目を施している。この凸帯の下側には7条の櫛描波状文が、上側には下から7条の櫛描波状文・7条の櫛描直線文・7条の櫛描波状文が施文されている。長頸壺のなかでも大型に分類されるものである。
- 底部** 大型の底部から小型の底部までバリエーションをもつ。突出した平底の特徴をもつものは少なく、全体的に丸底化の傾向が認められる。
- 壺** 量的には最も多く出土している器種である。口縁部の形態から、く字形に屈曲する一般的なV様式系壺と、他のタイプとに分類できる。
- 前者のタイプが圧倒的に多い。口縁部の形態をみると、口縁縁部に面をもつ傾向が認められる。そして、縁面に刻み目を施すものも認められる。体部外面は叩き成形により仕上げ、その後ハケ調整を加えるものは202・204以外は認められない。また、法量的に大型・中型・小型の3タイプが認められる。
- なお、198の体部の最大径部には、径6mmの円孔が焼成後に穿たれている。
- 上記以外に分類される壺として、205と206がある。205は、体部に対して口縁部を水平方向へ屈曲させ、縁部を上方向につまみあげている。206は、基本的にはく字形口縁に分類されるものであるが、口縁部が他の個体に比べて短い傾向にある。また、体部を叩き成形後一部ハケ調整を加えている。
- 鉢** 大型鉢・中型鉢・小型鉢・有孔鉢・底部の各タイプが出土している。
- 大型鉢** 224の1個体である。内湾気味の体部に対して口縁部を屈曲させている。縁部を外下方にわずかにつまみ出している。
- 中型鉢** 225と226の2個体である。基本的な形態は大型鉢と同じである。ただし、225は、体部に叩き成形痕が顕著に残り、体部・口縁部とともにヘラミガキは施されていない。また、口縁縁部には刻み目が施されている。これに対して226は、口縁部・体部とも内外面をヘラミガキによって仕上げている。
- 小型鉢** 227の1個体である。口縁部を欠くため、全体の形態は明確でない。外曲はヘラミガキにより仕上げられているが、ヘラミガキは施されていない。底部は丸底傾向にあり、ヘラミガキにより仕上げられている。
- 有孔鉢** 234の1個体である。底部中央に焼成前に穿孔された径1cmの孔が認められる。
- 底部** 壺の底部との分離が困難な個体もある。全体的に小型で、底部から体部が内湾気味に立ち上がるものを当器種に分類した。235については、類例が認められないため、鉢に分類すべきか断定できない。内外面をヘラミガキで仕上げていることから、当器種に分類した。底部はユビオサエにより高台状に成形されている。



第85図 SD29出土土器(4)



第86図 SD29出土土器(5)



第37図 SD29出土土器(6)

- 高杯** 完存するものはないが、図化した7個体は基本的には同タイプに分類できるものと考えられる。236は、短く外反する口縁部に4条のヘラ描沈線文を施している。また238の口縁部外面には6条の凹線が施されている。
- 脚部** いずれも長脚に分類されるものである。239の裾部には1条の凹線文が施されている。240は、ヘラミガキにより仕上げた後、脚上端部に4条の、中位に3条の、下半部に7条の、ヘラ描沈線文が施されている。
- 蓋台** 図化できたのは2個体である。243は形態的には蓋の口縁部との判断に迷うところであるが、口径から器台と判断した。端面にはヘラ描きにより鋸歯文が施文されている。244も、口径および形態から器台と判断した。端部をわずかに拡張し、端面に3条の擬凹線が施されている。

第36表 SD29出土土器観察表(1)

番号	種類	法 量(cm)	調 整 方 法	内 面	残 存 率	備 考
167	普	口径:25.1 周径:15.8 腹径:16.9	外面:体部上半横方向のハサカキ。体部中段前後方向のハサカキ。 内面:底部ナタ調整。体部下半、底部エビオサニナタ調整。口縁部ハサカキ。	外面:に付い櫛 内面:	11.2%	周辺部
168	普	口径:22.4 周径:15.0 腹径:14.1	外面:体部上半横方向のハサカキ。口縁部横方向のハサカキ。 内面:底部ナタ調整。体部下ク前り底中段ハサカキ調整。頭部横方向のハサカキ。 口縁部ハサカキ。	外面:に付い櫛 内面:櫛	付帯充分	
169	普	口径:22.6 周径:15.7 腹径:14.6	外面:体部横方向の為不明。底部底底の為不明。(口縁部ナタ調整。 内面:体部上半ハサカキ。体部上半ヨドオサニナタ調整。口縁部ハサカキ。	外面:頭部 内面:櫛	口縁部2/3 体部1/4	
170	普	口径:22.0 周径:15.5 腹径:14.6	外面:底部ハサカキ。 内面:口縁部横方向のハサカキ。	外面:に付い櫛 内面:櫛	口縁部2/3	
171	普	口径:22.0 周径:15.5 腹径:	外面:底部ナタ調整後横方向のハサカキ。口縁部ハサカキ調整後 横ナタ調整。ハサカキ。 内面:頭部-口縁部横方向のハサカキ。	外面:櫛 内面:櫛	口縁部1/4	
172	普	口径:23.9 周径:17.2 腹径:	外面:体部斜めのハサカキ。頭部横方向のハサカキ。 内面:体部上半ヨドオサニ。底部底底の為不明。	外面:に付い櫛 内面:ヨドオサニ	頭部は付帯充分	
173	普	口径:21.4 周径:15.1 腹径:	外面:底部船方向のハサカキ。口縁部ハサカキナタ調整。 内面:頭部-口縁部横方向のハサカキ。	外面:櫛 内面:頭部 内面:明褐色	11.3%	
174	普	口径:18.0 周径:14.3 腹径:	外面:頭部-口縁部ハサカキ調整後ナタ調整。 内面:頭部の為不明。	外面:櫛 内面:櫛	口縁部3/4	
175	普	口径:16.5 周径:10.2 腹径:	外面:頭部ナタ調整。口縁部ナタナタ。 内面:口縁部ナタナタ後、頭部-口縁部ハサカキ。	外面:に付い櫛 内面:に付い櫛	11.3%	
176	普	口径:19.0 周径:15.6 腹径:	外面:体部横方向のハサカキ。 内面:頭部-口縁部横方向のハサカキ。	外面:櫛 内面:櫛	頭部付帯充分	
177	普	口径:20.5 周径:17.1 腹径:	外面:頭部-口縁部横方向のハサカキ。 内面:頭部ナタ調整。口縁部横方向のハサカキ。	外面:に付い櫛 内面:明褐色	11.3%	
178	普	口径:14.8 周径:12.2 腹径:	外面:頭部ハサカキ。口縁部ナタナタ調整。 内面:頭部-口縁部横方向の調整。	外面:に付い櫛 内面:に付い櫛	11.3%	
179	普	口径:13.6 周径:11.9 腹径:	外面:頭部-口縁部横方向のハサカキ。 内面:頭部-口縁部ハサカキ。	外面:櫛 内面:に付い櫛	11.3%	
180	普	口径:17.6 周径:14.3 腹径:	外面:頭部-口縁部ナタナタ調整後ナタナタ調整。口縁部ナタナタ調整。 内面:頭部-口縁部ハサカキ。	外面:櫛 内面:櫛	11.3%	
181	普	口径:14.6 周径:12.8 腹径:	外面:頭部ナタカキ。口縁部ヨドオサニ後横ナタ調整。 内面:頭部ハサカキ調整後、ナタ調整。口縁部ヨドオサニ後横ナタ調整。	外面:櫛 内面:に付い櫛	11.3%	
182	普	口径:13.2 周径:10.2 腹径:	外面:頭部の為不明。 内面:頭部の為不明。	外面:に付い櫛 内面:に付い櫛	11.3%	
183	普	口径:10.7 周径:10.0 腹径:14.5	外面:体部ナタ調整。頭部-口縁部ヨドオサニ後横ナタ調整。ナタ 調整。 内面:体部ナタ調整。口縁部ナタ調整。	外面:に付い櫛 内面:に付い櫛	11.3%	
184	普	口径:13.4 周径:12.5 腹径:	外面:頭部ナタ調整。頭部ナタカキ。 内面:頭部-頭部ナタ調整。	外面:に付い櫛 内面:明褐色	頭部1/2	
185	普	口径:13.4 周径:12.4 腹径:	外面:頭部の為不明。 内面:頭部の為不明。	外面:に付い櫛 内面:に付い櫛	頭部1/2	
186	普	口径:10.9 周径:10.5 腹径:	外面:頭部ナタ調整。体部下ハサカキ。 内面:ナタ調整。	外面:に付い櫛 内面:灰黃一灰	頭部充分	
187	普	口径:14.6 周径:12.6 腹径:	外面:底部ナタ調整。体部下半ヨドオサニ後ナタ調整。 内面:頭部ヨドオサニ。体部下ハサカキ調整後ナタ調整。	外面:櫛 内面:櫛	頭部充分	
188	普	口径:13.9 周径:12.7 腹径:	外面:頭部ハサカキ。体部下ハサカキ。 内面:ナタ調整。	外面:櫛-灰白 内面:頭部-20%	頭部充分	

第37表 SD29出土土器観察表(2)

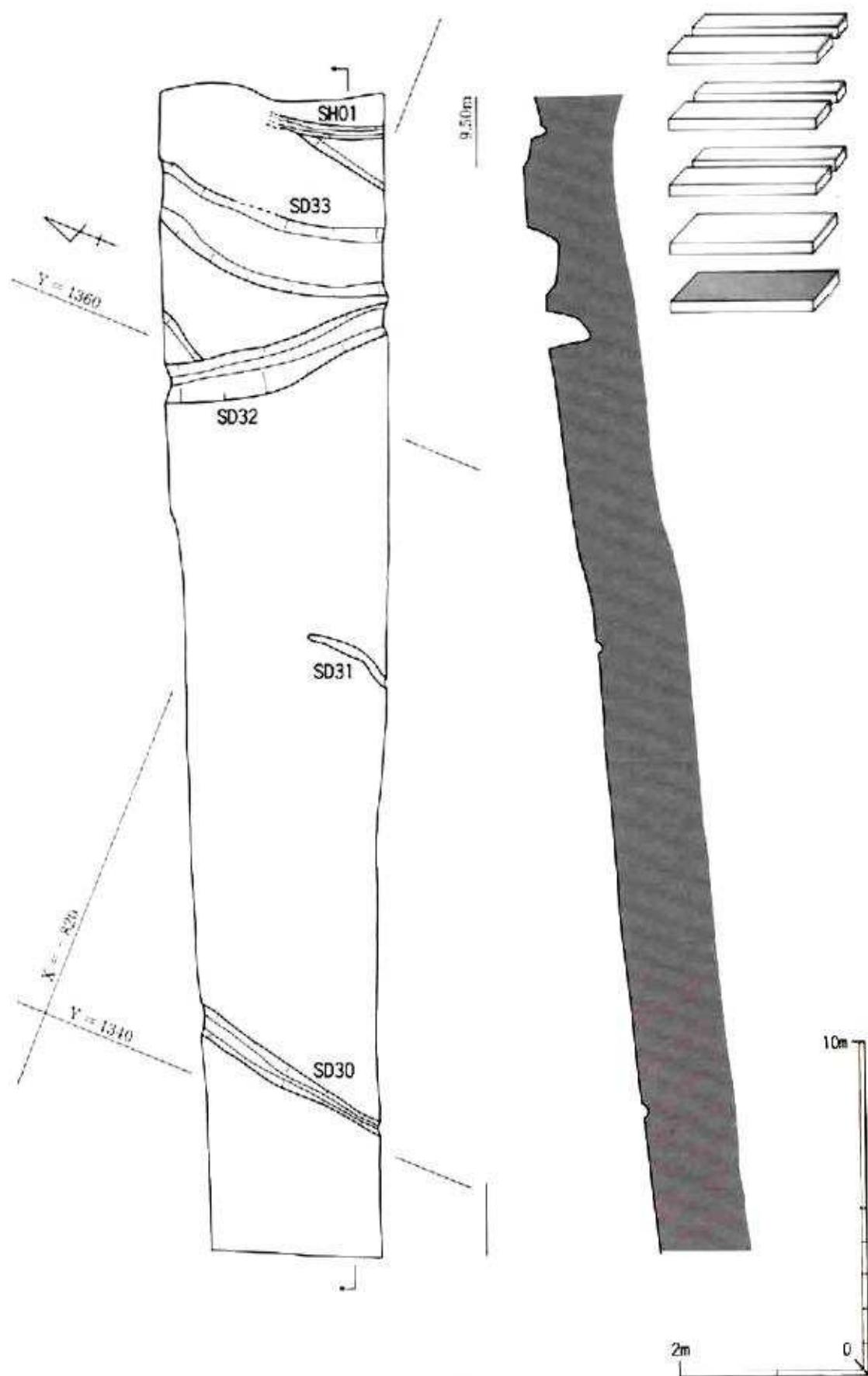
番号	器種	法 量(cm)	調 査 項 式	色 調	残 存 率	備 考
189	壺	口径: 13.5 脚径: 12.2 腹径:	外側: 外部に底部土台調整、体部下半部土台 内側: 土台調整。	外面: 淡青・褐 内面: 江戸白・黄緑	底部生存	
190	壺	口径: 15.8 脚径: 13.3 腹径:	外側: 底部土台調整、体部下半部土台 内側: 底部エビオサニ。	外面: 棕 内面: 褐	底部生存	
191	壺	口径: 13.4 脚径: 12.1 腹径:	外側: 底部土台調整、体部板土台調整 内側: 土台調整。	外面: 淡青・褐 内面: 淡青・黄緑	底部生存	
192	壺	口径: 13.7 脚径: 13.0 腹径:	外側: 底部土台調整、体部心土台 内側: 板土台調整。	外面: 淡青・褐 内面: 江戸白・黄緑	底部生存	
193	壺	口径: 16.0 脚径: 15.2 腹径:	外側: 底部土台調整、体部心土台 内側: 没土台調整。	外面: 淡青・褐 内面: 江戸白・黄緑	底部生存	
194	壺	口径: 19.5 脚径: 16.0 腹径:	外側: 体部・脚部叩き成形後、頭部・口縁部土台土台 内側: 体部・口縁部土台土台、頭部土台土台調整。	外面: 棕 内面: 棕	口縁部1/4	
195	壺	口径: 19.2 脚径: 17.1 腹径:	外側: 体部・頭部叩き成形後、頭部・口縁部土台調整 内側: 体部土台調整、頭部エビオサニ、口縁部土台土台調整。	外面: 淡青・褐 内面: 黄白	口縁部1/10	
196	壺	口径: 18.9 脚径: 15.9 腹径:	外側: 体部叩き成形、頭部・口縁部エビオサニ 内側: 体部土台調整、頭部エビオサニ、口縁部土台土台調整。	外面: 淡青・褐 内面: 黄白	口縁部3/5	
197	壺	口径: 16.8 脚径: 15.2 腹径: 17.0	外側: 体部叩き成形後、体部下部板土台調整、頭部ハタ 内側: 体部ハタ調整後土台土台調整。口縫ハタ調整。	外面: 淡青・褐 内面: 淡青・褐	底部土台生存	
198	壺	口径: 17.7 脚径: 17.8 腹径:	外側: 体部叩き成形後、口縁部ハタ調整後土台土台調整 内側: 体部ハタ調整、口縁部ハタ調整後土台土台調整。	外面: 棕 内面: 棕	口縁部1/2 小位復付着	
199	壺	口径: 16.6 脚径: 16.6 腹径:	外側: 体部叩き成形後、口縁部土台土台調整 内側: 体部土台土台調整、口縁部ハタ調整後土台土台調整。	外面: 棕 内面: 淡青	口縁部1/1	
200	壺	口径: 17.3 脚径: 14.1 腹径:	外側: 体部・頭部叩き成形後、頭部・口縁部土台土台、口縁部表面調 内側: 体部エビオサニ、土台調整。口縁部表面の為不明。	外面: 淡青・褐 内面: 淡青・褐	口縁部1/1	
201	壺	口径: 17.6 脚径: 15.0 腹径:	外側: 体部叩き成形、口縁部ハタ調整 内側: 体部土台土台調整、口縁部ハタ調整。	外面: 棕 内面: 棕	口縁部1/2	
202	壺	口径: 16.4 脚径: 13.0 腹径:	外側: 体部叩き成形後ハタ調整。口縁部土台土台調整 内側: 体部表面の為不明、口縁部土台土台調整。	外面: 棕 内面: 淡青	口縁部1/4	
203	壺	口径: 15.7 脚径: 12.8 腹径:	外側: 体部叩き成形後土台土台調整、口縁部土台土台土台調整 内側: 体部・口縁部ハタ調整。	外面: 淡青 内面: 淡青	口縁部3/4	
204	壺	口径: 17.4 脚径: 13.6 腹径:	外側: 体部・頭部叩き成形後、頭部・口縁部ハタ調整 内側: 体部・口縁部ハタ調整後土台土台調整。	外側: 淡青・褐 内面: 淡青	口縁部生存	
205	壺	口径: 17.8 脚径: 13.6 腹径:	外側: 体部叩き成形、口縁部ハタ調整 内側: 頭部・口縁部ハタ調整後土台土台調整。	外側: 淡青・褐 内面: 淡青・褐	口縁部1/10 保有	
206	壺	口径: 16.5 脚径: 13.6 腹径:	外側: 体部叩き成形後土台土台調整、口縁部土台土台後土台土台調整 内側: 体部ハタ調整、口縁部ハタ調整後土台土台調整。	外側: 暗赤 内面: 淡白・灰黃	口縁部1/3	
207	壺	口径: 13.3 脚径: 11.2 腹径:	外側: 体部叩き成形後土台土台調整、口縁部土台土台後土台土台調整 内側: 体部土台土台土台後土台土台調整、体部土台土台後土台土台調整、口縁部土台土台後土台土台調整。	外側: 棕 内面: 淡青	口縁部生存 底部生存	
208	壺	口径: 18.0 脚径: 16.2 腹径:	外側: 体部土台調整、頭部・口縁部土台土台後土台土台調整 内側: 体部エビオサニ、口縁部表面の為不明	外側: 淡青・黄緑 内面: 淡青	口縁部1/1	
209	壺	口径: 18.5 脚径: 12.9 腹径:	外側: 体部叩き成形後頭部ハタ調整、口縁部ハタ土台土台後土台土台調整 内側: 体部ハタ調整、口縁部ハタ調整。	外側: 棕 内面: 淡青	口縁部生存	
210	壺	口径: 15.2 脚径: 11.5 腹径:	外側: 体部叩き成形、口縁部土台土台後土台土台調整 内側: 体部ハタ調整後土台土台調整、口縁部土台土台調整。	外側: 淡青・褐 内面: 淡青・褐	口縁部1/1	

第38表 SD29出土土器観察表(3)

番号	器種	底径(cm)	測量・特徴	外側	内側	備考
211	甕	口徑：17.5 底径：14.3 高さ：6.5 幅径：	外面：体部膨張の為不明。頭部膨張の為不明。口縁部下ハク調整。 内面：底部下ハク調整。体部上半部エビオサハク調整。口縁部ハク1.5cm。	外側：口縁部に深い槽	口縁部1/2	
212	甕	口径：15.9 底径：14.2 高さ：5.8 幅径：14.0	外面：体部叩き成形。 内面：底部エビオサハク、体部ハク調整。	外側：縁	底部元存	底部内側削除
213	甕	口径：14.3 底径：14.0 高さ：5.3 幅径：14.0	外面：体部叩き成形後一部ハクサハク調整。 内面：底部エビオサハク、体部下ハク調整。体部上半部エビオサハク調整。	外側：赤褐色 内面：赤褐色	底部元存 体部3/4	
214	甕	口径：14.7 底径：14.7 高さ：8.5 幅径：	外面：底部エビオサハク。体部叩き成形後ハク調整。 内面：底部エビオサハク、体部ハク調整。	外側：口縁部に深い槽	底部元存	
215	甕	口径：14.0 底径：14.0 高さ：8.8 幅径：	外面：体部叩き成形後ハク調整。 内面：底部エビオサハク、体部ハク調整。	外側：口縁部に深い槽	底部元存	
216	甕	口径：15.0 底径：14.9 高さ：8.8 幅径：	外面：底部エビオサハク。体部叩き成形後エビオサハク。 内面：ハク調整。	外側：口縁部に深い槽 内面：口縁部に深い槽	底部元存	
217	甕	口径：13.7 底径：13.7 高さ：6.2 幅径：	外面：底部エビオサハク。体部叩き成形後ハク調整。 内面：底部エビオサハク後軸子ハク調整。体部ハク調整。	外側：口縁部に深い槽 内面：口縁部に深い槽	底部元存	
218	甕	口径：14.8 底径：14.8 高さ：5.9 幅径：	外面：底部エビオサハク。体部叩き成形後ハク調整。 内面：ハク調整後ハク調整。	外側：口縁部に深い槽 内面：口縁部に深い槽	底部元存	
219	甕	口径：14.6 底径：14.6 高さ：5.3 幅径：	外面：底部一体部叩き成形後。底部エビオサハク。 内面：底部エビオサハク。体部板付部調整。	外側：縁 内面：縁	底部元存	
220	甕	口径：14.8 底径：14.8 高さ：5.5 幅径：	外面：底部一体部叩き成形後。底部エビオサハク。体部ハク調整。 内面：軸子ハク調整。	外側：縁 内面：口縁部に深い槽	底部元存	
221	甕	口径：14.2 底径：14.2 高さ：5.2 幅径：	外面：底部一体部叩き成形。 内面：底部エビオサハク。体部ハク調整。	外側：縁・黒褐色 内面：口縁部に深い槽	底部元存	
222	甕	口径：14.9 底径：14.6 高さ：4.6 幅径：	外面：底部エビオサハク。体部ハク調整。 内面：底部エビオサハクハク調整。	外側：口縁部に深い槽 内面：口縁部に深い槽	底部1/2	
223	甕	口径：13.8 底径：13.8 高さ：4.4 幅径：	外側：底部一体部叩き成形後。底部エビオサハク。 内面：軸子ハク調整。	外側：口縁部に深い槽 内面：口縁部に深い槽	底部元存	
224	盆	口径：129.4 底径：124.6 高さ：2.0 幅径：	外面：体部膨張の為不明。口縁部ハクハク。 内面：底部ハクハク調整後ハクハク。	外側：口縁部に深い槽 内面：縁	口縁部1/8	
225	盆	口径：19.2 底径：16.7 高さ：1.7 幅径：	外側：底部・口縁部叩き成形後。口縁部エビオサハク。 内面：底部ハクハク調整。	外側：縁 内面：縁	口縁部1/6	
226	盆	口径：19.0 底径：17.7 高さ：2.8 幅径：	外側：底部・口縁部ハクハク。 内面：底部・口縁部ハクハク。	外側：口縁部に深い槽 内面：口縁部に深い槽	口縁部元存	
227	盆	口径：19.1 底径：17.9 高さ：1.9 幅径：	外側：底部・口縁部ハクハク。口縁部横ナリハク調整。 内面：底部エビオサハク。体部・口縁部ハクハク調整。口縁部横ナリハク調整。	外側：縁 内面：縁	底部・体部	
228	盆	口径：17.7 底径：17.7 高さ：1.3 幅径：	外側：底部・体部叩き成形後。底部エビオサハク。 内面：底部板付ハクハク調整。体部ハクハク調整後ハクハク調整。	外側：縁 内面：縁	底部元存	
229	盆	口径：14.6 底径：14.6 高さ：1.3 幅径：	外側：底部ハクハク。体部ハクハク調整。 内面：底部板付ハクハク調整。体部ハクハク調整。	外側：口縁部に深い槽 内面：口縁部に深い槽	底部1/3	
230	盆	口径：14.9 底径：14.9 高さ：1.4 幅径：	外側：底部・体部叩き成形後。底部エビオサハク。 内面：底部ハクハク。	外側：口縁部に深い槽 内面：縁	底部元存	
231	盆	口径：13.5 底径：13.5 高さ：1.2 幅径：	外側：底部・口縁部ハクハク。 内面：底部ハクハク。	外側：口縁部に深い槽 内面：縁	底部1/6	
232	盆	口径：13.5 底径：13.5 高さ：1.2 幅径：	外側：底部・口縁部ハクハク。	外側：縁	底部1/6	

第39表 SD29出土土器観察表(4)

番号	基種	底径(cm)	調査・作法	色調	残存率	備考
233	鉢	口径: 14.5 脚径: 13.1 脚高: 2.1	外面: 旋削+ビオリニ。体部削減のみ不明。 内面: 底部+ビオリニ。体部+内調整。	外面: 黒 内面: に赤い緑	底部完存	
234	鉢	口径: 11.6 脚径: 11.1 脚高: 2.1	外面: 底部+体部叩き造形。 内面: ベルト調整。	外面: 黒+赤黄褐 内面: 細灰青	底部1/3	
235	鉢	口径: 19.3 脚径: 16.9 脚高: 2.1	外面: 底部+ビオリニ。体部+内調整後+外+内削 内面: ベルト調整。	外面: に赤い緑 内面: に赤い緑	底部ほぼ完全	
236	碗	口径: 32.6 脚径: 22.5 脚高: 2.1	外面: 体部+ベルト+ガキ。口縁部擦り+調整。 内面: 体部+ベルト+ガキ。口縁部擦り+調整。	外面: 不規 内面: 明褐色	口縁部1/4	
237	高杯	口径: 21.2 脚径: 15.3 脚高: 2.1	外面: 体部+口縁部+ベリ+ガキ。 内面: 体部+口縁部+ガキ+ガキ。	外面: に赤い黄褐 内面: に赤い黄褐	口縁部1/5	
238	高杯	口径: 22.4 脚径: 13.8 脚高: 2.1	外面: 脚部+ベリ+ガキ。体部+ベリ+ガキ。口縁部擦り+調整。 内面: 脚部下+ベリ+ガキ+調整。杯底+ベリ+ガキ。	外面: 棕 内面: 緑	杯部1/3	
239	高杯	口径: 19.9 脚径: 11.2 脚高: 5.5	外面: 脚部前部+内調整。脚上半部削減のみ不明。 内面: 脚部下半部+ベリ+ガキ+調整。脚下部+内調整。	外面: 棕 内面: 緑	脚部1/2	
240	高杯	口径: 18.6 脚径: 13.8 脚高: 2.1	外面: 脚部+ベリ+ガキ 内面: 脚部+内調整。体部+ベリ+ガキ。	外面: に赤い黄褐 内面: に赤い黄褐	裏部1/3	
241	高杯	口径: 19.3 脚径: 13.8 脚高: 2.1	外面: 脚部+ベリ+ガキ 内面: 脚部+内調整。体部削減のみ不明。	外面: 棕+朱 内面: 朱	裏部又存	
242	高杯	口径: 19.1 脚径: 13.3 脚高: 2.1	外面: 脚部+ベリ+ガキ 内面: 脚部+ベリ+内調整後+ベリ+ガキ。	外面: 棕 内面: に赤い緑	脚部1/3又存	
243	石付	口径: 25.0 脚径: 19.3 脚高: 2.1	外面: 体部削減のみ不明。口縁部擦り+調整。 内面: 体部+口縁部+ベリ+ガキ。口縁部擦り+調整。	外面: に赤い黄褐 内面: に赤い緑	口縁部若干	
244	石付	口径: 22.4 脚径: 16.8 脚高: 2.1	外面: 体部+口縁部+ベリ+ガキ。口縁部擦り+調整。 内面: 体部+口縁部+ベリ+ガキ。	外面: 棕 内面: 棕	口縁部1/4	



第88図 2区第6面

6. 第6面の遺構と遺物

(1) 第6面の時期

出土遺物

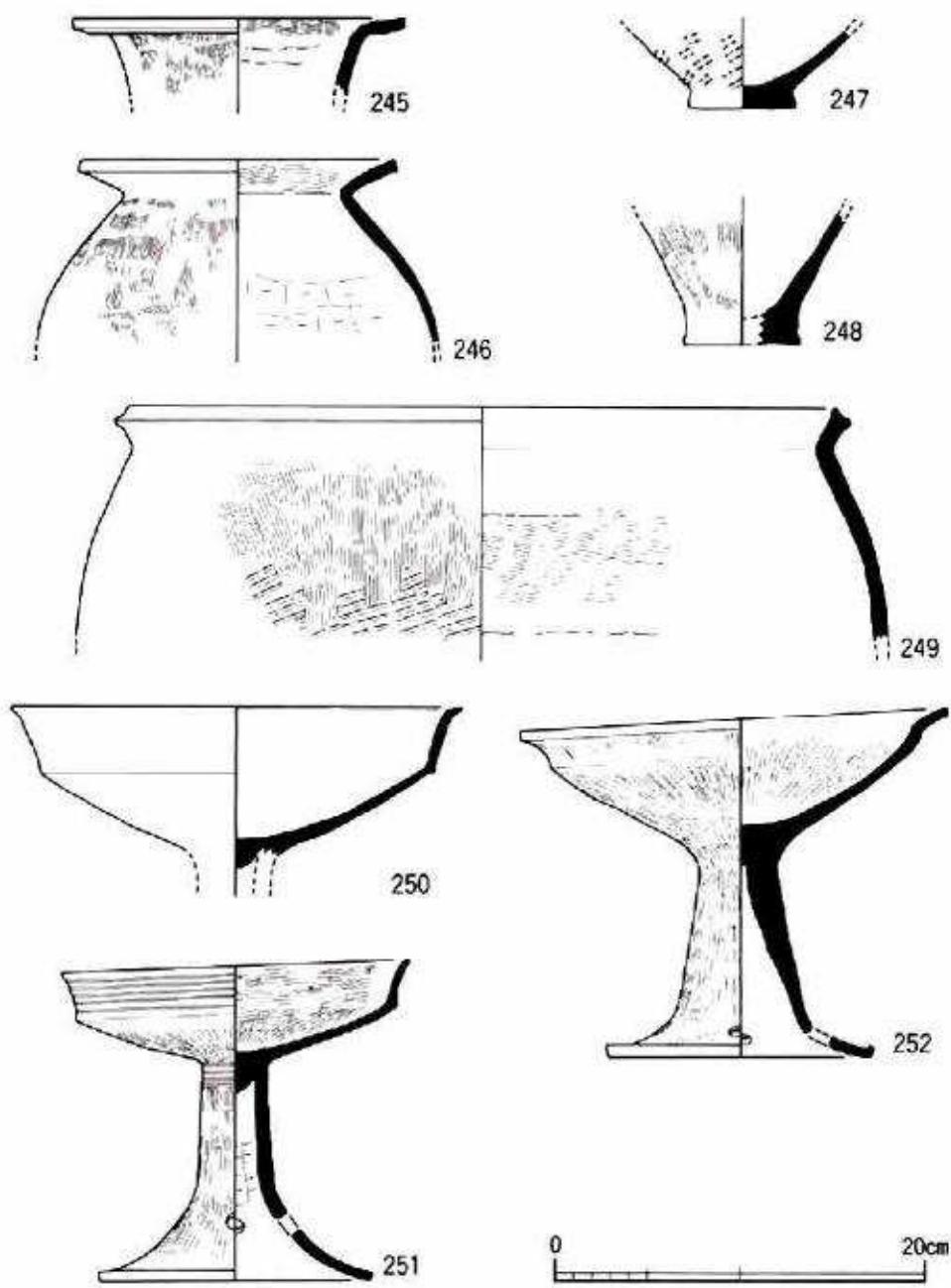
壺・甕・高杯が出土している。

壺

245の1個体のみである。直線的に立ち上がる頸部に対して口縁部を水平方向に屈曲させている。

甕

246は、口縁部がく字形に屈曲する甕であるが、体部上半の形態および叩き成形痕が認められず全面にハケ調整が施されている点において、当遺跡出土の甕と大きく異なる。他地域からの搬入もしくはその影響が考えられる。247は、一般的なV様式系甕の底部と考えられる。これに対して、248一般的ではない。一見したところ前期に特徴的な形態であるが、船上から前期の土器ではないと判断される。249は、大型の土器で、口縁部が短く



第39図 2区第6面出土土器

直立する。形態的特徴から判断して、中期まで遡るものと考えられる。

高杯 固化した3個体はいずれも圓形杯部を有する高杯である。250は、口縁端部を外方につまみ出すように横ナギ調整を施している。251は、口縁部外面に5本のヘラ彫沈線文が施されている。また脚部上端部にも4本のヘラ彫沈線文が施されている。

252は上記の2個体とは口縁部の形態を異にする。内湾気味に立ち上がる体部に対して、口縁部は短く、大きく外反させている。口縁部と体部との比率において、体部が深い傾向にある。

第40表 2区第6面出土土器観察表

番号	器種	法 量(cm)	調 整 方 法	色 調	性 質	備 考
245	甕	口径:14.7 底径: 腹径:	外面:脚部ハサク調整・口縁部カビオサエ。 内部:脚部カビオサエ後ナギ調整・口縁部ハサク調整。	外面:褐 内部:褐	口縁部1/4	
246	甕	口径:16.6 底径: 腹径:	外面:体部・脚部ハサク調整後ナギ調整後、脚部・口縁部横ナギ調整。 内部:体部中央ハサク削り・体部上半ユビオサエ・口縁部ハサク調整後横ナギ調整。	外面:に赤い褐 内部:に赤い褐	口縁部出字有	
247	甕	口径:16.8 底径: 腹径:	外面:底面・脚部切き直し後、底部ヨビオサエ。 内部:脚部の舟不明	外面:褐 内部:褐	底面有	
248	甕	口径:16.3 底径: 腹径:	外面:底面・体部ハサク調整後、底部ヨビオサエ・体部ハサクナギ調整。 内部:ハサクナギ調整。	外面:淡赤褐 内部:に赤い褐	底部1/2	
249	甕	口径:13.8 底径: 腹径:	外面:体部凹成形後ハサク調整。脚部・口縁部横ナギ調整。 内部:体部ハサク調整・口縁部横ナギ調整。	外面:に赤い褐 内部:に赤い褐	口縁部1/2 体部・ 口縁部横行有	
250	高杯	口径:24.2 脚径: 底径:	外面:体部ハサク・だき・口縁部横ナギ調整。 内部:体部下半ナギ調整。体部上半・口縁部形状の舟不明	外面:に赤い褐 内部:灰黄	脚部1/2	
251	高杯	口径:18.6 脚径:13.6 底径:14.1	外面:脚部横ナギ調整。脚部上半ハサクサキ・体部ハサク だき・口縁部横ナギ調整。 内部:脚部泥ハラナギ調整。脚部下部ハサク削り・体部ハサクサキ	外面:青褐色 内部:褐	1137充有	
252	高杯	口径:22.8 脚径:19.2 底径:14.0	外面:脚部横ナギ調整・脚部・口縁部ハサクサキ・口縁部ハサクサキ 内部:脚部泥ナギ調整・脚部下部ハサク削り後ナギ調整・体部ハサク・舟・口縁部横ナギ調整。	外面:に赤い褐 内部:に赤い褐	1138充有	

(3)溝

SD30

検出状況 調査区の西端付近で検出された。周辺には遺構は存在しないが、SD31・SD33のように同じ方向の溝が調査区の東側で検出されている。

形状・規模 北から南方向の直線的な溝である。断面の形状はU字形を呈する。規模は検出された長さは6.43m、幅は30cm~74cm、平均幅は52cmを測り、深さは10cmと浅い。

埋土 暗灰色中砂~細砂の1層のみ確認できた。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

SD31

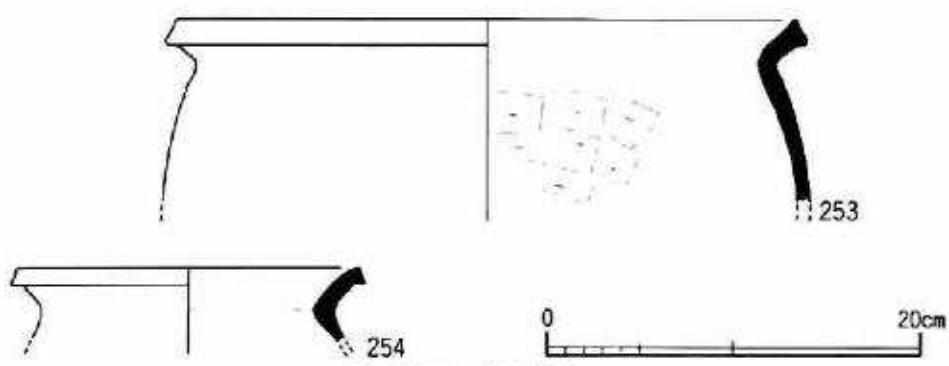
検出状況 調査区の中央付近で検出された。周辺には遺構は存在しないが、SD30・SD33のように同じ方向の溝が検出されている。

形状・規模 南北方向の彎曲した溝であるが、南北の比高差は10cmに溝たない。断面形はU字形を呈する。検出された長さは2.88m、幅は15cm~26cm、平均幅は21cmで、深さと5cmと浅い。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

SD32

- 検出状況** 調査区の東側付近で検出された。東側にはSD33が存在するが、若干方向が異なる。
- 形状・規模** 北西から南東方向の直線的な溝である。断面の形状はV字形に近い。規模は検出された長さが7.05m、幅が96cm~1.37m、平均幅が1.17m、深さは45cmを測る。
- 埋土** 暗灰色粗砂~細砂混じり極細砂の1層のみ確認できた。
- 出土遺物** 壺・甕・器台が出土しているが、國化できたのはいずれも壺である。
253は大型の壺である。口縁部を短く「く」字形に屈曲させ、縁部をわずかに拡張している。254も口縁部をく字形に屈曲させているが、253に比べて小型の壺である。



第90図 SD32出土土器

第41表 SD32出土土器観察表

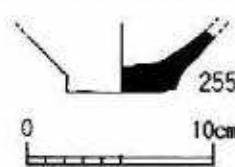
番号	名 称	法 間 (cm)	調 整 方 法	色 調	残存率	備 考
253	壺	口径: 33.0 底径: 30.1 高さ: 9.5 幅: 1.37	外面: 体部オーバーモルト、口縁部ヨコモルト調整 内面: 体部ハラカモルト、口縁部ヨコモルト調整	外面: 灰 内面: 灰	山林若木	
254	壺	口径: 18.2 底径: 15.7 高さ: 4.0 幅: 1.16	外面: 縁部ハラカモルト後オーバーモルト、口縁部ヨコモルト調整 内面: 体部、縁部、底部表面の不明、口縁部ヨコモルト調整	外面: 明黄灰 内面: 灰	白樺若木	

SD33

- 検出状況** 調査区東側で検出された。西側にはSD32があるが、若干方向が異なる。SD33と同方向の溝はSD30・SD31がある。SD33のすぐ東側にはSH01がある。

- 形状・規模** 北から南方向で、若干東側に彎曲するものは直線的な溝である。断面の形状は平底で、逆V字形である。検出した長さが7.39m、幅が1.53m~2.16m、平均幅が1.84m、底部の幅は82cm~1.47m、深さは21cmを測る。

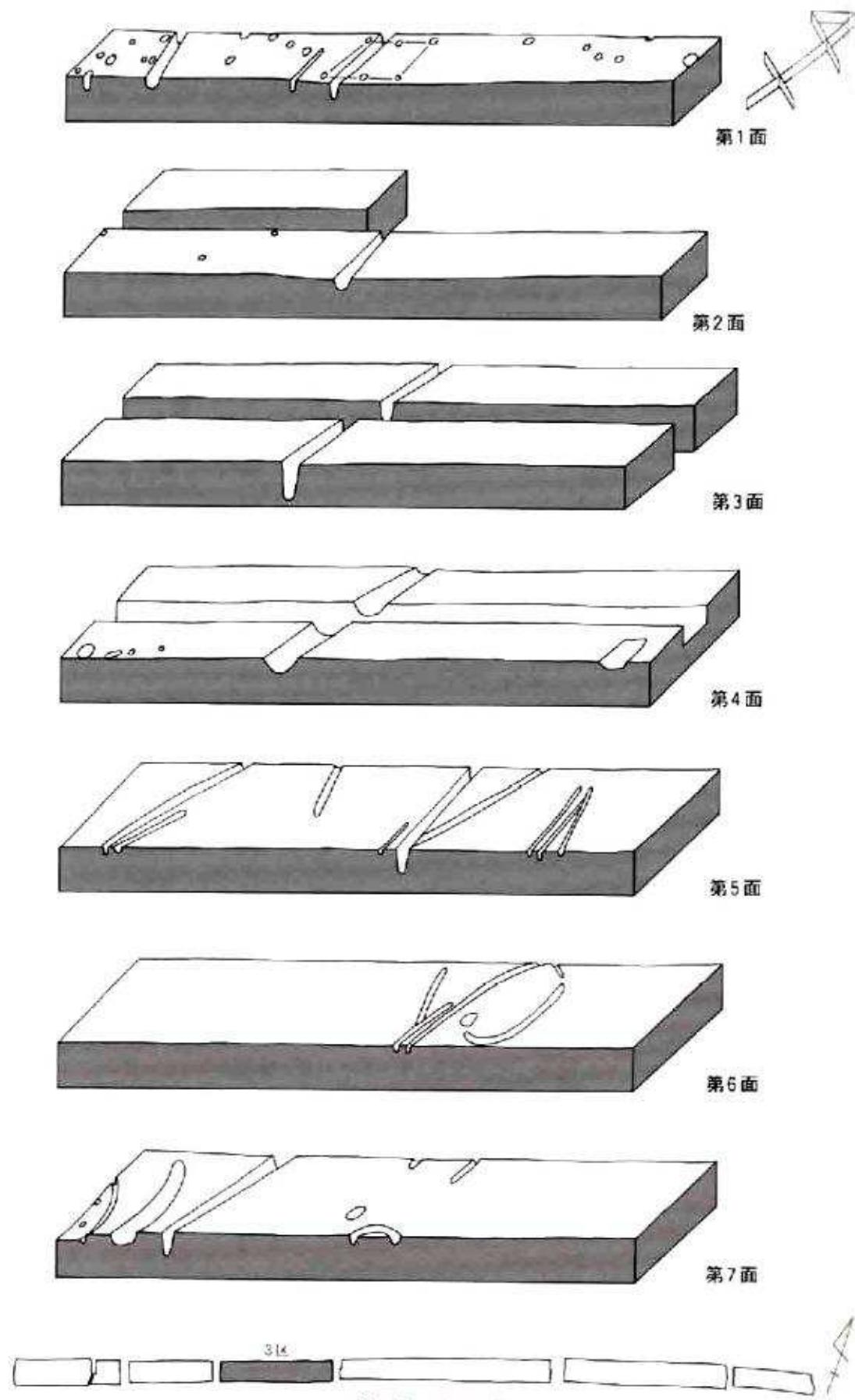
- 埋土** 黒色粗砂~細砂混じり極細砂の1層のみ確認できた。
- 出土遺物** 壺の底部1個体が出土している。



第91図 SD33出土土器

第42表 SD33出土土器観察表

番号	名 称	法 間 (cm)	調 整 方 法	色 調	残存率	備 考
255	壺	口径: 16.0 底径: 15.0 高さ: 5.5 幅: 1.47	外面: 旋削オーバーモルト、体部表面の不明 内面: 表面の不明	外面: にふい青根 内面: にふい青	底部充填	



第92図 3区の遺構

第3節 3区の遺構と遺物

1. 概要

(1) 概略

位置 2区の東側、4・5区の西側に位置する。両地区とはそれぞれサイフォンを境とする。現地表面の観察では、わずかに東から西側への傾斜が観察できる。

旧淡路鉄道 旧淡路鉄道建設による影響は、第1面においては北側全域が削平されている。第2面においては北側の東約 $1/2$ が削平されている。続く第3面・第4面においては、淡路鉄道に伴う側溝が調査区中央部を東西に削平されている。

遺構の検出 第1面から第7面の7面にわたって遺構を検出した。

第1面 墓立柱建物跡2棟と柱穴そして土壙1基・溝1条を検出した。

第2面 柱穴2穴と溝1条を検出したにとどまる。

第3面 遺構としては、溝1条を検出したにとどまる。しかし、調査区西側の遺構面上においていくつかの土器群を検出した。良好な一括資料になるものと考えられる。

第4面 柱穴数穴および、土壙3基・溝2条を検出したにとどまる。

第5面 検出した遺構は全て溝である。11条検出した。

第6面 遺構は、当調査区の中央やや東側に集中している。主な検出遺構は、土壙1基と溝8条である。

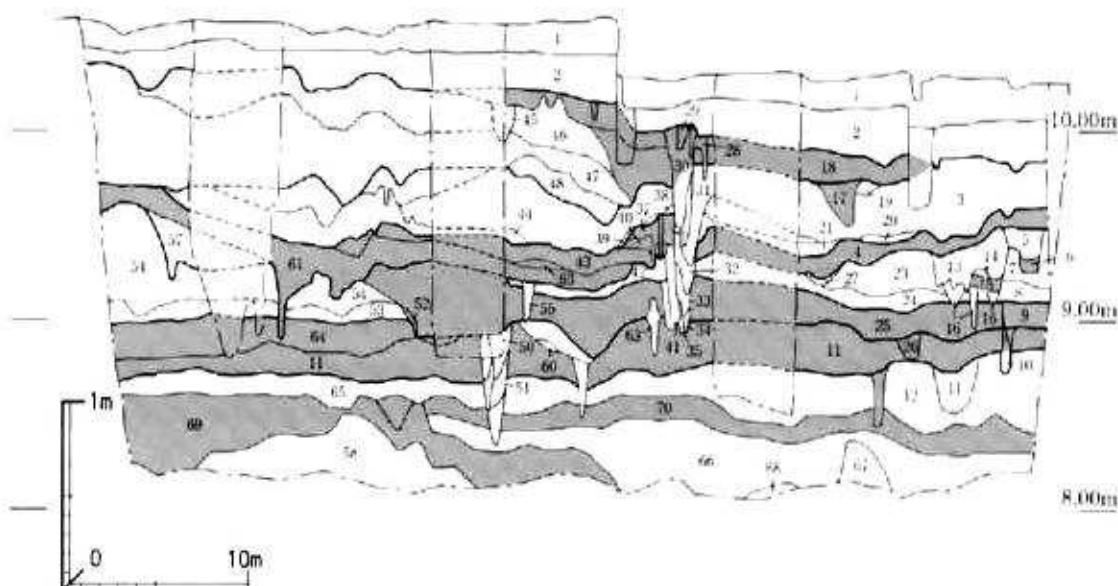
第7面 調査区の中央部から西側で遺構を検出した。主な検出遺構は、住居跡2棟・土壙1基・溝3条である。

このなかで、SH01は2区第6面で検出した住居跡に対応するものと考えられる。また、SH02については、弧状をなす溝を検出したのみであるが、住居跡に伴う側溝と考えている。



第93図 3区の調査

第3節 3区の地構と遺物



第94図 3区土層断面(南面)

第43表 3区土層注記

色調	土色番号	跡柱の大きさ	地名	色調	土色番号	跡柱の大きさ	備考
1 褐紅色	5786/6	細粒砂・粗砂		26 に赤い褐色	2.5786/1	粗砂・粗砂	
2 橙色	5784/7	粗砂・細砂	粗砂混じり	27 に赤い褐色	1.5785/1	粗砂・粗砂	
3 黄褐色	5783/3	粗砂砂・細砂	粗砂混じり	28 に赤い褐色	3.5785/1	シルト質細砂	細砂混じり
4 灰褐色	5785/2	粗砂・細砂	中砂混じり	29 に赤い褐色			
5 黑オリーブ色	5785/2	粗砂・細砂	粗砂混じり	30 に赤い褐色			
6 黑赤褐色	1073/1	粗砂・細砂	粗砂混じり	31 褐灰色	5785/1	細砂質混じり	粗砂混じり・土器含む
7 黑黄色	2.577/2	粗砂・細砂	粗砂混じり	32 褐灰色	2.5785/1	細砂・粗砂	粗砂混じり
8 黑褐色	2.577/2	粗砂		33 褐灰色	2.5785/2	粗砂	
9 開孔色	7.574/1	粗砂質混じり	粗砂混じり	34 褐灰色	2.5785/1	シルト質細砂	中砂・粗砂混じり
10 褐灰色	52/	シルト質細砂	上層・泥炭化	35 21.574/2			
11 黒褐色	572/1	粗砂質混じり	粗砂混じり	36 4.575/2			
12 青灰色	585/1	粗砂砂・中砂		37 褐灰色	7.5785/1		
13 灰褐色	588/2	粗砂	佐久山の遺道	38 12.575/1 黄褐色	1.0785/1		
14 黑褐色	2.577/2	粗砂		39 褐灰色	1.0785/1	シルト質細砂	粗砂・粗砂混じり
15 黑褐色	1083/1	粗砂・粗砂	中砂混じり	40 12.575/2 黑褐色	5784/1		
16 黑色	2.5781/1	粗砂・小砂		41 青灰褐色	1.0785/1		
17 黑褐色	2.5787/1	粗砂・細砂		42 灰白色	1.0785/1	粗砂・細砂	
18 黑色	2.5787/1	粗砂・細砂		43 灰褐色	2.577/2	シルト質細砂	
19 黑褐色	5881/2	粗砂		44 黄褐色	2.576/1	粗砂・細砂	
20 に赤い青褐色	10785/2	粗砂・細砂	粗砂混じり	45 12.575/4 黄褐色	2.576/4		
21 紫青褐色	10786/2	シルト質細砂		46 紫青灰褐色	5785/1	細砂質混じり・シルト	
22 黑褐色	7.5781/1	粗砂・細砂	粗砂混じり	47 12.575/3 黄褐色	1.0787/3	細砂質混じり・シルト	
23 に赤い青褐色	10785/2	粗砂・細砂		48 青灰褐色	52/1	細砂・細砂	粗砂混じり
24 土上同上				49 灰青褐色	1.0786/2	粗砂	
25 灰褐色	2.5781/1	シルト質細砂	粗砂混じり	50 灰青褐色	2.577/2	細砂	
26 紫青灰褐色	5783/1	シルト質細砂	粗砂混じり	51 灰褐色	1.0784/1	粗砂・細砂	
27 灰褐色	5785/2	粗砂	中砂混じり	52 黄褐色	2.575/3	粗砂	粗砂混じり
28 灰褐色	5781/2	粗砂		53 に赤い青褐色	5784/4	粗砂・細砂	
29 灰赤褐色	2.5783/1	粗砂・細砂		54 紫褐色	52/1	シルト質細砂	
30 黑色	2.5781/1	粗砂	中砂・粗砂混じり	55 紫褐色	365/1	粗砂質シルト・粗砂	
31 灰褐色	2.5783/1	粗砂・細砂	粗砂混じり	56 紫褐色	366/1	粗砂シルト・粗砂	
32 に赤い青褐色	10782/1	シルト質細砂	粗砂混じり	57 灰土・赤褐色	7.576/2	粗砂・小砂	
33 黑褐色	2.5785/1	シルト質細砂		58 灰色	7.574/1	シルト・粗砂質シルト	
34 褐褐色	5785/1	粗砂・細砂	土器含む	59 灰褐色	1063/1	粗砂質シルト	

(2) 基本層序と遺構の検出

3区は下内膳遺跡の所在する扇状地の中ではほぼ中央に位置し、4・5区と共に今回の調査区内において最も高所にある。土層の堆積状況では3面以下の下層については西側が下がる傾向にあるが、それより上面ではほぼ水平に近い状態で堆積している。

土層の堆積は、第94図および第43表に示したように、70層からなるが、基本的な層序としては、上層から順にI層からⅦ層の8つに分けることができる。これら8つの層はその上面に遺構面をもつが、I層は現地表面、II層は第1面、III層は第2面、IV層は第3面、V層は第4面、VI層は第5面、VII層は第6面、VIII層は第7面にそれぞれ対応する。

I層

この層は、今回の調査対象外と判断したため、機械により掘削した。

当遺跡の全てを覆う調査時の地表面を構成する層であり、水田及び畠地として利用されている。調査区の中央では旧淡路鉄道により搅乱されているが、この構造物をも含んだ層である。表土・床土の下はすぐに第1面がある。

II層

II層の上面が第1面である。上層との間に中世から古代の遺物を挟んでおり、同一面で柱穴および溝が検出されている。西側において土壤化した層が残っており、東側については削平された可能性が高い。II層を構成する層はいずれも粗砂から細砂の比較的粒子の粗い層から成っている。

III層

III層の上面が第2面である。上層との間には時期の確定できる遺物を挟んでいない。遺構としては、柱穴及び溝が検出されている。全体的に土壤化しているが、遺構の密度は薄い。東側についてはIV層からはほとんど堆積はないが、西側において粗砂混じりの細砂から極細沙（第3層）が中心に堆積している。

IV層

IV層の上面が第3面である。上層との間に弥生時代後期の遺物を挟んでおり、溝が検出されている。全体的に土壤化しており、比較的薄い層からなっている。砂粒も細砂から極細沙とやや細かい。

V層

V層の上面が第4面である。上層との間に弥生時代後期の遺物を挟んでおり、上層と柱穴が検出された。IV層の土壤層を取り除いたところを任意に面としてとらえているため、VI層の土壤層と接している中央付近以外は土壤化していない。層の堆積は東側と西側の2カ所に分かれているが、東側が粗砂・極細砂が中心、西側は多くの層が堆積しており、極細砂を中心としている。

VI層

VI層の上面が第5面である。上層との間に弥生時代後期の遺物を挟んでおり、溝が多数検出された。東側の一部以外は全体に土壤化している。層の堆積は西側と東側に分かれしており、両側ともシルト質極細砂で薄く堆積している。

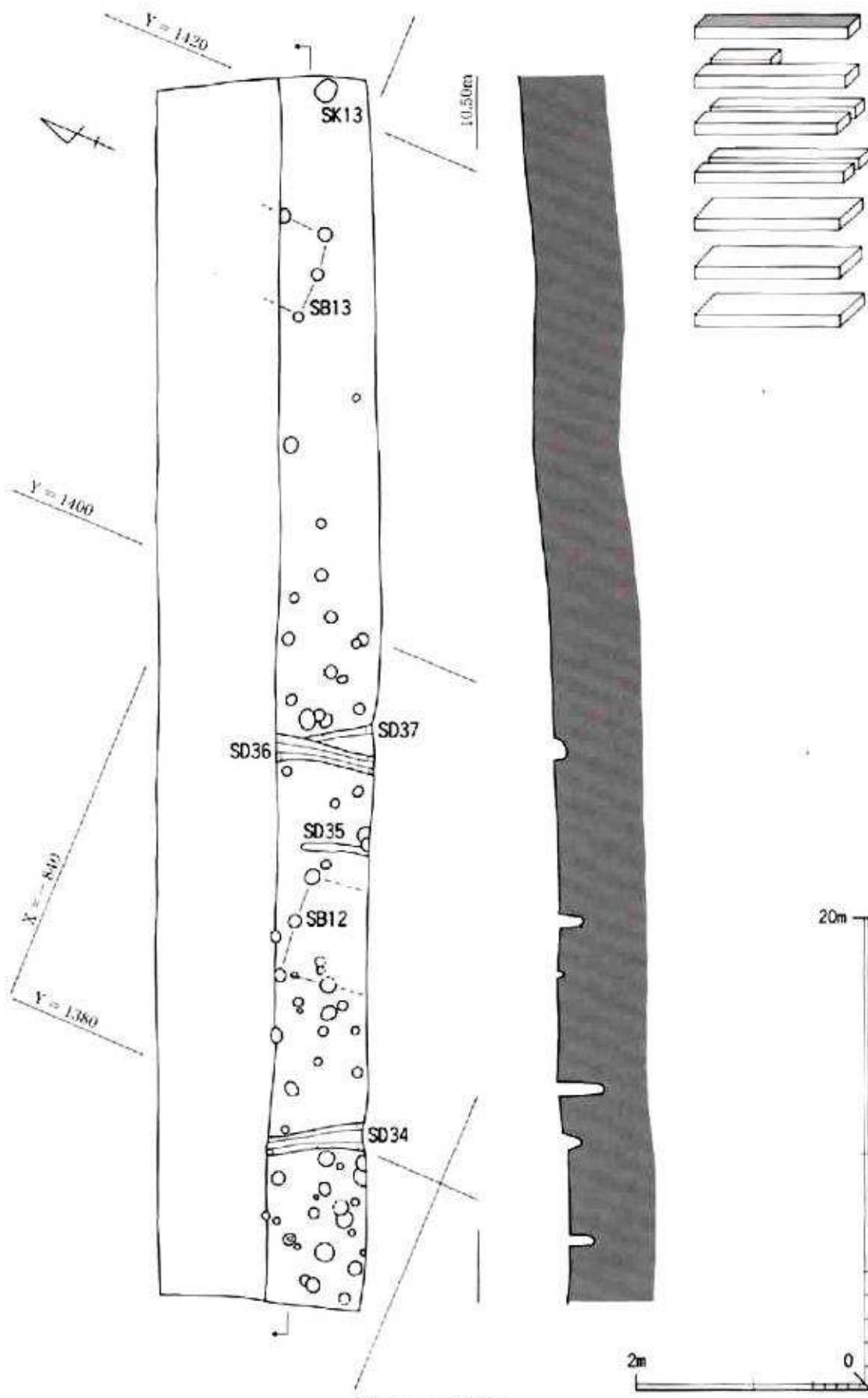
VII層

VII層の上面が第6面である。上層との間に弥生時代後期の遺物を挟んでおり、溝が検出された。極細砂質シルトが薄くほぼ水平に堆積しており、全体に土壤化している。

VIII層

VIII層の上面が第7面である。上層との間に弥生時代後期の遺物を挟んでおり、溝と柱穴・住居跡が検出された。VIII層の土壤層を取り除いたところを任意に面としてとらえているため、土壤化はしていない。

また、VIII層以下についても土壤層が確認され、旧地表面が存在することが判っている。



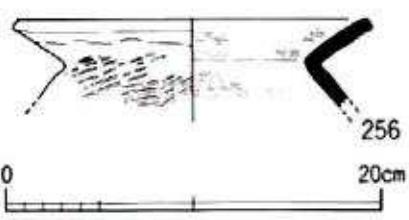
第95図 3区第1面

2. 第1面の遺構と遺物

(1) 第1面出土遺物

出土土器

図化できたのは堀1点(256)である。口縁部がく字形をなす、いわゆるV様式系窯である。頭部まで叩き上げた後、粘土を繰り足して口縁部を成形している。外面にはこの継ぎ目が明瞭に観察できる。



第96図 3区第1面出土土器

第44表 3区第1面出土土器観察表

番号	名 称	法 寸 (cm)	調 査・技 術	色 質	残存率	備 考
256	堀	口径: 18.5 痕径 根径: 13.0 壁高: 1.7 厚径:	外側: 体部から口縁部にかけて叩き形成後、口縁部をニビオサエ。 内面: 口縁部ともかく調整。	外面: 灰・褐灰 内面: 灰	口縁部1/4削	

(2) 掘立柱建物跡

SB12

検出状況

調査区中央部や西側で検出した。建物跡の一部を検出したにとどまり、調査区の南側へ広がっている。このため、当建物の梁行方向および桁行方向は確定できない。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模

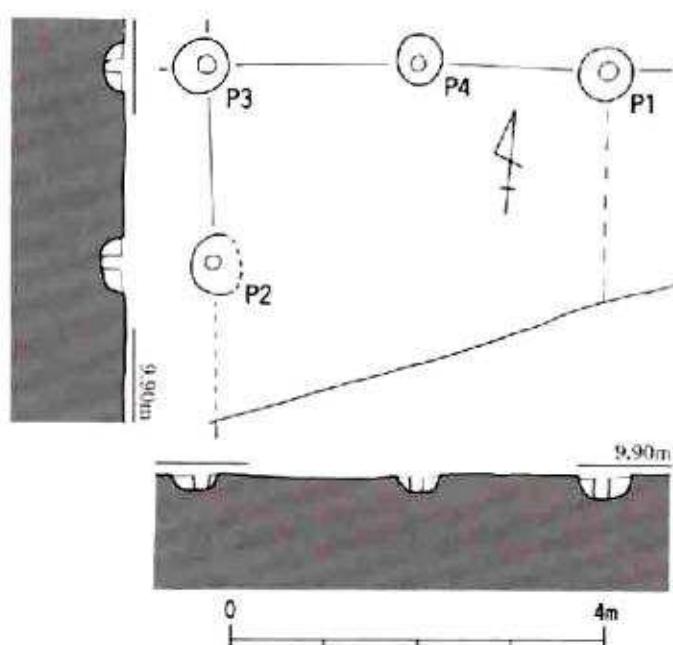
P 1 - P 3 間を基準とすると、N - 90° - E を指向する。この方向の柱間は2間で、4.25mを測る。柱間距離はP 1 - P 4 間で1.95m、P 4 - P 3 間で2.30mを測る。これに直交する方向は1間 + a である。P 3 - P 2 間で2.10mを測る。

柱穴

円形の掘り方からなる。径は45~60cmを測り、検出面からの深さは20~25cmである。

出土遺物

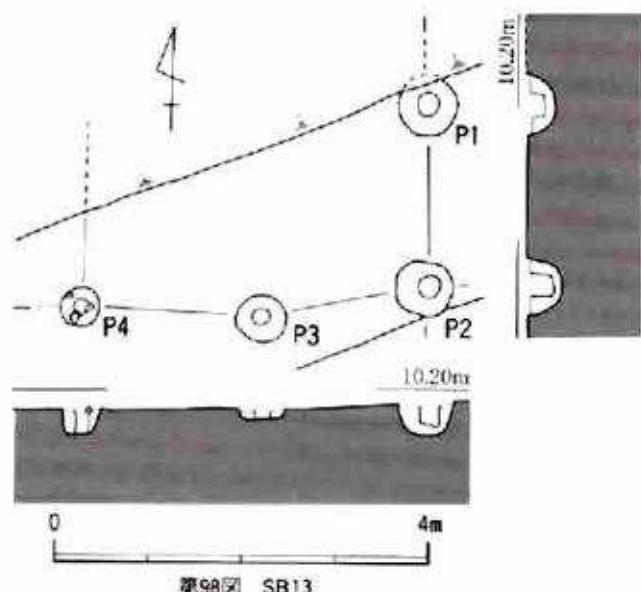
P 3 から弥生時代後期の甕が出土しているが、小片のため図化はできなかった。



第97図 SB12

SB13

- 検出状況** 調査区の東部で検出した。旧淡路鉄道の建設に伴い削平され、建物の一部を検出したにとどまる。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** 一部を検出したにとどまるため、梁行方向・桁行方向を確定することはできないが、南北方向を桁行とすると、N-2°-Eを指向する。
- 梁行方向の柱間は2間で、3.70mを測る。柱穴間距離は、P2-P3間で1.75m、P3-P4間で1.95mである。桁行方向は1間+α残存する。P1-P2間の距離は1.90mである。
- 柱穴** 半面円形の掘り方からなる。径は40cm~55cmを測り、検出面からの深さは10cm~35cmである。
- 出土遺物** 本建物跡に伴う柱穴内からは全く出土していない。



第98図 SB13

(3) 土壙

SK13

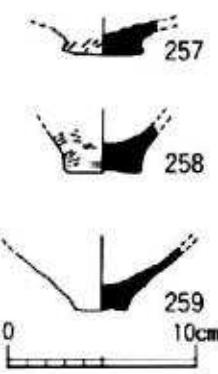
- 検出状況** 調査区の東端部で検出した。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** 平面楕円形を呈し、東西方向に主軸をとる。主軸方向で1m、その直交方向で83cmを測る。断面形は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは22cmである。
- 埋土** 1層からなり、暗灰色粗砂混じりシルトが堆積していた。
- 出土遺物** 全く出土していない。

(4) 溝

SD34

- 検出状況** 調査区の西部で検出した。北西-南東方向にはほぼ直線的にのびる溝で、南東側は調査区外までのび、北西側は旧淡路鉄道の建設により削平されている。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模	検出した長さは4.22mである。断面形は逆台形を呈し、検出面における幅は1.06m～68cmを測る。検出面からの深さは13cmである。底部の標高は、北側で9.66m、南側で9.60mとわずかに南東側に傾斜している。
埋土	1層からなり、褐色灰色シルト質細砂～中砂が堆積していた。
出土遺物	壺・甕・鉢が出土しているが、図化できたのは壺と鉢である。
壺	口縁部・体部の各小片が出土している。
甕	口縁部・体部・底部の各小片が出土しているが、図化できたのは257と258の底部に限られる。いずれも突出した平底をなすもので、底部から叩き成形が施されている。
鉢	259の底部片のみである。底部は輪台技法によっていると考えられ、わずかに高台状を呈している。壺の底部との区別が困難であるが、体部が内湾気味に立ち上ること、外面をナメ調整によって仕上げられていることなどから、鉢に分類した。



第99図 SD34出土土器

第45表 SD34出土土器観察表

番号	器種	口径	量(cm)	調 整 技 法	色 調	残存率	備 考
257	壺	口径 側径 底径	直径:1.1 側径:1.5 底径:1.5	外面:叩き成形 内面:ナメ調整	外面:赤褐色 内面:にじみ模	底部完存	
258	甕	口径 側径 底径	直径:1.1 側径:1.7 底径:1.7	外面:叩き成形 内面:ナメ調整	外面:黒褐色 内面:にじみ模	底部1/2	
259	鉢	口径 側径 底径	直径:1.9 側径:2.3 底径:2.3	外面:底面成形法+体部ナメ調整 内面:ナメ調整	外面:褐色赤褐色 内面:褐色赤褐色	底部ほぼ完存	

SD 35

検出状況	調査区中央部や西側で検出した。北西～南東方向に直線的にのびる溝で、南東側は調査区外までのび、北西側は調査区内で収束している。南東側で柱穴に切られている。
形状・規模	検出した長さは2.86mである。断面形はU字形をなし、検出面における幅は34cm～28cmを測る。検出面からの深さは4cmである。底部の標高は9.75mと安定している。
埋土	1層からなり、褐色灰色シルト質細砂～中砂が堆積していた。
出土遺物	全く出土していない。

SD 36

検出状況	調査区のほぼ中央部で検出した。ほぼ南北方向にわずかに弧状をなす溝で、南側は調査区外までのび、北側は旧漢路鉄道の建設により削平されている。SD37と切り合ひ関係にあり、SD37を切っている。
形状・規模	検出した長さは4.18mである。断面形はU字形をなし、検出面における幅は68cm～1mを測る。検出面からの深さは8cmである。底部の標高は9.70mと一定している。
埋土	1層からなり、暗灰色シルト質細砂～中砂が堆積していた。
出土遺物	弥生時代後期の壺の口縁部と体部が出土しているが、小片のため図化できなかった。

SD37

- 検出状況 SD36とはほぼ重複する位置で検出した。大半をSD36に切られており、北東側の肩部のラインを検出したにとどまる。これによると、北西～南東方向にはほぼ直線的にのびる溝と推定される。南東側は調査区外までのびている。
- 形状・規模 検出した長さは2.95mである。断面形は明確にしえないが、逆台形と推定される。検出面において最大幅1.32m検出している。また検出面からの深さは12cmを測る。
- 埋土 1層からなり、暗褐色シルトが堆積していた。
- 出土遺物 全く出土していない。

3. 第2面の遺構と遺物

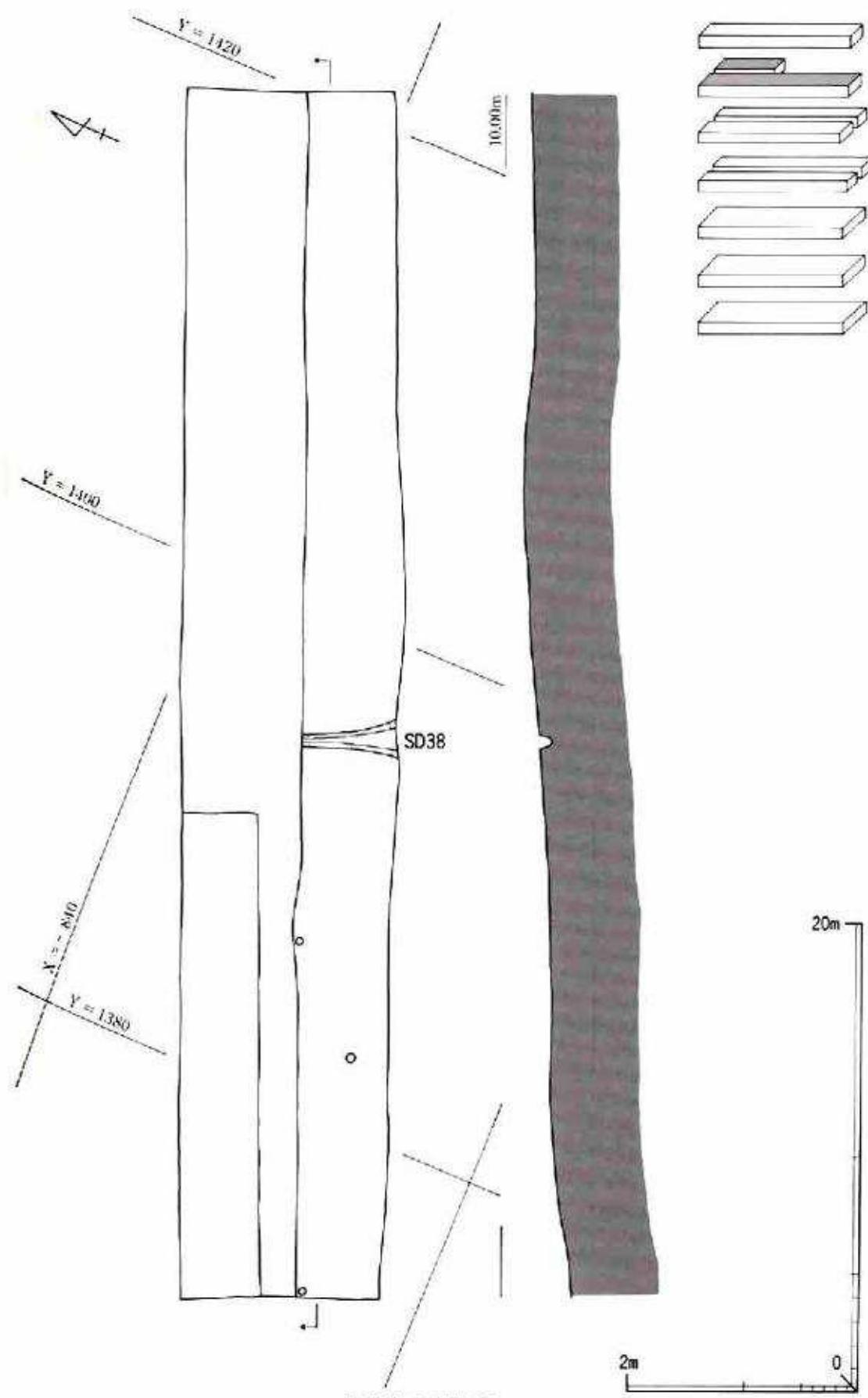
(1) 第2面出土遺物

当遺構面に伴う遺物はほとんど出土していない。

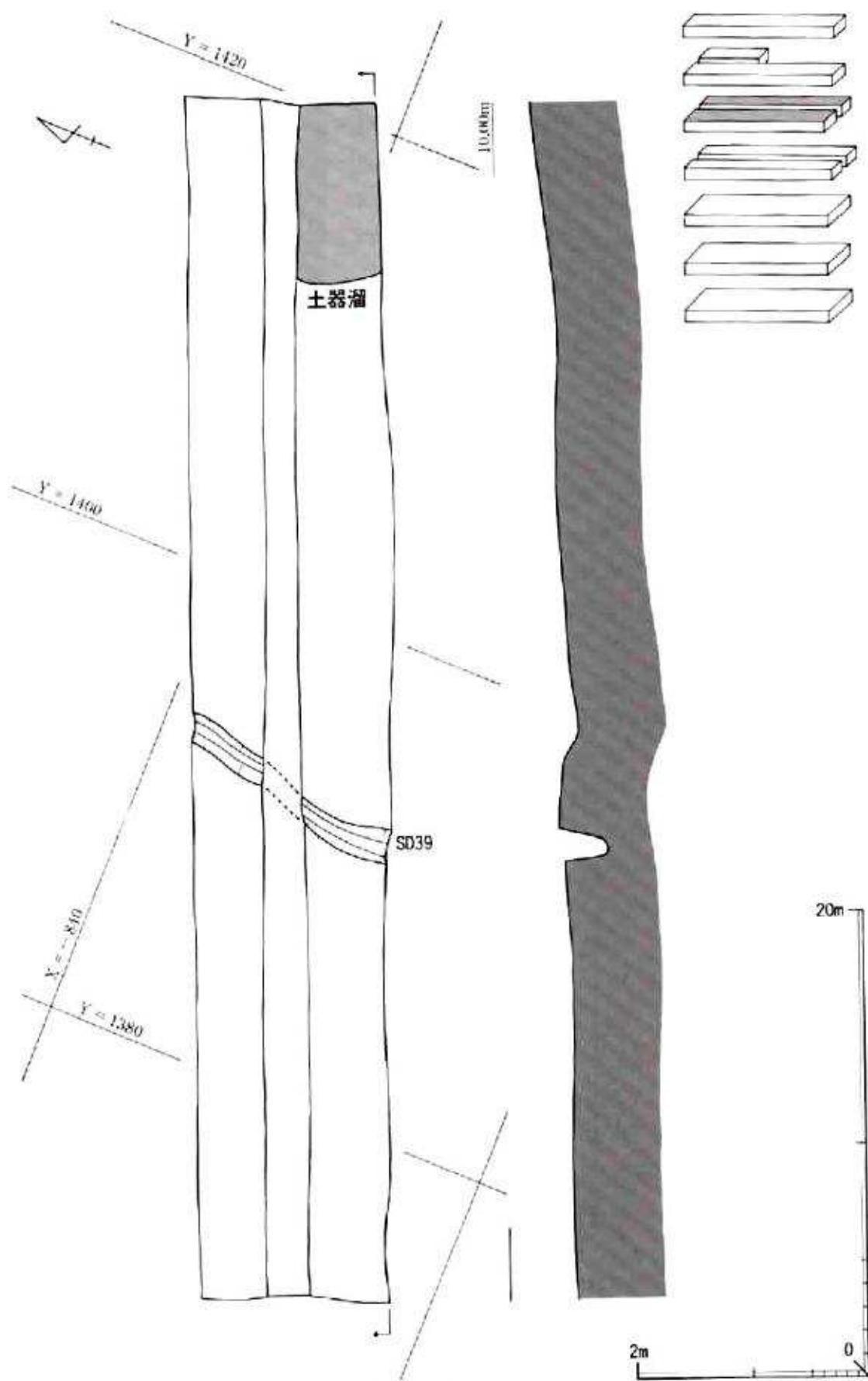
(2) 溝

SD38

- 検出状況 調査区中央部南側で検出した。南北方向にはほぼ直線的にのびる溝である。北側は旧浜路鉄道の建設で削平を受け、南側は調査区外までのびている。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模 検出した長さは4.10mである。断面は逆台形を呈し、検出面における幅は南側ほど広くなる傾向にあり、北側で50cm、南側で1.60mを測る。検出面からの深さは15cmである。
- 埋土 1層からなり、茶褐色シルト混じり細砂～中砂が堆積していた。
- 出土遺物 全く出土していない。



第100図 3区第2面

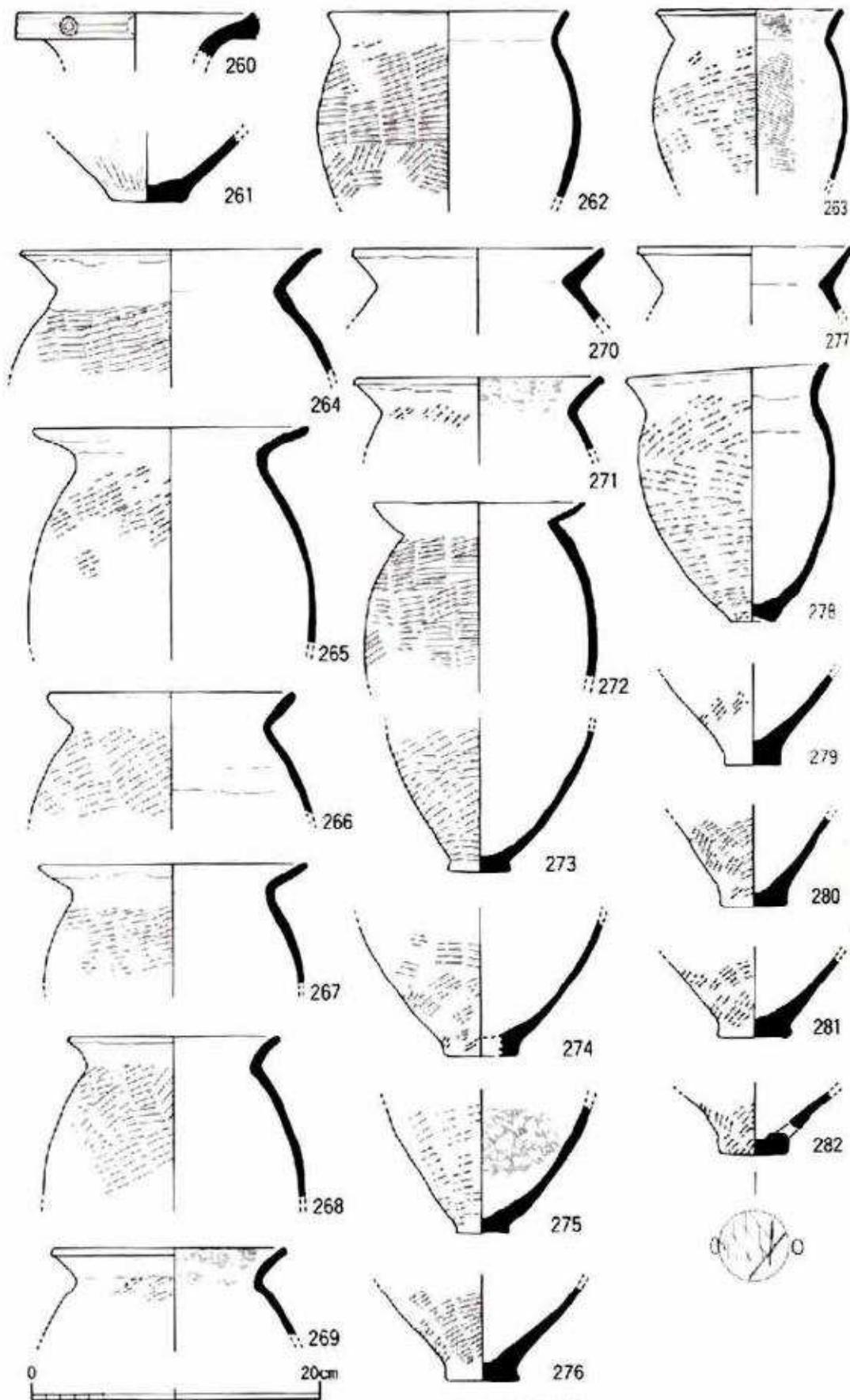


第101図 3区第3面

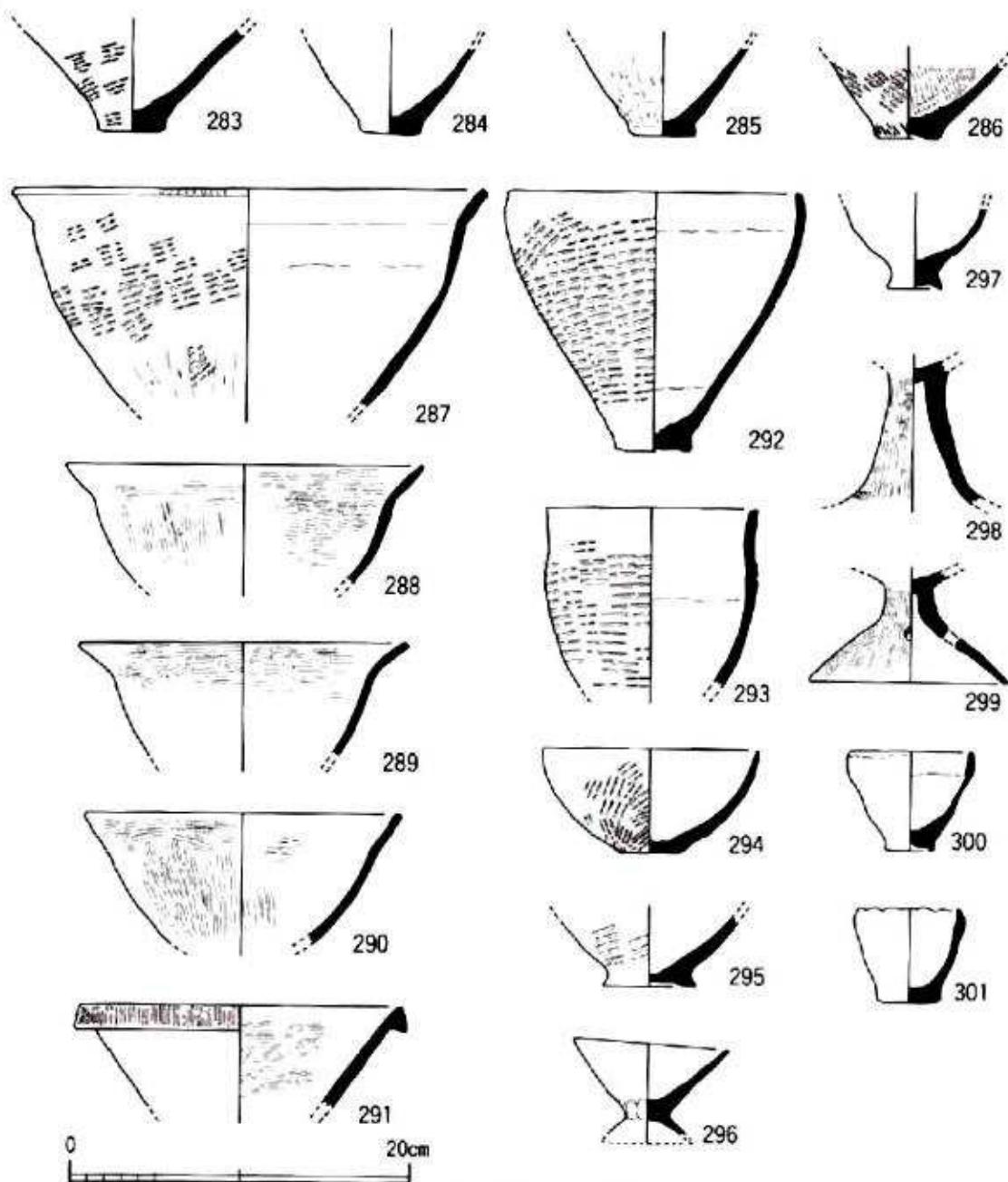
4. 第3面の遺構と遺物

(1) 第3面出土遺物

- 出土遺物** 第3面に伴う土器は、この面を検出するにあたって出土した土器と、調査区西隅の第3面直上で土器底として括して検出した土器がある。
- 土器類以外** 器種としては、壺・甕・鉢・高杯・ミニチュアの各器種が出土している。
- 壺** 260の広口壺と261の底部片の2個体である。260は、口縁端部を上方向につまみ上げ端面をつくり、3条の擬凹線を施している。さらに擬凹線の上に竹管円形浮文を貼り付けている。
- 甕** 各器種のなかで量的に最も多く出土している。いずれもV様式系甕に分類されるものである。
- 264・265・267・269・271・278は体部～頸部まで叩き上げ、その後粘土を貼り付け口縁部を形成している。この接合痕が口縁部外面に顕著に観察できる。
- 282は底部片であるが、底部から体部への変換部を横方向に穿孔させている。焼成前に穿孔させたもので、径7～9mmを測り、両断面を貫通している。
- また、285は他の甕とは異なり、外面をハラ削りにより仕上げている。
- 鉢** 大型鉢・中型鉢・小型鉢が出土している。
- 大型鉢** 287の1個体である。口縁部をエビオサエにより折り返している。端部には刺み目を施している。また、体部下半を叩き成形後ハラ削りにより成形している。
- 中型鉢** 3タイプ認められる。一つは大型鉢と同じく口縁部を折り返すもの(288～290)である。ただし、288と290は一端折り返した後口縁部を内湾させている。
- 第2のタイプは口縁部を拡張するものである。291の1個体である。口縁端部に粘土を貼り付け、端面をつくり刺み目を施している。なお、この土器については壺の口縁部の可能性も否定できない。
- 最後は、口縁部を直口させるタイプである。292と293の2個体である。292は、口縁部がわずかに内湾傾向にあり、端部を横ナア調整によりわずかに外方につまみ出している。293は、体部から口縁部まで叩き上げた後、口縁部をエビオサエにより成形し、ナア調整により仕上げている。口縁部はわずかに外反傾向にある。
- 小型鉢** 底部の形態により2タイプが認められる。一つは、294のように平底をなすものである。楕形をなし、口縁部を上方に薄く收めている。
- もう一つのタイプは、台もしくは脚が付くタイプである。295は平底形態に近いが、底部下端を外方につまみ出すことによりわずかに高台状をなす。296は脚が付くタイプであるが、端部を欠く。体部から口縁部まで直線的に立ち上がり、端部を丸く收める。297は脚が付くタイプである。口縁部を欠くが、体部は内湾傾向にある。
- 高杯** 脚部が2個体出土している。298は長脚タイプのものである。これに対して299は短脚である。透穴は3箇所に穿たれている。
- ミニチュア** 2個体出土しており、いずれも鉢形をなす。2個体ともエビオサエにより粗雑に形成されており、歪みが著しい。



第102図 3区第3面出土土器(1)



第103図 3区第3面出土土器(2)

土器群

調査区西端部の5m×8mの範間にわたって土器が集中して出土しており(図版23)、これをひとつの土器群と捉えることができる。しかし、このなかでも6箇所にわたって土器の集中箇所が認められる。これらを土器群A・土器群B・土器群C・土器群D・土器群E・土器群Fと呼称する。

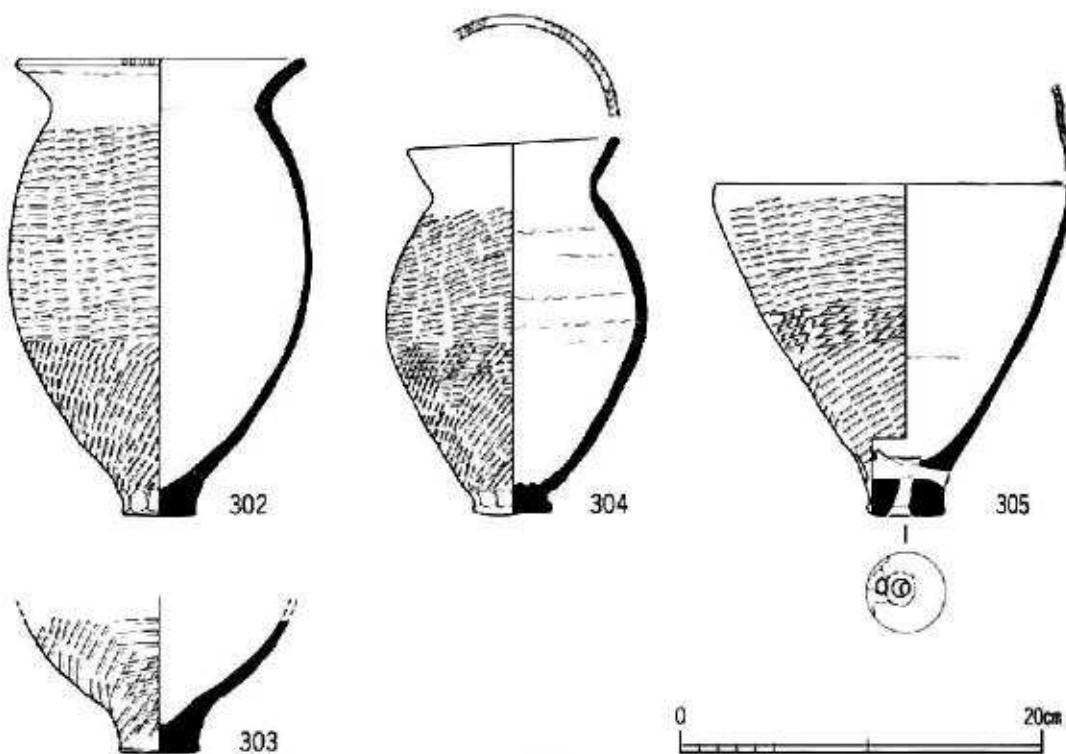
なお、土器群間に接合関係が認められることから、これらの土器群は1つの土器群みなすことも可能である。本報告では、各土器群ごとに報告していくことにする。

土器群A

土器群のはば中央に位置する。壺と鉢が出土している。

壺

完形に復元できる302・304と底部のみ残存する417の3個体である。303は、叩き目の方向から3段にわたって体部を成形し、頭部まで叩き上げている。その後粘土を貼り付け



第104図 土器群A出土土器

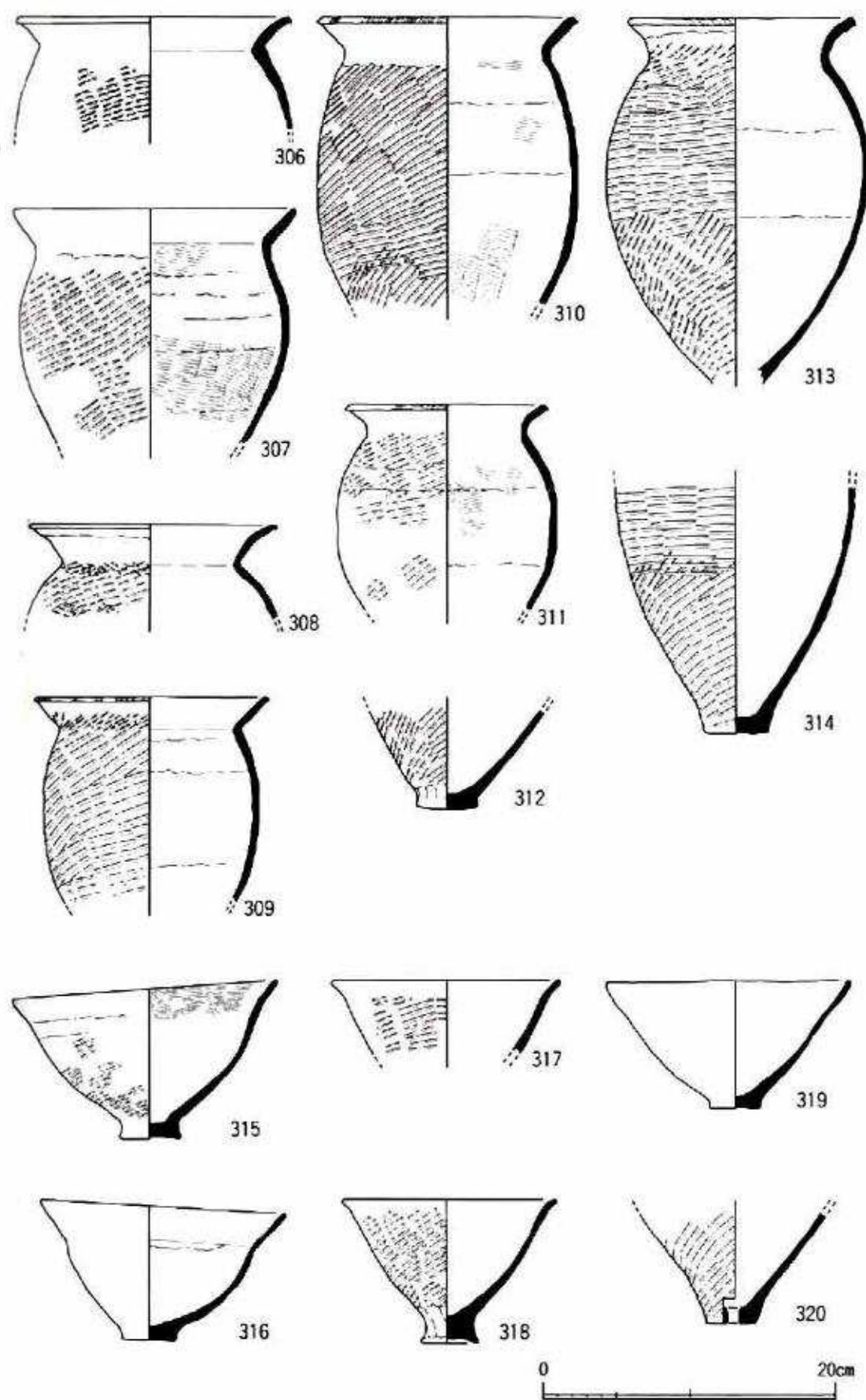
口縁部を成形している。この貼り付け痕が口縁部外面に顕著に観察できる。302は304に比べて小型の器である。当個体についても、体部を3段階に分割して成形している。特にこの土器は、体部中位を境に異なる粘土を用いていることが明瞭に観察でき、下側の監土には砂粒が多く含まれている。また口縁端部には刻み目が施されている。

305の1個体である。いわゆる有孔鉢に分類される大型の土器である。体部は直線的に立ち上がり、口縁部をわずかに内湾させている。叩き目の方向から2段階に分割して成形させている。口縁端部には刻み目が施されている。底部は突出した平底をなし、2方向の穿孔が認められる。ひとつは垂直方向の穿孔（径7mm）で、有孔鉢では一般的なものである。もう一つの穿孔は水平方向の穿孔（径8mm）で、底部から体部への要換部に穿られており、貫通している。この他、底部端部から斜上方への穿孔が認められるが、上部の断面を貫通していない。

土器群B 壺と鉢が出土している。

要 9個体図化したが、いずれもV様式系壺に分類されるものである。口縁部が残存するものは、口縁部まで叩き上げ、その後エビオサエ・横ナデ調整により口縁部を成形している。なかでも、308・313は口縁部の途中まで叩き上げ、その後粘土を貼り付け口縁部を成形している。そして、この貼り付け痕が口縁部外面に観察できる。また、309・311・313の口縁端部には刻み目が施されている。

鉢 6個体図化したが、いずれも中型の鉢である。315・318は内湾する体部に口縁部を外反させている。316を除く3個体は口縁部まで叩き上げによって成形している。319は、エビオサエによってわずかに内湾させ、口縁部を成形している。320は有孔鉢である。径7mmの穿孔が施されている。



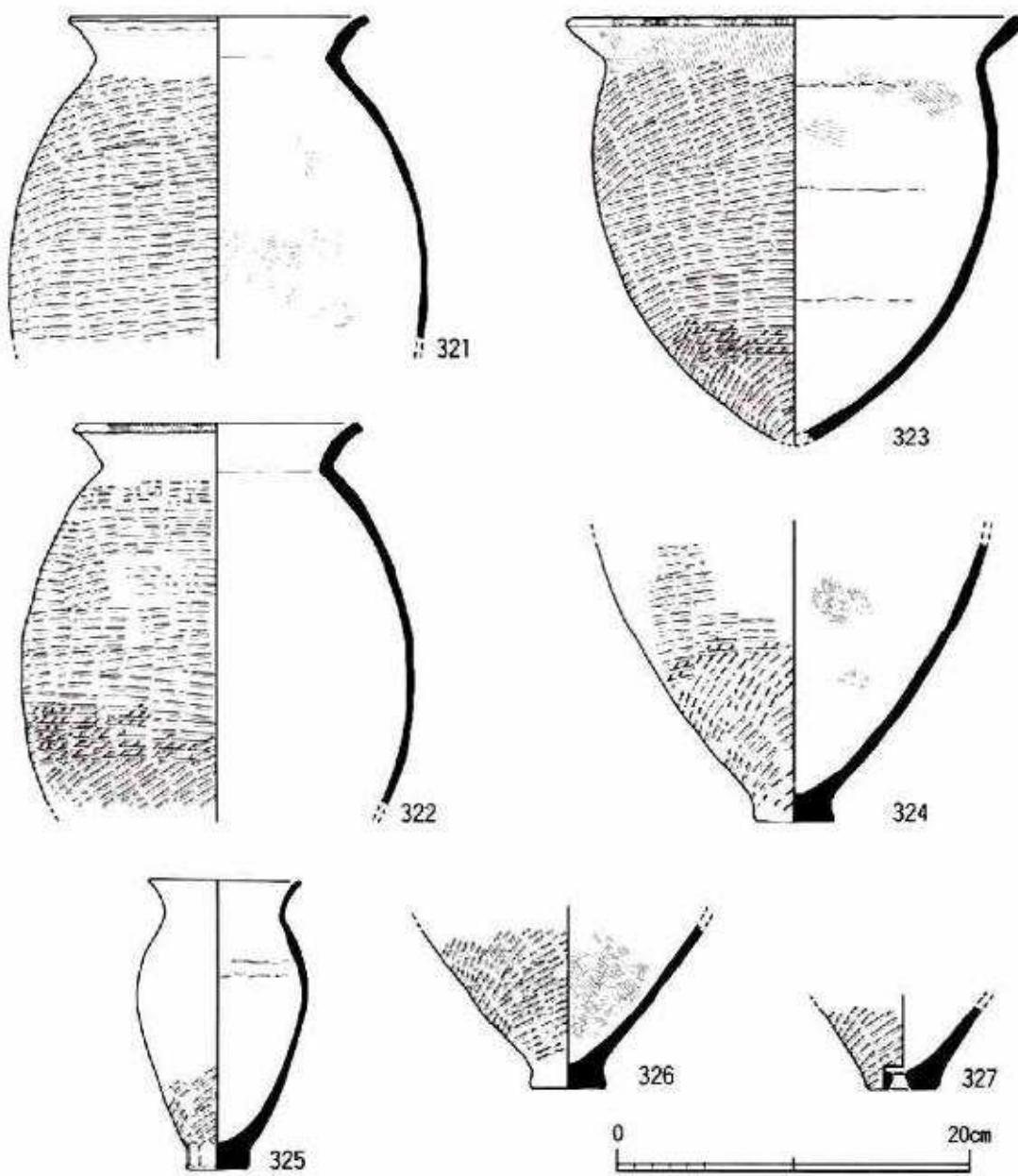
第105図 土器群B出土土器

土器群C 壺と鉢が出土している。

壺 6個体図化した。321～324は大型に分類される壺である。324を除く3個体は、3段階に分割して成形されている。321は、体部から口縁部の途中まで叩き上げ、その後粘土を貼り付け口縁部を成形している。そして、その際の貼り付けの痕が口縁部外面に顕著に観察される。323は、口縁端部に刻み目を施している。底部は尖り底状をなしているが、明確ではない。322の口縁端部にも刻み目が施されている。

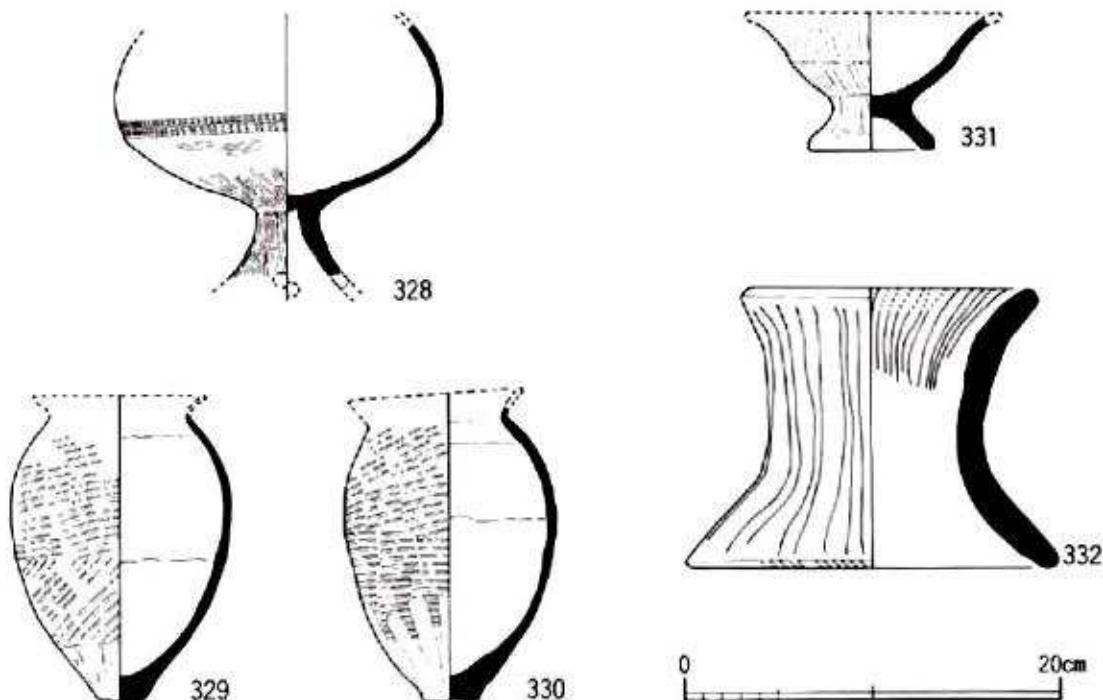
325は小型の壺である。大型の壺と比較して、器高に対して体部溝が少ない。326は中型壺の底部と考えられる。

鉢 327の1個体のみである。底部のみの残存であるが、有孔鉢に分類されるものである。底部中央に径7mmの穿孔が施されている。



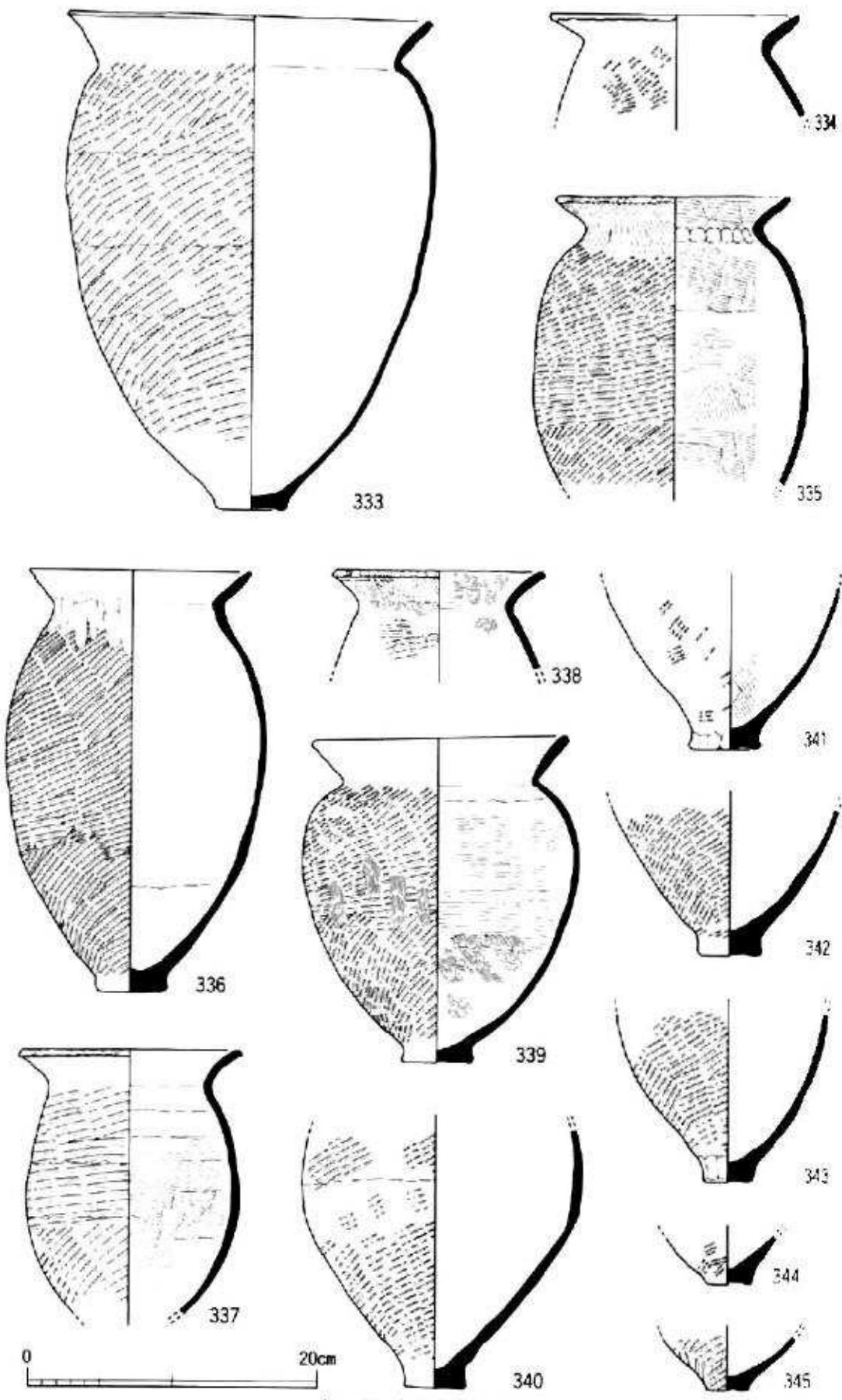
第106図 土器群C出土土器

- 土器群D** 土器群の北東部に位置する（図版24）。壺・甕・鉢・器台が出土している。
- 壺** 328の1個体のみである。脚付壺に分類されるものであるが、口縁部・脚底部を欠くため、全体の形態は明らかにできない。体部は玉兔形をなものと推定される。体部中央に2条の凹線を施し、各凹線上に列点文を施している。脚部と体部の接合は、円板充填法によっている。脚部の透穴は4方に穿たれている。
- 甕** 329と330の2個体で、両個体とも小型の甕である。両個体は、体部を2段階に分割して成形し、底部付近をヘラ削りあるいはハラナデ調整によって成形している。
- 鉢** 331の1個体である。台付鉢に分類される小型の鉢である。内湾傾向にある体部に対して口縁部は外反傾向にある。
- 器台** 332の1個体である。口縁部・底部ともに大きく外反するタイプで、底径が口径を凌駕する。器壁が全体的に厚く仕上げられている。また、外面の1/3の範囲に口縁部から底部にかけてと口縁部内面全体に縱方向のヘラ描沈線が施されている。さらに、底部端面には刻み目が施されている。

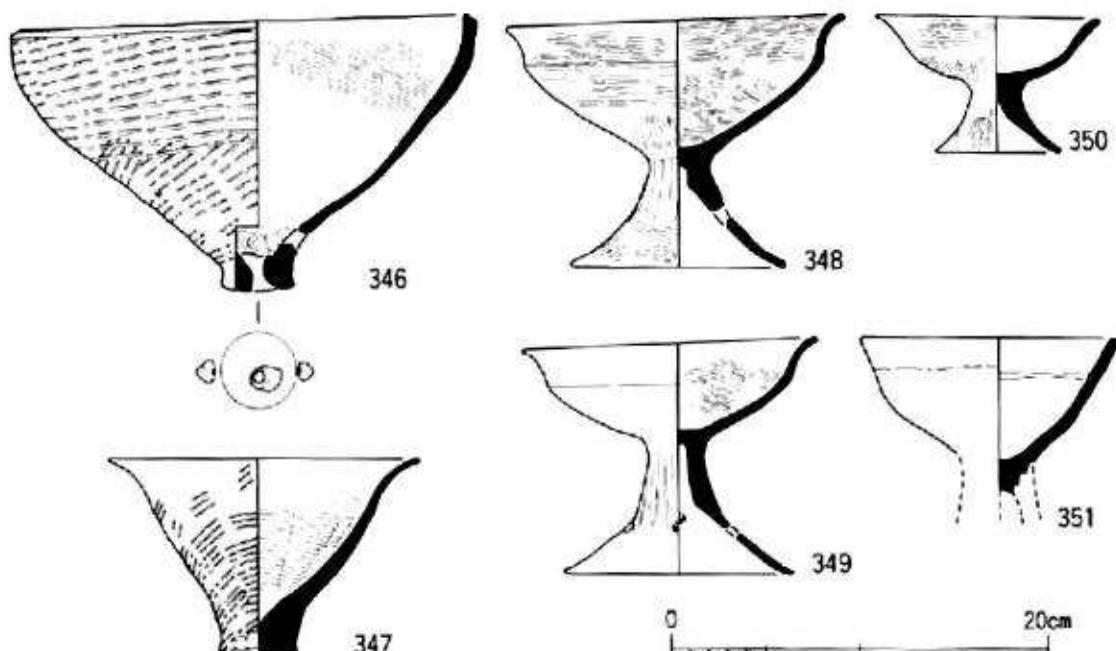


第107図 土器群D出土土器

- 土器群E** 土器群の南東部に位置する（図版23）。各土器群のなかで最も多く出土した土器群である。甕・鉢・高杯が出土している。
- 甕** 大型・中型の甕が出土している。体部最大径が、333・335・339のように肩部にあるものと、336・337のように肩部よりやや下にあるものとに分類できる。
- 336は、体部から口縁部にかけて叩き上げにより成形後、頭部に粘土を薄く貼り付けヘラナデ調整により仕上げているが、難な調整でハラナデ痕が顕著に観察できる（図版82）。
- この他、337・338の口縁端部には刻み目が施されている。
- 鉢** 大型鉢・中型鉢・小型鉢が出土している。
- 大型鉢は有孔鉢に分類される346の1個体である。突出した平底の底部から内湾氣味に



第106図 土器群E出土土器(1)



第109図 土器群E 出土土器(2)

立ち上がり、口縁部を直口させている。端部をユビオサエにより内側をわずかにつまみあげている。体部を2段階に分割して成形している。底部には垂直方向と水平方向の穿孔が施されている(図版83)。垂直方向の穿孔(径6mm)は底部の中央部を貫通している。水平方向の穿孔(径7mm)は底部から体部への変換部に施され、これも貫通している。

中型鉢は347の1個体である。底部から体部まで叩き上げにより成形後、口縁部を横ナデ調整により外反させ仕上げている。

高杯 4個体固化した。

348・349は、杯部が鉢形をなすもので、体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部を強く外反させている。両個体とも、脚部には透穴が4箇所に穿たれている。350も、基本的には348・349と同じタイプであるが、小型である。また、体部が浅く口縁部が深くなっている。脚部には透穴は認められない。

351は杯部が鉢形をなす。わずかに内湾気味に立ち上がる体部に粘土を貼り付け、横ナデ調整によって口縁部を成形している。内外面にこの貼り付け痕が顕著に観察できる。口縁部はわずかに内湾傾向にある。

土器群F 壺と高杯が出土している。

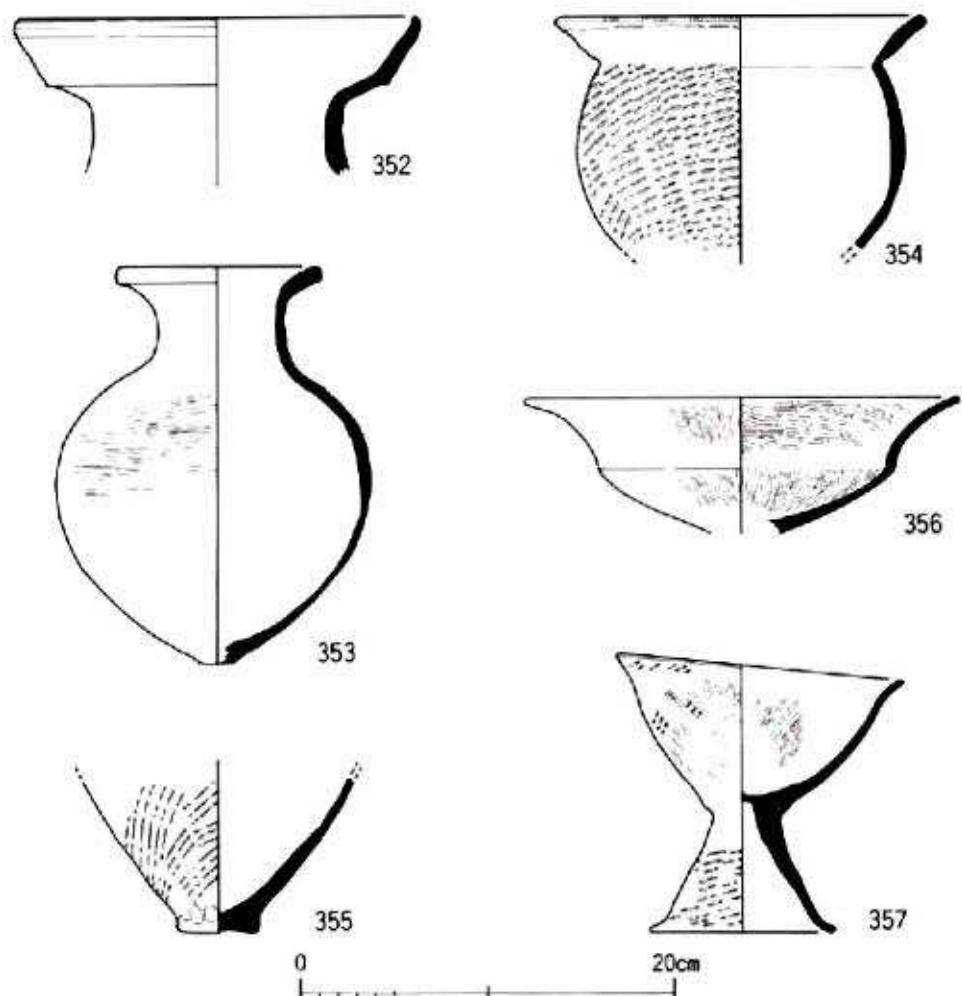
壺 354の1個体のみである。体部から口縁部の途中まで叩き上げにより成形後、粘土を貼り付け口縁部を成形している。この貼り付け痕が外面に顕著に観察される。口縁端部には刻み目が施されている。

高杯 356と357の2個体である。

356は、内湾する体部に外反する口縁部がつく大型の高杯である。357は、杯部・脚部とともに叩き成形により仕上げられ、杯部は鉢形を、脚部は円錐状をなす。杯部は、内湾傾向にある体部に対して口縁部を外反させている。

その他 当土器群のなかで、各土器群以外に単独で出土した土器がある（図版25）、352・353・356の3個体である。

352は二重口縁壺である。口縁部は数回に及ぶつまむような横ナメ調整により、微凹線状になっている。353は、ほぼ完存する広口壺である。球形の体部に頸部を直立させ、口縁部を外反させている。底部は丸底に近いが、わずかに突出し平底の痕跡をとどめる。



第110図 土器群F他出土土器

第46表 3区第3面出土土器観察表(1)

番号	器種	寸 厘(cm)	調 査・特 徴	外 観	残 存 状	備 考
260	壺	口径: 15.1 頸径: 器高: 15.1 腹径:	外面: 口縁部調整 内面: ナメ調整	外面: 口縁部微凹 内面: ナメ	口縁部1/6	
261	壺	口径: 14.9 頸径: 器高: 15.5 腹径:	外底: 頸のへき立方舟。 内面: ナメ調整。	外面: 頸一盤床 内面: ナメ	底部完存	
262	壺	口径: 16.3 頸径: 15.7 腹径: 18.1	外面: 体部を円錐形容。口縁部全体調整。 内面: 体部を數十字と十字調整。口縁を十字調整。	外面: ナメ 内面: ナメ	口縁部1/4	
263	壺	口径: 11.3 頸径: 11.4 腹径: 14.4	外面: 体部を四角形容後部分に十字調整。口縁部エビオセ上。 内面: 体部ハサク調整。口縁部エビオセ上後ハサク調整。	外面: 口縁部エビオセ 内面: 口縁部エビオセ	口縁部 体部1/3	

第47表 3区第3面出土土器観察表(2)

番号	器種	法 量(cm)	調 査 方 法	色 調	残存率	備 考
264	甕	口径:17.0、底径:14.0、高さ:18.6 腹径:	外面:体部叩き成形。口縁部を調整しヒビキサ上。 内面:体部・口縁部を調整。	外面:褐・黒褐色 内面:褐・黒褐色	口縫部1/3	
265	甕	口径:16.8、底径:14.3、高さ:11.5 腹径:120.0	外面:体部叩き成形。口縁部ヒビキサ上。 内面:体部不明。口縁部ヒビキサ上。	外面:褐 内面:褐	118.01/4	
266	甕	口径:16.9、底径:15.8、高さ:8.3 腹径:	外面:体部叩き成形。口縁部ヒビキサ上。 内面:体部・口縁部ヒビキサ上後半を調整。	外面:褐 内面:褐	口縫部1/4	
267	甕	口径:15.0、底径:14.1、高さ:15.2 腹径:13.5、0	外面:体部叩き成形後底部を手で調整。口縁部ヒビキサ上。 内面:体部叩き成形後底部にかけて手で調整後、口縁部ヒビキサ上。	外面:褐・赤褐色 内面:褐・赤褐色	山根部1/6	
268	甕	口径:14.3、底径:12.2、高さ:10.2 腹径:118.3	外面:体部叩き成形。口縁部ヒビキサ上。 内面:体部ナマ調整。口縁部ヒビキサ上。	外面:褐・黑褐色 内面:褐	口縫部1/4	体部前面側付着
269	甕	口径:16.0、底径:12.0、高さ:7.9 腹径:	外面:体部叩き成形後一部ナマ調整。口縁部ヒビキサ上。 内面:体部ヒビキサ上後半を調整。口縁部ヒビキサ上後半を調整	外面:褐 内面:灰褐色	口縫部1/6	
270	甕	口径:17.2、底径:14.1、高さ:12.1 腹径:	外面:体部叩き成形。口縁部ヒビキサ上。 内面:体部ナマ調整。口縁部ヒビキサ上。	外面:褐 内面:褐	口縫部1/2	
271	甕	口径:16.8、底径:13.8、高さ:11.5 腹径:	外面:体部叩き成形後後半をナマ調整。口縁部ヒビキサ上。 内面:化粧ナマ調整。口縁部ヒビキサ上。	外面:褐 内面:褐	口縫部1/4	
272	甕	口径:15.5、底径:10.8、高さ:15.0 腹径:116.1	外面:体部叩き成形。口縁部ヒビキサ上。 内面:体部板ナマ調整。口縁部ヒビキサ上。	外面:灰褐色 内面:灰褐色	山根部1/3	
273	甕	口径:14.4、底径:14.4、高さ:9.5 腹径:	外面:体部叩き成形。底部ナマ調整 内面:体部ナマ調整。	外面上に赤い斑紋 内面:褐	底部充てん	
274	甕	口径:15.2、底径:12.2、高さ:9.2 腹径:	外面:体部叩き成形。底部ナマ調整 内面:体部ナマ調整。	外面上に赤い斑紋 内面:褐	瓶部1/4	
275	甕	口径:13.7、底径:12.2、高さ:8.2 腹径:	外面:体部叩き成形。底部ナマ調整 内面:底部ヒビキサ上とナマ調整。体部ナマ調整。	外面上に赤い斑紋 内面:灰褐色	底部充てん	体部前面側付着
276	甕	口径:13.2、底径:12.2、高さ:6.1 腹径:	外面:体部叩き成形。底部ナマ調整 内面:底部・体部内面ナマ調整。	外面上に赤い斑紋 内面:灰褐色	底部充てん	
277	甕	口径:15.5、底径:12.4、高さ:11.3 腹径:	外面:体部・口縁部ナマ調整。 内面:体部・口縁部ナマ調整。	外面上に赤い斑紋 内面:灰褐色	口縫部1/3	口縫部外側 爆発者
278	甕	口径:10.7、底径:8.1、高さ:11.5 腹径:10.7、高さ:11.5 腹径:12.3	外面:体部叩き成形。口縁部ヒビキサ上。 内面:底部・口縁部ヒビキサ上。体部ナマ後半を調整。口縁部ヒビキサ上。	外面上に赤い斑紋 内面:褐	1/2	
279	甕	口径:12.9、底径:11.2、高さ:11.1 腹径:	外面:体部叩き成形。 内面:底部・体部ナマ調整。	外面上に赤い斑紋 内面:褐	底部充てん	
280	甕	口径:11.7、底径:11.2、高さ:11.2 腹径:	外面:底部・体部叩き成形。 内面:底部・体部ナマ調整。	外面上に赤い斑紋 内面:灰褐色	底部充てん	
281	甕	口径:13.2、底径:12.2、高さ:11.1 腹径:	外面:底部・体部叩き成形。 内面:底部・体部ナマ調整。	外面上に赤い斑紋 内面:灰褐色	底部充てん	内面に付着物
282	甕	口径:11.5、底径:11.5、高さ:11.1 腹径:	外面:底部・体部叩き成形。 内面:底部・体部内面ナマ調整。	外面上に赤い斑紋 内面:灰褐色	底部充てん	底部充てん
283	甕	口径:11.0、底径:11.0、高さ:11.1 腹径:	外面:底部・体部叩き成形。 内面:底部・体部ナマ調整。	外面上に赤い斑紋 内面:灰褐色	底部充てん	
284	甕	口径:12.2、底径:12.2、高さ:11.1 腹径:	外面:体部叩き成形後後半を調整。 内面:底部・体部ヒビキサ上とナマ調整。	外面上に赤い斑紋 内面:灰褐色	底部充てん	
285	甕	口径:11.4、底径:11.4、高さ:11.1 腹径:	外面:体部叩き成形後へ少頭り(?)と上部へ外削り。 内面:底部・体部ヒビキサ上。	外面上に明黄色 内面:明黄色	底部充てん	

第3節 3区の遺構と遺物

第48表 3区第3面出土土器観察表(3)

番号	部 構	透 量(cm)	調 整 方 法	色 調	残 在 状	備 考
286	甌	口径: 13.9 腹径: 14.4 脚径:	外面: 瓶底一体化川入直形。 内面: 瓶底一体部より調整。	外面: 深褐色 内面: 淡赤褐色	瓶底完全	体部内面深紅色
287	甌	口径: 127.6 腹径: 126.8 脚径:	外面: 体部叩き成形後、下半部のみベラ削り。口縁部はオサエ。 内面: 体部より調整。口縁部はオサエ。	外面: 淡赤褐色 内面: 淡赤褐色		
288	甌	口径: 121.2 腹径: 117.0 脚径:	外面: 体部ハラミガキ。口縁部はビオサエ後ハラミガキ。 内面: 体部ハラミガキ	外面: 深褐色 内面: 深褐色	口縁部なし	
289	甌	口径: 119.2 腹径: 115.0 脚径:	外面: 体部上部調整。口縁部ハラミガキ。 内面: 体部ハラミガキ。	外面: 深褐色 内面: 淡赤褐色	口縁部なし	
290	甌	口径: 118.4 腹径: 116.0 脚径:	外面: 体部ハラミガキ。 内面: 体部ハラミガキ。	外面: 深褐色 内面: 淡赤褐色	口縁部なし	
291	甌	口径: 118.9 腹径: 115.2 脚径:	外面: 体部叩き成形。口縁部ハラミガキ。 内面: 体部ハラミガキ。	外面: 深褐色 内面: 深褐色	口縁部なし	
292	甌	口径: 116.0 腹径: 112.4 脚径:	外側: 体部叩き成形。内側: ハラミガキ子子子調整。体部叩き成形。口縁部ハラミガキ子子子調整。 内面: 体部ハラミガキ子子子調整。体部ハラミガキ子子子調整。口縁部ハラミガキ子子子調整。	外面: 深褐色 内面: 深褐色	L/2	
293	甌	口径: 112.4 腹径: 112.2 脚径:	外面: 体部叩き成形。口縁部ハラミガキ子子子調整。 内面: 体部ハラミガキ子子子調整。	外面: 深褐色 内面: 明褐色	L/2	
294	甌	口径: 112.6 腹径: 113.6 脚径:	外面: 瓶底ハラミガキ成形後ハラミガキ。 内面: 瓶底ハラミガキ成形後ハラミガキ。	外面: 深赤褐色 内面: 深赤褐色	L/4	
295	甌	口径: 112.5 腹径: 112.0 脚径:	外面: 体部叩き成形。 内面: ハラミガキ。	外面: 深赤褐色 内面: 深褐色	底部は付定存	
296	甌	口径: 9.0 腹径: 脚径:	外面: 瓶底ハラミガキ。体部ハラミガキ子子子調整。 内面: 体部ハラミガキ子子子調整。	外面: 黄褐色 内面: 淡赤褐色	L/4	
297	甌	口径: 8.3 腹径: 12.8 脚径:	外面: 瓶底ハラミガキ。体部ハラミガキ子子子調整。 内面: 体部ハラミガキ子子子調整。	外面: 橙 内面: 橙	L/3	
298	高环	口径: 8.3 腹径: 底径:	外面: 瓶底ハラミガキ。 内面: 瓶底ハラミガキ子子子調整。	外面: 明褐色 内面: 明褐色	瓶底は付定存	
299	高环	口径: 6.3 腹径: 11.8 底径: 11.8	外面: 瓶底ハラミガキ。 内面: 瓶底ハラミガキ。体部ハラミガキ。	外面: 橙 内面: 橙	瓶底は付定存	
300	口付	口径: 12.0 腹径: 12.9 脚径:	外面: 外側: 透筋ハラミガキ子子子調整。 内面: 瓶底ハラミガキ子子子調整。	外面: 深褐色 内面: 深褐色	L/3	
301	口付	口径: 15.8 腹径: 15.6 脚径:	外面: 体部ハラミガキ子子子。 内面: 体部ハラミガキ子子子。	外面: 深褐色 内面: 深褐色	L/2	
302	甌	口径: 15.0 腹径: 14.9 脚径:	外面: 瓶底ハラミガキ。体部叩き成形。口縁部ハラミガキ子子子調整。 内面: 体部ハラミガキ子子子調整。体部ハラミガキ子子子。口縁部内面子子子調整。	外面: 橙 内面: 淡赤褐色	L/2	口縁部 体部深紅色 上部青A
303	甌	口径: 14.4 腹径: 17.2 脚径:	外面: 体部叩き成形。 内面: 体部板木子子子調整。	外面: 深褐色 内面: 深褐色	底部は付定存	上部青A
304	甌	口径: 10.8 腹径: 14.3 脚径:	外面: 体部ハラミガキ。体部叩き成形。瓶底川入成形後横子子子調整。口縁部叩き成形後横子子子調整。 内面: 体部板木子子子調整。体部ハラミガキ子子子。口縁部内面子子子調整。	外面: 深褐色 内面: 深褐色	L/3	体部ハラミガキ 上部青A
305	甌	口径: 120.計 腹径: 14.2 脚径:	外面: 体部ハラミガキ成形。口縁部叩き成形後横子子子調整。口縁部内面子子子調整。 内面: 体部ハラミガキ子子子調整。	外面: 深褐色 内面: 深褐色	L/3	上部青A
306	甌	口径: 19.0 腹径: 15.8 脚径:	外面: 体部叩き成形。口縁部ハラミガキ子子子調整。 内面: 体部ハラミガキ子子子調整。	外面: 橙 内面: 橙	L/1	上部青B
307	甌	口径: 19.0 腹径: 16.0 脚径: 19.0	外面: 体部叩き成形。口縁部ハラミガキ子子子調整。 内面: 体部ハラミガキ子子子調整。	外面: 橙 内面: 深褐色	L/4	上部青B

第49表 3区第3面出土土器觀察表(4)

番号	器種	法寸 cm	調査 仕法	色調	焼成度	備考
308	壺	口径:16.8 底径:12.7 高さ:6.3 腹径:	外面:体部叩き成形、口縁部エビオサと後手で調整。 内面:体部エビオサ、口縁部エビオサと後手で調整。	外面:棕 内面:棕	11焼成:1.3	口縁部外周 器身着 土部無目
309	壺	口径:14.8 底径:12.6 高さ:13.5 腹径:11.0	外面:体部口縫部叩き成形後、口縁部エビオサ。 内面:土手を調整、口縁部エビオサ。	外面:に赤い棕 内面:棕	1-3	土器群B
310	壺	口径:16.8 底径:12.9 高さ:15.5 腹径:17.2	外面:体部叩き成形、腰部オビオサと上縁部オビオサ調整。 内面:体部ハリヤー調整、口縁部板ナリ調整。	外面:棕 内面:浅褐	1/3	体部腰付着 土器群B
311	壺	口径:13.2 底径:11.9 高さ:11.9 腹径:11.5	外面:体部叩き成形後ナリ調整、口縁部エビオサと後手で調整。 内面:体部エビオサと土手をハリヤー調整、口縁部エビオサと後手で調整。	外面:に赤い棕 内面:黑	1/4	土器群B
312	壺	口径:14.2 底径:12.5 高さ:6.5 腹径:	外面:底部・体部叩き成形、腰部エビオサ。 内面:体部オビオサと調整。	外面:明褐色 内面:深褐	底部元存 体部2/3	土器群B
313	壺	口径:15.0 底径:12.2 高さ:13.5 腹径:17.9	外面:体部・腰部叩き成形後、脚部エビオサと、口縁部ナリ調整。 内面:体部ナリヤーと調整、体部土手ナリ調整、口縁部ナリヤー調整。	外面:棕 内面:浅褐	3/6	体部下半部分付着 土器群B
314	壺	口径:14.4 底径:13.5 高さ:16.6 腹径:16.1	外面:腰部叩き成形。 内面:底部・体部ナリヤーとナリヤー調整、体部中段ナリヤー調整。	外面:に赤い棕 内面:黑	底部-直部1/2	体部中段付着 土器群B
315	鉢	口径:18.2 底径:16.5 高さ:10.1 腹径:	外面:底部・体部叩き成形後、腰部エビオサ。 内面:底部・体部板ナリ調整ナリヤー調整、口縁部ハリヤー調整。	外面:棕 内面:棕	3/4	土器群B
316	鉢	口径:16.7 底径:13.3 高さ:9.0 腹径:	外面:底部エビオサ、体部・口縁部エビオサとナリヤー調整。 内面:底部・体部板ナリヤー調整、口縁部エビオサとナリヤー調整。	外面:棕 内面:棕	2/3	土器群B
317	鉢	口径:15.5 底径:13.0 高さ:5.0 腹径:	外面:体部叩き成形、口縁部ナリヤー調整。 内面:化粧・口縁部ナリヤー調整。	外面:に赤い棕 内面:棕	腰部は定在	土器群B
318	鉢	口径:14.3 底径:13.9 高さ:9.5 腹径:	外面:底部・体部叩き成形後、腰部エビオサと、口縁部叩き成形、 内面:底部エビオサとナリヤー調整、体部板ナリヤー調整、口縁部ナリヤー調整。	外面:に赤い棕 内面:に赤い棕	1/2	土器群B
319	鉢	口径:16.4 底径:14.0 高さ:8.6 腹径:	外面:底部エビオサ、体部エビオサとナリヤー調整、口縁部ナリヤー調整。 内面:底部・体部板ナリヤー調整、口縁部エビオサ。	外面:に赤い棕 内面:に赤い棕	1/2定在	土器群B
320	鉢	口径:15.3 底径:13.3 高さ:7.5 腹径:	外面:底部・体部叩き成形。 内面:腰子ナリ調整。	外面:に赤い棕 内面:に赤い棕	底部元存	土器群B
321	壺	口径:16.8 底径:14.0 高さ:18.2 腹径:13.9	外面:体部叩き成形、口縁部エビオサと後手で調整。 内面:体部ナリヤー調整、口縁部エビオサと後手で調整。	外面:棕 内面:棕	1/6	体部中段付着 土器群B
322	壺	口径:15.8 底径:13.2 高さ:21.6 腹径:12.5	外面:体部叩き成形、口縁部ナリヤー調整。 内面:体部ナリヤー調整、体部土手ナリヤーと、口縁部ナリヤー調整。	外面:棕 内面:に赤い棕	1/4	体部下半部分付着 土器群B
323	壺	口径:15.2 底径:12.6 高さ:21.0 腹径:12.0	外面:体部・腰部叩き成形後、口縁部ナリヤー調整。 内面:体部ナリヤー調整、体部土手ナリヤーと、口縁部板ナリヤー調整。	外面:棕 内面:に赤い棕	1/3	体部下半部分付着 土器群B
324	壺	口径:14.7 底径:13.0 高さ:18.5 腹径:	外面:底部叩き成形。 内面:底部エビオサと、体部ナリヤー調整。	外面:赤褐色-黒褐色 内面:に赤い黄褐	底部元存 体部ナリヤー 土器群B	
325	壺	口径:18.5 底径:16.9 高さ:16.3 腹径:19.8	外面:底部エビオサと、体部叩き成形後、口縁部ナリヤー調整。 内面:体部ナリヤー調整、腰部エビオサ、口縁部ナリヤー調整。	外面:に赤い棕 内面:に赤い棕	3/4	土器群B
326	壺	口径:14.4 底径:12.4 高さ:9.4 腹径:	外面:腰部エビオサと、体部叩き成形。 内面:体部ナリヤー調整。	外面:に赤い棕 内面:11-13年 青褐色	底部-底部1/2 内面に青褐色 土器群B	
327	鉢	口径:14.2 底径:11.5 高さ:6.5 腹径:	外面:底部・体部叩き成形。 内面:腰部ナリヤーと本物。	外面:に赤い棕 内面:に赤い棕	底部元存	土器群B
328	壺	口径:13.4 底径:11.1 高さ:11.1 腹径:	外面:腰部ナリヤーと本物・体部ナリヤーと本物。 内面:体部ナリヤー調整。	外面:棕 内面:棕	底部11-13年 元存	土器群B
329	壺	口径:13.6 底径:12.0 高さ:11.0 腹径:	外面:底部ナリヤーと、体部叩き成形後、今剛と、体部叩き成形。 内面:体部ナリヤー調整、体部上半エビオサと後手で調整。	外面:に赤い棕 内面:棕	体部1-3 土器群B	

第50表 3区第3面出土土器観察表(5)

番号	器種	法 量(回)	調 査 方 法	外 調	残 存 状	備 考
330	甕	口径: 11.5 底径: 11.4 高さ: 11.4	外面: 体部叩き成形後、底部下部・底部ハサナガ調整。 内面: 体部ナガ調整。	外面: 口平 内面: 口平	外底2/3 内底1/3	土器群①
331	甕	口径: 11.6 底径: 11.2 高さ: 11.2	外面: 台肩・脚部ハサナガ。 内面: 台肩ハサナガ調整。体部・口縁部へ食玉充填。	外面: 横 内面: 横	口縁部無欠損 土器群②	
332	器台	口径: 11.75 底径: 11.4 高さ: 11.8	外面: 唐城の跡不明。 内面: 体部・底部ナガ調整。	外面: 浅黄褐 内面: 口平	浅黄褐存 土器群③	
333	甕	口径: 12.7 底径: 12.0 高さ: 12.5	外面: 体部叩き成形。底部叩き成形後ナガ調整。口縁部ハサナガ調整。 内面: 底部ナガ調整。体部底部ナガ調整。口縁部ハサナガ・後ナガ調整。	外面: 浅黄褐 内面: 口平	3/4 土器群④	
334	甕	口径: 12.5 底径: 12.1 高さ: 12.1	外面: 体部叩き成形。口縁部不規則。 内面: 不規則。	外面: 口縁部 内面: 口平	口縁部 口縁部無欠損 土器群⑤	
335	甕	口径: 12.8 底径: 12.2 高さ: 12.3	外面: 体部叩き成形。口縁部叩き成形後ハサナガ調整。 内面: 体部叩き成形。底部ハサナガ・口縁部ハサナガ調整。	外面: 横 内面: 横	口縁部 外底1/2 口縁部無欠損 土器群⑥	
336	甕	口径: 12.6 底径: 11.7 高さ: 12.9	外面: 体部叩き成形。底部叩き成形後ナガナガ調整。口縁部不規則。 内面: 体部不規則。底部ハサナガ・口縁部不規則。	外面: 口平 内面: 口黄褐	1/2 土器群⑦	
337	甕	口径: 12.7 底径: 12.2 高さ: 12.6	外面: 体部叩き成形。口縁部ハサナガナガナガ調整。 内面: 体部ハサナガ調整。口縁部ハサナガナガ調整。	外面: 口平 内面: 口平	1/2 土器群⑧	
338	甕	口径: 12.0 底径: 12.0 高さ: 6.7	外面: 体部ハサナガ調整。口縁部ハサナガナガナガ調整。 内面: 体部ハサナガ調整。口縁部ハサナガナガナガ調整。	外面: 口平 内面: 口平	口縁部無欠損 土器群⑨	
339	甕	口径: 12.0 底径: 12.3 高さ: 12.9	外面: 体部叩き成形後。体部中位ハサナガ調整。口縁部横ナガ調整。底部ナガナガナガ。 内面: 体部ハサナガ調整。口縁部横ナガ調整。	外面: 口平 内面: 口黄褐	3/4 土器群⑩	
340	甕	口径: 12.2 底径: 12.2 高さ: 12.2	外面: 体部叩き成形後。体部下部・底部ハサナガ。 内面: 体部ハサナガナガ調整。	外面: 口平 内面: 口黄褐	体部ハサナガ 土器群⑪	
341	甕	口径: 12.1 底径: 12.0 高さ: 12.0	外面: 口面: 体部叩き成形後ナガナガ調整。底部ハサナガナガ。 内面: 体部上半ハサナガ調整。	外面: 口平 内面: 口平	底部若干 土器群⑫	
342	甕	口径: 12.5 底径: 12.5 高さ: 12.5	外面: 底部・身部叩き成形。底部コヒナガナガ。 内面: 唐城の跡調整不規則。	外面: 口平 内面: 口黄褐	体部・底部1/2 土器群⑬	
343	甕	口径: 12.5 底径: 12.5 高さ: 12.5	外面: 体部叩き成形後。底部ナガナガナガ。 内面: 底部板ナガ調整。	外面: 横 内面: 横	底部1/2 土器群⑭	
344	甕	口径: 12.2 底径: 12.2 高さ: 12.2	外面: 口3成形 内面: 板ナガ調整。	外面: 口白 内面: 口平	底部若干 土器群⑮	
345	甕	口径: 12.0 底径: 12.2 高さ: 12.2	外面: 底部・体部叩き成形 内面: 底部・体部ナガナガ調整。	外面: 口平 内面: 口白	底部1/2 土器群⑯	
346	杯	口径: 12.0 底径: 11.2 高さ: 11.2	外面: 底部叩き成形後。体部・口縁部叩き成形後。口縁部ハサナガナガ。 内面: 底部・体部ハサナガナガ調整後ナガナガ調整。口縁部ハサナガナガ。	外面: 横 内面: 口平	3/4 土器群⑰	
347	杯	口径: 12.4 底径: 12.2 高さ: 12.2	外面: 底部・体部叩き成形後。底部ハサナガ・口縁部叩き成形後。口縁部ナガナガ。 内面: 底部・体部ハサナガナガ調整後。底部ハサナガ・口縁部ハサナガナガ調整後ナガナガ。	外面: 横 内面: 口黄褐	口縁部1/2 底部若干 土器群⑱	
348	高杯	口径: 12.7 底径: 12.2 高さ: 12.6	外面: 底部・口縁部ハサナガナガ。 内面: 底部板ナガ調整。体部・口縁部ハサナガナガ。	外面: 横 内面: 横	口縁部3/4 土器群⑲	
349	高杯	口径: 12.5 底径: 12.0 高さ: 12.5	外面: 底部ナガ調整。底部ハサナガナガ。体部唐城の跡不明。(口縁部ハサナガナガ)。 内面: 底部ハサナガナガ。体部・口縁部ハサナガナガ。	外面: 浅黄褐 内面: 横	1/2 土器群⑳	
350	高杯	口径: 12.7 底径: 12.2 高さ: 12.2	外面: 底部・体部・口縁部ハサナガナガ。 内面: 底部ナガナガ調整。体部・口縁部ハサナガナガ。	外面: 横 内面: 口黄褐	1/4 土器群㉑	
351	高杯	口径: 12.4 底径: 12.0 高さ: 12.4	外面: 底部ハサナガナガ調整。口縁部ナガナガ調整。 内面: 底部ハサナガナガナガ調整。口縁部ナガナガ調整。	外面: 口平 内面: 口黄褐	口縁部3/4 土器群㉒	

第51表 3区第3面出土土器観察表(6)

番号	器種	径 墓(cm)	調査 標 処	色 調	残存率	備考
352	壺	口径: 21.3 壁厚: 1.2-1.4 高さ: 8.1 傷径: 16.9	外面: 縞部不明、口縫部横ナギ調整 内面: 縞部エビオサル、口縫部横ナギ調整	外側: 黒褐色 内面: 暗褐色	口縫部1/4	
353	壺	口径: 10.3 底径: 2.0 高さ: 6.8 器高: 12.2 傷径: 16.9	外面: 縮部-体部下半-タナガ調整、体部上半-縮部ヘリカガキ、口縫部横ナギ調整 内面: 縮部-体部下半ナギ調整、体部上半エビオサル、口縫部ナギ調整	外側: 暗褐色 内面: 黒一浅黃褐色	1/5	
354	壺	口径: 19.1 底径: 1.2 高さ: 15.9 器高: 12.3 傷径: 17.0	外面: 体部凹凸成、縮部ナギ調整、口縫部エビオサルヒナガキ 内面: 体部板ナギ調整、口縫部ナギ調整	外側: 淡紅褐色 内面: 暗	口縫部1/3 上部断面	
355	壺	口径: 13.9 底径: 1.2 高さ: 15.9 器高: 12.3 傷径: 17.0	外面: 体部手的形成、縮部エビオサル 内面: 体部板ナギ調整と板ナギ調整	外側: 淡紅褐色 内面: 淡紅褐色	体部1/2 丸底における存在	上部断面
356	壺	口径: 23.0 器高: 12.2 傷径: 18.0	外面: 体部-口縫部ヘリカガキ。 内面: 体部-口縫部ヘリカガキ。	外側: 淡褐色 内面: 暗褐色	口縫部3/4	
357	壺	口径: 11.0 高さ: 11.1 傷径: 3.6 器高: 7.6 傷径: 9.5	外面: 縮部凹凸成後ナギ調整、体部-口縫部凹凸成後ヘリカガキ。 内面: 縮部ナギ調整、体部-口縫部ヘリカガキ。	外側: 浅黃褐色 内面: 暗	3/4	上部断面

(2)溝

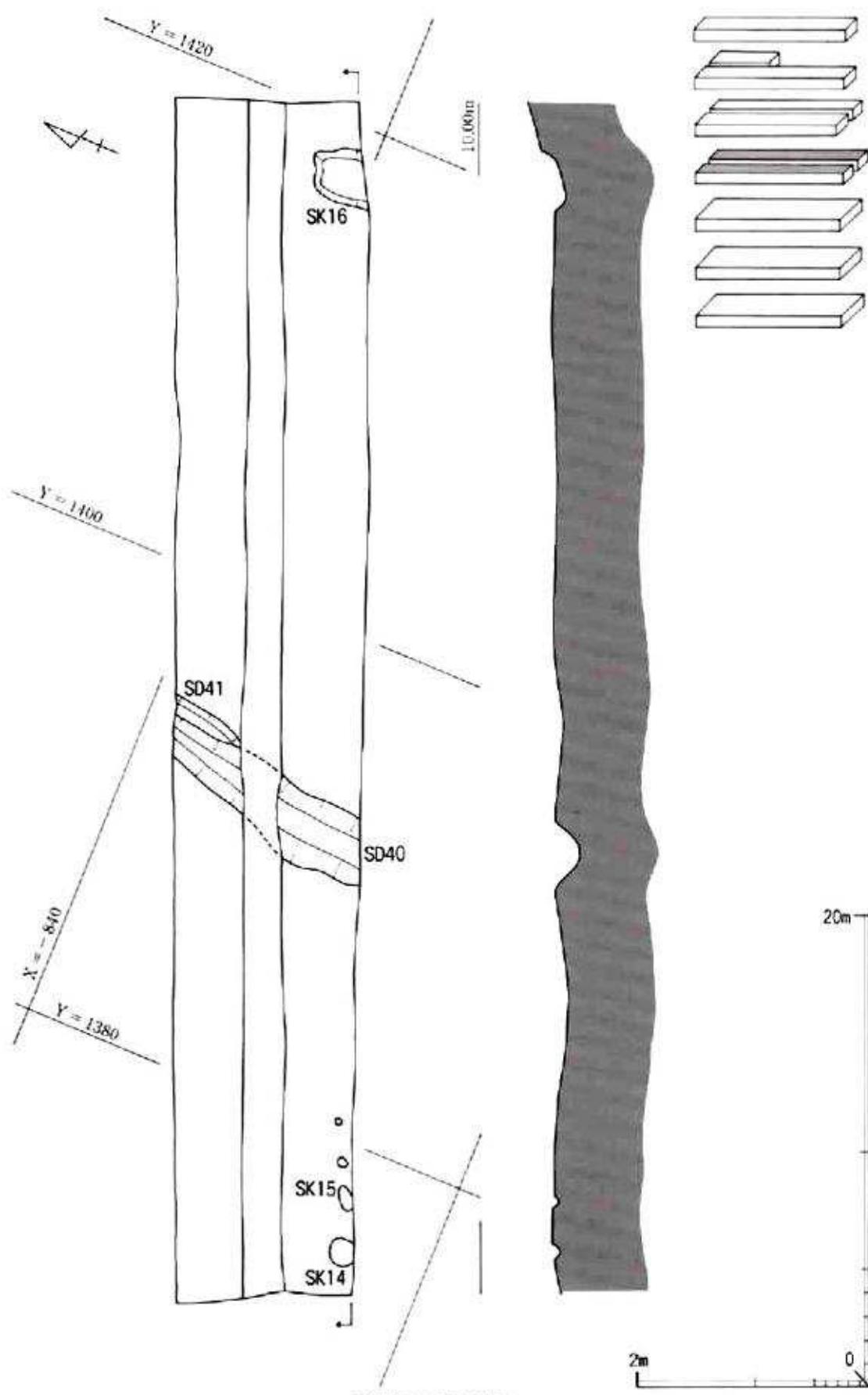
SD39

- 検出状況 中央やや西寄りで検出された。周辺には遺構は存在しない。
- 形状・規模 北側から南側に向いた溝で、ほぼ直線的である。断面形はU字形を呈している。規模は検出された長さ10m、幅78cm~1.53m、平均幅1.16mで、深さは31cmを測る。
- 埋土 下層は淡灰色極細砂で、西側に傾斜し、タミナ状に堆積している。上層は褐色粗砂~粗砂で、下層が比較的細かい粒子の砂であるのに対し、上層は粗い粒子の砂が一度に堆積した状況を示している。
- 出土遺物 壺の底部1個体(358)が出土している。平底をなすが、丸底化の傾向が認められる。

第111図 SD39出土土器

第52表 SD39出土土器観察表

番号	器種	径 墓(cm)	調査 標 処	色 調	残存率	備考
358	壺	口径: 11.0 壁厚: 1.0 高さ: 11.1 傷径: 3.6 器高: 7.6 傷径: 9.5	外側: 平底-体部ナギ調整 内面: 壁部の内外不規則	外側: 黒褐色 内面: 淡褐色-灰質	底部1/4	

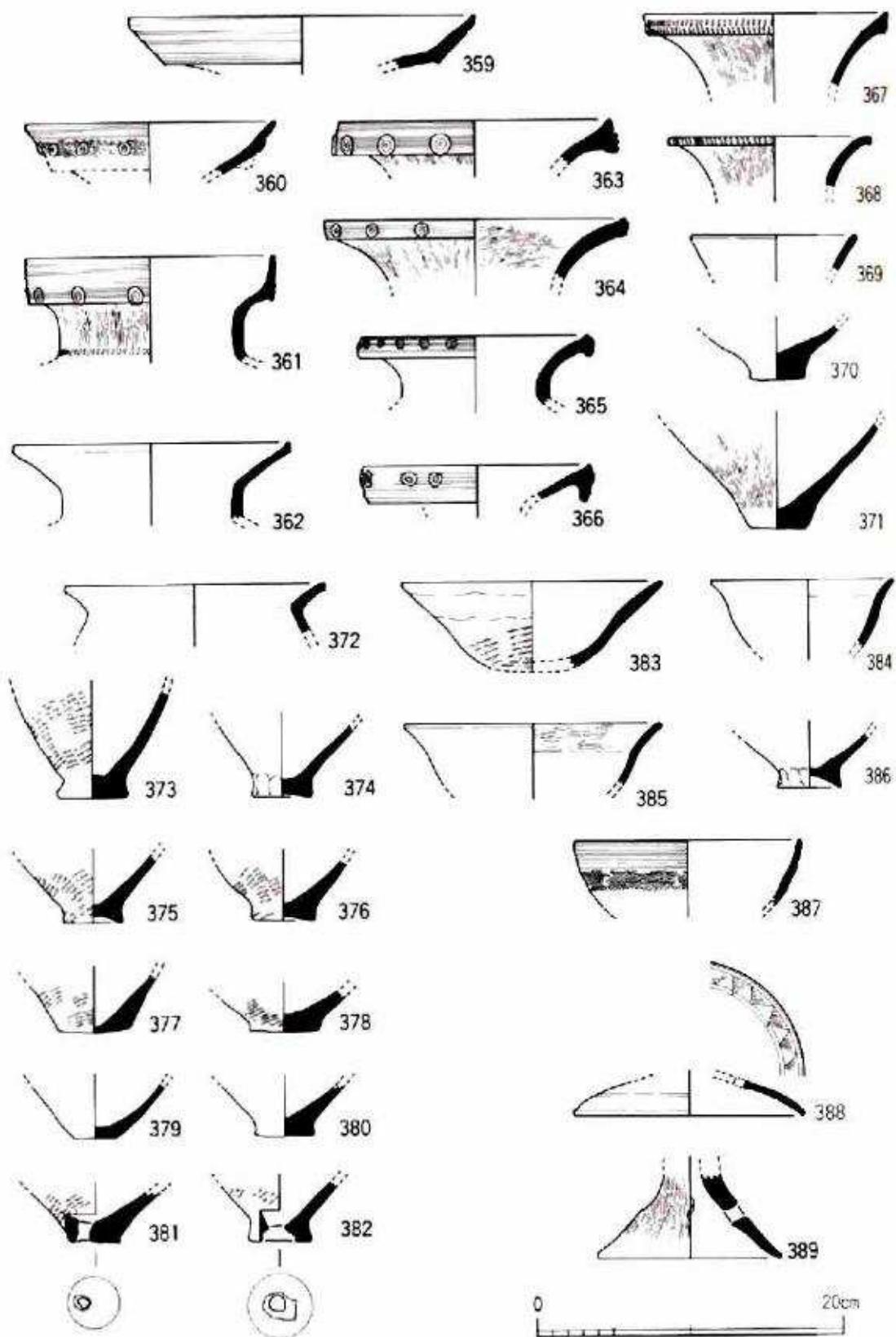


第112図 3区第4面

5. 第4面の遺構と遺物

(1) 第4面出土遺物

出土遺物	壺・甕・鉢・高環の各器種が出土している。
壺	一重口縁壺・広口壺・短頸壺・底部が出土している。
二重口縁壺	359～361の3個体を図化した。359は、口縁部のみの残存である。一次口縁外面には4条の擬凹線が施されている。360は2次口縁外面を拡張するため、1次口縁上端部に粘土を貼り付けている。ただし、すでにこの貼り付けた部分は剥離しており、その剥離痕のみが観察できる。2次口縁外面には、上端部に3条の擬凹線を施し、中央部には波状文を施文後竹管円形浮文を貼り付けている。361は、直立する頸部に口縁部を外反させ、この端に直立する2次口縁を付けている。2次口縁外面には7条の擬凹線が施され、下端部の擬凹線の上には竹管円形浮文が貼り付けられている。また、体部から頸部への変換部には刻み目が認められる。
広口壺	362は直立する頸部から口縁部を屈曲させ、直線的に引き延ばしている。端部を横ナデ調整によりつまみ上げている。
	363～366は、端部に擬凹線を施し、その後竹管円形浮文を貼り付けている。363～366は、口縁端部に粘土を貼り付け端面を拡張している。364～365は、端部を横ナデ調整によって拡張している。
	367は外反する口縁端部にわずかに粘土を貼り付け端面を拡張し、稜柱状に刻み目を施している。368はわずかに端面をつくり、刻み目を施している。
短頸壺	369の1個体のみである。
底部	370・371の2個体を図化した。いずれも突出した平底をなす。
甕	口縁部片(372)と底部片(373～380)が出土している。いずれもV様式系甕に分類されるものである。底部は基本的には突出した平底をなすが、377と379は突出していない。
鉢	有孔鉢・中型鉢・小型鉢・底部が出土している。
有孔鉢	381と382の2個体である。両個体とも、底部を垂直方向に穿孔している。381は底部中央よりずれた位置に穿たれている。径は7mmである。382は焼成後の穿孔で、下部ほど広くなっている。
中型鉢	383はいゆる丸底鉢と考えられる。内湾気味の体部に対して、口縁部はほぼ直線的である。体部から口縁部にかけて叩き上げ、口縁部をユビオサエとナデ調整により成形している。全体的に器壁が厚く仕上げられている。
	385は内湾する体部に外反する口縁部が付く。
小型鉢	384の1個体である。内湾する体部に対して口縁部を外反させている。
底部	386の1個体である。底部を外方につまみ出し、高台状をなす。
高环	环部と脚部が出土している。
环部	387の1個体である。口縁部のみの残存であるが、楕円形の环部をなすと考えられる。口縁部上端部に6条の擬凹線が、その下側に9条の擬凹線が、さらにその下側に刻み目が施されている。他の高环に比べて丁寧に仕上げられている。



第113図 3区第4面出土土器

脚部 2個体(388・389)出土しているが、388は先に報告した389と同一個体の可能性も考えられる。脚端部のみの残存であるが、端部外面に2条の凹線が施され、その間にヘラ書きによる範囲文が描かれている。389は器壁が他の高環の脚部に比べて厚く仕上げられている。4方に透穴(径9~12mm)が穿たれている。

第53表 3区第4面出土土器観察表(1)

番号	器種	法寸(㎝)	調査・技工	色調	残存率	備考
389	壺	口径:12.7 底径: 高さ:1.1 側径:	外面:口縁部横土子調整。 内面:口縁部横土子調整。	外面:橙-浅橙 内面:灰-褐灰	口縫部1/2	
390	壺	口径:16.3 底径: 高さ:1.1 側径:	外面:口縁部横土子調整。 内面:器底の為不明。	外面:橙-褐灰 内面:灰-浅橙	口縫部1/9	
391	壺	口径:16.2 底径: 高さ:12.1 側径:	外面:脚部ハナシガキ、口縁部横土子調整。 内面:脚部ハナシガキ、口縁部横土子調整。	外面:橙 内面:灰-浅橙	口縫部1/2	
392	壺	口径:18.0 底径: 高さ:11.8 側径:	外面:口縁部ハナシガキ 内面:口縁部ハナシガキ	外面:橙 内面:灰	口縫部1/4	
393	壺	口径:17.7 底径: 高さ:12.9 側径:	外面:ハナシガキ 内面:ナメ調整。	外面:橙 内面:灰	口縫部1/3	
394	壺	口径:19.1 底径: 高さ:14.1 側径:	外面:ハナシガキ 内面:ハナシガキ、口縁部横土子調整。	外面:橙 内面:橙-褐灰	口縫部1/6	
395	壺	口径:19.8 底径: 高さ:14.9 側径:	外面:器底の為不明 内面:器底の為不明。	外面:橙 内面:橙-褐灰	口縫部1/3	
396	壺	(口径:14.7) 底径: 高さ: 側径:	外面:横ナギ調整 内面:横ナギ調整。	外面:橙 内面:灰	口縫部1/4	
397	壺	口径:14.6 底径: 高さ:14.8 側径:	外面:頭部-口縁部ハナシガキ 内面:器底の為不明。	外面:橙 内面:灰	口縫部1/2	
398	壺	口径:14.1 底径: 高さ:14.1 側径:	外面:頭部-口縁部ハナシガキ、口縁部横土子調整 内面:頭部-口縁部ナメ調整。	外面:橙-褐灰 内面:橙-褐灰	口縫部1/4	
399	壺	口径:19.8 底径: 高さ:12.3 側径:	外面:ナメ調整 内面:ナメ調整。	外面:橙 内面:灰	口縫部1/2	
400	壺	口径:13.6 底径: 高さ:12.2 側径:	外面:底部ハナシガキ、体部ナメ調整 内面:底部-体部横ナメ調整。	外面:橙-褐灰 内面:橙-褐灰	底部1/2定存	
401	壺	口径:13.6 底径: 高さ:16.2 側径:	外面:底部ナメ調整、体部ナメ調整後ハナシガキ 内面:底部-体部横ナメ調整。	外面:黄褐色-褐灰 内面:褐灰-黑	底部1/2定存	
402	壺	口径: 底径: 高さ:13.3 側径:	外面:体部ナメ調整、口縁部ハナシガキ-底部ナメ調整 内面:体部-口縁部ナメ調整。	外面:橙-褐灰 内面:橙-褐灰	口縫部1/4	
403	壺	口径: 底径: 高さ:14.3 側径:	外面:底部ハナシガキ、自然形状 内面:底部ハナシガキナメ調整、体部横ナメ調整。	外面:黑褐色 内面:灰	底部1/4	
404	壺	口径: 底径: 高さ:14.0 側径:	外面:底部-体部ハナシガキ後、底部ハナシガキ 内面:底部-体部ナメ調整。	外面:黑-褐 内面:灰	底部定存	
405	壺	口径: 底径: 高さ:14.0 側径:	外面:底部-体部ハナシガキ後、底部ハナシガキ 内面:底部-体部ナメ調整。	外面:灰-浅橙 内面:灰-浅橙	底部定存	
406	壺	口径: 底径: 高さ:14.3 側径:	外面:底部-体部ハナシガキ後、底部ハナシガキ 内面:底部-体部ナメ調整。	外面:灰-浅橙 内面:灰-浅橙	底部定存	
407	壺	口径: 底径: 高さ:14.5 側径:	外面:底部-体部ハナシガキ後、底部ハナシガキ 内面:底部-体部ナメ調整。	外面:灰-浅橙 内面:灰-浅橙	底部定存	

第54表 3区第4面出土土器観察表(2)

番号	縁・様	法 量(cm)	調 整 方 法	色 調	残 存 率	備 考
378	縁	口径: 34.0 底径: 23.9 高さ: 12.9	外面: 底部・体部切削後。 内面: ナナ調整。	外面: 明小褐 内部: 明小褐	底部元存	
379	縁	口径: 33.0 底径: 23.9 高さ: 12.9	外面: ナナ調整。 内面: 底部・体部切削後調整。	外面: 明赤褐色 内部: 棕	底部完存	
380	縁	口径: 34.0 底径: 23.9 高さ: 12.9	外面: 底部ニビオサエ、体部ナナ調整。 内面: 底部ナナ調整。	外面: 淡赤い褐 内部: 淡赤い褐	底部完存	
381	縁	口径: 33.4 底径: 23.4 高さ: 12.9	外面: 体部・口縁部削り底部削、細部: 口縁部ニビオサエ。 内面: 体部ナナ調整後ヘリカガキ、口縁部ニナ調整。	外面: 明赤褐 内部: 明赤褐	底部元存	
382	縁	口径: 34.2 底径: 23.9 高さ: 12.9	外面: 底部・体部切削後成形後。底部ニビオサエ。 内面: 底部・体部ナナ調整。	外面: 暗赤一暗 内部: 棕	底部完存	
383	縁	口径: 36.9 底径: 26.6 高さ: 12.9	外面: 底部・体部切削成形後ナナ調整、口縁部ニビオサエ。 内面: 底部ニナ調整。	外面: 棕 内部: 棕	口縁部1/4	
384	縁	口径: 32.7 底径: 21.2 高さ: 12.9	外面: 体部ナナ調整・口縁部ナナ調整。 内面: 体部切削ナナ調整、口縁部切削ナナ調整。	外面: 棕 内部: 棕	口縁部1/4	
385	縁	口径: 36.7 底径: 21.8 高さ: 12.9	外面: 体部ナナ調整・口縁部切削後ヘリカガキ。 内面: 体部ナナ調整・口縁部ヘリカガキ。	外面: 棕 内部: 棕	口縁部1/4	
386	縁	口径: 34.4 底径: 24.5 高さ: 12.9	外面: 底部ニビオサエ、体部ナナナナ調整。 内面: 底部・体部切削ナナ調整。	外面: 棕 内部: 淡赤い褐	底部元存	
387	高付	口径: 34.6 底径: 24.6 高さ: 12.9	外面: ナナ調整。 内面: ナナ調整。	外面: 棕 内部: 棕	口縁部1/4	
388	高付	口径: 32.2 底径: 24.8 高さ: 12.9	外面: ナナ調整。 内面: ナナ調整。	外面: 棕 内部: 棕	口縁部1/3	
389	高付	口径: 32.5 底径: 24.9 高さ: 11.9	外面: 剥離後、底部・脚部ハリカガキ。 内面: 剥離後ナナ調整。	外面: 棕・褐灰 内部: 棕・褐灰	脚部はは元存	

(2) 上塙

SK14

検出状況 調査区の西南端で検出された。周囲にはSK15などと共に列状に並んでおり、その内SK14は最も西端に位置する。

形状・規模 平面形は円に近く、長軸が1.00m、短軸が73cmを測る。断面の形状は圓形で、検出面からの深さは27cmである。底部での径は30cmである。長軸の方向はN20°-60°Wである。

埋土 黒褐色細砂・中砂が堆積しており、焼土が混入している。

出土遺物 特に認められなかった。

SK15

検出状況 調査区の南西部で検出した。SK14の東側に位置する。他の遺構との切り合ひ関係は認められない。

形状・規模 平面橢円形を呈し、北東-南西方向に主軸をとる。主軸方向で1.06m、その直交方向で50cmを測る。断面圓形をなし、最深部における検出面からの深さは7cmである。

埋土 1層からなり、粗砂混じり細砂（黒）が堆積していた。

出土遺物

甕の口縁部1個体(390)が出土している。体部に対して口縁部を大きく屈曲させ、頸部内面は明確な棱をなす。



第114図 SK15出土土器

第55表 SK15出土土器観察表

番号	器種	法 量(cm)	調 査・施 工 法	色 調	残存率	備考
390	甕	口径:19.00 岩径: 30.00×11.31 岩高:11. 腹径:	外底:底部・口縁部カット調整。 内面:ハサスナカ調整・口縁部カット調整。	外底:褐 内面:褐	104部1/6	

SK16

検出状況

調査区の東南端で検出され、全体の状況は不明である。他の遺構との切り合いは認められない。

形状・規模

全体の形状は不明であるものの、検出された部分からは圓丸方形を呈している。部分的に突出している箇所もあるが、崩れたことによる可能性が高い。確認できた部分での規模は長軸2.12m、短軸2.28mを測る。断面は皿形を呈し、検出面からの深さは20cmを測る。底部の規模は長軸1.80m、短軸1.12mを測る。

埋土

2つの層から成る。下層はオリーブ褐色細砂～中砂、上層は暗灰色中砂～粗砂で、いずれの層も小礫を含んでいる。

出土遺物

遺物の出土は全く認められなかった。

(3) 溝

SD40

検出状況

調査区の中央やや西寄りで検出された。周辺にはほぼ同じ方向のSD41があるが、SD40はSD41を切っている。あるいは同時に存在した可能性もある。

形状・規模

南側から北側に向いた溝で、ほぼ直線的である。断面の形状はU字形を呈している。規模は、検出された長さが9.13m、幅が1.53m～2.80m、平均幅が2.17mで、深さは28cmを測る。

埋土

下層はオリーブ褐色細砂～粗砂が中心で、上層は灰色細砂～中砂が中心であり、下層の方が若干粒子の粗い砂が堆積している。

出土遺物

壺・甕・鉢・高杯・ミニチュアの各器種が出土している。

壺

広口壺と底部片が出土している。

広口甕

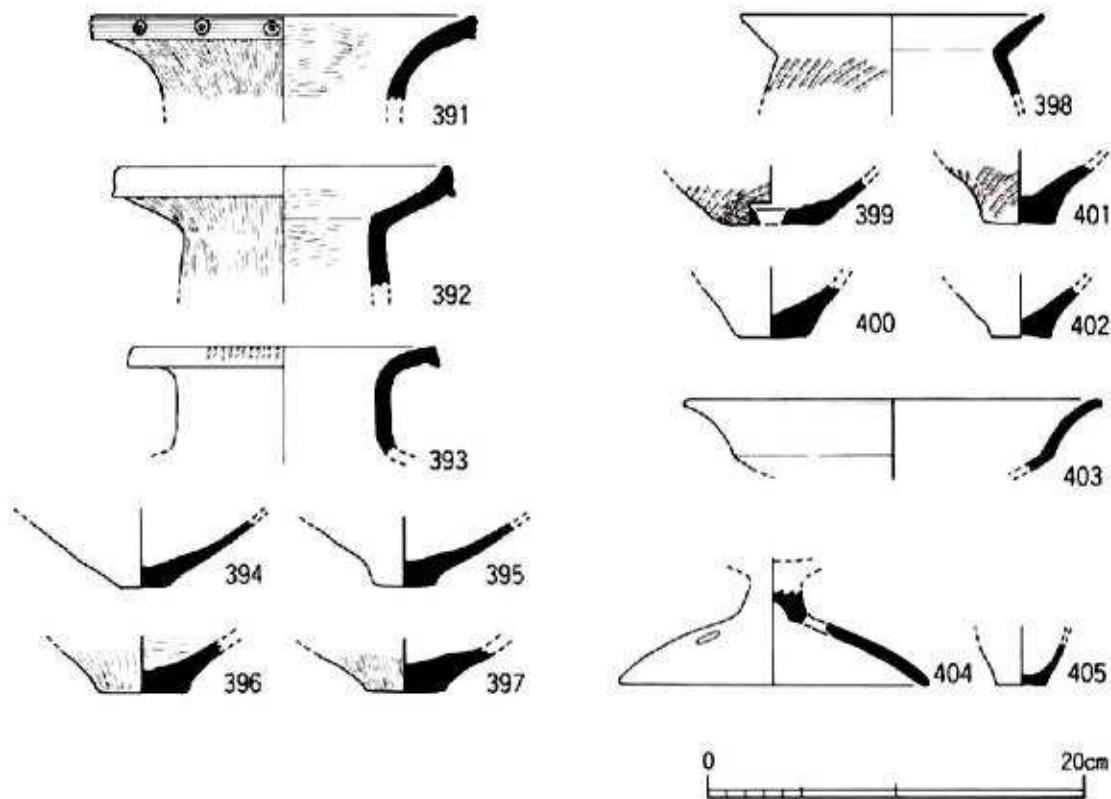
391は口縁部をわずかに拡張し、3条の擬凹線を施し、その上に竹管円形浮文を貼り付けている。392は、直立する頸部に口縁部を屈曲させ、端部上面に粘土を貼り付け端部を拡張している。393は392とはほぼ同じ形態的特徴を有するが、端部は下方につまみ出すことによって端面を拡張している。端面には刻み目が施されている。

底

4個体圓化した。394は尖底に近い形態をなす。他の3個体は明確な平底をなす。

甕

口縁部と底部を圓化した。いずれもV様式系甕に分類されるものである。



第115図 SD40出土土器

鉢 399の1個体のみである。有孔鉢に分類されると考えられるが、底径が大きく他の有孔鉢とは若干特徴を異にする。また底部の叩きは1方向ではなく2方向になされている。

高杯 壺部と脚部各1個体ずつ出土している。壺部(403)は、内湾する体部に短く外反する口縁部が付くものである。脚部は短脚で、裾部が大きく内湾気味に広がる。透穴は2段にわたって施され、上段(脚部から裾部への変換部)に2穴観察でき、下段は2穴しか確認できないが、本来は4穴あったものと推定される。

ミニチュア 405の1個体である。口縁部まで残存しないが、鉢形と考えられる。

第56表 SD40出土土器観察表(1)

番号	器種	法 量(cm)	調 査 方 法	色 調	残 存 率	備 考
391	壺	口径: 20.6 脚径: 高さ: 腹径:	外面: ハラシガキ。 内面: ハラシガキ。	外面: にじい粉 内面: 黄灰	壺部1/3	
392	壺	口径: 17.4 脚径: 高さ: 腹径:	外面: 体部凹成形。口縁部横十字調整。 内面: 体部凹凸調整せず調整。口縁部横十字調整。	外面: にじい粉 内面: にじい粉	壺部1/3	
393	壺	口径: 16.0 脚径: 高さ: 腹径:	外面: 壺底の為不規 内面: 壺底の為不規	外底: 粉・浅黄粉 内底: 浅黄粉	壺部1/4	
394	壺	口径: 2.7 脚径: 高さ: 腹径:	外面: 壺底・体部十字調整。 内面: 壺底十字調整。	外底: 淡白・褐色 内底: 褐	壺部1/2生存	
395	壺	口径: 3.5 脚径: 高さ: 腹径:	外面: 壺底の為不規 内面: 壺底の為不規	外底: 褐 内底: にじい黄粉	壺部1/2生存	
396	壺	口径: 4.7 脚径: 高さ: 腹径:	外面: ハラシガキ 内面: 壺底十字オホリ・体部ハラ調整。	外底: 褐・褐色 内底: 褐	壺部1/3	

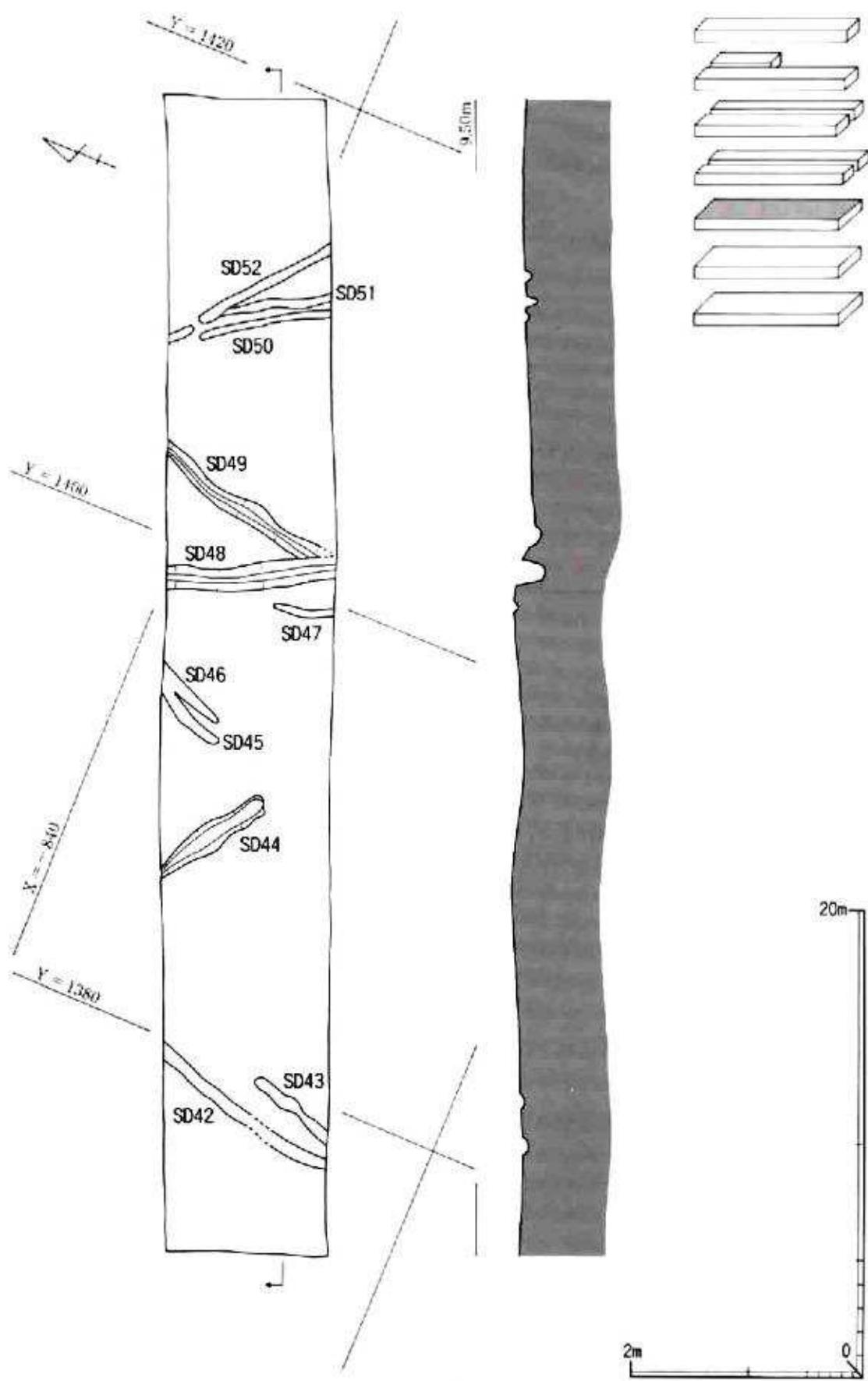
第57表 SD40出土土器觀察表(2)

番号	器種	底面(Φcm)	調査・技法	色調	残存率	備考
397	壺	口徑: 直径14.1 側径: 高さ: 2.3 腹径:	外面: ハラ・ガキ 内面: 板ナギ調整	外面: 黄褐色 内面: 淡白・黄褐色	底部1/2	
398	壺	口徑: (16.2) 側径: (12.2) 高さ: (3.5) 腹径:	外面: 体部叩き成形 内面: 整成の為不規	外面: 棕・褐色 内面: に赤い赤褐色	口縁部1/5	
399	底盤	口徑: 直径: 13.2 側径: 高さ: 2.5 腹径:	外面: 底部・体部叩き成形 内面: ハラ・ガキ調整	外面: 棕 内面: に赤い黄褐色	底部2/3	
400	壺	口徑: 直径: 13.6 側径: 高さ: 2.2 腹径:	外面: ナギ調整 内面: 植ナギ調整	外面: に赤い黄褐色 内面: 淡白	底部はほぼ完全	
401	壺	口徑: 直径: 13.9 側径: 高さ: 2.3 腹径:	外面: 底部・体部叩き成形 内面: 造形エビオサニ、体部板ナギ調整	外面: に赤い黄褐色 内面: 褐色	底部完全	
402	壺	口徑: 直径: 13.2 側径: 高さ: 2.7 腹径:	外面: 底部エビオサニ、体部板ナギ調整 内面: 植ナギ調整	外面: に赤い棕 内面: 淡黄褐色	底部はほぼ完全	
403	高杯	口徑: (21.8) 高さ: 3.8 側径: 高さ:	外縁: 体部・口縁周縁上子調整 内面: 体部・口縁周縁ナギ調整	外縁: 棕 内面: に赤い黄褐色	口縁部1/6	
404	高杯	口徑: 直径: 13.9 側径: 高さ: 2.9 腹径: 16.2	外縁: ハラ・ガキ 内面: ナギ調整	外縁: に赤い棕 内面: に赤い棕	質感2/3	
405	ミニチカラ	口徑: 高さ: 2.2 側径: 高さ:	外縁: ナギ調整 内面: ナギ調整	外縁: に赤い黄褐色 内面: に赤い黄褐色	底部はほぼ完全	

SD41

- 検出状況** 調査区の中央やや西寄りで検出された。周辺にはほぼ同じ方向のSD40があるが、SD41はSD40に切られている。あるいは同時に存在した可能性もある。
- 形状・規模** SD40に切られているため、幅、長さ、深さのいずれも不明である。
- 埋土** 下層は黄灰色細砂、中層は黒褐色粗砂混じり細砂～極細砂、上層は中疊混じり青黒色細砂～粗砂で、層を構成する砂の粒子は中層が最も細かく、上層が最も粗い。
- 出土遺物** 遺物は出土していない。

第3面 3区の遺構と遺物



第116図 3区第5面

6. 第5面の遺構と遺物

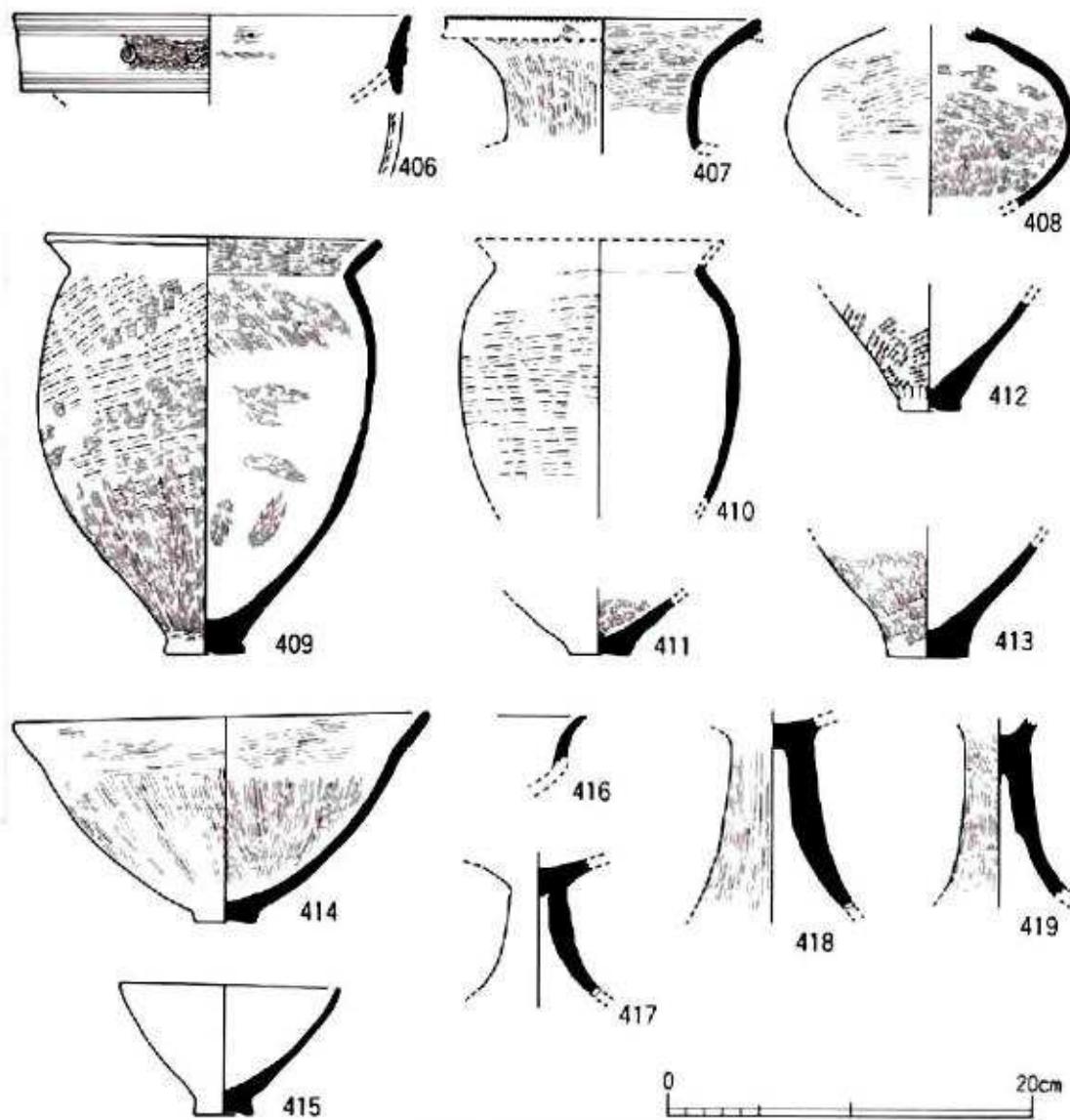
(1) 第5面出土遺物

出土遺物 壺・甕・鉢・高杯の各器種が出土している。

壺 3個体図化した。二重口縁壺・広口壺・体部片が出土している。

二重口縁壺 406の1個体である。口縁端部を上下方向に拡張し、端面の上端部と下端部にそれぞれ2条の凹線を施し、その中間に12条の櫛描波状文を施している。さらに波状文の上に竹管円形浮文を貼り付けている。また、端部下端面には刻み目が施されている。なお、この土器については器台に分類される可能性も否定できないが、口径が小さいことから壺に分類した。

広口壺 407の1個体である。頸部から口縁部にかけて大きく外反させ、端部を下方に拡張している。端部上端には刻み目を施している。また端面にはヘラ描きによる鋸歯文を描いているが、磨滅のため明確には観察できない。また、鋸歯文と並んで円形浮文も貼り付けられていたようであるが、ほとんど残存していない。



第117図 3区第5面出土土器

- 体部** 408の1個体であるが、細頸型もしくは直口壺の体部と考えられる。
- 臺** 底部を含めて5個体図化したが、いずれもV様式系甕である。409はほぼ完存する個体である。体部から口縁部にかけて叩き上げて成形し、その後体部を全面ではないがハケ調整を加えている。
- 鉢** 大型鉢(414)と小型鉢(415)が各1個体出土している。
- 大型鉢** 内溝する体部に対して口縁部を外方にわずかに屈曲させている。口縁部はわずかに内溝傾向にある。
- 小型鉢** 体部から口縁部にかけて内溝気味に立ち上がる輪形の鉢である。
- 高杯** 杯部と脚部が出土している。
- 环部** 416の口縁部の小片である。口縁部を短く外反させているが、端部外面に1条の沈線が施されている。
- 脚部** 3個体図化した。いずれも長脚に分類されるものである。

第58表 3区第5面出土土器観察表

番号	器種	底 線(cm)	調 整 技 法	色 調	残存率	備考
406	壺	口径:22.0 底径: 脚径:	外周:土台調整。 内面:ペラミダリ。	外面:棕一黑 内面:灰+棕	口縁足若干	
407	壺	口径:22.1 底径: 脚径:	外周:圓底+口縁部ハラミダリ。 内面:ペラミダリ。	外周:棕 内面:棕	口縁足少	
408	壺	口径:22.2 底径: 脚径:	外周:ペラミダリ。 内面:体部ハラミダリ調整。	外周:灰+白 内面:棕	体部1/2	
409	甕	口径:18.2 底径:21.4 脚径:	外周:体部叩き成形後ハラミダリ調整。 内面:体部ハラミダリ調整+口縁部エビオサ工後ハラミダリ調整。	外周:灰褐 内面:棕	ほぼ完存 体部下半部打滑	
410	甕	口径:18.2 底径:21.5 脚径:	外周:叩き成形。 内面:体部上半部土台調整+外周+エビオサ工後板土台調整。	外周:棕 内面:灰+棕	体部1/2 体部中段打滑	
411	甕	口径:18.4 底径: 脚径:	外周:板土台調整。 内面:ハラミダリ。	外周:灰+棕 内面:棕	底部ほぼ完存	
412	甕	口径:18.5 底径: 脚径:	外周:底部+体部叩き成形後+底部エビオサ工。 内面:ハラミダリ調整。	外周:灰褐+棕 内面:灰褐+黑褐	底部完存	
413	甕	口径:18.5 底径: 脚径:	外周:底部エビオサ工+体部ハラミダリ調整。 内面:窓溝のみ不明。	外周:灰白 内面:棕	底部2/3	
414	鉢	口径:20.8 底径:19.8 脚径:	外周:ハラミダリ。 内面:ペラミダリ。	外周:灰褐 内面:灰褐		
415	鉢	口径:21.9 底径: 脚径:	外周:底部エビオサ工+体部+口縁部ハラミダリ調整。 内面:板土台調整。	外周:明黄褐+棕 内面:明黄褐	1/3	
416	高杯	口径: 脚径: 底径:	外周:土台調整。 内面:土台調整。	外周:浅黄褐 内面:灰+黄褐	口縁足わずか	
417	高杯	口径: 脚径: 底径:	外周:窓溝のみ不明。 内面:ハラミダリ調整。	外周:棕 内面:棕	窓溝足存	
418	高杯	口径: 脚径: 底径:	外周:ペラミダリ。 内面:オーバーライム。	外周:灰+棕 内面:灰+棕	窓溝足存	
419	高杯	口径: 脚径: 底径:	外周:ハラミダリ。 内面:ハラミダリ。	外周:灰+棕 内面:土台調整。	窓溝足存	

(2)溝

SD42

検出状況	調査区の西端で検出された。周辺にはほぼ同じ方向のSD43があるが、両者の関係は不明である。また、調査区やや西寄りで検出されたSD44とは直交する方向である。
形状・規模	北側から南側に向いた溝で、ほぼ直線的であるが、南端付近で若干東側に湾曲している。断面の形狀はU字形を呈している。規模は検出された長さ8.70m、幅40cm~60cm、平均幅50cmで、深さは7cmを測る。
埋土	明灰黄色粗砂~極細砂の1層のみ確認できた。
出土遺物	壺・甕・鉢が出土している。壺は底部片、甕は体部片、鉢は口縁部片がそれぞれ出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。弥生時代後期の土器である。

SD43

検出状況	調査区の西寄りで検出された。周辺にはほぼ同じ方向のSD42があるが、両者の関係は不明である。調査区より南側には続くが、北側へは調査区の中央で途切れている。
形状・規模	全体には北側から南側に向いた直線的な溝であるが、平面形が不整形で、凹凸が著しい。規模は検出された長さ4.23m、幅26cm~60cm、平均幅43cmで、深さは4cmを測り、非常に浅い。
出土遺物	甕の体部片がわずかに出土しているが、小片のため図化できなかった。外面に叩き目が観察される。

SD44

検出状況	調査区の中央やや西寄りで検出された。周辺には直交に近い方向のSD42・SD43があるが、交差していないため、両者の関係は不明である。
形状・規模	北西側から南東側に向いた溝で、ほぼ直線的であるが、調査区中央付近で南側が途切れている。断面の形狀はU字形を呈している。規模は検出された長さ5.40m、幅38cm~1.12m、平均幅75cmで、深さは21cmを測る。
埋土	堆積の確認できた4つの層はすべて、極細砂を中心であり、最も細かい層が最下層の極細砂質シルトで、最も粗い層が上から2層目の細砂混じり極細砂である。
出土遺物	壺の体部片と甕の口縁部片・体部片が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。弥生時代後期の土器である。

SD45

検出状況	調査区の中央、北端で検出された。すぐ東側には同時に存在したと考えられるSD46があり、調査区の北端で両溝は繋がっている。また、周辺には直交に近い方向のSD44があるが、交差していないため、両者の関係は不明である。
形状・規模	南側から北側に向いた溝で、ほぼ直線的であるが、やや東側に湾曲している。断面形はU字形を呈している。規模は検出された長さ3.58m、幅30cm~48cm、平均幅39cmを測り、深さは1cmと浅い。

埋土	SD46と同じにぶい褐色粗砂の1層のみ確認できた。
出土遺物	壺の体部片と甕の体部片が出土している。いずれも小片のため同化できなかった。弥生時代後期の土器である。

SD46

検出状況	調査区の中央、北端で検出された。すぐ西側には同時に存在したと考えられるSD42があり、調査区の北端で両溝は繋がっている。また、周辺には直交に近い方向のSD44があるが、交差していないため、両者の関係は不明である。
形状・規模	南側から北側に向いた溝で、すぐ西側に存在するSD42が湾曲しているのに対し、直線的である。断面の形状はU字形を呈している。規模は検出された長さ3.60m、幅26cm~50cm、平均幅38cmを測り、深さは20cmである。
埋土	SD42と同じにぶい褐色粗砂の1層のみ確認できた。
出土遺物	遺物は出土しなかった。

SD47

検出状況	調査区の中央、南端で検出された。北側は調査区中央付近で途切れている。東側には同じ南北方向を向くSD48があるが、両者の関係は不明である。
形状・規模	北側から南側に向いた溝で、やや東側に湾曲している。断面形はU字形を呈している。規模は検出された長さ2.20m、幅30cmを測り、深さは6cmと浅い。
埋土	オリーブ黄色粗砂の1層のみ確認できた。
出土遺物	壺と甕の体部片および高坏の脚部片が出土している。いずれも小片のため同化できなかった。弥生時代後期の土器である。

SD48

検出状況	調査区中央のやや東寄りで検出された。東側にはSD49があり、調査区の南端で切り合った関係が認められ、SD48はSD49を切っている。西側にはSD47があるが、SD48との関係は不明である。
形状・規模	北側から南側に向いた溝で、ほぼ直線的である。断面形はU字形を呈している。規模は検出された長さ2.20m、幅90cm~1.13m、平均幅1.02mを測り、深さは21cmである。
埋土	下層は浅黄色粗砂~極細砂のラミナ、及び灰色シルト質極細砂で、上層は厚く、にぶい黄褐色粗砂~極細砂であり、上層の方が層を構成する粒子が粗い。
出土遺物	小片が1点出土しているが、同化はおろか、器種の特定もできない。

SD49

検出状況	調査区の東寄りで検出された。西側にはSD48があり、調査区の南端で切り合った関係が認められ、SD49はSD48に切られている。
形状・規模	北側から南側に向いた溝で、(1)は直線的ではあるが、平面形は歪である。断面形は平底の逆台形を呈している。規模は検出された長さ8.00m、幅46cm~85cm、平均幅66cmを

測り、深さは6cmである。

埋土 下層は青灰色極細砂質シルト、上層はにぶい黄褐色細砂であり、上層が層を構成する粒子が粗い。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

SD50

検出状況 調査区の東寄りで検出された。調査区の北端付近で途切れている。東側には、ほぼ同じ方向を向くSD51・SD52があり、規模も近い。

形状・規模 北西側から南東側に向いた溝で、ほぼ直線的である。断面形はU字形を呈している。規模は検出された長さ5.60m、幅20cm~33cm、平均幅27cmを測り、深さは3cmと浅い。

埋土 青灰色粗砂~極細砂の1層のみ確認できた。

出土遺物 壺の体部片が出土している。外面に叩き目が観察できる。小片のため図化はできない。

SD51

検出状況 調査区の東寄りで検出された。調査区の北側で、SD52に切られている。西側にはほぼ同じ方向を向くSD50があり、SD52と共に規模も近い。

形状・規模 ほぼ南北方向に向いた溝で、直線的である。断面形はU字形を呈している。規模は検出された長さ4.85m、幅25cm~45cm、平均幅35cmを測り、深さは10cmである。

埋土 青灰色粗砂~細砂の1層のみ確認できた。

出土遺物 高坏の脚部が出土しているが、小片のため図化はできない。弥生時代後期である。

SD52

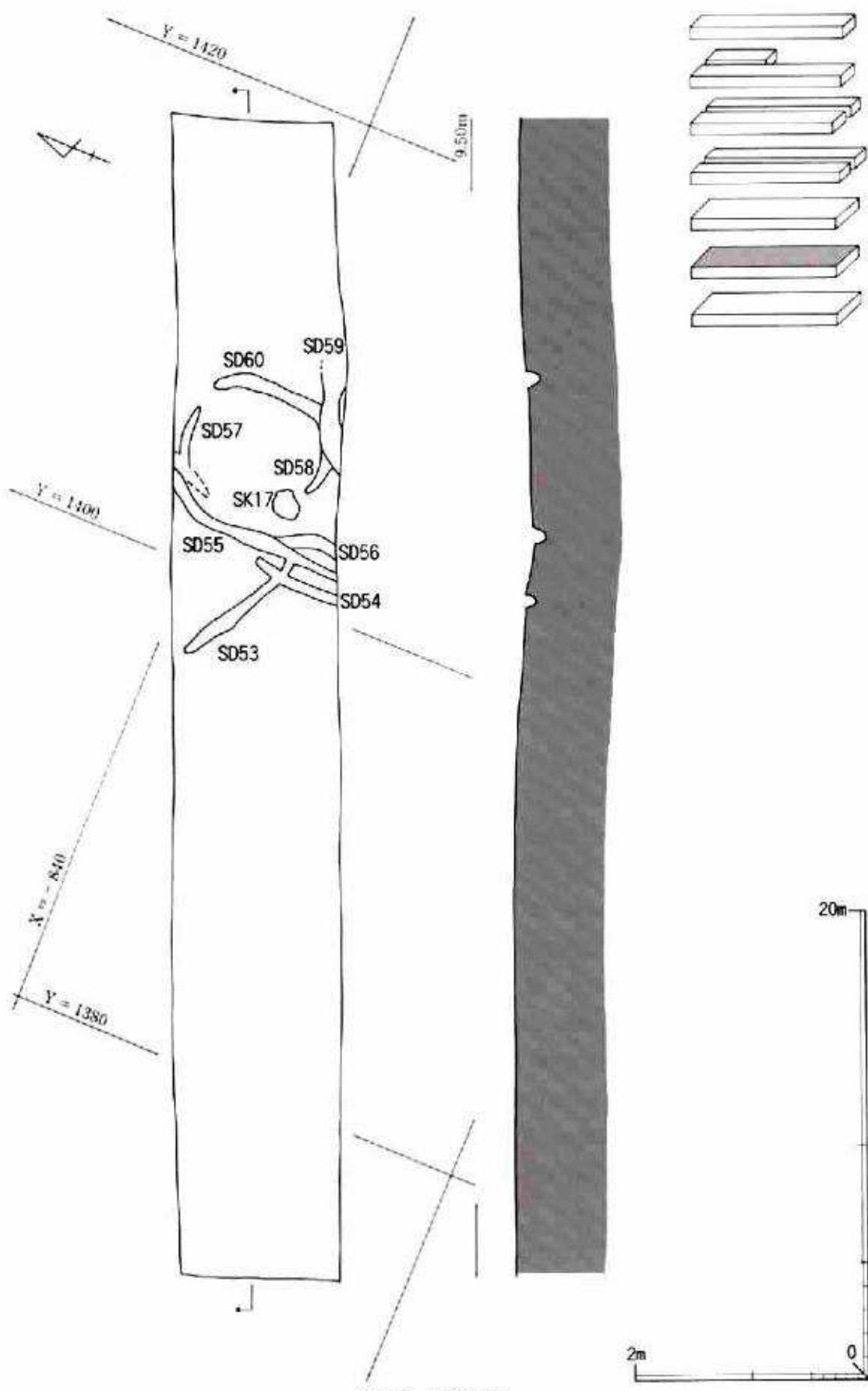
検出状況 調査区の東寄りで検出された。調査区の北側でSD51を切っている。SD50・SD51とは規模・方向ともに近い。

形状・規模 北西側から南東側に向いた溝で、ほぼ直線的である。調査区の北側で途中が途切れている。断面の形状はU字形を呈している。規模は検出された長さ7.90m、幅32cm~44cm、平均幅38cmを測り、深さは5cmと浅い。

埋土 下層は灰色極細砂~シルト質極細砂、上層はにぶい黄褐色粗砂~細砂で、上層の方が下層より層を構成する粒子が粗い。層の厚さは、検出されたレベルでは、下層の方が厚い。

出土遺物 壺の体部片と底部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。弥生時代後期の土器である。

第3節 3区の遺構と遺物



第118図 3区第6面

7. 第6面の遺構と遺物

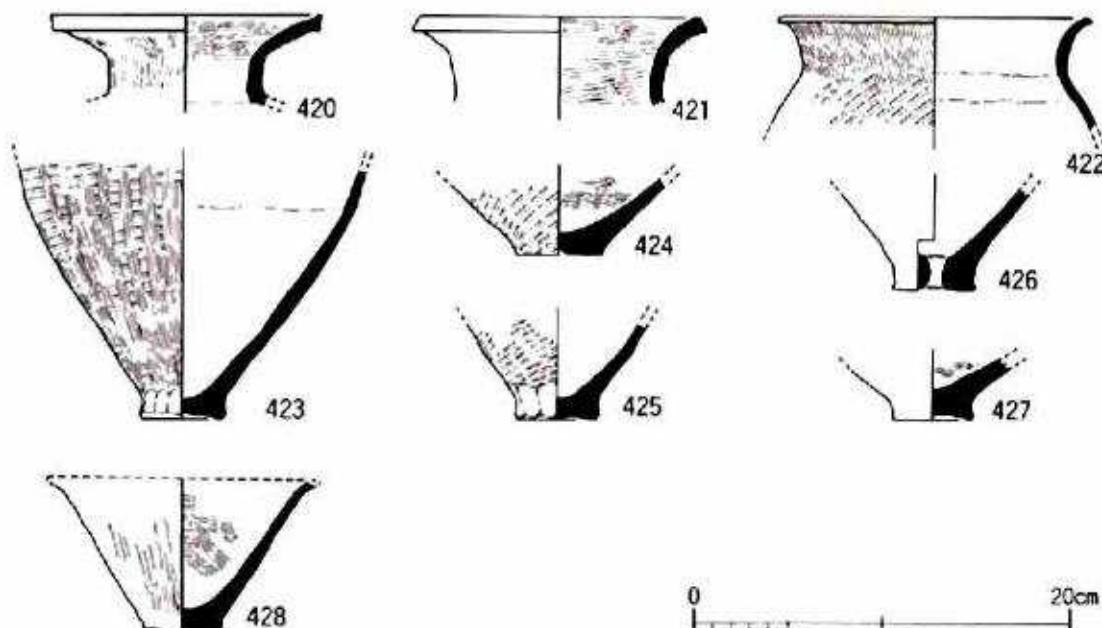
(1) 第6面出土遺物

出土遺物 壺・甕・鉢の各器種が出土している。

壺 広口壺2個体を図化した。

甕 4個体図化したが、いずれもV様式系譜に分類されるものである。

鉢 小型鉢・有孔鉢・底部片が出土している。



第119図 3区第6面出土土器

第59表 3区第6面出土土器観察表

番号	器種	法 量(cm)	調 整 方 法	色 調	残 存 率	備 考
420	壺	口径:14.1 脚径:16.2 腹径:	外側:一突一肩式。 内側:頭部V字調整。口縁部へV字入り。	外面:棕 内面:棕	口縁部1/2	
421	甕	口径:14.8 脚径:13.1 腹径:	外側:頭部V字調整。口縁部へV字入り。	外面:棕 内面:棕	口縁部1/4	
422	甕	口径:16.2 脚径:14.1 腹径:	外側:体部V字調整後。頭部V字調整 内側:体部V字調整後。口縁部V字入りV字調整	外面:棕 内面:棕	口縁部1/5	
423	甕	口径:14.5 脚径:13.1 腹径:	外側:底部V字調整後成形後。底部V字入り。 内側:底部V字調整後成形後。底部V字入り。	外面:棕 内面:灰	底盤1/3	底部冲撃痕有 近底一部 下半埋付有
424	甕	口径:17.7 脚径:15.1 腹径:	外側:底部V字調整	外面:棕 内面:黑	底部完存	
425	甕	口径:14.5 脚径:15.1 腹径:	外側:底部V字調整後。底部V字入り。 内側:V字入り	外面:灰 内面:棕	底盤3/4	
426	鉢	口径:14.5 脚径:13.5 腹径:	外側:底部V字調整後。底部V字入り。 内側:V字調整	外面:棕 内面:棕	底部完存	
427	壺	口径:14.3 脚径:12.4 腹径:	外側:底部V字調整後。底部V字入りV字調整 内側:V字調整	外面:棕 内面:棕	底部完存	
428	鉢	口径:14.0 脚径:15.0 腹径:	外側:底部V字調整後。底部V字入りV字調整 内側:底部V字調整後。底部V字入りV字調整	外面:灰 内面:棕	1/4	

(2) 上塙

SK17

- 検出状況** 調査区の東側で検出され、溝によって囲まれた隅円方形部分の南端にあたる。他の遺構との切り合いは認められない。
- 形状・規模** 平面形は不整形であり、円形に近い。規模は長軸1.30m、短軸1.10mを測り、検出面からの深さは25cmである。
- 出土遺物** 遺物の出土は全く認められなかった。

(3) 溝

SD53

- 検出状況** 中央やや東寄りで検出された。周辺は溝が縦横に延びており、SD53はその中で最も西に位置する。SD54・55とはほぼ直交に交わっているが、切り合い関係は不明で、同時に存在した可能性もある。SD53がSD55で止まっていることから、その可能性は高いと考えられる。
- 形状・規模** 南東側から北西側に向いた溝で、SD54との交点で若干屈曲するものの、ほぼ直線的な溝である。断面はU字形を呈している。規模は検出された長さ5.90m、幅30cm~60cm、平均幅45cmで、深さは5cmと浅い。
- 埋土** 1層から成り、粘性のあるオリーブ黒色中砂~細砂が堆積していた。
- 出土遺物** 全く出土していない。

SD54

- 検出状況** 中央やや東寄りで検出された。周辺には溝が南北に3本あるが、SD54は最も西に位置する。SD53とはほぼ直交するが、前後関係は不明で、同時に存在した可能性もある。
- 形状・規模** 北側から南側に向いた溝で、やや東側に彎曲するものの、ほぼ直線的な溝である。断面の形状はU字形を呈している。規模は検出された長さ3.90m、幅36cm~44cm、平均幅40cmで、深さは4cmと浅い。
- 埋土** 1層から成り、粘性のあるオリーブ黒色中砂~細砂が堆積していた。
- 出土遺物** 全く出土していない。

SD55

- 検出状況** 中央やや東寄りで検出された。周辺には溝が南北に3本あるが、SD55はその中の中央に位置する。SD56と交わっており、SD55がSD56を切っている。また、SD53とも交わっているが、切り合い関係は不明で、SD53がSD55でT字形に止まっていることから、同時に存在した可能性もある。
- 形状・規模** 南北に向いた溝で、若干蛇行するものの、ほぼ直線的である。断面形は逆台形を呈している。規模は検出された長さ8.35m、幅30cm~62cm、深さ11cmを測る。
- 埋土** 1層から成り、粘性のあるオリーブ黒色中砂~細砂が堆積していた。
- 出土遺物** 全く出土していない。

SD56

検出状況	調査区の東側で検出された。周辺には溝が南北に3本あるが、SD56は、その中で最も東に位置する。SD55と交わり、SD55に切られている。
形状・規模	ほぼ南北方向に向いた溝で、西側に彎曲している。断面形はU字形を呈している。規模は検出された長さ2.70m、幅50cm~55cm、平均幅57cmで、深さは5cmと浅い。
出土遺物	全く出土していない。

SD57

検出状況	調査区東側の北端で検出された。周辺には溝が多く検出され、特にSD57・SD60・SD58は平面隅円方形状に巡る区画を構成している。当溝はその区画の北辺を構成する。
形状・規模	西側から東側に向いた溝で、若干南側に彎曲している。断面形はU字形を呈している。規模は検出された長さ2.65m、幅20cm~42cm、平均幅31cmで、深さは17cmと浅い。
埋土	1層からなり、粘性のある黒褐色細砂・極細砂が堆積していた。
出土遺物	全く出土していない。

SD58

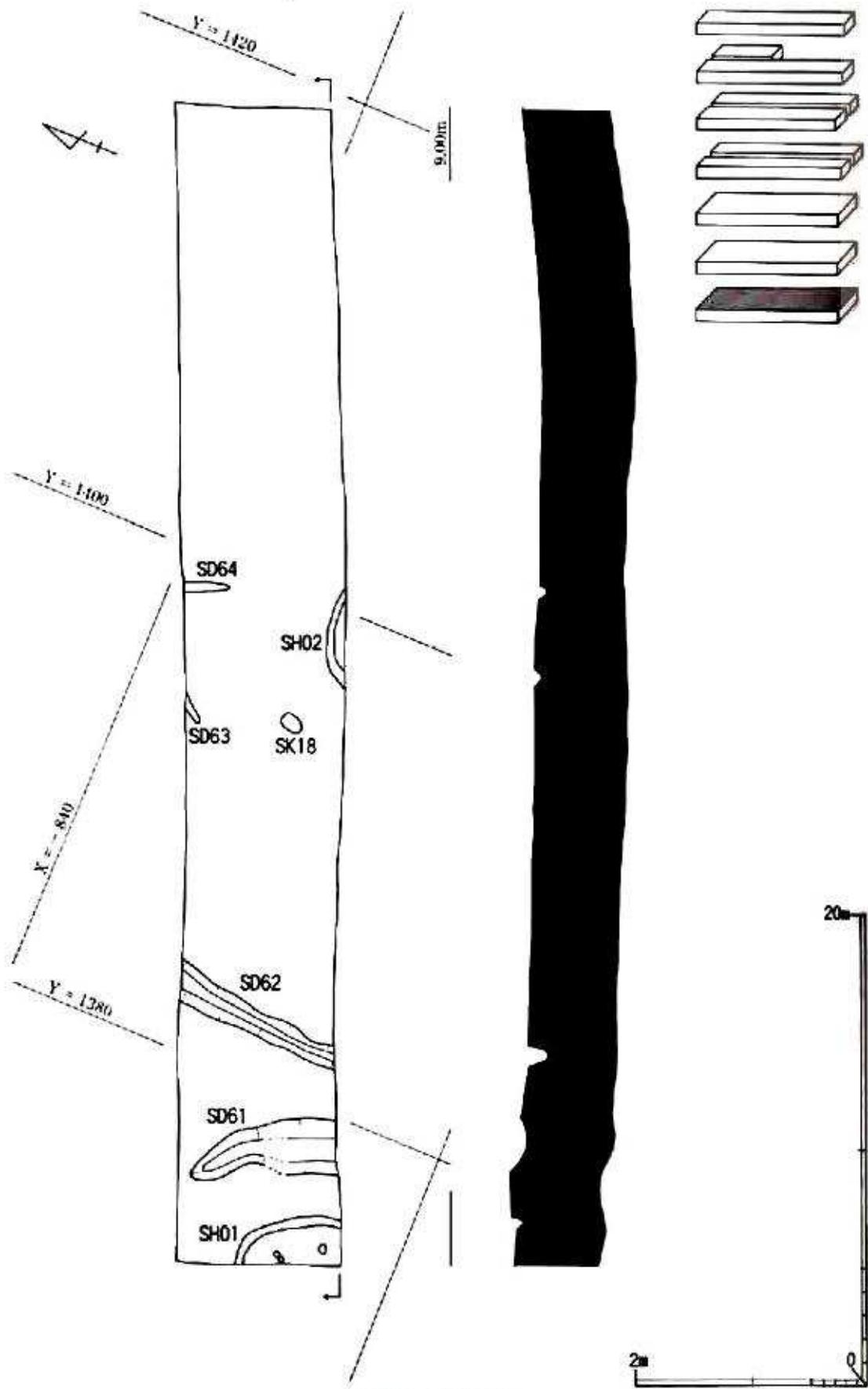
検出状況	調査区東側の南端で検出された。周辺には溝が多く検出されており、特にSD57・SD60・SD58は平面隅円方形状に巡る区画を構成している。SD58はその区画の南辺を構成するようである。SD59に切られている。
形状・規模	東側から西側に向いた溝で、若干北側に彎曲している。断面の形状はU字形を呈している。規模は検出された長さ1.55m、幅20cm~70cm、平均幅45cmで、深さは5cmと浅い。
出土遺物	全く出土していない。

SD59

検出状況	調査区中央やや東寄りの南端で検出された。周辺は溝が縦横に延びており、SD59はその中で最も南東に位置する。SD58・SD60と交わり、SD59が両溝を切っている。
形状・規模	東側から西側に向いた溝で、南側に大きく彎曲している。断面はU字形を呈している。規模は検出された長さ4.45m、幅60cm~1.00m、平均幅80cmで、深さは23cmを測る。
出土遺物	全く出土していない。

SD60

検出状況	調査区中央やや東寄りで検出された。周辺には溝が縦横に延びているが、その中で最も東側に位置する。また、SD57・SD60・SD58は平面方形状に巡る区画を構成し、本溝はその区画の東辺を構成するようである。南側はSD59に切られており不明である。
形状・規模	北側から南側に向いた溝で、北側で若干西側に彎曲するものの、ほぼ直線的な溝である。断面形はU字形を呈している。規模は検出された長さ4.50m、幅50cm~70cm、平均幅60cmで、深さは15cmを測る。
出土遺物	全く出土していない。



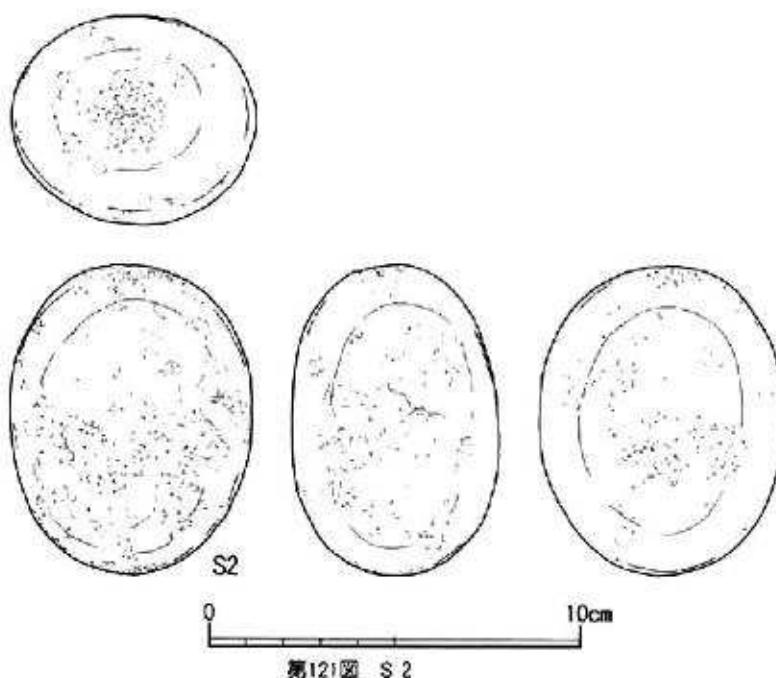
第120図 3区第7面

8. 第7面の遺構と遺物

(1) 第7面出土遺物

当遺構面の検出にあたっては、土器は全く出土していない。ただし、石器が1点出土している。

石器 磐石が1点(S2)出土している。楕円状の礫を使用したもので、両端と縁辺部に敲打の痕跡をとどめるが、さらに中央部にもわずかながら敲打によると思われるあばた状の窪みが認められる。研磨は行われていない。長さ8.3cm、幅6.5cm、厚さ5.5cm、重さ391.7gを測る。



第121図 S2

(2) 住居跡

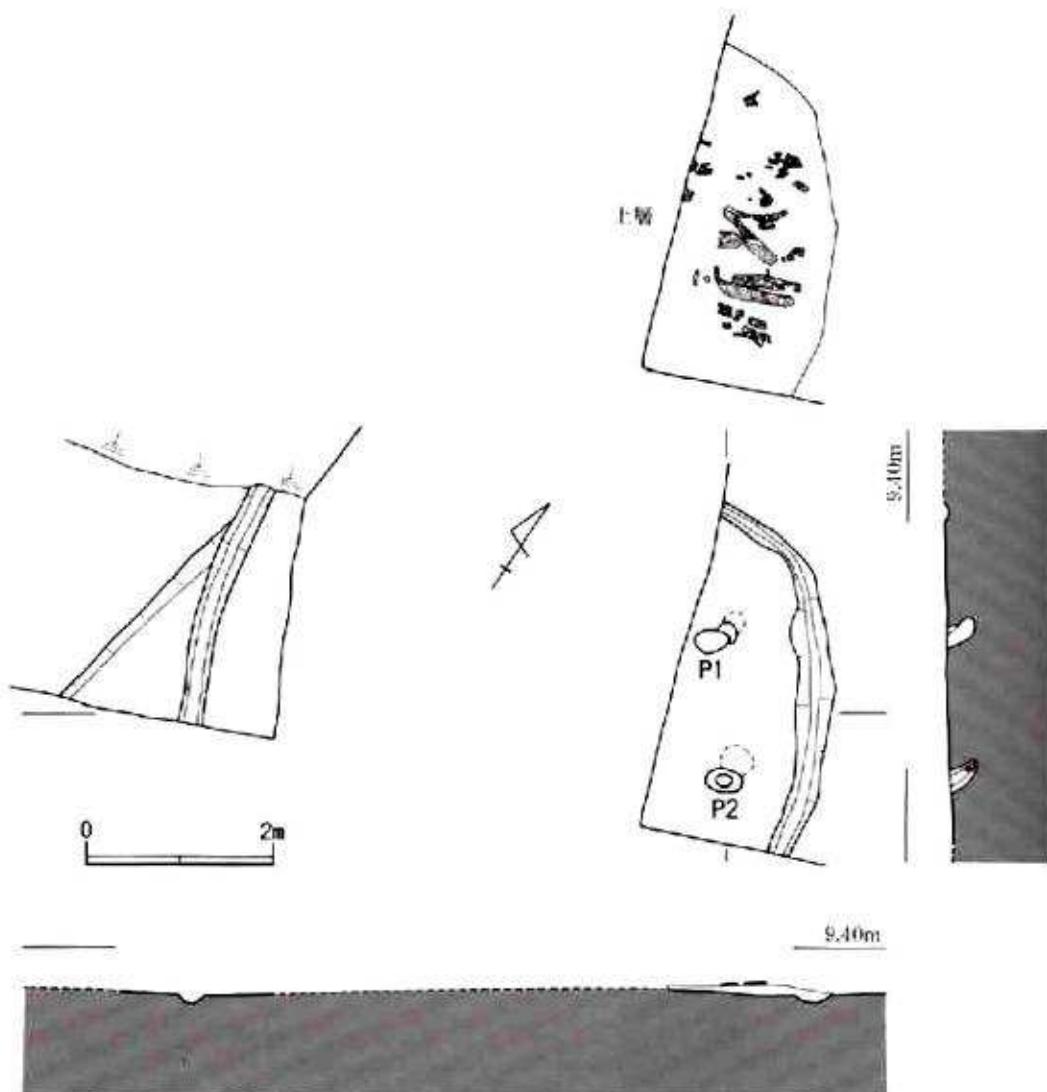
SH01

検出状況 調査区の西端で検出された。東側には浅いSD61がある。また、2区第6面東端においても、SH01の西側にSD33がめぐっており、SH01の東側と西側の両側で溝がめぐることになる。しかし、出土遺物がないため、SH01と関係するかは不明である。

検出範囲は、調査区の制限や擾乱などから全体の約1/5である。他の遺構との切り合は認められない。また、本住居跡は焼失住居である可能性が高く、検出時に上層において炭化材がまとまって出土したが、本来の形態がわかるほど良好に遺存していなかった(図版29)。

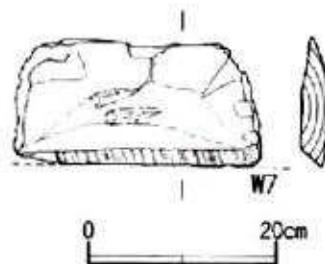
形状・規模 平面形は、西側と東側の辺を見ると若干彎曲している状況が看取できるが、北東の隅には緩い屈曲点があることが判る。よって、各辺に丸みのある方形、あるいは多角形住居である可能性が高い。復元した面積は約38m²である。

埋土 上層には炭化材が認められた。埋土は1層からなり、粘性のあるオリーブ黒色細砂が堆積していた。



第122図 SH01

- 屋内施設** 周壁溝・主柱穴が確認でき、中央土壇については調査区の制限から確認できなかった。
- 周壁溝** 床面を検出した範囲では全周している。床面における幅は最大で50cm、最小で20cmを測り、床面からの深さは10cm程度である。溝底部における幅は10~15cmである。
- 主柱穴** 東側で2穴検出した。他の柱穴については、調査区の制限により不明であり、本来何本の柱穴で構成されていたのかは明らかにできない。
- P 1 は掘り方の径35cm、検出面からの深さ50cmを測る。P 2 は掘り方の径33cm、検出面からの深さ42cmを測る。底からは柱と礎板(W 7)が出土した。
- 両柱穴はいずれも南側に傾いているが、築造当初から傾いていたのか、築造後、崩壊するまでに傾いたのかは明らかではない。
- 礎板** P 2 の底に置かれた礎板(W 7)は、長さ26.3cm、幅13.6cm、厚さ3cmを測り、現状の平面形は長方



第123図 P.2 出土礎板

形に近い。図の下方は当初の面を保っているものの、他の3辺については遺存状況は悪い。中央部付近には、深さ1cm近い傷状の窪みが2ヶ所確認できる。

出土遺物 時期を特定できるような遺物は出土していない。

SH02

検出状況 調査区の中央、南端で検出された。北西にはSK18がある。周壁溝の一部のみ検出されたので、住居跡であるかどうかは確定できない。

形状・規模 平面形は、周壁溝が緩い円弧を描いていることから、円形であったと思われる。しかし、SH01のように各辺が緩い円弧を描きながら角を持つ状況を見ると、方形あるいは多角形であった可能性も考えられる。

埋土 1層からなり、黒色細砂～極細砂が堆積していた。

屋内施設 周壁溝のみ検出された。

周壁溝 検出できた範囲では全周している。床面における幅は最大で40cm、最小で28cmを割り、床面からの深さは5～10cm程度である。溝底部における幅は20cm～10cmである。

出土遺物 時期を特定できるような遺物は出土していない。

(3) 土壙

SK18

検出状況 調査区のはば中央で検出された。SH02の西側2.5mに位置する。他の遺構との切り合は認められない。

形状・規模 平面は橢円形を呈しており、長軸で1m、短軸で70cmを測る。断面形は不整形で逆三角形状を呈する。検出面からの深さは32cmを測る。

埋土 2層からなる。下層は細塵を含む黒色細砂～中砂、上層は中砂を含む黒色細砂～極細砂で粘性がある。

出土遺物 壺の口縁部・体部・底部の各小片が出土しているが、國化できなかった。いずれも弥生時代後期の壺である。

(4) 溝

SD61

検出状況 調査区の西側で検出された。西側にはSH01があり、東側には同じ方向を向いたSD62が位置している。北側については調査区内で収束している。

形状・規模 北西側から南東側に向いた溝である。断面形はU字形を呈している。規模は検出された長さ6.40m、幅1.00m～2.40m、平均幅1.70mで、深さは5cmと浅く、全体に幅広く浅い溝であると言える。

埋土 1層からなり、黒色細砂～中砂が堆積していた。

出土遺物 全く出土していない。

SD62

検出状況

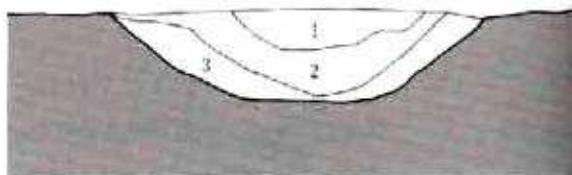
調査区の西側で検出された。

9.00m

西側にはSD61があり、ほぼ同じ方向を向いている。

形状・規模

北側から南側に向いたほぼ直線的な溝である。断面形はU字形を呈している。規模は検出された長さ7.30m、幅80cm～1.50m、平均幅1.15mで、深さは24cmを測る。



1. 2.5Y 2/1 黒 極細～細砂 やや粘質
2. 5G 2/1 緑黒 細砂やや粘質 粗砂混在有機物若干入る
3. 5Y 2/2 オリーブ黒 粗砂～中砂

堆土

3層からなり、下層がオリーブ黒色粗砂～中砂、中層が緑黑色細砂～粗砂、上層が黒色極細砂～細砂であり、上層の方が砂粒の大きさが小さい。



第124図 SD62

出土遺物

壺・甕・鉢・高環の各器種が出土している。

壺

底部と体部片が出土しているが、図化できたのは429の1点である。この土器は、体部の立ち上がりの角度から壺に分類したが、外面上に煤の付着が認められることから、壺の可能性も考えられる。



429

甕

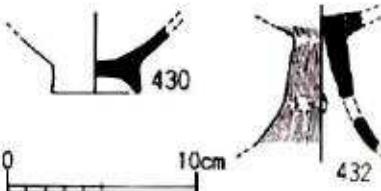
体部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。



430

鉢

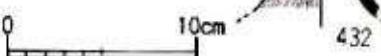
430の底部1個体が出土している。



431

高環

高環と脚部を図化した。



432

第125図 SD62出土土器

第60表 SD62出土土器観察表

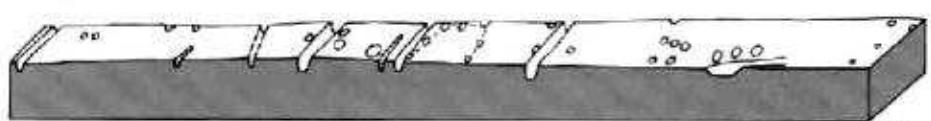
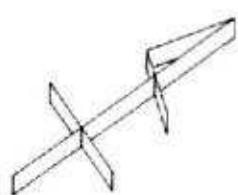
番号	器種	底 庫(cm)	調 整 部 位	色 調	残存率	備 考
429	壺	口径: 15.1 脚径: 13.0 底径:	外面: ナナ調整。 内面: ナナ調整。	外面: 黄褐色 内面: 黄褐色	底部生存	外側削り毛
430	甕	口径: 14.5 脚径: 13.9 底径:	外面: 底部ニセナサモ、体部ナナ調整。 内面: ナナ調整。	外面: 黒灰・黒 内面: 黑灰	底部生存	
431	鉢	口径: 13.1 脚径: 11.0 底径:	外面: 横ナナ調整。 内面: 横ナナ調整。	外面: に赤い模 内面: に赤い模	口縁剥落	
432	高環	口径: 12.9 脚径: 12.9 底径:	外面: ハラミガキ。 内面: 脚部横ナナ調整、体部ハラミガキ。	外面: に赤い模 内面: に赤い模	脚部生存	

SD63

検出状況	調査区の中央、北端で検出された。東側にSD64があるが、両者の関係は不明である。北側は調査区の制限のため不明である。
形状・規模	北東側から南西側に向いた溝である。断面形はU字形を呈している。規模は検出された長さ1.40m、幅26cm~28cm、平均幅27cmで、深さは8cmを測る。
埋土	1層からなり、細礫を含んだオリーブ黒色中砂~細砂が堆積していた。
出土遺物	全く出土していない。

SD64

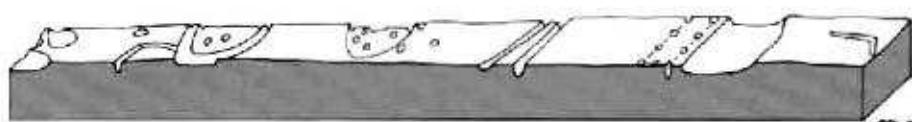
検出状況	調査区の中央、北端で検出された。西側にSD63があるが、両者の関係は不明である。北側は調査区の制限のため不明である。
形状・規模	南東側から北西側に向いた溝であり、検出された範囲では直線的に延びている。断面形は逆台形状を呈している。規模は検出された長さ1.90m、幅30cm~37cm、平均幅34cmで、深さは5cmと浅い。
出土遺物	全く出土していない。



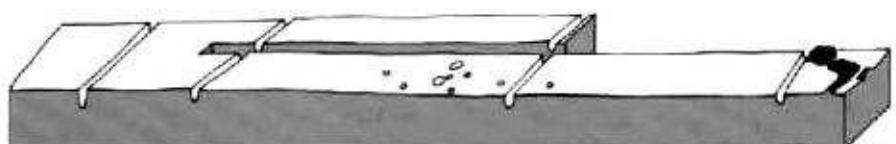
第1面



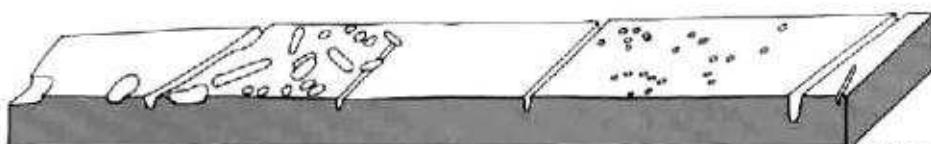
第2面



第3面



第4面



第5面



第126図 4・5区の造構

第4節 4・5区の遺構と遺物

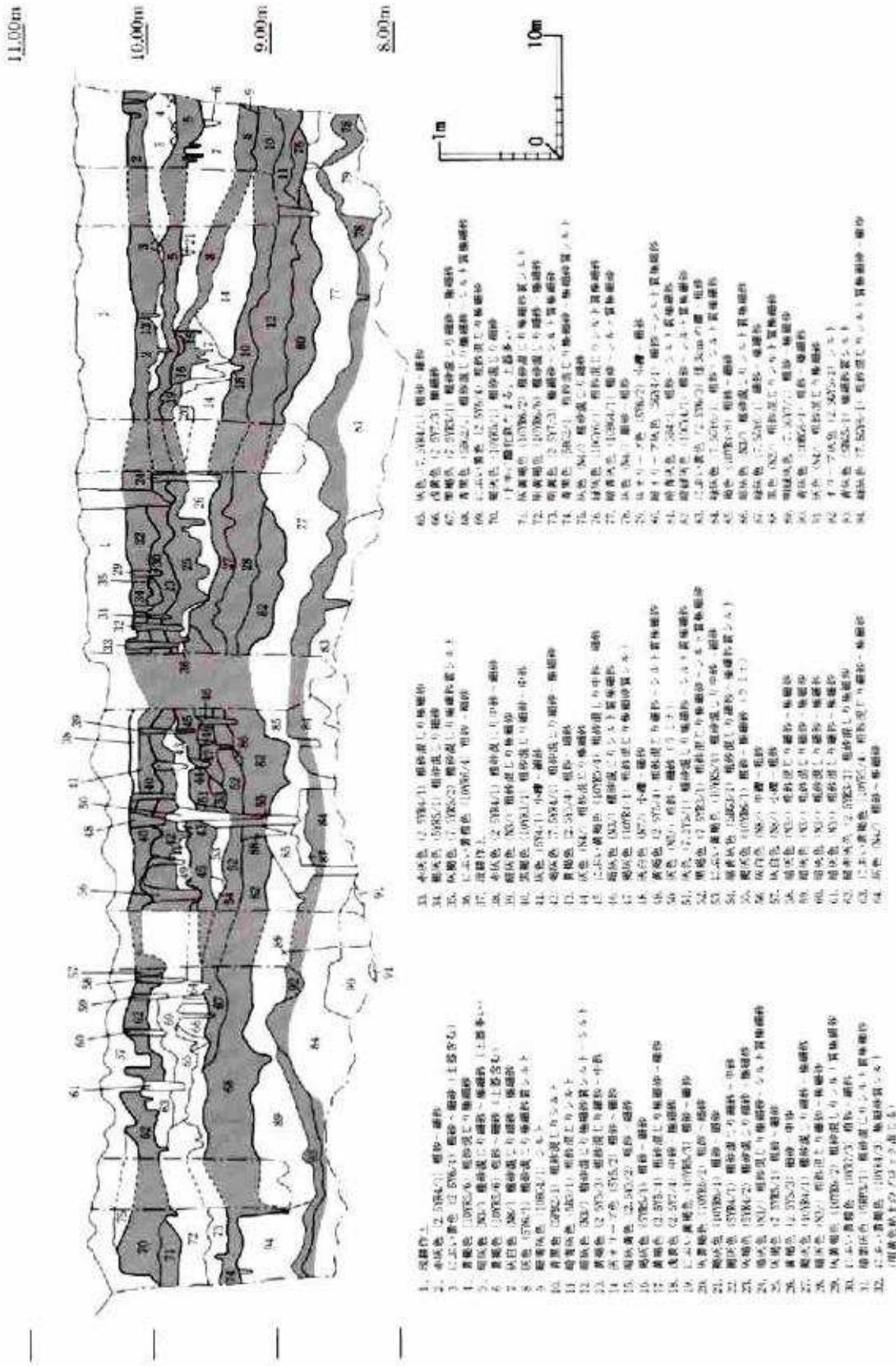
1. 概要

(1) 概略

- 位置** 3区の東側、6区の西側に位置する調査区で、調査対象地のはば中央部に位置する。また、下内膳遺跡として推定されている範囲（第9図）のはば中央部にもあたる。このため、調査対象地のなかでは、現地表面の標高が最も高くなっている。
- 旧淡路鉄道** 当地区は、淡路鉄道建設に伴う削平が最も著しい。第1面から第3面までは北側半分を全て削平されている。また第4面については、北東約 $1/3$ の範囲を削平され、その西側約 $1/3$ については、淡路鉄道に伴う側溝の掘削が及んでいる。
- 遺構の検出** 第1面から第5面までの5面にわたって遺構を検出した。
- 第1面** 当遺構面は現耕作土の直下で検出している。このため、旧地形において最も高かった箇所は削平されたようで、弥生時代後期から中世にかけての各時代の遺構を当遺構面で検出している。遺構としては、掘立柱建物跡3棟、溝13条を検出した。
- 第2面** 当遺構面においては遺構は全く検出されていない。当面を下面とする土壤層が認められ、この土壤層から比較的まとまった弥生時代後期の土器が出土している。
- 第3面** 当地区のなかでも最も遺構が密集して検出されている。おもな遺構は、竪穴住居跡3棟、土塙10基、溝8条などである。いずれも弥生時代後期の遺構である。
- 第4面** 遺構としては、土塙3基、溝4条を検出した。弥生時代中期から後期にかけての時期と考えられる。このほか、調査区の東端部で咲町を伴う水田跡を検出した。当地区的東側の6区第6面で検出した水田跡に統くものである。
- 第5面** 当地区的東半部を中心に多くの遺構を検出した。主な検出遺構は、土塙26基、溝6条、柱穴である。特に、当調査区東半部において土塙が密集し、土塙群を形成している。上記の遺構はいずれも弥生時代中期に位置付けられ、今回の調査で検出した遺構のなかで最も古い一群といえる。



第127図 4・5区の調査



第128図 4・5区土層断面(南面)

(2) 基本層序と遺構の検出

4・5区は下内蔵遺跡の所在する扇状地の中ではほぼ中央に位置しており、3区と共に今回の調査区内において最も高所にあたり、また今回の調査で層位的に最も下である第5面においても最も高所にあたる。全体的には水平に堆積しているが、第4面・第5面については、若干東側の方が高い。

土層の堆積は、第128図に示したように、94層からなるが、基本的な層序としては、上層から順にI層からVI層の6層に分けることができる。これらの6層はその上面に遺構面をもつが、I層は現地表面、II層は第1面、III層は第2面、IV層は第3面、V層は第4面、VI層は第5面にそれぞれ対応する。

I層

このI層は、今回の調査対象外と判断したため、機械により掘削した。

当遺跡の全てを覆う調査時の地表面を構成する層であり、水田及び畠地として利用されている。調査区の中央では旧淡路鉄道により擾乱されているが、この構造物をも含んだ層である。表土・床土の下はすぐに第1面がある。

II層

II層の上面が第1面である。上層との間に弥生時代後期から中世の遺物を挟んでおり、同一面で柱穴および溝が多数検出されている。全体に土壤化しており、特に東側は厚い。II層を構成する層は、東側が細砂～極細砂、西側が粗砂から細砂で、西側のはうが粒子が粗い。上層は東から西に傾斜している。

III層

III層の上面が第2面である。上層との間に弥生時代後期の遺物を挟んでいる。西側に認められたII層以下の土壤層まで掘削したもので、西側半分のみに認められる層である。遺構は検出されていないが、全体的に土壤化している。構成している層は粗砂混じり細砂から極細砂で比較的粒子は細かい。

IV層

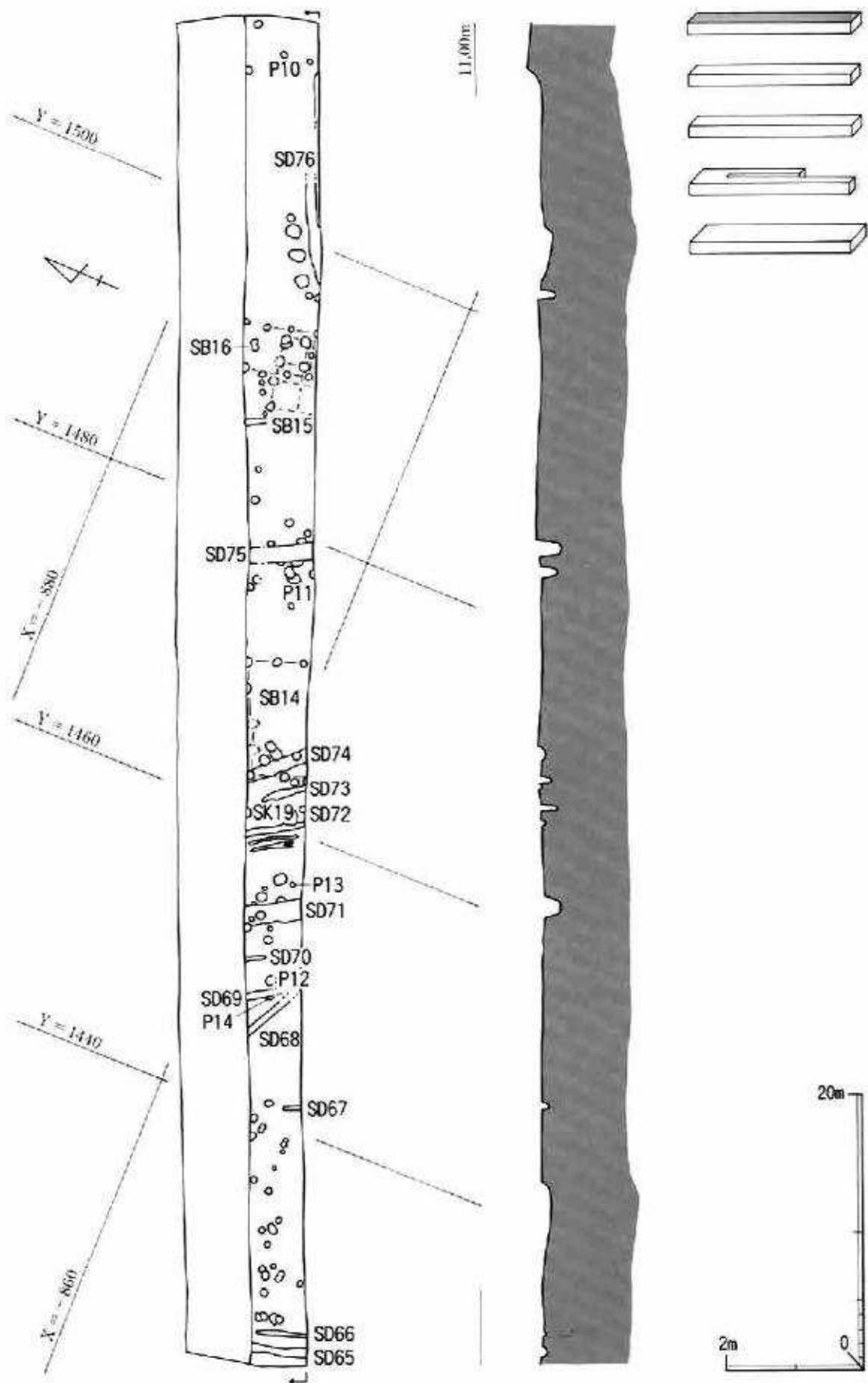
IV層の上面が第3面である。上層との間に弥生時代後期の遺物を挟んでおり、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、溝などが検出されている。III層の土壤層を取り除いたところを任意に面としてとらえているため、VI層の土壤層と接している中央付近以外は土壤化していない。検出面としてはIV層を切り込んだ第3遺構面であるが、実際の遺構面はIII層の第2遺構面になる遺構も少なからず存在するものと思われる。

V層

V層の上面が第4面である。上層との間に弥生時代中期～後期の遺物を挟んでおり、柱穴、溝、土壤、東端で水田が検出された。全体的に厚く土壤化している。V層は土壤化した層がおよそ3から4層にわけることができるが、調査では分層が困難なため、今回第4遺構面としたV層の上面と、これらの土壤層をすべてはずした5面の2面にのみ分けで調査した。V層の構成する層は、中央から東側が細砂～極細砂で、やや粗く、西側半分はシルトから極細砂で細かい。

VI層

VI層の上面が第5面である。今回の調査区の中でもっとも層位的に下になる層である。上層との間に弥生時代中期の遺物を挟んでおり、柱穴、土壤、溝が検出された。V層の土壤層を取り除いたところを任意に面としてとらえているため、西側の一部以外は土壤化していない。層を構成する粒子は粗砂からシルト質極細砂まであり、幅広い。なお、VI層より下層にも土壤層が続くことが確認された。



第129図 4・5区第1面

2. 第1面の遺構と遺物

(1) 第1面出土土器

出土遺物

当遺構面に伴う遺物としては、弥生時代後期、古墳時代終末期、奈良時代、中世の土器が出土している。

弥生後期

量的には少ない。器種としては、壺・甕・鉢が出土している。

壺

433の1個体である。口縁部下端に粘土を貼り付け端部を拡張し、端面に4条の擬凹線を施している。

甕

底部2個体(434・435)を図化した。いずれも丸底化の傾向にある。

鉢

有孔鉢が出土している。特に436は、甕の底部の形態的特徴と一致し、尖底化の傾向が認められる。

古墳時代

須恵器が出土している。

須恵器

杯口と杯口蓋が出土している。口径は9.9cmの小型から12.2cmの大型まであり、幅がある。天井部および底部外面のヘラ削りは、確認できるものでは口径の大きいものに限り行われていることが確認できる。

奈良時代

須恵器のみ図示できた。

須恵器

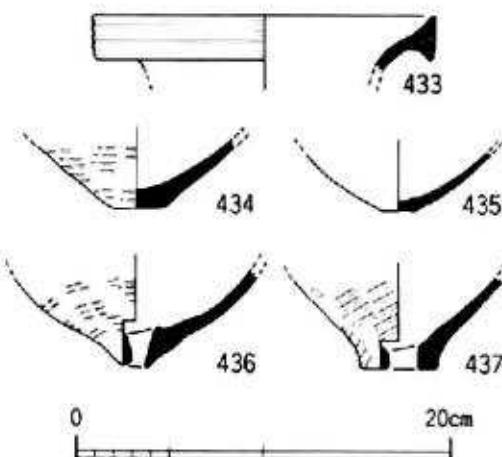
杯口蓋と杯口が出土している。完形に復元できず、つまみの形態も不明である。

杯口蓋

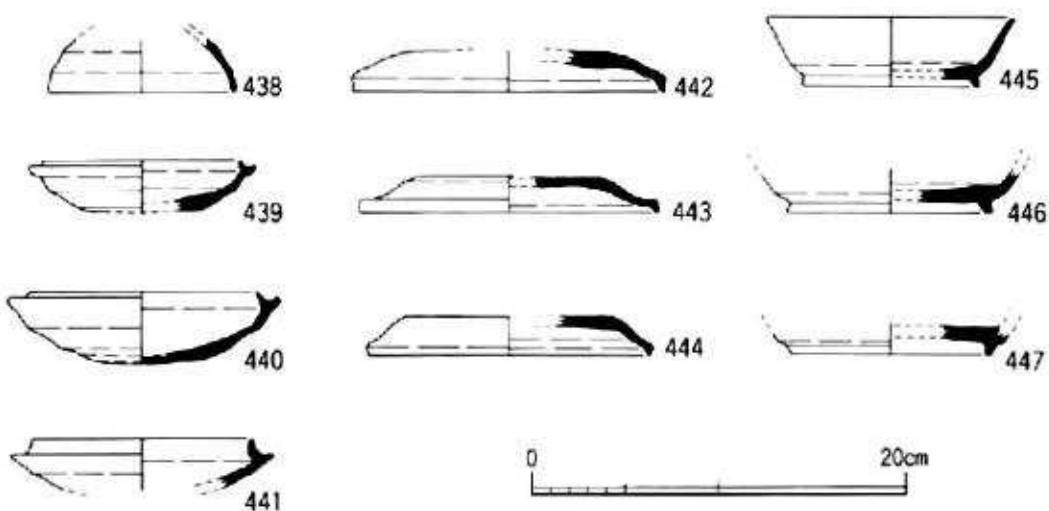
体部から口縁部にかけてなだらかなもの(442)、段をもつもの(443)、屈曲するもの(444)がある。

杯口

445は底部が欠けるものの、ほぼ完形に復元できるが、それ以外は高台部分のみの残存で、全体の形狀は不明である。底部における高台の位置は、いずれも同じであるが、高台の形狀に差があり、447がほぼ直立しているのに対し、他の2者は外側に向いている。



第130図 4・5区第1面出土土器(1)



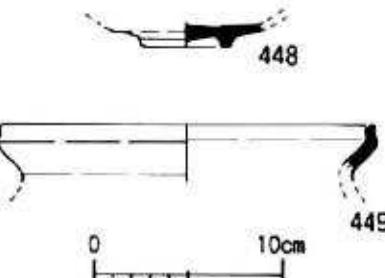
第131図 4・5区第1面出土土器(2)

中世 須恵器のみ図示できた。

須恵質土器 口縁部のみ図示できた。遺存状況が悪いので、
器種や全体の形状は明らかでない。口縁部は端
部に面を有し、上方に立ち上がるものである。

近世 唐津焼の碗が出土している。

唐津焼 底部のみの残存で詳細は不明であるが、内面
に胎土目が認められ、外面底部が山状に削り残
されている。釉は高台までかけられていない。



第132図 4・5区第1面出土土器(3)

第61表 4・5区第1面出土土器観察表(1)

番号	器種	法量(cm)		調査・注記			色調	残存率	備考
		口径	高さ	底径	側径	最大径			
433	壺	口径:14.8	高さ:21.1	底径:11.1	側径:11.1	外面:口縁部模様有り調整。 内面:腹部ナガ調整、口縁部模様ナガ調整。	外面:に赤い粉 内面:に赤い粉	口縁部1/8	P.8
434	壺	口径:12.5	高さ:21.2	底径:11.2	側径:11.2	外面:底部ナガ調整、体部叩き成形。 内面:底部一体的ナガ調整。	外面:に赤い粉 内面:明褐色	底部1/2	P.9
435	杯	口径:11.8	高さ:3.1	底径:11.8	側径:11.8	外面:底部ナガ調整、体部崩れ有り不明。 内面:底部一体的ナガ調整。	外面:に赤い粉 内面:に赤い粉	底部1/3	P.9
436	杯	口径:11.3	高さ:5.6	底径:11.3	側径:11.3	外面:底部ナガ有り、体部叩き成形後ナガ調整。 内面:ナガ調整。	外面:に赤い粉 内面:に赤い粉	底部2/3	P.8
437	杯	口径:11.2	高さ:11.1	底径:11.2	側径:11.2	外面:口縁部模様。 内面:底部エビナガ調整、体部ナガ調整、口縁部ナガ調整。	外面:明褐色 内面:明褐色	底部1/2	P.10

第62表 4・5区第1面出土土器観察表(2)

番号	種別	器種	法量(cm)						色調	残存状況	調査	特徴の特徴	備考
			口径	高さ	底径	側径	最大径	指數					
438	須恵器	壺	9.9	—	—	—	—	—	内:灰 外:灰	口縁部1/6	回転ナガ。	高い体部。回転ナガによる長い枝根あり。	
439	須恵器	壺身	10.6	—	—	—	—	—	内:灰白 外:灰白	口縁部1/6	回転ナガ。底部はへき切り不 調整。	低い立ち上がり。受部は外に 突出する。	
440	須恵器	壺身	12.2	—	11.5	—	—	—	内:灰 外:灰 灰青褐色	口縁部1/3	回転ナガ。外面底部回転ヘラケヌ リ、内面底部不定方向のナガ。 凹凸が顕著。	体部は深く。回転ナガによる 凹凸が顕著。	
441	須恵器	壺身	11.8	—	—	—	—	—	内:灰 外:灰	口縁部1/6	回転ナガ。	圓平な体部で。立ち上がりは 上方へ延びる。	
442	須恵器	壺蓋	16.6	—	—	—	—	—	内:灰 外:灰	口縁部1/12	回転ナガ。	全体に滑らかである。	
443	須恵器	壺蓋	15.8	—	—	—	—	—	内:灰 外:灰	口縁部1/6	回転ナガ。天井部は回転ヘタ ケヌリ。	天井部は平ら。	
444	須恵器	壺蓋	14.9	—	—	—	—	—	内:灰 外:灰	口縁部1/12	回転ナガ。天井部は回転ヘタ ケヌリ。	天井部は平ら。	
445	須恵器	壺身	(13.2)+(3.7)=16.9	—	13.2	—	—	28	内:灰 外:灰	底部1/8	回転ナガ。	島白は底部の縁に付き、やや 外側に向く。体部は直線的。	
446	須恵器	壺身	—	—	10.9	—	—	—	内:灰黃 外:灰黃	底部1/4	回転ナガ。	島白は外方に開いている。体 部は上外方に僅やかに開く。	
447	須恵器	壺身	—	—	10.6	—	—	—	内:灰 外:灰	底部1/8	回転ナガ。	島白は底部の縁に付き。斜面 方筋で下を向く。	
448	須恵器	壺	—	—	3.9	—	—	—	内:灰白 外:灰白	底部1/3	回転ナガ。内面底に輪。底上 目。	大きな開く体部に。種の小さ い厚い底盤つく。	
449	須恵器	不明	19.1	—	—	—	—	—	内:灰 外:灰	口縁部1/8	回転ナガ。	体部から口縁部にかけてS字 に彫り、縁部は平ら。	

(2) 据立柱建物跡

SB14

検出状況

調査区中央付近南端に位置する。擾乱等により全容は明らかでないが、さらに調査区の南側へ延びると考える。また、SD74と切り合い関係をもち、SD74に切られている。建物の方位は4・5区第1面検出の他の建物と若干異なっている。柱穴のうちP1・P2は第3面で検出している。

形状・規模

N-20°Wに棟軸の方向をとる桁行4間、梁行2間の据立柱建物跡であるが、さらに南方向に延びる可能性があるので、詳細は不明である。

規模は桁行方向が8.05m、梁行方向が4.25mと確認された。面積は34.21m²である。

柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が2.01m、梁行が2.12mである。桁方向の柱穴間は概ね1.60mから1.90mであるが、P4-P5間が2.70mと広がっている。

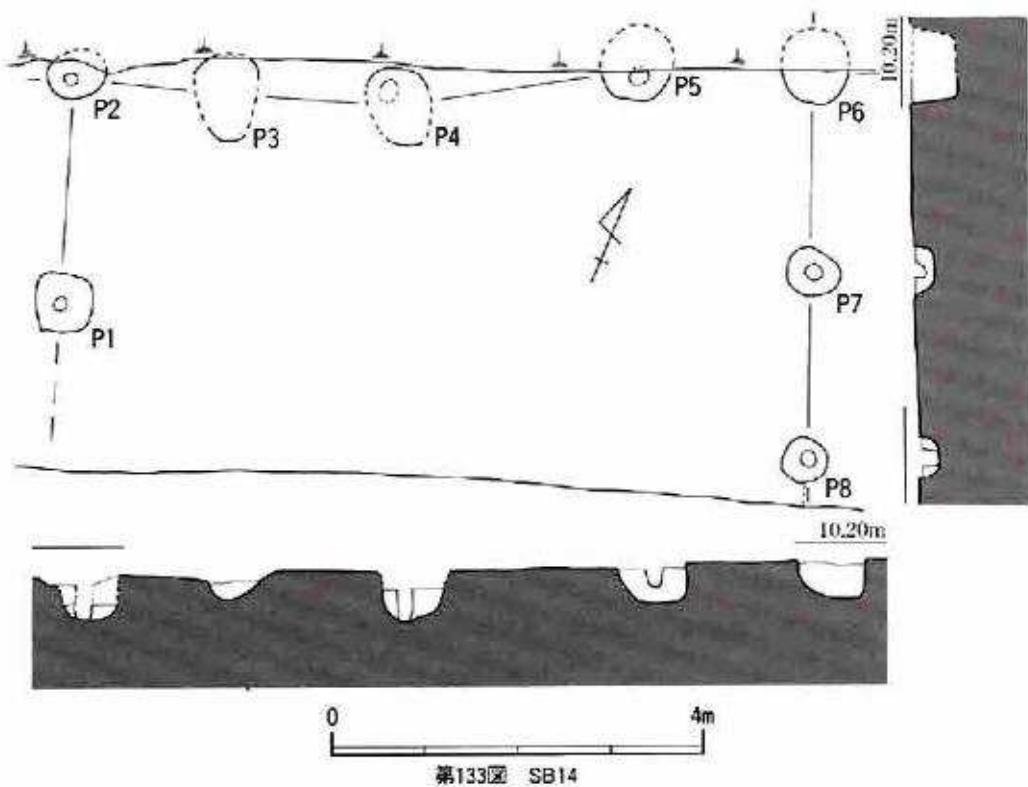
柱穴

柱穴の掘り方の形狀はP1が隅丸方形を呈するほかは円形である。直径は49~88cmである。深さは20~54cmを測る。柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡直径は14~18cm、深さは13~54cmを測る。柱穴の中には柱痕が掘り方底部に達していないものがある。

柱根は残存していない。また、根固めとしての礎石・礎板、あるいは礎試のようなものの存在も確認されなかった。

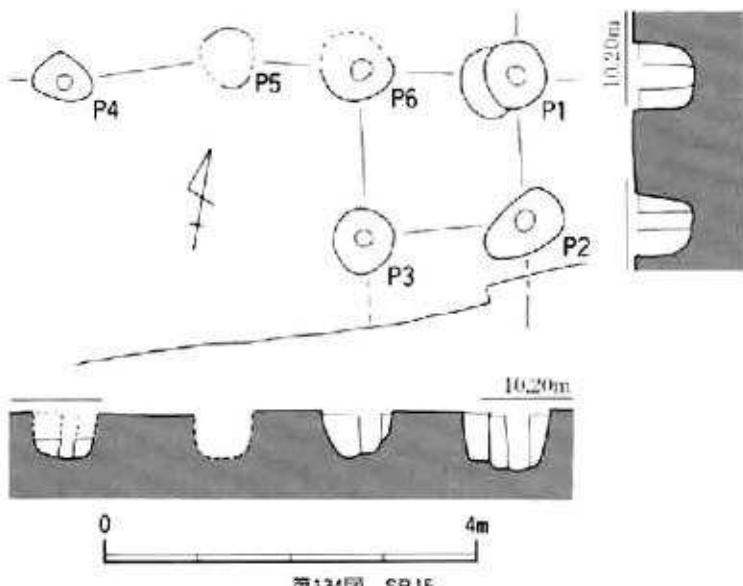
出土土器

P8から須恵器片が出土している他、弥生土器の壺の小片等が出土しているが、弥生土器は下層のものが混入したものと考えられる。



SB15

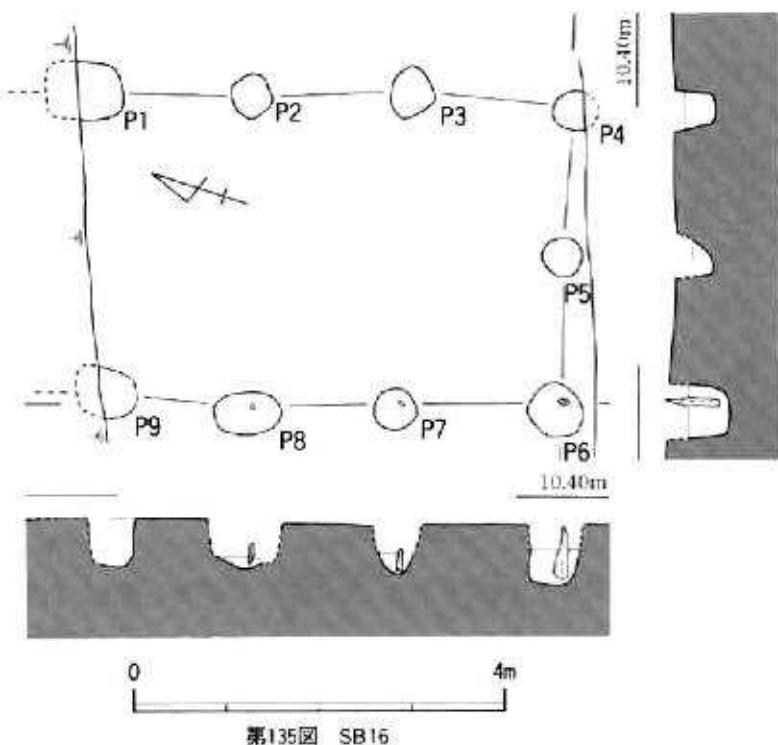
- 検出状況** 調査区東半部南端に位置する。SB16と重複しているが、柱穴の切り合がないため両者の前後関係は不明である。ただし、建物の方位は両者ともほぼ同じくする。調査区の制限により南側にさらに延びる可能性がある。
- 形状・規模** N=14° - Wに棟軸の方向をとる桁行3間、梁行1間の掘立柱建物であるが、さらに南方向に延びる可能性があるので、詳細は不明である。
検出できた規模は桁行方向が4.85m、梁行方向が1.55mと確認された。面積は7.51m²である。
柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が1.61m、梁行が1.55mである。桁方向の柱穴間は概ね1.60mから1.65mである。
- 柱穴** 柱穴の掘り方の形状は円形または椭円形を呈する。直径は58~95cmである。検出面からの深さは50~63cmを測る。柱痕あるいは柱の抜き取り痕の直径は14~20cm、深さは43~63cmを測る。
柱根は残存していない。また、根固めとしての礎石・礎板あるいは礎詰等は確認できなかった。
- 出土土器** P1・P2より須恵器壺・蓋片が出土している。また他の柱穴より弥生土器の破片が数点出土しているが、下層からの混入遺物と考える。



第134図 SB15

SB16

- 検出状況** 調査区東半部南端に位置する。SB15と重複しているが、柱穴の切り合がないため両者の前後関係は不明である。ただし、建物の方位は両者ともほぼ同じくする。擾乱により明らかでないが、さらに北側へ延びる可能性がある。柱穴のうち、P4~P6は第3面で検出している。
- 形状・規模** N=15° - Wに棟軸の方向をとる桁行3間以上、梁行2間の掘立柱建物であるが、さらに北方向に延びる可能性があるので、詳細は不明である。



規模は桁行方向が4.85m、梁行方向が3.10mと確認された。面積は15.03m²である。

柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が1.61m、梁行が1.55mである。桁方向の柱穴間は概ね1.50mから1.75mである。

柱穴

柱穴の掘り方の形状は円形または楕円形を呈する。直径は42~75cmである。検出面からの深さは53~70cmを測る。柱根が残るもの以外で柱痕あるいは柱の抜き取り痕は確認できなかった。

柱根は西列のP.6・P.7・P.8で遺存していた。このうち、P.6・P.8については柱根基部が掘り方底部まで達していない。根固めとしての礎石・礎板あるいは鍛詰は確認できなかった。

柱根

P.6・P.7・P.8で柱根が遺存していた。

P.6出土のW.8は、全体に焼けている。現存長61.3cm、直径13.0cmを測る。側面および底部共に焼けているため加工痕などは不明である。樹種はカヤである。またP.7出土の柱根もカヤである。

出土土器

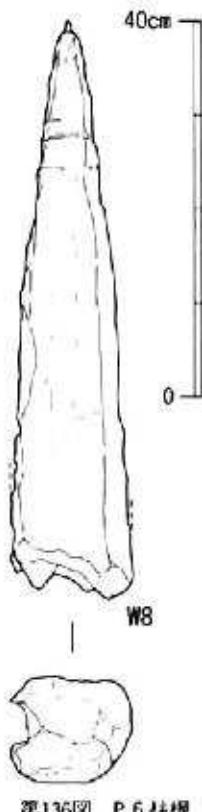
弥生土器の小片が数点出土しているが、下層からの混入遺物と考える。

その他の柱穴

上記の建物を構成する柱穴以外の柱穴から、時期を特定できる遺物が出土している柱穴があるので、その遺物を報告する。

P.11

土師質の焼土塊が2点出土した。内部にはスサ様の植物遺体の痕跡が確認されるが、用途は不明である。大きい方の大きさは最大長5.1cm、幅4.2cm、厚さ2.5cmを測る。大



第136図 P.6 柱根

小さいずれも破片であると思われ、完全な形ではない。

時期は同じ柱穴から奈良時代の須恵器が出土していることから、それ以降の時期に属するものと思われる。なお、この遺物については写真のみ撮影した（第137図）。

P12

古墳時代の須恵器杯口と坏口蓋が1点ずつ、計2点出土した。両者には口径に差があり、坏口の方が小さい。また、器高は逆に坏口の方が高い。底部の回転ヘラ削りは451のみ確認できる。



第137図 P11出土焼土塊



第138図 P12出土土器

第63表 P12出土土器観察表

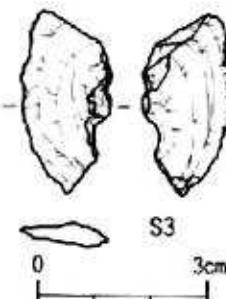
報告番号	種別	器種	法 量(cm)						色 調	保存状況	調 査	形態の特徴	備考
			上径	下径	高さ	底径	最大厚	接触					
450	須恵器	杯口	(11.9)	—	—	—	—	—	内:褐 外:灰	口縁部1/2 回転ナメ。	—	体部中程にてによる凹みあり。	—
451	須恵器	坏口	(13.8)	—	—	—	—	—	内:褐 外:灰	口縁部1/3 回転ナメ。底部から体部1/3 まで回転ヘラ削り。	—	盤平な体部で、立ち上がりは 高く長い。	—

P13

サスカイト製の剥片（S3）が出土している。

表面上面部に階段状の剥離が見られるが、裏面が直線的であること、薄手の剥片を素材としていることから、剥片とした。下端部は欠損している。ただ、顕著な階段状剥離から見て、楔形石器の碎片とも考えられる。

長さ2cm、幅2.9cm、厚さ6.3mm、重さ3.1gを測る。



第139図 P13出土石器

(3) 土壌

SK19

検出状況 調査区中央部や西側で検出した。SD72の東側、SD73の西側に位置する。特にSD72とは切り合った関係にあり、SD72を切っている。

形状・規模 平面円形を呈する。主軸を東西方向にとる。主軸方向で1.28m、その直交方向で1.18mを測る。断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは38cmである。

埋土 1層からなり、茶褐色シルト混じり灰色細砂が堆積していた。人為的に埋められた層である。

出土遺物 全く出土していない。

(4) 溝

SD65

検出状況

調査区の西端部で検出した。南北方向に直線的にのびる溝で、南側は調査区外までのび、北側は淡路鉄道の建設により削平されている。SD66の西側に位置するが、他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模

検出した長さは4mである。断面形は逆台形をなし、検出面における幅は68cm~50cmである。検出面からの深さは10cmである。底部の標高は両端とも10.0mと同じである。

埋土

1層からなり、灰色中砂が堆積していた。

出土遺物

全く出土していない。

SD66

検出状況

調査区の西端部で検出した溝で、SD65の東側に位置する。SD65とは平行して直線的にのびる溝で、南側は調査区外までのび、北側は調査区内で収束している。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模

検出した長さは3.60mである。断面形はU字形をなし、検出面における幅は20cm~25cmを測る。検出面からの深さは5cmである。底部の標高は両端とも10.0mと同じである。

埋土

1層からなり、シルト質細砂（灰白色）が堆積していた。

出土遺物

全く出土していない。

SD67

検出状況

調査区の西側で検出した。南北方向にはほぼ直線的にのびる溝で、南側は調査区外までのび、北側は調査区内で収束している。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模

検出した長さは1.37mである。断面形は逆台形をなし、検出面における幅は20cm~30cmである。検出面からの深さは5cmである。底部の標高は、北側で10.4m、南側で9.90mとわずかに南側へ傾斜している。

埋土

1層からなり、シルト質細砂～中砂（灰黄色）が堆積していた。

出土遺物

全く出土していない。

SD68

検出状況

調査区の西側で検出した。SD69の西側に位置する。東西方向に直線的にのびる溝で、南側は調査区外までのび、北側は淡路鉄道建設に伴い削平されている。SD69とは平面的にみて切り合い関係にあったものと考えられる。しかし、この切り合う箇所は確認調査のトレンチ内にあたり、確認調査ではこの切り合い関係を確認することはできなかった。

形状・規模

検出した長さは4.00mである。断面形は逆台形をなし、検出面における幅は38cm~45cmを測る。検出面からの深さは12cmである。底部の標高は、北側で10.0m、南側で9.90mとわずかに南側へ傾斜している。

埋土

1層からなり、中砂（暗青灰色）が堆積していた。

出土遺物

全く出土していない。

SD69**検出状況**

調査区の西側で検出した。SD68の東側に位置する。南北方向に直線的にのびる溝で、南側は調査区外までのび、北側は淡路鉄道の建設により削平されている。SD68とは平面的にみて切り合い関係にあったものと考えられるが、上記の理由から明確にできない。この他、柱穴(P14)を切っている。

形状・規模

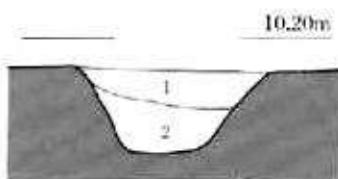
検出した長さは1.90mである。断面形は逆台形をなし、検出面における幅は45cm~55cmである。検出面からの深さは22cmである。底部の標高は両端とも9.80mである。

埋土

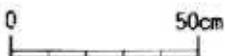
2層からなり(第140図)。下層から灰色中砂、暗灰色細砂~中砂が堆積していた。

出土遺物

弥生土器あるいは土師器片が出土しているが、時期・器種の特定はできない。



1. 暗青灰色 細砂・中砂
2. 灰色 中砂



第140図 SD69

SD70**検出状況**

調査区西側で検出した。SD69の東側、SD71の西側に位置する。南北方向に直線的にのびる溝で、北側は淡路鉄道の建設により削平され、南側は調査区内で取束している。

形状・規模

検出した長さは1.47mである。断面形は逆台形をなし、検出面における幅は25cmを測る。検出面からの深さは8cmである。底部の標高は両端とも10.0mと同じである。

埋土

1層からなり、シルト混じり細砂(灰色)が堆積していた。

出土遺物

全く出土していない。

SD71**検出状況**

調査区の中央や西側で検出した。SD70の東側、SD72の西側に位置する。南北方向に直線的にのびる溝で、北側は淡路鉄道の建設により削平され、南側は調査区外までのびている。柱穴と切り合い関係にあり、当溝が切る柱穴と当溝を切る柱穴が認められる。

形状・規模

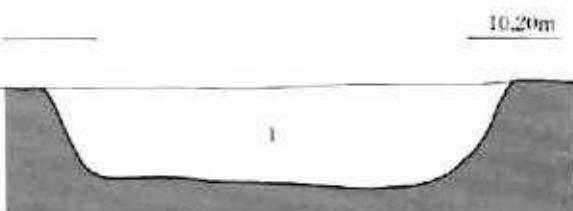
検出した長さは4.20mである。断面形は逆台形をなし、検出面における幅は1.25m~1.45mを測る。検出面からの深さは23cmである。底部の標高は、両端とも9.80mである。

埋土

1層からなり、シルト混じり中砂(灰色)が堆積していた。

出土遺物

弥生時代後期の甕と高壺脚部が出土しているが、いずれも小片で固化できなかった。



1. 灰色 シルト混じり中砂



第141図 SD71

SD72**検出状況**

調査区のほぼ中央部で検出した。SD71の東側、SD73の西側に位置する。南北方向に直線的にのびる溝で、北側は淡路鉄道の建設により削平され、南側は調査区外までのびて

いる。SK19と切り合い関係にあり、SK19に切られている。

形狀・規模 検出した長さは4.30mである。断面形はU字形をなし、検出面における幅は25cm~50cmを測る。検出面からの深さは11cmである。底部の標高は両端とも10.0mと同じである。

埋土 1層からなり、シルト質細砂~中砂(褐色)が堆積していた。

出土遺物 須恵器の甕と壺A、土師器の甕が出土していた。奈良時代と考えられる。

SD73

検出状況 調査区のはば中央部で検出した。SD72の東側、SD74の西側に位置する。南北方向に直線的にのびる溝で、北側は調査区内で収束し、南側は調査区外までのびている。柱穴と切り合い関係にあり、柱穴に切られている。

形狀・規模 検出した長さは3.37mである。断面形は逆台形をなし、検出面における幅は23cm~53cmを測る。検出面からの深さは4cmである。底部の標高は両端とも10.0mと同じである。

埋土 1層からなり、中砂(灰白色)が堆積していた。

出土遺物 須恵器と土師器の甕が出土しているが、小片のため同化できない。

SD74

検出状況 調査区のはば中央部で検出した。SD73の東側に位置する。南北方向に直線的にのびる溝で、北側は淡路鉄道の建設により削平され、南側は調査区外までのびている。SB14と切り合い関係にあり、SB14に切られている。

形狀・規模 検出した長さは4.62mである。断面形は逆台形をなし、検出面における幅は80cm~97cmを測る。検出面からの深さは9cmである。底部の標高は両端とも10.0mと同じである。

埋土 1層からなり、シルト質細砂~極細砂(暗青灰色)が堆積していた。

出土遺物 須恵器と土師器が出土している。いずれも小片のため、同化および器種の特定は困難である。

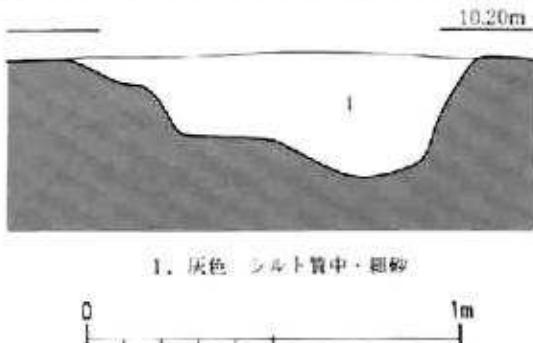
SD75

検出状況 調査区の中央やや東側で検出した。南北方向に直線的にのびる溝で、北側は淡路鉄道の建設により削平され、南側は調査区外までのびている。柱穴と切り合い関係にあり、柱穴を切っている。

形狀・規模 検出した長さは4.52mである。この溝は3段に掘られている(第142図)が、各断面とも逆台形をなす。検出面における幅は1.07m~1.16mを測る。検出面からの深さは28cmである。底部の標高は北側で9.83m、南側で9.79mとわずかに南側へ傾斜している。

埋土 1層からなり、シルト質中~細砂(灰褐色)が堆積していた。

出土遺物 全く出土していない。



第142図 SD75

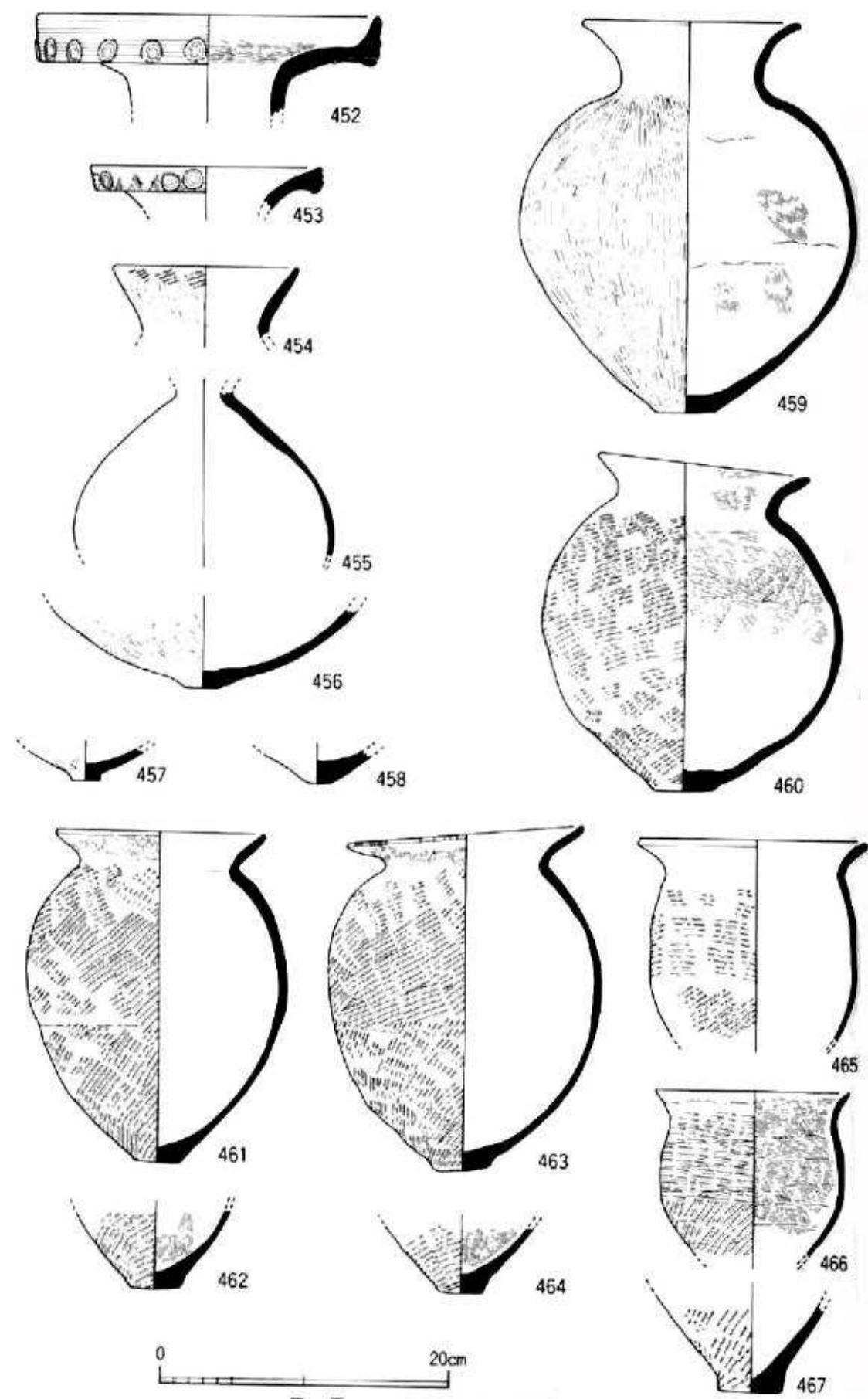
SD76

- 検出状況 調査区の東側で検出した。東西方向にはば直線的にのびる溝で、両端とも調査区外までのびている。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形狀・規模 検出した長さは10.4mである。断面形は逆台形をなし、検出面における幅は70cm~76cmを測る。検出面からの深さは12cmである。底部の標高は東側で10.1m、西側で10.0mとわずかに西側へ傾斜している。
- 埋土 1層からなり、シルト質中~細砂（灰色）が堆積していた。
- 出土遺物 弥生時代後期の甕と高坏が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

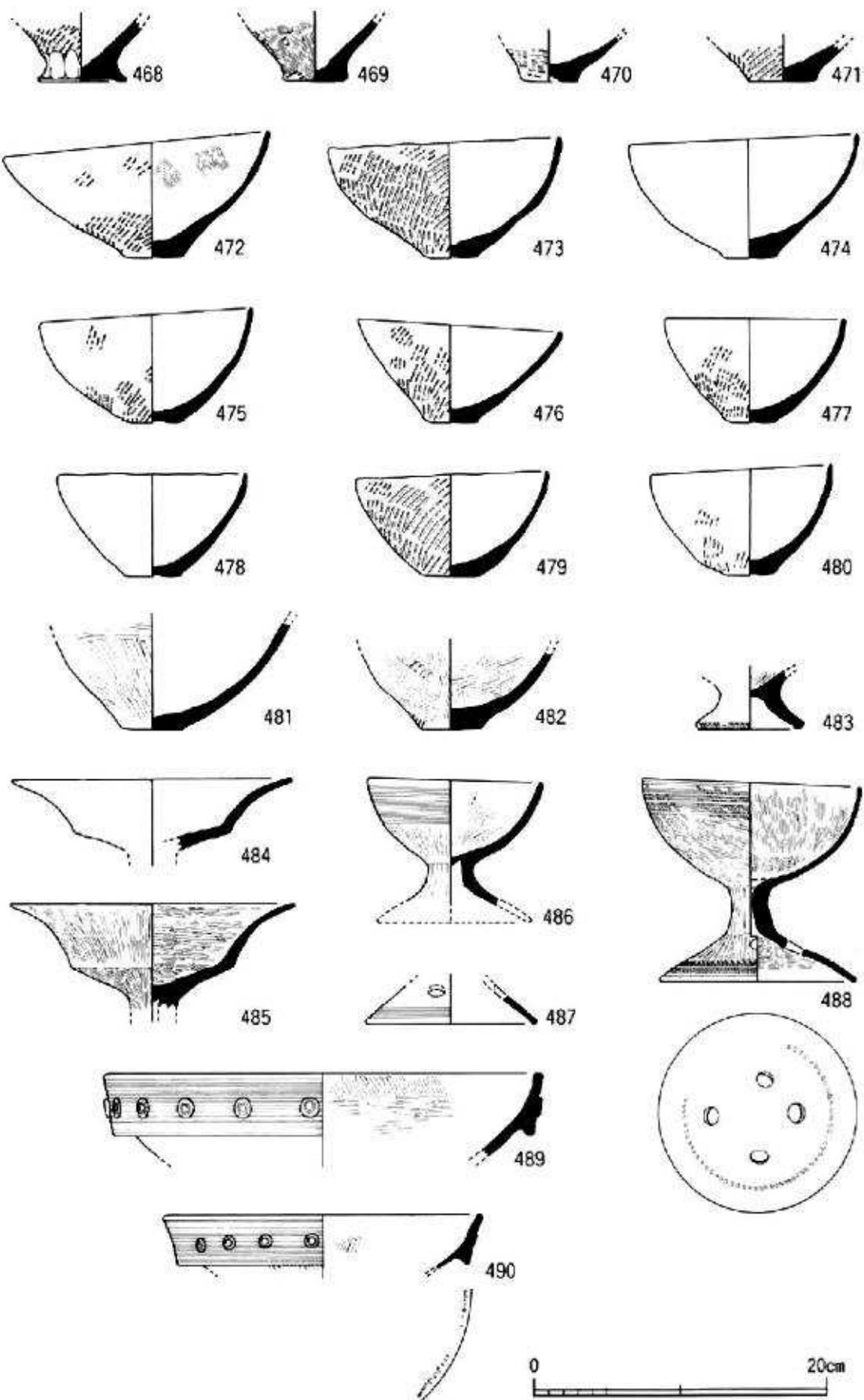
3. 第2面の遺構と遺物

3区の第3面に続く面として検出したが、遺構は検出できなかった。ただし、この面を覆う層から比較的まとまった土器が出土している。

出土遺物	壺・甕・鉢・高杯・器台の各器種が出土している。
壺	広口壺・直口壺・体部片・底部片が出土している。
広口壺	452・453・459の3個体を図化した。 452は直立する頸部から口縁部が水平方向に屈曲し、端部上側および下側に粘土を貼り付け端部を拡張している。端面には10条の擬凹線を施し、竹管円形浮文を貼り付けている。453も、口縁端部に粘土を貼り付け端面をつくり、ヘラ描きにより鋸歯文を施文し、その上に2個を一对とした竹管円形浮文を貼り付けている。 459は、ほぼ完存する土器である。頸部から口縁部にかけて外反させ、端部を丸く收めている。体部はほぼ球形をなし、底部は突出せず、わずかに平底をなす。
直口壺	454の1個体である。頸部をく字形に屈曲させ、口縁部が斜上方に直線的に立ち上がる。端部をわずかに上方につまみ上げるようなナデ調整により仕上げている。
体部片	455の1個体である。体部上半のみ残存するもので、細頭壺の体部と考えられる。
底部片	3個体図化した。457は突出した平底をなすが、他の2個体は尖底化の傾向が顕著である。なお457については、体の底部に分類される可能性も否定しえない。
甕	いずれもV様式系甕に分類されるものである。 460は、口径に対して頸径が小さく一見したところ壺に近い形態であるが、本報告では甕に分類した。底部のみ残存するものは、明確な平底をなすが、完形に復元できる460・461・463は丸底化の傾向が伺え、明確な平底をなさない。
鉢	小型鉢とそれ以外の鉢が出土している。
小型鉢	472~480は同タイプに分類できる。体部は楕形をなし、口縁部をユビオサエにより成形し、端部を丸く收める。ただし、底部から口縁部にかけて叩き成形により仕上げられるが、全体的に雑なつくりで、歪みが著しい。このため、底部は丸底化の傾向が認められるものの、明確な平底をなさず、安定していない。
その他	481と482は甕の底部とも考えられるが、小型であること、内外面をヘラミガキによって仕上げられていることから、鉢に分類した。483は台付鉢の脚と考えられる。脚端部に刻み目が施されている。
高杯	杯部が圓形を呈するものと、楕形を呈するものの2タイプがある。
圓形	484と485の2個体である。直線的に斜上方にのびる体部に、大きく外反する口縁部が付く。口縁部に対して体部が著しく浅い傾向にある。
楕形	486~488の3個体である。487については、杯部が残存しないが、488の脚部と同形態であることから、当タイプに分類されるものと考えた。
	486は、体部から口縁部にかけてヘラミガキにより仕上げ、その後口縁部に8条の擬凹線を施している。脚部は完存しないが、残存する範囲では透穴は認められない。
	488も、486と同様、体部から口縁部にかけてヘラミガキにより仕上げ、その後口縁部に7条の擬凹線を施している。また脚部についても、ヘラミガキにより仕上げた後、脚部



第143図 4・5区第2面出土土器(1)



第144図 4・5区第2面出土土器(2)

に4条の援凹線を施し、その上側に刻み目を施している。また4穴の透穴が認められる。この他、当タイプの特徴として、486・488とも、他の土器と比べて精良な胎土から作られており、全体的に丁寧に仕上げられている。

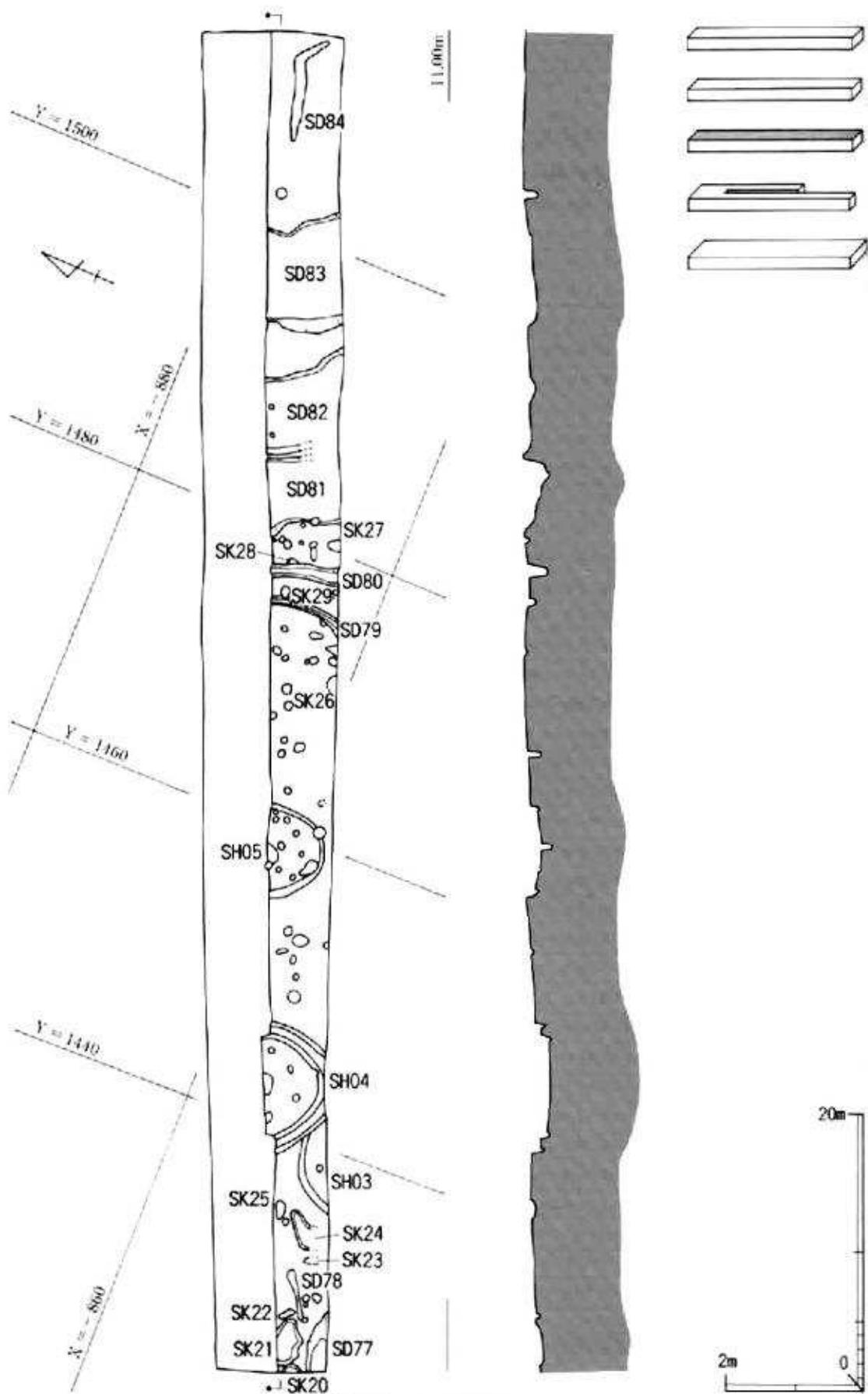
器台 489と490の2個体である。2個体とも、体部と口縁部の変換部外面に粘土を貼り付け、口縁端部を拡張させている。端面には全面に援凹線を施し、その上に竹管円形浮文を貼り付けている。また、490の端面下端部には刻み目を施している。

第64表 4・5区第2面出土土器観察表(1)

番号	器種	底径(cm)	調査技法	色調	残存率	備考
452	盃	口径:12.5 底径: 腹径:	外側:底部・口縁部ハサナ子調整、口縁部横ナナ子調整。 内側:横筋ナナ子調整、口縁部ハサナ子。	外側:棕 内側:棕	口縫部1/3	
453	盃	口径:15.8 底径: 腹径:	外側:ハサナ調整。 内側:底部・口縁部ハサナ子、口縁部横ナナ子調整。	外側:浅黄棕 内側:に赤い黄棕	口縫部1/6	
454	盃	口径:12.6 底径:19.4 腹径:	外側:横筋ナナ子調整、口縁部ハサナ子調整、ハサナ子。 内側:横筋・口縁部ナナ子調整、口縁部横ナナ子調整。	外側:に赤い黄棕 内側:に赤い黄棕	口縫部1/6	
455	盃	口径: 底径: 腹径:	外側:裏底の為不明。 内側:体足中挖痕の為不明。体足上半・體部エリヤサ。	外側:黄棕・棕 内側:黄棕	体足1/2	
456	盃	口径: 底径: 腹径:	外側:底部板ナナ子調整、体部ハサナ子。 内側:裏底の為不明。	外側:オリーブ黒 内側:褐・深青	底部生存	
457	盃	口径:12.0 底径: 腹径:	外側:ハサナ子。 内側:ハサナ子。	外側:棕 内側:に赤い黄棕	底部生存	
458	盃	口径:12.0 底径: 腹径:	外側:ナナ子調整。 内側:ナナ子調整。	外側:黒褐 内側:に赤い褐	底部生存	
459	盃	口径:13.9 底径:15.5 腹径:14.6	外側:体底ハサナ子、底部・口縁部ナナ子調整。 内側:底部板ナナ子調整、体部下半・中位ハサナ子調整後ナナ子調整。 体部上半・口縁部ナナ子調整。	外側:に赤い黄棕 内側:棕	1/4	
460	盃	口径:14.3 底径:11.2 腹径:11.0	外側:底部・体部叩き成形、底部エリヤサ調整、口縫部ナナ子調整。 内側:移筋下半ナナ子調整、体部上半ハサナ子調整、底部・口縫部ナナ子調整後ナナ子調整。	外側:褐灰 内側:棕	3/4	
461	盃	口径:14.3 底径:11.0 腹径:10.8	外側:体底・體部叩き成形。 内側:体部下半ハサナ子調整、体部上半板ナナ子調整、口縫部磨滅の為不明。	外側:に赤い黄棕 内側:棕	体部1位剥落	
462	盃	口径: 底径: 腹径:	外側:底部・体部叩き成形。 内側:ハサナ子調整。	外側:に赤い黄棕 内側:に赤い黄棕	底部生存	
463	盃	口径:16.1 底径:11.3 腹径:10.9	外側:体部叩き成形後、口縫部ハサナ子調整。 内側:体部ハサナ子調整、口縫部横ナナ子調整。	外側:棕 内側:に赤い黄棕	3/4	体部1位剥落
464	盃	口径: 底径: 腹径:	外側:底部・体部叩き成形。 内側:ハサナ子調整。	外側:に赤い棕 内側:に赤い黄棕	底部生存	
465	盃	口径:16.1 底径:12.7 腹径:14.8	外側:体部叩き成形後ナナ子調整、口縫部横ナナ子調整。 内側:体部ナナ子調整、口縫部横ナナ子調整。	外側:に赤い棕 内側:に赤い棕	口縫部・ 体部1/4	
466	盃	口径:13.6 底径:11.7 腹径:11.0	外側:体部・體部叩き成形、口縫部エリヤサ。 内側:体部・口縫部ハサナ子調整。	外側:に赤い黄棕 内側:に赤い黄棕	口縫部・ 体部1/3	口縫部・ 体部僅存
467	盃	口径: 底径: 腹径:	外側:底部・体部叩き成形後ナナ子調整。 内側:板ナナ子調整。	外側:に赤い棕 内側:に赤い黄棕	底部生存	
468	盃	口径:15.5 底径: 腹径:	外側:底部・体部叩き成形後板ナナ子。 内側:板ナナ子調整。	外側:に赤い黄棕 内側:に赤い黄棕	底部生存	
469	盃	口径:13.5 底径: 腹径:	外側:底部・体部叩き成形後ハサナ子調整。 内側:板ナナ子調整。	外側:棕 内側:棕	底部生存	

第65表 4・5区第2面出土土器観察表(2)

番号	器種	法 量(cm)	調 査 方 法	特 徴	色 調	残 存 状 態	備 考
470	壺	口径: 33.9 腹径: 33.4 脚径:	外側: 瓶部～口縁部叩き成形後、底部ニビオサエ。 内側: ナリ調整。	外側: に赤い黄緑 底部元存			
471	壺	口径: 34.7 腹径: 32.5 脚径:	外側: 底部～体部叩き成形。 内側: 板ナリ調整。	外側: に赤い黄緑 内側: 黄緑			
472	体	口径: 36.1 腹径: 37.9 脚径:	外側: 底部～口縁部叩き成形後、口縁部ナリ調整。 内側: 底部～体部ハラク調整後ナリ調整、口縁部ハラク調整。	外側: に赤い黄緑 内側: 黄緑			
473	瓶	口径: 15.7 腹径: 23.8 脚径:	外側: 瓶部～口縁部叩き成形後、口縁部ニビオサエ。 内側: 瓶部～口縁部ナリ調整、口縁部スピオサエ。	外側: 棕 内側: 棕	11月完存		
474	瓶	口径: (15.6) 底径: 3.9 腹径: 脚径:	外側: 底部～口縁部叩き成形。 内側: 深度の為不明。	外側: 棕 内側: 棕	1/2		
475	瓶	口径: 14.3 腹径: 17.4 脚径:	外側: 瓶部～体部叩き成形後、口縁部ニビオサエ。 内側: 瓶部～体部ナリ調整、口縁部ニビオサエ。	外側: に赤い黄緑 内側: に赤い黄緑			
476	瓶	口径: 13.8 腹径: 13.1 脚径:	外側: 瓶部～口縁部叩き成形後、口縁部ナリ調整。 内側: 底部板ナリ調整、体部～口縁部ナリ調整。	外側: 棕 内側: 棕灰	11月完存		
477	瓶	口径: 12.2 腹径: 12.6 脚径:	外側: 底部～口縁部叩き成形後、口縁部ナリ調整。 内側: 底部～口縁部視子ナリ調整。	外側: に赤い黄緑 内側: 黑褐色	2/3		
478	瓶	口径: 12.7 腹径: 14.0 脚径:	外側: 瓶部～口縁部ナリ調整。 内側: 瓶部～口縁部ナリ調整。	外側: に赤い黄緑 内側: に赤い黄緑	1/2		
479	瓶	口径: 13.0 腹径: 14.0 脚径:	外側: 瓶部～口縁部叩き成形後、口縁部ニビオサエ。 内側: 深度の為不明。	外側: 棕 内側: 黑褐色			
480	瓶	口径: 12.2 腹径: 13.7 脚径:	外側: 底部～口縁部叩き成形後ナリ調整。 内側: 底部～口縁部ナリ調整。	外側: に赤い黄緑 内側: 黑褐色	11月完存		
481	瓶	口径: 14.2 腹径: 17.6 脚径:	外側: ハラクガキ。 内側: ナリ調整。	外側: 棕 内側: 棕	誠然完存		
482	瓶	口径: 14.1 腹径: 19.2 脚径:	外側: 呼き成形後ハラクガキ。 内側: ハラクガキ。	外側: 棕褐 内側: 棕褐	誠然完存		
483	瓶	口径: 12.2 腹径: 14.0 脚径: 12.5	外側: 開底ナリ調整。 内側: 開底ナリ調整、体部ハラク調整。	外側: に赤い棕 内側: 棕	誠然完存		
484	瓶	口径: 19.0 腹径: 14.2 脚径:	外側: 体部～口縁部ナリ調整。 内側: 体部ナリ調整、口縁部底底の為不明。	外側: 棕 内側: 棕	11月完存		
485	瓶	口径: (19.2) 腹径: 12.4 脚径:	外側: 体部～口縁部ハラクガキ。 内側: 体部～口縁部ハラクガキ。	外側: 棕 内側: 棕	11月完存		
486	瓶	口径: 11.8 腹径: 13.1 脚径:	外側: 腹部～口縁部ハラクガキ。 内側: 腹部～口縁部ナリナリ調整、体部～口縁部ハラクガキ。	外側: 棕 内側: 棕	11月完存		
487	瓶	口径: 12.2 腹径: 12.2 脚径: 11.4	外側: ハラクガキ。 内側: ナリ調整。	外側: 棕 内側: 棕	誠然1/2		
488	瓶	口径: 14.8 腹径: 12.5 脚径: 13.1	外側: 腹部～口縁部ナリナリ後、口縁部～腹部叩き成形。 内側: 腹部ハラク調整、口縁部ハラクガキ。	外側: 棕 内側: 棕	誠然1/5		
489	瓶	口径: 19.2 腹径: 15.7 脚径:	外側: 口縁部ナリ調整。 内側: ハラクガキ。	外側: 棕 内側: に赤い黄緑	11月完存		
490	器台	口径: 21.4 腹径: 15.1 脚径:	外側: 体部ハラクガキ、口縁部ナリ調整。 内側: 体部～口縁部ハラクガキ。	外側: 棕 内側: に赤い棕	11月完存		



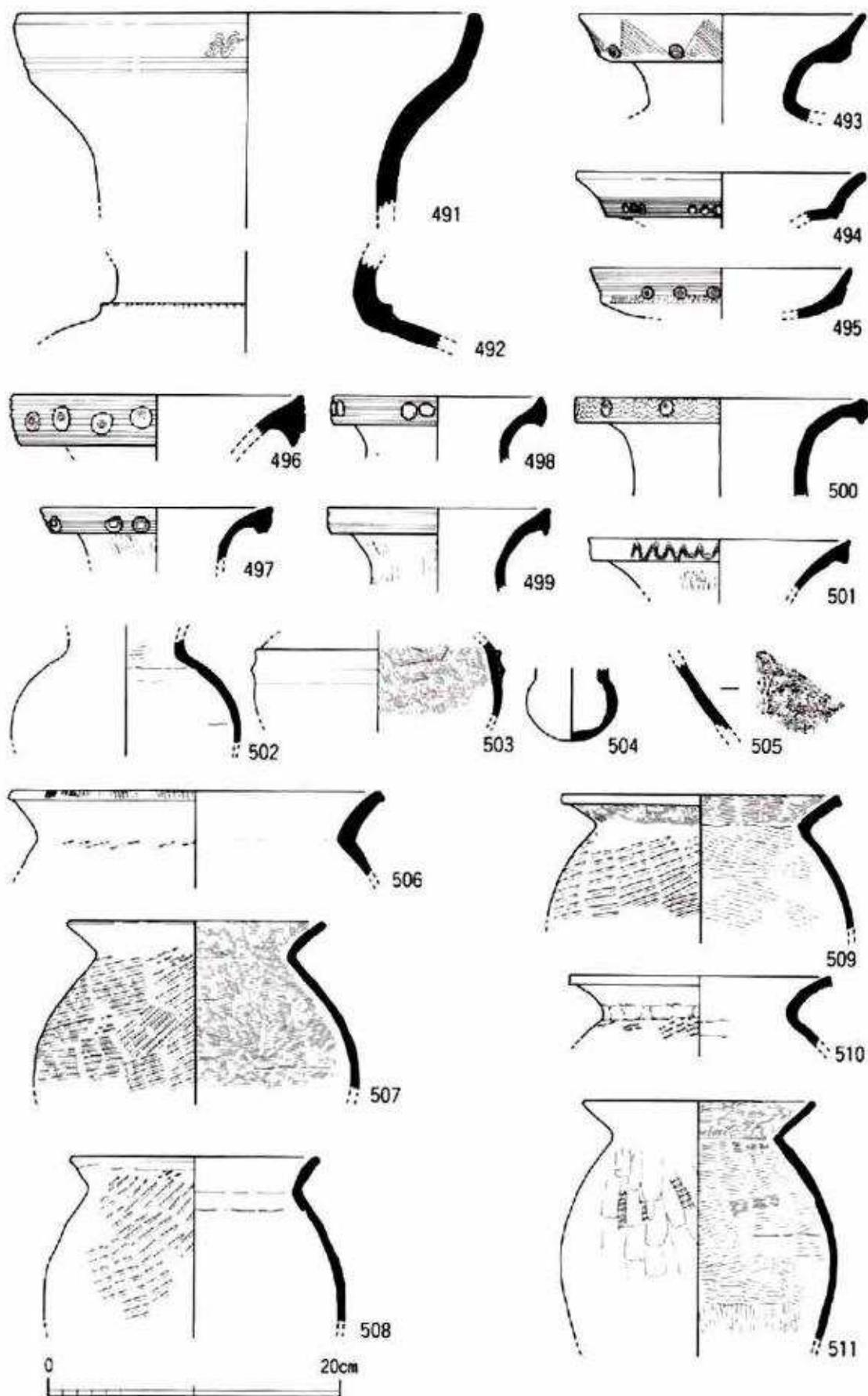
第145図 4・5区第3面

4. 第3面の遺構と遺物

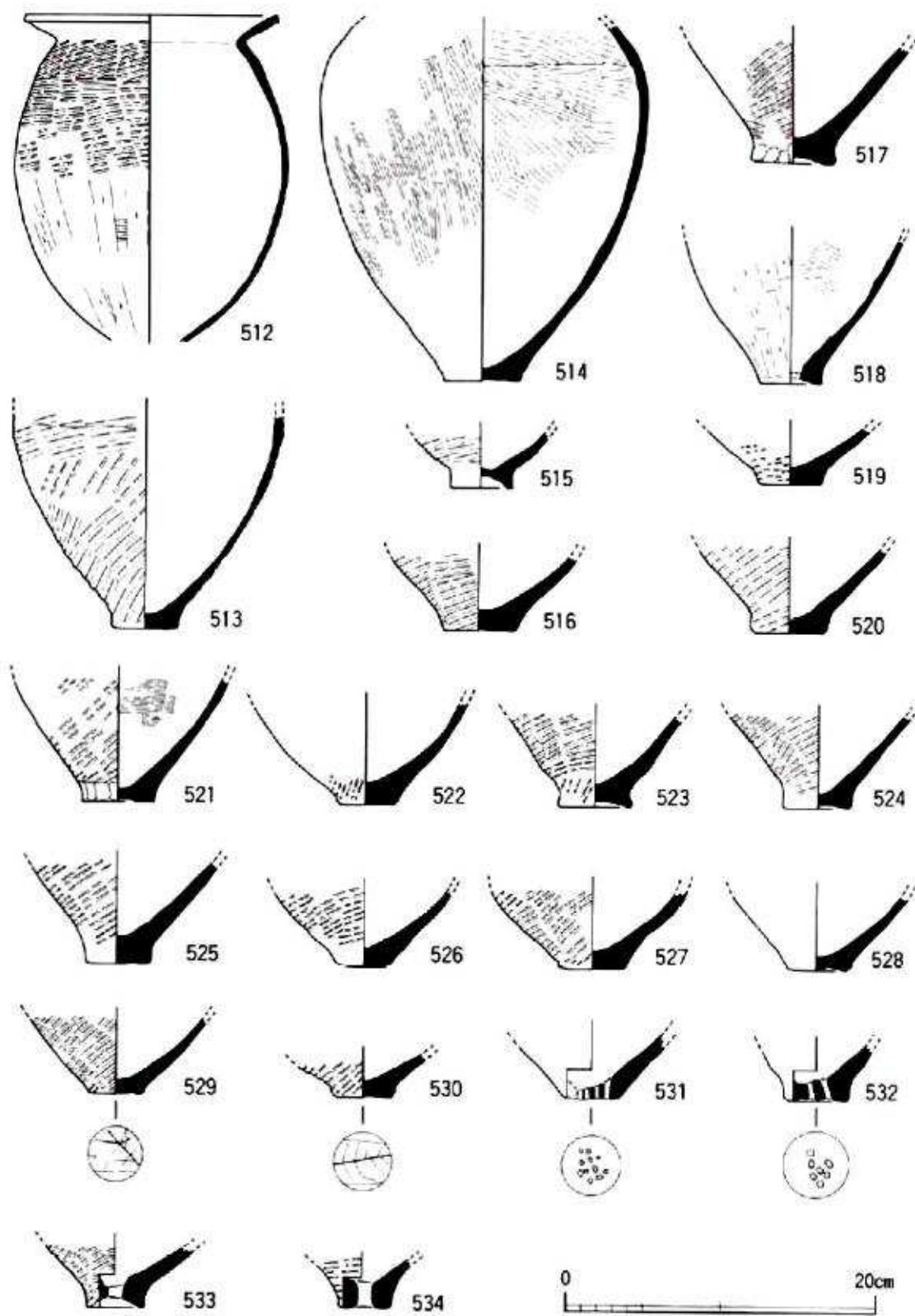
(1) 第3面に伴う遺物

- 出土遺物** 土器・土製品・石器が出土している。
- 土器** 壺・壺・鉢・高杯・器台の各器種が出土している。
- 壺** 二重口縁壺・広口壺・体部片・ミニチュア土器が出土している。
- 二重口縁壺** 491・493～495の4個体である。
- 491は大型の二重口縁壺である。2次口縁外面に5条の櫛描波状紋を施し、その後波状文の下側に2条の凹線を施している。このため、凹線が波状紋の一部を切っている。
- 493は、外傾する頸部に対しても口縁部をほぼ水平方向に屈曲させ、さらに斜上方にひきのぼし2次口縁としている。2次口縁外面にはヘラ描きによる鋸歯紋を9個施し、鋸歯紋と鋸歯紋の中間部下端に竹管円形浮紋を貼り付けている。
- 494は口縁部のみの残存である。2次口縁外面下半部に5条の擬凹線を施し、その上に竹管円形浮紋を3個1対として貼り付けている。
- 495も口縁部のみの残存である。形態的には494とはほぼ同じである。2次口縁外面に4条の擬凹線を施すとともに、下端部（1次口縁端部）に刻み目を施している。その後、擬凹線と刻み目の境に竹管円形浮紋を貼り付けている。
- なお492についても、体部から頸部かけて残存するのみであるが、体部と頸部の変換部に刻み目凸帯を貼り付けていたことから、二重口縁壺の一部と考えられる。
- 広口壺** 496～501の6個体である。
- 496・497は口縁端部の下端部に粘土を貼り付け、端部を拡張している。端面にはそれぞれ6条と3条の擬凹線を施し、その上に竹管円形浮紋を貼り付けている。496は、円形浮文を等間隔に貼り付けているのに対して、497は2個を1対として貼り付けている。
- 498は、口縁端部の上下両側に粘土を貼り付け、端部を拡張している。端面には4条の擬凹線を施し、その上に円形浮紋を貼り付けている。2個を1対としている。
- 499は口縁端部を下方にひきのぼして拡張し、端面には3条の擬凹線を施している。擬凹線は等間隔ではなく、上端部に1条、下端部に2条施されている。
- 500は、口縁端部の下側に粘土を貼り付け端部を拡張している。端面には4条の櫛描波状紋を施し、その上に竹管円形浮紋を等間隔に貼り付けている。円形浮紋は6個残存するが、全体で12個あったものと推定される。
- 501は、口縁端部を上下に拡張し、端面に4条の櫛描波状紋を施している。
- 体部片** 503は、堤状形を呈する体部の中央部である。体部最大径部が直線的になり、ここに断面M形を呈する凸帯を貼り付けている。胎土は他の土器と同じである。
- 505は体部上半部の小片である。外面に、上から9条の櫛描波状紋1帶、9条の櫛描直線紋3帶が施されている。また、3帶の直線紋の上には流水紋の一部とみられる曲線が認められる。
- ミニチュア** 504の1個体である。口縁部を欠くが、丸底壺のミニチュアと考えられる。
- 壺** 量的に最も多く出土しているが、底部から口縁部まで完形に復元できるものはない。全てV様式系の壺で、大型壺と中型壺が出土している。

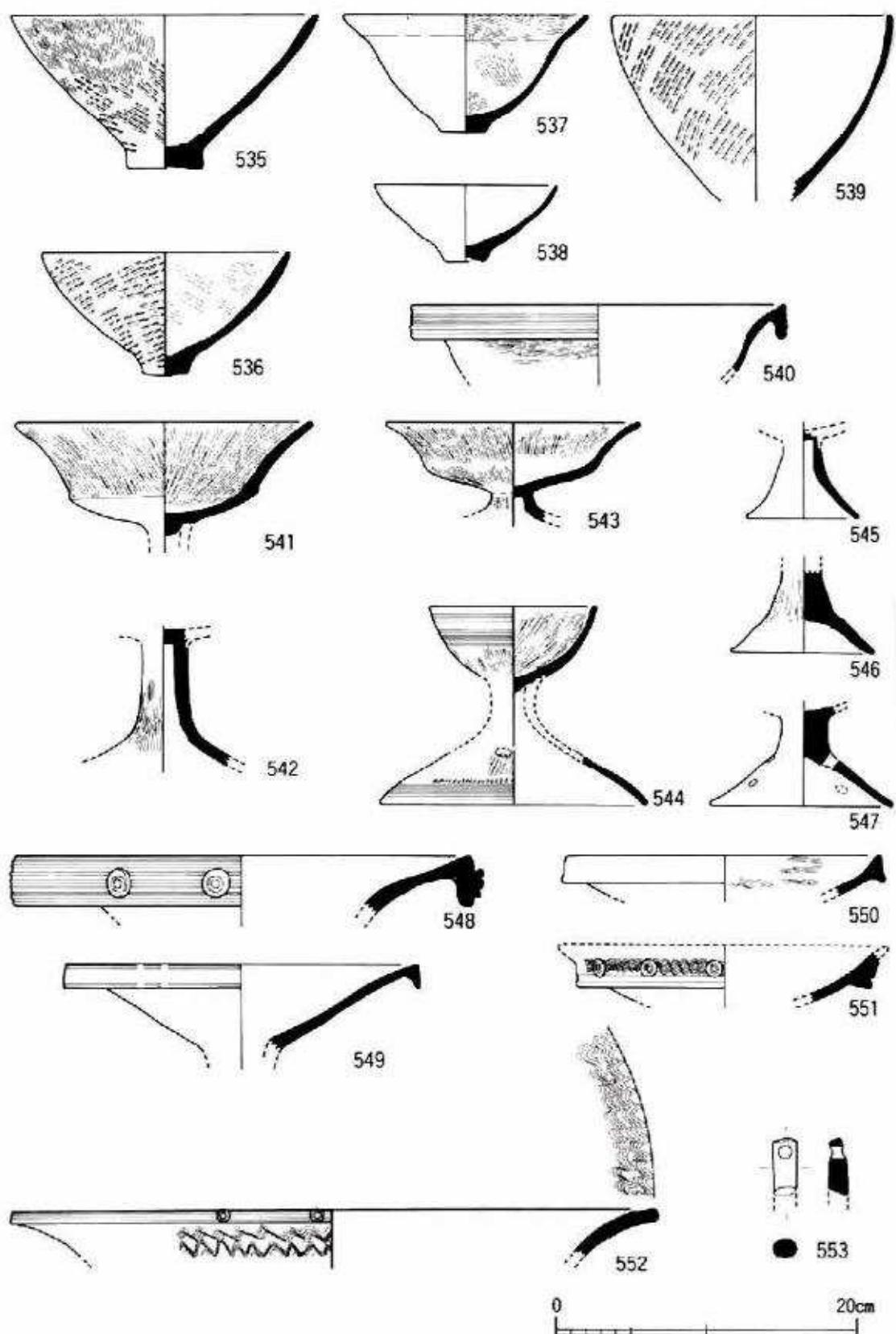
第4節 4・5区の遺構と遺物



第146図 4・5区第3面出土土器(1)



第147図 4・5区第3面出土土器(2)



第148図 4・5区第3面出土土器(3)

508は、体部から口縁部の途中まで叩きあげ、その後端部に粘土を貼り付け口縁部を成形している。この貼り付け痕が、外面に顕著に観察できる。

510は、体部から口縁部にかけてを成形後、頭部外面に粘土を貼り付け、頭部を補強している。この粘土の貼り付け後の仕上げは粗で、指頭圧痕として残存している。

511・512・518は、壺としては珍しく、体部外面を叩き成形後、全面ではないが裏方向のヘラ削りによって仕上げている。また、514は体部外面をヘラミガキによって仕上げている。この土器は壺に分類される可能性も否定できないが、形態的に壺に近いため、壺に分類した。

底部は、突出した平底形態をとるものと、丸底化の傾向が認められるもの(522・526・527・529)とが出土している。

鉢

有孔鉢 531・534の4個体である。このうち、533と534は穴が1穴穿たれる一般的な有孔鉢の底部である。これに対して、531と532は、穴が1穴ではなく、残存する数で166は11穴、532は7穴穿たれている。穴の大きさも、533と534は1cm前後であるのに対して、531と532は2mm～4mmと極端に小さい。

大型鉢 539と540の2個体である。539は、底部を欠くが、楕円形を呈する鉢と考えられる。体部から口縁部にかけて叩き上げにより成形され、口縁端部は横ナタ調整によりわずかに外傾する瘤面をもつ。

540は、内湾する体部に対して口縁部を外反させ、瘤部を下方に拡張する。瘤面には4条の擬凹線を施している。

中型鉢 535・537の2個体圓化した。535は、突出した平底をなす底部から体部がほぼ直線的に立ち上がり、口縁部をわずかに内湾させている。537は、内湾する体部に対して口縁部を斜外方に屈曲させている。口縁部はわずかに内湾傾向にある。底部は突出した平底をなすが、わずかに丸底化の傾向が伺える。

小型鉢 2個体圓化した。536は、底部は突出した平底をなし、体部から口縁部は楕形を呈する。538と536と基本的形態は同じであるが、より小型である。また、底部は536ほど突出した平底形態をなさない。さらに、口径に対して器高が低い傾向にある。

高杯 壺部は圓形を呈するタイプと、椭形を呈するタイプが出土している。

皿形杯 541と543の2個体である。2個体とも、体部に対して口縁部の器高が高い傾向にある。ただし、541は、脚部は542のような長脚と考えられるのに対して、543の脚部は短脚である。

楕形杯 杯部は544の1個体である。杯部と脚部とからなるが、出土位置・胎土・色調等から判断して本来は同一個体であったものと考えられる。口縁部および体部外面にそれぞれ6条の擬凹線が施されている。瘤部に4条の擬凹線が施されている。さらに、擬凹線の上側に刻み目が施されている。また、この土器も当地区第2面出土の488同様、他の土器に比べて大変精良な胎土で作られている。

脚部 上述した542以外は、杯部との対応関係を明確にすることはできない。547は、裾部に2段にわたってそれぞれ1穴の透穴が穿たれている。

器台 口縁部が複合口縁をなすものとなさないものの2タイプが出土している。

複合口縁 548~551の4個体である。

548は、口縁端部の下端に粘土を貼り付け端部を拡張している。端面には8条の擬凹線を施し、その上に竹管円形浮文を貼り付けている。

549は体部から口縁部にかけて直線的にのび、端部下端に粘土を貼り付け端部を拡張している。端面の上端と下端に、それぞれ1条の擬凹線を施している。また、端面に刻み目状の窪みが確認できるが、磨滅が著しいため明確にできない。

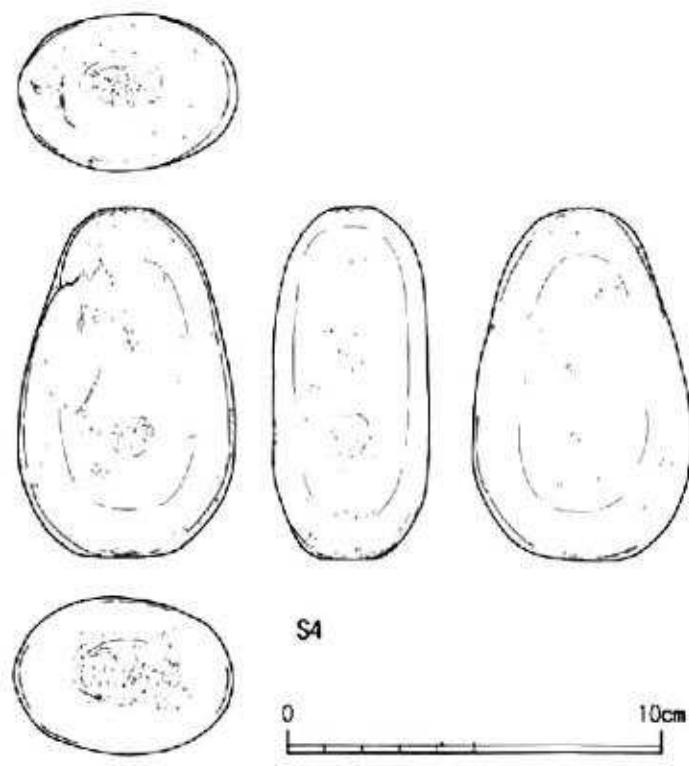
551は、体部から口縁部にかけて内湾させ、体部から口縁部への変換部外面に断面三角形の粘土を貼り付け、口縁部外面から一体の面を形成している。この面には7条の櫛描波状紋を施し、この上に竹管円形浮文を貼りつけている。ただし、口縁端部を欠くため、全体の特徴は明らかにできない。また、この土器については、特に口縁部の形態からみると壺との区別が困難であるが、体部が内湾傾向にあることから器台に分類した。

単純口縁 552の1個体である。口縁部がわずかに残存するものである。口縁端部に横ナデ調整により端面をつくり、2条の擬凹線を施し、この上に竹管円形浮文を貼り付けている。また、5条の櫛描波状紋が口縁部内面には1段、外面には2段、それぞれ施文されている。

土製品 土鍤1点(553)が出土している。

下端部を欠くが、平面長方形を呈する。上端部には径8mmの穴が穿たれている。残存長3.8cm、幅1.6cmを測る。また断面形は楕円形を呈し、厚さは1.3cmである。

石器 敲石1点(S4)が出土している。楕円状のやや偏平な礫を使用したもので、両端部に敲打の痕跡が認められる。特に下端面は、顯著な敲打痕によって平坦面をなしている。また全面が磨かれている。長さ9.2cm、幅5.7cm、厚さ4.2cm、重さ331.4gを測る。



第149図 S 4

第66表 4・5区第3面出土土器觀察表(1)

番号	基種	直 異(cm)	調 査 - 技 法	色 調	残存率	備考
491	壺	口径: 130.8 / 底径: 126.7 / 高さ: 15.4 腹径:	外面: 頂部～口縁部へテラリセキ、口縁部膨らみ調整。 内面: 壁底の角不明。	外面: 暗 内面: 暗	口縁部1/4	
492	壺	口径: 117.8 / 底径: 104.8 / 高さ: 15.4 腹径:	外面: ナマ調整。 内面: ナマ調整。	外面: 暗 内面: 暗	口縁部1/3	
493	壺	口径: 119.3 / 底径: 110.0 / 高さ: 15.2 腹径:	外面: 頂部～口縁部膨らみ調整。 内面: 体筋上部ナマ。 頂部～口縁部ナマ調整。	外面: 暗 内面: 暗	口縁部1/4 頂部2/3	
494	壺	口径: 119.8 / 底径: 114.7 / 高さ: 15.4 腹径:	外面: ナマ調整。 内面: ハラリセキ。	外面: 暗 内面: 暗	口縁部1/4	
495	壺	口径: 117.7 / 底径: 110.3 / 高さ: 15.4 腹径:	外面: ナマ調整。 内面: ハラリセキ。	外面: 暗 内面: 暗	口縁部1/4	
496	壺	口径: 119.6 / 底径: 112.4 / 高さ: 15.4 腹径:	外面: ナマ調整。 内面: 壁底の角不明。	外面: 淡黃暗 内面: 暗	口縁部1/4	
497	壺	口径: 115.6 / 底径: 110.5 / 高さ: 15.4 腹径:	外面: 頂部～口縁部ナマ。 内面: ハラリセキ。	外面: 暗 内面: 暗	口縁部1/4	
498	壺	口径: 114.2 / 底径: 110.8 / 高さ: 15.4 腹径:	外面: 壁底の角不明。 内面: 壁底の角不明。	外面: 暗 内面: 暗	口縁部2/5	
499	壺	口径: 115.0 / 底径: 110.2 / 高さ: 15.4 腹径:	外面: 頂部～口縁部へテラリセキ、口縁部膨らみ調整。 内面: 壁底の角不明。	外面: 暗 内面: 暗	口縁部1/4	
500	壺	口径: 119.2 / 底径: 111.8 / 高さ: 15.4 腹径:	外面: 壁底へテラリセキ、口縁部ナマ調整。 内面: ナマ調整。	外面: 暗 内面: ハラリセキ	口縁部1/2	
501	壺	口径: 111.2 / 底径: 107.4 / 高さ: 15.4 腹径:	外面: 頂部～口縁部へテラリセキ、口縁部膨らみ調整。 内面: ハラリセキ。	外面: 淡黃暗 内面: 淡黃暗	口縁部1/4	
502	壺	口径: 116.0 / 底径: 112.0 / 高さ: 15.4 腹径:	外面: ハラリセキ。 内面: 体筋ナマ調整、頂部ナマ。	外面: ハラリセキ 内面: 淡黃暗	體部・底部1/4	
503	壺	口径: 112.0 / 底径: 106.6 / 高さ: 15.4 腹径:	外面: ナマ調整。 内面: ナマ調整。	外面: ハラリセキ 内面: ハラリセキ	体部1/4	
504	壺	口径: 115.1 / 底径: 110.9 / 高さ: 15.4 腹径:	外面: 底部～体筋ナマ調整、頂部ナマ調整。 内面: 底部～体筋エビナマ調整、頂部ナマ調整。	外面: 淡黃暗 内面: 黒	張筋1/4	
505	壺	口径: 117.0 / 底径: 114.5 / 高さ: 15.4 腹径:	外面: ナマ調整。 内面: ナマ調整。	外面: 暗 内面: ハラリセキ	体部若干	
506	壺	口径: 115.0 / 底径: 111.8 / 高さ: 15.4 腹径:	外面: 体部叩き成形、口縁部膨らみの角不明。 内面: 壁底の角不明。	外面: 暗 内面: 壁底・底部	口縁部1/4	
507	壺	口径: 117.0 / 底径: 113.8 / 高さ: 11.3 腹径:	外面: 体部～面部叩き成形、口縁部ナマ調整。 内面: 体部～口縁部ナマ調整。	外面: ハラリセキ 内面: ハラリセキ	口縁部～ 体部部分	
508	壺	口径: 116.8 / 底径: 114.7 / 高さ: 15.4 腹径:	外面: 体部～口縁部叩き成後、口縁部ナマ調整。 内面: 体部～口縁部ナマ調整。	外面: 暗 内面: ハラリセキ	口縁部1/4	
509	壺	口径: 118.7 / 底径: 114.6 / 高さ: 15.4 腹径:	外面: 体部叩き成形、口縁部ナマ調整。 内面: 体部～口縁部ナマ調整。	外面: 暗 内面: ハラリセキ	口縁部 体部1/4	
510	壺	口径: 117.6 / 底径: 113.3 / 高さ: 15.4 腹径:	外面: 体部叩き成形、口縁部ナマ調整。 内面: ナマ調整。	外面: 暗 内面: 暗	口縁部1/4	
511	壺	口径: 115.4 / 底径: 111.6 / 高さ: 15.4 腹径:	外面: 体部叩き成形後部分の口～下部ナマ。 内面: 体部～口縁部ナマ調整。	外面: ハラリセキ 内面: ハラリセキ	口縫部1/4部分 保付	
512	壺	口径: 116.4 / 底径: 112.4 / 高さ: 15.4 腹径:	外面: 体部～顎部叩き成後、体筋下部ハラリセキ。 内面: ナマ調整。	外面: ハラリセキ 内面: ハラリセキ	1/2 体部下部封付	

第4節 4・5区の遺構と遺物

第67表 4・5区第3面出土土器観察表(2)

番号	器種	法 律(cm)	調 査 方 法	外 面	内 面	備 考
513	壺	口径: 14.5 脚径: 12.0 高さ: 21.0	外面: 底部・背面部に3枚底 内面: 背面部が不明	外面: 口元・肩部 内面: 脚底	底部完存	
514	壺	口径: 15.0 脚径: 12.0 高さ: 21.0	外面: ライダル 内面: 体形上十字形調整、底部上十字形調整	外面: 腹 内面: 底部	底部・腹部	
515	壺	口径: 脚径: 高さ:	外面: 底部・体部腰部成形後、底部加工、口元 内面: 底部・体部腰部成形後	外面: 腹 内面: 腹	腹部完存	
516	壺	口径: 脚径: 高さ:	外面: 底部・体部腰部成形後 内面: 口元	外面: 口元・肩部 内面: 口元	底部完存	
517	壺	口径: 14.3 脚径: 12.8 高さ: 21.0	外面: 底部・体部腰部成形後、底部加工、口元 内面: 口元・腰部	外面: 口元・肩部 内面: 口元	底部完存	
518	壺	口径: 脚径: 高さ:	外面: 底部加工、底部、腰部・脚部・口元 内面: 底部上十字形調整、体部腰部成形後	外面: 底部 内面: 底部	底部	
519	壺	口径: 脚径: 高さ:	外面: 底部・体部腰部成形 内面: 十字形調整	外面: 口元・肩部 内面: 口元	底部完存	
520	壺	口径: 脚径: 高さ:	外面: 底部・体部腰部成形 内面: 腰部力が不明	外面: 口元・肩部 内面: 腹	底部・腹部完存	
521	壺	口径: 14.6 脚径: 12.6 高さ: 21.0	外面: 底部・体部腰部成形後、底部加工、口元 内面: 体部上十字形調整後、底部加工、口元	外面: 口元・肩部 内面: 底部	底部完存	
522	壺	口径: 13.2 脚径: 11.8 高さ: 21.0	外面: 成形、体部腰部成形後、底部加工、口元 内面: 腰部力が不明	外面: 腹 内面: 腹	底部完存	
523	壺	口径: 14.1 脚径: 12.1 高さ: 21.0	外面: 底部・体部腰部成形後、底部加工、口元 内面: 口元・腰部	外面: 口元・肩部 内面: 腹	底部完存	
524	壺	口径: 14.2 脚径: 12.2 高さ: 21.0	外面: 底部・体部腰部成形後、底部加工、口元 内面: 口元・腰部	外面: 腹 内面: 腹	底部完存	
525	壺	口径: 14.0 脚径: 12.0 高さ: 21.0	外面: 底部・体部腰部成形後、底部加工、口元 内面: 口元・腰部	外面: 口元・肩部 内面: 腹	底部完存	
526	壺	口径: 13.8 脚径: 11.8 高さ: 21.0	外面: 底部・体部腰部成形後、底部加工、口元 内面: 口元・腰部	外面: 口元・肩部 内面: 腹	底部完存	
527	壺	口径: 13.2 脚径: 12.0 高さ: 21.0	外面: 底部・体部腰部成形 内面: 口元・腰部	外面: 腹 内面: 腹	底部完存	
528	壺	口径: 13.2 脚径: 12.0 高さ: 21.0	外面: 口元・腰部 内面: 口元・腰部	外面: 口元・肩部 内面: 口元・肩部	底部完存	
529	壺	口径: 13.2 脚径: 12.0 高さ: 21.0	外面: 底部・体部腰部成形 内面: 口元・腰部	外面: 口元・肩部 内面: 底部	底部完存	
530	壺	口径: 13.8 脚径: 12.8 高さ: 21.0	外面: 底部・体部腰部成形 内面: 口元・腰部	外面: 口元・肩部 内面: 口元・肩部	底部完存	
531	壺	口径: 13.2 脚径: 12.0 高さ: 21.0	外面: 口元・腰部 内面: 口元・腰部	外面: 明瞭 内面: 明瞭	底部	
532	壺	口径: 13.1 脚径: 12.1 高さ: 21.1	外面: 口元・腰部 内面: 口元・腰部	外面: 口元・肩部 内面: 口元・肩部	底部	
533	壺	口径: 13.1 脚径: 12.1 高さ: 21.0	外面: 底部・体部腰部成形 内面: 腹	外面: 口元・肩部 内面: 口元・肩部	底部完存	
534	壺	口径: 13.2 脚径: 12.2 高さ: 21.0	外面: 底部・体部腰部成形後、底部加工、口元 内面: 口元・腰部	外面: 口元・肩部 内面: 口元・肩部	底部完存	

第68表 4・5区第3面出土土器観察表(3)

番号	器種	法寸(cm)	調 整 技 法	色 滅	現存率	備考
535	鉢	口径: 20.3 脚径: 10.1 脚高: 3.2 器高: 10.1	外側: 頂部・口縁部叩き成形後、底部土子調整。口縁部ハサ調整。 内側: 底部土子子作成。体部・口縁部土子調整。	外側: 黄赤褐 内側: に赤い黄褐	口縫部1/4 底部完存	
536	鉢	口径: 16.4 脚径: 8.2 脚高: 3.2 器高: 8.2	外側: 底部・口縁部叩き成形 内側: ハサ調整後子土調整。	外側: 棕 内側: 棕	口縫部1/2	
537	鉢	口径: 16.0 脚径: 12.8 脚高: 3.8 器高: 7.8	外側: 成形エッヂ付。体部・口縁部土子調整 内側: 成形・口縁部ハサ調整後。底土子調整。	外側: に赤い黄褐 内側: に赤い黄褐	口縫部1/4	
538	鉢	口径: 12.4 脚径: 7.9 脚高: 3.5 器高: 7.5	外側: 成形・口縁部土子調整 内側: 底部・口縁部土子調整。	外側: に赤い黄褐 内側: 棕	1/3	
539	鉢	口径: 18.6 脚径: 12.2 脚高: 3.2 器高: 12.2	外側: 体部・口縁部叩き成形 内側: 略減の為不明	外側: に赤い黄褐 内側: 棕	口縫部1/4	
540	鉢	口径: 24.8 脚径: 17.2 脚高: 3.2 器高: 17.2	外側: 体部・口縁部ハサ・セキ・口縁部土子調整 内側: 体部・口縁部土子調整。	外側: に赤い黄褐 内側: 黄褐色	口縫部1/4	
541	高杯	口径: 19.3 脚径: 13.4 脚高: 3.2 器高: 13.2	外側: 体部・口縁部ハサ・セキ。 内側: 体部・口縁部土子土子。	外側: 棕 内側: に赤い黄褐	口縫部3/4	
542	高杯	口径: 13.0 脚径: 11.1 脚高: 2.0 器高: 11.1	外側: 土器名ハセ・セキ。 内側: 土器名ハサ・調整。	外側: 棕 内側: に赤い黄褐	傳文化	
543	高杯	口径: 15.6 脚径: 12.8 脚高: 2.0 器高: 6.5	外側: 腹部・口縁部ハサ・セキ。 内側: 腹部・土子調整。体部・口縁部ハサ・セキ。	外側: 棕 内側: 棕	口縫部3/4	
544	高杯	口径: 10.8 脚径: 8.2 脚高: 2.0 器高: 5.2	外側: 体部・土子土子。口縁部ハサ調整。 内側: 体部・口縁部ハサ・セキ。	外側: 棕 内側: 棕	口縫部1/2	
545	高杯	口径: 12.0 脚径: 11.5 脚高: 2.5 器高: 11.5	外側: ハセ・セキ 内側: ハサ調整。	外側: に赤い黄褐 内側: に赤い黄褐	圓筒1/4	
546	高杯	口径: 12.1 脚径: 11.3 脚高: 2.3 器高: 6.5	外側: 略減の為不明 内側: 略減の為不明	外側: 棕 内側: 棕	圓筒1/2	
547	高杯	口径: 12.1 脚径: 11.4 脚高: 2.4 器高: 6.5	外側: 腹部土子ハサ・セキ。裏足下土子調整。 内側: 土子調整。	外側: 棕 内側: 棕	圓筒1/2	
548	高杯	口径: 11.1 脚径: 11.1 脚高: 2.5 器高: 5.5	外側: 腹部ハサ・セキ・調整。腹足下土子調整。 内側: 腹部ハサ調整。体部ハサ・セキ。	外側: に赤い黄褐 内側: に赤い黄褐	腳部1/2	
549	高杯	口径: 13.0 脚径: 11.0 脚高: 2.0 器高: 11.0	外側: 口縁部土子不調整。体部熟成の為不明 内側: 体部・口縁部ハサ・セキ。	外側: 黄 内側: 有毛體	口縫部1/4	
550	高台	口径: 13.5 脚径: 11.0 脚高: 2.0 器高: 11.0	外側: 体部ハサ・セキ。口縁部ハサ・セキ。 内側: 体部・口縁部ハサ・セキ。	外側: 棕 内側: 棕	口縫部1/2	
551	高台	口径: 20.2 脚径: 14.0 脚高: 2.0 器高: 14.0	外側: 体部ハサ・セキ。口縫部土子調整 内側: 体部・口縁部ハサ・セキ。	外側: 棕 内側: 棕	口縫部1/2	
552	高台	口径: 17.4 脚径: 13.5 脚高: 2.0 器高: 13.5	外側: 体部ハサ・セキ。口縫部土子調整 内側: 体部・口縫部ハサ・セキ。	外側: 棕 内側: 棕	口縫部1/4	
553	高台	口径: 13.4 脚径: 11.8 脚高: 2.0 器高: 11.8	外側: 口縫部土子不調整 内側: 口縫部ハサ・セキ。	外側: 1/3-1/2-黃褐 内側: 黑褐	口縫部1/4	

(2) 住居跡

SH03

検出状況

調査区南西部で検出した。当住居跡の大半は調査区の南側へのびている。また、東側についても、SH01に切られている。

形状・規模

平面形は円形と推定される。一部しか残存しないため規模を明確にできないが、径4.4mと復原される。検出面から床面までの深さは3cmと浅く、床面の標高は9.71mである。床面積は60.8m²と復元される。

屋内施設

周壁溝・柱穴を検出した。

周壁溝

住居跡を検出した範囲では全周する。床面での幅38cm、底部での幅19cm、床面から底部までの深さ7cmを測る。一般的な住居跡の周壁溝より幅が広いのは、当住居跡が土石流堆積による砂場を掘り込んで造られているためと考えられる。

柱穴

1穴のみ検出した。掘り方の径46cm、柱痕の径14cmを測り、床面からの深さは30cmである。

出土遺物

壺・鉢・高环各1個体ずつ出土している。

壺

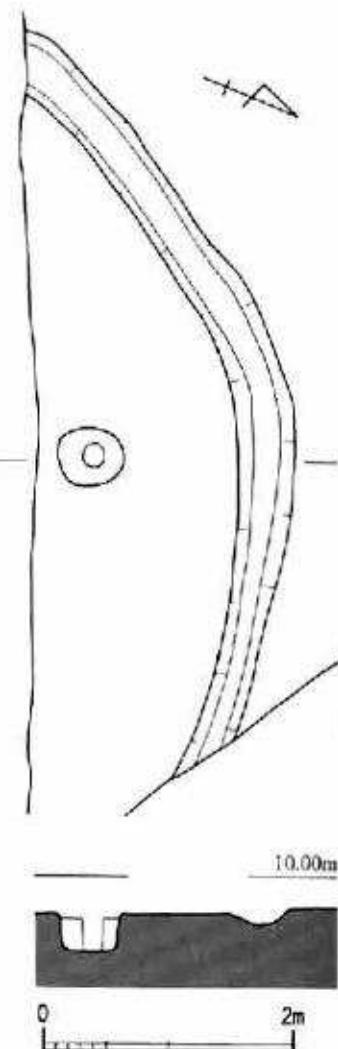
広口壺の口縁部である。頸部から口縁部にかけて外反し、端部下端に粘土を貼り付け、端面を拡張している。端面には3ないし4条の擬凹線を施し、その上に2個で1対となる円形浮文を貼りつけている。

鉢

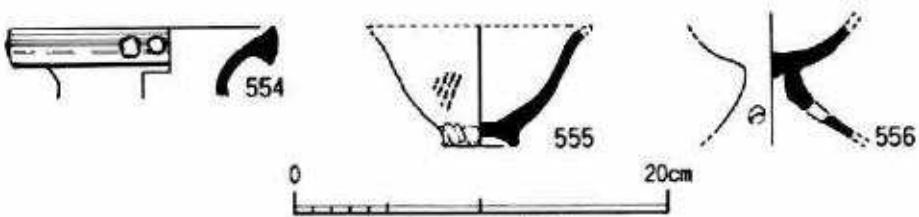
小型鉢で、口縁端部を欠く。底部はエビオサエにより下外方にひきのぼし、高台状をなす。体部は楕円形を呈し、口縁部を外反させている。

高环

环部は口縁端部を欠くが、楕円タイプと考えられる。



第150図 SH03



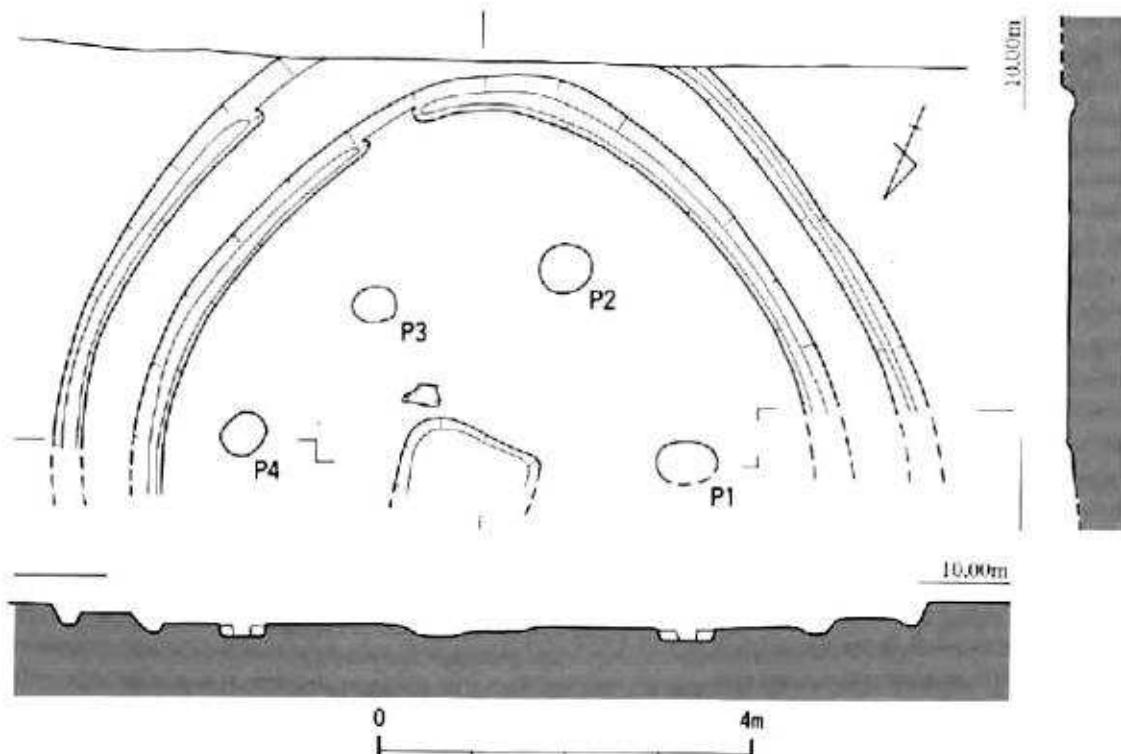
第151図 SH03出土土器

第69表 SH03出土土器観察表

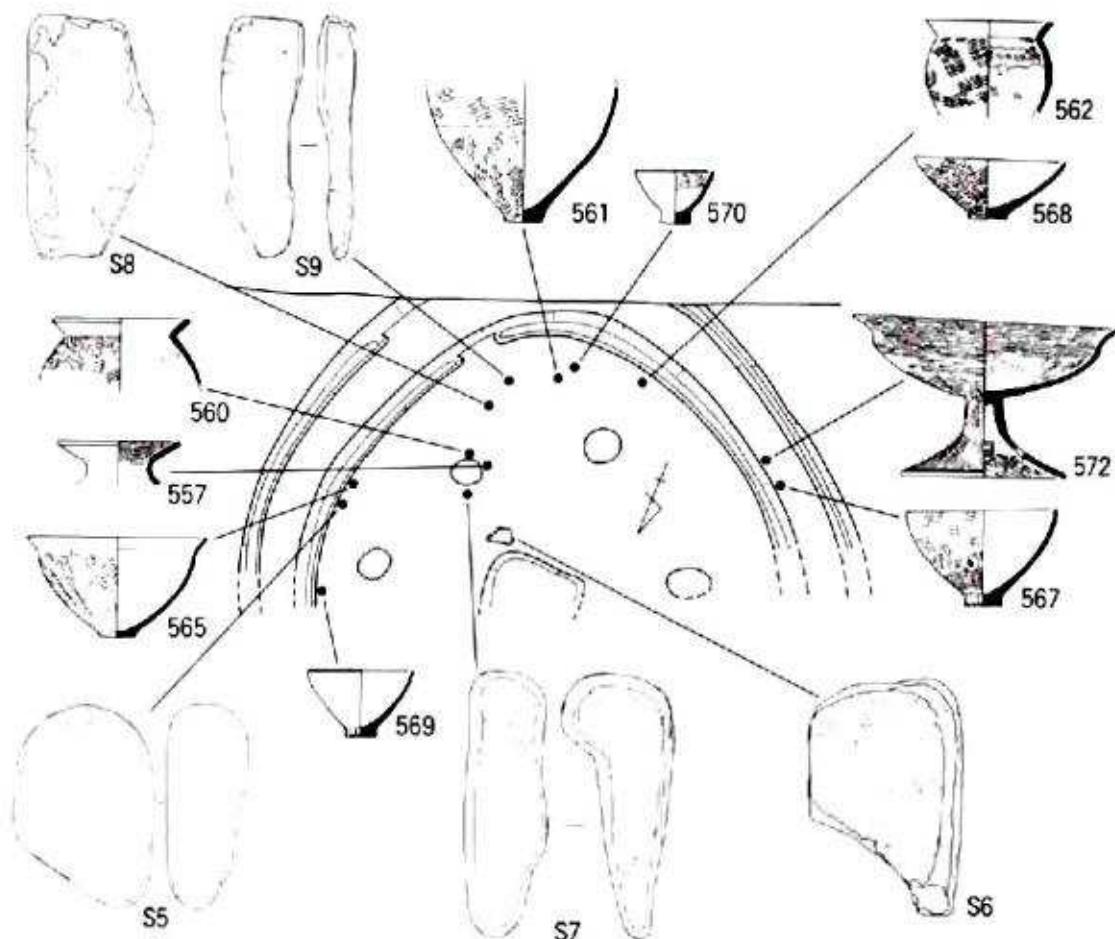
番号	器種	直 周 長(cm)	調 査 方 法	色 質	残 存 状	備 考
554	壺	口径: 14.4 底径: 9.4 高さ: 2.6 腹径:	外面: 物質の為不明。 内面: 物質の為不明。	外面: 棕 内面: 黄棕	口縁部1/3	
555	鉢	口径: 14.4 底径: 9.2 高さ: 2.1 腹径:	外面: 底部・体部叩き成形後、產品エビオサエ。口縁端部アーチ調整。 内面: オーバーホール。	外面: 浅黄棕 内面: 浅黄棕	体部1/3	
556	高环	口径: 11.8 底径: 3.0 高さ:	外面: 端部へカミギキ。体部ナマ調整。 内面: 端部ナマ調整。体部ナマ調整。	外面: 浅黄棕 内面: 浅黄棕		

SH04

- 検出状況** 調査区南西部で検出した。復元される住居跡の約1/2を検出したにとどまり、北側は旧淡路鉄道の建設により削平され、南側は調査区外までのびている。SH03と切り合い関係にあり、SH03を切っている。
- 形状・規模** 平面形は円形と推定される。復元される径は9mと推定される。検出面から床面までの深さは25cmで、床面の標高は9.52mである。復元される床面積は63.5m²である。
- 焼失住居** 当住居跡は焼失した状態で検出されている（図版36）。
- 屋内施設** 周壁溝・ベッド・柱穴・中央土壙を検出した。
- 周壁溝** 住居跡南東部で途切れる。ベッド上面における幅32cm、ベッド上面から底部までの深さ5cmを測る。
- ベッド** 住居跡を検出した範囲では全周する。幅63cmを測り、床面との比高は13cmである。ベッドの内側にも周壁溝がめぐっている。南東部で約60cm途切れている。床面における幅36cmを測り、床面からの深さは22cmである。
- 柱穴** 4穴検出した。本来は6穴あったものと推定される。P1は、掘り方径50cmを測り、床面からの深さは14cmである。P2は、掘り方径55cmを測り、床面からの深さは13cmである。P3は、掘り方径50cmを測り、床面からの深さは14cmを測る。P4は、掘り方径47cmを測り、床面からの深さは15cmである。各柱穴とも、柱痕は検出できなかった。柱穴間の距離は、P1-P2間が2.48m、P2-P3間が2.12m、P3-P4間が1.96mである。
- 中央土壙** 南側約1/2を欠くため、全体の形状・規模は明確にできないが、平面形は長方形と考えられる。長軸方向で1.5m、その直交方向で86cmと推定される。断面形はやや深い皿形を呈し、床面からの深さは13cmである。土壙内には、炭層の堆積が顕著に認められた。

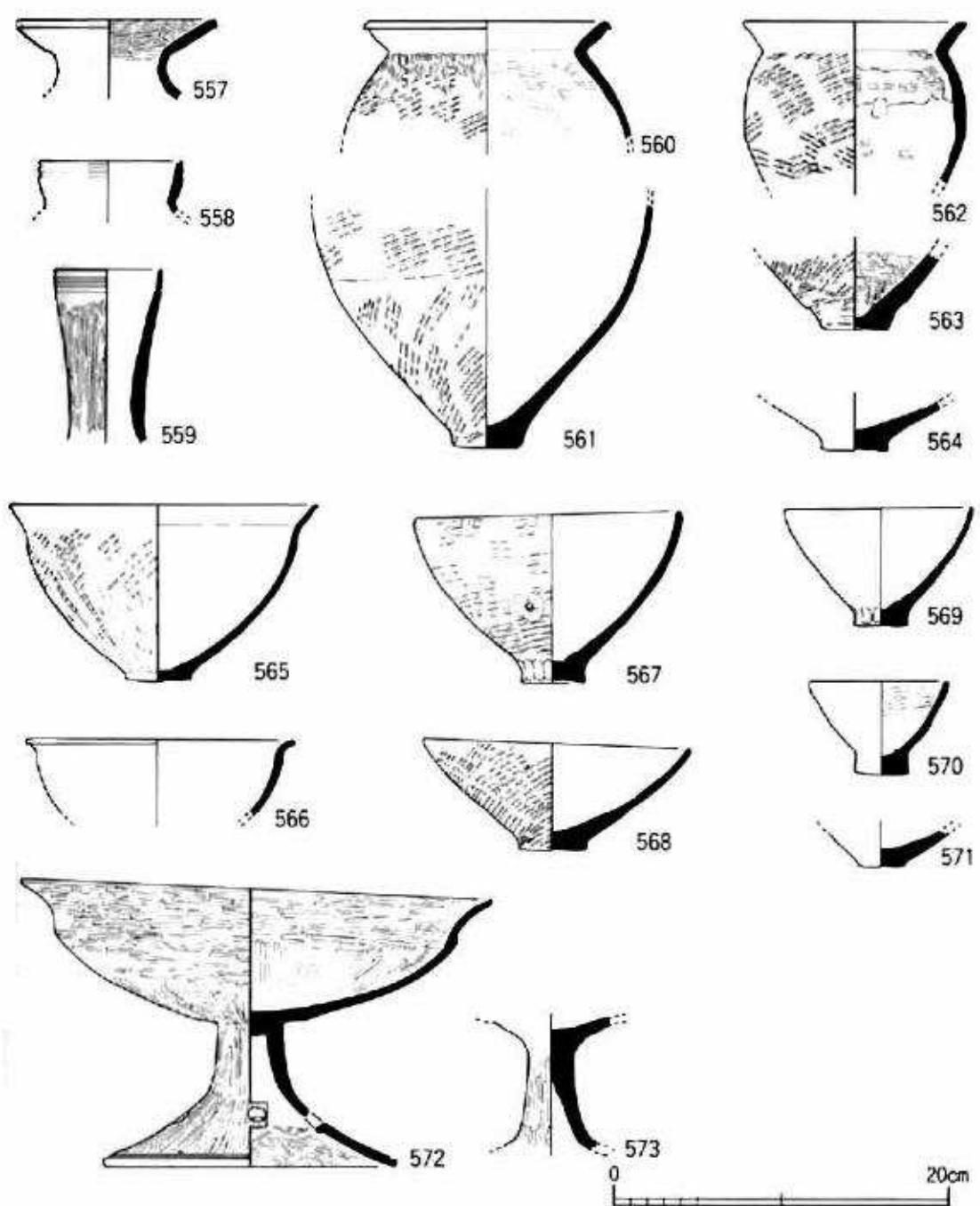


第152図 SH04



第153図 SH04遺物出土位置

- 出土遺物** 土器・石器が出土している。
- 出土状況** 当住居跡は焼失した状態で埋没しているため、多くの土器・石器が失火した時の原位置に近い状況で出土している。このため、比較的定形に近い状況で出土した土器が多い。大半は、柱穴とベッドに挟まれた区域の東側に集中している（第153図）。
- 土器** 壺・甕・鉢・高環の各器種が出土している。
- 壺** 広口壺・直口壺・細頸壺・底部片が出土している。
- 広口壺** 557の1個体である。大きく外反する頸部から口縁部が斜上方に直線的にのびる。口縁部は、下方にわずかにつまむようなナデ調整により端面をもつ。
- 直口壺** 558の1個体である。頸部から口縁部がわずかに内湾気味に立ち上がり、端部外面に2条の、上端面に1条の擬凹線を施している。比較的精良な胎土からなる土器である。
- 細頸壺** 559の1個体である。口頸部のみの残存で、端部外面に4条の擬凹線を施している。
- 甕** 完形に復元できるものはないが、いずれもV様式甕に分類されるものである。
- 鉢** 中型鉢・小型鉢・底部片が出土している。当住居跡出土の土器のなかでもっとも量的にまとまって出土した器種である。
- 中型鉢** 565～568の4個体出土している。565は、内湾する体部に対して口縁部を斜上方に屈曲させ、端部を外方向にわずかにつまみ出す。体部から口縁部まで叩き上げ、口縁部を折り返している。底部はわずかに平底をなす。566は、内湾する体部に対して口縁部を押く



第154図 SH04出土土器

外反させ、端部を丸く收めている。567は、体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、端部を上方につまみ上げ、外傾する端面をもつ。底部は突出した平底をなす。体部下間に径4mmの穿孔が認められる。焼成後に穿たれたものである。568は、567同様わずかに内湾気味に立ち上がり、口縁端部を丸く收める。567と比べて、口径に対して器高が低い。底部はわずかに突出した平底をなす。

小型鉢 569・570の2個体出土している。569は、体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁端部はナデ調整により端面をなす。底部は突出した平底をなす。570も、基本的には569と同形態である。口縁端部は丸く收められている。

高杯 572・573の2個体である。572はほぼ完存する土器で、ベッド上から出土している。杯部は圓形をなし、内溝する体部に対して口縁部は外反傾向にある。罐部はナメ調整により端面を有する。脚窪部外面には2条の擬門線が施されている。4方に透穴が穿たれています。

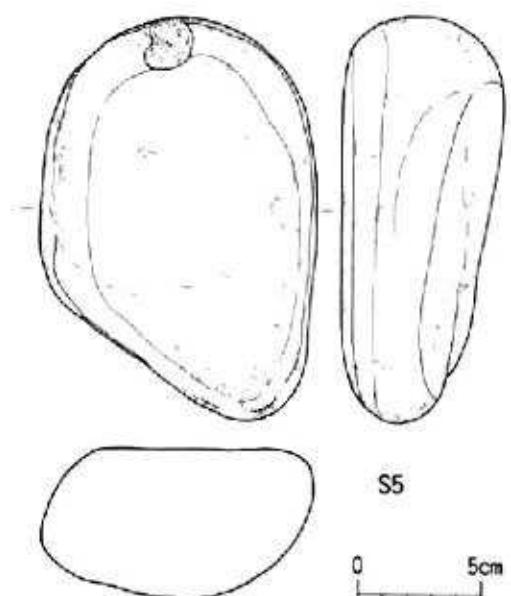
第70表 SH04出土土器観察表

番号	器種	法 量(cm)	高 度 一 括 記	色 調	残 存 状	備 考
567	壺	口径:17.0 脚径:13.0 高さ:	外面:頭部ナメ調整。口縁部ナメ調整。 内面:頭部ナメ調整。口縁部ナメ調整。	外面:褐 内面:褐	口縫跡	
568	壺	口径:19.4 脚径:18.4 高さ:	外面:標子ナメ調整 内面:頭部ナメ調整。口縁部ナメ調整。	外面:褐 内面:灰褐色	口縫部E4	
569	壺	口径:16.7 脚径:14.8 高さ:	外面:頭部ナメ調整後ナメなし。 内面:頭部ナメ調整。口縁部ナメなし。	外面:褐 内面:褐	口縫部E4	
570	壺	口径:14.3 脚径:12.0 高さ:	外面:体部叩き成形後ナメなし。 内面:体部ナメ調整。口縁部ナメ調整。	外面:褐 内面:灰褐色	口縫部E3	
571	壺	口径: 脚径: 高さ:	外面:叩き成形。 内面:表面の為不明。	外面:灰褐色 内面:赤	瓶底完存	
572	壺	口径:12.9 脚径:11.2 高さ:9.7 幅径:13.4	外面:体部叩き成形。口縁部ナメ調整。 内面:体部ナメ調整後ナメ調整。口縁部ナメ調整。	外面:褐 内面:灰褐色	口縫部E3	
573	壺	口径: 脚径: 高さ:	外面:叩き成形。 内面:ナメ調整。	外面:褐 内面:褐	瓶底完存	
574	壺	口径:14.1 脚径:13.9 高さ:	外面:ナメ調整。 内面:ナメ調整。	外面:褐 内面:灰褐色	瓶底完存	
575	杯	口径:19.0 脚径:17.0 高さ:	外面:体部叩き成形後。内面:口縁部ナメ調整。 内面:成形。口縁部ナメ調整。	外面:褐 内面:灰褐色	口縫部E3 瓶底は付存	
576	杯	口径:16.2 脚径:15.4 高さ:	外面:体部叩き成形後ナメ調整。口縁部ナメ調整。 内面:体部ナメ調整。口縁部ナメ調整。	外面:褐 内面:灰褐色		
577	杯	口径:15.5 脚径:13.9 高さ:	外面:成形。体部叩き成形後。底部スピナリエ。 内面:板ナメ調整。	外面:灰褐色 内面:灰褐色	口縫部E4 瓶底完存	
578	杯	口径:15.0 脚径:13.4 高さ:	外面:成形。口縫部ナメ成形。 内面:表面の為不明。	外面:明赤褐 内面:明赤褐	口縫部E3 瓶底完存	
579	杯	口径:11.1 脚径: 高さ:	外面:成形。口縫部ナメ調整後底部ナメなし。 内面:板ナメ調整。	外面:灰褐色 内面:灰褐色	口縫部E3 瓶底完存	
580	杯	口径:8.2 脚径: 高さ:	外面:ナメ調整。 内面:成形。体部ナメ調整。口縫部ナメ調整。	外面:褐 内面:褐	口縫部E3	
581	杯	口径: 脚径: 高さ:	外面:ナメ調整。 内面:ナメ調整。	外面:灰褐色 内面:赤	瓶底完存	
582	高杯	口径:12.3 脚径:13.9 高さ:17.3	外面:脚窓跡。口縫部ナメなし。 内面:脚窓跡ナメ調整。体部ナメ調整。口縫部内面ナメ調整。	外面:明赤褐 内面:灰褐色	口縫部E3 瓶底完存	
583	高杯	口径: 脚径:2.8 高さ:	外面:脚部ナメなし。体部ナメ調整。 内面:体部ナメ調整。	外面:褐 内面:褐	瓶底口縫部E3 瓶底完存	

石器

台石・砥石・磨石が出土している。

台石 S 6 の 1 個体で、中央土壇の南東部で出土している（第156図）。左側面と下部を欠くが、平面はほぼ長方形を呈する。熱を受けており、変色が認められる。上面を使用している。長さ 37.5cm、幅 24.6cm、厚さ 9cm、重さ 11.5g を測る。



第155図 SH04出土磨石

磨石

S 5 の 1 個体であるが、磨石としてはやや大きめの石を使用している。下端部に、あまり明瞭ではないが、使用痕と敲打痕が認められる。上部の剥離は新しいもので、使用的際に生じたものではない。長さ 16.1cm、幅 11.2cm、厚さ 6.5cm、重さ 1700g を測る。

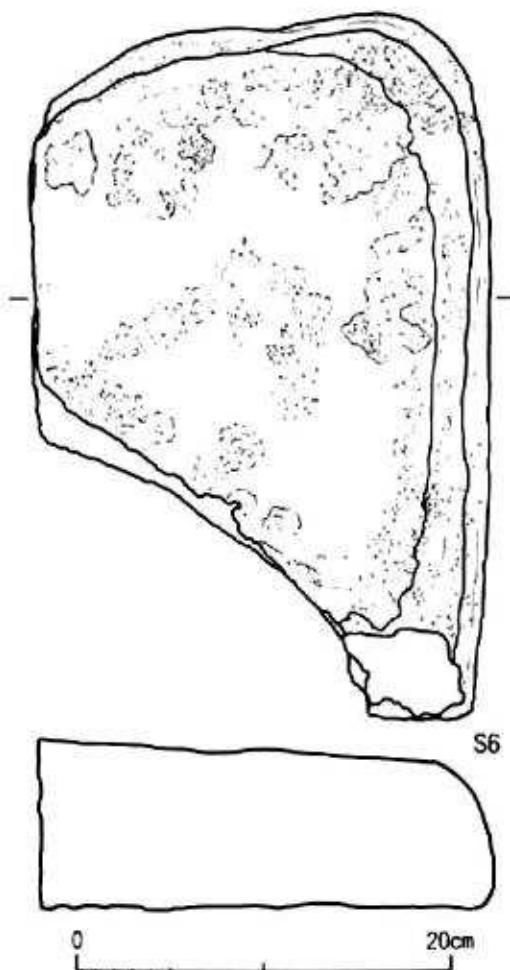
砥石

S 7 ~ S 9 の 3 個体出土している。これら 3 個体は、P 2 周辺およびその南東側床面で出土している。

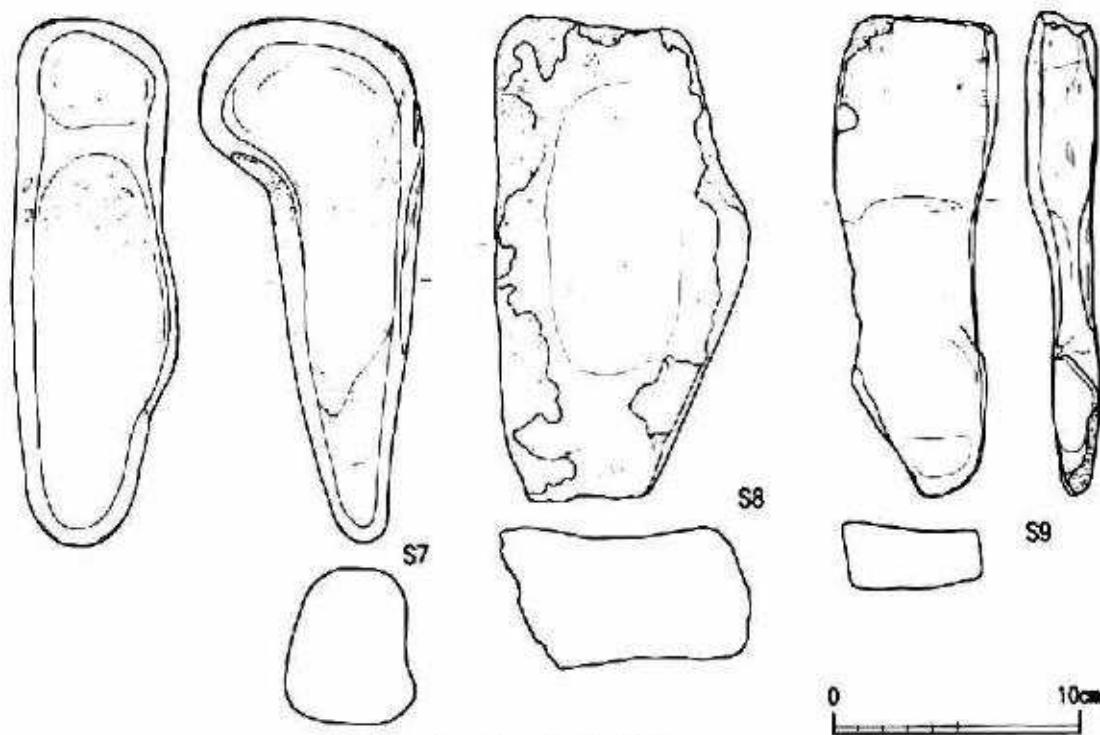
S 7 は、砥石として裏表左右を使用しているが、右側の面をよく使用したようで、中央部に向かって浅く凹んでいる。ただし、どの面にも擦痕は見られない。下端面と左の突出した部分に敲打痕が認められるが、これは砥石として利用するとともに、敲石あるいは磨石としても使用したものではないかと考えられる。長さ 21.1cm、幅 9cm、厚さ 6.7cm、重さ 134g を測る。

S 8 は表裏面ともよく使用されており、両面とも中央部が使用のため磨滅する。左右側面は割れているが、砥石本来の面を残す部分が見られる。擦痕は両面ともあまり見られない。長さ 19.5cm、幅 10.4cm、厚さ 6cm、重さ 1890g を測る。

S 9 は、偏平な石を使用したもので下部は欠損している。左側面と裏面の一部は割れているが、3 面を使用している。石材から「荒砥用」と考えられるが、研磨痕はあまり明瞭ではない。長さ 19.3cm、幅 6.6cm、厚さ 3.1cm、重さ 460g を測る。



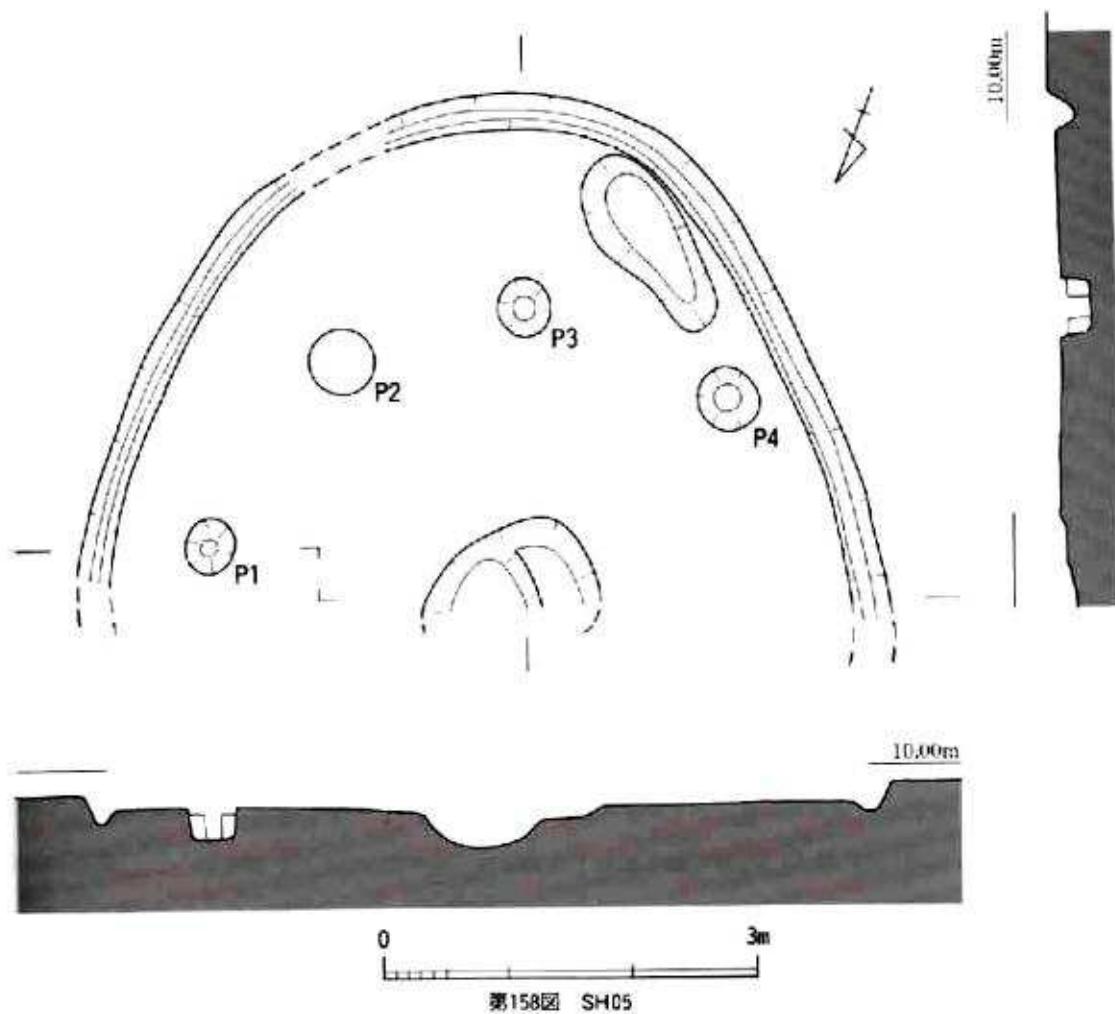
第156図 SH04出土台石



第157図 SH04出土石器

SH05

- 検出状況** 調査区の中央南側で検出された。周辺には柱穴が集中し、西側にはSH03・SH04がある。検出範囲は、擾乱により全体の約1／2が検出されたのみである。柱穴と切り合い関係にあり、柱穴が本住居跡を切っている。
- 形狀・規模** 平面形は、やや歪な円形をしており、南北方向にやや長い。検出部分から復元すると、直径7.8m、短径6.6m、検出面からの深さ20cmで、面積はおよそ400m²程度になる。
- 埋土** 上下2層からなる。下層は黒褐色シルト質極細砂を含む粗砂～細砂で、上層は灰色粗砂～細砂が堆積していた。
- 屋内施設** 周壁溝・主柱穴・中央土壇・土壙が検出された。
- 周壁溝** 検出した範囲では擾乱されているところ以外は全周している。床面における幅は最大で30cm、最小で24cmを測り、床面からの深さは10cm程度である。溝底部における幅は7.5cm～12cmである。
- 柱穴** 合計4穴検出したが、P2の柱穴については、柱痕は確認できなかった。復元すると8本柱になる可能性が高い。P1は掘り方の直径39cm、柱痕の直径12cm、床面からの深さ30cmを測る。P2は掘り方の直径54cm、床面からの深さ24cmを測る。P3は掘り方の直径42cm、柱痕の直径24cm、床面からの深さ25cmを測る。P4は掘り方の直径48cm、柱痕の直径21cm、床面からの深さ25cmを測る。
- 柱間距離はP1～P2間が1.8m、P2～P3間が1.6m、P3～P4間が1.8mである。
- 中央土壇** 住居跡の中央で検出されたが、擾乱により半分が削平されている。平面形はやや南北に延びた椭円形で、南側に段が1段ついている。規模は現存最大長が1.5mを測り、下段の



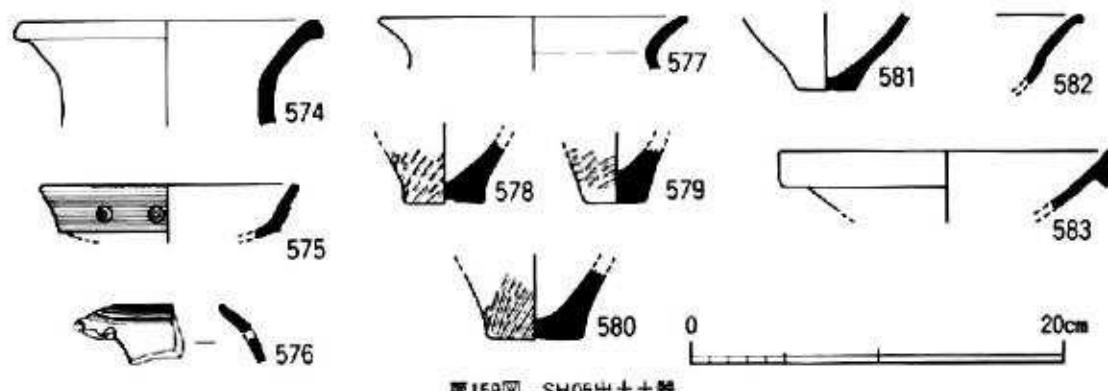
直径は94cmを測る。埋土は上下2層に分かれしており、下層は黒褐色粗砂～細砂、上層は灰色粗砂～細砂である。

土壤 住居跡の南端において周壁溝に接する形で土壤が検出された。平面形は直な格円形で、長径156cm、短径69cmで、深さは床面から約10cmを測る。

出土遺物 上器と石器が出土している。

土器 壺・甕・鉢・高壺・器台の各器種が出土している。

壺 広口壺、二重口縁壺、無頸壺が出土している。

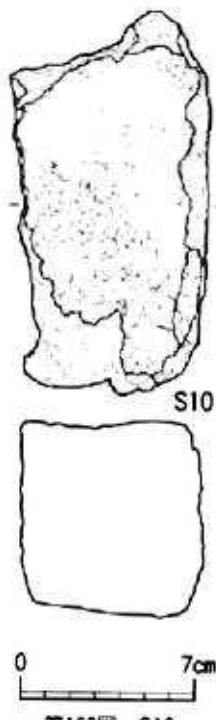


第159図 SH05出土土器

二重口縁壺は575の1個体である。2次口縁外面に7条の擬凹線を施し、その上に竹管円形浮文を貼りつけている。また播部には刻み目を施している。

無頸壺は576の1個体で、口縁部のみの小片である。口縁部には5条の擬凹線を施している。また、擬凹線の下側に糞穴が2穴認められる。この2穴は近接していることから、2個で1対となり、2箇所に穿たれていたものと推定される。他の土器と異なり、精良な胎土である。

種類	V様式系壺の口縁部と底部片が出土している。
全体	底部1個体(581)が出土している。
高环	環部の小片である。環部は圓形をなし、内湾傾向にある体部に対して、口縁部が短く外反する。また端部を丸く取める。
器台	583の1個体である。口縁端部下端に断面三角形の粘土を貼り付け、端面を形成している。
石器	砥石1点(S10)が出土している。受熱により上下・左右の面が弾け飛んでいるため、砥石としての面が残るのは、表と裏の2面のみである。表面は使用により浅く擦んでいる。受熱により赤変している部分が裏面の上縁と下縁部に見られる。長さ15.4cm、幅8cm、厚さ7.9cm、重さ1400gを測る。



第160図 S10

第71表 SH05出土土器観察表

番号	器種	法算(cm)	調査仕法	色調	残存状	備考
574	壺	口径:11.6 高径:11.5 腹径:	外面:磨滅の為不明 内面:磨滅の為不明	外面:浅黄褐 内面:褐	口縁部1/4	
575	壺	口径:13.4 高径: 腹径:	外面:頂部十字調整 内面:頭部-口縁部横十字調整後ヘリテクト	外面:褐 内面:褐	口縁部1/4	
576	壺	口径: 高径: 腹径:	外面:ヘリテクト 内面:ヘリテクト	外面:褐 内面:褐	口縁部わずか	
577	壺	口径:16.2 高径:15.2 腹径:	外面:磨滅の為不明 内面:磨滅の為不明	外面:褐 内面:褐	口縁部1/4	
578	壺	口径:14.5 高径:3.4 腹径:	外面:底底-体部凹凸成形 内面:板子字調整	外面:灰青褐 内面:灰青褐	底部3/4	
579	壺	口径:13.3 高径:13.0 腹径:	外曲:底底-体部凹凸成形 内面:板子字調整	外面:浅黄褐 内面:褐色	底部完存	
580	壺	口径:15.3 高径:15.2 腹径:	外面:底底-体部凹凸成形 内面:板子字調整	外面:灰青褐 内面:灰青褐	底部1/2	
581	器	口径: 高径: 腹径:	外面:磨滅の為不明 内面:磨滅の為不明	外面:灰青褐 内面:褐	底部完存	
582	器	口径: 高径: 腹径:	外面:ヘリテクト 内面:ヘリテクト	外面:褐 内面:褐	口縁部わずか	
583	器台	口径:17.0 高径: 腹径:	外面:底部成の為不明、口縁部横十字調整 内面:磨滅の為不明	外面:灰青褐 内面:灰青褐	口縁部1/4	

(3) 土壙

SK20

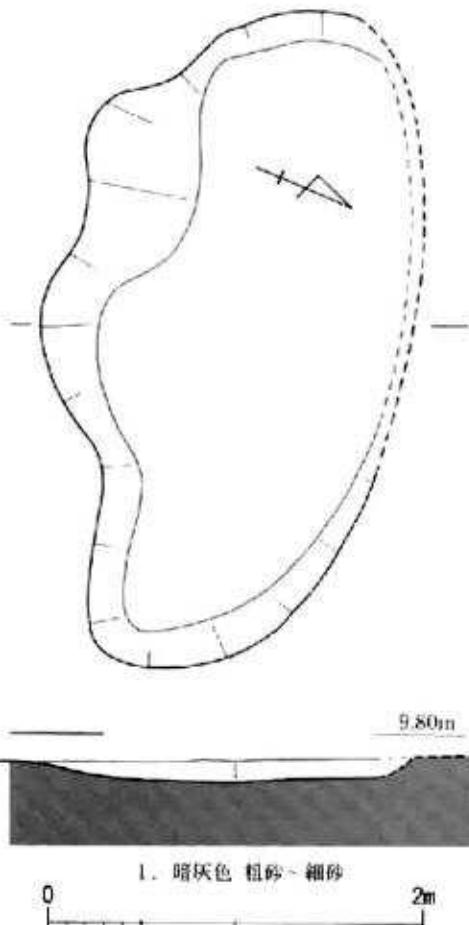
検出状況	当地区の西端部で検出した。SK21の西側に位置する。土壙の一部を検出したにとどまり、調査区外まで広がっている。他の遺構との切り合い関係は認められない。
形状・規模	平面橢円形ないし隅丸方形を呈するものと推定される。検出できたのは土壙の一部に限られるため規模を明確にできないが、検出した規模は1.42m×70cmで、検出面からの深さは5cmである。
埋土	1層からなり、粗砂～細砂（暗青灰色）が堆積していた。
出土遺物	甕と高坏が出土しているが、いずれも小片のため図化はできなかった。
甕	口縁部片、体部片、底部片が出土している。
高坏	脚端部が出土している。端部に擬凹線が施されている。

SK21

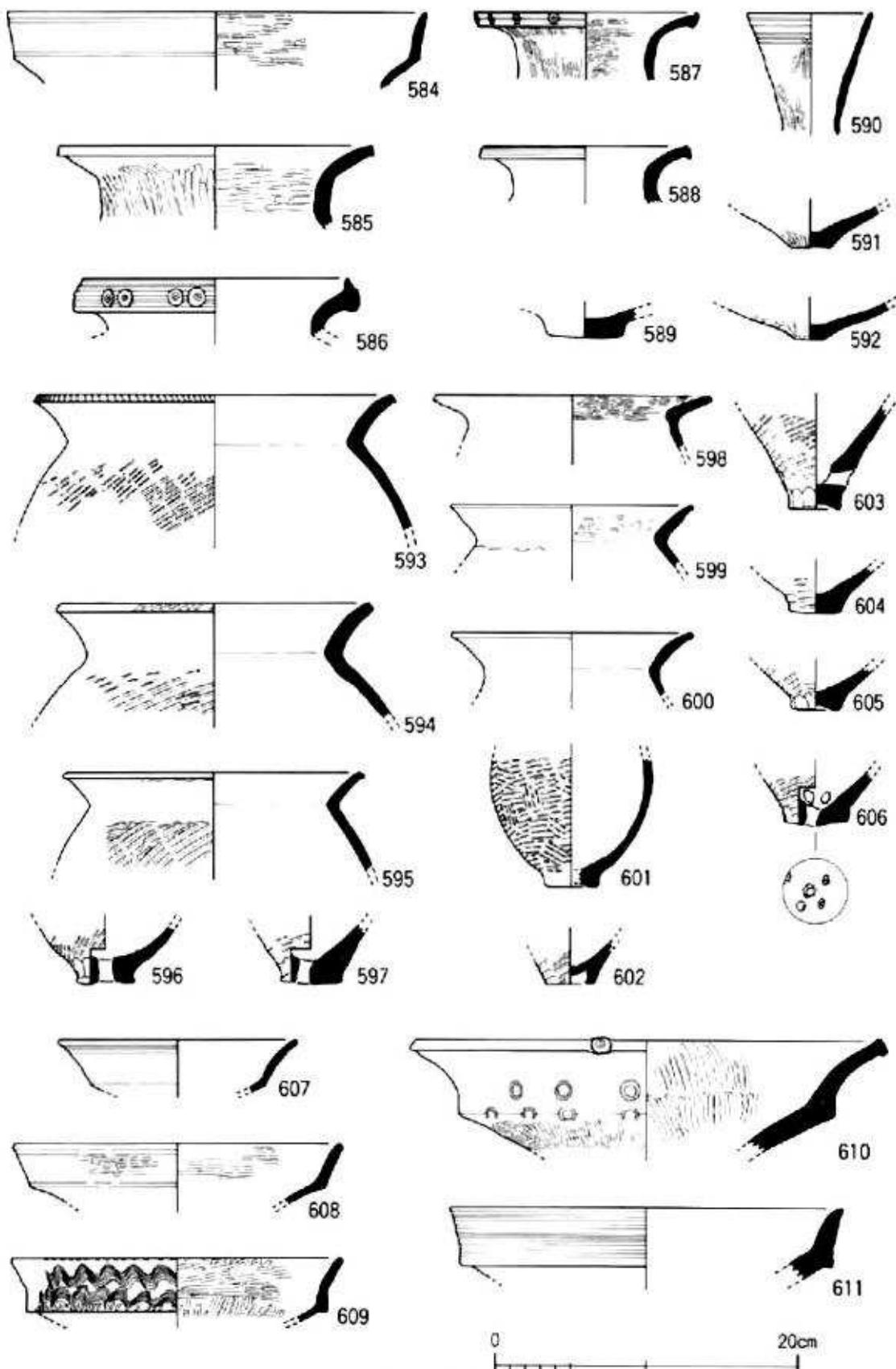
検出状況	調査区の西端部で検出した。SK20の東側、SK22の西側に位置する。北側の一部は旧淡路鉄道の建設に伴い削平されている。他の遺構との切り合い関係は認められない。
形状・規模	平面形は不整形で、北西～南東方向に主軸をとる。主軸方向で3.6m、その直交方向で1.6mを測る。断面皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは13cmである。

埋土	1層からなり、粗砂混じり細砂（暗灰色）が堆積していた。
出土遺物	土器と石器が出土している。特に土器がまとめて出土している。

土器	壺・甕・鉢・高坏・器台が出土している。
甕	二重口縁壺、広口壺、細頸壺、底部片が出土している。
壺	二重口縁壺は、584の1個体である。1次口縁を頭部に対して斜上方に屈曲させ、その端部からほぼ上方に2次口縁をひき延ばしている。2次口縁の上端部と下端部にそれぞれ1条の擬凹線が施されている。
広口壺	585～588の4個体である。586は、頭部から口縁部にかけて短く外反させ、端部を上方につまみ上げるとともに、下方にもわずかに肥厚させている。端面には4条の擬凹線を施し、その上に竹管円形浮文を貼り付けている。竹管円形浮文は、2個を1対とし等間隔に貼り付けている。587は、口縁端部を上下方に拡張し、端面には2条の凹線を施し、その上に竹管円形浮文を貼りつけて



第161図 SK21



第162図 SK21出土土器(1)

いる。588は、口縁端部を下方に拡張し、端面に2条の擬凹線を施している。

細頸壺は590の1個体である。頸部から上が残存する。頸部から口縁部にかけてほぼ直線的に斜上方に立ち上がり、口縁端部を丸く收めている。口縁部に5条の擬凹線が施されている。

底部片は、589のように突出した平底をなすものと、591・592のように丸底化の傾向が著しく、わずかに平底を呈するものとが認められる。

縁 いずれもV様式系焼で、大型・中型・小型の3タイプが出土している。

大型 593の1個体である。

中型 594・595・598～600の5個体である。594は、口縁端部をナデ調整により端面をつくり、端面に刻み目を施している。595は、体部から口縁部の途中まで叩き上げによりつくり出し、その後粘土を練ぎ足して口縁部を仕上げている。この練ぎ足し痕が、口縁部外面に顕著に認められる。

小型 601の1個体である。底部から体部にかけて右上上がり方向の叩きにより成形されているが、体部には部分的に異なる方向の叩きが施されている。

底 いずれも明確な平底をなす。602は底部輪台技法により成形され、最後に底部を充填している様子が明瞭に観察できる。224は、底部から体部への変換部に水平方向に穿孔（径9mm）している。

体 有孔鉢が3個体(596・597・606)出土している。

596と597は、底部中央部を垂直方向に穿孔（径8～9mm）している。606は、底部中央部の穿孔（径7mm）に加え、その周囲に4箇所やや小型の穴（径3mm）が穿たれている。このうち1穴は土器の断面を貫通していない。

高杯 607の1個体である。体部に対して口縁部が比較的深いタイプである。口縁部上端部には2条の擬凹線が施されている。当タイプの高杯としては比較的小型である。

器台 9個体と比較的まとまって出土している。

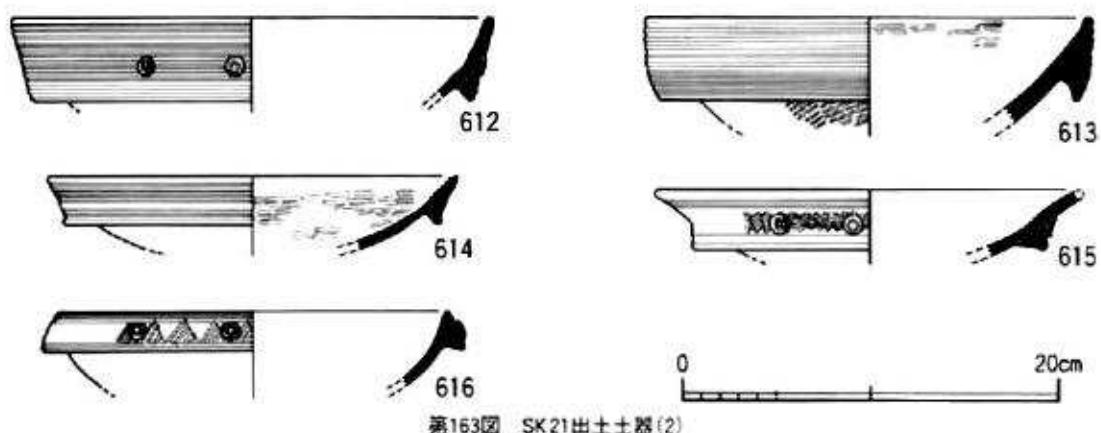
608は、わずかに外反傾向にある体部に対して、口縁部は斜上方に短く立ち上がり、端部を丸く收めている。口縁部上端部と下端部にそれぞれ1条の擬凹線が施されている。

609は、体部と口縁部の変換部外面に粘土を貼り付け、口縁部の外面を拡張している。口縁部外面には、9条と8条の撚拂波状紋をそれぞれ1帯ずつ施文し、その後上端部と下端部に刻み目を施している。さらに、口縁部内上面端部には、波状紋が施文されている。残存状況が良好でないため本数は明確にできないが、少なくとも3条観察できる。

610は、形態的には皿形の高杯と同じである。ただし、大型であること、器壁が厚いこと、加熱していることなどから器台に分類した。口縁端部を斜下方にわずかに拡張し、竹管円形浮紋を貼り付けている。土器の残存がわずかであるため、1個残存するのみである。また、体部から口縁部への変換部およびそのわずか上側の2段に竹管紋が押されている。両者の間隔は異なる。

611は、斜上方にのびる体部に対して、口縁部を斜上方にわずかに立ち上がらせ、端部を外方につまみ出すように薄く仕上げる。口縁部外面には7条の擬凹線を施している。

612は、体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、体部から口縁部への変換部外



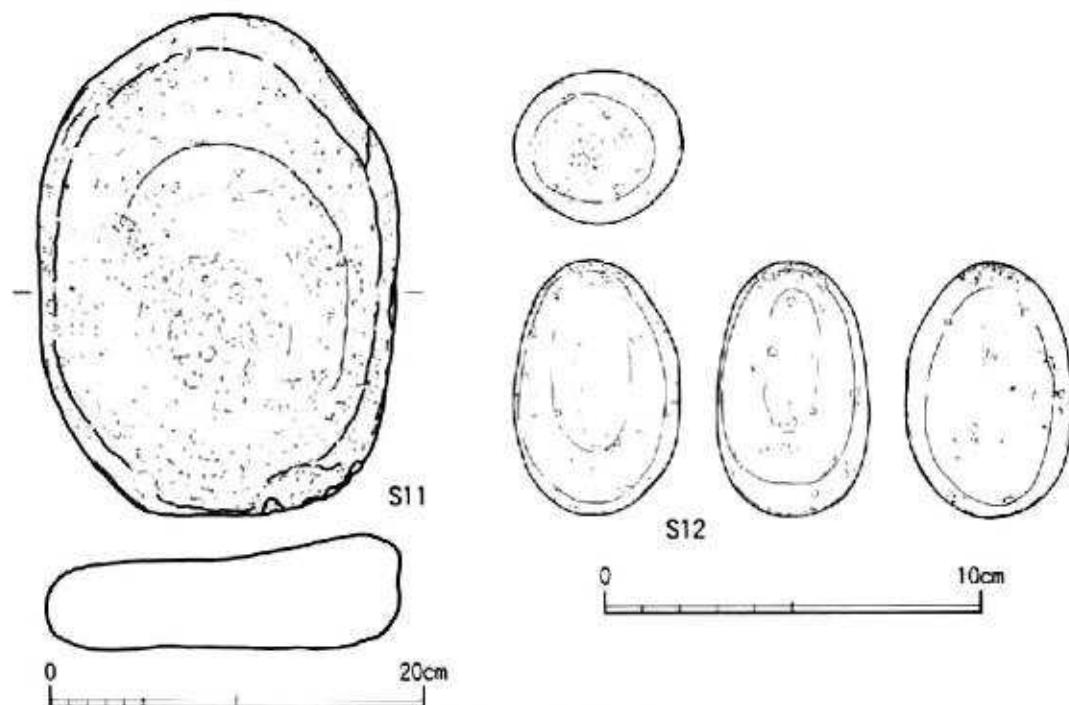
第163図 SK21出土土器(2)

面に断面三角形の粘土を貼り付け、口縁部を拡張している。口縁部外面には11条の擬凹線を施し、その上に竹管円形浮紋を貼り付けている。

613・614も、口縁部のつくりおよびその拡張法は612と同じである。口縁部外面には613は11条の、614は6条の擬凹線が施されている。

616は、端面に上端部に2条の、下端部に1条の擬凹線を施し、その後ヘラ描きにより鋸歯紋を施文しており、一部鋸歯紋が擬凹線を切っている。さらに、鋸歯紋と鋸歯紋の中間に竹管円形浮紋を貼り付けている。

615は、体部から口縁への変換部外面に断面三角形の粘土を貼り付け、口縁部の外面を拡張している。このため、口縁部外面はく字形に屈曲し、その屈曲部を中心に7条の描描波状紋を施文し、その上に竹管円形浮紋を貼り付けている。また、口縁部下端部に1条の凹線が、上端部に2条の擬凹線が施されている。ただし、上端部については、口縁端部を欠くため、その本数はさらに増えることも考えられる。



第164図 SK21出土石器

- 石器** 敷石と石皿が出土している。
- 石皿** S11の1個体である。平面形は偏平な稍円状をなす。表面は中央部に敲打による窪みが集中して認められる。その周辺は磨かれたように滑らかである。そして中央に向かって浅いU字形をなす。これは、木の実などを碎く際あるいはすり潰す際に、繰り返し使用した結果と考えられる。長さ26.6cm、幅19.3cm、厚さ6.0cm、重さ4520gを測る。
- 敲石** S12の1個体である。長楕円状の小型の礫を使用している。上端に敲打痕が認められるあまり顕著ではない。全面が丁寧に磨かれている。長さ6.7cm、幅4.4cm、厚さ6.5cm、重さ1700gを測る。

第72表 SK21出土土器破片表(1)

番号	器種	口径 直径(cm)	縦 横 厚 (cm)	色 調	残存率	備考
581	甌	口径: 37.6 腰径: 33.0 腹径: 33.0	外周: 無部・口縁部・底玉ガラ 内面: 無部・口縁部・底玉ガラ	外周: 棕 内面: 棕	口縁部1/4	
585	甌	口径: 26.6 腰径: 19.1 腹径: 19.1	外曲: 頂部ハコヒカキ・口縁部若干調整 内面: 無部・口縁部ハコヒカキ	外曲: 棕 内面: 棕黄褐	口縁部	
586	甌	口径: 17.5 腰径: 14.4 腹径: 14.2	外曲: ナイ調整 内面: ナイ調整	外曲: ハニイ黄褐 内面: ハニイ黄褐	口縁部1/4	
587	甌	口径: 14.7 腰径: 9.0 腹径: 14.2	外曲: 無部・口縁部若干ガラ・口縁部ナイ調整 内面: 無部・口縁部ハコヒカキ・口縁部ナイ調整	外曲: 棕 内面: 棕	口縁部1/2	
588	甌	口径: 14.3 腰径: 9.3 腹径: 9.3	外曲: 無ナイ調整 内面: ハニイガラ	外曲: 棕 内面: 棕	口縁部1/4	
589	甌	口径: 13.1 腰径: 8.5 腹径: 8.5	外曲: ナイ調整 内面: ナイ調整	外曲: 大黄褐 内面: 大黄褐	底部完存	
590	甌	口径: 12.1 腰径: 8.8 腹径: 8.8	外曲: 頂部ハコヒカキ・口縁部ナイ調整 内面: 無部・口縁部ナイ調整	外曲: 棕 内面: ハニイ棕	口縁部1/3	
591	甌	口径: 11.6 腰径: 7.5 腹径:	外曲: ハニイガラ 内面: ナイ調整	外曲: 棕黃褐 内面: 棕黃褐	底部完存	
592	甌	口径: 11.1 腰径: 7.3 腹径:	外曲: ハニイガラ 内面: ナイ調整	外曲: ハニイ黄褐 内面: 棕	底部完存	
593	甌	口径: 11.4 腰径: 10.6 腹径: 10.6	外曲: 体部叩き成形・腰部・口縁部ナイ調整 内面: 体部・口縁部諸部の為不明	外曲: ハニイ黄褐 内面: ハニイ黄褐	口縁部1/2	
594	甌	口径: 10.4 腰径: 17.0 腹径:	外曲: 体部・腰部叩き成形後・腰部ナイ調整・口縁部ナイ調整 内面: 無部・口縁部ナイ調整	外曲: 棕 内面: ハニイ黄褐	口縁部1/4	
595	甌	口径: 10.3 腰径: 16.6 腹径:	外曲: 体部叩き成形・腰部・口縁部ナイ調整 内面: 体部・口縁部ナイ調整	外曲: 棕褐 内面: 棕	口縁部1/3	
596	甌	口径: 10.9 腰径: 15.5 腹径:	外曲: 体部叩き成形後・底玉ナシガラ 内面: ナイ調整	外曲: 不黃褐 内面: 棕	底部完存	
597	甌	口径: 4.1 腰径: 3.8 腹径:	外曲: 体部叩き成形 内面: 棕玉ナイ調整	外曲: 大黄褐 内面: 棕	底部完存	
598	甌	口径: 18.0 腰径: 13.9 腹径:	外曲: 体部ナイ調整・口縁部ナイ調整 内面: 体部ナイ調整・口縁部腰玉ナイ調整	外曲: ハニイ黄褐 内面: 棕	口縁部1/4	
599	甌	口径: 15.9 腰径: 12.6 腹径:	外曲: 体部ナイ調整・口縁部腰玉ナイ調整 内面: 体部ナイ調整・口縁部ナイ調整	外曲: 棕 内面: 棕	腰玉1/4	
600	甌	口径: 15.7 腰径: 11.6 腹径:	外曲: 腹底ナシ不明 内面: 腹底ナシ不明	外曲: 棕 内面: 棕	腰玉1/4	

第73表 SK21出土土器観察表(2)

番号	基種	計量(cm)	調査種別	色調	既存率	備考
601	甕	口径:17.5 周長:50.0 底径:10.7	外面:底盤、底部吸水塗装後、底部上部、外壁 内面:下部調整	外面:褐色 内面:茶褐色	底部1/2 底部1/3	
602	甕	口径:17.5 周長:50.0 底径:10.7	外面:底盤、底部吸水塗装 内面:底上部調整	外面:灰褐色 内面:褐	底部完存	
603	甕	口径:17.5 周長:50.0 底径:10.7	外面:底盤、底部吸水塗装後、底盤上部オホム 内面:底上部調整	外面:褐色 内面:灰褐色	底部完存	
604	甕	口径:17.5 周長:50.0 底径:10.7	外面:底盤、底部吸水塗装 内面:底上部調整	外面:褐色 内面:褐	底部完存	
605	甕	口径:17.5 周長:50.0 底径:10.7	外面:底盤、底部吸水塗装後、底盤上部オホム 内面:底上部調整	外面:茶褐色 内面:灰褐色	底部完存	
606	甕	口径:17.5 周長:50.0 底径:10.7	外面:底盤、底部吸水塗装 内面:底上部調整	外面:茶褐色 内面:灰褐色	底部完存	
607	甕	口径:17.5 周長:50.0 底径:10.7	外面:底盤、底部吸水塗装 内面:底盤の為不明	外面:褐色 内面:褐	11種部1/4	
608	高台	口径:17.5 周長:50.0 底径:10.7	外面:底部下部調整、上部吸水塗装 内面:底部、上部吸水塗装	外面:茶褐色 内面:褐	11種部1/4	
609	器台	口径:17.5 周長:50.0 底径:10.7	外面:底部下部調整、上部吸水塗装後、底盤設置及び 内面:底部、上部吸水塗装	外面:茶褐色 内面:茶褐色	11種部1/4	
610	器台	口径:17.5 周長:50.0 底径:10.7	外面:底部下部調整 内面:底部、上部吸水塗装	外面:茶褐色 内面:灰褐色	11種部1/4	
611	器台	口径:17.5 周長:50.0 底径:10.7	外面:底部下部調整 内面:底部、上部吸水塗装	外面:茶褐色 内面:茶褐色	11種部1/4	
612	器台	口径:17.5 周長:50.0 底径:10.7	外面:底部下部調整、上部吸水塗装 内面:底部、上部吸水塗装	外面:茶褐色 内面:褐	11種部1/4	
613	器台	口径:17.5 周長:50.0 底径:10.7	外面:底部、上部吸水塗装 内面:底部、上部吸水塗装	外面:茶褐色 内面:茶褐色	11種部1/4	
614	器台	口径:17.5 周長:50.0 底径:10.7	外面:底部、上部吸水塗装 内面:底部、上部吸水塗装	外面:茶褐色 内面:茶褐色	11種部1/4	
615	器台	口径:17.5 周長:50.0 底径:10.7	外面:底部、上部吸水塗装 内面:底部、上部吸水塗装	外面:茶褐色 内面:茶褐色	11種部1/4	
616	器台	口径:17.5 周長:50.0 底径:10.7	外面:底部、上部吸水塗装 内面:底部、上部吸水塗装	外面:茶褐色 内面:茶褐色	11種部1/4	

SK22

検出状況

調査区の西端で検出した。SK21の東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模

平面形は長方形を呈する。北西—南東方向に主軸をとる。主軸方向で1.34m、その直交方向で45cmを測る。断面形は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは6cmである。

埋土

1層からなり、シルト質中砂（灰オリーブ色）が堆積していた。

出土遺物

壺と甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

SK23

検出状況	調査区西側で検出した。SK24の西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められないが、南側は確認調査により削平されている。
形状・規模	南側を削平しているため、全体の平面形は明らかにできないが、楕円形を呈するものと推定される。北西-南東方向に主軸をとり、主軸方向で57cm、その直交方向で50cm残存する。断面形は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは8cmである。
埋土	1層からなり、中砂（暗青灰色）が堆積していた。
出土遺物	壺の体部片1点が出土している。

SK24

検出状況	調査区西側で検出した。SK23の東側、SK25の南側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められないが、南側は確認調査により削平されている。
形状・規模	南側を削平しているため、全体の平面形は明らかにできないが、長楕円形を呈するものと推定される。北東-南西方向に主軸をとり、主軸方向で3.17m、その直交方向で1.27m残存する。断面形は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは7cmである。
埋土	1層からなり、シルト質細砂（褐色）が堆積していた。
出土遺物	壺と甕が出土しているが、いずれも小片のため同化できなかった。
壺	口縁部片が出土している。口縁端部を拡張し、端面に櫛描波状紋を施文している。
甕	体部の小片が出土している。外面に叩き目が観察される。

SK25

検出状況	調査区西側で検出した。SK24の北側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。
形状・規模	平面形は楕円形を呈する。ほぼ東西方向に主軸をとる。主軸方向で1.42m、その直交方向で67cmを測る。断面形は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは7cmである。
埋土	1層からなり、中砂（暗青灰色）が堆積していた。
出土遺物	壺と甕が出土している。いずれも小片のため同化できなかった。
壺	体部の小片が出土している。
甕	口縁部片と体部片が出土している。外面に叩き目が観察される。

SK26

検出状況	調査区の中央付近南側に位置している。南側は調査区外へ続き、西側は削平を受けている。検出できたのは全体の約1/4とみられる。
形状・規模	平面は円形を呈する。検出長1.55mを測る。断面は逆台形を呈する。検出面から最深部までの深さは10cmである。
埋土	1層からなり、自然堆積と考えられる暗青灰色シルト混細砂が堆積していた。
出土遺物	壺と甕が出土している。いずれも小片のため同化できなかった。

SK27

検出状況	調査区の中央、やや東寄りで検出された。南側は調査区の限界のため確認できなかった。他の遺構との切り合いは認められない。
形状・規模	平面形は検出できた範囲では梢円形を呈しており、長軸90cm、短軸80cmを測る。断面形はゆるいU字形で、深さは検出面から16cmを測る。底部の規模は70cm×45cmを測る。
埋土	褐灰色粗砂混じり極細砂～シルト質極細砂の1層からなる。
出土遺物	土器の小片が1点出土しているが、器種を特定できない。弥生時代後期の土器片と考えられる。

SK28

検出状況	調査区の中央付近南側に位置している。SD80と切り合い関係にあり、SD80に切られている。このため、当土壙の西側約1/2を欠く。
形状・規模	平面形は梢円形を呈する。長軸方向の検出長65cm、短軸63cmを測る。検出面から最深部までの深さは33cmである。
出土遺物	手培形土器の一部ではないかと考えられる土器片が1点出土している。

SK29

検出状況	調査区のはば中央で検出された。SD79に近接している。他の遺構との切り合いは認められない。
形状・規模	平面形は隅丸の方形を呈し、長軸94cm、短軸58cmを測る。断面形は底が平らで皿状を呈しており、深さは検出面から7cmを測る。底部の規模は80cm×45cmを測る。
埋土	灰色粗砂混じり細砂の1層からなる。
出土遺物	土器の小片と軽石が出土している。土器の小片については器種を特定できない。

(4) 溝

SD77

検出状況

調査区の南西隅で検出した。一部を検出したにとどまり、西側および南側は調査区外までのびている。SK20・SK21の南側に位置する。当遺構については溝として報告するが、土壙になる可能性も否定できない。

形状・規模

検出した長さは4.35mである。断面形はやや深い皿形をなし、検出面における幅は最大で1.32m残存する。検出面からの深さは18cmである。

埋土

1層からなり、粗砂～細礫を含むシルト質中・細砂（灰色）が堆積していた。人为的に埋められている。

出土遺物

壺・甕・高環・器台の各器種が出土している。

壺

広口壺・体部・底部片が各1個体ずつ出土している。

広口壺

頸部から口縁部にかけて大きく外反し、端部を丸く收めている。

体部

体部上半部のみ残存する。小型の壺で、ミニチュアに近い。

甕

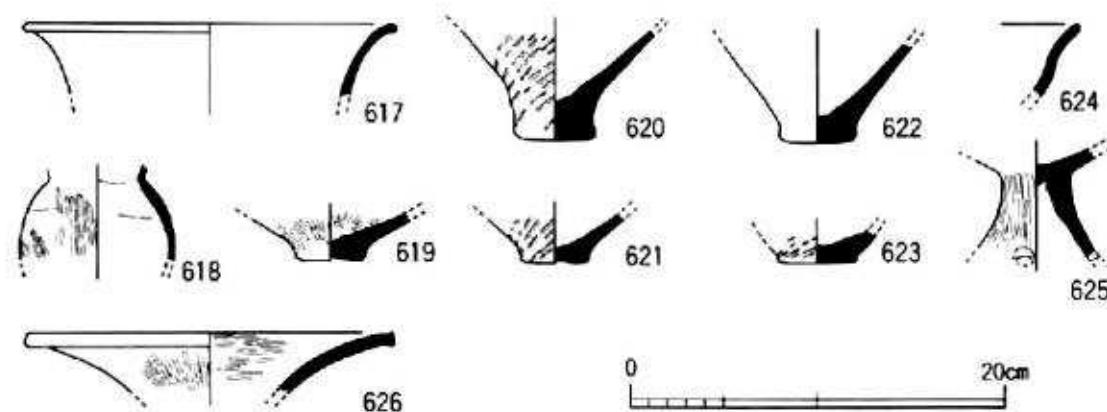
口縁部片・体部片・底部片が出土しているが、図化できたのは底部片のみである。いずれもV様式系甕である。

高環

環部と脚部が出土している。环部は皿形を呈するタイプで、体部から口縁部にかけての小片が出土している。内湾する体部に対して、口縁部を短く外反させている。

器台

体部から口縁部にかけて大きく外反するタイプである。口縁端部をわずかに上方につまみあげ、外端面を有する。



第165図 SD77出土土器

第74表 SD77出土土器観察表(1)

番号	器種	法 量(cm)	調 査 方 法	色 調	残 存 状	備 考
617	壺	口径: 19.1 底径: 腹径:	外面: 塗成の跡不明 内面: 塗成の跡不明	外面: にぶい褐 内面: にぶい棕	口縁部1/4	
618	甕	口径: 15.3 底径: 腹径: 18.4	外面: 体部ハラミサキ、底部ナマ調整。 内面: 体部・底部ナマ調整。	外面: 砂青褐 内面: 砂青褐	体部1/4	
619	壺	口径: 13.5 底径: 腹径:	外面: ハラミサキ 内面: ハラミサキ	外面: にぶい褐 内面: 黄褐色	底部完存	
620	甕	口径: 14.4 底径: 腹径:	外面: 底部・体部叩き成形後、底部ナマ調整。 内面: ナマ調整	外面: にぶい褐 内面: にぶい棕	底部完存	

第75表 SD77出土土器觀察表(2)

番号	器種	底 基(cm)	調 査 状 況	色 調	残存率	備考
621	壺	口径: 縦径: 高さ: 3.7 3.7 2.7	外側: 逆筋 - 体部押き成形。 内面: ナガ調整。	外面: 棕 内面: 棕	底部完全	
622	壺	口径: 縦径: 高さ: 4.2 3.7 2.7	外側: ハリナガ調整。 内面: ナガ調整。	外面: に赤い櫻 内面: に赤い櫻	底部完全	
623	壺	口径: 縦径: 高さ: 4.3 3.7 2.8	外側: 逆筋 - 体部押き成形。 内面: ナガ調整。	外面: 棕 内面: 棕	底部完全	
624	高杯	口径: 縦径: 高さ: 3.9 3.7 2.7	外側: ナガ調整後ヘタミガキ。 内面: ナガ調整後ヘタミガキ。	外面: 黒褐 内面: 棕灰	口縁部分手付	
625	高杯	口径: 縦径: 高さ: 3.9 3.7 2.7	外側: 体部ヘタミガキ、体底ヘタミガキ。 内面: 体部ナガ調整、体底ヘタミガキ	外面: に赤い櫻 内面: 棕	底部完全	
626	縁片	口径: 19.5 縦径: 高さ: 3.3 2.7	外側: 体部ヘタミガキ、山線部ナガナガ調整。 内面: 体部ヘタミガキ、2段階ヘタミガキ。	外面: 棕 内面: 棕黄	17縁部手付	

SD78

- 検出状況** 調査区の西側で検出した。SK21・SK22の北東に位置する。北東-南西方向にのびる溝で、両端とも調査区内で収束している。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** 検出した長さは3.62mである。断面形は逆台形を呈し、検出面における幅は33cm~52cmである。検出面からの深さは4cmである。底部の標高は、北東側で9.7m、南西側で9.6mと、わずかに南西側に傾斜している。
- 埋土** 1層からなり、細砂~中砂(灰色)が堆積していた。
- 出土遺物** 壺の口縁部片と体部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。V様式系壺の一部である。

SD79

- 検出状況** 調査区の中央で検出された。北側は擾乱のため不明である。東側には同じ方向を向いたSD80があり、さらに東側にはSD81・SD82・SD83などの幅広い溝がある。溝以外にも柱穴や土塙が散在している。本溝はSK29に切られている。
- 形状・規模** 北側から南側に向いた溝である。西側に緩く彎曲しているが、ほぼ直線的である。断面の形状はU字形を呈している。規模は、検出された長さ4.73m、幅75cm~47cm、平均幅61cmを測り、深さは15cmである。
- 埋土** 1層からなり、褐色粗砂~細砂が堆積していた。
- 出土遺物** 全く出土していない。

SD80

- 検出状況** 調査区の中央で検出された。北側は擾乱のため不明である。西側には同じ方向を向いたSD79があり、東側には幅広いSD81・SD82・SD83があり、これらも同じ方向を向いている。溝以外にも土塙や柱穴が散在している。本溝はSK28を切っている。
- 形状・規模** 北側から南側に向いた。若干蛇行するもののほぼ直線的な溝である。断面の形状はU字

形を呈している。規模は、検出された長さ4.72m、幅1.25m~74cm、平均幅1mを測り、深さは30cmである。

埋土 2層からなり、下層がオリーブ灰色細砂～シルト質極細砂、上層が灰色小礫混じり粗砂であり、下層の方が砂粒が小さい。

出土遺物 壺の底部片が出土しているが、小片のため同化できなかった。形態的には629に類似する。

SD81

検出状況 調査区の中央やや東寄りで検出された。東側にSD82・SD83があり、西側にはSD79・SD80がある。いずれも同じ方向を向いている。柱穴に切られている。

形状・規模 北側から南側に向いた溝である。断面形は平底を呈している。検出された長さが5.20m、幅が5.70m~4.60m、平均幅が5mで、深さは22cmを測り、非常に幅広で浅い。

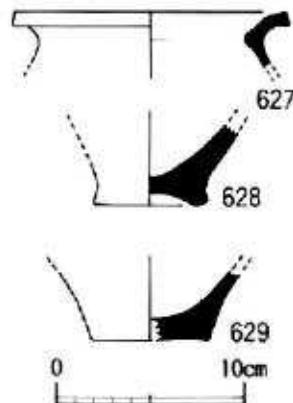
埋土 3層からなる。層位的に最も上層に位置するのが浅黄色中礫～粗砂で、東端で溝状に堆積していた。中層は褐灰色極細砂混じり中砂、下層は灰色粗砂～極細砂で、ほぼ水平に堆積している。

出土遺物 壺・壺・高坏が出土している。

壺 広口壺の口縁部片が出土しているが、小片のため同化できなかった。

壺 口縁部と底部片が出土している。口縁部片(627)は、く字形に屈曲するものであるが、頭部の器壁が厚く、端部も断面方形に仕上げられている。底部は、平底ではあるが突出していない。

高坏 盆形を呈する坏部の小片が出土しているが、小片のため同化できなかった。



第166図 SD81出土土器

第76表 SD81出土土器観察表

番号	器種	法 量(cm)	調 整 + 技 法	色 調	残存度	備 考
627	壺	口径: 14.4 底径: 12.0 板厚: 1.0	外側: 極薄～中薄 内側: 中薄～中厚+オイ調整 口縁部横寸: オイ調整	外側: 黒 内側: 灰	口縁部: 1/4	
628	壺	口径: 6.1 底径: 4.9 板厚: 1.0	外側: オイ調整 内側: オイ調整	外側: 灰 内側: 灰	底部: 完存	
629	壺	口径: 6.9 底径: 5.5 板厚: 1.0	外側: ハウスガラス 内側: 貼合のみ不明	外側: 灰 内側: 灰	底部: 1/3	

SD82

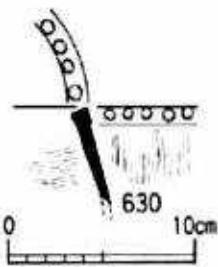
検出状況 調査区の東側で検出された。西側にSD81が、東側にSD83があり、いずれも幅広い溝である。柱穴に切られている。

形状・規模 北側から南側に向いた溝である。断面形は平底を呈している。検出された長さが2.35m、幅が4.13m~3.95m、平均幅が4.04mで、深さは12cmを測り、非常に幅広で浅い。

埋土 4層からなる。最下層の1層目は、溝の東端底を削って淡黄色粗砂～細砂が堆積している。2層目からは西側から順に堆積しており、下から順に灰色小礫～中礫混じり細砂、にぶい黄色細砂～シルト質極細砂、灰色小礫混じり粗砂～極細砂が堆積している。2層目以外はほぼ水平に堆積している。

出土遺物 壺が出土している。無頸壺と体部片が出土しているが、図化できたのは630の無頸壺1個体である。

630は口縁部がわずかに残存するのみで、壺部を断面方形に肥厚させている。外端面と上端面には円形浮文が貼り付けられている。



第167図 SD82出土土器

第77表 SD82出土土器観察表

番号	器種	法 量(cm)	調 査 方 法	色 調	残 存 率	備 考
630	壺	口径： 底径： 高さ：	外端面：ヘラこぎき、口縁端部：アコモ、 内端面：ヘラこぎき。	赤褐色 内面：褐	口縁部わずか	

SD83

検出状況 調査区の東側で検出された。東側にはSD82があるが、本溝と同時に存在していたかどうかは不明である。切り合ひ関係は認められない。

形状・規模 北側から南側に向いた溝である。断面の形状は平底を呈している。規模は、検出された長さ5.65m、幅8.27m～6.20m、平均幅7.23mを測り、深さは12cmである。

埋土 1層からなり、赤灰色粗砂～細砂が堆積しており、粒子は東側が細かい。

出土遺物 壺が出土しているが、小片のため図化できなかった。広口壺の口縁部と体部片が出土している。

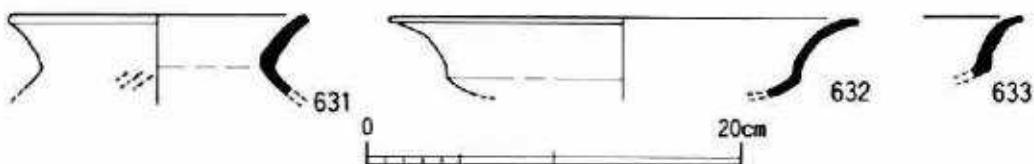
SD84

検出状況 調査区の東端で検出された。周辺には遺構は存在せず、西側が比較的密に遺構が集中しているのに対し、対象的である。SD81～SD83の方向とは異なり、ほぼ直交している。切り合ひ関係は認められない。

形状・規模 西側から東側に向いた溝で、東端で南東方向に屈曲する。断面はU字形を呈している。規模は検出された長さが8.15m、幅が74cm～35cm、平均幅が55cmで、深さは4cmと浅い。

埋土 1層からなり、灰色細砂混じりシルト質極細砂が堆積していた。

出土遺物 壺と高杯が出土している。



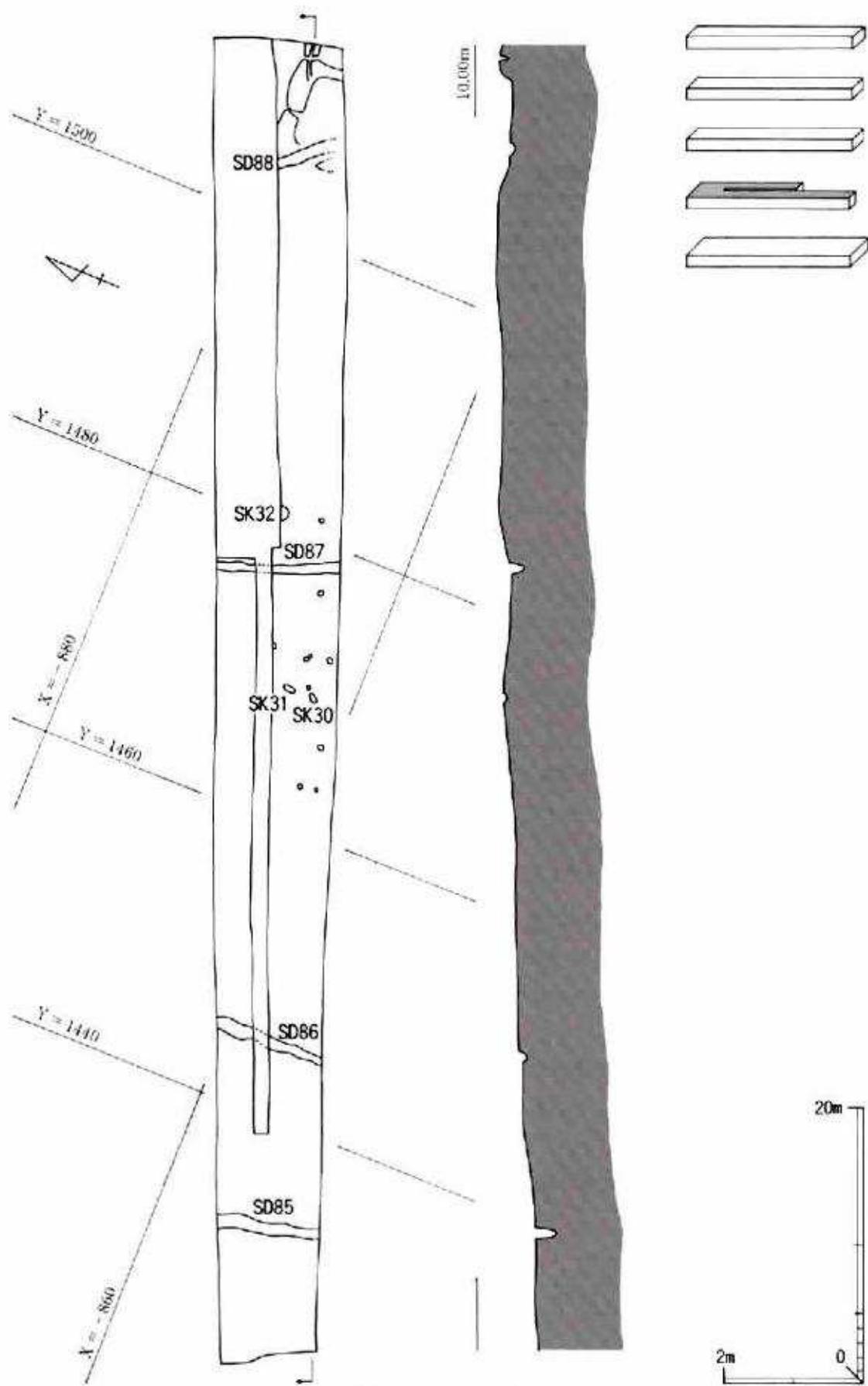
第168図 SD84出土土器

壺 口縁部と体部片が出土しているが、図化できたのは631の1個体である。口縁部がく字形に屈曲するV様式系壺である。

高坏 2個体(632・633)出土している。いずれも、皿形を呈する坏部である。

第78表 SD84出土土器観察表

番号	器種	寸 厘(cm)	調 整 方 法	色 調	残存率	備 考
631	壺	口径:13.3 底径:12.5 高さ:13.2	外面:体部叩き成形後ナマ調整、口縁部様子ナマ調整 内面:体部ナマ調整、口縁部様子ナマ調整	外面:棕 内面:にじい棕	口縁部1/4	
633	高坏	口径:13.5 脚径: 高さ:	外面:崩滅の跡不明 内面:崩滅の跡不明	外面:明黄褐 内面:棕	口縁部1/4	
633	高坏	口径: 脚径: 高さ:	外面:体部ナマ調整、口縁部様子ナマ調整 内面:体部・口縁部ハラ・ガキ?	外面:棕 内面:棕	口縁部わずか	



第169図 4・5区第4面

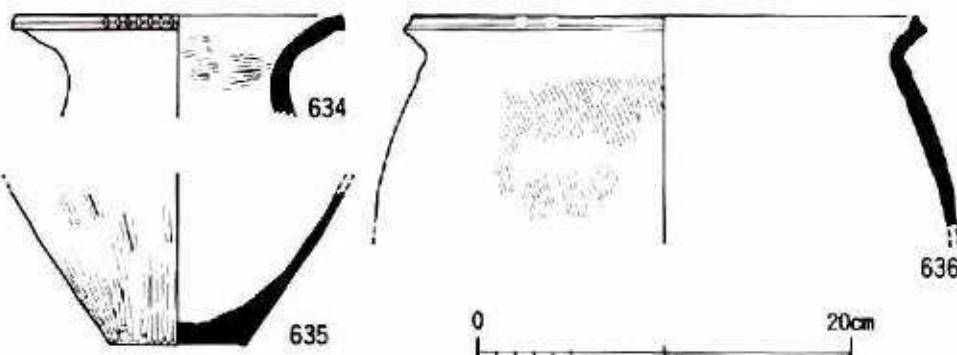
5. 第4面の遺構と遺物

(1) 第4面に伴う遺物

出土遺物 壺と甕が出土している。

壺 広口壺と底部片が出上している。広口壺は、634の1個体である。端面には1条の沈線と刻み目が施されている。

甕 636の大型甕1個体である。口縁部をわずかに拡張し、端面に1条の凹線を施す。



第170図 4・5区第4面出土土器

第79表 4・5区第4面出土土器観察表

番号	容積	法 量(cm)	調 整 ・特 徴	内 面	残存率	性 質
634	壺	口径: 17.0 脚径: 11.8 高さ: 5.1 厚径:	外面: 頂部へくろき。 口縁部裏面に調整。	外面: 丸筒型 内面: 横	口縁部1/4	
635	甕	口径: 17.0 脚径: 18.2 高さ:	外面: ハラ削り調整後ハラカキ。 内面: 底面・外底面に調整。	外面: にじい筒型 内面: 深	底部1/2	
636	甕	口径: 26.8 脚径: 25.6 高さ: 11.4 厚径:	外面: 頂部へくろき。 内面: 体形十ガ調整、底面・口縁部へくろき調整後複数ヒモ調整。	外面: 横 内面: 横	口縁部1/4	

(2) 土塙

SK30

検出状況 調査区のはば中央で検出された。他の遺構との切り合いは認められない。

形状・規模 平面形は楕円形を呈し、長軸73cm、短軸37cmを測る。断面形はU字形を呈しており、深さは検出面から5cmを測る。底部の規模は44cm×23cmを測る。

埋土 青黒色粗砂混じり極細砂質シルトの1層からなる。

出土遺物 壺と甕が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

壺 広口壺の口縁部片が出土している。口縁部には竹管円形浮文が貼り付けられている。

SK31

検出状況 調査区のはば中央で検出された。他の遺構との切り合いは認められない。

形状・規模 平面形は長細い楕円形を呈し、長軸98cm、短軸33cmを測る。断面形は緩い船底状を呈しており、深さは検出面から4cmを測る。底部の規模は190cm×23cmを測る。

埋土 暗青灰色粗砂混じり極細砂質シルトの1層からなる。

出土遺物 全く出土していない。

SK 32

検出状況	調査区中央のやや東寄りで検出された。擾乱により全体の形状は明らかでない。他の遺構との切り合いは認められない。
形状・規模	検出された部分から平面形は円形を呈していると思われる。現存で長軸1.09m、短軸66cmを測る。断面形は底が平らな皿状を呈しており、深さは検出面から8cmを測る。
埋土	黒褐色粗砂混じり極細砂の1層からなる。
出土遺物	甕の小片が出土しているが、図化できなかった。弥生中期の甕と考えられる。

(3) 溝**SD 85**

検出状況	調査区の西半部で検出された。他の遺構との切り合い関係は認められない。
形状・規模	南北方向のほぼ直線的な溝である。両端とも調査区外へ延びている。底部の標高は北端で9.03m、南端で8.83mを測り、北から南へ流れていたものと考える。断面形はU字形を呈する。検出した長さは7.10m、幅は92cm~70cmで、検出面からの深さは37cmを測る。
埋土	2層からなる。溝の大半をオリーブ灰色粗砂混じり細砂が自然堆積した後、上層の明青灰色細砂が堆積している。
出土遺物	土器の小片が出土しているが、器種の特定はできない。

SD 86

検出状況	調査区の西半部で検出された。他の遺構との切り合い関係は確認できない。
形状・規模	南北方向の直線的な溝である。両端とも調査区外へ続いている。底部の標高は北端で9.37m、南端で9.20mを測り、北から南へ流れていたと考えられる。断面はU字形を呈し、検出した長さ7.10m、幅1.10m~43cmを測り、検出面からの深さは12cmである。
埋土	1層からなり、自然堆積と考えられる細砂~中砂が堆積している。
出土遺物	甕が出土している。口縁部片と体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。体部外面には彫刻直線紋が施されている。

SD 87

検出状況	調査区のほぼ中央で検出された。他の遺構との切り合いは認められない。
形状・規模	北側から南側にほぼ直線的に延びる溝である。断面の形状はU字形を呈している。規模は、検出された長さ7.92m、幅75cm~45cm、平均幅60cmを測り、深さは22cmである。
埋土	1層からなり、黄灰色粗砂~細砂が堆積していた。
出土遺物	甕と甕が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。甕は、口縁部片が出土しており、形態から弥生時代中期の甕と考えられる。

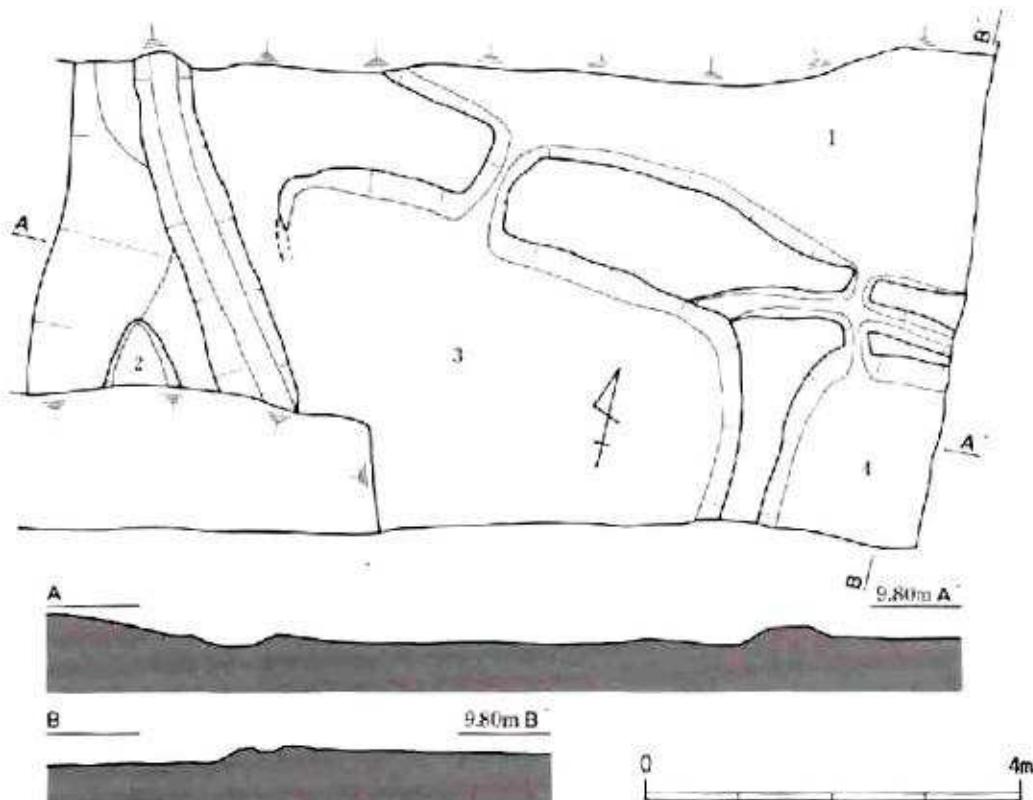
SD 88

検出状況	調査区の東端で検出された。南北の両端は擾乱のため削平されている。東側には水田に作られた畦畔が検出されているが、方向は異なっている。
------	---

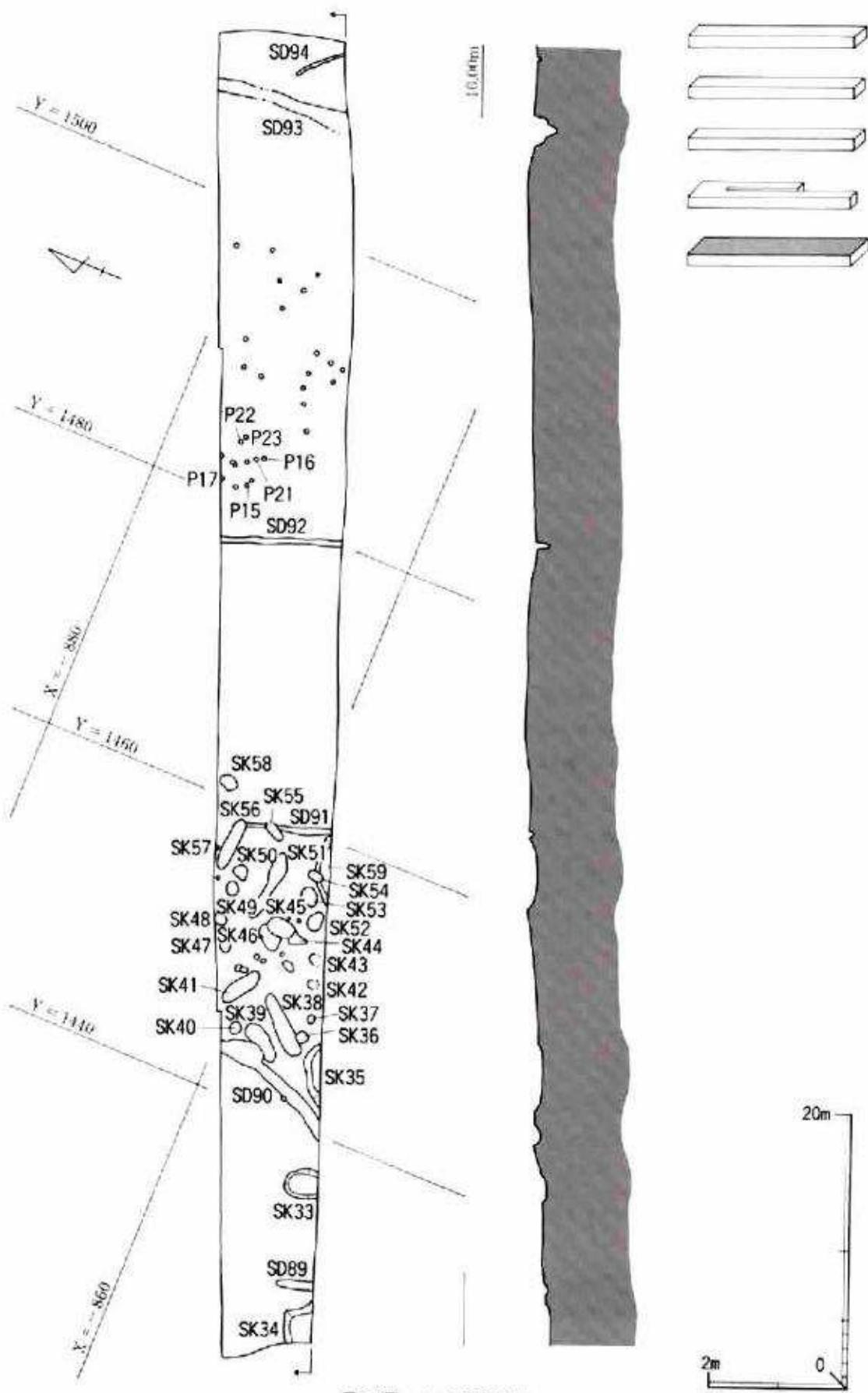
形状・規模	北西側から南東側にはほぼ直線的に延びた溝である。断面の形狀は平底である。規模は、検出された長さ3.85m、幅80cm~62cm、平均幅71cmを測り、深さは19cmである。
埋土	1層からなり、浅黄色極細砂が堆積していた。
出土遺物	全く出土していない。

(4) 水田跡

検出状況	調査区の東端、微高地の端部で検出した。北側は削平により、南・東側は調査区の制約により全容を明らかにしえないが、6区第6面検出の水田に統くものと考える。水田跡は全面にわたり浅黄色極細砂に覆われていた。
畦畔	SD88の両側に取りつく畦畔、この畦畔から東に延びる大畦畔、調査区東端付近で大畦畔から南へ分岐する畦畔がある。このうち、SD88東側の畦畔は、大畦畔から南への屈曲は検出できたが、その南側については不明確で検出し得なかった。
大畦畔	畦畔により区画される水田跡は少なくとも4箇確認できる。ただし全容を明らかにできたものではなく、各区画の平面形、面積は不明である。これらの水田は北から南へ低くなる傾斜地に立地し、大畦畔北側の水田面と南側の水田面との比高差は15cm~20cmを測る。
	基底部幅が最大1.28m、南側の水田からの高さ最大25cmを測る。また、大畦畔は2箇所で南北に途切れ、区画1と3、1と4を結ぶ箇所がある。この箇所は水口と判断できる。このうち、区画1と4を結ぶ水口は畦畔の中央付近で深さ3cm程度の溝と交差している。溝の深さは交差点付近をピークに東西に低くなり、西側は区画3に続いている。したがってこの溝は東西の水田へ分水する機能を有してていたと考える。



第171図 第4面水田跡



第172図 4・5区第5面

6. 第5面の遺構と遺物

(1) 第5面出土土器

出土遺物

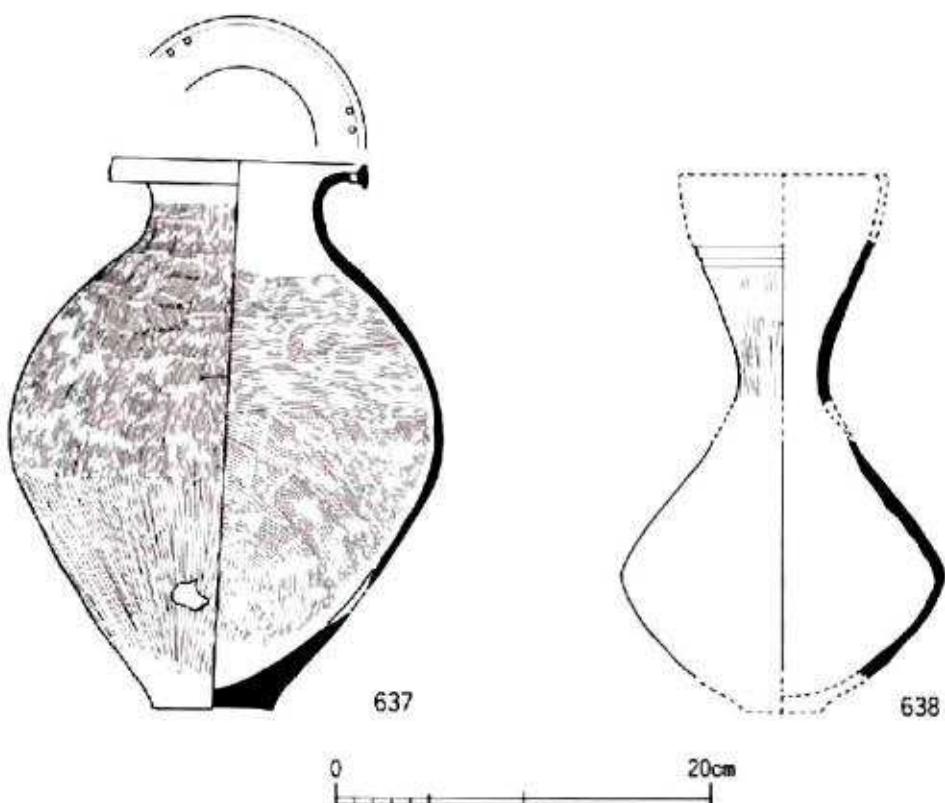
広口壺と細頸壺が出土している。

広口壺

637の1個体である。ほぼ完存する土器である。頸部から口縁部にかけて大きく外反し、端部を上下に拡張させている。口縁部には2穴1対とした径3mmの縦穴が2箇所に観察できる。また、体部下半底部付近に、焼成後の空孔(1.5cm×2.0cm)が認められる。

細頸壺

638の1個体のみで、体部と頸部のみ残存する。体部は算盤形をなす。頸部の残存する上端部には2条の凹線が観察できる。



第173図 4・5区第5面出土土器

第80表 4・5区第5面出土土器観察表

番号	器種	口径 cm.	測定 法	色調	残存率	備考
637	壺	口径: 13.4 腹径: 19.1 腹深: 12.1	外面: 体部 - 頸部へケ調整後、体部下半生へ3.0cm下、口縁 部傾斜で調整 内面: 体部 - テ調整、底足ナガ調整、口縁品錐ナガ調整。	外面: に赤い黄褐 内面: に赤い赤褐	2.0	
638	壺	口径: 14.8 腹径: 17.2	外面: 体部 - 頸部へケミガキ。 内面: 体部 - 頸部ナガ調整、(1脚足根ナガ調整、	外面: 棕 内面: 黄白	体部: 頸部1/4	

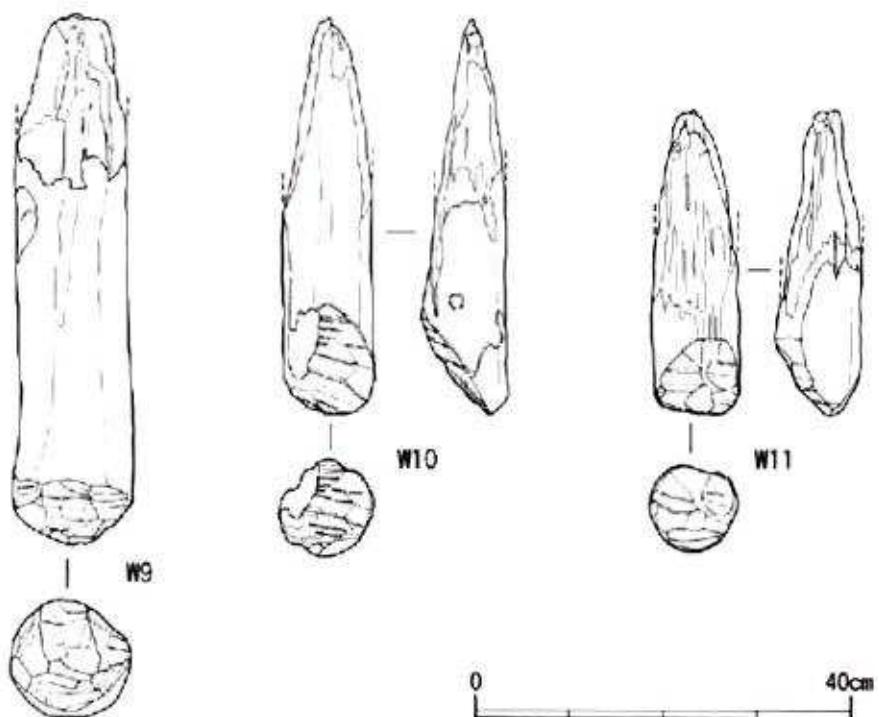
(2) 杖穴

建物にならなかった柱穴から、柱根が出土しているので報告する。

柱根

合計3点出土している。

W.9はP.15から出土した。側面では全面に渡って樹皮が残されている。樹種はサカキである。現存長56.0cm、直径12.8cmを測る。底には鋭利な刀によりおよそ6方向から



第174図 第5面出土柱根

切断された痕跡が残されており、中央付近の一部には自然に割れた部分が残されている。

W10はP16から出土した。側面には樹皮が残る部分があるが、遺存状況は悪い。樹種はサカキである。現存長41.9cm、直径10.2cmを測る。底には大きく2方向からの切断の痕跡が残されているが、遺存状況が悪いため、鋭さはない。

W11はP17から出土した。かなり腐食しているものの、残された側面には全て樹皮が遺存している。樹種はサカキである。現存長32.2cm、直径9.5cmを測る。底には大きく2方向からの切断の痕跡が残されているが、遺存状況が悪いためか、鋭さはない。

この他、P21・22・23においても柱根が遺存している。P21はサカキ、P22はサカキ?と同定されている。

(3) 土壌

SK33

検出状況 調査区の西半部南側に位置する。SK35の西側約4mに位置するが、土壤群の範囲からはやや外れている。当土壤の南端は調査区外へ続き、全体の約3/4を検出している。他の遺構との切り合い関係は確認できない。

形状・規模 平面形は梢円形を呈する。長軸方向で2.47m、短軸方向で2.20mを測る。土壤底では長軸方向で2.16m、短軸方向で1.64mを測る。断面は浅い皿状を呈する。検出面から最深部までの深さは12cmである。

埋土 1層からなり、自然堆積と考えられる灰色シルト質細砂が堆積していた。

出土遺物 全く出土していない。

SK34

検出状況

調査区の西南隅、SD89の西側に位置する。当土壌は西・南側が調査区外へ続き、一部を検出したのみである。自然の落ち込みの可能性もあるが、ここでは土壌として報告しておく。

形状・規模

平面形は明確でない。検出長は東西3.22m、南北2.00mを測る。土壌底では東西3.03m、南北1.86mを測る。断面は皿状を呈する。検出面から最深部までの深さは9cmである。

出土遺物

全く出土していない。

SK35

検出状況

調査区の西半部、土壌群の西端南側に位置する。当土壌は南側調査区外へ続き、全容は不明である。他の遺構との切り合い関係は確認できない。

形状・規模

平面形はやや不整形な楕円形を呈するとみられる。東西方向に主軸をとると推定する。長軸方向で検出長1.65m、短軸方向で1.10mを測る。断面は浅い皿形を呈し、検出面から最深部までの深さは7cmである。

埋土

1層からなり、自然堆積と考えられる暗青灰色シルト質細砂が堆積していた。

出土遺物

全く出土していない。

SK36

検出状況

調査区の西半部、土壌群の西半部南側に位置する。SK38と掘り方を接しているが、両者の切り合い関係は明確にできない。

形状・規模

平面形は径95cmの円形を呈する。土壌底では長軸方向で80cm、短軸方向で73cmを測る。断面は浅い皿形を呈する。検出面から最深部までの深さは5cmである。

埋土

1層からなり、自然堆積と考えられる暗青灰色細砂・極細砂が堆積していた。

出土遺物

全く出土していない。

SK37

検出状況

調査区の西半部、土壌群の西半部南側に位置する。SK36の東約70cmに位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模

平面形は径53cmの円形を呈する。土壌底では長軸方向24cm、短軸22cmを測る。断面はU字形を呈する。検出面から最深部までの深さは12cmである。

埋土

1層からなり、自然堆積と考えられる暗オリーブ色シルト質細砂が堆積していた。

出土遺物

全く出土していない。

SK38

検出状況

調査区の西半部、土壌群の西端中央部に位置する。SK36に接しているが両者の切り合い関係は明確にできない。

形状・規模

平面形は溝状を呈し、主軸方向を北東から南西にもつ。長軸方向で4.95m、短軸方向で1.25mを測る。土壌底では長軸方向4.68m、短軸方向90cmを測る。断面は浅い皿形を呈

する。検出面から最深部までの深さは6cmである。

埋土 1層からなり、自然堆積と考えられる暗灰色中砂混シルト質細砂～極細砂が堆積していた。

出土遺物 全く出土していない。

SK39

検出状況 調査区の西半部、土壙群の西端中央部に位置する。SD90と切り合い関係を持ち、SD90に切られている。

形状・規模 平面形は長楕円形を呈し、主軸方向を北東から南西にもつ。長軸方向で3.27m、短軸方向で1.24mを測る。土壙底では長軸方向2.82m、短軸80cmを測る。断面は皿形を呈する。検出面から最深部までの深さは8cmである。

出土遺物 全く出土していない。

SK40

検出状況 調査区の西半部、土壙群の西端中央部に位置する。SD90の東側、SK39の北側に位置する。他の遺構との切り合い関係は確認できない。

形状・規模 平面形は楕円形を呈する。軸方向を北西から南東にもつ。長軸方向で89cm、短軸方向で85cmを測る。土壙底では長軸方向75cm、短軸67cmを測る。断面はU字形を呈する。検出面から最深部までの深さは9cmである。

出土遺物 全く出土していない。

SK41

検出状況 調査区の西半部、土壙群の西半部北側に位置する。SK40が隣接して位置するが、他の遺構との切り合い関係は確認できない。

形状・規模 平面形は溝状の長楕円形を呈する。長軸方向で3.42m、短軸方向で1.13mを測る。土壙底では長軸方向2.94m、短軸74cmを測る。断面は浅い皿状を呈する。検出面から最深部までの深さは15cmである。

出土遺物 全く出土していない。

SK42

検出状況 調査区の西半部、土壙群の中央部南側に位置する。確認調査トレンチにより南側を欠き、平面では約1/2を検出したにすぎない。

形状・規模 平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。長軸方向での検出長50cm、短軸方向での検出長57cmを測る。土壙底では長軸方向で37cm、短軸方向で45cmを測る。断面は皿形を呈する。検出面から最深部までの深さは4cmである。

埋土 1層からなり、自然堆積と考えられ暗青灰色中砂混シルト質細砂～極細砂が堆積していた。

出土遺物 全く出土していない。

SK43

検出状況	調査区の西半部、土壠群の中央部南側に位置する。確認調査トレンチにより南側を欠き、平面では約1/2を検出したにすぎない。
形状・規模	平面形は橢円形を呈すると考えられる。長軸方向の検出長87cm、短軸方向の検出長38cmを測る。土壠底では長軸方向62cm、短軸27cmを測る。断面は皿形を呈する。検出面から最深部までの深さは10cmである。
埋土	1層からなり、自然堆積と考えられ青灰色中砂混りシルト質細砂が堆積していた。
出土遺物	全く出土していない。

SK44

検出状況	調査区の西半部、土壠群の中央付近に位置する。SK45と切り合い関係にあり、SK45に切られている。したがって当土壠の東側の約2/5を欠く。
形状・規模	平面形は長軸1.20m、短軸90cmのやや不整形な三角形を呈する。底部では長軸96cm、短軸76cmを測る。断面はU字状を呈する。検出面から最深部までの深さは7cmである。
埋土	1層からなり、自然堆積と考えられる暗オリーブ灰色シルト質細砂・極細砂が堆積していた。
出土遺物	全く出土していない。

SK45

検出状況	調査区の西半部、土壠群の中央付近に位置する。SK44・SK46・柱穴と切り合い関係にあり、SK44・SK46を切り、柱穴に切られている。
形状・規模	平面形は長軸2.07m、短軸1.37mの橢円形を呈する。土壠底では長軸1.75m、短軸1.07mを測る。断面はU字形を呈する。検出面から最深部までの深さは24cmである。
埋土	1層からなり、自然堆積と考えられる青黒色シルト質細砂・極細砂が堆積していた。
出土遺物	全く出土していない。

SK46

検出状況	調査区の西半部、土壠群の中央付近に位置する。SK45及び柱穴と切り合い関係にあり、SK45・柱穴に切られている。したがって当土壠の東側を約2/5を欠く。
形状・規模	平面形は長軸2.06m、短軸1.70mのやや不整形な橢円形を呈すると考える。断面は浅い皿形を呈する。検出面から最深部までの深さは8cmである。
埋土	1層からなり、自然堆積と考えられる青黒色中砂・細砂が堆積していた。
出土遺物	全く出土していない。

SK47

検出状況	調査区の西半部、土壠群の中央部北側に位置する。他の造構との切り合いは認められない。
形状・規模	平面形は橢円形を呈する。長軸方向に1.07m、短軸方向に91cmを測り、土壠底では長

軸で50cm、短軸で45cmを測る。断面は皿状を呈する。検出面から最深部までの深さは13cmである。

埋土 自然堆積と考えられる暗青灰色中砂土層が堆積していた。

出土遺物 全く出土していない。

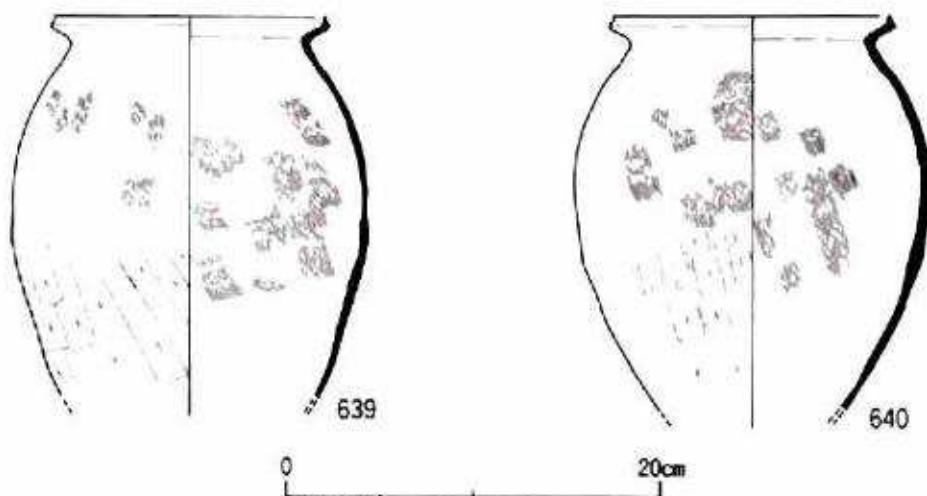
SK48

検出状況 調査区の西半部、土壌群の中央部北端に位置する。他の遺構との切り合い関係は確認できない。

形状・規模 平面形は梢円形を呈する。長軸方向で94cm、短軸方向で73cmを測る。土壌底では長軸で67cm、短軸で47cmを測る。断面はU字形を呈する。検出面から最深部までの深さは10cmである。

埋土 やや粘性のある暗青灰色シルト質極細砂土層の堆積である。

出土遺物 瓢が2個体(639・640)出土している。2個体とも同じタイプの甕で、体部外面下半はヘラ削りにより仕上げられており、全体的に器壁が薄く仕上げられている。



第175図 SK48出土土器

第81表 SK48出土土器観察表

番号	器種	法算量(cm ³)	調査・技法	色調	保存率	備考
639	甕	口径: 14.0 底径: 22.8 高さ: 19.1	外側: 体部下半ヘラ削り調整、外記土半ハケ調整、頭部一口焼 内部: ハケ調整 内面: 体部下半ハケ調整、体部上半ハケ調整、頭部一口焼部頭部ハケ調整	外面: 深褐色 内面: に赤い着色	1/3	
640	甕	口径: 14.5 底径: 23.0 高さ: 19.0	外側: 底部下半ヘラ削り調整、体部上半ハケ調整、頭部一口焼 内部: ハケ調整 内面: 体部ハケ調整、頭部一口焼部頭部ハケ調整	外面: 深褐色 内面: 深褐色	1/4	

SK49

検出状況 調査区の西半部、土壌群の北東部付近に位置する。SK50が東側38mに位置するが、他の遺構との切り合い関係は確認できない。

形状・規模 平面形は長軸で92cm、短軸で85cmの梢円形を呈する。土壌底では、長軸で60cm、短

軸で56cmを測る。断面はU字形を呈する。検出面から最深部までの深さは19cmである。

埋土 青灰色シルト質細砂～極細砂1層が堆積していた。

出土遺物 全く出土していない。

SK50

検出状況 調査区の西半部、土壌群の北東部に位置する。他の遺構との切り合いは認められない。

形狀・規模 平面形は長軸1.19m、短軸1.10mの橢円三角形を呈する。土壌底では、長軸で93cm、短軸で77cmを測る。断面は浅く開くU字形を呈する。検出面から最深部までの深さは23cmである。

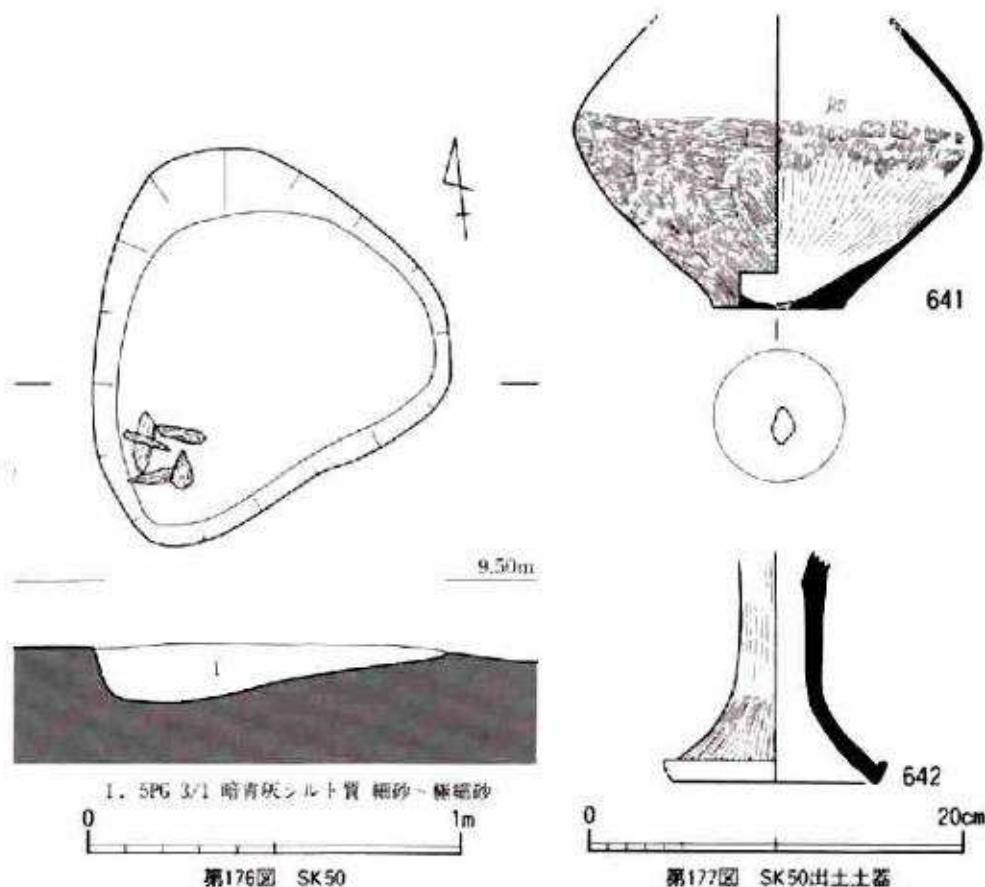
埋土 暗青灰色シルト質細砂～極細砂の1層が堆積していた。

出土遺物 壺と高杯が出土地している。

壺 641の1個体である。体部のみの残存である。体部は算盤形を呈し、底部は平底で薄く仕上げられている。底部中央には焼成後の1.8cm×1.2cmの穿孔が認められる。また、体部内外面のハケ調整は、2種類のハケを用いて仕上げられている。

高杯 642の1個体で、脚部のみ残存する。筒部は直立し、裾部はハの字形に広がる。脚端部は斜上方につまみ上げ、内傾する環面を有する。

その他 土器以外に、自然木の小片が出土している。



第82表 SK50出土土器観察表

番号	器種	法 量(cm)	調 査 方 法	色 調	残 存 率	備 考
641	壺	口径: 17.0 最高: 21.9 腹径: 21.9	外面: 体部下部を調整、体部上半部を調整。 内面: 底部を調整、体部を調整。	外面: 棕 内面: 灰青	体部1/2	
642	高杯	口径: 12.3 最高: 11.5 腹径: 10.8	外面: 腹部ハラカオ、肩部丸太形調整。 内面: 腹部ハラカオ形調整。	外面: 棕褐色 内面: 棕褐色	脚部1/4	

SK51

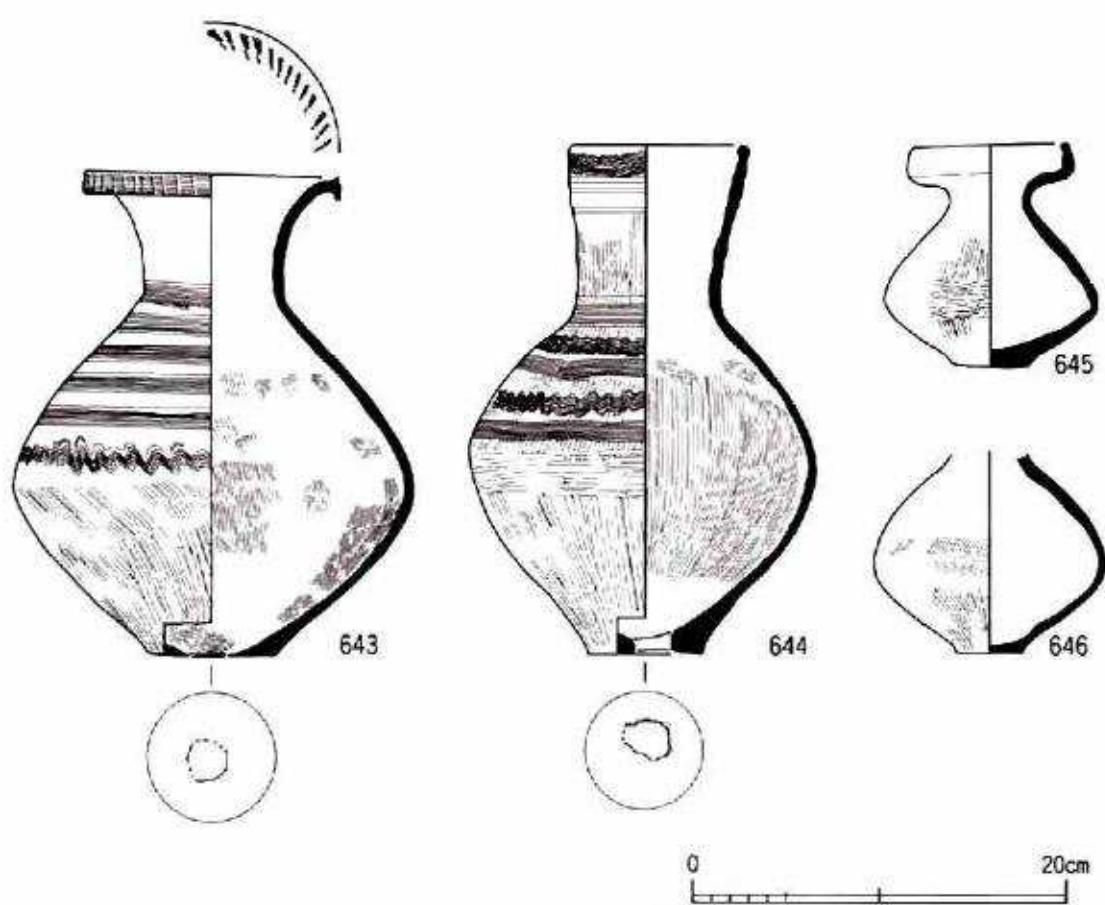
検出状況 調査区の西半部、土壇群の東半部中央付近に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。また、遺物の出土状況から本来の掘り込み面は遺構検出面より上であろうと推定する。

形状・規模 平面形は不整形な溝状を呈する。長軸方向で5.25m、短軸方向で55cmを測る。土壤底では、長軸で4.20m、短軸で25cmを測る。断面は浅い皿形を呈し、東端の底に断面逆台形の溝状の落ち込みがある。検出面から最深部までの深さは8cmである。

埋土 暗青灰色シルト質粘土砂の1層が堆積していた。

出土遺物 壺と高杯が出土している。

壺 広口壺、短頸壺(細頸壺)、小型壺、体部が出土している。



第178図 SK51出土土器

- 広口壺** 643の1個体である。ほぼ完存する土器である。体部は算盤形をなし、頸部から口縁部にかけて大きく外反し、口縁端部を上下方向に拡張させている。端面には簾状紋が1帯施文されている。また口縁部内面には櫛による列点紋が施文されている。また体部上半には、9条の櫛描直線紋5帯と、その下側の体部中位付近に8条の櫛描波状紋が施文されている。このほか、底部中央には焼成前に穿孔（径2cm）されている。
- 短頸壺** 644の1個体である。球形に近い体部に対して、頸部から口縁部にかけて斜上方には直線的に立ち上がる。口縁端部内面を斜上方にわずかにつまみだし、端部を肥厚させている。頸部と口縁部の変換部に3条の凹線紋を施文し、その上側に10条の櫛描波状紋を施文している。また体部から頸部への変換部にも10条の櫛描直線紋を施文している。さらに、体部上半には、9条の櫛描波状紋と9条の櫛描直線紋のセットが2セット施文されている。底部には焼成前による径1.9cmの穿孔が認められる。
- 小型壺** 645の1個体である。体部は算盤形を呈する。大きく外反する頸部に対して口縁部が水平方向にのび、その端部をわずかに内傾させて立ち上げ、二重口縁状を呈する。加飾は認められない。
- 高杯** 脚部が出土しているが、小片のため図化できなかった。

第83表 SK51出土土器観察表

番号	器種	寸 厘 (cm)	調 整・技 法	色 調	残存率	備考
643	壺	口径:12.4 底径:7.5 高さ:21.5	外側:体部下部へV字割り後ヘラミガキ。体部上半様ナマ調整。 頭部端ナマ調整後ヘラミガキ。口縁部横ナマ調整。 内面:体部下部へV字割り調整。体部上半ナマ調整。口縁部横ナマ調整。	外面:灰白 内面:褐	口縁部一 底部2/4	
644	壺	口径:19.0 底径:17.7 高さ:27.1 幅径:18.6	外側:体部下部へV字割り後ヘラミガキ。体部上半へ口縁部横ナマ調整後ヘラミガキ調整。内面:無文。	外面:褐色 内面:褐	口縁部一 底部2/3	
645	壺	口径:8.9 底径:7.3 高さ:11.3 幅径:11.3	外側:体部下部へV字割り後ヘラミガキ。頭部へ口縁部横ナマ調整。 内面:体部下部ヘラミガキ。根ナマ調整。体部上半ナマオサキ。頭部へ口縁部横ナマ調整。	外面:灰黄褐 内面:褐	ほぼ完全	
646	壺	口径:13.5 底径:12.5	外側:体部下部へV字割り後ヘラミガキ。体部上半へヘラミガキ。 頭部横ナマ調整。 内面:頭部へ品目ナマオサキ。口縁部横ナマ調整。体部上半ナマ調整。	外面:褐灰 内面:褐	体部1/3	

SK52

検出状況 調査区の西半部、土壤群の東半部南側に位置する。SK53の西側55cmに位置するが、他の造構との切り合い関係は確認できない。

形状・規模 平面形は橢円形を呈する。長軸方向で1.49m、短軸方向で1.04mを測る。土壤底では、長軸方向で1.03m、短軸方向で61cmを測る。断面は日字形を呈する。検出面から最深部までの深さは17cmである。

埋土 1層からなり、自然堆積と考えられ、やや粘性のある青灰色シルト質細砂～極細砂が堆積していた。

出土遺物 壺と体部片が出土している。

壺 型式は特定できない。

体部 壺か壺の体部と考えられ、3条のヘラ描沈線紋が認められる。

SK53

検出状況	調査区の西半部、土壙群の東半部南側に位置する。SK52の東側55cmに位置するが、他の遺構との切り合い関係は確認できない。
形状・規模	平面形は楕円形を呈する。長軸方向で1.40m、短軸方向で1.15mを測る。土壙底では、長軸方向で91cm、短軸方向で78cmを測る。断面は皿形を呈する。検出面から最深部までの深さは14cmである。
埋土	1層からなり、自然堆積と考えられる灰色粗砂混シルト質極細砂が堆積していた。
出土遺物	壺が出土しているが、型式の特定は困難である。

SK54

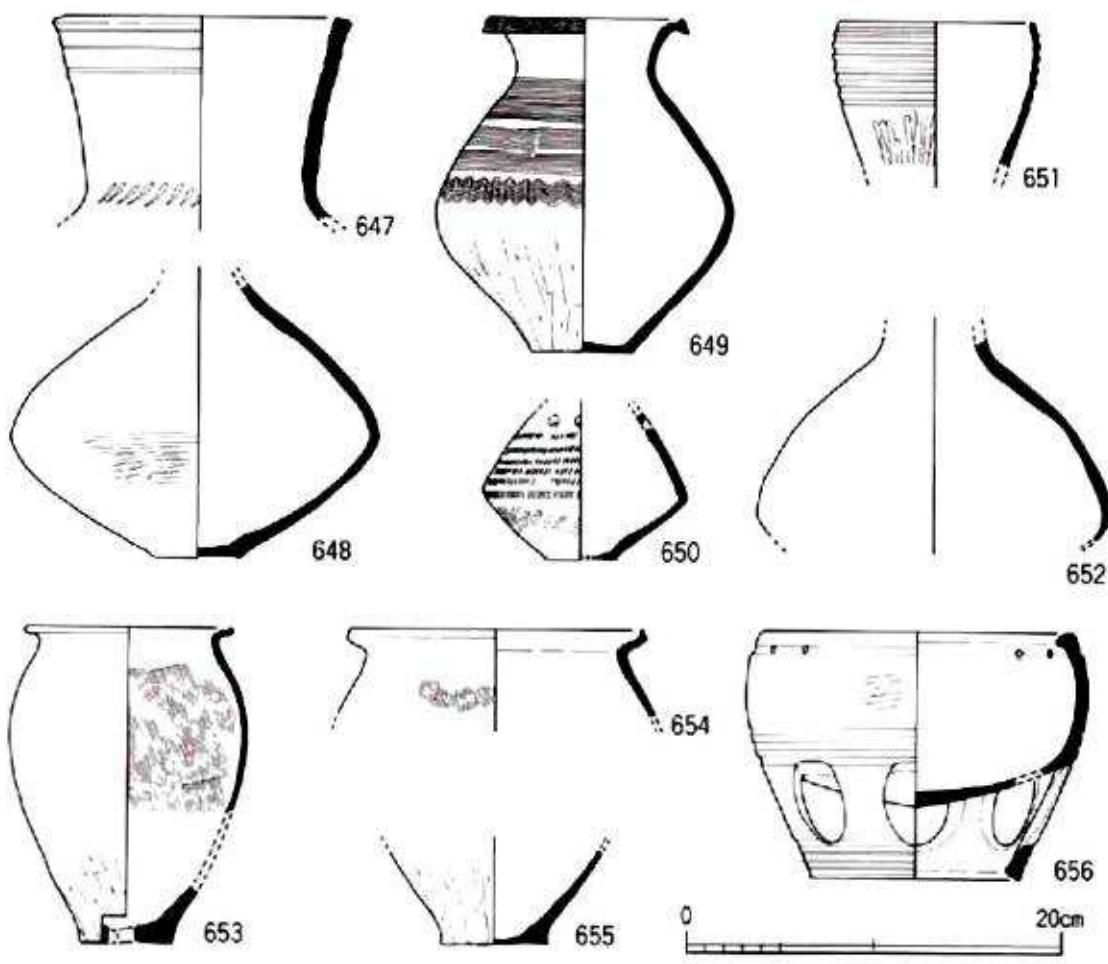
検出状況	調査区の西半部、土壙群の東半部南側に位置する。SK59と切り合い関係にあり、SK59を切っている。
形状・規模	平面形は楕円形を呈し、主軸方向をN-12°-Eにとる。長軸方向で1.17m、短軸方向で67cmを測る。土壙底では、長軸方向で80cm、短軸方向で42cmを測る。断面はU字形を呈する。検出面から最深部までの深さは13cmである。
埋土	1層からなり、自然堆積と考えられる暗青灰色シルト質細砂～極細砂が堆積していた。
出土遺物	全く出土していない。

SK55

検出状況	調査区の西半部、土壙群の東端中央部に位置する。SD91と切り合い関係にあり、SD91を切っている。また、擾乱により当土壙の東端約1/10程度を欠く。
形状・規模	平面形は楕円形を呈する。長軸方向で1.43m、短軸方向で67cmを測る。土壙底では、長軸方向で1.32m、短軸方向で42cmを測る。断面はU字形を呈する。検出面から最深部までの深さは18cmである。
埋土	1層からなり、自然堆積と考えられる灰色シルト質中砂～粗砂が堆積していた。
出土遺物	全く出土していない。

SK56

検出状況	調査区の西半部、土壙群の東端北側に位置する。SK57に接しているが両者の切り合い関係は明確にできない。
形状・規模	平面形は溝状を呈する。長軸方向で3.10m、短軸方向で93cmを測る。土壙底では、長軸方向で2.75m、短軸方向で65cmを測る。断面はリ字形を呈する。検出面から最深部までの深さは13cmである。
埋土	1層からなり、自然堆積と考えられる暗青灰色シルト質細砂が堆積していた。
出土遺物	壺・甕・鉢の各器種が出土している。
壺	広口短頸壺・広口壺・細頸壺・体部が出土している。
広口短	647の1個体である。頸部から口縁部にかけて斜上方に直線的に立ち上がる。口縁端部を外側へ水平方向につまみ出し、外傾する端面をもつ。口縁部には3条の擬凹線が施文



第179図 SK56出土土器

されている。また、頸部にはノ字形の刻み目が施されている。

広口壺 649の1個体で、比較的小型の壺である。外反する口縁部の端部を上下方に拡張し、端面には9条の櫛指波状紋を施文している。また体部上半には、上から9条の櫛指直線紋4帯・9条の櫛指波状紋1帯が施文されている。体部下半外面は、ヘラ削りにより仕上げられている。

細頸壺 651の1個体である。頸部から口縁部にかけてキャリバー形を呈するタイプである。口縁部には7条の細い凹線が施文されている。

無頸壺 656の台付無頸壺1個体が出土している。体部から口縁部にかけて大きく内済し、端部内面を水平方向につまみ出す。口縁部外面には1条の凹線が施文されている。この凹線と重なる位置に径4mmの粗穴が2個認められる。2個を1対として2方にあったものと考えられる。また体部から底部への変換部外面にも3条の凹線紋が施文されている。台部は、底部から体部への変換部から内側へは直線的にのび、端面をもつ。端部外面にも5条の凹線が施文されている。また梢円形の透しが8箇所に穿たれている。

体部 648・652は、算盤形を呈する体部で、細頸壺の体部と考えられる。

650は小型の土器で、体部は算盤形を呈する。上端部に粗穴（径4mm）が2穴認められることから、無頸壺になるのではないかと考えられる。体部上半には刻み目が6段にわたり施文されている。また、底部は体部の器壁に比べて極端に薄く仕上げられている。

- 要** 小型甕・中型甕・底部片が出土している。
- 小型甕** 653の1個体で、体部の一筋を欠く。口縁部は水平方向に短く屈曲し、端部が上方にわずかに肥厚する。体部下半外面はヘラ削りにより薄く仕上げられている。また底部中央には径9mmの穿孔が認められる。
- 中型甕** 654の1個体で、基本的な形態は小型甕と同じである。ただし、口縁端部の上方へのつまみ上げは顕著である。
- 底部** 655の1個体である。外面をヘラ削りにより成形し、器壁が薄く仕上げられている。さらに底部は、体部に対して極端に薄く仕上げられている。
- その他** 本土塙は南側3mに位置するSK51と形態・規模・主軸方向が類似している。本土塙とSK51とはなんらかの関連を持つものと考える。

第84表 SK56出土土器観察表

番号	器種	法 寸 寸(cm)	調 査 方 法	色 調	残 存 状 況	備 考
647	甕	口径:14.7 脚径:12.0 脚高:10.5	外面:圓底ナマ調整、口縁部横ナマ調整。 内面:頭底エビナマ調整、口縁部横ナマ調整。	外面:灰 内面:灰	口縁部1/4	
648	甕	口径:14.9 脚径:13.6 脚高:10.5	外面:体部ヘリヤギ。 内面:体部ナマ調整。	外面:棕 内面:褐	体部完存	
649	甕	口径:10.2 底径:5.1 脚径:17.3 脚高:12.8	外面:深底ヘリヤ削り、体部上半ナマ調整、頭底・口縁部横ナマ調整。 内面:頭底ナマ調整、口縁部横ナマ調整、体部上半スビナマ調整、頭部・口縁部横ナマ調整。	外面:灰 内面:棕	口縫部1/4 底部1/2	
650	甕	口径:3.9 脚径:1.2 脚高:10.9	外面:体部下半ヘリヤギ。 内面:体部上半オサキ・ナマ調整。	外面:棕 内面:褐	外縫部1/2	
651	甕	口径:10.3 脚径:10.3 脚高:10.3	外縫:頭底ヘリヤ削り、口縁部横ナマ調整。 内面:頭底ナマ調整、口縁部横ナマ調整。	外面:棕 内面:灰	口縫部1/4	
652	甕	口径:8.0 底径:10.2 脚径:14.0	外面:頭底ナマ不明。 内面:体部中段ナマ調整、体部上半スビナマ。	外面:棕 内面:浅黄棕	体部1/3	
653	甕	口径:10.9 脚径:9.7 脚高:16.6	外面:体部ヘリ削り、頭底・口縁部横ナマ調整。 内面:体部ヘリナマ調整、頭底・口縁部横ナマ調整。	外面:棕・褐灰 内面:黄灰・褐灰	口縫部1/4 底周3/4	頭部保付着
654	甕	口径:15.6 脚径:13.0 脚高:11.5	外面:体部ナマ調整、頭底ヘリ調整後横ナマ調整、口縫部横ナマ調整。 内面:体部上半オサキ・ヘリ・頭部・口縫部横ナマ調整。	外面:灰 内面:灰	口縫部1/4	
655	甕	口径:15.7 脚径:13.2 脚高:11.2	外面:体部ナマ削り頭底ナマ調整。 内面:頭底ナマ調整、体部横ナマ調整。	外面:棕 内面:黑褐	底部完存	
656	甕	口径:15.3 脚径:13.4 脚高:6.0	外面:頭部ナマ調整、体部ヘリオサキ・口縫部ヘリ・オサキ。 内面:頭底ナマ調整、底部・口縫部ナマ調整。	外面:灰 内面:灰	口縫部1/3 脚部1/3	

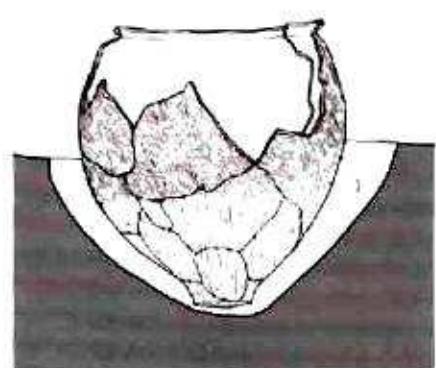
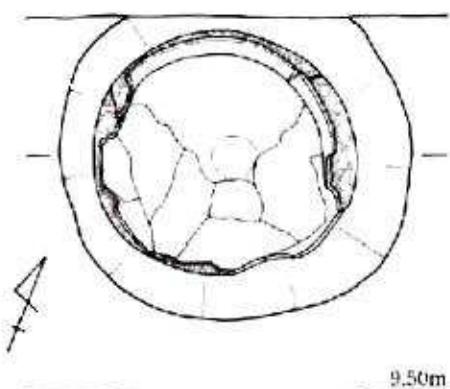
SK57

検出状況 調査区の西端部、北端で検出された。調査区内で検出された土塙群の中ではやや東側に位置する。調査区の端で、かつ調査時に任意に設定した調査溝から検出されたため、検出面と実際の遺構面とは出土土器の状態から見て少なくとも20cm近くは違っている。

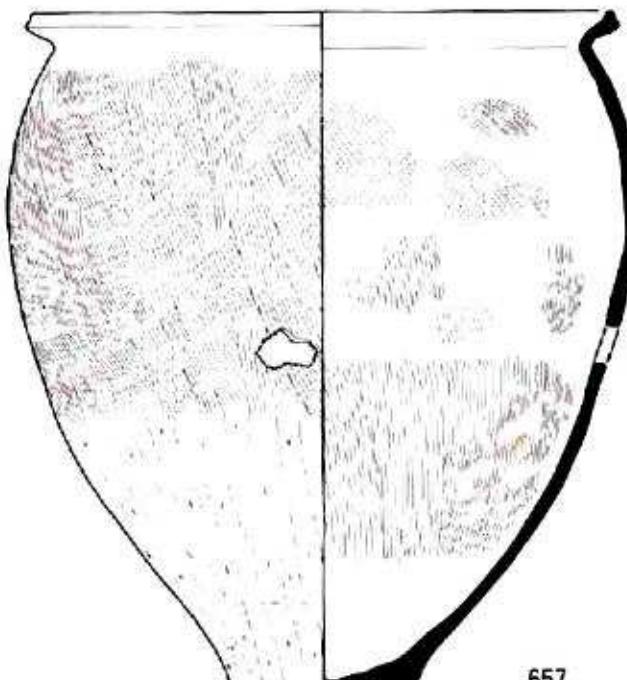
形状・規模 検出面での平面形は円形に近く、深さは約20cmであるが、土塙内に据えられた土器の状態から、本来は少なくとも40cm近い深さがあったものと思われる。土器は体部に穿孔されており、正置された状態で出土した。土器は、土塙の底部に密着していた。

埋土 灰色細砂の土層からなっている。

出土遺物 大型の甕で、全体的に器壁が厚く仕上げられている。体部中央部には $3\text{ cm} \times 1.5\text{ cm}$ の穿孔が焼成後に行われている。内面下半に煤状の付着が認められ、この付着が途切れる位置から上側外面にも煤の付着が認められる。



1. 灰 7.51 1/1 細砂
0 50cm



第180図 SK57

657
0 20cm

第181図 SK57出土土器

第85表 SK57出土土器検察表

番号	器種	法 直(cm)	調 査 法 法	色 調	残存率	備 考
657	甕	口径: 130.7 細径: 33.5 深径: 118.71 器高: 166.0 腹径: 55.5	外面: 体部下部へ穿孔、体部上部へ調整、頭部へ調整用 頭部へ調整、1)縫合部へ調整 内面: 腹部へ穿孔、体部へ調整、頭部へ縫合部無しへ調整	外海一帯、灰褐色 内面一部	1/4 完好	体部中央部付着 煤状付着

SK58

検出状況 調査区の中央部北側に位置する、SK56の東側約2mに位置するが、土壌群の範囲からはやや外れている。他の遺構との切り合い関係は確認できない。

形狀・規模 平面形はやや不整形な梢円形を呈する。長軸方向で1.11m、短軸方向で1.10mを測る。土壤底では、長軸方向で1.16m、短軸方向で88cmを測る。断面は圓形を呈する。検出面から最深部までの深さは12cmである。

埋土 1層からなり、自然堆積と考えられる暗灰色粗砂混細砂が堆積していた。

出土遺物 全く出土していない。

SK59

検出状況	調査区の西半部、土壙群の東端南側に位置する。当土壙は南側調査区外へ続き、全容は不明である。SK54とは切り合い関係にあり、SK54に切られている。
形狀・規模	平面形は橢円形を呈するとみられる。東西方向に主軸をとると推定される。検出長は、長軸方向で5.23m、短軸方向で1mを測る。検出面から最深部までの深さは10cmである。
埋土	1層からなり、自然堆積と考えられる灰色中砂～細砂が堆積していた。
出土遺物	全く出土していない。

(4) 溝**SD89**

検出状況	調査区の西端部南側で検出された。他の遺構との切り合い関係は確認できない。
形狀・規模	南北方向に向くほぼ直線的な溝である。北側は調査区内で消滅し、南側は調査区外へ続く。底部の標高は北端で8.90m、南端で8.80mを測り、北から南へ流れていたものと考えられる。断面の形状は平底状を呈する。規模は、検出された長さ2.85m、幅60cm～55cm、平均幅57cmを測り、検出面からの深さは深いところで40cmである。
埋土	1層からなり、自然堆積と考えられる暗青灰色シルト質細砂が堆積していた。
出土遺物	全く出土していない。

SD90

検出状況	調査区の西半部、土壙群の西側で検出された。柱穴と切り合い関係にあり、柱穴に切られている。
形狀・規模	ほぼ南北方向に向く直線的な溝である。南北両側とも調査区外へ続く。底部の標高は北端で9.12m、南端で8.92mを測り、北から南へ流れていたものと考える。断面の形状は平底状を呈する。規模は、検出された長さ9.27m、幅1.38m～48cm、平均幅1.26mを測り、検出面からの深さは深いところで6cmである。
埋土	1層からなり、自然堆積と考えられる暗青灰色シルト質細砂が堆積していた。
出土遺物	全く出土していない。

SD91

検出状況	調査区の中央、やや西寄りで検出された。周辺には土壙群が検出されており、本溝はその土壙群のはば東端を区切るようである。これより東側には20mほどの空間をおいてSD92がほぼ同じ方向に検出されており、それより東側には柱穴群が検出されている。
形狀・規模	北側から南側にはば直線的に延びる溝である。断面の形状はU字形を呈している。規模は、検出された長さ5.67m、幅22cm～43cm、平均幅33cmを測り、深さは7cmである。
埋土	1層からなり、浅黄褐色粗砂～中砂が堆積していた。
出土遺物	遺物は出土しなかった。

SD92

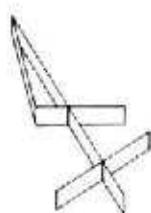
検出状況	調査区の中央、やや東寄りで検出された。周辺には柱穴群が検出されており、本溝はその柱穴群の西端を区切るようである。これより西側には20mほどの空間をおいてSD91がほぼ同じ方向に検出されており、それより西側には土壙群が検出されている。
形状・規模	北側から、南側にはば直線的に延びた溝である。断面の形状はU字形を呈している。規模は、検出された長さ8.85m、幅30cm~45cm、平均幅38cmを測り、深さは12cmである。
埋土	1層からなり、暗灰色粗砂混じり極細砂が堆積していた。
出土遺物	遺物は出土しなかった。

SD93

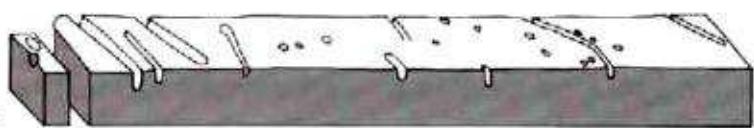
検出状況	調査区の東端部で検出された。他の遺構との切り合い関係は確認できない。
形状・規模	ほぼ南北方向に向く直線的な溝である。南北両側とも調査区外へ続く。底部の標高は北端で9.16m、南端で8.90mを測り、北から南へ流れていたものと考えられる。断面の形状はU字形を呈する。規模は、検出された長さ10m、幅1.26m~77cm、平均幅1.01mを測り、検出面からの深さは深いところで28cmである。
埋土	1層からなり、自然堆積と考えられる黒色粗砂混シルトが堆積していた。
出土遺物	全く出土していない。

SD94

検出状況	調査区の東端部南側で検出された。他の遺構との切り合い関係は確認できない。
形状・規模	ほぼ北西~南東方向に向く直線的な溝である。南北両側とも調査区外へ続く。底部の標高は北端で9.27m、南端で9.15mを測り、南東へ傾いている。断面の形状はU字形を呈する。規模は、検出された長さ3.95m、幅22cm~15cm、平均幅18cmを測り、検出面からの深さは深いところで4cmである。
埋土	1層からなり、自然堆積と考えられる青灰色シルト質細砂が堆積していた。
出土遺物	全く出土していない。



第1面



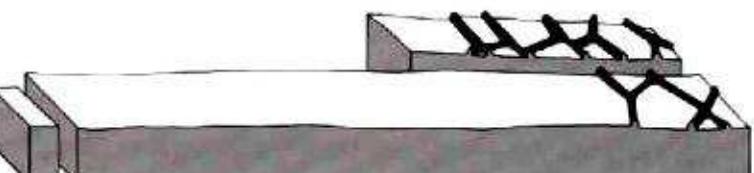
第2面



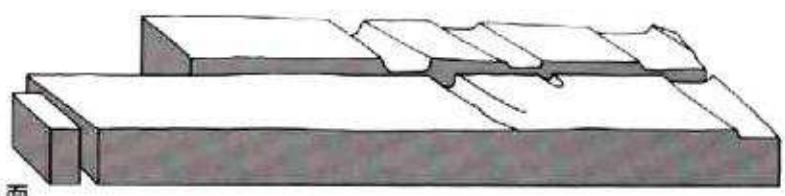
第3面



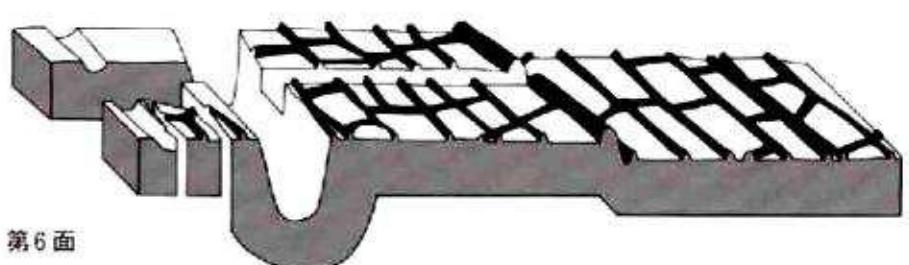
第4面



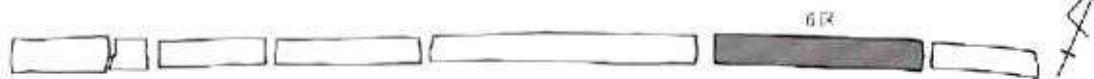
第5面



第6面



6区



第182図 6区の造構

第5節 6区の遺構と遺物

1. 概要

(1) 概略

位置

4・5区の東側、7区の西側に位置する。4・5区とは農道を境とし、7区とはサイフォンを境とする。

下内堀遺跡が立地する扇状地の中央部より東側に傾斜する位置にあたる。

旧淡路鉄道

当地区は、淡路鉄道建設に伴う削平が顕著である。まず、第3面までは北側全体が削平を受けている。次に第4面では北側の西半分が削平を受け、その東側は淡路鉄道に伴う側溝の掘削が及んでいる。続く第5面では、北側の西端部の一部が削平を受け、これより東側は側溝の掘削が及んでいる。第6面では、面的な削平は受けていないが、西側約1/2が側溝の掘削が及んでいる。

遺構の検出

第1面から第6面の6面にわたって遺構を検出した。当地区は、微地形からみて、扇状地の中央部から縁辺部への変換部にあたるため、集落遺構より生産遺構（水田跡）の検出が目立つ。

第1面

柱穴、土壙2基、溝9条を検出している。これらは、奈良時代以降の遺構である。

第2面

溝2条を検出した。時期は古墳時代末から奈良時代にかけてである。

第3面

溝2条と畦畔を作り水田跡を検出した。水田面直上で検出した遺物から、弥生時代後期および古墳時代末から奈良時代にかけてと考えられる。

第4面

当遺構面においては、畦畔を作り水田跡を検出した。水田面からは弥生時代後期の土器が出土していることから、弥生時代後期と考えられる。

第5面

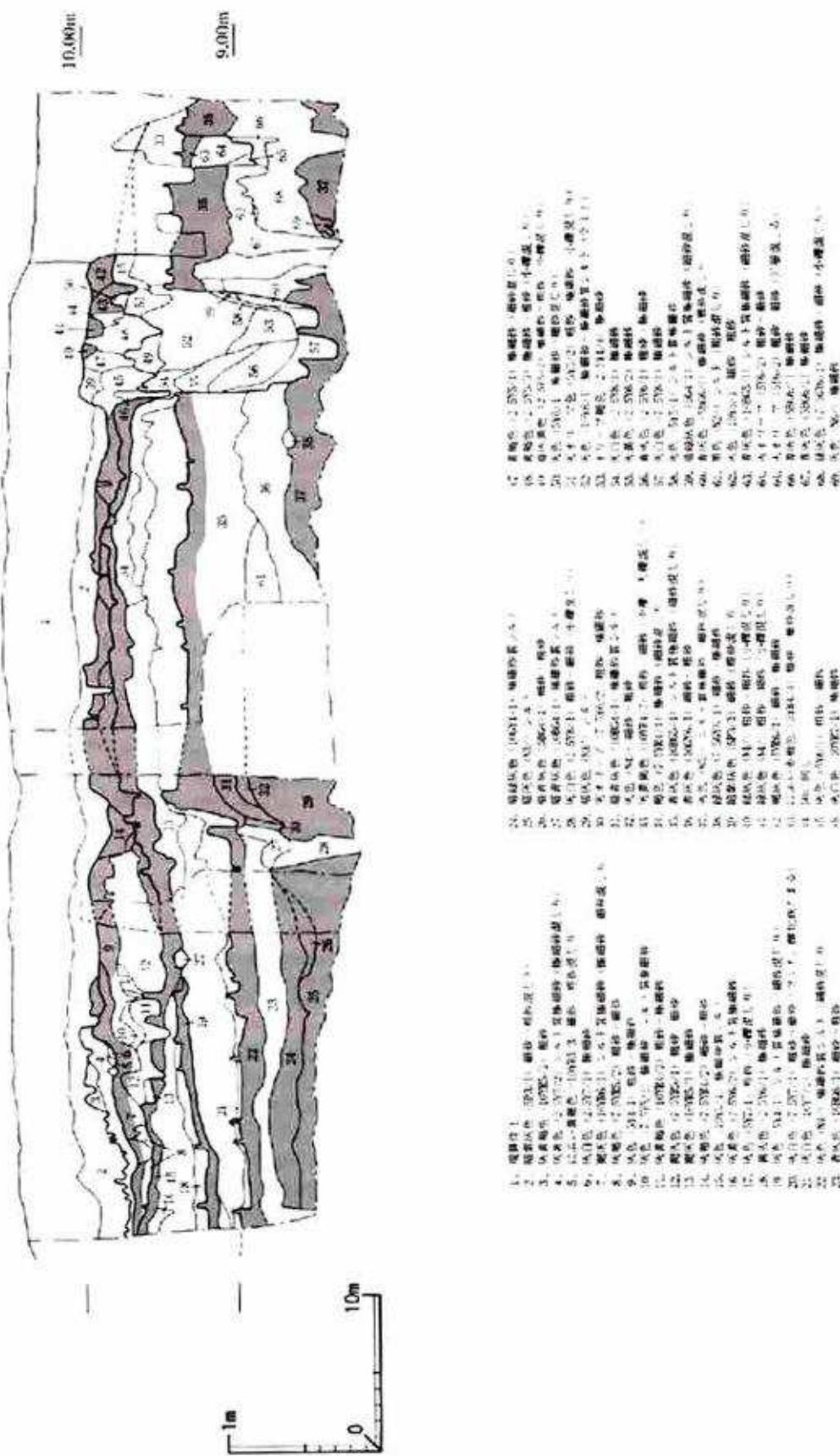
溝3条を検出した。土器を作わないため時期を特定できないが、弥生時代後期の範囲で理解できるものである。

第6面

西側で溝を検出し、その東側全域で畦畔を作り水田跡を検出した。



第183図 6区の調査



第184図 6区土層剖面(南面)

(2) 基本層序と遺構の検出

6区は下内牆遺跡の所在する扇状地の中では中央よりやや東側に位置しており、扇状地の高所からやや低くなったところにある。上層についても、上層についてはほぼ水平に堆積しているが、下層については東側に傾斜する傾向にある。

上層の堆積は、第184図に示したように、69層からなるが、基本的な層序としては、上層から順にⅠ層からⅦ層の7層に分けることができる。これら7層はその上面に遺構面をもつが、Ⅰ層は現地表面、Ⅱ層は第1面、Ⅲ層は第2面、Ⅳ層は第3面、Ⅴ層は第4面、Ⅵ層は第5面、Ⅶ層は第6面にそれぞれ対応する。

Ⅰ層

このⅠ層は、今回の調査対象外と判断したため、機械により掘削した。

当遺跡の全てを覆う調査時の地表面を構成する層であり、水田及び畠地として利用されている。調査区の中央では旧淡路鉄道により搅乱されているが、この構造物をも含んだ層である。表土・底土の下はすぐに第1面がある。

Ⅱ層

Ⅱ層の上面が第1面である。上層との間に古代から中世の遺物を挟んでおり、同一面で柱穴および溝が検出されている。全体に土壤化しており、特に中央付近では下層の土壤層と重なっており厚い。Ⅱ層を構成する層は、粗砂から極細砂で、薄い層が特に東側において多く堆積している。

Ⅲ層

Ⅲ層の上面が第2面である。上層との間に古墳時代末～奈良時代の遺物を挟んでいる。Ⅱ層の土壤層を掘削したところを遺構面としてとらえたもので、遺構は溝が2本検出されたのみである。Ⅲ層を構成している層は粗砂～極細砂である。

Ⅳ層

Ⅳ層の上面が第3面である。上層との間に弥生時代後期及び古墳時代末～奈良時代の遺物を挟んでおり、溝と水田跡が検出された。遺構面は、西側端を除いて土壤化しており、東端では水田土壤となっている。Ⅳ層を構成する層は極細砂質シルトが全体に覆っている。

Ⅴ層

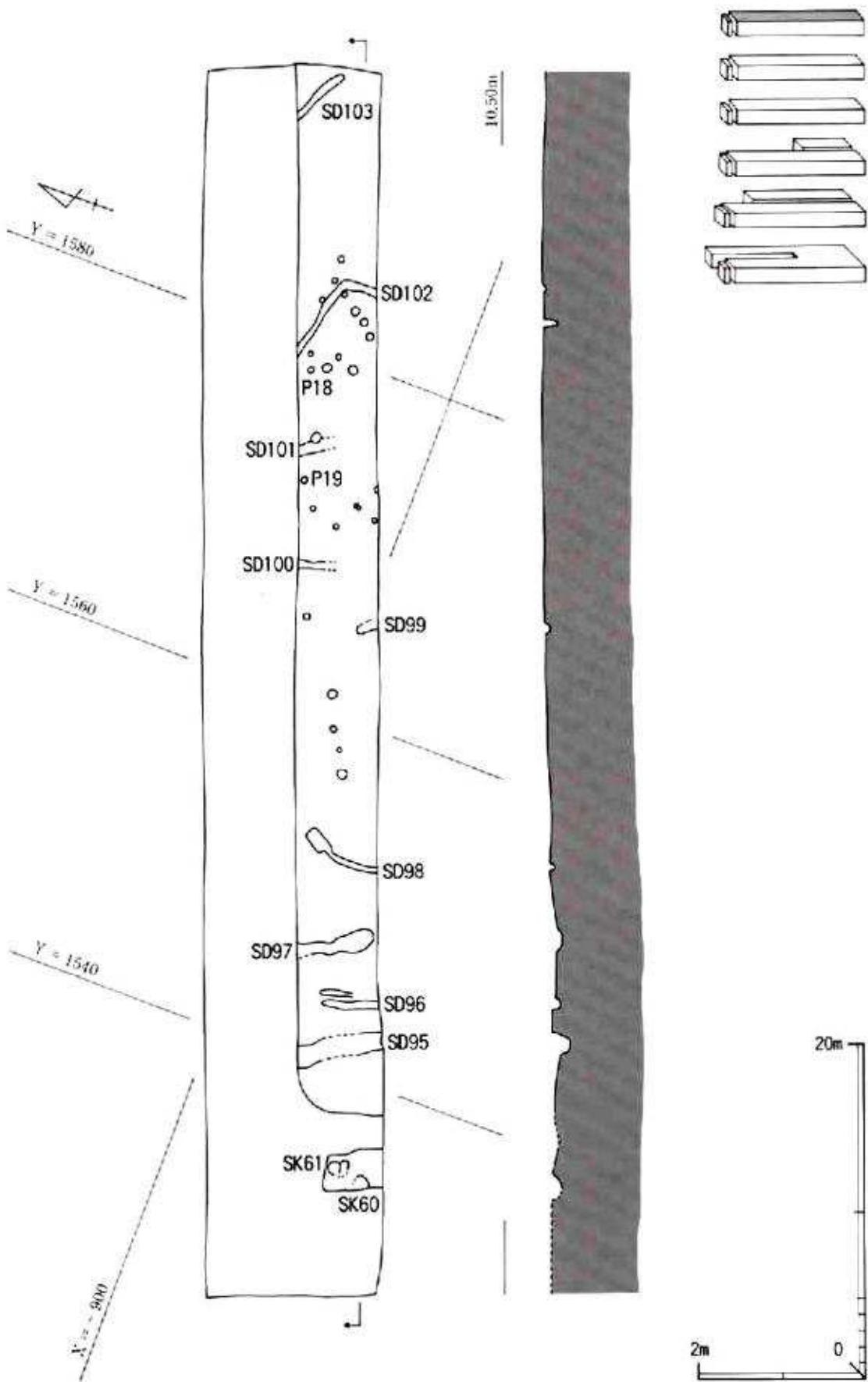
Ⅴ層の上面が第4面である。上層との間に弥生時代後期の遺物を挟んでおり、東端で水田跡が検出された。西側については土壤層を外したが、遺構は検出されなかった。Ⅴ層を構成する層は水田土壤で、細砂混じりシルト質極細砂である。その下層は粗砂～細砂で、厚い。西側については、土壤層を除去しているので、基盤となる層は下層がそのまま露出した粗砂～極細砂である。

Ⅵ層

Ⅵ層の上面が第5面である。溝が検出された。東側に認められた土壤層を掘削して遺構面としてとらえているものであり、遺構面は土壤化していない。Ⅵ層を構成する層は、粗砂から極細砂で、東側においてⅦ層の上に極細砂が均質に堆積した後に、西側から供給された粗砂～細砂がとくに東側において顕著に認められる。西側については、さらにその後に粗砂～細砂を中心とした層が、同じく西側から供給されている。

Ⅶ層

Ⅶ層の上面が第6面である。上層との間に弥生時代後期の遺物を挟んでおり、水田跡が調査区には全面に渡って検出された。西側の一部を除いて細砂混じり極細砂質シルトの水田土壤である。その下層には、6区中央付近で層の乱れがあるものの、基本的に水平に近い堆積を示しており、下層ほど粒子が細かく、シルトから粗砂まで存在する。



第185回 6区第1面

2. 第1面の遺構と遺物

(1) 第1面の出土遺物

出土遺物 土器と石器が出土している。

土器 包含層から出土した遺物は、いずれも遺存状況は悪く、完形に復元できるものはわずかで、ほとんどが小片で出土している。

飛鳥～奈良時代 須恵器と土師器が出土している。

須恵器 坂G蓋、坂Bと坂B蓋、椀、薬壺の蓋、円面鏡、壺、壺の蓋が出土している。

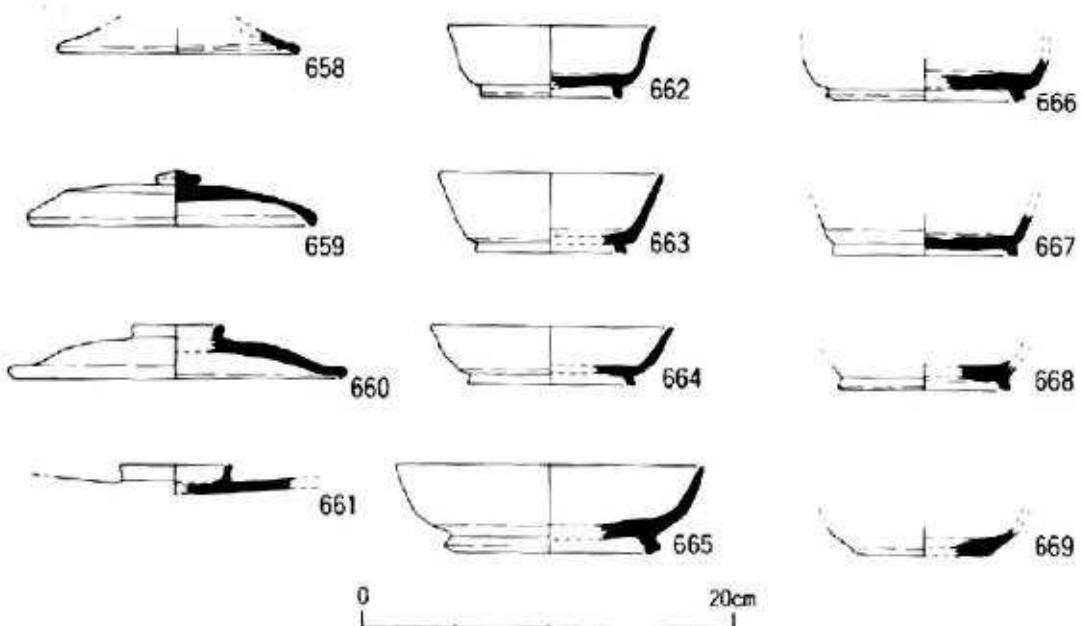
坂G蓋は口縁部端部のみの小片で、全体の形状は不明である。内面に短いかえりがある。坂G以外の蓋はつまみが宝珠形のものと、輪状のものとがある。前者は坂B蓋であり、緩やかに橢曲する体部で、縁部の断面は三角形を呈する。後者は棱椀の蓋であり、660がやや盛り上がった体部であるのに対し、661は焼け重みのためか、天井部は平らである。坂Bは口径が11.0cmのものから16.3cmのものまである。底径は7.5cmのものから10.4cmのものまである。特に口径、底径ともに大きい大型の665は、高台も大きく他の坂身と趣を異にしている。体部の傾きは、口径の大きいものはほど傾きも大きくなり、全体の形として浅くなっている。

椀は669のみであり、小片のため全体の形状がわからず、杯になる可能性もある。

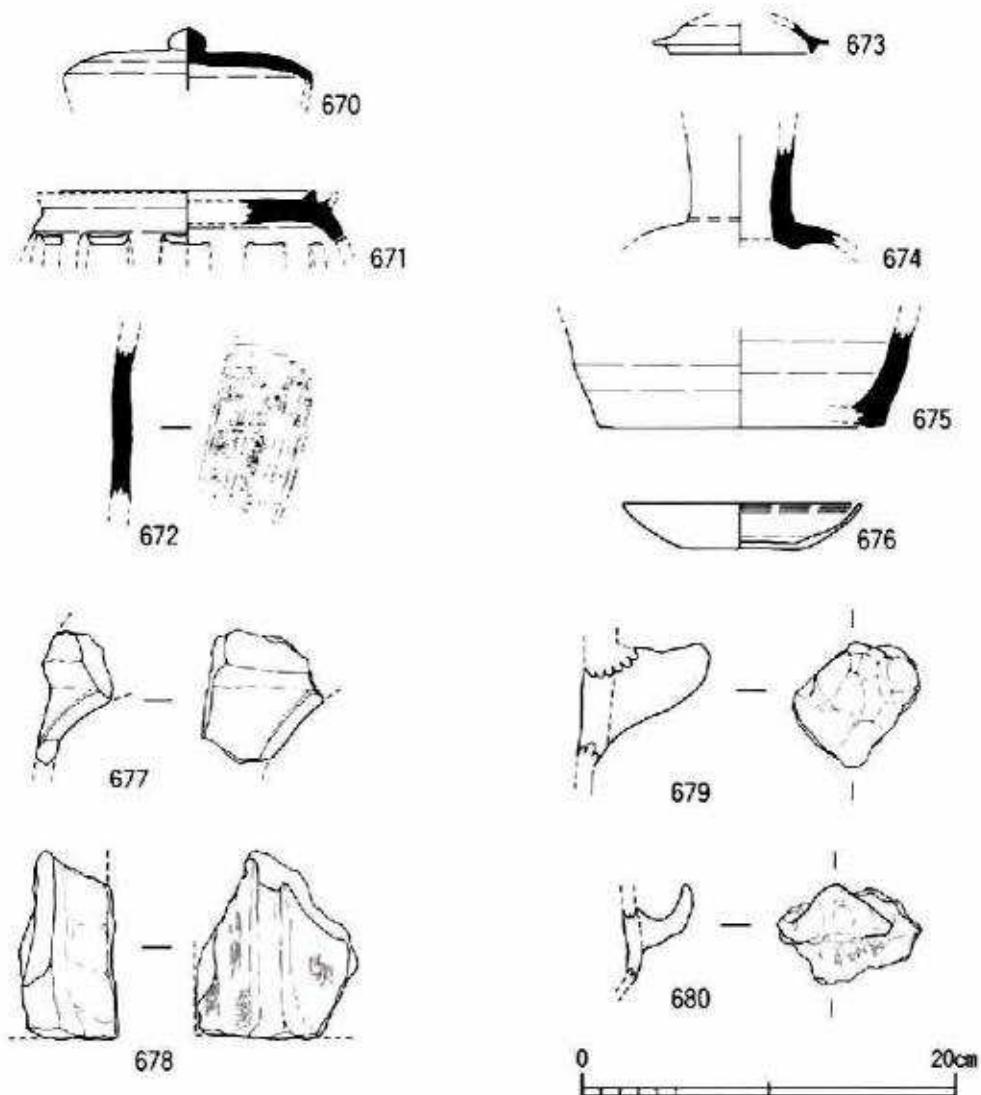
薬壺の蓋は高さのある宝珠形のつまみを有し、体部から口縁部に向かって大きく橢曲している。

円面鏡は小片であるが、透かしは10方向に復元できる。縁は欠損しているが、あまり大きいものではないようである。

壺は、頸部、底部がある。頸部は外間に回転ナブが認められ、底部はペラ切り未調整である。



第186図 6区第1面出土土器(1)



第187図 6区第1面出土土器(2)

土師器 瓢及び鍋が出土した。

瓢は破片のみで、全体の形状は不明である。図示したのは677の焼き口部の上部、678の底部と679の把手部のみである。

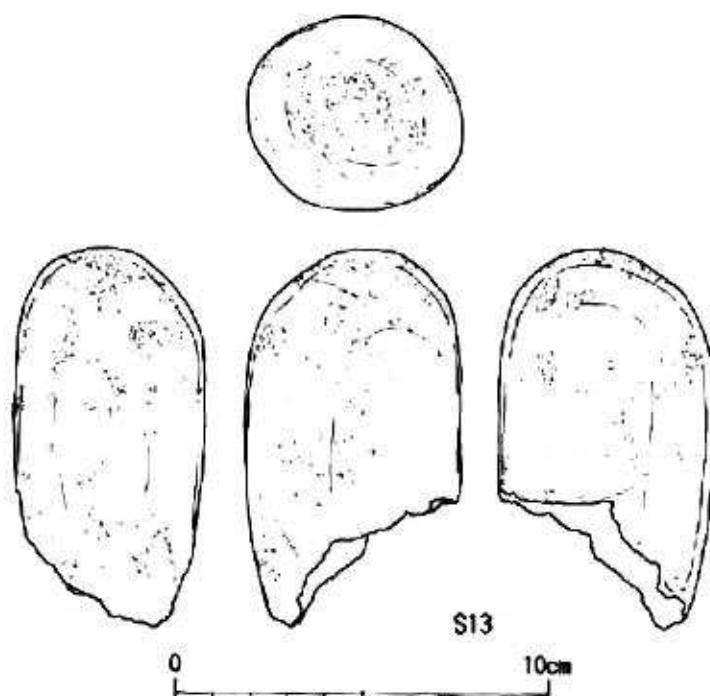
鍋は把手のみである。

中世 土師器のみ図示できた。

土師器 小皿のみ図示できた。体部は全体に薄く、口縁部付近には2条の浅い沈線が巡る。体部は直線的に外方に開き、底部には回転糸切り痕が認められる。

青磁 図化することはできなかったが、はぞり口縁の碗が出土している。

石器 敵石1個体(S13)が出土している。長楕円形の円礫を使用し、上端面にわずかながら敵打の痕跡が認められる。下部は欠損している。全面が磨かれている。長さ10.0cm、幅5.7cm、厚さ5.5cm、重さ355.4gを測る。



第188図 S13

第86表 6区第1面出土土器観察表(1)

番号 番号	種類	器種	法 量(cm)						色 調	保存状況	測 定	形態の特徴	備考
			口径	基高	底径	腹径	最大径	筋跡					
654	研磨器	研磨器	(2.7)						内・灰 外・灰	白練部1/6	圓軸ナメ。	かさ上げ早い。体部は直線的で全体に山形を呈す。	
659	研磨器	研磨器	(15.7)	3.0				-	内・灰 外・灰	白練部1/6	圓軸ナメ。外腹大井底は圓軸のうきアズリ。	全体に扁平で、体部は直線やかに弯曲。山峰部頭部は小さく堅曲。	
660	研磨器	研磨器	(17.5)	(2.9)				-	内・灰 外・灰	白練部1/12	圓軸ナメ。	輪状の横み。体部は直線的に延び、腹部は上方へ若干屈曲する。	
661	研磨器	研磨器						-	内・灰 外・灰	渦巻の左	圓軸ナメ。	輪状の横み。下方外方に開く。全体に平底。	
662	研磨器	研磨器	(11.0)	3.8	(2.5)			25	内・灰 外・灰	紙部1/3	圓軸ナメ。	体部は若干外傾。高台は垂直方向で、ほぼ下方全周。	
663	研磨器	研磨器	(11.9)	(1.2)	(1.8)	(0)		25	内・灰 外・灰	白練部1/8 底部1/6	圓軸ナメ。	高台は下方内側に貼り付けられる。腹部から体部に大きくなじ曲。	
664	研磨器	研磨器	(12.8)	(3.1)	6.9			24	内・灰 外・灰	白練部1/8 紙部1/8	圓軸ナメ。	高台は若干外方に張り出す。底部から体部にかけて若干彎曲。	
665	研磨器	研磨器	(16.2)	5.6	(10.4)			34	内・灰 外・灰	白練部1/10	圓軸ナメ。底盤背面はハタケヌリの痕ナメ。	高台は大きく、外側に張り出す。底部から体部は緩やかに彎曲。	
666	研磨器	研磨器			(1.9.5)			-	内・灰 外・灰	底部1/4	圓軸ナメ。外腹底部凹部ハタケヌリ。	高台は垂直方形で、外方に開く。	
667	研磨器	研磨器			9.7	-		-	内・灰 外・灰	紙部1/2	圓軸ナメ。外腹底部ハタケヌリの後縫合ナメ。	高台は垂直の端に付く。体部は上方へ傾曲する。	
668	研磨器	研磨器			8.7			-	内・灰 外・灰	底部1/4	圓軸ナメ。外腹底部凹部ハタケヌリ。	高台は外方へ開き、低い。	
669	研磨器	研磨器			6.1			-	内・灰白 外・灰白	底部1/4	圓軸ナメ。外腹底部ハタケヌリ。	底部は若干突出する半高台。体部は下方に開く。	
670	研磨器	研磨器	(13.2)		-			-	内・灰白 外・灰白	底部のみ	圓軸ナメ。外腹大井底は不定方向のナメ。	渦巻は丸い。体部から江幡部にかけて大きく彎曲する。	
671	研磨器	研磨器						-	内・灰 外・灰	圓軸ナメ。透けはハタケヌリ。頂上より引かれて角は残る。	端は厚く、縫合在が顯る。縫合は上方に覆えられる。		
672	研磨器	研磨器						-	内・灰 外・灰	底部	圓軸ナメ。	端に沈殿により、筋格子が施される。	
673	研磨器	研磨器	(7.6)		-			-	内・灰 外・灰	白練部1/10	圓軸ナメ。	全体に薄い。	

第87表 6区第1面出土土器観察表(2)

報告番号	種別	器種	法 庫(cm)						色 調	残存状況	調 整	形態の特徴	備考
			口径	器高	底径	盤径	最大径	折数					
674	須恵器	盃	—	—	—	—	—	—	内: 黄褐色 外: 灰白色	底部1/5. 盤部1/6.	回転せず。盤部と体部は複合化される。	底部にはは上方へ傾き、体部との境に鋸い突起がある。	
675	須恵器	盃	—	—	—	—	—	—	内: 灰白色 外: 灰白色	底部1/6.	回転せず。外側は回転せず。内側底部はハサギ切り。外側底部はハサギ切り。	小さな底部から大きく開出し、やや外方へ傾く。	
676	土師器	盃	11.5	2.4	6.4	—	—	19	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色	底部1/3. 盤部1/3.	回転せず。内面に縦部付近1/2 が削ぎ落し。底部は回転未切り。	全体に平らで、各部から縦筋が広がる。	
677	土師器	盃	—	—	—	—	—	—	内: 棕褐色 外: 棕褐色	盤口付の内 部	不明。	盤口の上方に縦が広く鋸い突起がある。盤口は短く突出。	
678	土師器	盃	—	—	—	—	—	—	内: 棕褐色 外: 棕褐色	盤口付のみ	体部はハサギ。底部は指揮せず。	縫は約3.3mmである。	
679	土師器	盃	—	—	—	—	—	—	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色	把手のみ	把手は指揮されず。	回転軸に突出し、やや上方を向く。	
680	土師器	盃	—	—	—	—	—	—	内: 棕褐色 外: 淡黄褐色	把手のみ	外側ハサギ。把手は上面が指揮せず。それ以外は指揮されず。	偏平な把手。	

(2)柱穴

第1面においていくつかの柱穴を検出したが、建物を復元することはできなかった。ただし、これらの柱穴から時期を特定できる遺物が出土している。そこで、これらの柱穴から出土した遺物について報告する。

P18

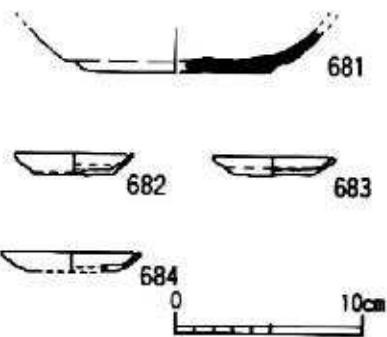
出土遺物 須恵器の碗が出土した。

須恵器の碗は底部と体部の間に段があり、突出している。底部のみであり全体の形状は不明である。

P19

出土遺物 土師器の小皿が出土した。3点図示できた。

682・683については完形で出土しており、また、684についても復元は不可能であったが本来は完形であったと思われ、柱穴から出土した土師器皿はいずれも完形で意識的に柱穴に入れられたものと思われる。小皿の形態はそれぞれ若干の違いがあるが、底部の調整はいずれも回転斜切りである。



第169図 P18・P19出土土器

第88表 P18・P19出土土器観察表

報告番号	種別	器種	法 庫(cm)						色 調	残存状況	調 整	形態の特徴	備考
			口径	器高	底径	盤径	最大径	折数					
681	須恵器	盃	—	—	—	—	—	—	内: 淡 外: 灰	底部1/4. 盤部1/4.	回転せず。底部外周は調整不明。	底部は平で、体部と外壁に低い鋸い段をもつ。	P18
682	土師器	小皿	11.6	2.1	1.2	1.3	—	—	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色	底部1/2. 底部1/2.	回転せず。外側底部は回転未切り。	全体に偏平で、底部から体部にかけて緩やかに傾斜する。体部は直線的。	P18
683	土師器	小皿	11.6	1.1	1.1	1.3	—	—	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色	底部1/2.	回転せず。外側底部は回転未切り。	全体に偏平で、体部は大きめ傾斜する。	P19
684	土師器	小皿	11.4	1.0	1.0	1.6	—	—	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色	底部1/2. 底部1/2.	回転せず。外側底部は回転未切り。	全体に偏平で、底部から体部にかけて緩やかに傾斜する。	P19

(3) 土壙

SK60

検出状況

調査区の西端で検出されたが、擾乱が著しいため、全体の形状、および周辺の状況も不明である。確認できる他の遺構との切り合いは認められない。

形状・規模

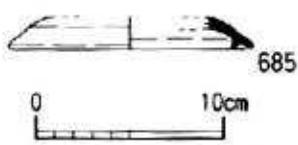
全体の形状は不明であるが、検出された部分では平面形は梢円形を呈している。現存部で長軸93cm、短軸46cmを測る。断面形は緩やかなU字形を呈しており、深さは検出面から11cmを測る。底面の規模は検出された部分で73cm × 35cmを測る。

埋土

しまりの強い灰褐色細砂～粗砂の1層からなる。

出土遺物

須恵器壺蓋が1点のみ図示できた。破片のため全体の形状は不明である。天井部は平らで、体部へ向かって大きく骨曲している。口縁端部にはかえりが認められる。



第190図 SK60出土土器

第89表 SK60出土土器観察表

発見番号	種別	器種	法量(cm)						色調	保存状況	調査	形態の特徴	備考
			口径	器高	底径	幅	最大径	指数					
680	須恵器	壺蓋	32.8	—	—	—	—	—	白～灰 青～灰	口縁丸い 底盤丸い	回転	U字形の底盤 体部はやや骨曲する。	

SK61

検出状況

調査区の西端で検出されたが擾乱が著しいため、全体の形状、および周辺の状況も不明である。確認できる他の遺構との切り合いは認められない。

形状・規模

梢円形の細長い土壙と円形で浅い土壙の2つが合わさっており、長軸1.38m、短軸80cmを測る。断面形は梢円形の土壙がU字形を呈し、円形の土壙が皿状を呈する。深さは検出面から9cmを測る。

埋土

灰褐色細砂から粗砂の1層からなる。

出土遺物

遺物の出土は全く認められなかった。

(4) 溝

SD95

検出状況

調査区の西側で検出された。溝の北側は擾乱のため削平されている。周辺の遺構は、西側については擾乱のため明らかではないが、東側については同じ方向を向いた溝が検出されており、本溝はその中で最も西側にあたる。切り合い関係はない。

形状・規模

北西側から南東側に向いた溝である。ほぼ直線的ではあるが、若干蛇行している。断面の形状はU字形を呈している。規模は、検出された長さ2.00m、幅1.05m～1.20m、平均幅1.13mを測り、深さは22cmである。

埋土

5層からなる。下層から順に灰白色粗砂～細砂、暗赤褐色粗砂～細砂、褐灰色粗砂～細砂、灰黄色極細砂、褐灰色細砂が堆積していた。全体に粗砂から細砂の粗い砂粒が堆積しており、砂粒の供給元は、層の堆積状況から東側であったと思われる。

出土遺物 瓢箪器の壺の口縁部が1点図示できた(第191図)。小片のため口径等は不明である。外面には波状文と沈線が交互に2段以上存在する。壺部は平らな面をもち角がある。

SD96

検出状況 調査区の西側で検出された。溝の北側は途中で途切れている。周辺には同じ方向を向いた溝が検出されている。切り合い関係はない。

形状・規模 北側から南側に向いた溝である。検出した範囲ではほぼ直線的に延びる。断面の形状はU字形を呈している。規模は、検出された長さ3.50m、幅40cm~45cm、平均幅43cmを測り、深さは11cmである。

埋土 1層からなり、褐灰色粗砂が堆積していた。

出土遺物 遺物は出土していない。

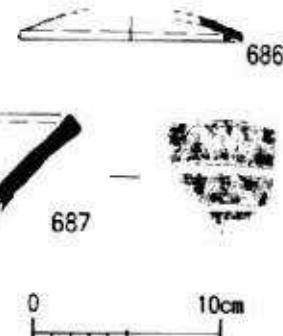
SD97

検出状況 調査区の西側で検出された。北側は擾乱のため不明で、南側は途中で途切れている。周辺には同じ方向を向いた溝が検出されている。切り合い関係はない。

形状・規模 北側から南側に向いた溝である。ほぼ直線的ではあるが、若干蛇行しており、歪である。断面の形状は平底を呈する。規模は検出された長さが4.70m、幅が60cm~1.30m、平均幅が95cmで、深さは8cmを測る。

埋土 1層からなり、暗灰褐色シルト質極細砂と暗黄褐色シルト質極細砂がブロック状に堆積していた。

出土遺物 瓢箪器の壺蓋が出土している。口縁部のみの破片であるため、全体の形態は不明であるが、口縁壺部にかけりがあり、天井部が傘状に高くなっている。



第191図 SD95・SD97出土土器

第90表 SD95・SD97出土土器観察表

報告番号	種別	器種	主な量(cm)						色調	残存状況	調査	形状の特徴	備考
			口径	器高	底径	底注	最大径	層数					
686	埴生器	杯蓋	(11.8)	—	—	—	—	—	内:灰 外:灰	口縁部/10	回転せず。	かけりは短い。体部は直線的。	SD95
687	埴生器	蓋	—	—	—	—	—	—	内:灰 外:灰	口縁部/10	回転せず。蓋残存は4本/ 1cm。	口縁部は直線的に外方に開く。 底部は四角く、やや攢み上げる。	SD96

SD98

検出状況 調査区の西側で検出された。溝の北側は途中で途切れている。切り合い関係はない。

形状・規模 北側から南側に向いた溝である。直線的であるが、北端が長方形に広がり歪である。断面形はリ字形を呈する。検出された長さは4.80m、幅は30cm~90cm、深さは5cmを測る。

埋土 1層からなり、灰色粗砂が堆積していた。

出土遺物 遺物は出土していない。

SD 99

検出状況	調査区のほぼ中央で検出された。溝の北側は調査区内で途切れている。東側については、擾乱のため明らかではない。切り合い関係はない。
形状・規模	南東側から北西側に向いた溝である。擾乱等のため全体の形状は不明である。断面形は平底を呈する。検出された長さは1.40m、幅は45cm~50cm、深さは7cmを測る。
埋土	1層からなり、暗灰褐色細砂~粗砂が堆積していた。
出土遺物	遺物は出土していない。

SD 100

検出状況	調査区のほぼ中央で検出された。両端は擾乱のため不明である。切り合い関係はない。
形状・規模	南側から北側に向いた溝である。検出された範囲はわずかであるが、その中ではほぼ直線的に伸びている。断面の形状は平底を呈している。規模は、検出された長さ1.70m、幅43cm~45cm、平均幅44cmを測り、深さは7cmである。
埋土	1層からなり、褐灰色粗砂~細砂が堆積していた。
出土遺物	遺物は出土していない。

SD 101

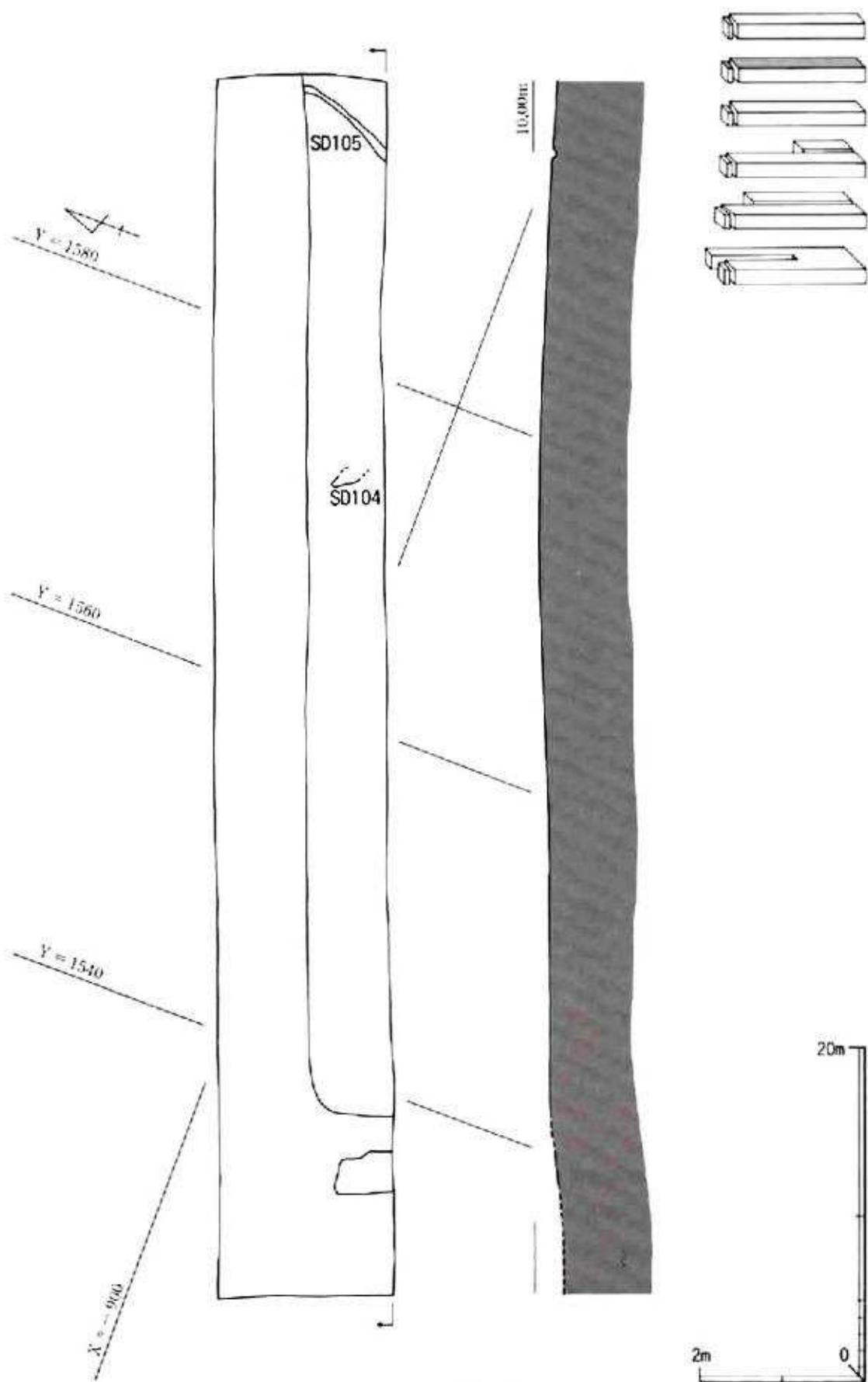
検出状況	調査区東側で検出された。南北両側が擾乱のため不明である。切り合い関係はない。
形状・規模	南東から北西に向いた溝である。検出範囲はわずかであるが、ほぼ直線的に伸びている。断面はU字形を呈し、検出された長さ1.70m、幅55cm~65cm、深さ22cmを測る。
埋土	1層からなり、淡灰色細砂~粗砂が堆積していた。
出土遺物	遺物は出土していない。

SD 102

検出状況	調査区東側で検出された。北側が擾乱のため削平されている。切り合い関係はない。
形状・規模	北西側から南東側に向いた溝であるが、途中で大きく南側に屈曲している。断面形はU字形を呈している。検出された長さは6.80m、幅は25cm~50cm、深さは75cmを測る。
埋土	1層からなり、暗灰褐色粗砂~細砂が堆積していた。
出土遺物	遺物は出土していない。

SD 103

検出状況	調査区の東端で検出された。北側は擾乱のため削平されており、南側は途中で途切れている。東側が調査区の制限のため明らかではないが、西側については周辺に遺構は検出されていない。切り合い関係はない。
形状・規模	東側から西側に向いた溝である。ほぼ直線的ではあるが、若干蛇行している。断面形はU字形を呈している。検出された長さは1.45m、幅は25cm~40cm、深さは5cmを測る。
埋土	1層からなり、褐灰色細砂~中砂が堆積していた。
出土遺物	遺物は出土していない。



第192図 6区第2面

3. 第2面の遺構と遺物

(1) 第2面の出土遺物

出土遺物

いずれも遺存状況は悪く、完形に復元できるものはわずかで、大半が小片で出土している。図示し得たのは須恵器で、いずれも飛鳥～奈良時代に属す。環G蓋、環B、甕が出土した。

環G蓋

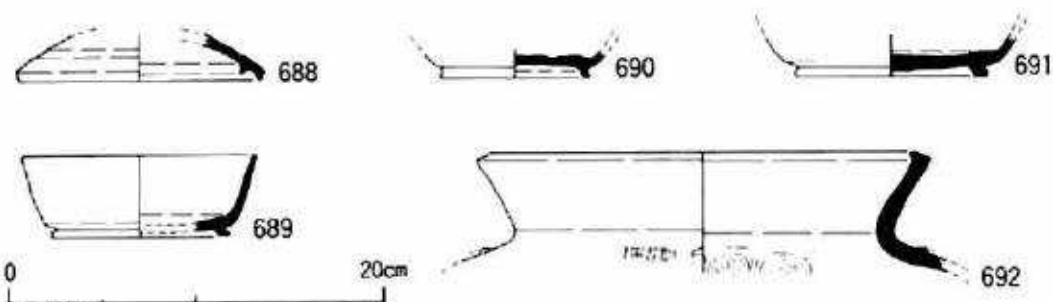
やや丸みをもった体部で、口縁端部にはかえりがある。

環B

ほぼ全体が復元できた689を見ると、底部から体部へ大きく屈曲し、体部は直線的にやや外方へ開きながら延びる。高台は体部の屈曲部分からやや内側に貼り付けられ、低く外方へ開く。690・691は底部のみ残存しているが、690は全体に薄く小さいのに対し、691は太くやや大きい。

甕

口縁部から体部にかけて残存している。口縁部は面を持ち、内面にやや折り返される。体部外面には付着物が認められるが、何であるかは不明である。



第193図 6区第2面出土土器

第91表 6区第2面出土土器観察表

器名 番号	種類	器種	寸 数(cm)					性 調	残存状況	調 整	不規格外壁	備考
			口径	底高	底径	頸径	最大径					
688	須恵器	环蓋	12.7					内・底白 外・灰	口縁部1/2 底部1/2	回転ナガ	全体に山形で、あまりはねて、 右下内縮する。	
689	須恵器	环身	12.4	—	1.8-6	—	—	内・底 外・灰	口縁部1/2 底部1/2	回転ナガ、外周部はハリナギ の接回転ナガ	高台は、貼り付けられており、外 方に開く。体部は上方へ屈曲。	
690	須恵器	环身	—	—	1.7-9	—	—	内・底 外・灰	底部1/2	回転ナガ、外周部はハリナギ の接回転ナガ	高台は丸く、外方へやや開く。 底部は若干盛り上がる。	
691	須恵器	环身	—	—	1.9-8	—	—	内・底 外・灰	底部1/4	回転ナガ	高台は、断面左斜で貼り付け されている。	
692	須恵器	甕	22.4					内・底 外・灰	口縁部1/4	回転ナガ、体部外周は平行ナ ガナギ、内面は同じ内丸	口縁部は直線的で傾き、底部 が内側に屈曲する。	

(2) 溝

SD105

検出状況

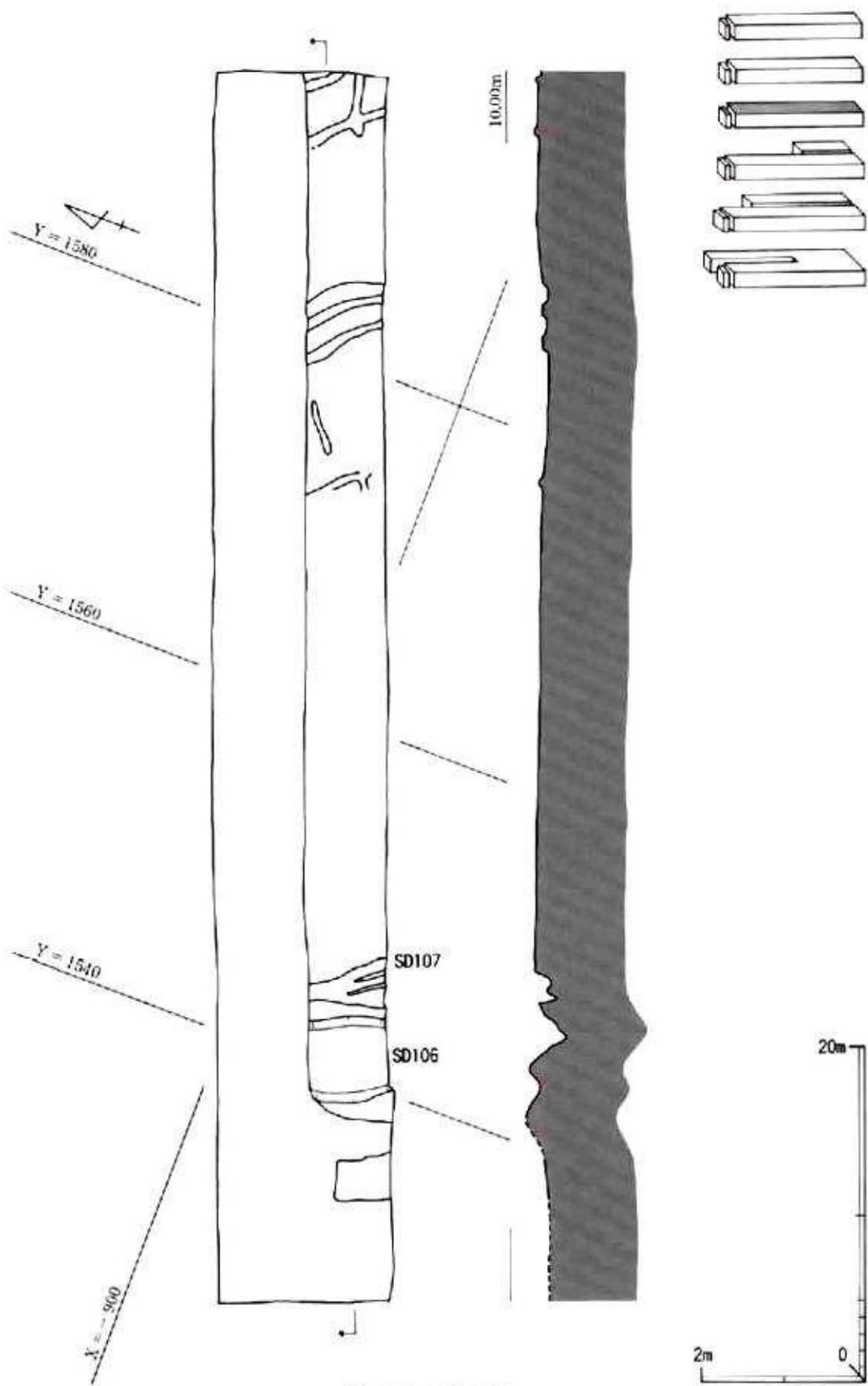
調査区の東端で検出された。溝の北側は攪乱のため削平されている。東側については調査区の制限のため不明であるが、西側については周辺に遺構は検出されておらず、約20m離れたところでSD104が検出されているのみである。切り合い関係は認められない。

形状・規模

南側から北側に向いた溝である。検出した範囲ではほぼ直線的に延びているが、北側で若干西側に振れている。断面の形状はU字形を呈している。規模は、検出された長さ2.47m、幅30cm～50cm、平均幅40cmを測り、深さは4cmである。

出土遺物

遺物は出土していない。



第194図 6区第3面

4. 第3面の遺構と遺物

(1) 第3面出土遺物

出土遺物

弥生時代後期と古墳時代末～奈良時代の土器が出土している。

弥生後期

壺と鉢が出土している。

奈良時代

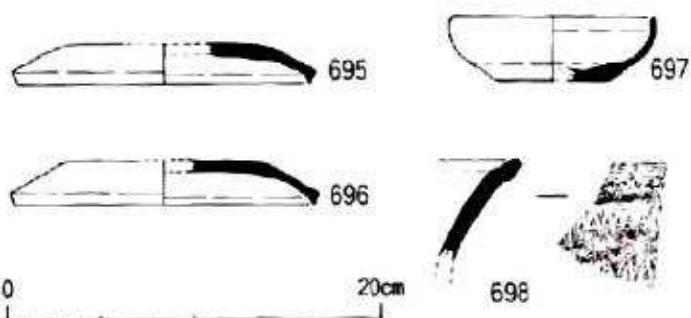
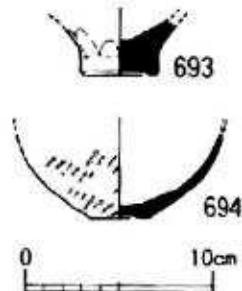
須恵器の壺B蓋、壺G、壺が出土している。

須恵器

壺B蓋は若干の器高の違いがあるものの、図示した2点はほぼ同じ形態である。

壺Gは底部が平らで突出しており、体部は口縁部に向かって第195図 6区第3面出土土器
緩やかに彎曲している。

壺は、口縁端部が外側にやや膨らみ、その上に列点文が、その下方に波状文がある。



第196図 6区第3面出土土器(2)

第92表 6区第3面出土土器観察表(1)

番号	器種	法 量(cm)	調 整・特 徴	色 調	残 存 部	備 考
693	壺	口径 底径 腹径	外側：底部カビトキニ。 内側：ナマ調整。	外側：朱 内側：茶	底部	
694	鉢	口径 周径 腹径	外側：底部・体部凹凸調節。底部にナマ。	外側：褐 内側：茶	体部	底部深行者

第93表 6区第3面出土土器観察表(2)

報告 番号	相 対 高	器 種	法 量(cm)					色 調	残 存 部	調 整	特 徴	備 考
			口徑	底径	腹径	周径	最大径					
695	須恵器	壺蓋	15.7		—			内：灰白 外：灰	口縁部1/4 底部	回転ナギ。	体部はやや彎曲し、口縁部端 部は下方へ屈曲する。	
696	須恵器	壺蓋	16.1					内：灰 外：灰	口縁部1/6 底部	回転ナギ、外腹と井戸は直角 ヘラナスリ。	内井戸1/3、口縁部2至外方に 直線的に延び、底部は丸く彎曲。	
697	須恵器	壺身	10.8	3.4	5.5	—		内：黒褐色 外：黒褐色	口縁部1/4 底部1/5	回転ナギ。外底直部はへき切 りナマ調整。内腹底に自然縫。	底部は平て、体部は丸く彎曲。 口縁部は上を向く。	
698	須恵器	壺			—			内：灰 外：灰	口縁部1/6 底部	回転ナギ。口縁部端部：刻内文。 側面に虎縞と波状文を施す。	外方へやや傾く。口縁部端部 は突き出でて外方に彎曲。	

(2) 溝

SD 106

検出状況

調査区の西側で検出された。溝の北側は機乱のため削平されている。東側にはほぼ同じ方向のSD 107が検出されている。切り合ひ関係は認められない。

形態・規模 北から南に向いた溝である。平面形は歪であり、特に溝の底では凹凸が著しい。断面形は半底である。検出された長さは1.47m、幅は72cm~77cmで、深さは12cmを測る。

出土遺物 遺物は出土していない。

SD107

検出状況 調査区の西側で検出された。溝の北側は擾乱のため削平されている。西側にはほぼ同じ方向のSD106が検出されている。切り合ひ関係は認められない。

形態・規模 北側から南側に向いた溝である。全体の平面形は歪であり、南側が広がった三角形状を呈するが、溝の底は凹凸が著しく、南側では3本の溝に分かれている。規模は、検出された長さ4.70m、幅95cm~2.92m、平均幅1.94mを測り、深さは18cmである。

埋土 1層からなり、小礫混じり灰褐色中砂~粗砂が堆積していた。

出土遺物 遺物は出土していない。

(3) 水田跡

検出状況 ここで検出された水田跡は、扇状地の東側にあたる。遺存状況はあまり良好でなく、北側半分が削平され、残された南側でも畦畔が検出できたのは東側のみである。

検出した水田跡は、4・5区第1面から7区第5面に統くものである。完全に検出できた水田はないが、おそらく不定形の小区画水田であると思われ、9筆が確認できた。最も標高の高い水田はNo.9で9.62m、低い水田はNo.1で8.22mを測り、全体として南西方から北東方向に傾斜している。

畦畔の断面形態は主に台形状を呈しており、規模は平均して高さ3.3cm、幅4cmである。畦畔には杭列や脚木などは認められなかった。

水田に隣接する施設としては溝があるが、場所が離れており、水田との関係は不明である。また溝以外には、獸歎状に畦畔が平行するところがある。

水田の検出 水田の大半は粗砂から極細砂の、やや粗い砂によって覆われており、調査区の東端については遺存状況は良好であった。しかし、それ以外の場所では砂によって流されたためか、畦畔の遺存状況は悪かった。

水田 いずれの水田も完全に1筆が検出されたものではなく、全体の様相は不明である。畦畔の方向は、獸歎状に平行して検出された畦畔などから北西から南東方向を基準にしているようである。水口は、No.6とNo.7の水田の西端で畦畔が切れていることから、この部分が水口である可能性があるが、削平が著しいため、明らかでない。

畦畔 獣歎状に畦畔が平行する部分は、畦畔の幅80cm、高さ9cmで、他の畦畔と比較して幅が広く、高い。畦

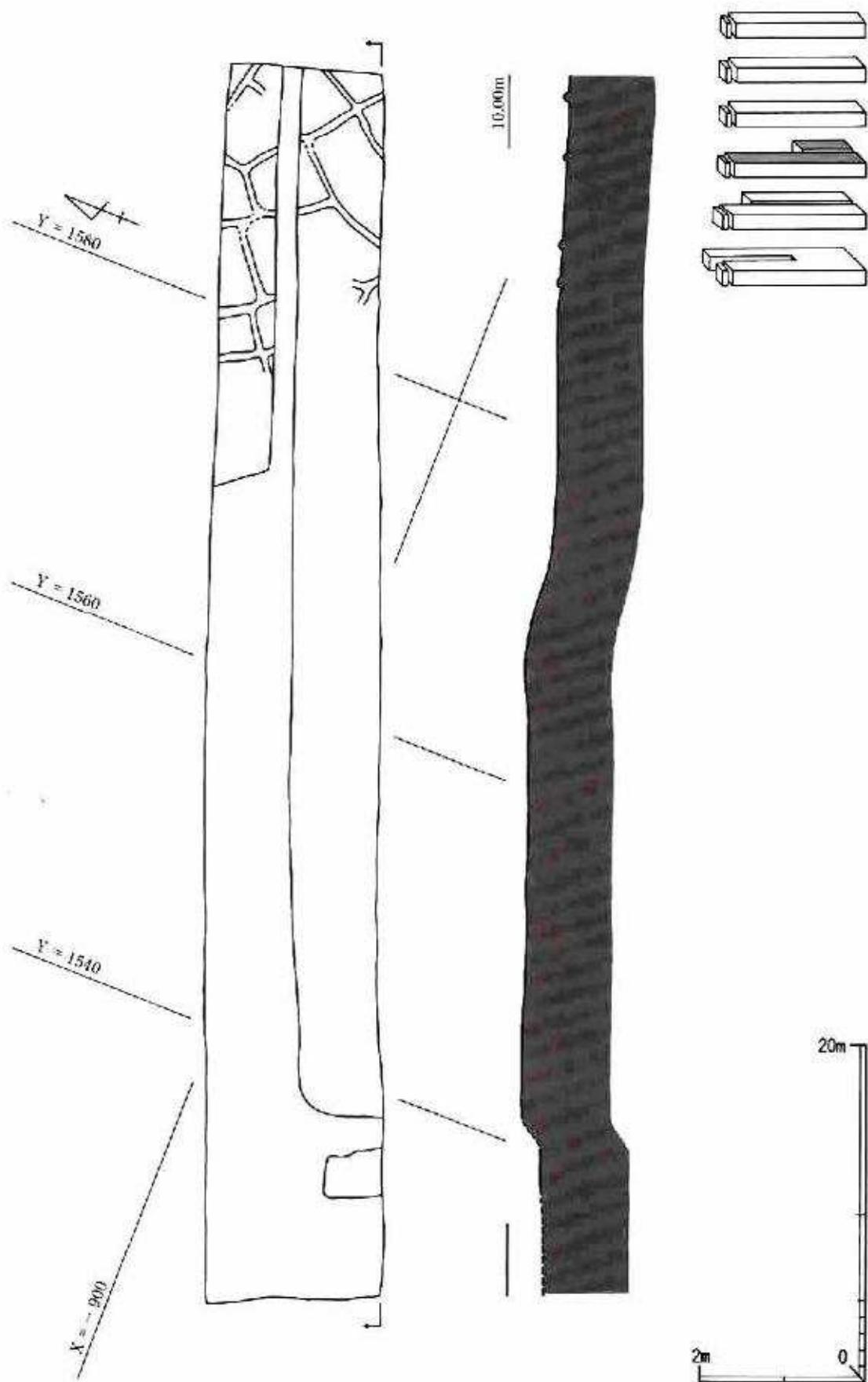


第197図 6区第3面水田跡

瞬間の距離は1.2mである。また、この周辺からは足跡が検出された。特に規則性は認められないが、円形に近いものと、人間のものと思われる長細いものの両者が認められる。

第94表 6区第3面 水田跡一覧表（単位はm、m²、下線は不明確なもの）

No.	面 積	標高の 平均	水田内の 比高差	No.	面 積	標高の 平均	水田内の 比高差	No.	面 積	標高の 平均	水田内の 比高差
1	<u>0.825</u>	8.220	<u>0.030</u>	4		<u>9.490</u>	<u>0.060</u>	7		9.546	<u>0.080</u>
2	<u>7.325</u>	<u>8.616</u>	<u>0.045</u>	5		<u>9.568</u>	<u>0.025</u>	8		9.611	0.015
3	3.125	<u>9.589</u>	<u>0.030</u>	6	5.250	9.556	<u>0.070</u>	9		9.621	<u>0.025</u>



第198図 6区第4面

5. 第4面の遺構と遺物

(1) 第4面の時期

出土遺物

壺・甕・高環が出土している。

壺

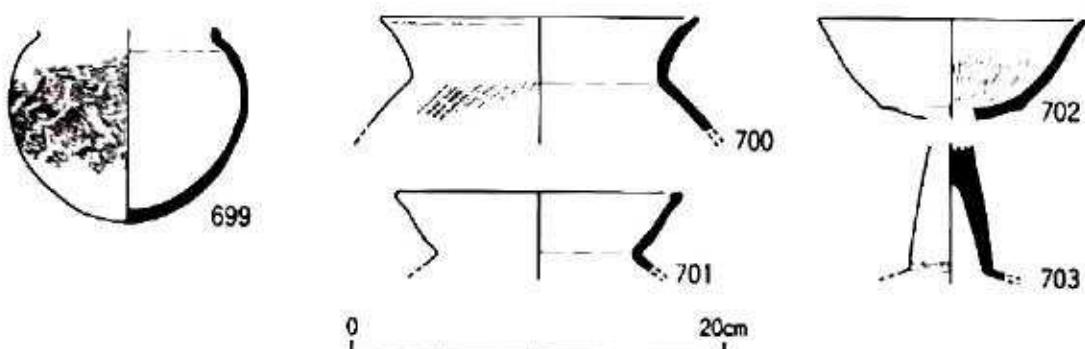
699の1個体で、直口壺の体部と考えられる。体部はほぼ球形をなし、底部は丸底を呈する。

甕

いわゆるV様式系甕と布留式甕が出土している。前者は700が、後者は701が該当する。

高環

环部と脚部が各1個体ずつ出土している。环部は深い环形を呈するタイプで、布留式甕に対応するものと考えられる。また、脚部の703についても、この环部に対応するものと考えられ、同一個体の可能性が高い。



第199図 6区第4面出土土器

第95表 6区第4面出土土器観察表

番号	器種	底面積(cm ²)	調査一括法	色調	残存率	備考
699	壺	直径: 16.4 脚径: 9.2 底径: 12.8	外側: 体部・下部ハサモモ模様・底足・体足上半部調整、内足上半部調整 内面: 底足上半部調整	外側: 黒褐色 内面: 淡黄	体部: 2 底足: 1	
700	甕	直径: 16.4 脚径: 11.2 底径: 13.8	外側: 体部・下脚部付近底足、上脚部付近上部調整 内面: 体部上半部調整、下脚部付近上部調整	外側: 黑褐色 内面: 黑褐色	上脚部: 1 下脚部: 1	
701	甕	直径: 11.9 脚径: 11.0 底径: 11.0	外側: 体部・下脚部付近上部調整 内面: 脚部上部調整	外側: 黑褐色 内面: 黑褐色	下脚部: 1	下脚部付近 底付近
702	高環	直径: 17.6 脚径: 12.3 底径: 12.3	外側: 体部・下脚部付近上部調整、下脚部付近上部調整 内面: 体部・下脚部付近上部調整、下脚部付近上部調整	外側: 黑褐色 内面: 黑褐色	脚部: 1	
703	高環	直径: 22.3 脚径: 2.3 底径: 2.3	外側: 脚部ハサモモ模様、脚上半部調整の跡 内面: 脚部上部調整、脚上半部ハサモモ模様	外側: 黑褐色 内面: 黑褐色	脚部: 1 上部: 1	

(2) 水田跡

ここで検出された水田跡は、扇状地の東側にあたる。調査区の東端において良好に検出できたが、それ以外の場所では攪乱もあり、検出されていない。

検出した水田跡は、4・5区第2面から7区第6面に範くものである。ほぼ完全に検出できた水田跡は施7のみであるが、恐らく不定形の小水田であると思われ、合計16筆が確認できた。最も標高の高い水田は施3で9.87m、低い水田は施7で8.74mを測り、全体として西方向から東方向に傾斜している。

水田の検出

水田跡の大半は黄灰色の細繊維で覆われており、この層が認められる部分において水田

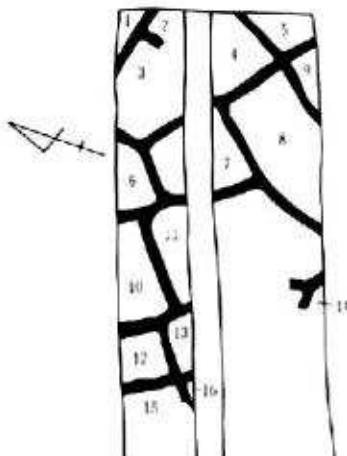
跡が良好に検出できた。他の場所では、上層の水田土壤層が重なり、検出することができなかった。

水田跡 完全に検出されたのはNo.7のみであるが、ほぼ全体の状況は把握できる。平面形はNo.8が長細いものの、他の水田は正方形に近い。

水口は、2と3の間で畦畔の途切れた部分があり、これが水口となる可能性があるが、明らかでない。

畦畔 畦畔の断面形態はいずれも台形状を呈しており、規模は平均して高さ5cm、幅4cmである。畦畔には杭列や樹木などは認められなかった。

畦畔の方向には、特に規則性は認められなかった。



第200図 6区第4面水田跡

第96表 6区第4面 水田計測表（単位はm、m²、下線は不明確なもの）

No	面積	標高の平均	水田内の比高差	No	面積	標高の平均	水田内の比高差	No	面積	標高の平均	水田内の比高差
1	1.550	9.378	0.090	7	13.525	8.747	0.100	13	2.700	9.461	0.055
2	3.875	9.290	0.145	8	18.200	9.343	0.150	14		9.387	0.020
3	13.375	9.871	0.120	9	2.175	9.283	0.085	15		9.503	0.075
4	7.950	9.322	0.125	10	8.250	9.471	0.060	16	0.375	9.465	0.025
5	3.700	9.288	0.080	11	30.475	9.444	0.075				
6	4.575	8.860	0.085	12	4.675	9.506	0.115				

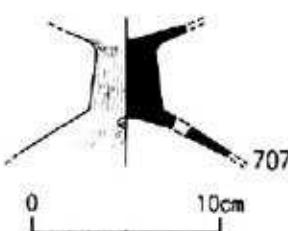
出土遺物 水田面の直上から数点の土器が出土している。器種としては、甕と高杯である。



甕 3個体図化したが、いずれも底部片で、突出した平底をなすものである。底径が小さく、底部を叩きにより成形していることから、失り底化の傾向が認められる。



高杯 707の脚部片1個体を図化した。

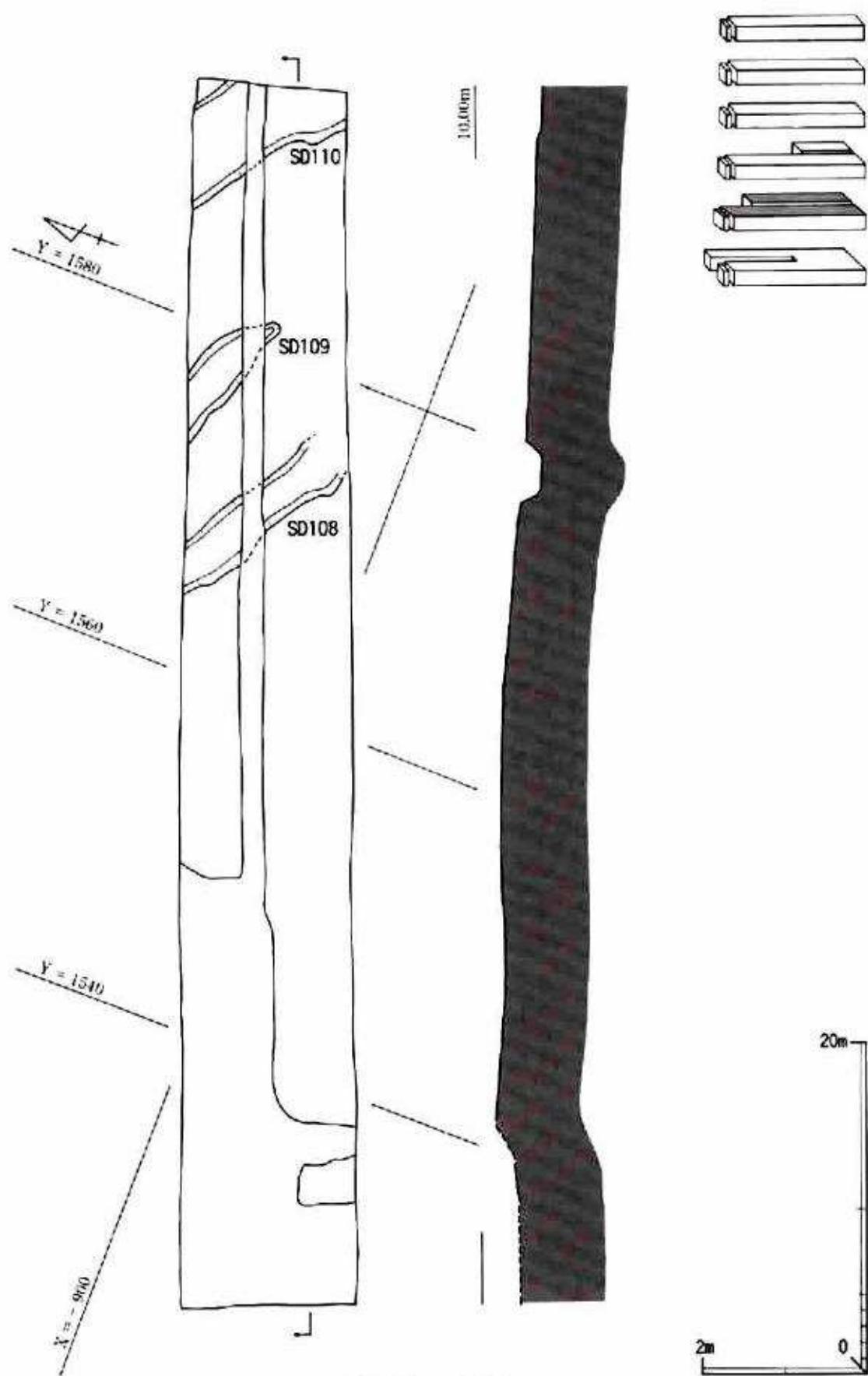


第201図 水田面直上出土土器

第97表 水田面直上出土土器觀察表

番号	品種	法 量(cm)	調 整 方 法	色 調	残存率	備 考
704	壺	口径: 約径14.3 脚径: 約高13.1 腹径:	外側: 腹部・体部叩き成形。 内面: ナマ調整。	外面: にぶい橙 内面: にぶい橙	底部3/4	
705	甕	口径: 約径13.5 脚径: 約高13.1 腹径:	外側: 底部～体部叩き成形後、底部エビオサエ。体部ナマ調整。	外側: 明暗法 内面: 明暗法	底部2/3	
706	甕	口径: 約径13.4 脚径: 約高13.0 腹径:	外側: 底部叩き成形。 内面: ナマ調整。	外面: にぶい橙 内面: にぶい橙	底部2/3	
707	高杯	口径: 約高17.0 脚径: 約径	外側: 腹部ペキシガキ、体部ペキシガキ。 内面: 腹部ナマ調整。	外面: にぶい橙 内面: にぶい橙	脚部1/2	

第5節 6区の造構と遺物



第202図 6区第5面

6. 第5面の遺構と遺物

(1) 第5面に伴う遺物

当遺構面に伴う上器は全く出土していない。

(2) 溝

SD108

検出状況

調査区の中央、やや東側で検出された。溝の中央、および南側は擾乱のため削平されている。東側にはほぼ同じ方向の SD109、SD110が検出されている。切り合い関係は認められない。

形状・規模

北西側から南東側に向いた溝である。ほぼ直線的に延びているが、溝の底では若干凹凸がある。断面の形状は平底を呈する。規模は、検出された長さ10.4m、幅2.70m～3.20mを測り、深さは12cmである。

埋土

2層からなる。下層は暗灰色極細砂混じりシルト、上層は灰色シルト混じり極細砂・細砂が堆積している。また、下層と溝底との間には植物遺体を含む暗黒灰色シルト層が認められた。いずれの層もほぼ水平に堆積している。

出土遺物

甕の口縁部片と体部片が出土しているが、いずれも小片のため同化できなかった。V様式系甕に分類されるものである。

SD109

検出状況

調査区の東側で検出された。溝の南側は擾乱のため削平されており、南端は途中で途切れている。東西両側にはほぼ同じ方向の SD108、SD110が検出されている。切り合い関係は認められない。

形状・規模

北側から南側に向いた溝である。ほぼ直線的に延びている。断面の形状は平底を呈している。規模は検出された長さが8.85m、幅が3.20m、深さは5cmを測る。

出土遺物

遺物は出土していない。

SD110

検出状況

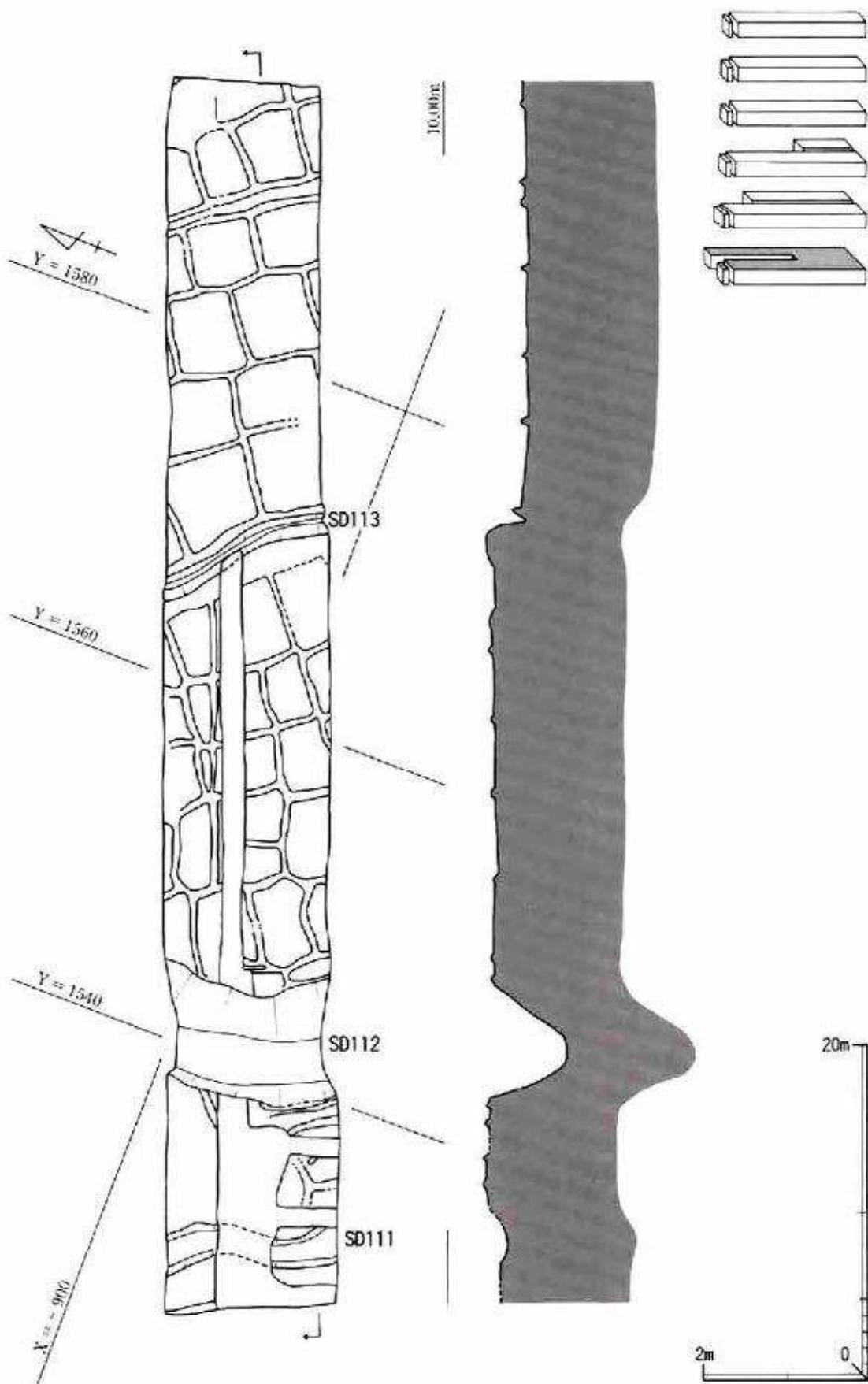
調査区の東端で検出された。溝の中央は擾乱のため削平されている。また調査区の制限により東側は不明である。西側にはほぼ同じ方向の SD108、SD109が検出されている。切り合い関係は認められない。

形状・規模

北側から南側に向いた溝である。全体の平面形は不明であるが、検出された範囲ではほぼ直線的に延びるものと思われる。規模は、検出された長さ10.62m、幅5.31mを測り、深さは10cmである。

出土遺物

遺物は出土していない。



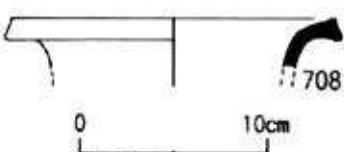
第203図 6区第6面

7. 第6面の遺構と遺物

(1) 第6面出土土器

出土遺物

壺1個体が出土している。708は広口壺の口縁部である。斜土方に立ち上がる頸部に対して、口縁部を水平方向に屈曲させ、下端部を水平方向につまみ出すことによって、端面を拡張している。



第204図 6区第6面出土土器

第98表 6区第6面出土土器観察表

番号	種類	法 量(cm)	調 査 方 法	色 調	残 存 状 態	備 考
708	壺	11様:17.21 底径: 高さ: 腹径:	外面:頭部子午調整、口縁部横十字調整 内面:頭部子午調整、口縁部横十字調整	外面:褐色 内面:褐色	口縁部L/S	

(2) 溝

SD111

検出状況

調査区の西端で検出された。溝の中央、および南東隅は攪乱のため削平されている。切り合ひ関係は認められない。

形状・規模

北から南に向いた溝である。ほぼ直線的に延びているが、緩く蛇行している。断面形は平底を呈する。検出された長さは7.15 m、幅は1.63 m~2.15 mで、深さは50 cmを測る。

埋土

3層からなるが、大きく上層と下層の2層に分けることができる。下層は西側と東側の両方に分かれて堆積しており、灰黄色粗砂である。上層は溝の中央に堆積しており、小礫混じりの灰色細砂~中砂である。

出土遺物

遺物は出土していない。

SD112

検出状況

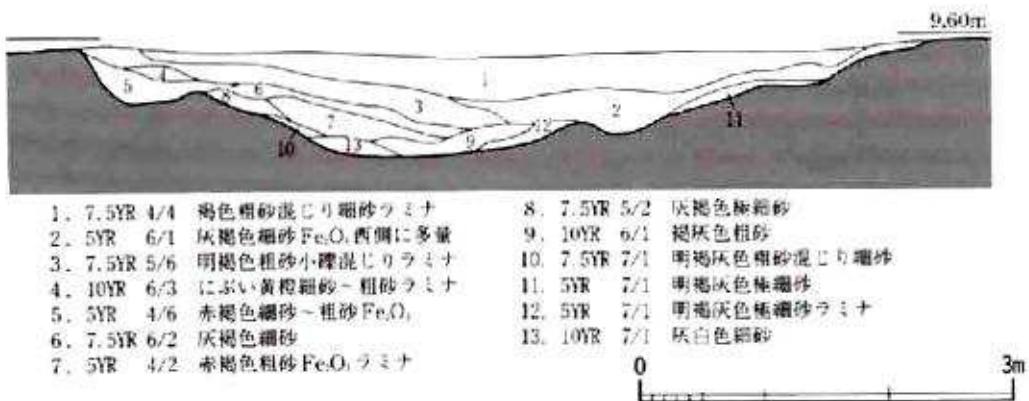
調査区の西側で検出された。溝の中央部は、溝肩の部分のみ攪乱のため削平されているが、下端までは及んでいない。切り合ひ関係は認められない。

形状・規模

北から南に向いた溝である。ほぼ直線的に延びている。断面形は深い皿形を呈するが、凹凸が著しい。検出された長さは10.30 m、幅は5.90 m~6.78 m、深さは76 cmを測る。

埋土

全部で13層が確認できたが、全体的に層を構成する砂粒の粒子は粗く、極細砂~粗砂で



第205図 SD112

ある。堆積方向は東側からが中心で、最終的には幅の広い浅い溝になり、褐色粗砂混じり細砂がラミナ状に堆積して埋没している。

出土遺物 瓢・壺・高杯が出土している。

壺

二重口縁壺と直口壺の口縁部が出土している。

二重口縁壺は、709の1個体である。外反する頭部から口縁部が水平方向に伸び、さらに斜上方に2次口縁をのばしている。2次口縁外面には6条の擬凹線を施し、その上に竹簀円形浮文を貼り付けている。

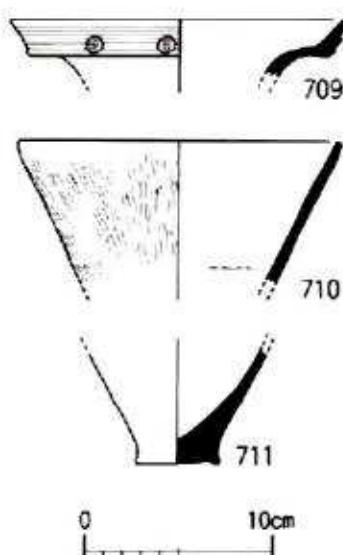
直口壺は710の1個体である。

甕

711の底盤1個体が出土している。

高杯

脚部片が出土しているが、小片のため回復できなかつた。



第205図 SD112出土土器

第99表 SD112出土土器観察表

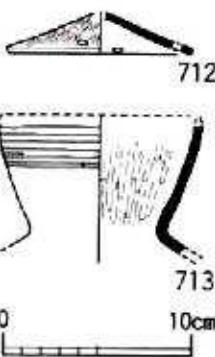
番号	名 称	法 量(cm)	調 整 方 法	色 調	残 在 量	備 考
709	壺	口径: 19.8 底径: 脚径:	外側: 頭部下部調整、口縁部横土下調整 内側: 頭部・口縁部下部調整。	外側: に赤い青緑 内側: に赤い本緑	1: 頭部1/5	
710	壺	口径: 17.0 底径: 脚径:	外側: 頭部下部調整、口縁部横土下調整。 内側: 頭部下部調整後土下調整、口縁部横土下調整。	外側: に赤い青緑 内側: に赤い青緑	口縁部1/5	
711	甕	口径: 14.5 底径: 脚径:	外側: 依然、全体的に削平化、底部セッキサニ、底部土下調整 内側: 下部調整	外側: に赤い青緑 内側: に赤い青緑	底部1/3	

SD113

検出状況 検出状況 調査区の中央、やや東寄りで検出された。溝の中央の西側は擾乱のため削平されている。東側には溝に平行して畦畔があり、そのさらに東側には水田が広がっている。また、溝の西側には大畦畔が溝に平行しており、そのさらに西側には東側と同様に水田が広がっている。

形狀・規模 南東から北西に向いた溝である。若干蛇行している。断面の形状は歪なU字形を呈しているが、形が歪なのは堆積物による削平のため、本来の形状を示してはいないものと思われる。検出された長さは10.3m、幅は70cm~1mで、深さは40cmを測る。

出土遺物 盖が出土している。712の1個体である。傘形を呈する小型の蓋である。紐穴が2穴で1対をなしている。



第207図 SD113出土土器

第100表 SD113出土土器観察表

番号	名 称	法 量(cm)	調 整 方 法	色 調	残 在 量	備 考
712	蓋	口径: 10.0 底径: 脚径:	外側: ハリ土下不. 内側: 下部調整。	外側: に赤い青緑 内側: に赤い青緑	1/3	
713	壺	口径: 14.8 底径: 脚径: 15.2	外側: 頭部下部調整。 内側: 頭部セッキサニ、頭部・口縁部下部調整。	外側: に赤い青緑 内側: に赤い青緑	頭部1/4	

(3) 水田跡

検出状況

ここで検出された水田跡は、扇状地の東側にあたり、今回調査した中で最も遺存状況が良好である。西端がやや不明瞭であり、かつ西半分には部分的に擾乱により削平されているものの、ほとんど調査区全域に広がっている。当然、今回調査した範囲以外にも広がっているものと思われる。

検出した水田跡は、4・5区第4面から7区第7面に續くものである。いずれも不定形の小区画水田で、完全に検出できなかったものも含めて合計50筆が確認できた。完全に検出できた水田1筆の平均面積は9.32m²である。最も標高の高い水田はNo.39で10.57m、低い水田はNo.16で8.29mを測り、全体として西方向から東方向に傾斜している。

畦畔の断面形態はいずれも台形状を呈しており、規模は平均して高さ5cm、幅35cmである。畦畔には杭列や胸木などは認められず、また、水口も確認できなかった。

水田跡以外にも、関連する施設として大溝(SD112)、溝(SD113)、大畦畔、獸敵があり、水田はこれらの施設により東西に4地点に区分することができる。これらの施設はいずれも北西から南東方向を向いている。

以下、水田跡についての記述は第208図のように1区からIV区に分けて記述する。

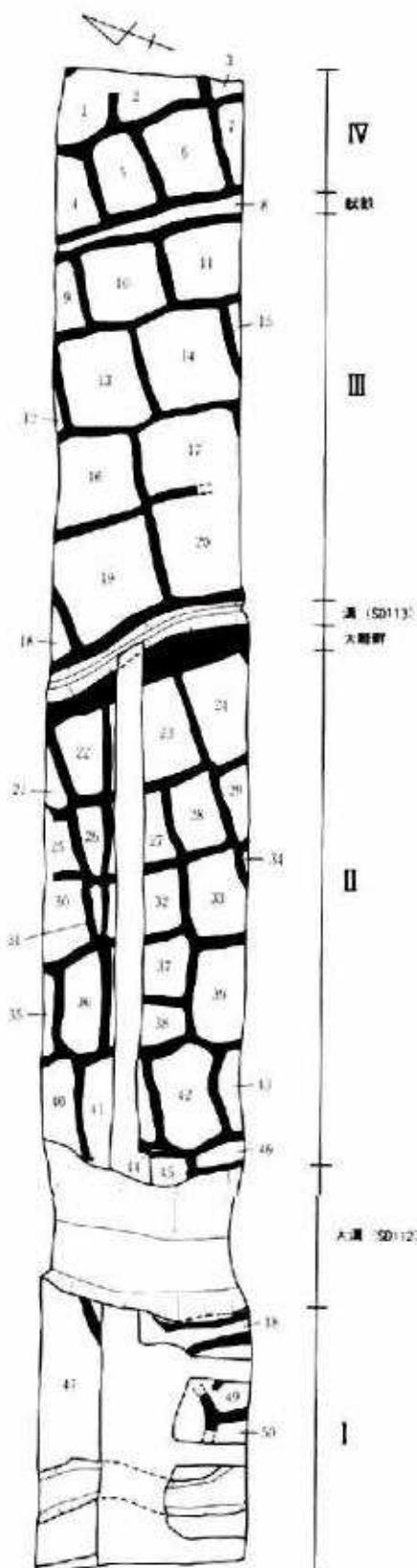
水田の検出

水田跡の大半は灰白色極細砂によって埋没しており、検出作業は容易に行うことができた。しかし、この層が供給されていない部分、すなわち西端部分については、上層に中～大礫混じり粗砂～細砂の粗い層によって覆われており、遺存状況は悪かった。

上面の遺構とは土壤化していない層によつて明確に分かれしており、部分的にでも面として認識できるものであった。

1区の水田

調査区の西端とSD112に挟まれた部分である。畦畔はSD111とSD112に挟まれた部分で検出されたが、遺存状況は悪く、完全に水田1筆が検出できたものはない。畦畔の交



第208図 第6面水田跡

差はNo47、49、50をY字形に区画するものののみ確認される。No47については畦畔が確認できなかったが、その面積の大きさと同一の水田で9.5cmという比高差があることから、本来は何筆かに分かれていたものと思われる。

II区との境には大溝のSD112があり、その西側には溝に沿って畦畔が認められる。

II区の水田 SD112と大畦畔に挟まれた部分である。中央が攪乱されているものの、遺存状況は良好で、ほぼ全容が明らかである。この地区からは合計26筆の水田が確認され、その内全体が検出できたのは13筆で、平均面積は9.70m²である。標高はI区が平均9.53mであるのに対し、II区は平均9.50mであり、II区の方が低い。

平面形 長方形や亀甲形であるが、中央や北側のNo22・26・31は平面形が三角形を呈しており、周辺の水田と様相を異にしている。

畦畔 No.22・23・26・27に挟まれた畦畔、No.27・28・32・33に挟まれた畦畔、No.26・27・31・32に挟まれた畦畔がほぼ十字形に近い交わりをしているが、それ以外は全て三叉状に交わっている。

II区東端は大畦畔に接続し、その境は緩やかに彎曲しているものの、ほぼ直線である。

大畦畔 大畦畔は、調査区を横切るように検出され、およそ北西-南東方向を向いている。断面形は平らな蒲鉾状を呈しており、明瞭な平坦面は認められない。高さはII区東端水田面から5.4cm、溝底から45cm、III区西端水田面から28cmである。幅は最大で南側の1.90m、最小で北側の1.30mである。足跡は認められなかった。

III区の水田 SD113から獸頭に挟まれた部分である。遺存状況は良好で、ほぼ全容が明らかである。この地区からは合計12筆の水田が確認され、その内ほぼ全体が検出できたのは3筆のみで、平均面積は17.11m²である。標高はII区が平均9.50mであるのに対して、III区は平均9.01mであり、III区の方が低い。

平面形 西側の畦畔に接するNo.19が正方形に近いと思われ、その東側のNo.16・17・14は五角形、その東側のNo.13が亀甲形、その東側の獸頭に接するNo.10・11が五角形を呈している。

畦畔 No.16・17・19・20に挟まれた畦畔が十字形に近い交わりをしているが、それ以外は全て三叉状に交わっている。

III区の西端はSD113と水田とを区画する畦畔が検出された。この畦畔は溝底からの高さ17cm、III区西端水田面からの高さ10cm、幅最大80cm、最小60cmを測り、他の畦畔



第209図 SD113と大畦畔

よりも大きい。東端は獸畠の西側畔に接続しており、亀甲形を意識するかのうように、多少張らみをもっている。

獸畠 獣畠は大畔と同じく調査区を横切るように検出され、およそ北西・南東方向を向いている。幅は最大で南側の1m、最小で北側の38cmである。獸畠として造られた畔は他の畔とはほぼ同じ規模と形で、平均幅30cm、高さ5.8cmである。

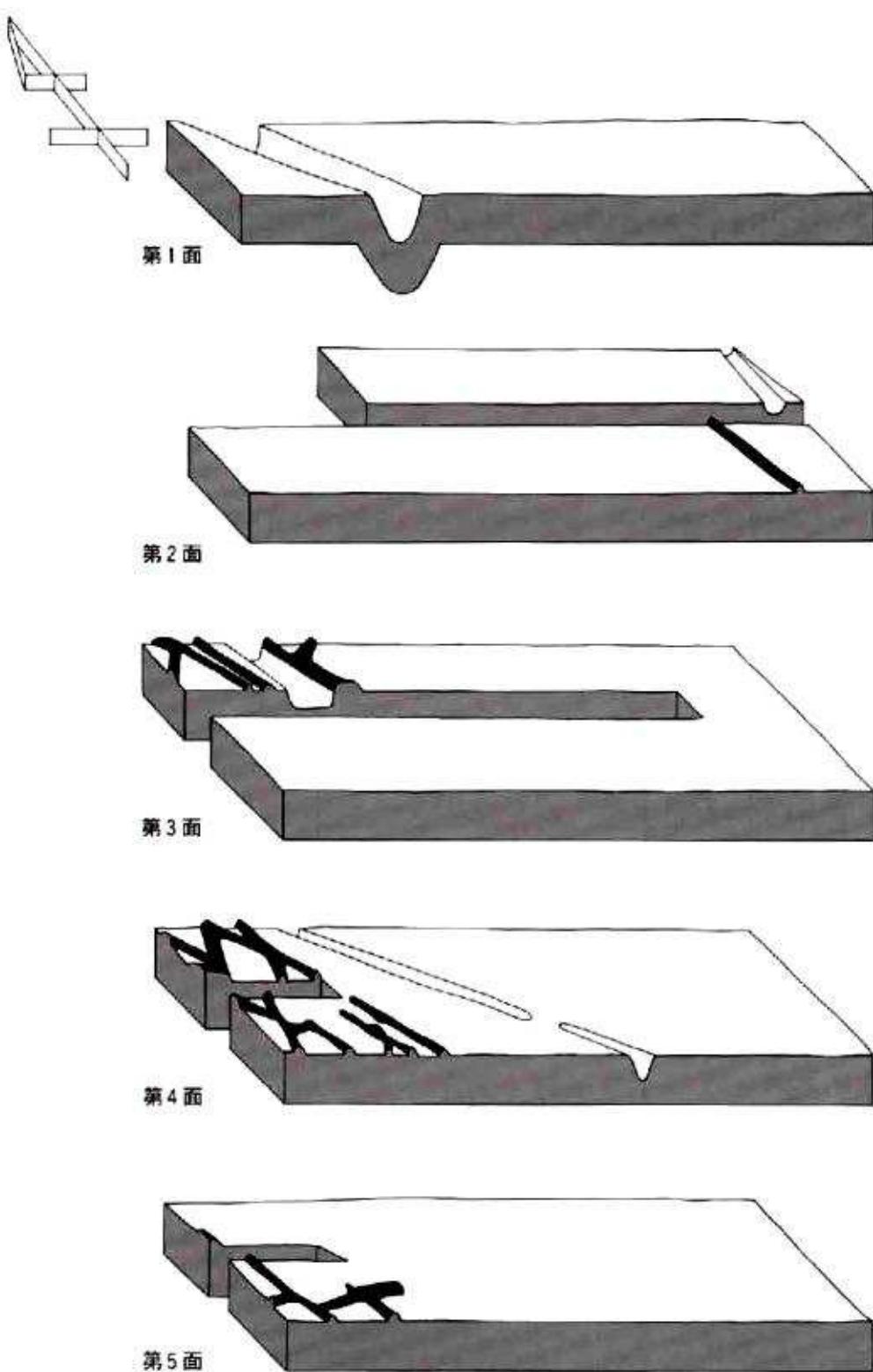
獸畠に挟まれた水田No.8には、他の水田を覆っていた灰白色極細砂が同じように堆積しており、特に特徴的な堆積状況を示しているものではなかった。

IV区の水田 獣畠と調査区東端に挟まれた部分である。遺存状況は良好であるが、No.1の水田のみ畔が検出できなかった。おそらく上層の堆積によって削平されたものと思われる。この地区からは合計7筆の水田跡が確認され、その内ほぼ全体が検出できたのは2筆のみで、平均面積は11.1m²である。標高はIII区が平均9.01mであるのに対して、IV区は平均8.92mであり、IV区の方が低い。

水田跡の平面形は、No.6が長方形を呈しているが、No.5は五角形を呈している可能性がある。畔はNo.2・3・5・7に挟まれたところでは十字形に交わっているが、No.1・2・5に挟まれたところでは三叉状に交わっている可能性がある。

第101表 第6面水田跡一覧表（単位はm、m²、下線は不明確なもの）

No.	面積	標高の平均	水田内の比高差	No.	面積	標高の平均	水田内の比高差	No.	面積	標高の平均	水田内の比高差
1		9.121	0.070	18	1.850	9.161	0.085	35	2.025	9.513	0.080
2	7.125	8.451	0.040	19	24.700	9.112	0.150	36	8.875	9.459	0.090
3	1.300	8.700	0.030	20	19.750	9.061	0.195	37	10.250	9.448	0.070
4	6.300	9.108	0.050	21	2.325	9.546	0.095	38	7.850	9.438	0.040
5	9.200	9.055	0.055	22	8.375	9.473	0.060	39	11.150	10.572	0.055
6	13.000	9.015	0.090	23	19.050	9.460	0.045	40	6.675	9.503	0.105
7	4.000	8.980	0.070	24	13.850	9.400	0.060	41	14.375	9.492	0.110
8		9.062	0.185	25	3.525	9.531	0.130	42	13.200	9.403	0.070
9	4.025	9.148	0.030	26	3.800	9.473	0.040	43	3.475	9.399	0.165
10	13.575	9.086	0.110	27	10.300	9.474	0.050	44		9.465	0.035
11	12.800	8.986	0.100	28	7.925	9.428	0.055	45	2.525	9.476	0.025
12		9.132	0.015	29	3.875	9.381	0.025	46	3.000	9.411	0.070
13	17.875	9.183	0.085	30	8.275	9.523	0.095	47		9.547	0.095
14	19.875	8.997	0.135	31	1.125	9.471	0.060	48		9.491	0.125
15		8.936	0.050	32	10.575	9.454	0.055	49	2.475	9.549	0.030
16	15.875	8.290	0.130	33	10.450	9.403	0.045	50		9.525	0.040
17	18.050	9.020	0.055	34		9.403	0.005				



第210図 7区の遺構

7K



第6節 7区の遺構と遺物

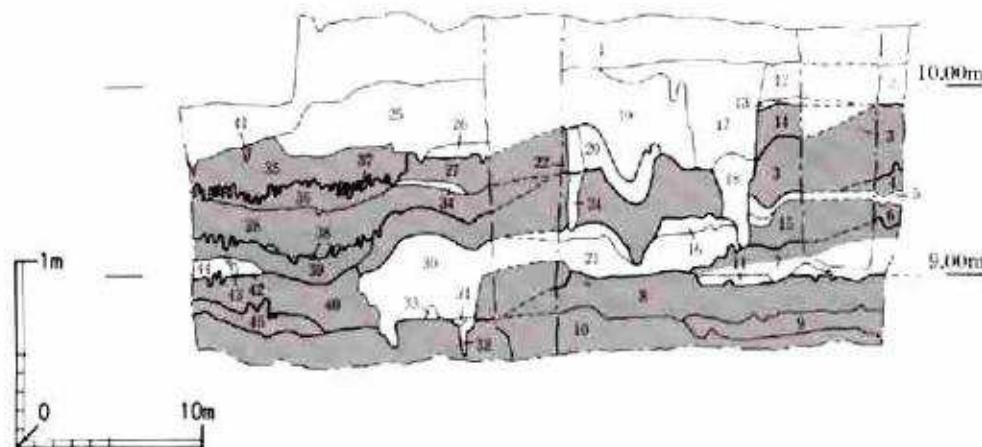
1. 概要

(1) 概略

- 位置** 6区の東側に位置し、今回の調査で最も東側の調査区にあたる。6区とはサイフォンを境としている。また、東側は祇園堂川が流れている。
- 旧淡路鉄道** 当地区は、旧淡路鉄道の「先山」駅にあたり、当地区的北側は西端から東端までプラットホームにあたり、その遺構が調査時には遺存していた（図版65・66）。
- 第1面は、北側全体が旧淡路鉄道の建設に伴い削平を受けていた。第2面については、北側の西約1／4が同じく削平されていた。またその東側についても、淡路鉄道に伴う側溝により掘削を受けていた。
- 第3面については、東側の一部を除いて、側溝の掘削を受けていた。第4面と第5面については、側溝の掘削は西側の一部に限られる。
- 遺構の検出** 第1面から第5面の5面にわたって遺構を検出した。
- 第1面** 検出した遺構は、溝1条に限られる。時期は、奈良時代と考えられる。
- 第2面** 調査区北東部で検出した溝1条と、その南北側で検出した畦畔状の高まり1本である。出土遺物から奈良時代の遺構と考えられる。
- 第3面** 調査区北西部で畦畔を作り水田跡を検出した。畦畔は北西—南東方向を基準とし、それに直交する畦畔も認められる。
- 第4面** 西側を中心に畦畔を作り水田跡を検出した。調査区中央部から東側は激しい洪水砂の堆積が認められ、明確な遺構を検出することはできなかった。6区第4面に対応するものと考えられる。
- 第5面** 第4面と同様、西側の一部で畦畔を作り水田跡を検出し、これより東側については、洪水砂の堆積層となっていた。当遺構面に伴う土器が出上していないため、時期を特定することは困難であるが、6区との関係から、弥生時代後期と考えられる。



第211図 7区の調査



第212図 7区土層断面図(南面)

第102表 7区土層注記

番号	色調	土色番号	砂粒の大きさ	備考
1	現耕作土			
2	明黄褐色	10YR6/6	極細砂～シルト質極細砂	
3	黃褐色	2.5Y4/1	シルト質極細砂	細砂混じり
4	灰色	5Y5/1	極細砂質シルト	細砂混じり
5	灰褐色	2.5Y6/2	極細砂	細砂混じり
6	黃灰色	2.5Y5/1	シルト質極細砂～粗砂	
7	灰色	N4/	粗砂～極細砂質シルト	
8	暗青灰色	5P6/1	粗砂～極細砂質シルト	
9	暗青灰色	10BG4/1	極細砂質シルト	
10	暗灰色	N3/	シルト	粗砂混じり
11	明青灰色	10BG7/1	極細砂	
12	黃灰色	2.5Y5/1	粗砂～細砂	中礫混じり
13	灰白色	2.5Y7/1	極細砂	
14	褐灰色	10YR6/1	シルト質極細砂～細砂	
15	にぶい黄褐色	10YR5/4	粗砂	
16	浅黄色	5Y7/4	極細砂	
17	灰白色	N7/	細砂～極細砂	ラミナ
18	にぶい黄橙色	10YR6/3	径10cm礫～粗砂	
19	灰黄褐色	10YR6/2	径15cm礫～粗砂	
20	灰色	N6/	シルト質極細砂～粗砂	ラミナ
21	灰色	N5/	粗砂～シルト質極細砂	ラミナ
22	褐灰色	10YR6/1	シルト質極細砂	細砂混じり
23	灰色	N4/	小砾～極細砂質シルト	ラミナ
24	明赤褐色	5YR5/6	極細砂～細砂	
25	灰色	5Y6/1	細砂～極細砂	粗砂混じり
26	灰白色	5Y7/1	極細砂	
27	褐灰色	10YR6/1	シルト質極細砂	細砂混じり
28	灰色	N5/	極細砂質シルト	細砂混じり
29	暗灰色	N3/	シルト	有機物含む
30	灰色	N5/	粗砂～シルト質極細砂	ラミナ
31	灰色	N4/	シルト	
32	赤褐色	5YR4/6	粗砂	
33	黄灰色	2.5Y4/1	シルト質極細砂	粗砂混じり
34	灰色	5Y7/2	極細砂	
35	灰オリーブ	5Y6/2	粗砂～極細砂	
36	褐灰色	10YR6/1	シルト質極細砂	
37	灰白色	10YR7/1	極細砂	
38	灰白色	10YR7/1	極細砂	
39	暗灰褐色	N3/	シルト～極細砂質シルト	
40	暗青灰色	10BG4/1	シルト質極細砂	細砂混じり
41	灰オリーブ	5Y6/2	細砂～極細砂	
42	灰褐色	2.5Y7/2	粗砂～細砂	
43	灰色	N4/	シルト	ラミナ
44	灰黄色	2.5Y7/2	粗砂～細砂	
45	灰色	N4/	極細砂質シルト	細砂混じり

(2) 基本層序と遺構の検出

7区は下内跡遺跡の所在する扇状地の中でもっとも東端に位置しており、遺構として検出されたのは溝と水田のみで、土地利用のあり方からも、扇状地の端であることを示している。上層の堆積も、下層が比較的水平に近い堆積をしているものの、上層では西側から東側にかけて若干の傾斜をもって堆積している。現在の土地利用についても、7区の東端において大きく段差があり、東側へ下がる地形は現在でも残されている。

上層の堆積は、第212図および第102表に示したように、45層からなるが、基本的な層序としては、1層からVI層の6つに分けることが可能である。これら6つの層はその上面に遺構面をもつが、I層は現地表面、II層は第1面、III層は第2面、IV層は第3面、V層は第4面、VI層は第5面にそれぞれ対応する。

I層

この1層は、今回の調査対象外と判断したため、機械により掘削した。

当遺跡の全てを覆う調査時の地表面を構成する層であり、水田及び畠地として利用されている。調査区の中央では旧淡路鉄道により擾乱されているが、この構造物をも含んだ層である。表土・床土の下はすぐに第1面がある。

II層

II層の上面が第1面である。調査区の北側半分は擾乱のため不明である。II層は東側のみ認められ、西側については下層のIII層が地表面に表れ、同一遺構面を形成している。上層との間に古墳時代～奈良時代の遺物を挟んでおり、溝が1条検出されている。中央部には粗砂を中心とした粗い砂からなり、土壤化はあまり認められないが、それ以外は全体に土壤化している。II層を構成する層は、中央付近の粗砂を中心とした比較的粗い粒子以外はシルト質極細砂である。層の傾斜は、西側から東側に下がっている。

III層

III層の上面が第2面である。調査区の中央付近と西側の半分が擾乱されている。上層との間に奈良時代の遺物を挟んでおり、遺構は溝と畦畔が確認できた。しかし、畦畔の遺存状況は悪く、水田土壤のみ確認できたにとどまる。III層を構成する層は、シルト～シルト質極細砂で、東側の方が粒子が細かい。いずれの部分も土壤化している。

IV層

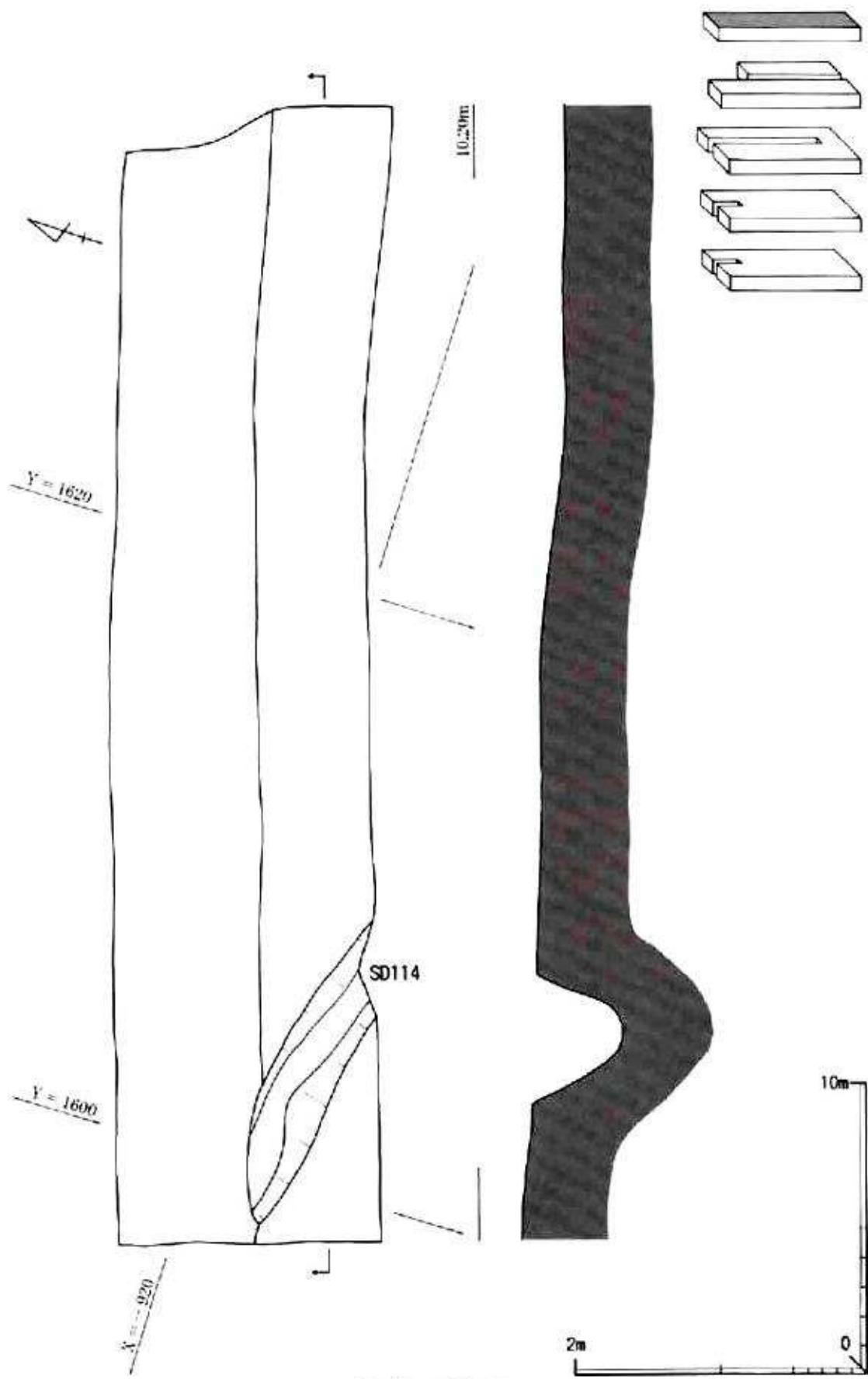
IV層の上面が第3面である。III層の下で、調査区の中央付近にある土壤化していない層まで掘削し、遺構面としたものであるが、それ以外の部分では水田土壤が確認でき、南西部においては畦畔が検出された。IV層を構成する層は、極細砂質シルトやシルト質極細砂の水田土壤が中心で、中央部分では土壤化していない粗砂からシルト質極細砂がラミナ状に堆積している。層の傾斜はほぼIII層と同じで、西側から東側に傾斜している。

V層

V層の上面が第4面である。西側の一部で畦畔が検出されたが、それ以外は水田土壤が確認できたのみである。調査区の中央付近では下層のVI層と同一面を形成しており、V層は東西の両端に堆積しているのみである。V層を構成する層は、西側は粗砂～極細砂質シルトで、東端は極細砂質シルトである。

VI層

VI層の上面が第5面である。西側で畦畔が検出されており、それ以外は水田土壤が確認できたのみである。傾斜は西側から東側に向かって下がっている。VI層を構成する層は粗砂から極細砂質シルトやシルトで、層の上部では粒子は細かい。



第213図 7区第1面

2. 第1面の遺構と遺物

(1) 第1面の出土遺物

出土遺物 包含層から出土した遺物は、遺存状況は悪く、完形に復元できるものはない。

古墳時代 高杯が出土している。長脚2段2方透かしである。

奈良時代 环B蓋と杯B、甕が出土している。



第214図 7区第1面出土土器

第103表 7区第1面出土土器観察表

報告 番号	種別	器種	法 量(cm)						色 調	残存状況	調 整	形態の特徴	備考
			口径	器高	底径	縁径	最大径	指標					
714	高杯	高杯						-	内:灰白 外:灰白	雖然2/2	切削平滑	透かし調子は2段、上下の 透かし調子は2面の丸窓がある。	
715	角底器	环盖							内:灰白 外:灰白	僅のみ	切削平滑、表面天井部は回転 ハサマズリ	端みは高く、比較的全体に近 い。	
716	角底器	甕	-	-	9.8				内:灰 外:灰	底部1/4	回転ナギ、外側底部は回転ヘ タケヌリ	脚は平、体部は傾斜から内 側、高台は高く、外方に傾く。	
717	角底器	甕	118.0		-	-	-		内:灰 外:灰	口縁部1/8	回転ナギ	口縁部は外側へ振り出し、變 形状にする。	

(2) 溝

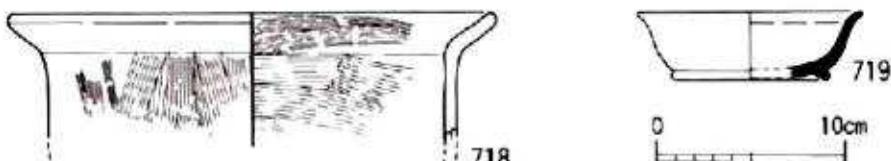
SD114

検出状況 調査区の西端で検出した。他の遺構との切り合い関係は確認できない。

形状・規模 東西方向の直線的な溝である。南側は調査区外へ続く。底部の標高は、西端で9.28m、東端で9.25mを測り、わずかに東へ傾く。断面形はU字状を呈する。検出した長さは8.26m、幅は2.44~2.05m、検出曲からの深さは深いところで56cmを測る。

埋土 自然堆積とみられる2層からなる。疊が下層に堆積後、溝の大半を灰色砂が埋める。

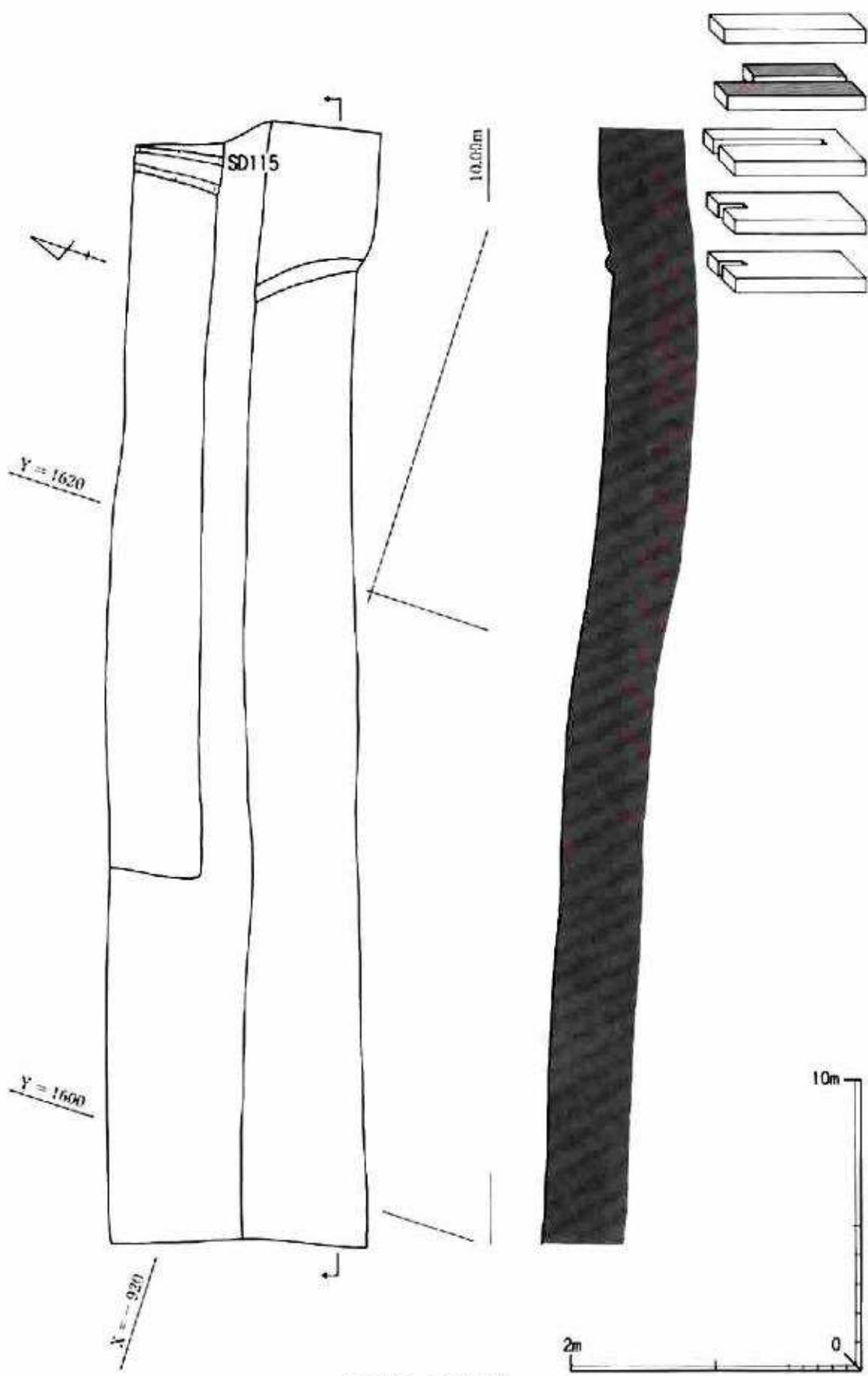
出土遺物 土師器の甕と、須恵器の杯が出土した。土師器は、直立する体部に外方へ屈曲する口縁部を有す。須恵器の杯は、口縁部は外方に彎曲する。高台は短く、外傾し、端部は丸い。



第215図 SD114出土土器

第104表 SD114出土土器観察表

報告 番号	種別	目種	法 量(cm)						色 調	残存状況	調 整	形態の特徴	備考
			口径	器高	底径	縁径	最大径	指標					
718	土師器	甕	126.5					-	内:浅黄褐 外:褐	口縁部1/4	外面体底ナギナリ。口縁部ナギ、内面ヨコナリ。	体部は直線的に下方に延びる。 口縁部は屈曲し、上外方へ傾く。	
719	須恵器	甕	111.8	13.6	8.3			22	内:灰 外:灰	口縁部1/4	回転ナギ、外側は自然軸のため、若干青褐色に見色。	体部は傾斜から内側、口縁部でれ丸子毛、高台は大きく開く。	



第216図 7区第2面

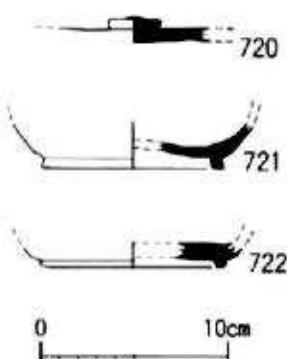
3. 第2面の遺構と遺物

(1) 第2面の出土遺物

出土遺物 いずれも遺存状況は悪く、完形に復元できるものはなく、全体の形態は不明である。

奈良時代 須恵器のみ図示できた。

坏B蓋と坏Bが出土している。蓋は平らで、天井部も現存する部分では平坦である。身は721については底部が盛り上がり、重であり、722は平らで厚い。高台は、721については断面形がやや歪で外方に傾んでいるのに対して、722は正方形に近く、外方に低い。



第217図 7区第2面出土土器

第105表 7区第2面出土土器観察表

報告番号	種別	目録番号	量(cm)						色調	内在状況	測定	形質的特徴	備考
			口径	器高	底径	腹径	最大径	指数					
720	須恵器	720	—	—	—	—	—	—	内(灰白) 外(灰白)	積みのみ	測定せず	積みは偏平で、中央が若干盛り上がり、天井は平ら	
721	須恵器	721		—	9.40				内(灰白) 外(灰白)	底板1/4	測定せず	底板は1/4で凹む。高台は側面近所は回転せず、高台接合部の系縫	底板は1/4で凹む。高台は側面近所は回転せず、高台接合部の系縫
722	須恵器	722		—	8.90				内(灰白) 外(灰白)	底板1/4	測定せず	底板は厚く、平ら。高台は側面へやや傾く。	底板は厚く、平ら。高台は側面へやや傾く。

(2) 溝

SD115

検出状況 調査区の東端で検出した。他の遺構との切り合い関係は確認できない。断面等から検討した結果、上層から切り込んでいる可能性が高い。

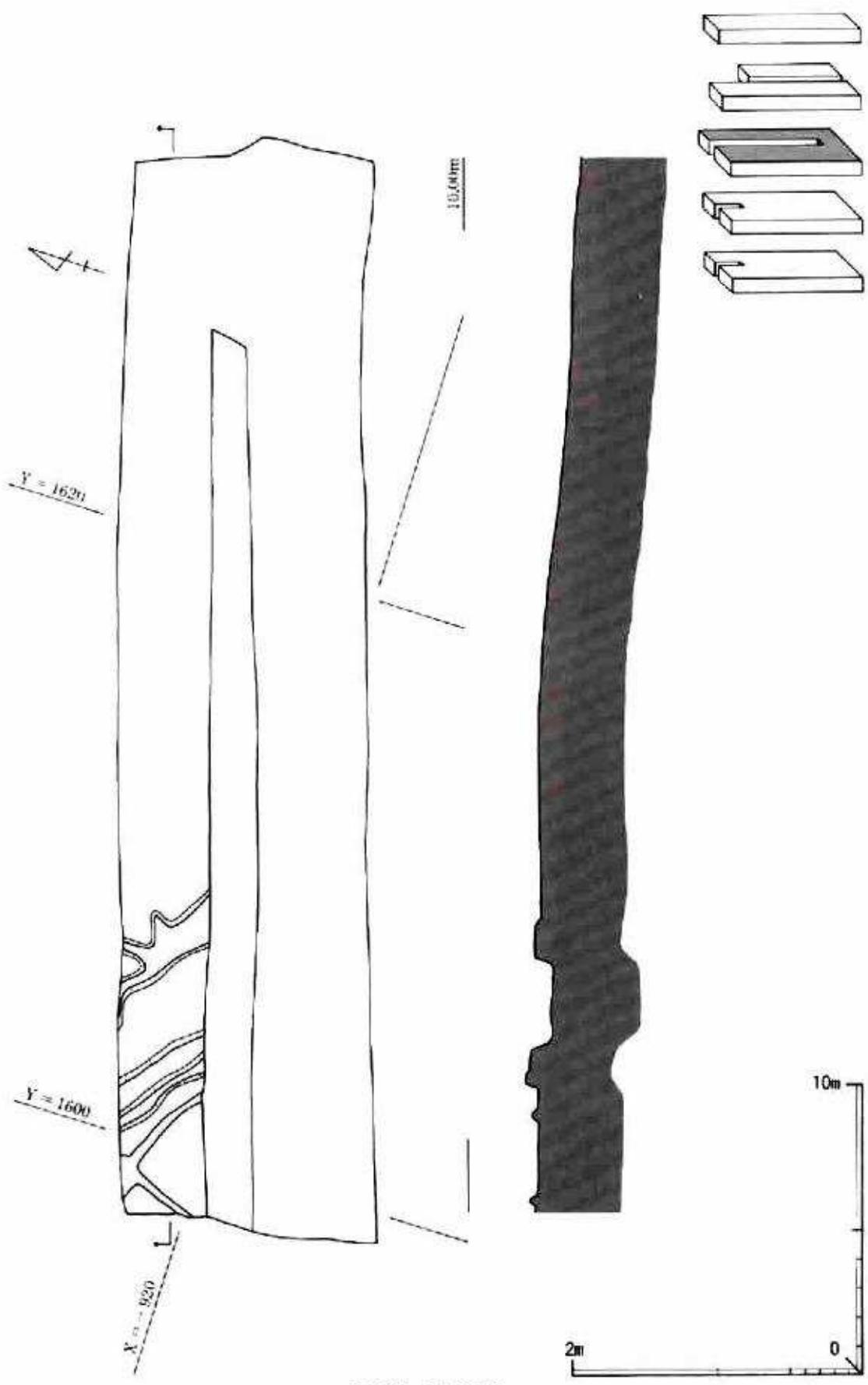
形状・規模 南北方向に延びるほぼ直線的な溝である。北側は調査区外へ続いているが、調査区内で消滅するものとみられる。底盤の標高は北端で9.30m、南端で9.20mを測り、北から南へ流れていたものと考えられる。断面の形状はU字状を呈する。規模は、検出された長さ3m、幅68cm～1.16mで、検出面からの深さは深いところで11cmを測る。

出土遺物 遺物は全く出土していない。

(3) 水田跡

検出状況 第2面で検出した水田跡は、扇状地東側にあたるが、残存状況は不良である。検出し得た範囲は調査区東端から約9.5mの範囲に限られる。遺構面の標高は、最も高い箇所で9.35m、最も低い箇所で9.19mを測り、全体として北西から南東に傾斜をもつ。

駐跡 わずかに1本のみ検出し得た。断面形は台形状を呈し、規模は平均して高さ2cm、幅45cmである。



第218図 7区第3面

4. 第3面の遺構と遺物

(1) 第3面の出土遺物

当遺構面に伴う土器は全く出土していない。したがって、出土土器をもって時期を特定することはできない。

(2) 水田跡

検出状況

第3面で検出した水田跡は、扇状地東側にあるが、遺存状況は不良である。検出し得た範囲は調査区西北部分に限られる。

検出した水田跡は、第6区第3面に認くものと考える。いずれも不定形の小区画水田で、少なくとも6筆確認できるが、完全に水田1筆を検出したものではなく、平面形も明確でない。ただし、塗5・6を見る限りでは方形を呈するものと考える。水田面の標高は、最も高い水田はNo.5で9.35m、最も低い水田はNo.3で9.32mを測り、全体として北西から南東方向に傾斜をもつ。

畦畔の断面形はいずれも台形状を呈し、規模は平均して高さ4.5cm、幅58cmである。

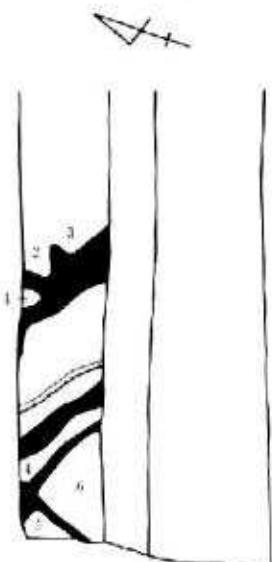
水田に隣接する施設として、溝、畎畠状区画がある。これらの施設は北西から南東方向を向いている。

溝

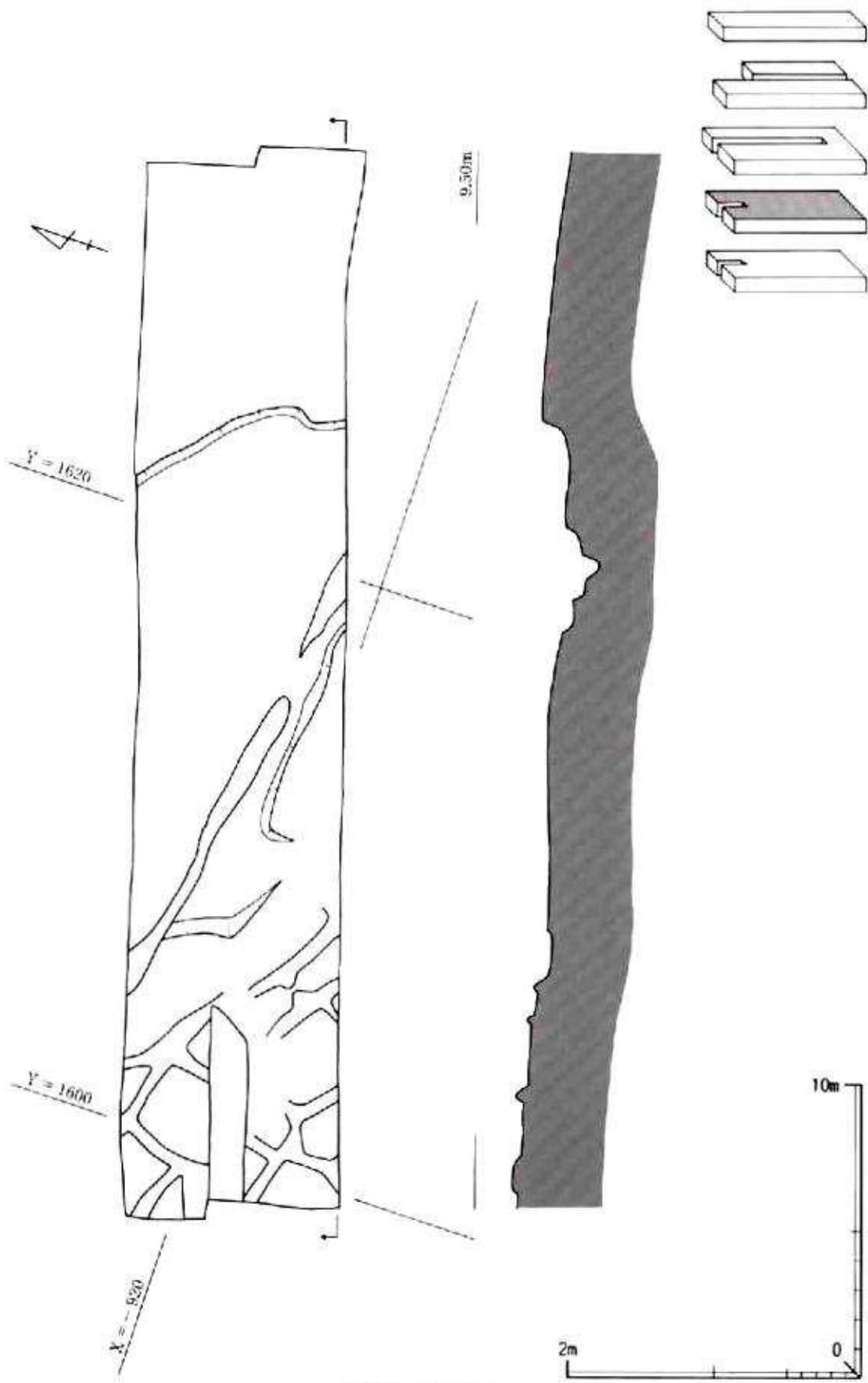
最大幅2.90mを測り、南東へ傾斜をもつ。東側の畦畔が北端で西に突出していることから、水田の可能性も考えられるが、最深部が周囲の水田面から12cm下がることから溝と判断した。

畎畠

溝の西側に平行して検出した。北西隅の畦畔が東に屈曲していることから調査区外で終結しているか、水口状の施設が存在するものと考える。幅は、北側で1.04m、南側で78cmを測る。本区画として造られた畦畔は他の畦畔と規模的に差異は認められない。



第219図 第3面水田跡



第220図 7区第4面

5. 第4面の遺構と遺物

(1) 第4面に伴う遺物

出土遺物

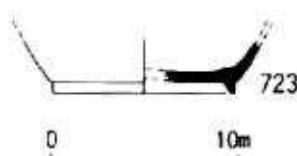
当遺構面を覆う洪水砂の中から、奈良時代の須恵器と、弥生時代前期の土器が出土している。

奈良時代

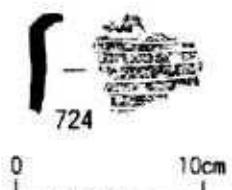
環Bが出土している。底盤のみ残存しており、全体の形状は不明である。高台は端部がやや丸く、比較的高い。

弥生時代

東側の洪水砂の堆積層から弥生前期の壺(724)が出土している。縁部には刻み目を施し、体部には6条のヘラ彫沈線が認められる。前期の土器であるが、他の遺構面との関係から、前期の遺構面とすることは困難である。したがって、この遺物については、洪水砂にともなって上流側から流れ込んだものと理解したい。



第221図 7区第4面出土土器(1)



第222図 7区第4面出土土器(2)

第106表 7区第4面出土土器観察表(1)

番号	種別	基盤	法量(cm)					色調	残存状況	調査	形態	形態の特徴	備考
			口径	底盤	縁	側面	最大径						
723	須恵器	环B			9.7	—	—	内:灰 外:灰	底部1/4	回転なし、外周底部はへきり未調整か?	底部はねじれ、高台は高く、斜方へ開き、体部は直線的。		

第107表 7区第4面出土土器観察表(2)

番号	基盤	法量(cm)	調査	技術	色調	残存率	備考
724	壺	口径:8.5cm 底盤:8.5cm 縁径:8.5cm	外周:土や調整。 内面:土や調整。	外周:灰白 内面:灰白	若干		

(2) 水田跡

検出状況

検出した範囲は調査区西端部分に限られる。水田面東側は流路状の谷状地となり、本検出箇所が水田のはば東端になると考える。水田はいずれも不定形の小区画水田で、少なくとも13筆確認できる。

水田に関する施設として、水口がある。また、No.3・4の水田は獸歛状に畦畔が平行する。

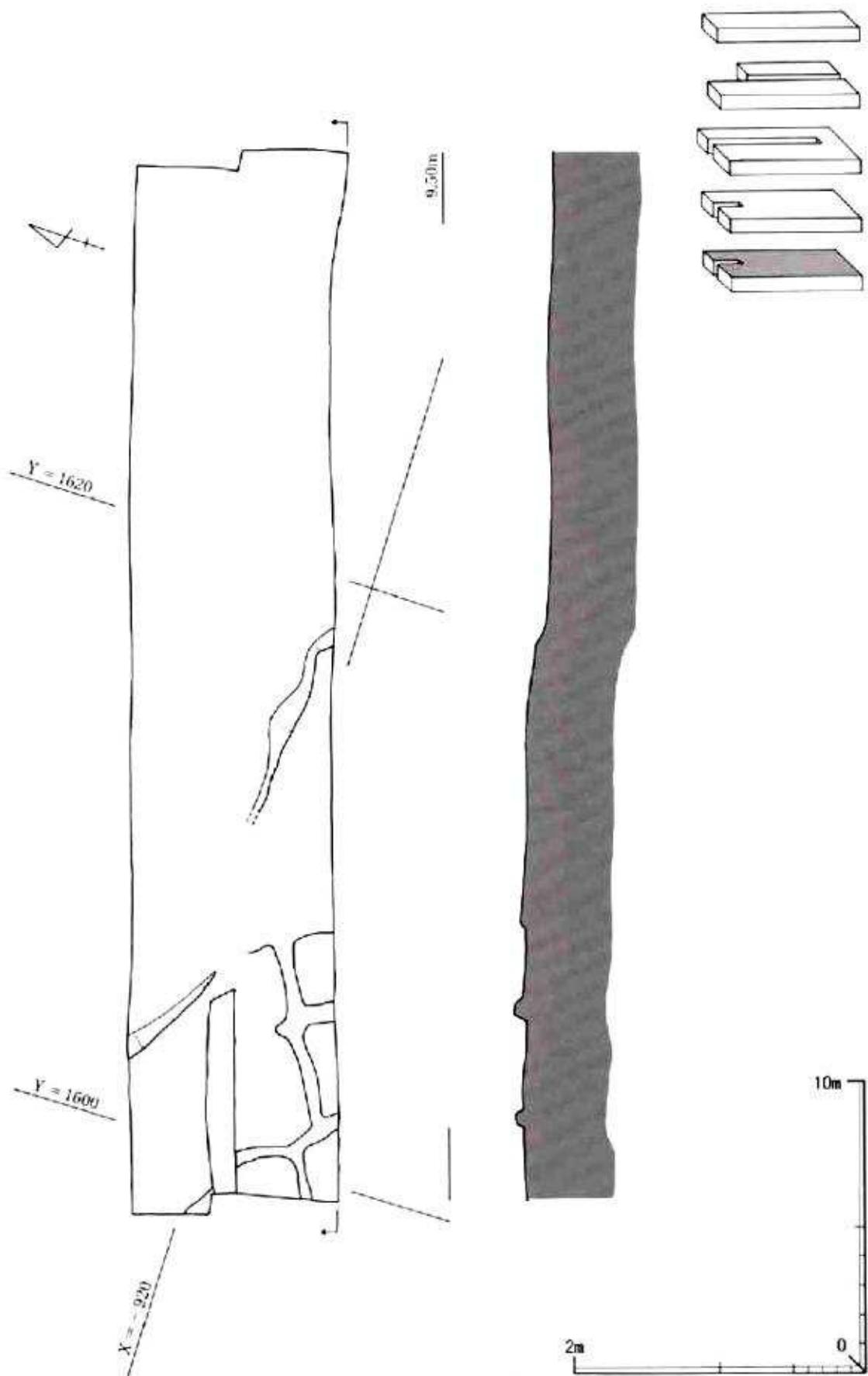
水田跡の検出

畦畔の遺存状況は悪く、土壤化の差異によって基底部をかろうじて検出したにすぎない。畦畔の断面形状はいずれも台形状を呈するとみられる。

完全に水田1筆を検出したものではなく、平面形も明確でないが、No.6・8を見る限りでは正方形と考えられる。水田面の標高は、最も高いNo.5で9.23m、最も低いNo.4で9.01mを測り、全体として北西から南東方向に傾斜をもつ。水口はNo.3・4の間で畦畔が途切れる部分が、水口と考えられる。



第223図 第4面水田跡



第224図 7区第5面

6. 第5面の遺構と遺物

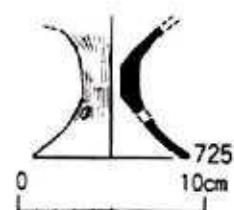
(1) 第5面に伴う遺物

出土遺物

725の器台1個体が出土している。

小型の器台で、口縁部を欠く。鼓形を呈するものと考えられる。

脚部には径7mmの透穴が3箇所に穿たれている。



第225図 第5面出土土器

第108表 7区第5面出土土器観察表

番号	器種	法 量(cm)	調 整 ・ 整 理 方 法	色 調	残 存 率	備 考
725	器台	高さ: 7.9 幅: 3.2 厚: 0.4	外側: 剥離層ナガ調整、簡便・体削ヘタリギヤ。 内側: 剥離層ナガ調整、体削ヘタリギヤ調整、ナガ調整。	外側: 桃白 内側: 桃白	質感2/3	

(2) 水田跡

検出状況

第5面で検出した水田跡は、扇状地東側にあたるが、遺存状況は不良である。検出し得た範囲は調査区西南端部分に限られる。検出した水田は、6区第6面に続くものと考える。水田跡はいずれも不定形の小区画水田で、少なくとも6筆確認できる。

水田に関連する水口、溝等の施設は確認できなかった。

水田の検出

水田の大半は砂によって流され、畦畔の遺存状況は悪く、土壤化の差異によって基底部をかろうじて検出したにすぎない。

完全に水田1筆を検出したものではなく、半面形も明確でないが、No.2・4を見る限りでは方形を呈するものと考える。

水田面の標高は、最も高い水田はNo.5で9.12m、最も低い水田はNo.6で8.87mを測り、全体として北西から南東方向に傾斜をもつ。また、No.1・3の北側では畦畔は検出し得なかつたが、その面積の大きさと最大比高差14cmを測ることから、本来はさらに細分されていたものと考える。

畦畔の断面形状はいずれも台形状を呈する。検出し得た規模は平均して高さ3.7cm、幅41cmである。畦畔はNo.1・2・3・4に挟まれた箇所が十字形に交わる可能性がある他は、三叉状に交わるものとみられる。



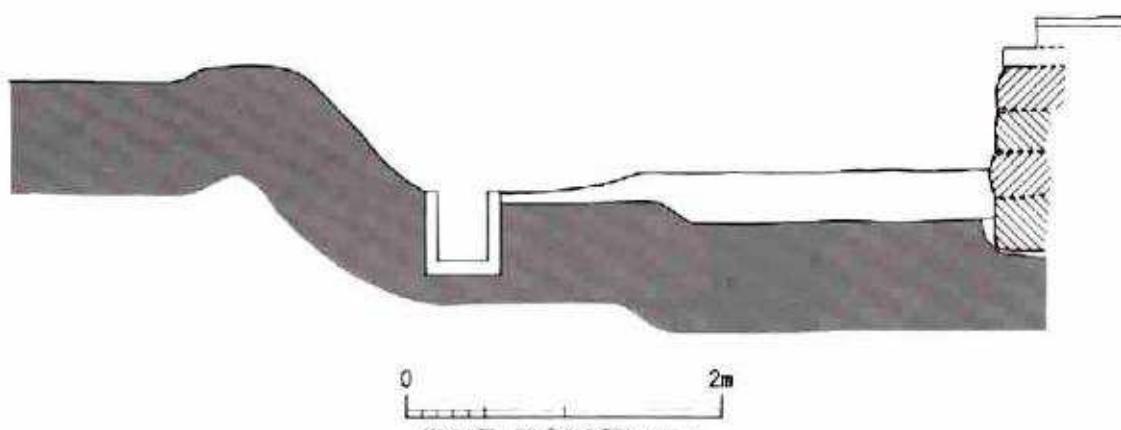
第226図 第5面水田跡

(3) 旧淡路鉄道「先山駅」

先述したように、当調査区北側は旧淡路鉄道の「先山」駅のプラットホームが遺存しており、プラットホームの壁面が当調査区との境となっていた。ここで、このプラットホームの概要を記しておく。

遺存状況

プラットホームの北側は民家の敷地と接しており、ホーム自体がこの民家の侵入路となっていた。加えて、ホームの東側にホームへ上がるスロープが遺存していたが、このスロープ自体も上記の民家の侵入路となっていた。このため、プラットホーム上面は当時の状況を残しておらず、全面にコンクリートとアスファルトが敷かれていた。



第227図 旧「先山駅」ホーム

施工方法 軌道敷の工事にあたっては、南側の水田面を基準とすると、1m削平し、その上に厚さ10cmの礫を敷き、北側にプラットホームの基底石を敷設している。そして、その南側の軌道敷部分にホームの基底石を埋める形で、厚さ20cmの礫を敷いている。レールそのものは残っていなかったが、その上面に枕木を置き、この上にレールを敷設したものと考えられる。礫層上面には、枕木の痕跡がわずかに認めることができた。

構造 プラットホームは、基底石を含めると4段にわたって積み上げている。基底石と上の3段の石は明らかに異なる。

基底石は、疊敷に埋もれるため、外観を全く意識しておらず、基底石相互には隙間が認められる。平面長方形を呈し、その規模は30cm×35cmを測る。

一方、基底石の上の石は、地上に露出していたものと考えられ、整然とした切り石積みとなっており、石相互には隙間は認められない。石相互の接合部分には漆喰が塗られていたようである。正面は基底石と同じ長方形を呈するが、30cm×40cmと規模が明らかに大きい。

規模 軌道敷上面からプラットホーム上面までの高さ（基底石を除く3段分の高さ）は0.9m、基底石下面からプラットホーム上面までの高さ（基底石を含む4段分の高さ）は1.2mを測る。

このような石で積み上げられたプラットホームは、全長37mを測り、幅は2mである。スロープを入れると約40mとなる。

軌道敷の幅は、プラットホーム壁面と南側の法尾の間で3.2mを測る。

第4章 自然科学的分析

第1節 下内膳遺跡出土須恵器の蛍光X線分析

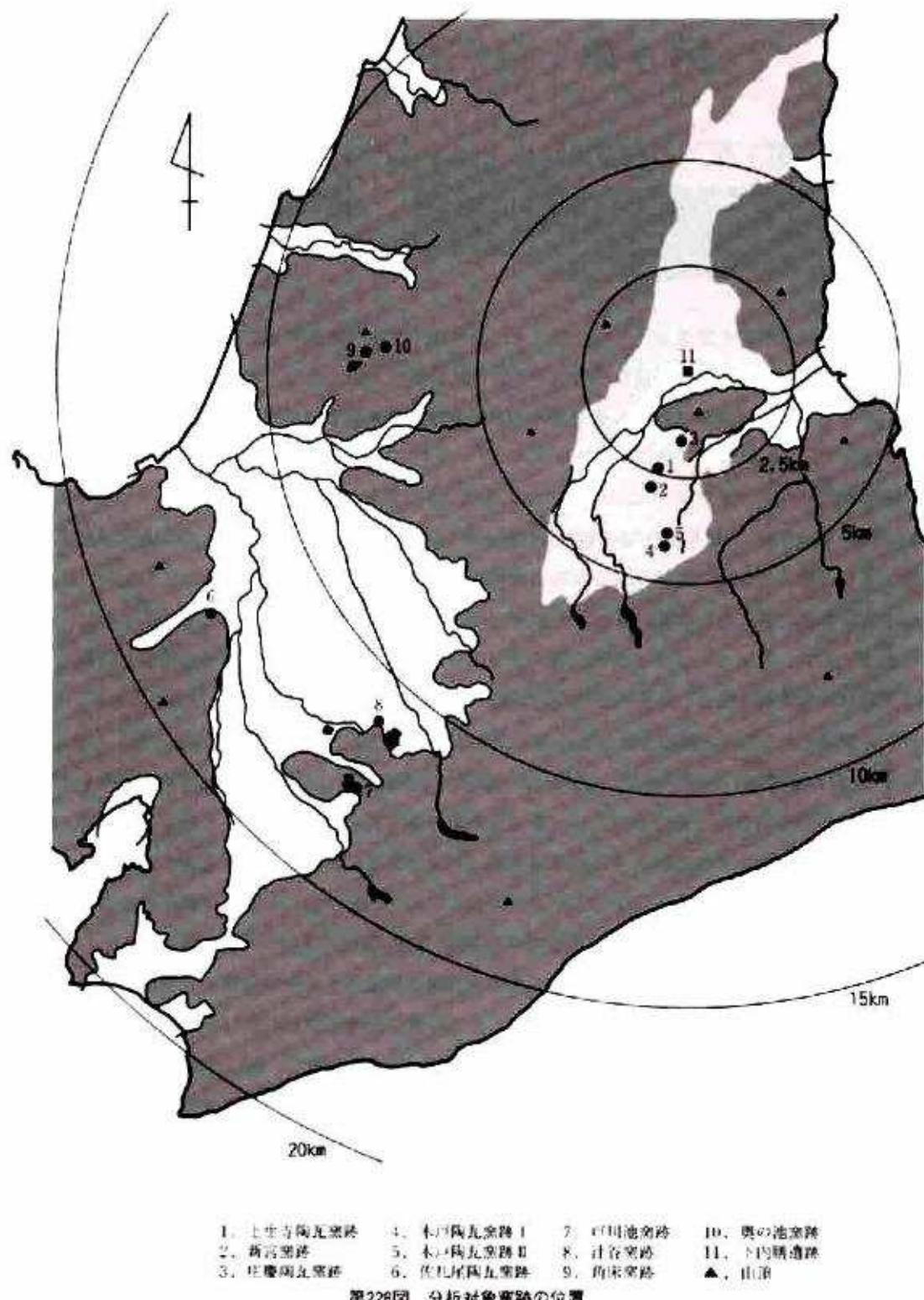
奈良教育大学 三辻 利一

(1)はじめに

淡路島にも須恵器窯が発見されているが、そこから出土する須恵器の元素分析のデータはほとんど報告されていない。本報告では淡路島内の数ヶ所にある窯跡から出土した須恵器の蛍光X線分析の結果を報告するとともに、下内膳遺跡から出土している須恵器の産地推定の結果についても併せて報告する。

(2)分析結果

第109表・第110表には窯跡出土須恵器の分析値がまとめられている。分析対象となった窯は洲本市の庄慶窯、土生寺窯、新宮窯、木戸窯、三原町の汁谷窯、戸川池窯、佐礼尾窯、それに、五色町の奥の池窯と角床窯である。これらの窯の分布位置を第228図に示す。第109表・第110表からわかるように、淡路島内にあるこれらの窯跡から出土した須恵器の化学特性はいずれの元素についても類似していることがわかる。これは淡路島を構成する岩石が比較的単純で、特に、大きな地域差がないためであろう。そこで、これらの窯間にどれ程の地域差があるかを見るために、Rb-Sr分布図を描いてみることにした。第229図～第234図に窯跡出土須恵器のRb-Sr分布図を示してある。そして、どの図にも淡路領域を描いてある。この領域は今回分析したほとんどの試料を包含するようにして描かれたものである。勿論、定量的な領域を示している訳ではないが、この領域を描くことによって、各窯跡から出土した須恵器がどのような地域差をもっているのかを示すことができる。この点で、定性的な領域とはいえる。淡路領域は十分役に立つのである。第229図をみると、庄慶窯の須恵器は淡路領域の下半分の部分に分布していることがわかる。これに対して、土生寺窯と新宮窯の須恵器は淡路領域の上半分の領域に分布し、距離的にはそんなに離れていないにもかかわらず、庄慶窯と土生寺・新宮窯の須恵器には地域差があることがわかる。両者は2群間判別分析にかけば、相互識別できるものと思われる。第231図には木戸窯の須恵器のRb-Sr分布図を示す。第229図と比較すれば、木戸窯の須恵器の化学特性は庄慶窯の須恵器と類似しており、土生寺・新宮窯の須恵器とは相互識別できる可能性をもっていることがわかる。第232図には三原町の戸川池窯と汁谷窯の須恵器のRb-Sr分布図を示す。試料数が少ないので余りはっきりしたこととはいえないが、同じ町内にあるにもかかわらず、戸川池窯と汁谷窯の須恵器にはSr量に差違があることがわかる。土器中では通常、微量元素Srは主成分元素Caと正の相関性をもつて、戸川池窯の須恵器にはCa量が少ないことが予想される。その予想どおり、戸川池窯の須恵器にはCa量が少ないことが第1表から読みとれる。そして、汁谷窯の須恵器は淡路領域内に分布するにもかかわらず、戸川池窯の須恵器にはSr量が少ないため、淡路領域を離れることがわかる。第233図には奥の池窯、角床窯の須恵器のRb-Sr分布図を第233図に示す。ほとんどの須恵器が淡路領域に分布するものの、この領域の左半分の領域に偏って分布していることがわかる。ここでも、他の窯に比べて若干の地域差があることがわかる。最後に、佐礼尾窯の須恵器のRb-Sr分布図を第234図に示す。大部分のものがSr量が多く、淡路領域を離れることがわかる。

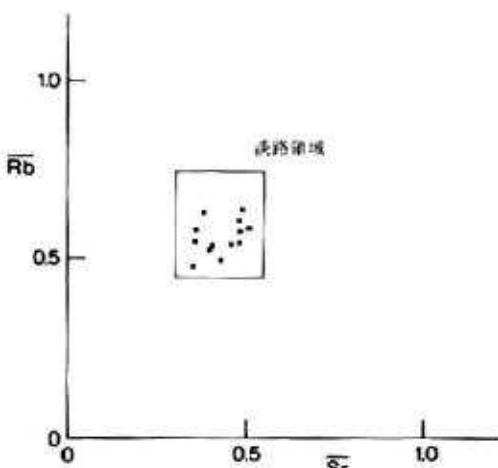


第226図 分析対象窯跡の位置

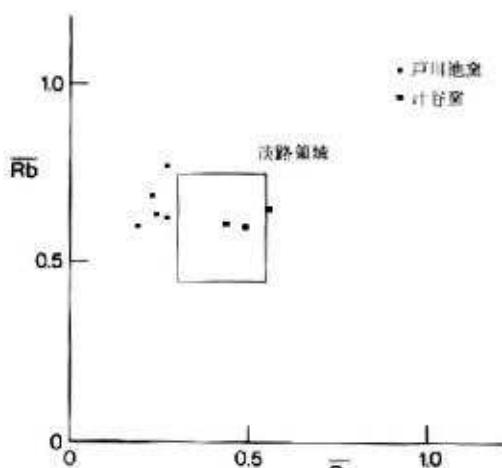
れることがわかる。佐賀尾立は12世紀末に採集された窯であり、他の窯は7-9世紀代に採集された窯であるから、佐賀尾立の須恵器粘土は当然、別の場所で採取されたものであろう。

このように、同じ淡路島内の窯跡出土須恵器は類似した化学特性をもっており、前記の淡路窯域にはば分布するものの、若干の地域差はあり、窯によっては相互識別の可能性があることがわかった。そし

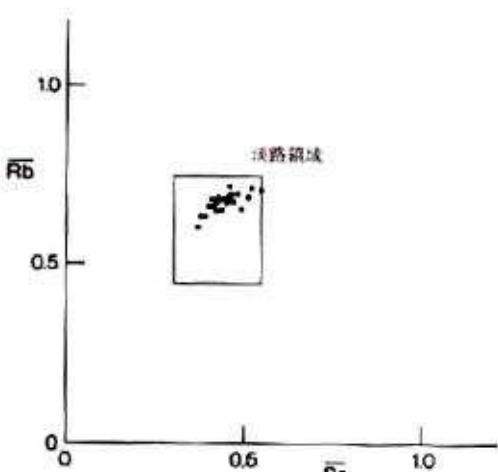
て、淡路島の遺跡から出土した須恵器が島内の製品なのか、それとも、島外からの搬入品であるかを探る上で淡路領域は使用できることを示している。



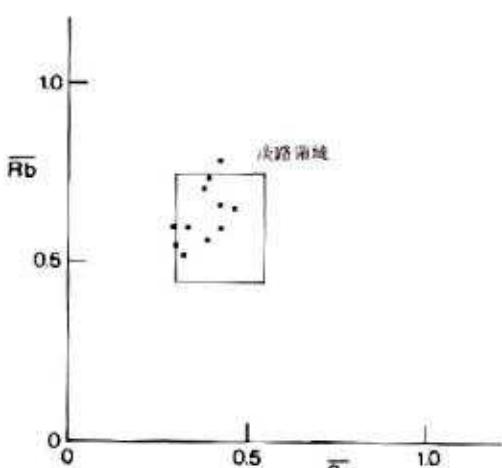
第229図 庄慶窯出土須恵器のRb-Sr分布図



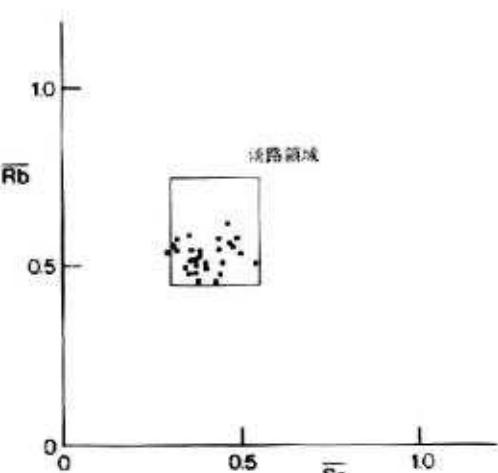
第232図 戸川池窯・汁谷窯出土須恵器のRb-Sr分布図



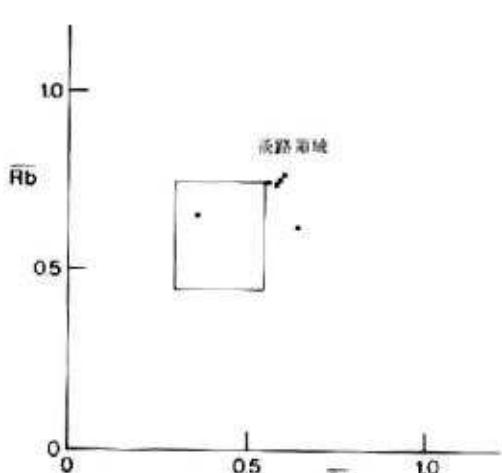
第230図 土生寺窯および新宮窯出土須恵器のRb-Sr分布図



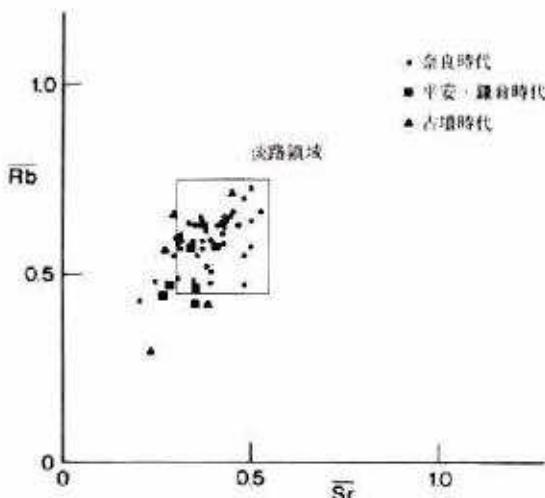
第233図 奥の池窯・角床窯出土須恵器のRb-Sr分布図



第231図 木戸窯出土須恵器のRb-Sr分布図

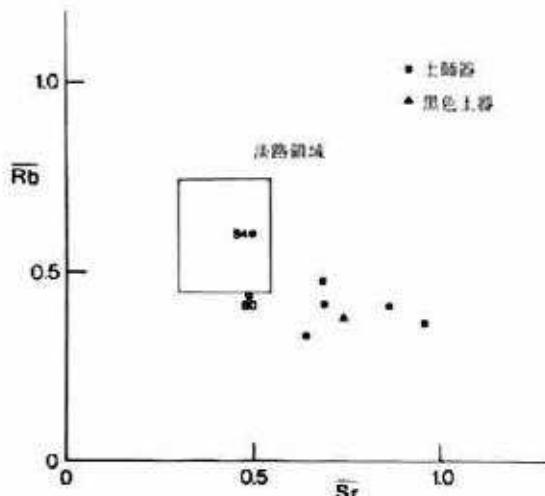


第234図 佐礼尾窯出土須恵器のRb-Sr分布図



第235図 下内膳遺跡出土須恵器のRb-Sr分布図

し、古墳時代の須恵器は島外からの搬入品であることを示しているものと思われる。その分布位置からみて、大阪陶邑からの搬入品である可能性をもつものもあるが、考古学的情報も入れず、このままで陶邑産と判断することは難しい。古墳時代末には島内でも庄屋窯、汁谷窯が操業した可能性があるが、下内膳遺跡出土の古墳時代の須恵器には庄屋窯、汁谷窯の須恵器の分布領域に対応して分布しているものがないことは第235図を第229図、第232図と比較してみればよくわかる。したがって、今回分析した下内膳遺跡の古墳時代の須恵器はすべて、淡路島外からの搬入品と推定される。しかも、5点の試料は必ずしも近接して分布している訳ではなく、船上が何種類があることを示している。つまり、島外の何ヶ所からの搬入品である。



第236図 土師器のRb-Sr分布図

次に、島内の遺跡から出土した須恵器の船上をみてみよう。第111表には洲本市の下内膳遺跡から出土した須恵器の分析値を示してある。このデータをもとに Rb-Sr 分布図を描いたのが第235図である。須恵器は奈良時代のもの、平安・鎌倉時代のもの、古墳時代のものと区別して描いてある。淡路領域内に分布するかどうかを目印とすると、奈良時代、平安・鎌倉時代の須恵器は大半が淡路領域に分布するのに対し、逆に古墳時代の須恵器のはほとんどは淡路島内で作られた自給品であるのに対

最後に、下内膳遺跡から出土した土師器の Rb-Sr 分布図を第236図に示す。念のため、淡路領域を描いて比較することにした。No.80、84は淡路領域に分布するものの、他の土師器は淡路領域を越えることがわかる。領域を越えたこれら5点の土師器は他の因子でも類似しており、同じ船土、したがって同じところで作られた土師器とみられる。これに対して、No.80はともかく、No.84は別船土の土師器である。島内産の土師器がどんな船土をもっているのか、現時点では不明であるから、これらの土師器の产地を推定することはできないが、土師器船土も必ずしも単色ではないことは明らかである。また、黒色土師器は5点の土師器と船土が類似しており、同じところで作られたものと推定される。

第109表 淡路の窯跡出土須恵器の分析データ(1)

	器種名	所在地・時期	器種名	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
1	土生陶瓦窯跡	洲本市大野(7C末~8C初)	蓋(つまみ)	0.576	0.192	2.47	0.664	0.489	0.447
			环(口縁部)	0.526	0.120	2.44	0.614	0.374	0.330
			环(体部)	0.535	0.213	2.46	0.685	0.507	0.399
			环(体部)	0.591	0.176	2.31	0.701	0.480	0.430
			甕(体部)	0.546	0.155	2.45	0.671	0.402	0.390
			不明	0.568	0.153	2.34	0.677	0.454	0.404
			不明	0.540	0.154	2.42	0.664	0.425	0.424
			不明	0.564	0.261	2.32	0.718	0.518	0.454
			不明	0.599	0.236	2.13	0.712	0.548	0.525
2	新宮窯跡	洲本市大野(8C後)	甕(体部)	0.525	0.141	2.36	0.613	0.393	0.377
			甕(体部)	0.534	0.144	2.40	0.642	0.385	0.404
			蓋(口縁部)	0.601	0.162	2.44	0.691	0.413	0.383
			蓋(口縁部)	0.563	0.177	2.48	0.687	0.435	0.428
			蓋(口縁部)	0.589	0.183	2.41	0.689	0.455	0.484
			环(口縁部)	0.572	0.160	2.46	0.694	0.425	0.413
			蓋(口縁部)	0.541	0.173	2.47	0.657	0.428	0.379
			环(口縁部)	0.597	0.179	2.36	0.700	0.458	0.465
			不明	0.565	0.147	2.39	0.670	0.418	0.438
			不明	0.556	0.186	2.39	0.681	0.465	0.439
			不明	0.591	0.145	2.36	0.684	0.417	0.453
			不明	0.572	0.185	2.27	0.719	0.455	0.478
3	庄屋陶瓦窯跡	洲本市大野(7C中)	环(口縁部)	0.485	0.152	2.71	0.583	0.363	0.319
			蓋(口縁部)	0.400	0.206	2.99	0.497	0.430	0.268
			蓋(口縁部)	0.464	0.156	2.60	0.632	0.376	0.314
			蓋(天井部)	0.474	0.202	3.40	0.548	0.359	0.241
			甕(口縁部)	0.441	0.244	2.75	0.511	0.546	0.301
			甕(体部)	0.430	0.196	3.13	0.529	0.398	0.270
			不明	0.424	0.253	2.77	0.637	0.491	0.343
			不明	0.391	0.172	3.42	0.483	0.354	0.242
			不明	0.519	0.199	2.25	0.608	0.477	0.411
			不明	0.446	0.311	2.88	0.587	0.570	0.390
			不明	0.403	0.166	2.50	0.529	0.403	0.252
			不明	0.456	0.206	2.24	0.582	0.481	0.419
			不明	0.432	0.220	2.61	0.546	0.489	0.382
4	木戸窯Ⅰ	洲本市木戸(9C後)	环(口縁部)	0.481	0.145	2.39	0.521	0.362	0.310
			环(口縁部)	0.439	0.247	2.74	0.562	0.477	0.343
			环(口縁部)	0.463	0.158	3.02	0.582	0.322	0.257
			环(底部)	0.437	0.214	2.61	0.477	0.436	0.320
			不明	0.482	0.216	2.48	0.571	0.457	0.354
			不明	0.436	0.152	2.42	0.496	0.343	0.284
			不明	0.378	0.216	2.55	0.497	0.398	0.307
			不明	0.459	0.192	2.74	0.546	0.364	0.223
			不明	0.495	0.174	2.52	0.507	0.374	0.219
			不明	0.532	0.182	2.37	0.548	0.385	0.251
			不明	0.441	0.206	2.67	0.462	0.432	0.268
			不明	0.525	0.173	2.29	0.521	0.372	0.235
			不明	0.525	0.175	2.15	0.535	0.382	0.228

第110表 淡路の窯跡出土須恵器の分析データ(2)

	窯跡名	所在地・時期	器種名	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
5	木戸窯II	洲本市木戸 (9C中)	壺(口縁部)	0.533	0.147	2.54	0.551	0.317	0.232
			壺(口縁部)	0.484	0.119	3.12	0.543	0.285	0.140
			壺(体部)	0.517	0.158	2.39	0.484	0.367	0.228
			壺(底部)	0.442	0.155	2.52	0.483	0.351	0.215
			壺(底部)	0.445	0.227	2.82	0.548	0.437	0.361
			壺(底部)	0.478	0.228	2.66	0.577	0.437	0.356
			不明	0.368	0.208	3.16	0.462	0.382	0.238
			不明	0.517	0.192	2.00	0.586	0.356	0.280
			不明	0.425	0.235	2.52	0.510	0.445	0.314
			不明	0.450	0.112	2.40	0.569	0.309	0.212
			不明	0.325	0.223	2.41	0.628	0.461	0.384
			不明	0.371	0.200	2.70	0.505	0.402	0.260
			不明	0.494	0.382	3.32	0.506	0.541	0.455
			不明	0.471	0.289	2.39	0.594	0.493	0.439
			不明	0.435	0.264	2.31	0.542	0.498	0.364
6	佐礼尾陶瓦窯	三原郡(原町志知佐礼尾 (12C末)	壺(口縁部)	0.586	0.207	1.41	0.747	0.576	0.474
			壺(体部)	0.501	0.098	2.29	0.664	0.356	0.271
			壺(体部)	0.565	0.220	1.52	0.756	0.592	0.507
			不明	0.554	0.191	1.55	0.747	0.555	0.454
			不明	0.535	0.233	1.47	0.622	0.637	0.494
			不明	0.583	0.206	1.39	0.765	0.599	0.514
7	戸川池窯址	三原郡(原町賀集牛内 (8C前)	壺(口縁部)	0.470	0.085	3.15	0.633	0.266	0.167
			壺(底部)	0.385	0.069	2.19	0.640	0.237	0.155
			壺(底部)	0.469	0.055	2.08	0.687	0.226	0.170
			壺(底部)	0.514	0.079	1.97	0.773	0.272	0.255
			壺(体部)	0.440	0.047	1.95	0.605	0.186	0.165
8	汁谷窯址	三原郡(原町神代黒道汁谷 (7C前)	壺(口縁部)	0.577	0.220	2.03	0.649	0.565	0.437
			壺(口縁部)	0.507	0.158	2.06	0.611	0.437	0.329
			壺(体部)	0.551	0.182	1.81	0.600	0.486	0.360
9	角床窯	津名郡五色町下堀小字角床 (8C中~8C後)	壺(底部)	0.410	0.175	1.52	0.453	0.418	0.397
			壺(底部)	0.446	0.228	1.86	0.604	0.418	0.401
			壺(体部)	0.516	0.270	1.93	0.792	0.420	0.364
			不明	0.474	0.204	2.14	0.710	0.375	0.355
			不明	0.479	0.223	2.01	0.673	0.424	0.346
			不明	0.384	0.145	1.86	0.518	0.317	0.270
			不明	0.428	0.246	2.20	0.568	0.390	0.364
			不明	0.551	0.218	1.79	0.663	0.460	0.503
10	奥の池窯	津名郡五色町下堀小字焼訛 (8C末)	壺(底部)	0.432	0.133	2.67	0.614	0.294	0.233
			壺(体部)	0.458	0.114	2.84	0.549	0.303	0.238
			壺(底部)	0.454	0.232	2.16	0.743	0.387	0.264
			壺(底部)	0.417	0.195	2.53	0.597	0.336	0.279

第111表 下内蔵遺跡出土土器の分析データ(1)

No	報告	窯跡名	出土位置	時代	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
1	4	須恵器(环身)	1区第1面 第1面検出土器	奈良時代	0.537	0.162	2.51	0.633	0.457	0.346
2	17	須恵器(盤)	1区第1面 第1面検出土器	奈良時代?	0.564	0.147	2.44	0.637	0.433	0.354
3	16	須恵器(把手)	1区第1面 第1面検出土器	奈良時代?	0.473	0.208	2.74	0.483	0.390	0.297
4	2	須恵器(环身)	1区第1面 第1面検出土器	奈良時代	0.464	0.147	2.41	0.545	0.356	0.311
5	1	須恵器(环蓋)	1区第1面 第1面検出土器	奈良時代	0.483	0.134	2.45	0.591	0.376	0.328
7	15	須恵器(碗)	1区第1面 第1面検出土器	中世	0.476	0.156	2.60	0.556	0.337	0.308
8	13	須恵器(甕)	1区第1面 第1面検出土器	古墳時代	0.455	0.216	3.66	0.418	0.384	0.253
10	12	須恵器(横瓶)	1区第1面 第1面検出土器	古墳時代?	0.579	0.169	2.40	0.712	0.452	0.460
11	3	須恵器(环身)	1区第1面 第1面検出土器	奈良時代	0.537	0.118	2.37	0.647	0.373	0.273
12	27	須恵器(环蓋)	1区第1面 スキ溝	奈良時代	0.340	0.060	1.59	0.432	0.195	0.115
13	29	須恵器(盤)	1区第1面 スキ溝	奈良時代?	0.512	0.123	2.58	0.643	0.368	0.321
14	23	須恵器(环蓋)	1区第1面 SD02	奈良時代	0.504	0.136	2.92	0.604	0.314	0.265
15	24	須恵器(甕)	1区第1面 SD02	中世?	0.486	0.190	2.73	0.578	0.416	0.340
16	38	須恵器(环身)	1区第2面 第2面検出土器	奈良時代	0.481	0.195	3.10	0.550	0.484	0.292
20	34	須恵器(环蓋)	1区第2面 第2面検出土器	奈良時代	0.479	0.163	2.79	0.617	0.380	0.287
21	33	須恵器(环蓋)	1区第2面 第2面検出土器	奈良時代	0.534	0.184	2.51	0.645	0.435	0.385
22	42	須恵器(甕)	1区第2面 第2面検出土器	奈良時代	0.519	0.145	2.51	0.591	0.393	0.342
25	52	須恵器(环蓋)	1区第2面 SB03-P 2	奈良時代	0.571	0.240	2.73	0.632	0.429	0.357
27	50	須恵器(环蓋)	1区第2面 SB03-P 3	奈良時代	0.482	0.190	2.55	0.576	0.299	0.236
28	51	須恵器(环蓋)	1区第2面 SB03-P 4	奈良時代	0.496	0.104	2.55	0.550	0.286	0.214
29	54	須恵器(环身)	1区第2面 SB04-P 5	奈良時代	0.451	0.150	2.78	0.522	0.380	0.294
33	59	須恵器(环蓋)	1区第2面 SD08	奈良時代	0.549	0.284	2.35	0.638	0.498	0.428
36	88	須恵器(捏鉢)	2区第1面 第1面検出土器	中世	0.598	0.198	2.58	0.436	0.263	0.130
38	87	須恵器(捏鉢)	2区第1面 第1面検出土器	中世	0.372	0.121	2.50	0.471	0.278	0.170
39	85	須恵器(环身)	2区第1面 第1面検出土器	奈良時代	0.440	0.283	2.78	0.570	0.498	0.371
40	98	須恵器(甕)	2区第2面 第2面検出土器	奈良時代?	0.488	0.174	2.51	0.579	0.413	0.287
41	105	須恵器(环蓋)	2区第2面 P 5	奈良時代	0.537	0.111	2.53	0.477	0.244	0.307
42	106	須恵器(环身)	2区第2面 P 5	奈良時代	0.573	0.109	2.48	0.634	0.379	0.281
43	443	須恵器(环蓋)	4-5区第1面 第1面検出土器	奈良時代	0.566	0.086	2.14	0.592	0.304	0.352
44	442	須恵器(环蓋)	4-5区第1面 第1面検出土器	奈良時代	0.572	0.186	2.33	0.625	0.407	0.440
45	439	須恵器(环身)	4-5区第1面 第1面検出土器	古墳時代	0.548	0.114	1.85	0.647	0.292	0.259
46	441	須恵器(环身)	4-5区第1面 第1面検出土器	古墳時代	0.352	0.092	3.58	0.294	0.227	0.217
50	445	須恵器(环身)	4-5区第1面 第1面検出土器	奈良時代	0.510	0.126	2.59	0.574	0.313	0.339
51	446	須恵器(环身)	4-5区第1面 第1面検出土器	奈良時代	0.513	0.119	2.93	0.489	0.302	0.226
52	449	須恵器(甕)	4-5区第1面 第1面検出土器	中世?	0.412	0.205	2.68	0.462	0.348	0.296
55	670	須恵器(集煙器)	6区第1面 第1面検出土器	奈良時代	0.542	0.142	2.43	0.639	0.368	0.347
56	663	須恵器(环身)	6区第1面 第1面検出土器	奈良時代	0.503	0.101	2.49	0.588	0.336	0.321
57	660	須恵器(横輪蓋)	6区第1面 第1面検出土器	奈良時代	0.531	0.205	2.52	0.601	0.422	0.414
59	658	須恵器(环蓋)	6区第1面 第1面検出土器	古墳時代	0.524	0.174	2.22	0.613	0.426	0.372
60	662	須恵器(环身)	6区第1面 第1面検出土器	奈良時代	0.487	0.116	2.66	0.568	0.369	0.288
63	681	須恵器(碗)	6区第1面 P18	中世	0.355	0.153	2.51	0.419	0.348	0.185
65	691	須恵器(环身)	6区第2面 第2面検出土器	奈良時代	0.565	0.225	2.38	0.729	0.504	0.444
66	689	須恵器(环身)	6区第2面 第2面検出土器	奈良時代	0.493	0.097	2.48	0.585	0.313	0.320
69	692	須恵器(甕)	6区第2面 第2面検出土器	奈良時代	0.496	0.125	2.42	0.643	0.331	0.317
71	695	須恵器(环蓋)	6区第2面 第2面検出土器	奈良時代	0.492	0.185	3.36	0.513	0.394	0.272
73	697	須恵器(环身)	6区第3面 第3面検出土器	奈良時代	0.547	0.241	2.36	0.656	0.451	0.374
74	716	須恵器(环身)	7区第1面 第1面検出土器	奈良時代	0.589	0.172	2.32	0.704	0.480	0.437
75	717	須恵器(甕)	7区第1面 第1面検出土器	奈良時代	0.414	0.199	3.16	0.479	0.345	0.248
76	715	須恵器(环蓋)	7区第1面 第1面検出土器	奈良時代	0.545	0.183	2.33	0.671	0.528	0.404
77	714	須恵器(高环)	7区第1面 第1面検出土器	古墳時代	0.460	0.133	2.49	0.557	0.266	0.157
78	719	須恵器(环身)	7区第1面 SD114	奈良時代	0.559	0.136	2.31	0.615	0.429	0.427
79	723	須恵器(环身)	7区第4面 第4面検出土器	奈良時代	0.503	0.134	2.66	0.631	0.346	0.345
90	22	その他(丸瓦)	1区第1面 第1面検出遺物	奈良時代?	0.443	0.213	3.30	0.469	0.475	0.310

第112表 下内膳遺跡出土土器の分析データ(2)

No.	報告	器種	地区・検出面・遺構	時代	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
91	21	上師器(蓋)	1区第1面 第1面檢出土器	奈良時代	0.462	0.295	3.42	0.439	0.491	0.313
92	20	上師器(环身)	1区第1面 第1面檢出土器	奈良時代	0.469	0.377	3.42	0.409	0.861	0.269
93	19	土師器(环身)	1区第1面 第1面檢出土器	奈良時代	0.502	0.369	3.54	0.421	0.685	0.295
94	18	上師器(环身)	1区第1面 第1面檢出土器	奈良時代	0.466	0.422	4.47	0.343	0.644	0.375
95	25	上師器(环身)	1区第1面 第1面檢出土器	奈良時代	0.584	0.196	2.46	0.599	0.499	0.360
96	102	土師器(环身)	2区第2面 第2面檢出土器	奈良時代	0.507	0.267	2.78	0.479	0.685	0.257
97	101	土師器(环身)	2区第2面 第2面檢出土器	奈良時代	0.482	0.486	3.56	0.366	0.959	0.307
98	107	黑色土器(輪)	2区第2面 P 6出土土器	平安時代	0.538	0.641	2.25	0.377	0.736	0.450

第2節 洲本川流域の地形環境分析

立命館大学助教授 高橋 学

淡路島の地形環境

淡路島は六甲山地と連続する北東-南西の方向性を持つ津名山地と、東西に延びる論鶴羽山地から構成されている。津名山地は、主として中生代の花崗岩から形成されており、それが地殻変動によって隆起した地形である。このような地殻変動が生ずると、私たちはそれを地震として感じることになる。1995年1月17日に発生した兵庫県南部地震は、津名山地の西側を限る野島断層が活動した地殻変動であった。津名山地の山容を上空から眺めると、北東-南西方向に延びる多くの筋を何本もみることができる。これは、リニアメントと呼ばれ、活断層であることが多い。津名山地は断層の活動によって隆起した部分なのである。他方、大阪湾や播磨灘などは、断層活動によって沈降した部分である。

近畿地方において、隆起した山地と沈降した海・平野・盆地は、かなり規則的に配列している。近畿地方の西部では、淡路島から六甲山地を経て福井県の敦賀まで延びる東北-南西の方向性を持つ山地が卓越する。他方、東部では養老山地から敦賀へ向かう北西-南東方向が顕著である。そして、それらの内側では、上町台地、生駒・金剛山地、笠置山地、鈴鹿山地などが南北に延びる。また、それぞれの山地の間には、大阪湾、河内平野、京都・奈良盆地、琵琶湖・伊賀上野盆地、伊勢平野の凹地が存在する。これらは、敦賀を頂点とし淡路島と養老山地とを斜辺とした三角形のようにみえる地域を構成している。この地域は地質学や地形学では近畿三角帯（トライアングル）と呼ばれている。近畿三角帯には東西方向から地殻を圧縮する力が働き、地殻が変形をおこしたために門山が形成されたと考えられている。この地殻変動を藤田和夫は六甲変動と名づけている（第237図）。

近畿三角帯において山地は急峻で断層によって切り刻まれている。その上に、山地を構成する花崗岩は深層風化を受けており、まるで砂山のような状態である。このため、強い雨をきっかけに地滑りや山崩れが生じ易く、山麓の地域は土石流などの影響を受けやすい。

論鶴羽山地は南を中央構造線（M.T.L）で限られ、南へ傾斜する単斜構造をしている。また、北側はそれに平行して東西に延びる複数の活断層によって階段状に徐々に高度を低下させる。この山地は、中生代白亜紀の砂岩や泥岩から構成されている。このため論鶴羽山地は、津名山地と比較して粗粒な砂礫を生産する特徴がある。

論鶴羽山地の南に位置する中央構造線は、日本列島を横切る最大の構造線であり、この南側が西南日本外帯、北側が西南日本内帯と呼ばれる地域となる。中央構造線は現在も盛んに活動を続けているため、これに沿った地域では地震が非常に多い。淡路島の山地は、現在も隆起し続けており、過去にも大きな地震に何度も襲われている。液状化の際に生じた砂脈などを遺跡の発掘調査の際に、確認することができる。洲本平野においては、洲本市教育委員会の手で調査された下内膳遺跡で、弥生時代中期に発生した地震の痕跡が確認されている。また、佃遺跡（津名郡東浦町）や雨流遺跡（三原郡三原町）などのにおいても砂脈が検出されている。

洲本平野の地形面・地形帶環境

洲本平野は、津名山地と諭鶴羽山地とが交会する地点の東側に位置する谷が、洲本川とその支流によって埋積された平野である。洲本川は支流をあわせると流域面積85 km²を測り、大阪湾までの8 kmを一気に駆け下る。その支流としては、津名山地から流下する奥畑川、諭鶴羽山地を源とする初尾川、鮎屋川、猪鼻川、竹原川などがある。

洲本平野には諭鶴羽山地から断層で分断された小さな山地（ケルンバット）が列状をなして点在する。洲本の市街地の南に位置する三熊山や桑間の南に位置する標高167 mの山地は、典型的なケルンバットである。これらの存在によって、洲本平野は小盆地を連ねたような形態を示している。

洲本平野は、形成された時期によって大きく2つに分けることができる。すなわち、更新世に主として支流によって形成された部分と、完新世に洲本川や物部川の營力で形成された部分である。更新世の地形面の大部分は、鮎屋川によって形成された扇状地帯が段丘化したものであり、桑間のケルンバット以南に分布する。この地形面の存在によって、洲本川は流路を制約され、細長い沖積平野を形成せざるを得なくなっているのである。

完新世に洲本川や物部川の營力で形成された沖積平野は、いわゆる縄文海進で海域になった三角州帯と陸域でありつけた扇状地帯とに区別できる。既存のボーリングデータの解析によれば、縄文海進時の海域は下内膳遺跡付近までおよんでいたと考えられる。当時の様子をDEM（国土数値データ）を利用して、景観復原を試みたのが第238図である。陸域は常緑広葉樹のうっそうとした森となっていた。これに対し、洲本川と同様に物部川の下流域も海域となっていたと考えられる。洲本市街地のほとんどは、この時に海域であったところに立地しているのである。現在の洲本川河口付近では、縄文海進の時に堆積した軟弱な海成層は、およそ30 mの厚さがある。これに対し、物部川の流域において海成層はおよそ20 mの層厚である。洲本川河口付近と物部川流域における海成層の厚さの違いは、前者が最終氷河期に形成された開析谷に、後者が段丘にあたっているためと考えられる。すなわち、最終氷河期に洲本川は段丘面を10 mの深さで下刻した谷の中を流れていることになる。播磨地方や神戸の場合、軟弱な海成層は最終氷河期の開析谷にあたる場所でおよそ15 m、段丘が埋没しているところでは7~8 mの層厚に過ぎない点に注目しておく必要がある。洲本平野では播磨地方や神戸と比較して、およそ2倍の厚さの軟弱な地層が存在する。しかも、現在の市街地の大半が、その上に立地している。このことは、洲本の防災対策を考える上で、大きな問題となる。

さて、海成層の分布でもうひとつ注目しておく現象がある。それは、海成層が分布する限界の現在の標高がおよそ9 mであることである。海成層の上限高度は標高1 mであり、縄文海進最盛期の海水準が標高9 mに達したわけではない。地表面下の厚さ8 mの砂礫層は、洲本川が縄文海進最盛期以降に堆積させた河成層である。縄文海進最盛期の海域が、現在の地表面の標高に基づいて復原されていることがある。しかし、それはまったくの誤りである。現在の標高は、縄文海進最盛期以降に堆積した土砂の厚さを反映したものであり、海成層の分布と直接に関係しない。

ところで、海成層を被覆する海成層が砂礫層で構成されるような場合、それが構成する地表面の形状が扇状地帯に見えることがある。しかしながら、「海域が河川の營力で陸化した場所」という地形の成因に注目するならば、この場所は三角州帯とするのが適切と考えられる。洲本川の谷幅が急に拡大する宇山3丁目と桑間1丁目を連ねた線より上流部の地域を扇状地帯とする地形分類図が存在する。それは地形の成因を考慮しない地形分類といえよう。この報告では、縄文海進最盛期以降に主として河川の營力で

陸化したところを三角州帯としている。

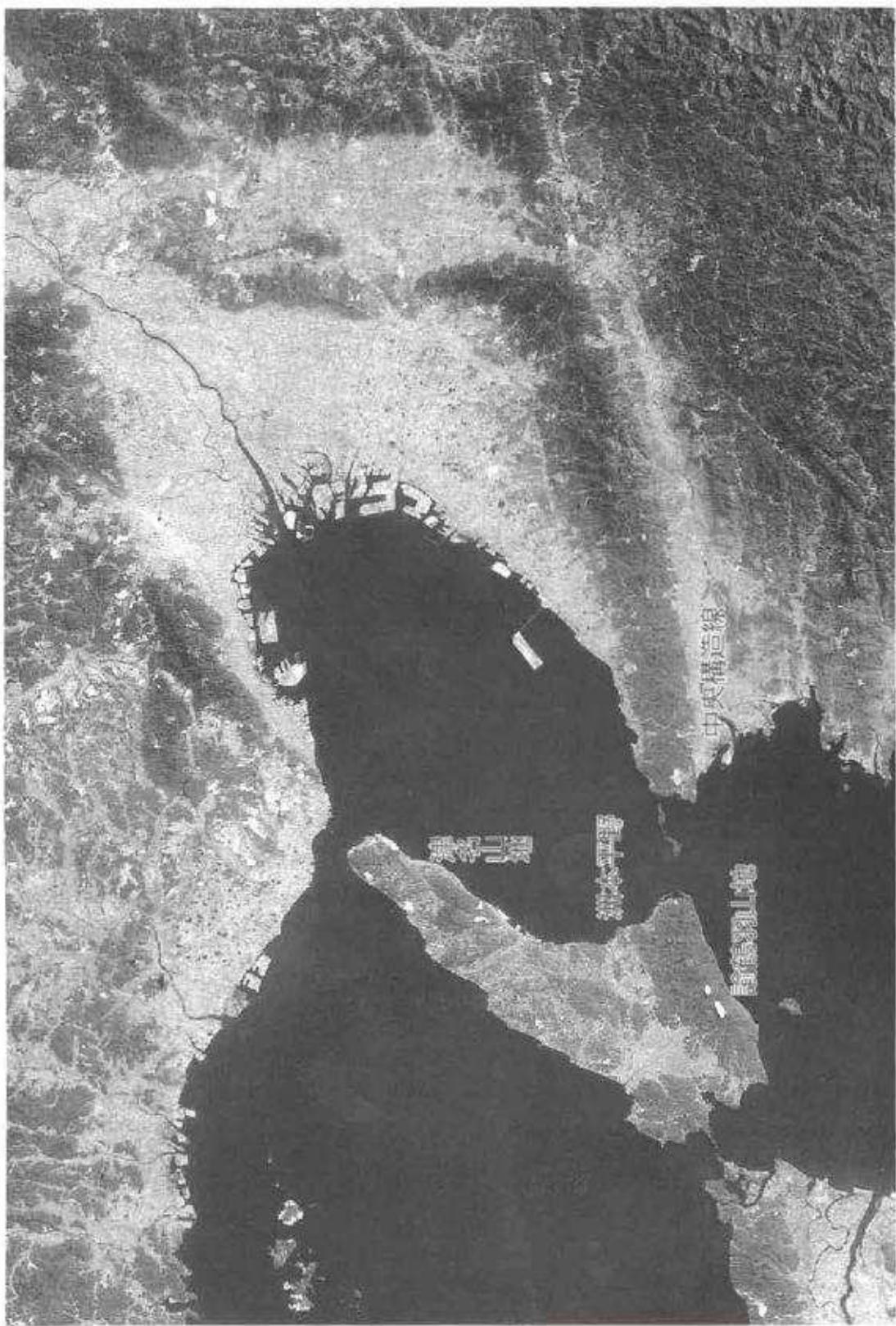
縄文海進が最盛期を過ぎると、洲本川や物部川の運搬してくる土砂によって三角州帯の陸化が進行した。また、沿岸流によって嚴島神社から北北西に向けて内列砂堆が形成された。また形成時期はそれよりも遅れるが、本町1丁目（中列砂堆）や海岸通1丁目（外列砂堆）のところにも、砂堆は形成された。洲本平野においては、これら砂堆の形成時期は明らかにされていないが、他地域の事例から考えて、内列砂堆は縄文時代晚期、中列砂堆は弥生時代中期、外列砂堆は平安時代には人間の居住できるような環境となっていた可能性が高い。これに対し、本町5丁目から物部2丁目にかけては、潟湖となっていた。低湿でなかなか人間が居住できなかったところである。また、塙屋1丁目付近から洲本港にかけては、かつての洲本川の河口であり極めて土地条件が悪い。第239図は水田開発によって平野の森林が伐採され始めた縄文時代晚期～弥生時代前期頃の洲本平野の景観を復原したものである。山地や丘陵には常緑広葉樹が繁茂しているものの、平野では二次林を構成するアカマツがみられるようになってきた状態を示した。

下内膳遺跡の地形環境

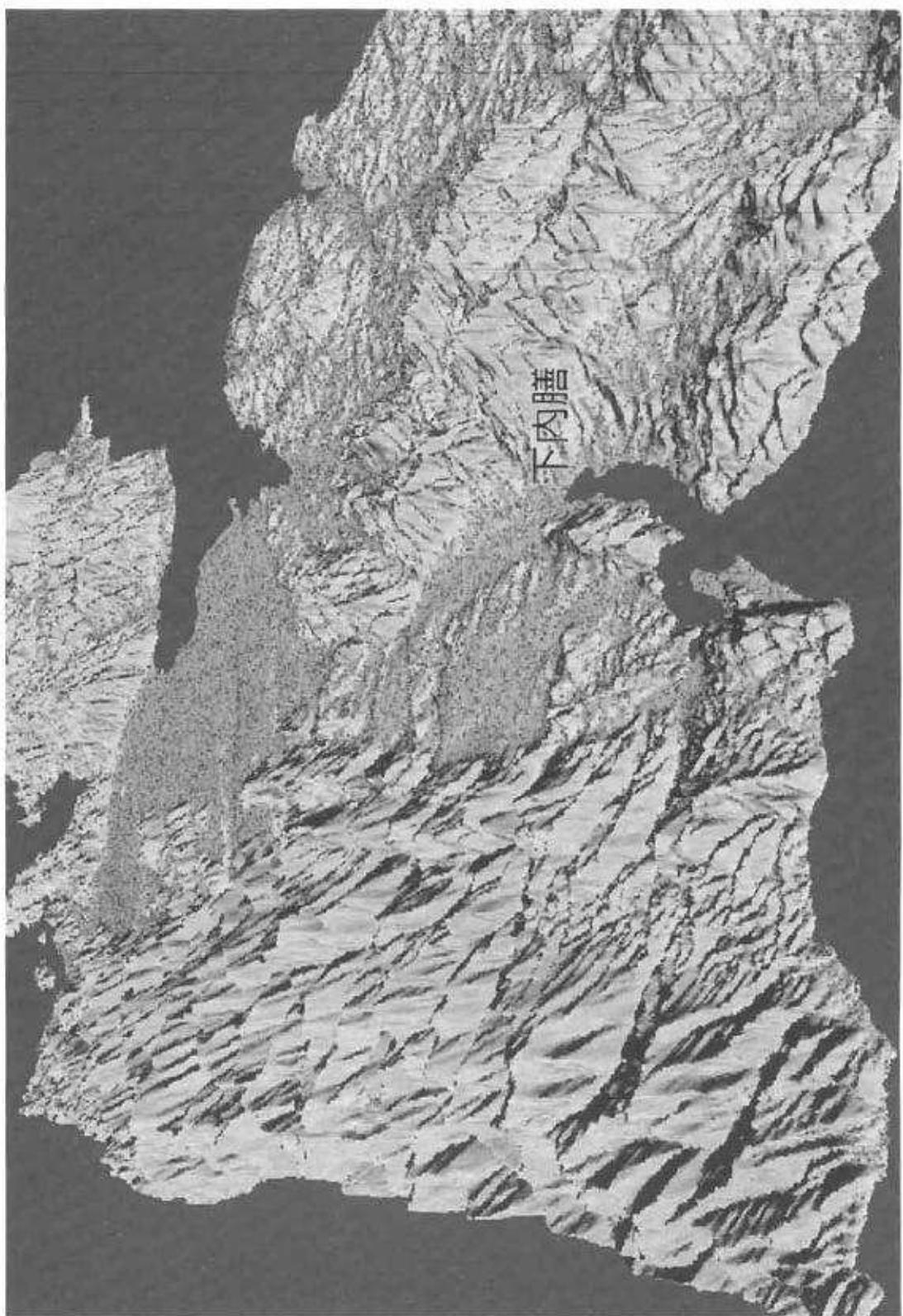
今までのところ、下内膳遺跡では縄文時代早期や前期までに通る生活の痕跡は検出されていない。しかしながら、下内膳遺跡の立地する土石流扇状地帯は、縄文海進最盛期頃に海を見下ろす高台であり、当時の人々が生活するために絶好のところであったと考えられる。この点で、三内丸山遺跡（青森県）と極めてよく類似した場所であったのである。

ところで、これまで下内膳と呼ばれてきた遺跡は、2つのまったく異なった地形環境にまたがっている。すなわち、津名山地から洲本川本流に流入する支流が形成した土石流扇状地帯に属する部分と、洲本川本流が形成した三角州帯に属する部分である。通常、自然発生的に成立したムラの場合、全く異なる地形環境の所に立地することはほとんどない。この点からすると、これまで下内膳と呼ばれてきた遺跡は、本来、ひとまとまりの遺跡でなかった可能性が考えられる。あるいは、最初に土石流扇状地帯のようなことがあったのかも知れない。

洲本川の三角州帯のうち宇山1丁目、桑間1丁目より上流側の地域は、遙くとも縄文時代晚期までには陸化していた可能性が高い。また、当時は現在と比較し微起伏に富んでおり、集落は中州や自然堤防などの微高地に、水田は旧河道や後背湿地に営まれたものと思われる。その様子を具体的に明らかにするためには、微地形環境分析や極微地形環境分析が必要である。しかしながら、今回の地形環境分析ではそれらを行うことができなかった。次の機会に期待したい。



第257図 地域概念図



第230図 磯文海進最盛期の洲本平野



第239図 總文時代晚期～弥生時代前期の淀本平野



第240図 下内膳遺跡の地形環境

第3節 下内膳遺跡出土木製品の樹種

京都大学木質科学研究所 伊東 隆夫

兵庫県洲本市下内膳160地に所在する下内膳遺跡は同遺跡北側に位置する先山からの土石流の堆積による扇状地上に立地し、弥生時代中期後半の土壙、柱穴、住居跡や水田跡、弥生時代後期前半の住居跡、奈良時代の掘立柱建物等の遺構がみられる。

これらの遺構より出土した木製品24点につき樹種の同定をおこなった。まず、木片から安全カミソリで木口面、板面、板目面の三断面の薄い切片を取り取り、スライドガラス上に切片を載せてガムクローラーで封入してプレパラートを作製し、顕微鏡で観察して樹種の特徴をみつけて同定した。樹種の同定の根拠は以下の通りである。

カヤ (*Torreya nucifera* S.et Z.): 樹脂道、放射仮道管ならびに樹脂細胞を欠く。輪方向の仮道管の内壁にらせん肥厚がみられる。

二葉マツ (*Pinus* sp., *Diploxylon*): 大型の樹脂道がみられる。分野壁孔は大型の窓状となる。放射組織に隔壁状突起が存在する。

コナラ節 (*Quercus* sp., *Lepidobalanus* sect. *Prinus*): 環孔材。孔圈道管は大きく、孔圈外小道管は薄壁で放射状ないし大炎状に集団をなして分布する。道管は單穿孔を有し、ときに内壁にチロースがみられる。顯著な広放射組織がみられる。

ケヤキ (*Zelkova serrata* Makino): 環孔材。孔圈道管はおおむね1列。道管は單穿孔を有す。小道管にらせん肥厚。放射組織は異性で1-6列。

シキミ (*Illicium anisatum* L.): 散孔材。非常に小さい道管が一様に分布する。道管は階段穿孔を有し、側壁にらせん肥厚がみられる。道管放射組織隔壁孔は対列状ないし階段状。放射組織は異性で、1-2細胞幅。放射柔細胞の壁は非常に厚く、板目面でみた直立細胞は大きく目立つ。

クスノキ科 (Lauraceae): 散孔材。周間柔組織。單穿孔。油細胞。道管にチロースおよびらせん肥厚あり。

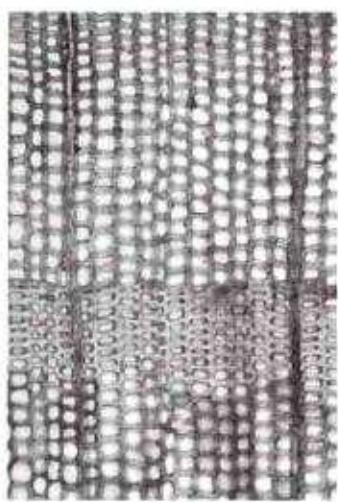
サカキ (*Cleyera japonica* Thunb. pro parte emend. S.et Z.): 散孔材。道管は極めて小さい。道管は階段穿孔を有し、階段の数は多い。道管にらせん肥厚。放射組織は異性では単列。

樹種同定の結果は第113表に示す。

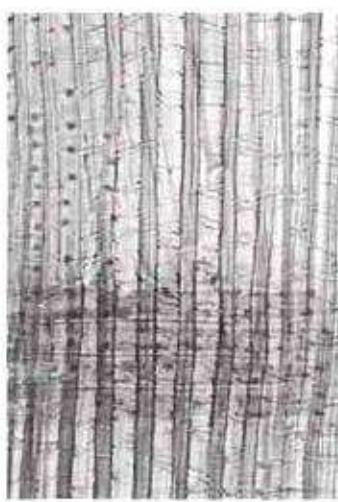
表からわかるように弥生時代の8点の木製品のうち柱が7点で礎板が1点出土した。柱材のうち5点がサカキ、1点がカヤで、残り1点は切片が十分に採取できなかつたため同定不能であり、礎板はカヤ材であった。また、奈良時代に出土した掘立柱11点はすべてカヤであった。これら以外に、時代は不明であるが杭が5点出土している。これら杭材にはケヤキ、コナラ節、クスノキ科、シキミ、二葉マツと様々な樹種が用いられていた。以上のような結果であるが奈良時代の柱材12点すべてにカヤ材がまとまって用いられていることは珍しく、筆者の知る限りでは弥生時代の山木遺跡でカヤ材の柱が13点出土したのに次いで多い。本遺跡で、弥生時代の柱材が1点を除いてはサカキであり、奈良時代のカヤと対比できる。これが時代の違いによる植生の変化に基づくものなのか興味のあるところであるが何分試料数が不足しているので詳細な検討はむずかしい。

第113表 下内膳遺跡出土木製品の樹種同定一覧表

資料No	報告No	出土地区・遺構番・遺構名	遺物名	時代	樹種	写真No
1	W 3	1区第2面 SB02-P 7	柱	奈良	カヤ	1
2	W	1区第2面 SB03-P 3	柱	奈良	カヤ	
3	W	1区第2面 SB02-P13	柱	奈良	カヤ	2
4	W 1	1区第2面 SB02-P 4	柱	奈良	カヤ	
5	W 5	1区第2面 SB06-P 3	柱	奈良	カヤ	
6	W	1区第4面 SB08-P 4	柱	弥生	カヤ	
7	W 4	1区第2面 SB02-P14	柱	奈良	カヤ	
8	W 2	1区第2面 SB02-P 5	柱	奈良	カヤ	
9	W	2区第2面 SK07	杭	奈良	クヤキ	8-9
11	W	2区第2面 SK07	杭	奈良	コナラ箇	5-6-7
12	W	2区第2面 SK07	杭	奈良	クスノキ科	13-14-15
13	W	2区第2面 SK07	杭	奈良	シキミ	10-11-12
14	W 6	2区第2面 SK07	杭	奈良	二葉マツ	3-4
15	W 8	4・5区第1面 SB16-P 6	柱	奈良	カヤ	
16	W	4・5区第1面 SB16-P 4	柱	奈良	カヤ	
17	W	4・5区第1面 P10	柱	奈良?	カヤ	
18	W	4・5区第1面 SB16-P 8	柱	奈良	カヤ	
19	W 7	3区第7面 SH01-P 2	礎板	弥生後期	カヤ	
20	W11	4・5区第5面 P17	柱	弥生中期	サカキ	
21	W10	4・5区第5面 P16	柱	弥生中期	サカキ	
22	W 9	4・5区第5面 P15	柱	弥生中期	サカキ	17-18
23	W	4・5区第5面 P21	柱	弥生中期	サカキ	16
24	W	4・5区第5面 P22	柱	弥生中期	サカキ?	
25	W	4・5区第5面 P23	柱	弥生中期	同定不可能	



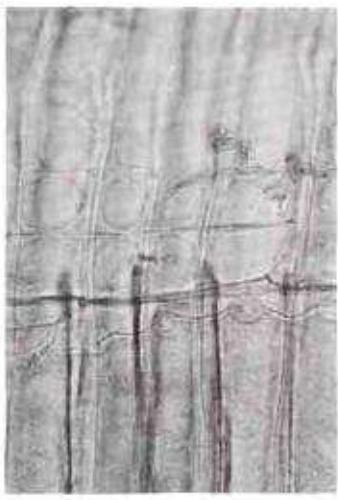
1. カヤ(木口)X100 №1



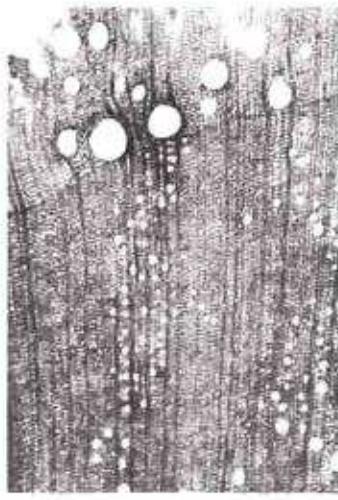
2. カヤ(板目)X200 №3



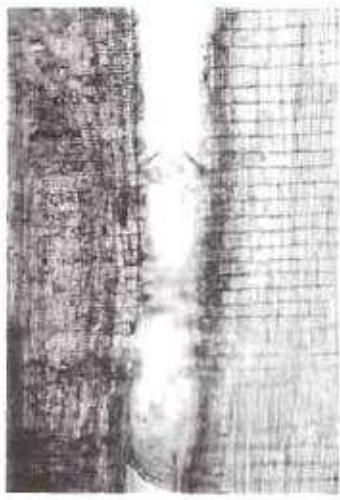
3. 二葉マツ(木口)X40 №14



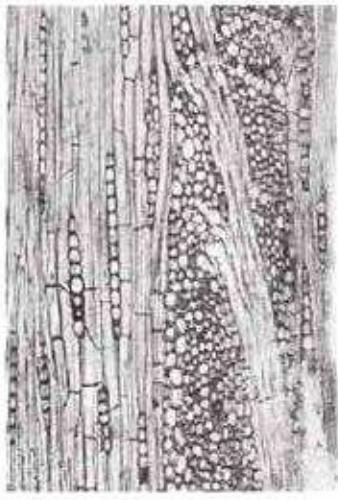
4. 二葉マツ(板目)X400 №14



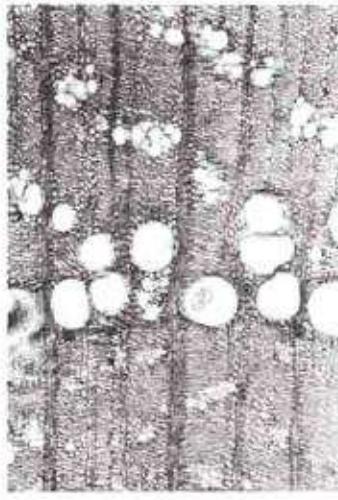
5. コナラ節(木口)X40 №11



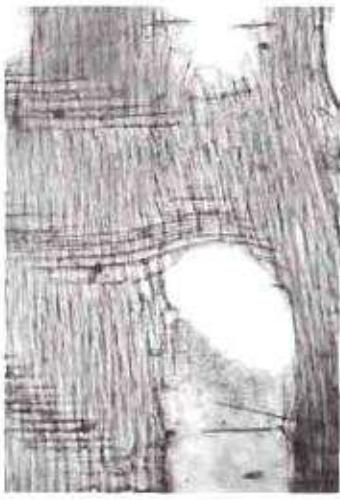
6. コナラ節(板目)X100 №11



7. コナラ節(板目)X100 №11



8. ケヤキ(木口)X40 №9

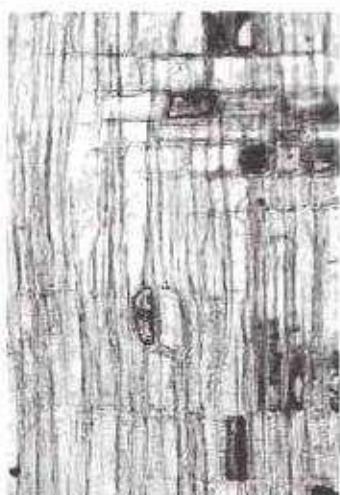


9. ケヤキ(板目)X100 №9

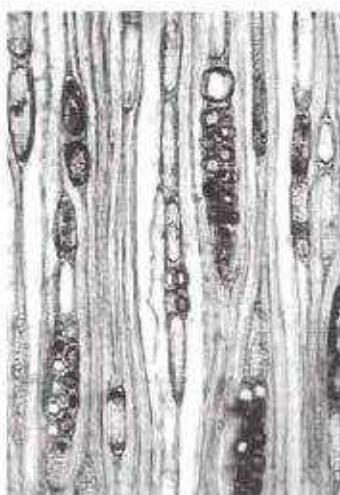
第3圖 下内膳遺跡出土木製品の微構



10. シキミ(木口)×100 №13



11. シキミ(柱目)×100 №13



12. シキミ(板目)×100 №13



13. クスノキ科(木口)
×40 №12



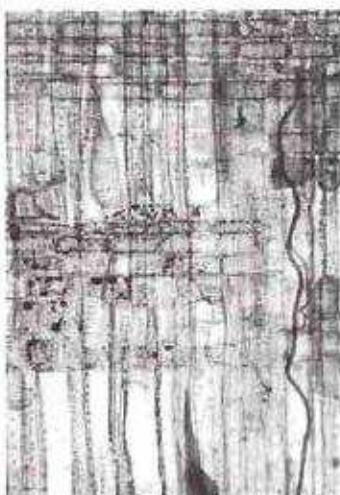
14. クスノキ科(柱目)
×100 №12



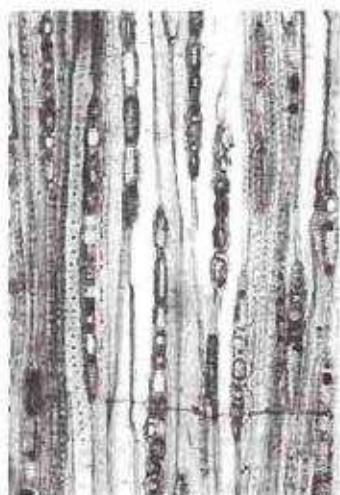
15. クスノキ科(板目)
×100 №12



16. サカキ(木口)×100 №23



17. サカキ(柱目)×100 №22



18. サカキ(板目)×100 №22

第5章 出土遺物のまとめ

第1節 弥生土器

1. はじめに

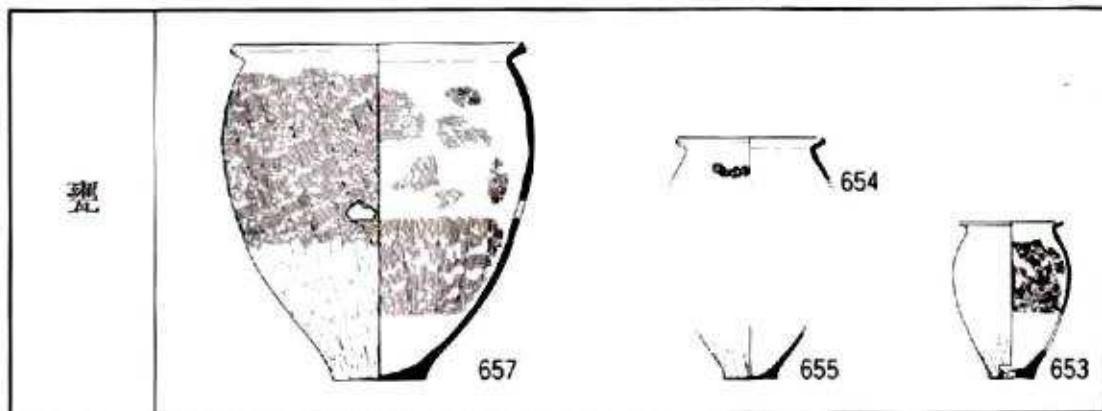
今回の調査において、弥生土器が多量に出土している。前期の土器も数点出土しているが、大多数は後期で、中期がこれに続く。

そこで、中期と後期の土器について検討を加えていく。特に、量的にまとまって出土している弥生時代後期の土器を中心にまとめていくことにする。後期の土器については、層位的に数層に分かれて出土していることから、数段階に編年が可能である。そこで、本節においては、この編年を主眼とし、その前提としてまず器種分類を行いたい。また、編年案をもとに、当遺跡出土の土器の特徴について若干の検討を行いたい。

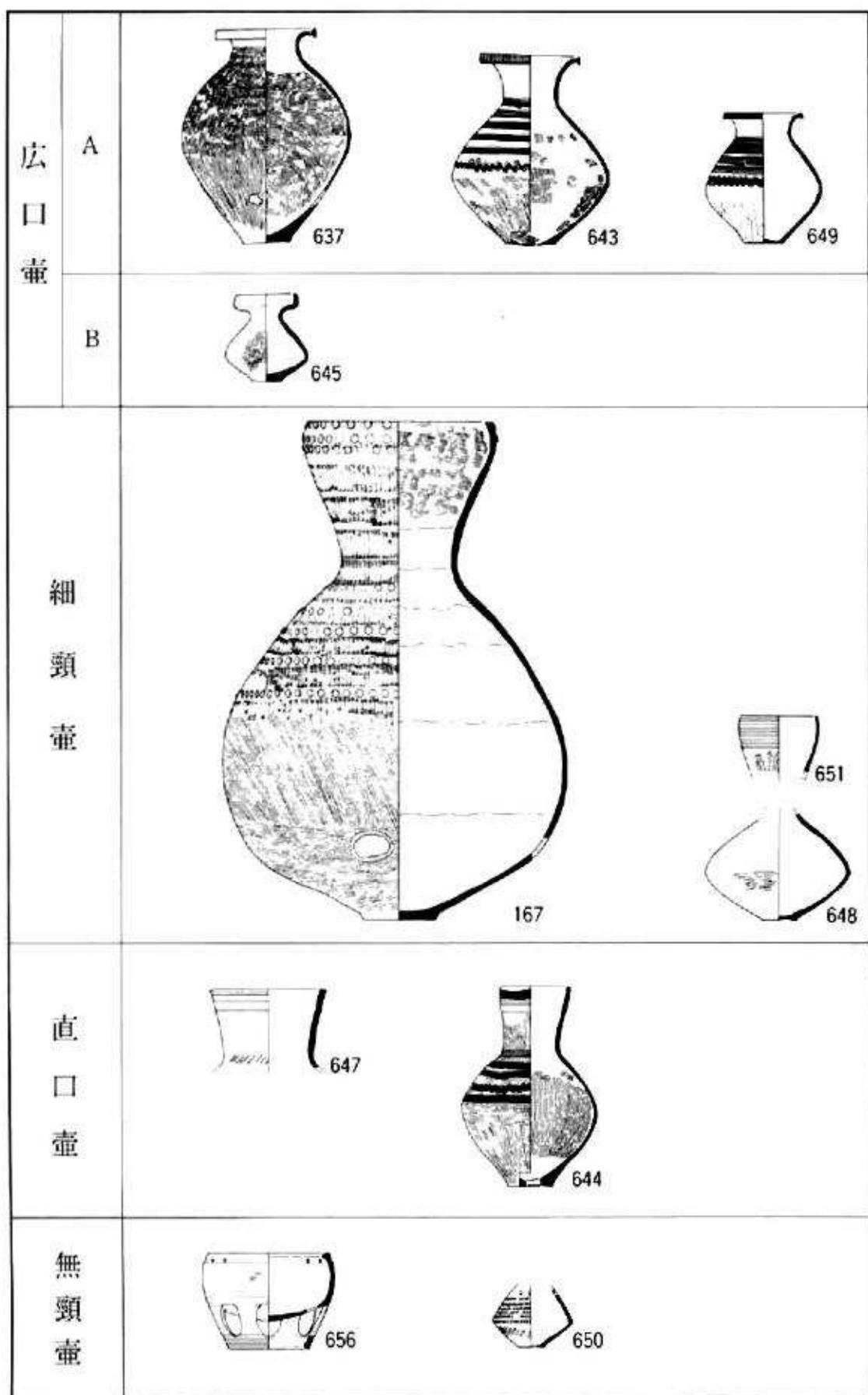
2. 弥生中期の土器について

(1) 器種分類

器種	甕と壺が出土している。
甕	大型甕（A）・中型甕（B）・小型甕（C）が出土している。
壺	広口壺・細頸壺・直口壺・無頸壺が出土している。
広口壺	一般的な広口壺（A）と二重口縁をなすもの（B）とに細分する。
A	体部最大径が中位より上にあり無紋のもの（A 1）と、体部最大径が中位にあり体部上半および口縁端部を櫛描紋で加飾するもの（A 2）とが認められ、後者は口縁端部・体部外面に櫛描紋を施文している。
B	頸部から口縁部にかけて大きく外反し、端部を上方に大きく引き延ばし、二重口縁を呈している。



第243図 弥生中期の甕の分類



第244図 异生中期の壺の分類

- 細頸壺** 大型のもの（A）と小型のもの（B）とに細分できる。
- 直口壺** いわゆる直口壺（A）と長頸壺に近いもの（B）とがある。
- 無頸壺** 脚付無頸壺（A）と算盤玉形を呈する無頸壺（B）とがある。

(2) 編年の位置付け

当地域における弥生時代中期の土器編年はいまだに確立していない。そこで、畿内における土器編年を参考に検討を加えていくことにする。

壺

- 広口壺A** A 1については、國分政子¹⁾によると「河内平野式」広口壺E 3に分類されるタイプである。そして、このタイプは第Ⅲ様式（新）段階に時期的中心があるとされている。
A 2については、類例が四ツ池遺跡90地区B・SR-001土器群出土資料²⁾、瓜生堂遺跡（Ⅲ）出土資料³⁾、東奈良遺跡II-3-1地区土器群C出土資料⁴⁾等がある。いずれも、第Ⅲ様式に位置付けられている。
- 広口壺B** 当型式については、管見の限り類例は認められないが、4・5区第5面SK51において、第Ⅲ様式とした壺A 2と共にしている。よって、第Ⅳ様式に位置付けたい。
- 細頸壺A** いわゆる「生駒西麓型土器」であり、「生駒西麓產土器」である。濱田延光の生駒西麓型土器の所属性の変遷表⁵⁾に対照させると、①体部下半に重心をもつこと、②体部下半外側の上半を斜方向に、下半を横方向にハラ磨きを施すこと、③縦状紋の幅が3~4cmであること等の特徴から、第Ⅳ様式に位置付けられる。
- 細頸壺B** 口縁部に凹縞紋を施してあることから、第Ⅳ様式に位置付けられる。
- 直口壺A** 4・5区SK56において細頸壺Bと共にしていることから、第Ⅳ様式に位置付けられる。
- 直口壺B** 4・5区第5面SK51において、第Ⅲ様式の広口壺A 2と共にしている。よって、当タイプについては第Ⅲ様式に位置付けられる。
- 無頸壺A** 当タイプは、第Ⅳ様式を特徵付ける器種の一つである。
- 無頸壺B** 完存しないため、時期の特定は困難であるが、4・5区第5面SK56から出土していることから、第Ⅳ様式に位置付けたい。

甕

- 甕A** 畿内においては、形態・調整法等まで類似する資料は認められない。ただし、本遺跡の西約1kmに位置する森遺跡竪穴住居址12⁶⁾に類例が認められる。共伴遺物から第Ⅳ様式に位置付けられる。また、和泉の四ツ池遺跡81地区SD-008溝出土資料⁷⁾にも類例が認められ、第Ⅳ様式に位置付けられている。
- 甕B** 第Ⅳ様式とした4・5区第5面SK56から出土していることから、同様式に位置付けられる。口縁端部のつまみ上げが顕著であることも、その根拠となるものである。
- 甕C** 甕B同様、第Ⅳ様式に位置付けられる4・5区第5面SK56において共伴していることから、同様式に位置付けられる。
- 以上の検討結果をまとめると、以下の通りである。

第Ⅲ様式—広口壺A・広口壺B・直口壺B

第Ⅳ様式—細頸壺A・細頸壺B・直口壺A・無頸壺A・無頸壺B・甕A・甕B・甕C

(3) 小結

以上から、当遺跡出土の弥生時代中期の土器は第Ⅲ様式（弥生中期1）と第Ⅳ様式（弥生中期2）の大きく2時期からなることが明らかとなった。第Ⅲ様式は、広口壺A1等から判断して、新段階に位置付けられる。また、当様式の土器は、壺しかも広口壺に限られ、量的にも第Ⅳ様式の土器に比べて少ない。

地域性 前項の時期の検討において、本遺跡出土の弥生時代中期の土器には、多くの地域的特徴が認められる。以下、時期ごとに簡単にまとめておく。

弥生中期1 広口壺A1は、類例として和泉・河内地方に認められることから、当該地域からの影響が考えられる。

広口壺Bは、摂津・河内・和泉地方に類例が認められる。この中で、649のように口縁部と体部中位にそれぞれ一帯の櫛描波状紋を施し、体部上半には櫛描直線紋を施す模様構成としては河内の瓜生堂遺跡出土例¹⁰が最も類似する。ただし、643のように、649と同じ体部の文様パターンに口縁端部に廉状紋を施すタイプは類例が認められない。河内地方の影響と考えたい。

直口壺Bについては、形態・文様構成において同タイプとみなせる類例は管見の限り認められない。地理的に近い紀伊地方では、直口壺が広口壺を凌ぐようである¹¹が、タイプが異なる。さらに、西積の雲井遺跡¹²で多量に出土した「長頸壺形土器」の中の頸部の長いタイプに、本遺跡出土直口壺Bとの類似が認められるが、体部が卵形を呈し、体部が無紋であることなど、相違点も多い。

弥生中期2 生駒西麓地方から細頸壺Aが搬入されている。

無頸壺A 瓜生堂遺跡出土例¹³に、形態・凹線の施文法等の点において極めて類似する。よって、当該地域からの影響を考えたい。

壺A 大型壺で外面下半をヘラ削り調整する点、口縁端部の形態的特徴、体部の形態的特徴等は、西ノ池遺跡出土資料¹⁴が最も近い。よって、和泉地方からの影響が考えられる。

小結 以上、第Ⅲ様式・第Ⅳ様式を通じて、河内・摂津・和泉からの影響を認めることができた。特に、無頸壺Aに代表されるように、河内との関係がより強く感じられる。

細頸壺A 最後に、細頸壺Aの出土状況について述べておきたい。第3章第2節で報告したように、SD29から後期の土器と一括で発見された状況で出土しており。他に中期の土器は全く含まれていない。SD29を検出した2区第5面をはじめ、その上下の遺構面においても中期の土器は全く出土していない。したがって、SD29出土の細頸壺Aについては、偶然的な混入とは考え難い。

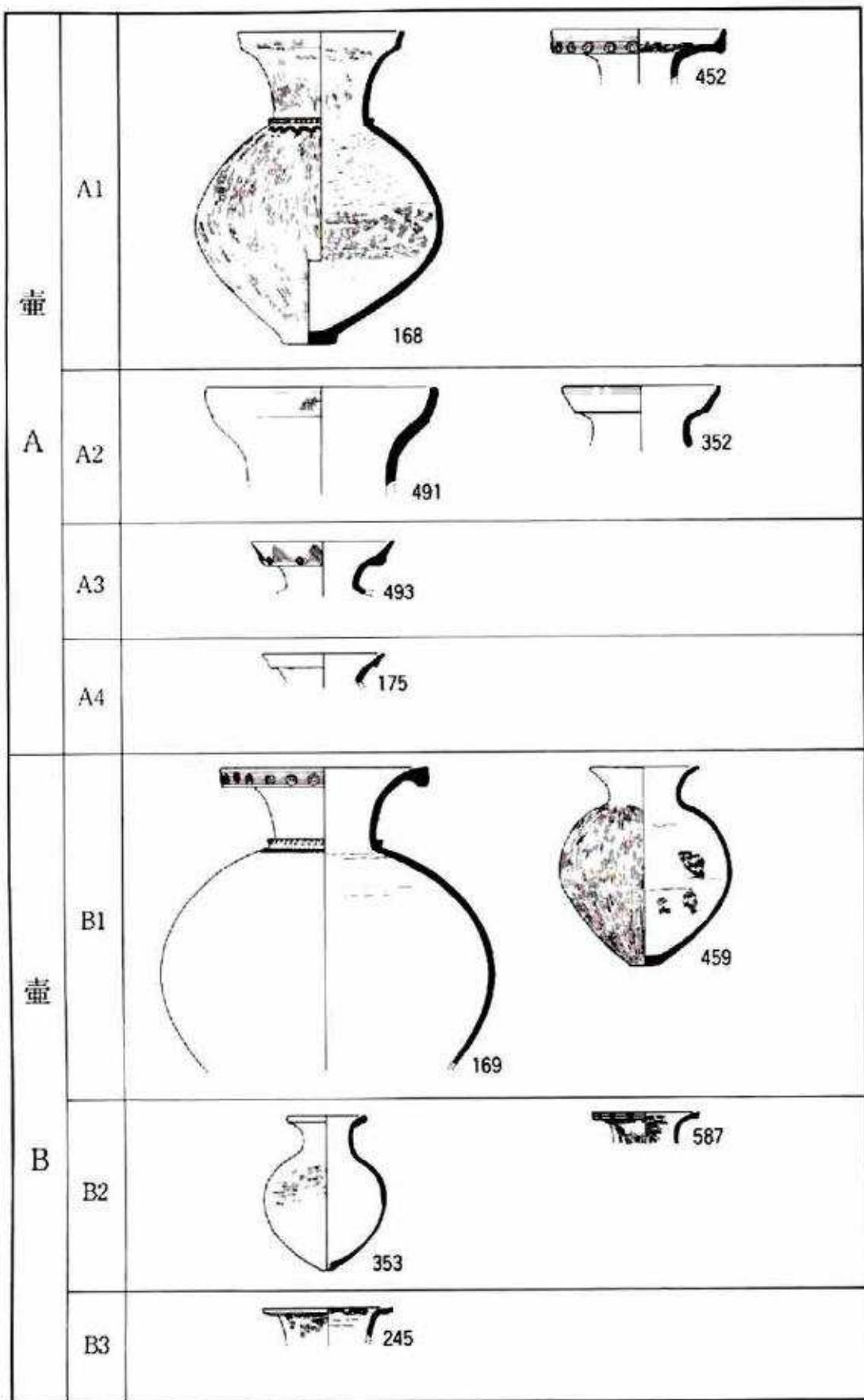
大森谷遺跡 類例として、大森谷遺跡例¹⁵が指摘できる。当遺跡例は、1地区下部包含層から出土している。遺構には伴わないが、他に共伴している土器は全て後期の土器であり、他に中期の土器は全く含まれない。因みに、当遺跡全体でも中期の土器は全く報告されていない。

以上、下内膳遺跡と大森谷遺跡の2例に限られるが、細頸壺Aが後期の土器との共伴例を単なる偶然と見なせないのでないだろうか。細頸壺Aに対する特殊な意味があったものと考えたい。

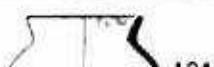
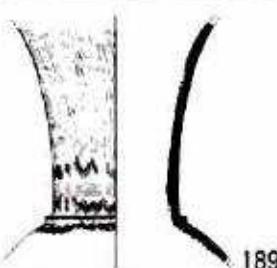
3. 弥生後期の土器について

(1) 器種分類

出土器種	壺・甕・鉢・高杯・器台の各器種が出土している。
壺	口縁部形態を中心に分類すると、二重口縁壺・広口壺・短頸壺・直口壺・長頸壺・細頸壺・台付壺・無頸壺が出土している。これらを、壺A～壺Fと呼称する。
壺A	いわゆる二重口縁壺である。口縁部の形態を中心に4タイプに細分する。
A 1	2次口縁が短く立ち上がるもの。以下のように細分できる。
a	2次口縁をわずかに外反させるもの。
b	上方に拡張するもの。
A 2	A 1に対して2次口縁の立ち上がりが高いもの。以下のように細分できる。
a	1次口縁から2次口縁への変換部が不明確なもの。
b	1次口縁から2次口縁への変換部が明確なもの。
A 3	いわゆる二重口縁壺。以下のように細分できる。
a	2次口縁外面を擬凹線・鋸歯紋・貼付円形浮文等で加飾するもの。
b	横ナマ調整により仕上げ、全く加飾しないもの。
A 4	1次口縁外面に粘土を貼り付け端面を造り、二重口縁を呈するもの。
壺B	いわゆる広口壺。口縁部の形態を中心に細分する。
B 1	球形の体部に対して、口縁部が外反するもの。以下のように細分可能である。
a	口縁端部を拡張するもの。当タイプには、端面に擬凹線・円形浮文等で加飾するものと、全く加飾しないものとがある。
b	口縁端部を拡張しないもの。
B 2	直立する頭部から口縁部が大きく外反するもの。以下のように細分可能である。
a	口縁端部に加飾しないもの。
b	擬凹線・円形浮文等で加飾するもの。
B 3	斜上に直線的に立ち上がる頭部に対して、口縁部を水平方向に屈曲させるもの。
B 4	大きく外反する頭部から口縁部が斜上方に直線的に立ち上がるもの。
B 5	直立する頭部に対して口縁部が明確に屈曲し、斜上方に直線的に立ち上がるもの。
壺C	直口壺。体部に対して口縁部が明瞭に屈曲し、斜上方に直線的に立ち上がるもの。
壺D	いわゆる短頸壺。口縁部形態において細分する。
D 1	いわゆる短頸直口壺。以下のように分類可能である。
a	体部に対して口縁部が斜上方に短く立ち上がるもの。
b	体部に対して口縁部が上方に短く立ち上がるもので、口縁部に擬凹線を施すもの。
c	体部に対して口縁部が上方に短く立ち上がるもの。
D 2	体部に対して口頭部が大きく外反するもの。以下のように細分する。
a	口縁端部を拡張しないもの。
b	口縁端部を拡張し、擬凹線および円形浮文で加飾するもの。
壺E	いわゆる広口長頸壺。
壺F	いわゆる細頸壺。

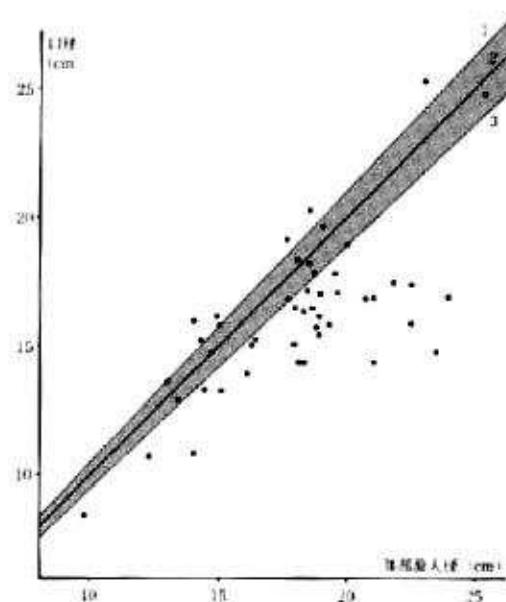


第245図 弥生後期の壺の分類 (1)

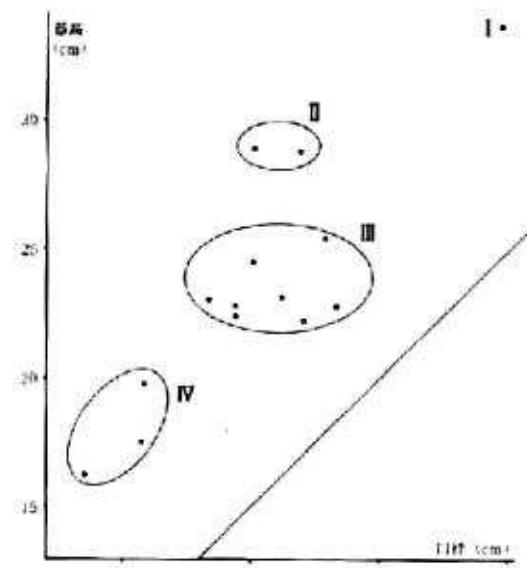
壺 B	B4	
B	B5	
壺 C		
壺 D1	D1	
壺 D2	D2	 
壺 E		
壺 F		
壺 G		
壺 H		

第246図 新生後期の壺の分類(2)

- 壺 G 脚付壺。体部から脚部までしか残存しないため、口縁部等の形態は明確でない。
- 壺 H いわゆる無頭壺。口縁部の小片であるため全体の特徴は明確にできない。口縁部に擬凹線を施す。
- 壺の分類 一部を除いてはいわゆる「V様式系壺」に分類されるものである。このほか、広義には「V様式系壺」の範疇で捉えられるのであろうが、当遺跡においては一般的ではない体部内面をへら削りにより仕上げるもの別型式とした。また、口縁部が受口状を呈するものについても別型式とした。
- V様式系壺 「V様式系壺」については、法量をもとに細分した。まず、口径と体部最大径の比較(第247図)から、口径が体部最大径を越えるもの(1)、口径と体部最大径がほぼ等しいもの(2)、



第247図 壺の法量（口径：体部最大径）

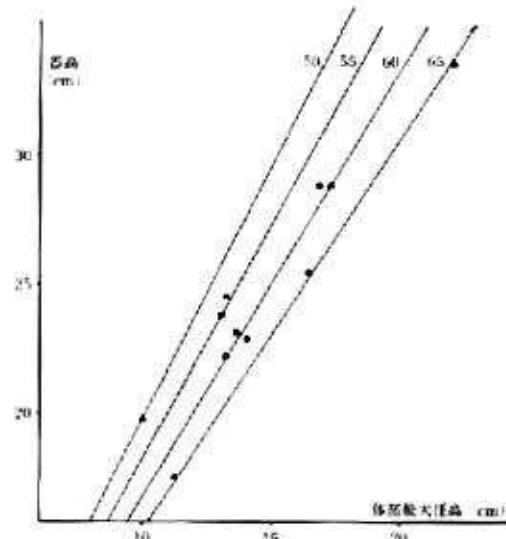


第248図 壺の法量（口径：器高）

体部最大径が口径を越えるもの(3)の3タイプに分類した。また、第248図をもとに大型のものからⅠ類・Ⅱ類・Ⅲ類・Ⅳ類の4類に細分した。

これによると、Ⅰ類は器高30cm以上、口径25cm以上、Ⅱ類は器高29cm・口径15~17cm、Ⅲ類は器高22~25cm・口径13~18cm、Ⅳ類は器高16~20cm・口径8~11cmの範囲がそれぞれ対応する。

さらに、器高と体部最大径高（体部最大径部位の底部からの高さ）の関係を表した第249図から、体部最大径の位置が

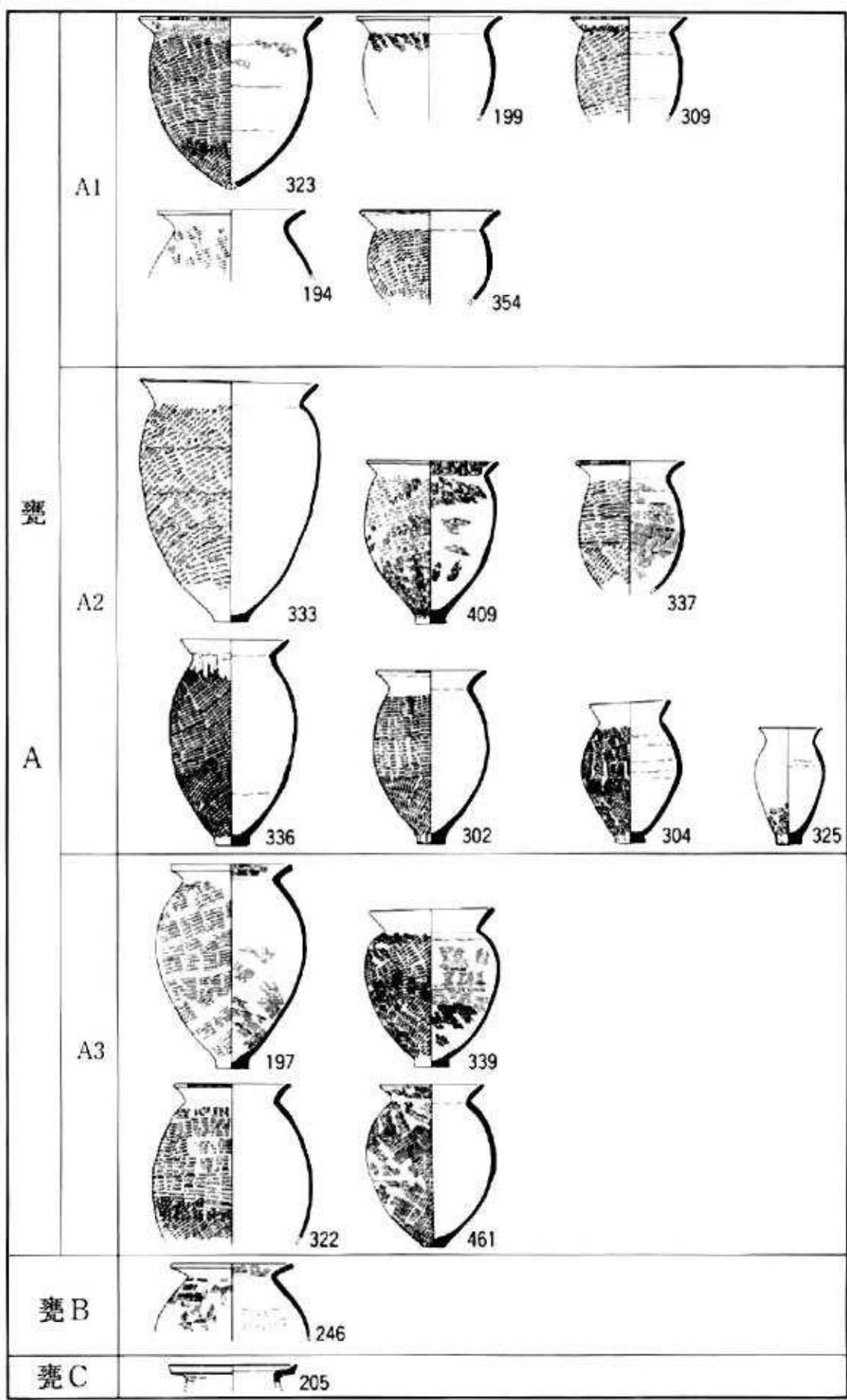


第249図 壺の法量（器高：体部最大径高）

両者の比で表わすと50・55・60・65の4段階からなることがわかる。ただし、分析対象となりうる資料が少ないため、50・55の体部中位にあるもの、60・65のより上位にあるものとに2分して分析していくことにする。

壺A いわゆる「V様式系壺」である。

- A 1 第247図をもとに、以下のように細分する。
 - a 体部最大径が上位にある大型の壺（Ⅱ類）。
 - b 体部最大径が上位にある中型の壺（Ⅲ類）。
 - c 体部最大径が上位にある小型の壺（Ⅳ類）。
 - d 体部最大径が中位にある大型の壺（Ⅱ類）。
 - e 体部最大径が中位にある中型の壺（Ⅲ類）。



第250図 壁の分類

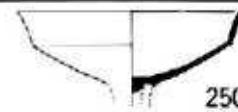
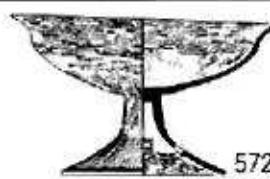
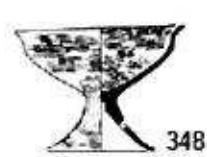
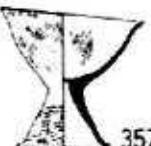
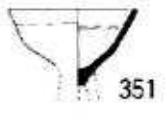
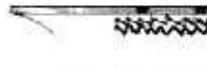
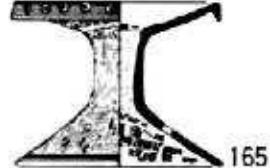
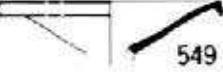
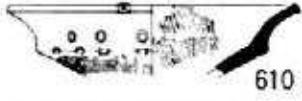
- A 2 口径と体部最大径がほぼ同じもの。法量および体部最大径・口径と器高との関係の位置を基準に以下のように細分する。
- a 口径および体部最大径に対して器高が低い大型の甕（Ⅰ類）。
 - b 口径および体部最大径に対して器高が低い中型の甕（Ⅱ類）。
 - c 口径および体部最大径に対して器高が低い小型の甕（Ⅲ類）。
 - d 口径および体部最大径に対して器高が高い大型の甕（Ⅳ類）。
 - e 口径および体部最大径に対して器高が高い中型の甕（Ⅴ類）。
 - f 口径および体部最大径に対して器高が高い小型の甕（Ⅵ類）。
 - g 口径および体部最大径に対して器高が高いより小型の甕（Ⅶ類）。
- A 3 体部最大径が口径を越えるもの。法量および体部最大径の位置を基準に以下のように細分する。
- a 体部最大径が体部上位にある大型の甕（Ⅷ類）。
 - b 体部最大径が体部上位にある中型の甕（Ⅸ類）。
 - c 体部最大径が体部中位にある大型の甕（Ⅹ類）。
 - d 体部最大径が体部中位にある中型の甕（Ⅺ類）。
- 甕B 口縁部は「く」字形に屈曲する。体部外面を縦方向のハケ調整により仕上げ、内面を一部ヘラ削りにより仕上げる。
- 甕C 口縁部が「受け口状」を呈するもの。頭部に対して口縁部が水平方向に屈曲し、端部を上方につまみ上げる。

- 鉢 いわゆる有孔鉢・直口鉢・広口鉢・台付鉢・丸底鉢・小型鉢が出土している。
- 鉢A いわゆる有孔鉢である。以下のように細分可能である。
- A 1 大型で口径に対して器高が高いもの。
 - A 2 大型で口径に対して器高が低いもの。
 - A 3 小型で口径に対して器高が高いもの。
 - A 4 底部に複数の孔があるもの。
- 鉢B いわゆる直口鉢。形態を中心には細分可能である。
- B 1 口径に対して器高が高いもの。口縁部の形態を基準にさらに細分する。
 - a 口縁部が内湾するもの。
 - b 口縁部がほぼ直立するもの。
 - B 2 口径に対して器高が低く、明確な平底をなすもの。形態的に以下のように細分する。
 - a 口縁部が外反するもの。
 - b 口縁部が斜上方にのびるもの。
 - c 口縁部が直口するもの。
 - B 3 梶形態に近いもので、底部が丸底に近いもの。法量等を基準にさらに細分可能である。
 - a 小型のもの。
 - b 大型のもの。
 - c 小型で、精良な粘土で、内外面をヘラ磨きにより仕上げるもの。

鉢 A					
鉢	B1				
B	B2				
B	B3				
鉢	C1				
C	C2				
鉢 D					
鉢 E					
鉢 F					
鉢 G					

第251図 鉢の分類

- 鉢C** 口縁部をく字形に屈曲させるもの。形態により細分する。
- C 1 器高に対して口径が大きなもの。法量によりさらに細分可能である。
- a 小型のもの。
 - b 大型のもの。
- C 2 器高に対して口径が小さいもの。
- 鉢D** 口縁部を拡張するもの。拡張方法によりさらに細分する。
- D 1 口縁端部下端に粘土を貼り付け、断面三角形状に端部を拡張させるもの。
- D 2 U字縁端部下端に粘土を貼り付け、下方大きく引き延ばしてに拡張させるもの。
- 鉢E** いわゆる台付の鉢。法量により細分する。
- E 1 小型のもの。
- E 2 大型のもの。
- 鉢F** いわゆる小型丸底鉢。
- 鉢G** ミニチュアの鉢。
-
- 高坏** 大きく坏部の形態により2タイプに細分する。圓形を呈するタイプ（高坏A）と椭形を呈するタイプ（高坏B）である。
- 高坏A** 口縁部と体部の断面における長さの比率および口縁部の形態により細分する。
- A 1 口縁部が短く、体部に対してほぼ直立傾向にあるもの。法量によりさらに細分する。
- a 小型で浅いもの。
 - b 大型で深いもの。
- A 2 A 1よりも口縁部が短く、水平近くに外反するもの。
- A 3 A 1よりも口縁部が長く、外反するもの。法量によりさらに細分可能である。
- a 大型のもの。
 - b 小型のもの。
- A 4 A 3よりも口縁部が長く、体部と口縁部の長さがほぼ同じもの。法量によりさらに細分可能である。
- a 大型のもの。
 - b 小型のもの。
- A 5 A 4よりも口縁部が長く、体部よりも長いもの。法量によりさらに細分可能である。
- a 大型のもの。
 - b 小型のもの。
- 高坏B** 坏部の形態により細分する。
- B 1 坏部が半球形をなすもの。内外面とも丁寧なヘラ磨きで仕上げられ、口縁部外面に擬円線を施す。坏部の法量によりさらに細分可能である。
- a 坏部が大型のもの。
 - b 坏部が小型で、胎土が精良なもの。
- B 2 坏部が半球形をなさず、口径に対して深い傾向にあるもの。口縁部の形態により細分可能である。

	A1			250
高 杯	A2			252
A	A3			348
	A4			356 543
	A5			541 350
高 杯	B1			488 544
B	B2			357 351
器台 A				552
器台 B				165 549
器台 C				610 489
器台 D				332 616

第252図 高杯・器台の分類

a	内湾傾向にある体部に対して口縁部が外反傾向にあるもの。
b	体部から口縁部にかけて直線的なもの。
器台	口縁部の形態を基準に分類する。
器台A	口縁端部を拡張しないもの。大型の器台である。
器台B	口縁端部下端に粘土を貼り付け、下方に拡張するもの。端面の加飾の有無で細分する。
B.1	端面を加飾するもの。
B.2	端面を加飾しないもの。
器台C	口縁部が複合U縁を呈するもの。口縁部の形態を中心に細分可能である。
C.1	体部から口縁部にかけて高環Aと類似するもの。いわゆる「淡路型器台」の一類型。
C.2	体部から口縁部への変換部に粘土を貼り付け、下方に拡張させるもの。
C.3	口縁端部に粘土を貼り付け、端部を拡張させるもの。
器台D	鼓脣形をなす器台。器壁が厚い。

(2) 編年の位置付け

はじめに 以上器種分類を行ってきたが、各型式は同一時期に限定できるものではなく、時期幅をもつことは明白である。これは、遺構面が複数に及ぶことからも裏付けられる。そこで、具体的に後期のどの時期に位置付けられるのかについて検討していくことにする。

ところで、当地域あるいは淡路島における弁生後期の土器編年はいまだに確立されていない。したがって、畿内における編年案を参考とせざるを得ない。畿内における編年案は、寺沢重¹⁾、豊岡卓之²⁾らにより多くの蓄積がある。これらの編年案は、庄内式を除く第V様式を5~7期に細分している。しかし、当遺跡出土資料をいきなりこれらの編年案に対応させることは困難である。

後期の細分 そこで、当篇では、後期を庄内併行期を含めて後期1~後期5の5期に細分し、これを基礎に検討していくことにしたい。まず庄内併行期を最終の後期5とする。そして、庄内併行期を除く4期とは、寺沢編年の様式1、様式2・3、様式4・5、様式6に、豊岡編年のV-1・2、V-3・4、V-5・6、V-7にそれぞれ対応するものである。

編年基準 これらの編年にはたっては、器種の消長が基準となっているようであるが、5段階区分にあたっては、环形高环（高环A）の环部形態の変化に注目したい。つまり、口縁部と体部の比率の変化であり、当遺跡の器種分類でいうと、高环A 1→高环A 3→高环A 4→高环A 5の変化である。

高环A 5 ただし、高环A 5については、後期5にも同形態のものが存在するため、この型式のみからは後期4と後期5の区別は困難である。両期の後別については、他型式を考慮に入れ検討することにする。そして、これらの高环の各型式と器種の消長関係を対応させ、時期の特定作業を進めていくこととする。

具体的には、各地区ごとに層位的に調査をおこなっていることから、作業対象を地区ごとの主要な一括資料とし、その結果をもとに各検出面の時期を決定していくことにしたい。なかでも層位ごとにまとまった資料が得られた2区、3区、4・5区の資料を中心検討していくこととする。

1区・6区・7区については、資料数が少ないと、時期を特定できる資料を欠く。このため上記の地区の時期については、2区～4・5区での分析結果、および土層関係の分析結果をもとに第7章で検討することにする。

面検出土器

なお、上記の一括資料を検討していく上で、各遺構面に伴う土器（第〇面出土土器）の資料的位置付けを確認しておきたい。当報告で使用する面出土土器とは、2つの意味をもつ。

一つは各遺構検出面を下面とする土壤層（遺物包含層）から出土した土器を示す。土壤層とは、遺構を検出するため便宜的に掘り下げた土壤化した層（土壤層）を示すもので、そこで検出した遺構は、本来はその土壤層の上面から切り込んでいたと考えられる。したがって、この土壤層から出土した土器は、本来的には、土壤層の上面から切り込んでいた遺構に伴うものと考えられる。よって、土壤層から出土した土器（面検出土土器）とその下面で検出した遺構に伴う土器とは、基本的に時期を同じくすると考えられる。ただし、土壤層の堆積にあたって、その上流側の土器を含むことが考えられる場合や、遺構に時期幅が認められる場合には、遺構に伴う一括資料よりは資料的に劣るものと考えている。

もう一つは、田地表面上にあった土器が洪水砂に覆われることがある。この層から出土した土器についても「第〇面検出土土器」と称している。3区第4面、4・5区第2面がこの例にあたり、他はすべて前者に該当する。この資料については、前者より一括性が高いものと考えている。

以上の諸前提のもと、各資料の検討作業に入りたい。

2区

第5面及び第6面に伴う資料から高环Aが出土している。

第5面

高环A3が出土しており、後期2に位置付けられる。同面検出のSD28・SD29においても高环A3が出土しており、ほぼ同時期に位置付けられる。

第6面

高环A1・A2が出土しており、後期1に位置付けられる。ただし、当面出土の甕に中期まで遡ると考えられるものも認められる。また、当面SD32出土の甕についても同様である。したがって、当遺構面については、2区のなかでは最も古く位置付けられることは間違いないが、純粹に後期の最古段階（後期1）とは限定できず、中期の最終段階から後期最古段階までの時期幅をもつものと考えたい。

第3面

次に高环の出土していない資料について検討する。対象となるのは第3面出土土器である。ここで注目されるのは、甕A3の存在である。当型式はいわゆる二重口縁甕に分類されるものである。二重口縁甕については従来後期3に出現するものとされているが、甕A3タイプについては、寺沢編年によると、後期4以降とされている。よって、第3面出土土器については第4面を考慮に入れて後期5に位置付けたい。

3区

第3面・第4面・第5面・第7面に伴う資料から高环Aが出土している。

- 第3面** 土器群Eにおいて高坏A 3と高坏A 5 bが出土している。また、土器群以外にの第3面検出土器からも高坏A 3と高坏A 4が出土している。以上から、後期2から後期4にかけての時期が考えられる。
- なお、高坏A 5 bについては、明確に後期4あるいは後期5の指標となるのかについては不明である。よって、当遺構面については、後期2～後期3を中心とした時期を考えたい。
- 第4面** SD40において高坏A 3と高坏A 4の中間形態が出土している。また、第4面に伴う資料中に、高坏Bが認められる。当タイプは、寺沢・豊岡両編年共、後期3以降出現するようである。以上から、第4面の資料については、後期3～後期3と位置付けたい。
- 第5面** 高坏A 3と考えられる口縁部の小片が出土しているのみである。この土器から、後期2に位置付けられる。
- 第7面** 小片のため明確にはできないが、SD62から高坏A 1に近いタイプが出土している。よって、後期1から後期2にかけてに位置付けられる。この傍証として、当遺構面検出のSH01は、2区第6面に跨がって検出されている。そしてこの2区第6面は、先述したように、後期1を中心とした時期に考えられている。
- 第6面** 最後に高坏の出土が認められない第6面について検討する。しかし、時期を考えるにあたって決め手になる器種が認められない。そこで、第5面と第7面に挟まれていることから、後期1から後期2にかけての時期と考えたい。

4・5区

- 第4面以下は中期に位置付けられるため、第2面・第3面に伴う資料が検討対象となる。両面から高坏Aが出土している。
- 第2面** 高坏A 5が出土している。また、高坏B 1も出土していることから、後期4ないし後期5と考えられる。他の器種についても同様の傾向を示しているが、後期4もしくは後期5の特定は困難である。
- 第3面** 当面検出資料においては、高坏A 5が出土している。また、第2面同様高坏B 1も出土している。しかし、甕・鉢の底面形態をみると、突出した平底をなし、丸底化の傾向は何えない。よって、第2面より古い段階、つまり後期4に位置付けない。
- SK21** 次に、SK21においても高坏A 4が出土しており、後期3に位置付けられる。
- SH04** 一方SH04においては高坏A 3が出土しており、後期2に位置付けられる。SH05についても高坏A 3が出土しており、SH04とはほぼ同じ時期に位置付けられる。
- SD84** この他、SD84においては、高坏A 3と高坏A 4が共伴しており、後期2から後期3に位置付けられる。
- 以上、第3面においては、遺構に伴う資料は第2段階から後期3にかけての時期に位置付けられ、当面検出土器は後期4～後期5に位置付けられる。
- 以上の検討結果をまとめたのが第114表である。

第114表 主要一括資料の時期

区	面	資料名	後期1	後期2	後期3	後期4	後期5
2 区	3	第3面検出				■■■■■	
	第5面	第5面検出		■■■■■			
		SD28		■■■■■			
		SD29		■■■■■			
	6	第6面検出	■■■■■				
3 区	第3面	第3面検出		■■■■■	■■■■■		
		土器群A			■■■■■		
		土器群B			■■■■■		
		土器群C			■■■■■		
		土器群D			■■■■■		
		土器群E			■■■■■		
	第4面	土器群F他			■■■■■		
		第4面検出		■■■■■	■■■■■		
		SD40		■■■■■	■■■■■		
		第5面検出		■■■■■			
4 ・ 5 区	6	第6面検出	■■■■■	■■■■■			
	7	SD62	■■■■■	■■■■■			
	2	第2面検出				■■■■■■■■■■	
	第3面	第3面検出				■■■■■■■■■■	
		SH03					
		SH04		■■■■■			
		SH05		■■■■■			
		SK21			■■■■■■■■■■		
	SD84		■■■■■	■■■■■	■■■■■■■■■■		

(4) 弦生後期の土器の変遷について

はじめに ここで、上記の検討結果（第114表）をもとに、器種ごとに土器の変遷を簡単にまとめおきたい。その前提として、前項において時期を特定できなかった型式について器種ごとに検討しておく。

■ 第114表をもとに、壺形土器を中心に一括資料と出土型式を時期別にまとめたのが第115表である。この表で特定できていないのが、壺Gの1型式である。

■ G 3区第3面土器群Dで出土している。管見の限り類例は認められなく、共伴土器からの時期の特定も困難である。第114表より土器群以外の第3面検出土器は後期2～3と考えられるている。以上から、当型式についても後期3に位置付けたい。

第115表 時期別出土型式一覧表(壹)

時 期 区	地 質 料 名	壹 A						壹 B						壹 C	壹 C				壹 E		壹 F		壹 G		壹 H		
		1a	1b	2a	2b	3a	3b	4	1a	1b	2a	2b	3		1a	1b	1c	2a	2b	E	F	G	H				
後 期 1 区	2 第6面検出												●														
	3 第6面検出								●					●													
	7面SD62																										
後 期 2 区	2 第5面検出									●					●		●										
	5面SD28									●		●		●													
	5面SD29	●							●	●	●	●			●		●		●		●		●				
	3 第5面検出								●																		
後 期 3 区	4 3面SH04															●			●								
	5 3面SH05								●				●														●
	6 3面SD84																										
	7 第3面検出																										
後 期 4 区	3 土器群D他							●					●														
	4 第1面検出						●	○			●		●			●	●										
	5 1面SD40									●		●		●		●											
	6 3面SK21												●	●							●	●		●			

録 同様第114表をもとにまとめたのが第116表である。対象となるのは、録A 2と録E 2の2型式である。

録A 2 3区第3面土器群Eから出土している。当土器群においては、壹をはじめとして高杯A 3 b・高杯A 5 b・高杯B 2 bなどが共伴している。このなかで高杯A 3 bは後期2に位置付けられていることから、当型式についても当該期に位置付けたい。

録E 2 3区第3面土器群Dから出土している。当土器群においては、壹G・壹A・器台Dの各型式が共伴している。しかし、これらの共伴する型式からは時期の特定は困難である。ただし、当土器群は、基本的には他の土器群(土器群A~土器群F)と同時期と考えている。そして、これらの土器群の時期は後期2~後期3に位置付けられていることから、当型式についても当該期を考えたい。

高杯 高杯Aについては、当遺跡における編年基準としているので、第114表を基準にまとめた第117表をもとに、高杯Bについて検討する。

高杯B 1 4・5区第2面検出土器に、高杯B 1も同地区第3面検出土器にそれぞれ作って出土しており、後期4に位置付けられている。よって、当型式についても同時期に位置付けたい。

第116表 時期別出土型式一覧表(鉢)

時 期	地 区	資 料 名	鉢 A				鉢 B				鉢 C				鉢 D		鉢 E		鉢 F		鉢 G	
			1	2	3	4	1a	1b	2a	2b	2c	3a	3b	3c	1a	1b	2	1	2	1	2	1
後 期 1	2	第6面検出																				
	3	第6面検出			●				●													
	区	7面SD62																				
後 期 2	2	第5面検出													●							
	区	5面SD28			●						●						●					
		5面SD29													●	●	●					
	3	第5面検出								●	●				●							
	4	3面SH04								●	●				●							●
	5	3面SH05																				
後 期 3	区	3面SD84																				
		第3面検出						●	●			●			●	●	●	●	●	●	●	●
	3	上器群A	●																			
		上器群B			●					●					●							●
	4	上器群D																				
		下器群E		●					●													
	5	下器群F他																				
	区	第4面検出			●										●							●
後 期 4		4面SD40			●																	
	3	3面SK21		●	●																	
	2	第3面検出																				
後 期 4	4	第2面検出												●	●							
	5	第3面検出			●	●	●			●					●			●				

高杯B 2
高杯B 2aは後期3の3区第3面上器群Fに伴って出土していることから、当型式についても当該期に位置付けたい。高杯B 2bについては、同じく上器群Eに伴って出土している。当土器群においては高杯A 3 bが共伴しており、後期2に位置付けられることから、当型式についても当該期に位置付けたい。

器台

高杯同様、第117表をもとに検討する。対象となるのは、器台Dである。

器台D

3区第3面上器群Dから出土している。鉢E 2での検討結果から、後期2から後期3に位置付けたい。

縦年案

以上の検討結果をまとめたのが、次の第257図～第266図である。

上図をもとに、器種ごとの変化を概観する。

第117表 時期別出土型式一覧表(高坏・器台)

時 期 区	地 質 料 名	高 坏 A					高 坏 B					器 台 A	器台B		器台C		器 台 D		
		1a	1b	2	3a	3b	4a	4b	5a	5b	1a	1b	2a	2b	1	2	1	2	3
後 期 1	2 第6面検出	●	●	●															
	3 第6面検出																		
	4 7面SD62	○			○														
後 期 2	2 第5面検出					●								●					
	3 5面SD28					●								●					
	4 5面SD29	○			●								●						
	5 第5面検出																		
	6 3面SH104			●															
	7 3面SH105				○													●	
後 期 3	8 3面SD84				●														
	9 第3面検出																		
	10 上器群B																		●
	11 上器群E				●				●				●						
	12 上器群F他				●							●							
	13 第4面検出					●													
後 期 4	14 4面SD40					●													
	15 3面SK21					●									●	●	●	●	
	16 第3面検出																		
後 期 4	17 第2面検出						●		●		●					●			
	18 第3面検出						●			●			●		●	●	●		●

要

当器種については、量およびバリエーションにおいて後期2に中心がある。これは、後述するように、後期3にその特徴が認められる壺とは異なる。その後、後期4まで続くのは、二重口縁壺の壺Aと広口壺の壺Bおよび直口壺の壺Cに限られる。

要

量的には多く出土しているが、完形資料が少ないことも加わって、各段階ごとに明確な型式変化をたどることは困難である。そこで、器高と口径の相関図(第253図)・口径と体部最大径の相関図(第254・255図)・器高と体部最大径の相関図(第256図)をもとに型式変化の流れを検討してみたい。なお、上記の3つの分析において、対象とした資料は必ずしも一致しないこと、資料数の制限から後期2以降を対象とすること、各相関図においてその分布域を越える資料もあることを断つておく。

器高と口径

第248図を各段階ごとにドットの形を変えたのが第253図である。

後期2

第248図のII類とIII類に分布する。口径は18cm前後と一定しているが、器高は22cm~29cmと幅をもつ。

後期3

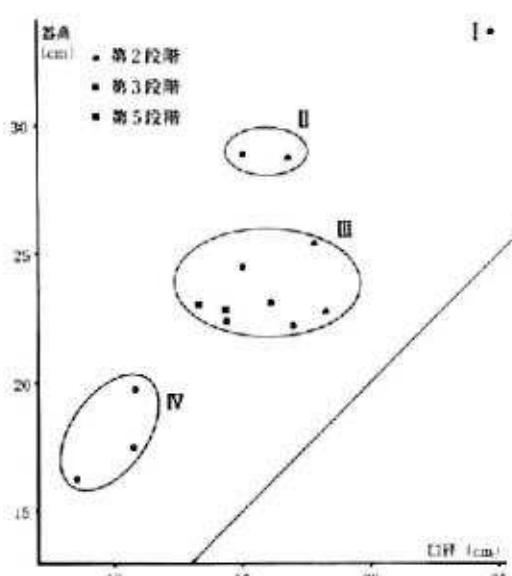
第II図のI類~IV類の各分布域に分布する。器高と口径の比率では、後期2と大きな変化は認められない。

後期 4 資料数が少ないとあるが口径13~14 cm、器高22~23 cmの範囲に限定される。

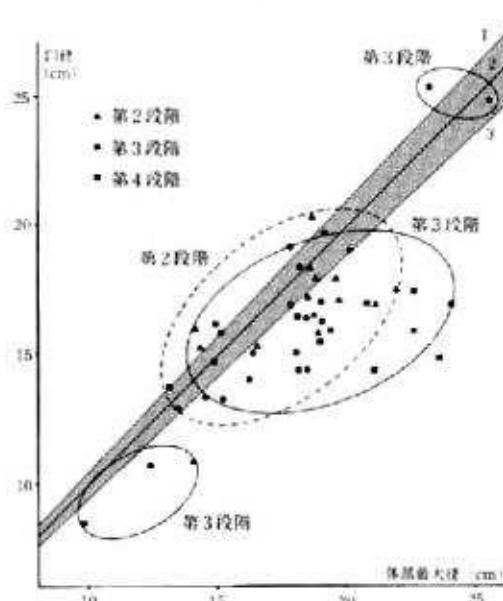
口径と最大径 第247図をもとに、時期ごとにその分布域をまとめたのが、第254・255図である。

後期 2 口径は最大径から口径く最大径の範囲に分布する(第254図)。

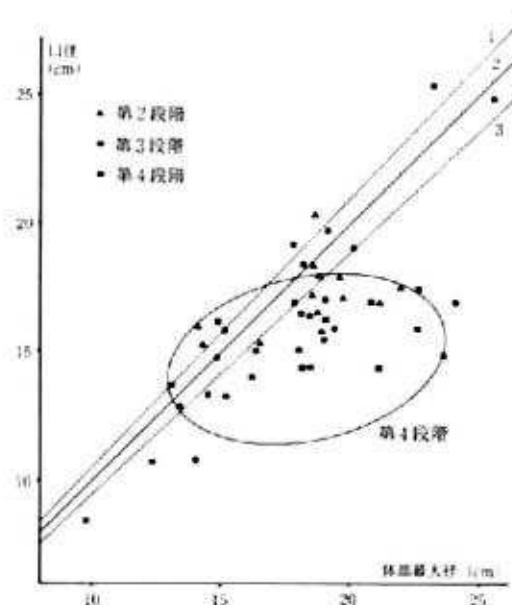
後期 3 まず、大型・中型・小型と3つの分布域に分かれる。これは、口径と器高との関係で認められた後期 3 の傾向と一致するものである。大型と小型については、口径=最大径を中心とした範囲に分布する。中型については、後期 2 同様の分布



第253図 壺の法量の変遷(器高:口径)



第254図 壺の法量の変遷(口径:体部最大径)



第255図 壺の法量の変遷(口径:体部最大径)

域を示すが、口径に対して最大径の方がより大きくなる傾向が認められる。(第254図)

後期 4 まず、口径が8~12 cmの範囲に限定される(第255図)。これは、器高と口径の分析において、後期 4 で認められた傾向と一致する。加えて、口径く最大径の関係がより大きくなっている。

器高と最大径 両者の関係を時期ごとにその分布域をまとめたのが、第256図である。

後期 2 最大径は14~17 cmの範囲に限定されるのに対して、器高は23~29 cmとバリエーションが認められる。

後期 3 大型・中型・小型の3類型に分化する。これは、口径と器高、口径と体部最大径の分析で認められた傾向と一致する。

後期4 器高が23~24cm、最大径が13~14cmの範囲に限定される。

小結 以上3つの分析をとおして明らかとなつた点をまとめておく。

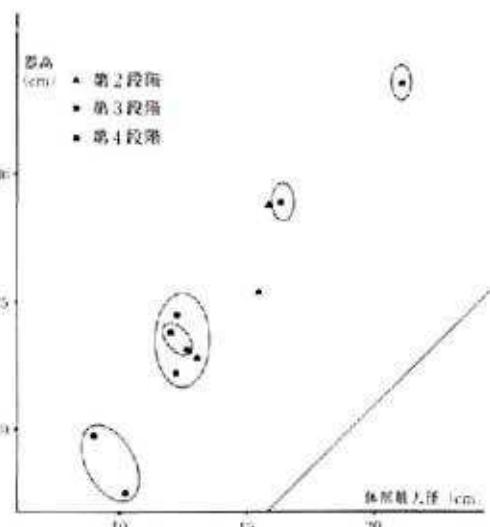
①分析対象資料が限られていることによるが、後期2に対して後期3になると大きくなつて4つの分布域に分かれる。しかし、後期4になると、一定の範囲に限定される傾向にある。つまり、後期4において法量に規格化の傾向が認められる。

②後期2から後期4にかけて認められた口徑と最大径から口徑<最大径への変化、および口徑<体部最大径の増幅化から、型式自体の球形化傾向が認められる。しかし、この変化は絶対的なものとは言いがたい。

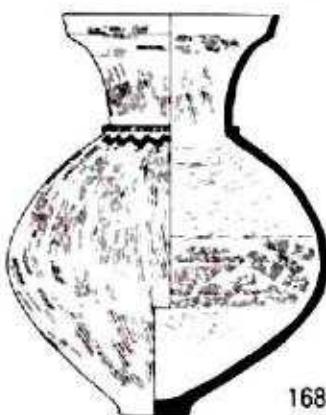
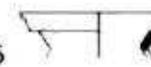
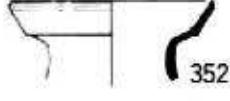
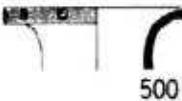
以上の分析結果をまとめたのが、以下の第118表である。

第118表 時期別出土型式一覧表（續）

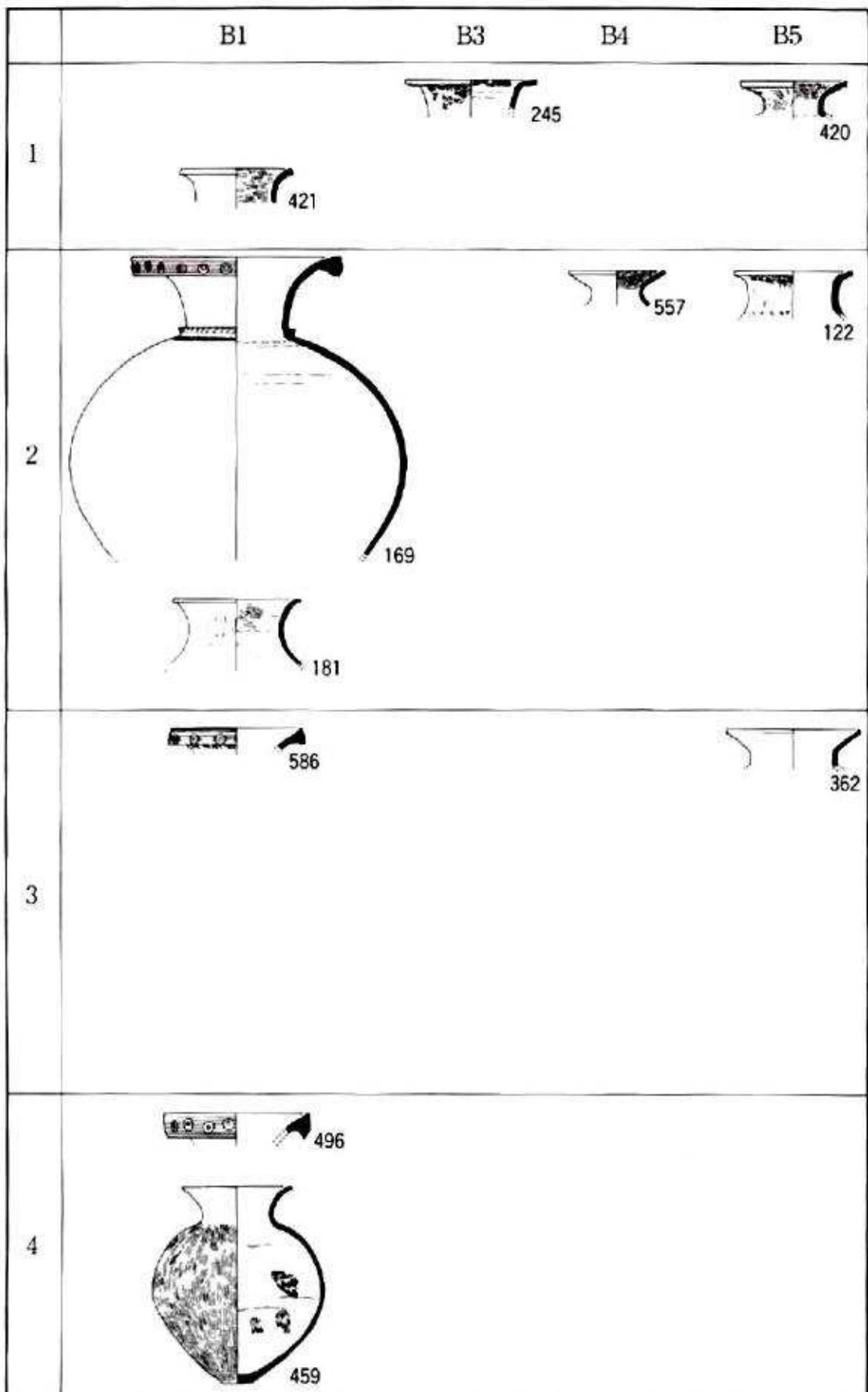
時 期	地 区	資 料 名	甕 A													甕 B	甕 C	他
			1a	1b	1c	1d	1e	2a	2b	2c	2d	2e	2f	2g	3a	3b	3c	3d
後 期 1	2	第6面検出															●	●
	3	第6面検出																
	18	7面SD62																
後 期 2	2	第5面検出		●									●	●				
	18	5面SD28											●					
	18	5面SD29	●	●									●				●	
	3	第5面検出	●				●											
	4	3面SH04						●										
	5	3面SH05																
後 期 3	18	3面SD84																
	2	第3面検出		●				●							●			
	3	土器群A										●	●			●		
	3	土器群B	●	●	●						●			●				
	3	土器群C	●									●	●			●		
	3	土器群D												●				
	3	土器群E					●				●			●				
後 期 4	3	土器群F					●											
	2	第3面検出																
	4	第2面検出					●		●							●		
	5	第3面検出											●	●				



第256図甕の法量の変遷（器高：体部最大径）

	A1	A2	A3	A4	B2
1					
2					
3					
4					

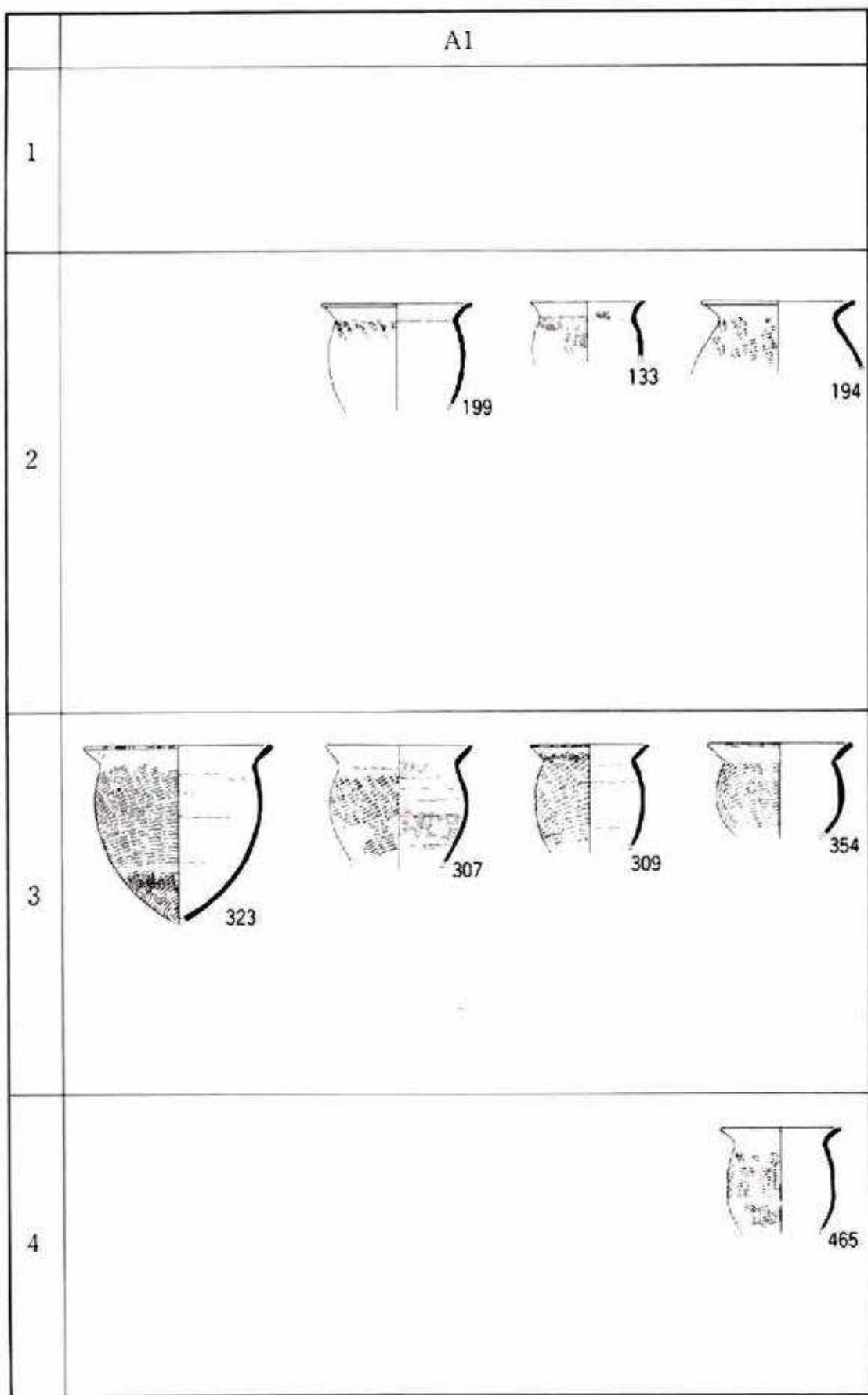
第257図 春の変遷(1)



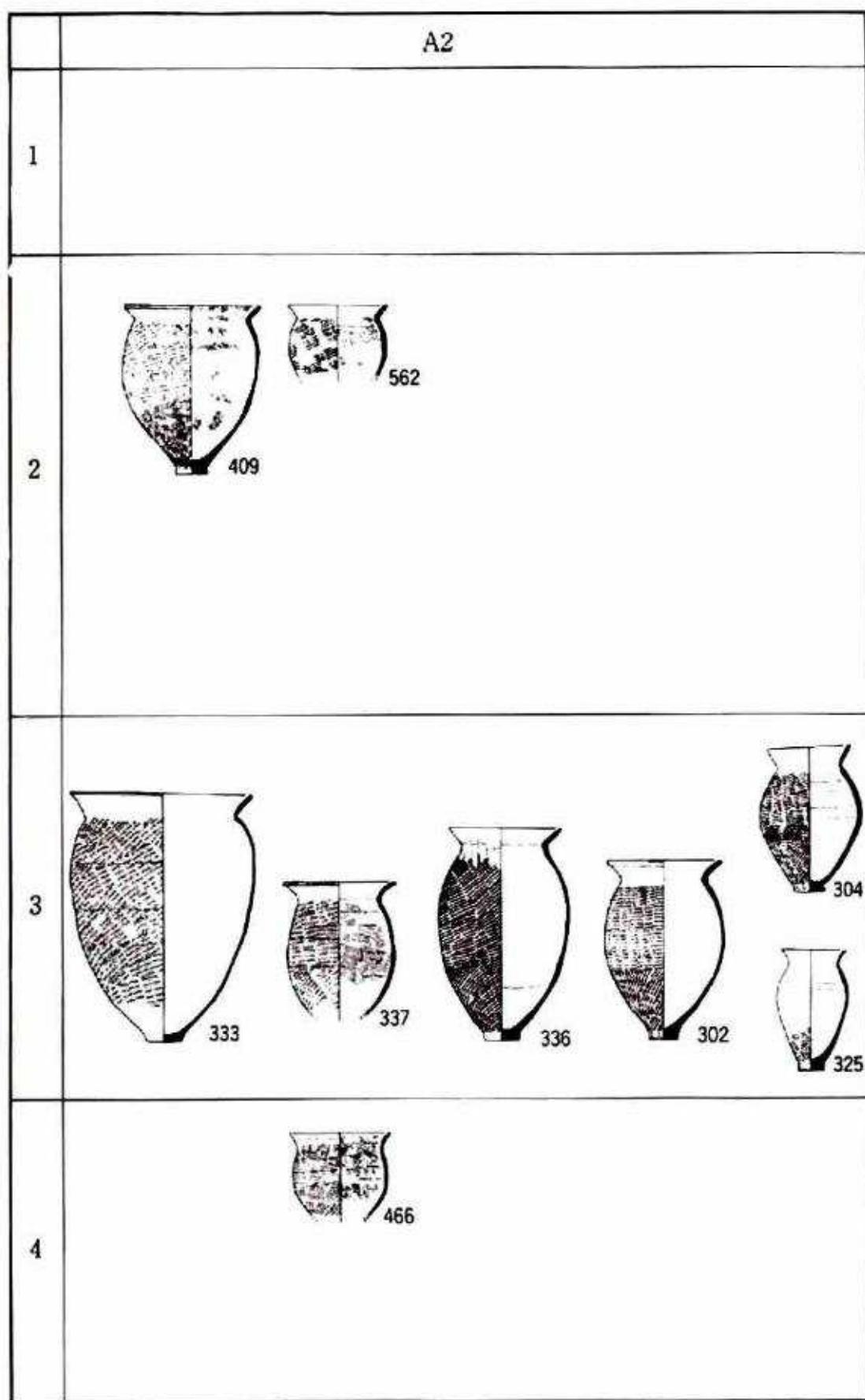
第258図 壺の変遷(2)

	C	D1	D2	E	F	G・H
1						
2						
3						
4						

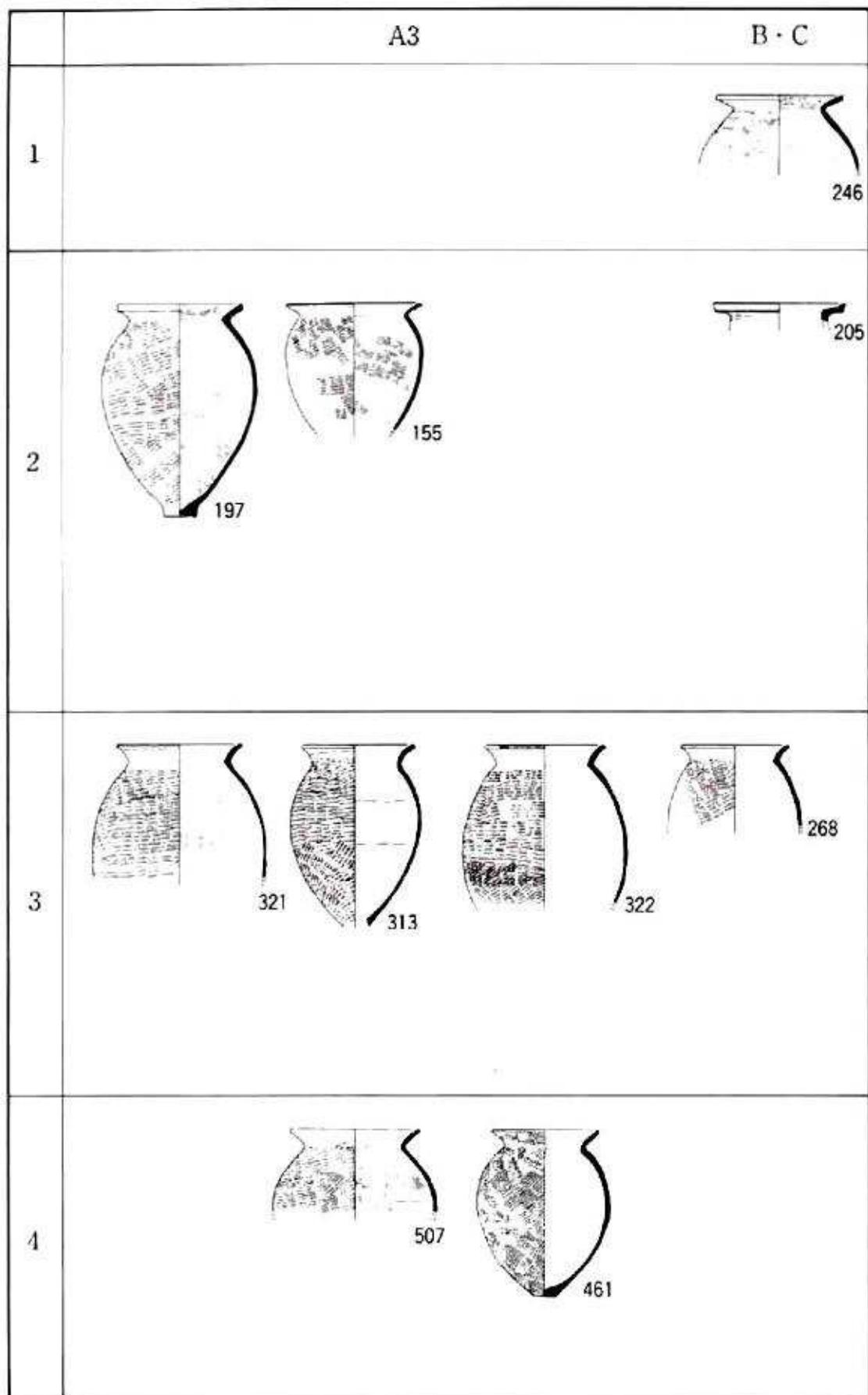
第259図 窓の変遷(3)



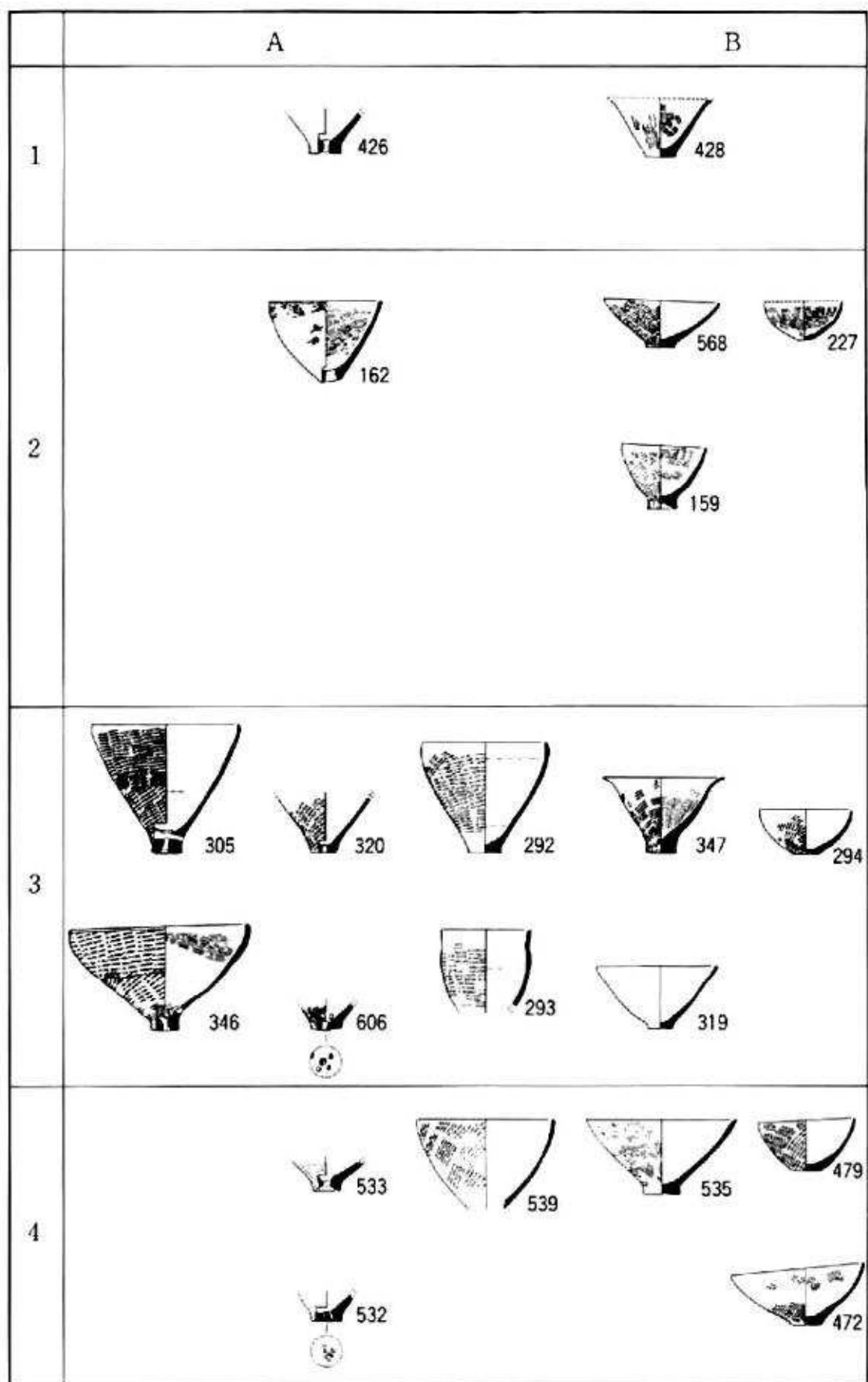
第260図 横の変遷(1)



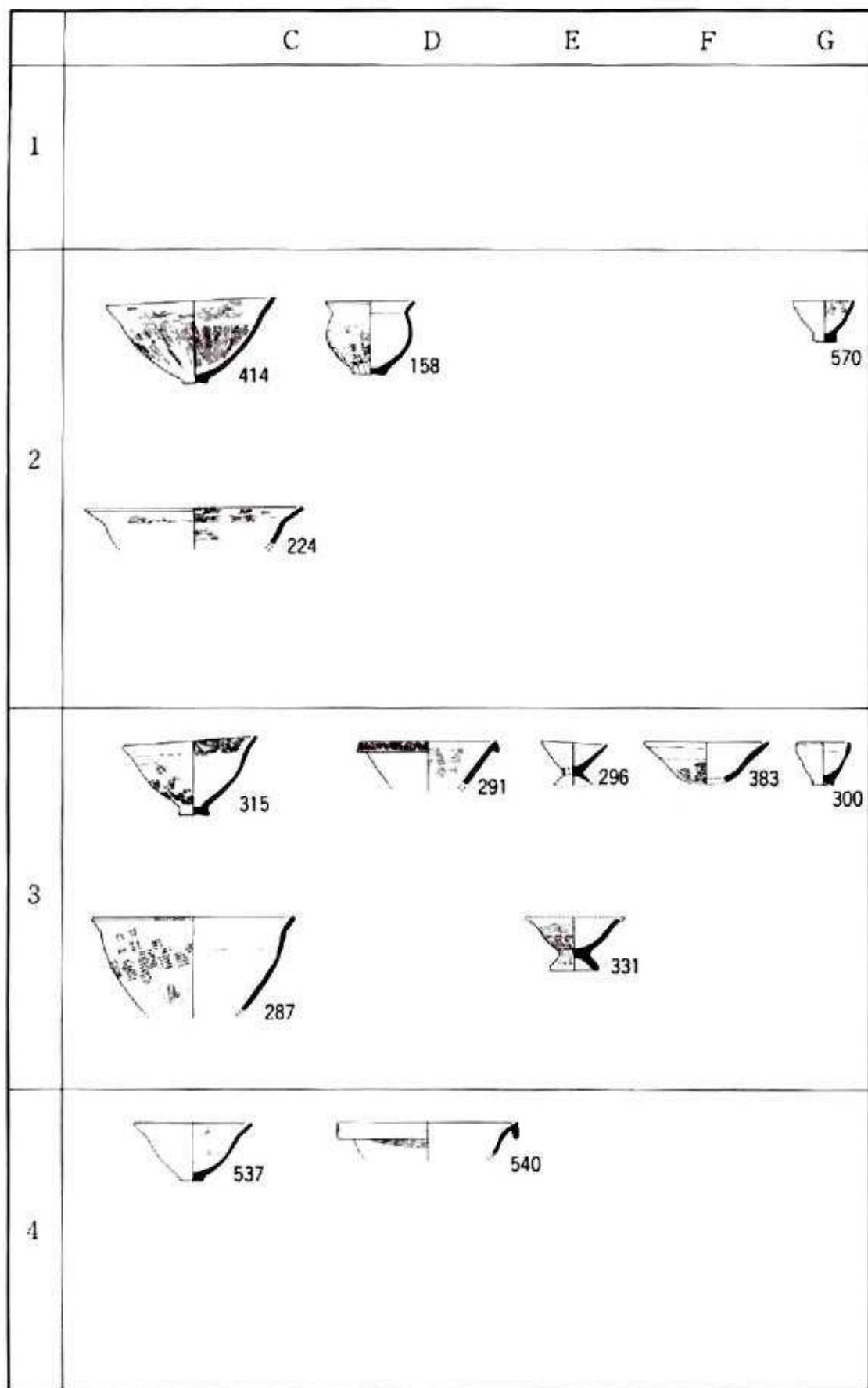
第261図 壺の変遷(2)



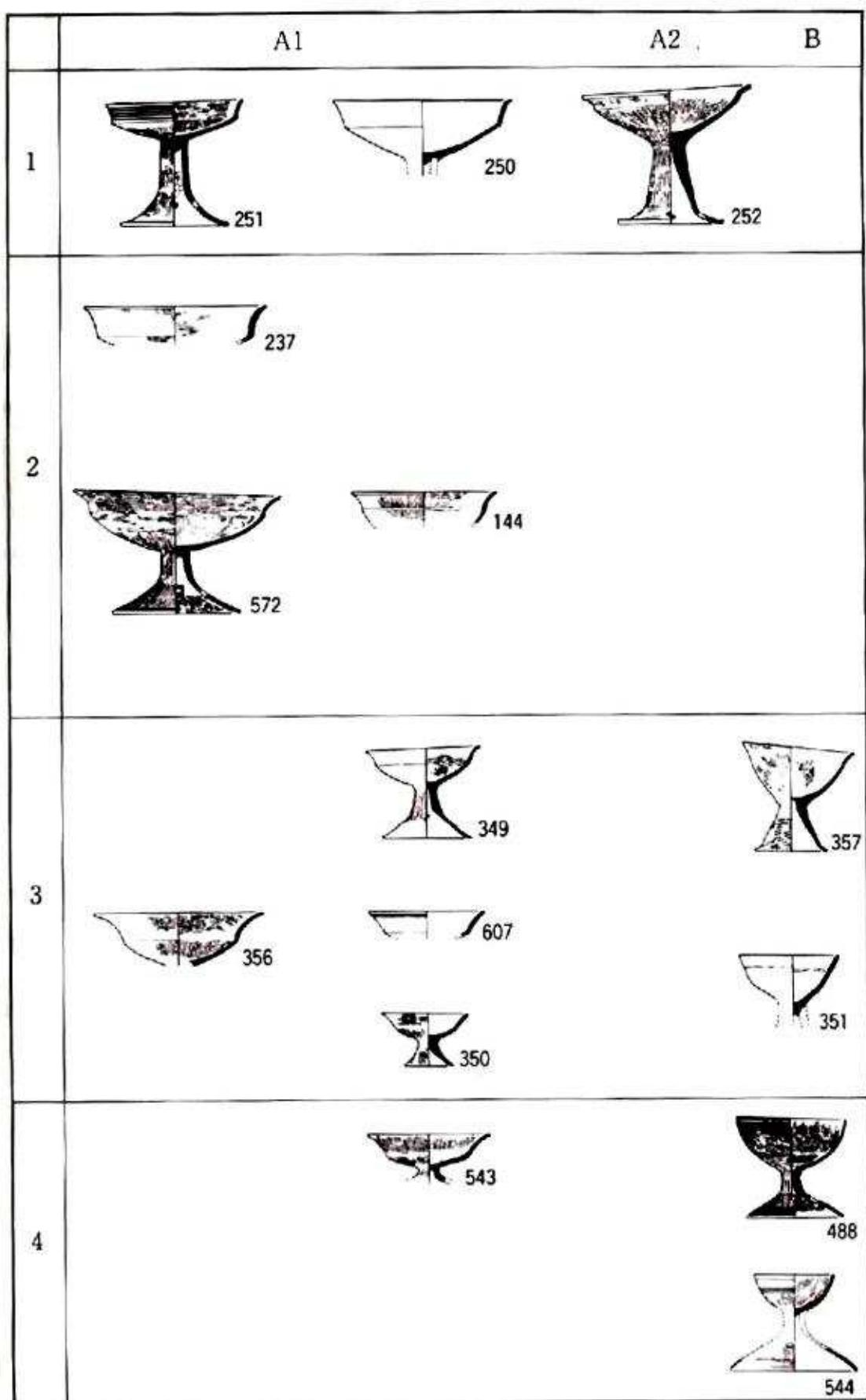
第262図 磁の変遷(3)



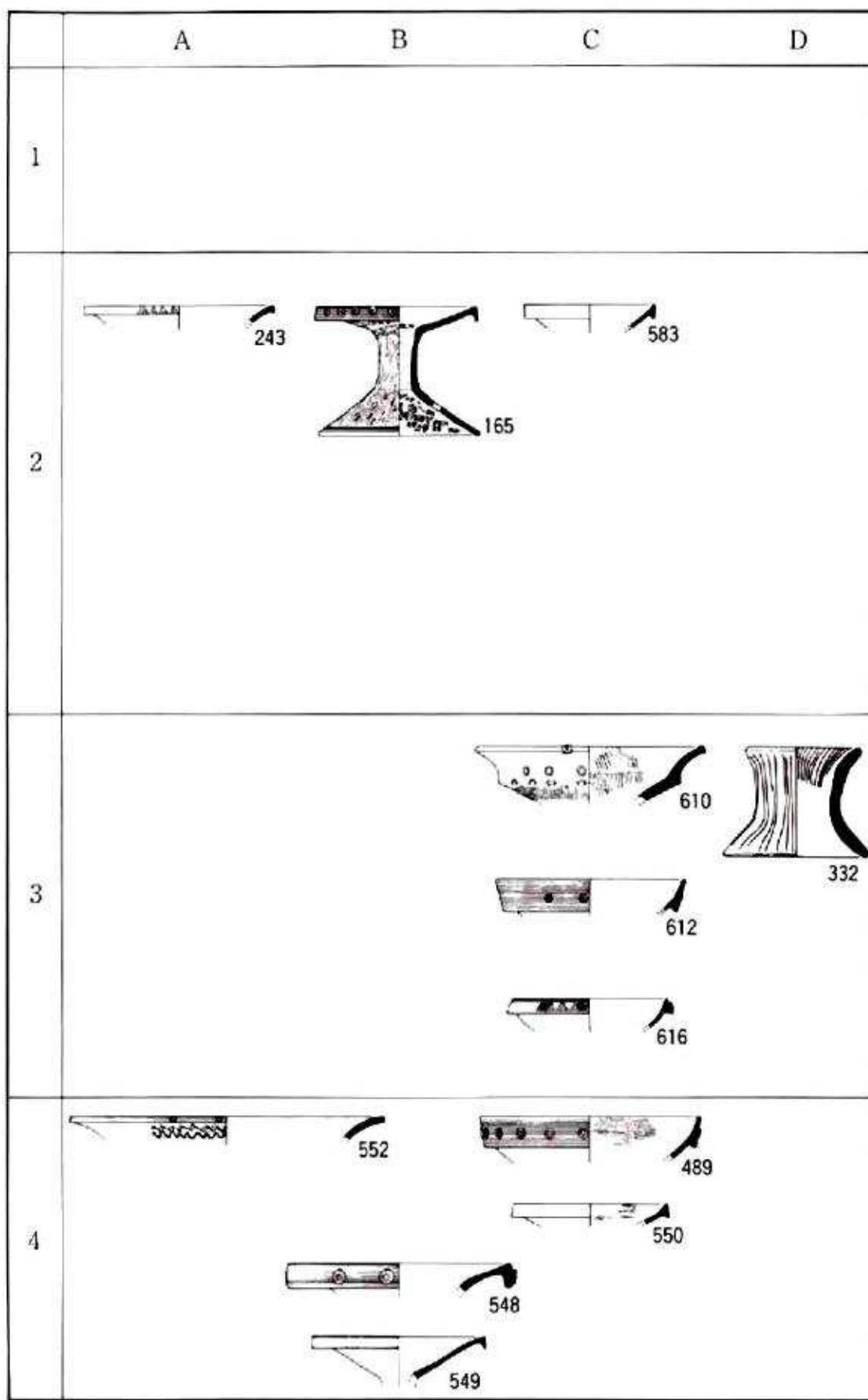
第263図 鮎の変遷(1)



第264図 鉢の変遷(2)



第265図 高杯の変遷



第266図 器台の変遷

鉢

甕同様、後期3に最も多くのバリエーションが認められる。また、量的にも多い。後期2・後期3においては、大型品・小型品が混在するが、後期4になると小型品に限られてくる。

高杯

編年基準とした形式であるが、甕・鉢同様、後期3に型式の多様化が認められる。

楕円高杯

そして、この段階から楕円高杯が出現する。ただし、この段階の楕円高杯は、当型式のなかでも垂直に位置付けるべき型式（高杯B2）であり、本格的な楕円高杯（高杯B1）の登場は次の後期4になってからである。ただし、後期4に位置付けた楕円高杯であるが、その特徴から後期5に位置付けても違和感のないもので、その可能性を残しておきたい。

高杯A3b

また、高杯A3bについては、体部と口縁部の比率からみると基本的には高杯A3aと同じ位置付けにすべきであるが、其伴資料の関係から後期3に位置付けた。この点については、今後の検討課題と言えよう。

器台

当器種については、後期3から後期4にかけて量およびバリエーションにおいてピークが認められる。

(5) 下内膳遺跡出土弥生後期の土器の特徴について

以下、器種ごとに当遺跡から出土した弥生後期の土器の特徴を、地域性などを中心にまとめてみたい。

甕

まず搬入品として指摘できるのは、B1aの169である。胎土中に多くの角閃石を含み、茶褐色を呈することから、生駒西麓地方からの搬入品と考えられる。

169以外については、出土量が少なく完形に復元できるものが少ないとから、明確に地域的特徴を指摘できる資料は認められない。

甕

V様式系甕

明確に搬入品と指摘できる資料は認められず、大多数はいわゆるV様式系甕に分類されるものである。ただし、いくつかの点において畿内一般に出土するV様式系甕とは特徴を異にする。

口縁部

まず、つくりが全般的に粗雑である。特に口縁部を作り出すにあたって、口縁部の途中まで一端作りあげ、その後粘土を継ぎ足している。そして、この継ぎ目が顕著に認められ、丁寧にナデ消すような痕跡は認められない。ただし、口縁部外面を輻方向にハケ調整を施している資料が少なからず認められる。これは、他地域ではあまり認められない調整法といえよう。このような調整法は、当遺跡周辺でも、寺中遺跡¹⁷（洲本市）、谷町筋遺跡¹⁸（西淡町）、志知川沖田南遺跡¹⁹（西淡町）出土資料等にも一定量認められるところから、当地域の特徴といえよう。また、これに関連して、口縁部の歪みが大変著しい。

刻み目 次に、口縁端部に刻み目を施すものが少なからず認められる。この特徴は、島内の寺中遺跡・志知川沖田南遺跡等でも一定量の出土が認められる。したがって、当地域の特徴とみることもできる。しかし、この特徴は、從来紀伊・和泉地方の地域的特徴を示すものと指摘されている¹⁰。今後、当該地域との関連で検討する必要があろう。

鉢

鉢B 3 当器種においても、壺同様、つくりが雑な型式が認められる。鉢B 3 aと鉢B 3 bの小型鉢である。口径に対して器高の低い体部にわずかに底部を作り出すもので、口縁部も叩き成形後端部をつまみ出すようなユビオサエにより仕上げている。当遺跡では、4・5区第2面を中心に、当器種のなかでは最も多く出土している。周辺では、志知川沖田南遺跡などでもまとまって出土しており、寺中遺跡でも出土が認められる。よって、当該地域に共通した型式のひとつとみることができる。

鉢A 4 次に有孔鉢に分類した型式について検討する。他地域では底部中央部に1孔穿つのが一般的である。しかし、本遺跡では、底部に数多くの孔を穿つ例が、少なからず認められる。加えて、水平方向に穿つ例も認められる。谷町筋遺跡でも出土例が認められる。

高杯

高杯A 2 まず高杯A 2であるが、当地域を含め他地域においても類例は認められない。当地域独自のタイプなのかを含めて今後の課題としたい。

高杯A 4 b 高杯A 4 bについては、短脚であることから、他地域からの影響と考えられる。

高杯B 2 高杯B 2については、楕円高杯に分類されるものであるが、一般的な楕円高杯と大きく異なる。特に357については、脚部が円錐形をなし、叩き成形により仕上げられている。

当タイプの類例として、おきわら遺跡出土資料¹¹があげられる。脚部のみしか残存しないが、形態・調整法が類似する。報告においては器台とされているが、当遺跡出土資料(357)と同形態になるものと考えられる。よって、当タイプについても、淡路島の地域色を示すものと理解したい。

器台

器台C 後期2から出現するが、出現当初から、一見したところ壺の口縁部との判断に苦しむような口縁部を拡張し加飾するタイプが目立つ。このようなタイプは、寺中遺跡・谷町筋遺跡でも認められ、他のタイプの器台を量的に凌いでいる。したがって、当タイプについては、当地域の地域的特徴と考えられる。

また610の器台C1については、口縁部外面に竹管紋が施文されているが、「淡路型器台」¹²の一類型と考えられる。当遺跡第2次調査でも出土しており、また久留麻太田遺跡でも出土例が報告されている¹³。

4. まとめ

以上、当遺跡出土の弥生時代中期と後期に上器について、分類・編年作業を通して、その特徴を概観してきた。その結果、中期については第Ⅲ様式（弥生中期1）と第Ⅳ様式（弥生中期2）の2段階、後期については後期1から後期4の4段階（弥生後期1～弥生後期5）からなることが明らかとなった。

また、特に後期の土器については、当地方独自の地域性を認めることができた。なお、今回の調査においては、西国系と明確に断定できる土器の出土は認められなかったことを明記しておく。

〔註〕

- (1)國分 政子「河内地方弥生時代中期土器の検討—第Ⅲ・Ⅳ様式広口壺形土器の地域性と変遷—」『長岡京古文化論叢Ⅱ』中山 修一先生喜寿記念事業会編 1992
- (2)土山 健史「堺市文化財発掘調査報告 31集」1986
- (3)今村 道雄他「瓜生堂遺跡Ⅲ」瓜生堂遺跡調査会 1981
- (4)前田千津子「遺物」「東奈良発掘調査概報！」東奈良遺跡調査会 1979
- (5)三好 孝一「生駒西麓型土器についての一観点」「花園史学」8 1987
- (6)濱田 延充「弥生時代中期におけるいわゆる生駒西麓型土器の製作地」「京都府埋蔵文化財情報」第35号 財團法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1990
- (7)濱田 延充「生駒西麓第Ⅲ・Ⅳ様式の編年」「弥生文化博物館研究報告第2集」1993
- (8)吉誠 雅仁他「森遺跡－淡路根貴道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－」（兵庫県文化財調査報告書 第55冊）兵庫県教育委員会 1988
- (9)橋口 吉文「西ノ池遺跡－第80地区・第81地区－昭和55年度国庫補助事業発掘調査報告」「堺市教育委員会 1981
- (10)前掲(7)
- (11)森岡 秀人「突帯文土器地域性に関する若干の検討－とくに摂津・播磨・紀伊の第Ⅲ様式優勢帯にみられる器形・文様交流について－」「末永先生喜寿記念献呈論文集 乾」1985
- (12)丹治 康明「雲井遺跡第1次発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1991
- (13)田代 克己他「瓜生堂遺跡Ⅱ」瓜生堂遺跡調査会 1973
- (14)前掲(9)
- (15)別府 洋二他「大森谷遺跡－淡路根貴道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－」（兵庫県文化財調査報告書 第27冊）兵庫県教育委員会 1985
- (16)寺沢 真「大和におけるいわゆる第五様式土器の細別と二・三の問題」「六条山遺跡」（奈良県文化財調査報告書 第34集）奈良県立橿原考古学研究所編 1980
- (17)豊岡 卓之「『畿内』第Ⅴ様式歴年代の読み」「古代学研究」108号・109号 1985
- (18)吉誠 雅仁他「寺中遺跡－淡路根貴道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ－」（兵庫県文化財調査報告書 第64冊）兵庫県教育委員会 1989 以下、当遺跡に関しては本報告による。
- (19)吉誠 雅仁他「谷町筋遺跡－淡路根貴道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅴ－」（兵庫県文化財調査報告書 第73冊）兵庫県教育委員会 1990 以下、当遺跡に関しては本報告による。

- (20)別府 洋二他「淡路・志知川沖田南遺跡」(兵庫県文化財調査報告書 第40冊)1987 以下、当遺跡
に関しては本報告による。
- (21)関川 尚功「纏向遺跡の古式土師器」「纏向」1976
- (22)岡本 稔・広岡 俊二・松下 勝「北淡路の遺物」「兵庫考古」第9号 1980
- (23)前掲(22)
- (24)前掲(22)

第2節 奈良時代の土器

1. 概要

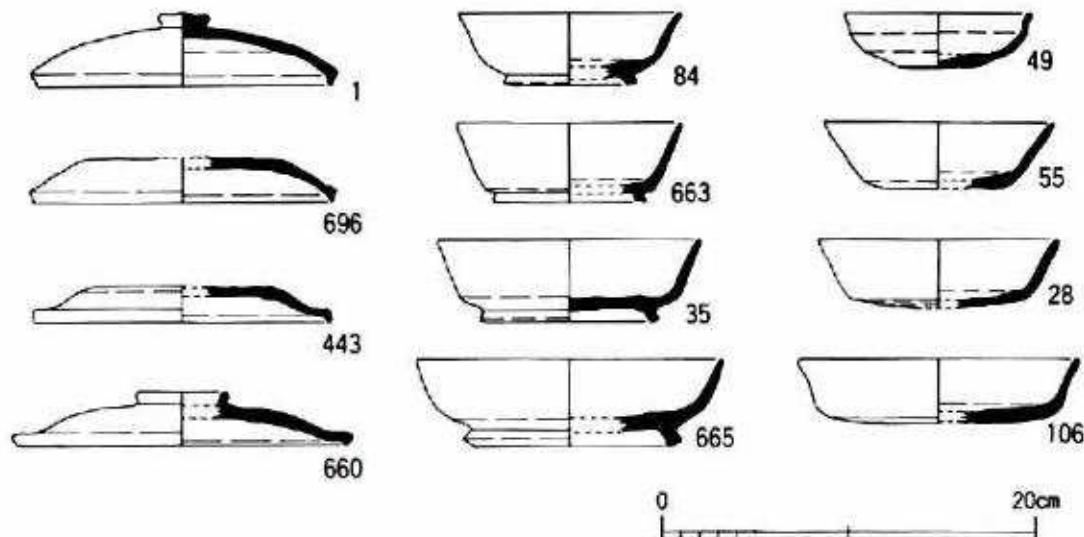
奈良時代の土器類はコンテナ（TS-28）で、およそ須恵器7箱、土師器3箱、計10箱出土しているが、そのほとんどが小片で出土しており、図面上で完形に復元できたものは須恵器23点、土師器4点、計27点のみである。その要因は、いずれも土嘗、溝、井戸などの遺構から出土したような意図的な廃棄などによる良好な一括性をもったものではなく、ほとんどが遺構面の検出時における包含層から出土しているためであると思われる。よって、出土した全体の土器量と比較すると、径が復元でき、図示し得たものは非常に少なく、特に土師器については壊れやすいことも原因し、図示できたものは僅かである。

須恵器と土師器の比率は、小片の出土であるため明確な数字ではないが、実測し得た点数では須恵器85%、土師器15%であるが、土器片の総量からすると、およそ7対3ぐらいであろうと思われる。図示し得た土器は、合計110点であり、そのうち須恵器が94点、土師器が16点である。土師器の点数が圧倒的に少ないので、前述したように壊れやすいことに原因があろう。器種は、須恵器が环（A・B）、皿、甕、壺、こしき、円面鏡、薬壺、土師器が环（A・B）、甕、甕、鍋の各種がある。これらの器種ごとの比率は、須恵器が环62%（その内、环A11%、环B89%）、皿2%、甕12%、壺12%、こしき2%、円面鏡3%であり、土師器が环27%（その内、环A38%、环B63%）、甕9%、甕18%である。しかし、これらの数字はあくまでも図示できたものから得られたものであるので、あくまでも参考の数字としておきたい。

今回調査した中での遺物の出土量は、旧淡路鉄道により擾乱されているため正確な数字ではないが、TS-28コンテナで、1区が4箱、2区が1箱、3区が1箱、4・5区が1箱、6区が2箱、7区が1箱であり、1区が最も多い。さらに、調査面積（擾乱を免れ、奈良時代の遺構面として存在していた面積）が、1区500m²、2区290m²、3区200m²、4・5区480m²、6区320m²、7区220m²であり、面積との比率からも1区が最も土器の密度が高いと言える。図示できた重要な遺物の出土場所は、須恵器では円面鏡が1区と6区から、土師器では暗文の入った环が2区から出土している。

以下、須恵器、土師器に分けてまとめるが、上述したような出土状況であったために、出土土器を検討するにあたっても、層位に裏付けされた方法を探ることができなかった。さらに、下内膳遺跡が位置する淡路島で生産された在地の須恵器、土師器の実体と、平城京を中心とした実年代に置き換えられる一括性の高い編年との関係が明らかでなく、発掘調査で得られた豊富な資料に基づいた地域的な視点での土器分類、編年が完成していないため、ここでは、あくまでも今回調査した中での、単なる分類でしかない。

淡路島内における須恵器については、これまで岡本稔氏¹⁾、田辺昭三氏²⁾、沖田真一氏³⁾、浦上雅史氏⁴⁾により窯跡の遺物が報告、検討されている。これらの先駆的成果には奈良時代に属するものも含まれており、いずれも表採品であるものの、淡路島内での須恵器生産の実体を示すものとなっている。



第267図 主な須恵器

2. 須恵器

最も中心的な器種である壺類の中で、全体の形状がわかるものを第267図にまとめた。

壺口蓋

左の例は壺の蓋であるが、最も上の1はほぼ全体の形態がわかるものである。天井部が丸みを持ち、器高は比較的高い。体部と口縁部の境は滑らかである。次の696は天井部が平らで、天井部から口縁部にかけて屈曲している。次の443についても天井部が平らで、器高が低い。体部と口縁部の境には段があり、口縁部で水平に延び、端部で屈曲する。次の660は環状のつまみを有するもので、後輪の蓋である可能性もあるが、ここでは壺類として扱う。器高は低く、体部と口縁部の境には若干の段が認められるものの、ほぼ直線的に延びている。これらの4形態の比率は図示できたもののみを対象とすると、上から31%、50%、6%、13%となるが、対象とすることができた点数には数量的に問題がある。

つまみ

次に、つまみのみの形状をa~dに分類し、第268図にまとめた。全体の形状が不明でも資料の対象とすることができる、数量的な問題をある程度補うことができ、傾向を掴むことができるものと思われる。aは、高さと比較して径が小さい。bは径がやや大きく、中央部がやや盛り上がっているものの、平らな感がある。cは径が大きく、平らで、周囲の方が高い。dは環状のつまみである。これらは、出土したつまみ全てを対象とすると、a:b:c:d=20%:60%:13%:7%となる。

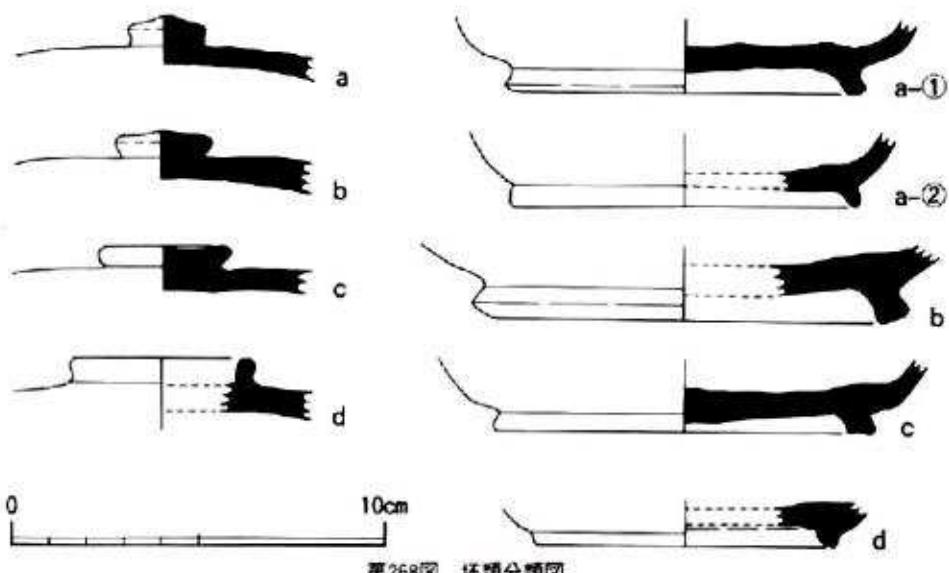
壺身

次に壺身であるが、壺蓋と同様に、全体の形状がわかるものは少ない。84は口径が小さく、高台の径も小さい。口縁部は外方に開き、やや外反している。663は、低い高台を持ち、底部から体部にかけて屈曲し、口縁部は直線的に外傾して延びる。35はやや口径が大きく、体部から口縁部にかけて丸みを持って彎曲している。665は器高の割に口径が大きく、全体に平らな感がある。高台は外方に大きく開いている。

第269図に口径と器高を図にして示した。これにより1類から3類の3類に分類でき、径高指数はそれぞれ30、28、34である。

高台の分類

次に、高台の種類を第269図にまとめた。aは短くやや外方に開くもので、端部が平らな①と丸い②に細分できる。bは厚く、高いもので外方に開くもの、cは短く平らなもの、



第268図 壺類分類図

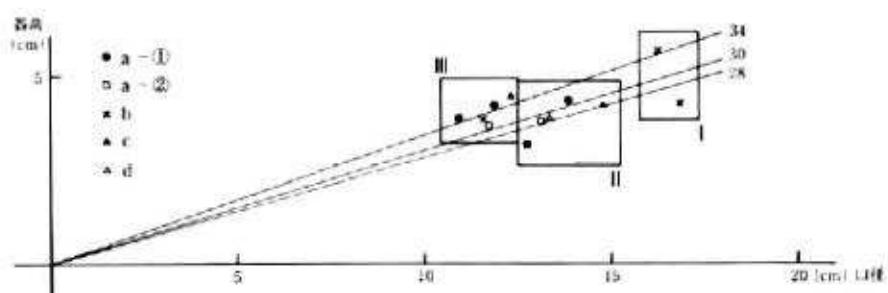
dは短く、直で、内傾しているものである。これらは固化できたものののみを対象とすると、aが59%（その内①が87%、②が13%）、bが30%、cが8%、dが10%となる。

この分類を法量表の中に組み込んでいるが、点数が少ないため明確にはできないが、法量とこの高台の分類の間には、特に規則性はないようだ。

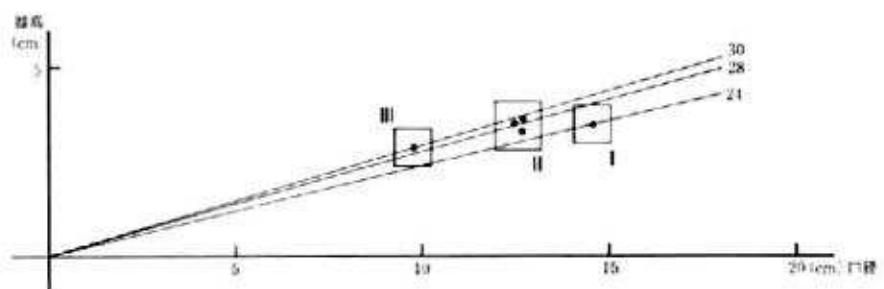
壺A

次に壺Aであるが、この器種も他と同様に全体の形状がわかるものが少ない。全体の形状が復元できたものの中、代表的な器形を第267図に示した。口径が小さく全体のつくりが雑なもので、口縁部が若干外反する。底部は丸く、ヘラ切り未調整である。

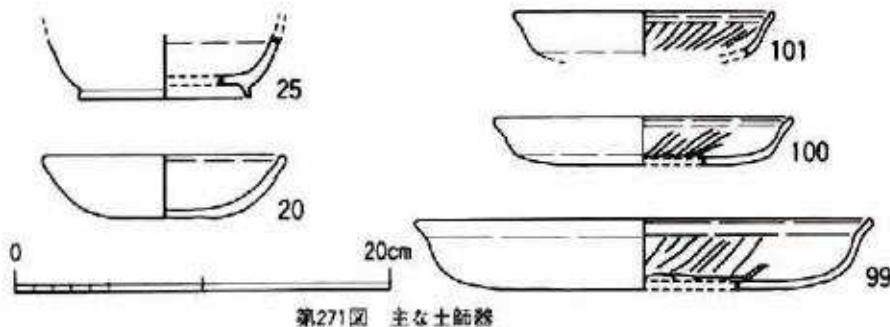
さて、この器種についてはいろいろな位置づけがなされている。「丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書」¹⁴⁾では「高台をもたない須恵器の壺」として「壺A」の中で捉え、一方、



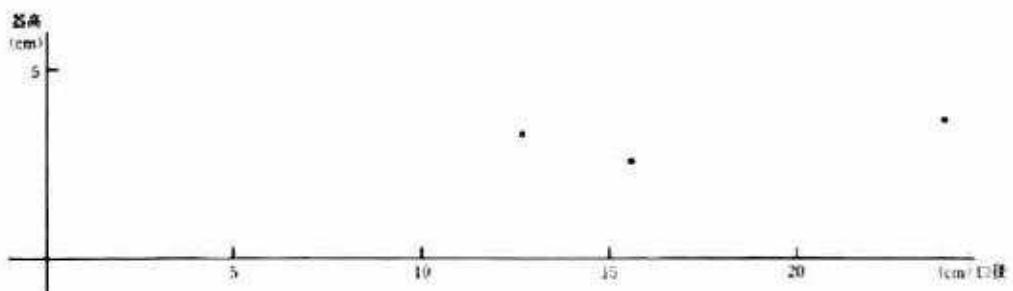
第269図 須恵器壺B法量図



第270図 須恵器壺A法量図



第271図 主な土師器



第272図 土師器坏A法量図

「七日市遺跡(1) - 第3分冊 -」では、「古墳時代の坏蓋を逆転させたような形態の坏」とし、「坏Aとは系譜の異なる器種とみられる」ことから、「坏Aと分離した独自の器種」として扱い、「坏I」という器種名を与えていた。

55は口径・器高と比較して底径が小さく、体部は直線的に外方へ開くもので、大きく傾いている。28は55と口径、器高はほぼ同じであるが、底径が大きいため体部の傾きが小さくなっている。また、底部から体部にかけても緩やかに彎曲し、丸みをもっている。106は器高と比較して口径が大きいものである。底部から体部にかけて緩やかに彎曲し、体部は外方へ外反している。

これらの比率は図示できたものを対象とすると、それぞれ40%、20%、20%、20%であるが、資料数が少ないため誤差を含み、明確でない。

また、第270図に口径と器高を示した。これにより、IからIIIまでの3種類に分類することが可能である。これらは高さはあまり変わらないが、口径に差が認められる。径高指数はそれぞれ24、28、30である。

胎土分析

胎土分析によると、坏A、坏Bともに淡路島内の胎土を使用して生産された可能性が高いという結果が得られている。

3. 土師器

土師器は前述したように須恵器以上に遺存状況は悪い。その中で、全体の形状のわかるものを第271図にまとめた。また、坏Aのみ法量図を示した。

坏B

最も遺存状況のよい25をその代表として挙げている。高台は短く外方に開き、縁部はやや丸い。体部は緩やかに彎曲している。

坏A

暗文が認められるもの(99~101)と、認められないもの(20)の2つに大別される。暗文



第273図 淡路の各窯出土の主な須恵器（註7文献から再トレース）

が認められない20は底径が小さく体部が外傾している。暗文が認められたものは確認できるものでは底部に螺旋状暗文、体部に放射状暗文が認められる。口径により小さい101・100と大きい99の2者に細分できる。しかし、いずれも能数に限界があり、比率などを示すことはできない。なお、暗文が認められるものは畿内産である可能性が高い(10)。

胎土分析 胎土分析の成果では、上師器の产地を推定することはできないが、須恵器で得られたRB-Sr分布図での淡路領域には25が属している。

4.まとめ

淡路の窯跡

淡路島内における須恵器窯跡の様相は浦上雅史氏によってまとめられているが⁽¹⁾、そこで報告されている窯の内、奈良時代に属するのは土生寺窯、戸川池窯、角床窯I、角床窯II、新宮窯、奥の池窯がある(第273図)。これらの窯の内、下内膳遺跡の中心となる時期には土生寺窯、戸川池窯、角床窯Iがあり、それ以降の角床窯II、新宮窯に併行する遺物も出土している。これらは、浦上氏の示した年代によると7世紀末～8世紀中頃を示しており、上師器の年代との間に矛盾はない。そして8世紀末まで継続している。

[註]

- (1) 兵庫県教育委員会「遺跡分布地図及び地名表」第一分冊 1972
- (2) 岡本 一徳「淡路古瓦集成」「淡路地方史研究会会誌」第2号 1964
- (3) 田辺 昭三「飛鳥・奈良期の須恵器」「日本美術工芸」第393号 1971
- (4) 田辺 昭三「大野庄慶須恵器窯跡について」「淡路考古学研究会誌」創刊号 1972
- (5) 田辺 昭三「淡路島での発掘」「日本美術工芸」第477号 1978
- (6) 沖田 真一「庄慶窯跡遺物について」「淡路考古学研究会誌」創刊号 1972
- (7) 浦上 雅史「淡路島の古窯址出土の須恵器について」「淡路考古学研究会誌」第3号 1980
- (8) 藤村 淳子「奈良時代の土器」「丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書」(兵庫県文化財調査報告書 第30冊) 兵庫県教育委員会 1985
- (9) 井守 徳男「土器」「七日市遺跡(1)」－第3分冊－(飛鳥・奈良・平安時代遺跡の調査) (兵庫県文化財調査報告書第72冊-3) 兵庫県教育委員会 1991
- (10) 奈良県立橿原考古学研究所 林部 均氏のご教示による。
- (11) 前掲7

第3節 中世以降の土器

1. はじめに

今回の調査で出土した中世以降の土器は弥生時代、奈良時代の遺物に比較して極少量である。本報告書に掲載した土器は、須恵器、土師器、瓦器、陶器が1~数点のみである。

中世以降の遺物が集中する調査区はない。2区では、第1面で中世後半、第2面で中世前半の遺物が出土地しているが、量も少なく、他の時期の遺構も存在しており明確でない。遺物は、包含層と単独の柱穴や土壤から出土したものである。

2. 器種

須恵器	捏鉢が出土した。器形は明らかでないが、東播系須恵器の中で捉えられるものと考える。口縁端部の形態から14世紀代に属すると考えられる。
土師器	小皿が出土した。最も点数が多いが、個体差があり、形態的特徴の分類は困難である。全般的に器形は偏平で、平らな底部をもつが、111の小皿のみ明確に平底をもつ。
瓦器	碗が出土した。形態的特徴から和泉型瓦器碗またはその影響を受けたものと見られる。畿内の年代観から12世紀後半のものと考える。
陶磁器	団化していないが、青磁・白磁の碗の破片が少量出土している。時期は12世紀後半~13世紀前半を主体とする。 近世では、唐津焼の碗が2点出土している。団化したものは内面に胎土目が認められた。団化していないものは砂目である。およそ17世紀前半の時期に属すると考える。

3. まとめ

今回報告した土器の大半は、西日本の広域に流通しているものであり、下内膳遺跡もまたこれらの分布圏内にある。遺物量では比較しえないが、近隣で中世集落を検出した大森谷遺跡¹⁾、森遺跡²⁾でも時期に若干の前後はあるが同様の土器が出土している。土器の時期的なピークは明確でないが、平安時代から近世まで存続している。

【註】

- (1) 別府洋二他「大森谷遺跡－淡路縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」(兵庫県文化財調査報告書 第27号) 兵庫県教育委員会 1985
- (2) 吉職雅仁他「森遺跡－淡路縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」(兵庫県文化財調査報告書 第55号) 兵庫県教育委員会 1989

第6章 遺構のまとめ

第1節 層序について

1. 概要

地理的環境

下内膳遺跡は淡路島の南東部にあたり、洲本川を中心に形成された洲本平野に位置している。洲本平野は基本的には東西方向に細長く延びているが、その中央部の北側に先山が位置しており、本遺跡はその先山（標高448m）と、洲本川の間に立地する。

先山は須家花崗岩帶上にあたるが、その南麓に位置する本遺跡は大阪層群上にあたり、この花崗岩の風化した「マサ土」の二次堆積によって扇状地がいくつか形成されている。これらの扇状地のひとつに本遺跡が立地している。

扇状地間は明瞭な谷地形となっており、本遺跡の立地する扇状地の東側の谷の中央部には积迦堂川が流れている。西側についても大きな谷が入り込んでいる。扇状地の東側・西側の谷と扇央部の比高は約2.7mを測る。

扇状地の南側には西から東方向に洲本川が流れており、この流れにより、扇状地の扇端部は段丘化している。この段丘面における標高は約6mで、洲本川の現氾濫原とは約1mの比高差がある。また、調査地の現地表面の標高は12.5mである。

今回の調査

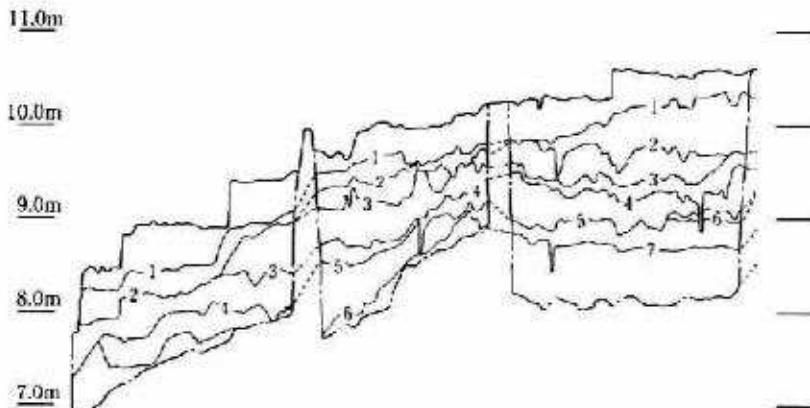
下内膳遺跡は、以上のような地理的環境の中に位置しており、土層についても当然その影響において理解できる。特に今回の調査地は、遺跡の立地する扇状地の中央部をその主軸に直交する東西方向にトレンチを開けた形となっており、先山からの土砂の供給による扇状地の形成状況が把握できる。

今回の調査区では、北側半分が旧淡路鉄道によって削平されているため、土層は南壁でのみ観察した。ただし、調査区間に調査を行わなかった部分（農道、サイフォンなど）があり、さらに調査中に壁面が崩壊したため、土層が観察できなかった部分もある。そのため、土層は1区から7区まですべて完全につながったものではない。

よって、ここではまずはじめに各地区においてそれぞれに任意に設定した「遺構面」を対応させることとする。調査区ごとに遺構面の数が異なるのは、扇状地の土砂の供給が調査区全体に及ばず、部分的な堆積があるので、特に中央の4・5区では、扇状地の中央にあたり、標高が高いため、時期が下がるに従って土砂の供給が少くなり、遺構面が重複する結果となっている。さらに、土壤化が著しく、本来の遺構面と検出面が異なる地区があり、このことも遺構面の数が異なる原因となっている。

以上のことに留意しつつ、各地区間の遺構面を対応させることとする。

なお、遺構面を対応させるにあたっては、単純に層を対応させるのみでは今回の調査区で認められた複雑な土層堆積には不可能であるため、前述したような地理的環境と出土遺物から想定される遺構面の時期、遺構面のレベル、遺構のつながりを参考としている。



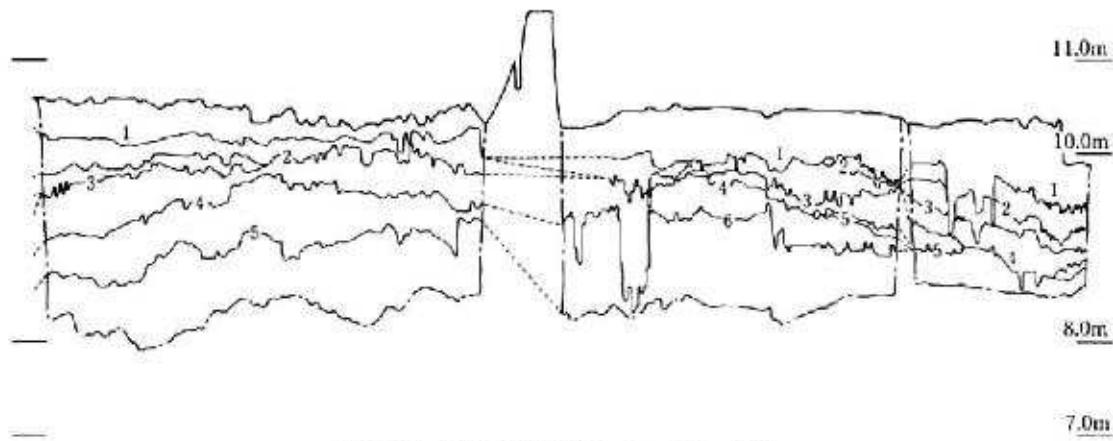
第274図 土層断面図（南壁 1区～3区）

2. 各遺構面の対応関係

1区と2区 1区第1面と2区第1面は、表土直下であるので当然対応する。遺構についても発掘が検出されているので問題はない。1区第2面は掘立柱建物跡が検出されており、2区第2面と対応する。遺物に須恵器が含まれるのはこの面までである。ここで特徴的な点は両区とも土壤化が著しいことである。1区第2面の下は土壤化しておらず、第3面としているのに対して2区はもう一層土壤化している層が存在し、第3面として検出している。この面に対応するのは1区では存在しない。あるいは1区第2面に対応する遺構が存在するのかもしれないが、限定できない。1区第3面に対応するのは、遺構が検出されていないため遺構のつながりからは不明と言わざるを得ないが、遺構面のレベルから2区第4面と考えられる。次の1区第4面に対応する面は遺構面のレベルから2区第5面である。1区はそれより下層には遺構が確認できなかったが、2区ではさらに下に第6面が確認され、溝、住居跡が検出されている。

2区と3区 2区第1面と3区第1面は、表土直下であるので当然対応する。遺構については、2区が溝だけであるが、3区では掘立柱建物跡が検出されている。また、3区では須恵器が出土しているのは第1面のみであり、よって3区第1面は2区の第1面と第2面の両方に対応する。3区第2面は、他の地区とのつながりをもたないが、遺構面のレベルから2区第2面と対応するものと思われる。2区第3面は須恵器が出土しておらず、3区第3面に対応する。2区第4面、2区第5面は遺構面のレベルから、それぞれ3区第4面、3区第5面に対応すると考えられる。2区第6面は3区第7面にまたがる住居跡の存在から対応することが明らかである。よって3区第6面に対応する遺構面は2区には存在しないことになる。

3区と4・5区 3区第1面と4・5区第1面は、表土直下であるので当然対応する。また、3区では須恵器が出土したのは第1面のみで、4・5区でも同様に第1面からのみ出土している。3区第3面は須恵器が出土しない面で、土壤化している層の上面を遺構面としていることからも4・5区の第2面に対応すると考えられる。3区第4面は土壤層の下の土壤化していない層で検出した遺構面で、4・5区第3面に対応する。3区第5面、3区第6面はレベルと出土遺物から、4・5区第3面と対応し、3区第7面は同じ根拠で4・5区



第275図 土層断面図（南壁 4・5区～7区）

第4面に対応するものと考えられる。4・5区第5面は出土遺物の時期から3区と対応する遺構面はない。

4・5区と6区 4・5区第1面と6区第1面は、表土直下であるので当然対応する。また、4・5区では須恵器が出土したのは第1面のみであるのに對し、6区は第1面から第3面まである。よって4・5区の第1面は6区の第1面から第3面に対応する。また、4・5区第4面は遺構のつながりから6区第6面と対応するため、4・5区第2面、第3面は6区第4面、第5面と対応する。これは、土壤層との関係からも判断できる。4・5区第5面は出土遺物の時期から6区と対応する遺構面はない。

6区と7区 6区第1面と7区第1面は、表土直下であるので当然対応する。また、6区では須恵器が出土したのは第1面から第3面までで、7区では第1面から第3面までである。これらは遺構面のレベルから6区第1面、第2面、第3面は7区第1面、第2面、第3面と対応する。6区第4面は遺構面のレベル及び遺構のつながりから7区第4面に対応する。7区第5面は同じ根柢で6区第6面と対応する。よって6区第5面と対応する遺構面は7区には存在しない。出土遺物の時期からは7区第5面出土の遺物が6区第6面出土遺物と比較してやや新しい傾向があるため、あるいは6区第5面と7区第5面が対応していた時期があるのかも知れない。

段階の設定 以上をまとめると、下層から順に、すなわち古い時期から順にⅠからⅣの10期が設定できる。

Ⅰ期 1期は、4・5区においてのみ認められるもので、この時期の遺構は、4・5区以外からは検出されておらず、他地区において対応する面はない。当期における4・5区がⅡ期以降の下内膳遺跡の地形を形成する核となるものである。

Ⅱ期 Ⅱ期は、いずれの地区においてもⅠ期よりも次の遺構面である。2区から7区にわたって新たな遺構面が確認でき、Ⅰ期の上に全体に砂の供給があったことを窺わせる。

Ⅲ期 Ⅲ期は、3区から6区にわたって新たな遺構面が確認できたもので、Ⅱ期の遺構面全体に土砂が堆積している。当期においても3区から6区にわたって全体に砂の供給があったことを窺わせる。

Ⅳ期 Ⅳ期は、1区から3区にわたって新たな遺構面が確認できたもので、4・5区、6区は

	III期と同じである。すなわち、下内膳遺跡の中心となる微高地から西側の1区から3区のみに砂の供給があったことを窺わせる。
V期	V期は、IV期に継続し、中心部の西側である1区においてのみ砂の堆積があったものである。
VI期	VI期でも、V期に継続し、中心部の西側である1区から3区にわたって砂が供給されたものであり、新たな遺構が検出されている。
VII期	VII期は、出土遺物に須恵器を含まない最も上の遺構面の時期である。VI期と比較して1区から7区までの全ての地区に砂が供給されており、VI期からVII期の間で大きな地形変化があったことを窺わせる。出土遺物からみると、時期的にはあまり長時間の変化ではなかったようで、比較的短期間に内に変化したものである。
VIII期	VIII期は、須恵器を含む最も下の遺構面の時期である。VII期と比較して1区から7区までの全ての地区に砂が供給されており、全地区で遺構面が増えている。ただし、VII期からVIII期への変化と比較すると、VII期からVIII期への変化は比較的長時間に渡っている点が異なっている。
IX期	IX期は、下内膳遺跡の中心部から東側である6区と7区においてのみ砂が供給されており、遺跡面が増えている。
X期	X期は、今回検出した最も上の遺構面であり、すべての地区の第1面に相当する。下内膳遺跡の中心部である3区、4・5区以外において砂が供給されており、遺構面が増えている。
	これらの10の時期をまとめたのが341ページの第120表である。

3.まとめ

以上から、下内膳遺跡における遺構面の対応関係が明らかとなった。そこで最後に、その対応関係に基づき、下内膳遺跡における地形的変遷について若干のまとめを行う。

前述したように下内膳遺跡は北側から土砂が供給された扇状地に立地している。今回の調査地はその扇状地を東西に横切っているため、扇状地の断面として捉えられる。その状況は土層の観察から明らかである。調査区の内4・5区が扇状地の最も高い位置にあり、東西に低くなっている。特に今回の調査区で最も下層にあたる弥生時代中期は4・5区においてのみ認められ、その時から4・5区が中心となっていたことがわかる。

その後、扇状地の周辺部を中心に土砂が供給され、上層は4・5区から周辺部に向かって傾斜しながらも、高さが次第に平均化していく。やがて、奈良時代までには扇状地も拡大し、中心部も4・5区のみであったのが3区にまで広がっている。1区についても安定してきたようで、6区や7区に土砂が供給され遺構面が多いのに対して、1区から4・5区では継続している。このことは遺構の種類からも窺え、1区から4・5区に掘立柱建物などが検出されているのに対して、6区、7区では水田や溝が検出されている。

また、土壤化も4・5区では厚いが、6区、7区では薄く、水田として土壤化した層とそれを覆う土壤化していない層の繰り返しが基本となっている。

第2節 弥生時代の遺構

1. はじめに

今回の調査で明らかとなった遺構の大半は弥生時代に位置付けられる。弥生土器の分析（第5章第1節）から、弥生時代中期から後期後半まで続くことが明らかとなっている。以下、住居跡・埋葬遺構・生産遺構（水田跡）について、簡単にまとめておく。

2. 住居跡

時期	合計5棟検出している。いずれも弥生時代後期に位置付けられるが、2区第6面から3区第7面にかけて検出したSH01・SH02と4・5区第3面で検出したSH03～SH05の2時期に分かれる。前者は弥生後期1に、後者は弥生後期3にあたり、前述の層序の分析においても、層位的に前後関係にある。いずれにしても、下内腰遺跡においては、当該期の住居跡としては初めての発見である。
平面形	検出した5棟の住居跡は、全体を検出できたものはないが、いずれも円形ないしそれに近い平面形を有していたものと考えられる。復元径が4.4mのSH03から同じく9mのSH04までバリエーションをもつが、SH01・SH05の7m台が平均的といえる。
焼失住居	SH01とSH04は、焼失した状態で検出されている。特にSH04については、土器・石器等が原位置が保たれた状態で出土している。
	調査範囲が限られていたため、可能性の指摘にとどまるが、住居跡は2・3棟が一単位となって存在したものと考えられる。

3. 掘立柱建物跡

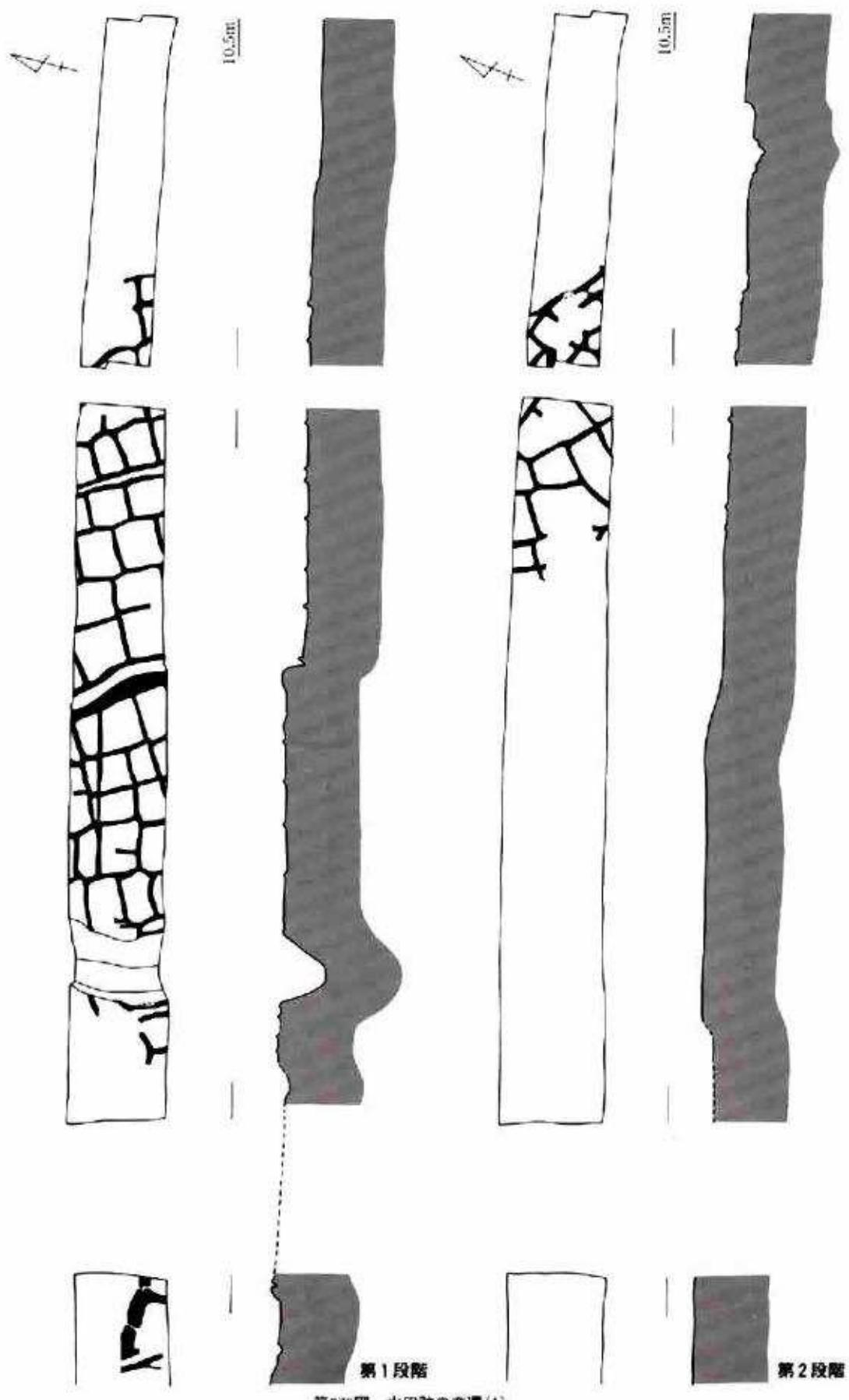
1区から4・5区にかけて、確実に弥生時代と判断できる柱穴が数多く検出されている。しかし、建物を復元できたのは、1区第4面のSB08の1棟に限られる。これは、調査範囲が限られている上に、旧淡路鉄道建設により調査区の大半が削平を受けているためと考えられる。したがって、当該期に掘立柱建物がなかったのではなく、検出できなかつたという表現が正解といえよう。これを裏付けるように、4・5区第5面において柱根が遺存した柱穴を3穴検出している。

なお、掘立柱建物跡の具体的な時期については、時期を特定する資料を欠くため明確にできない。

4. 水田跡について

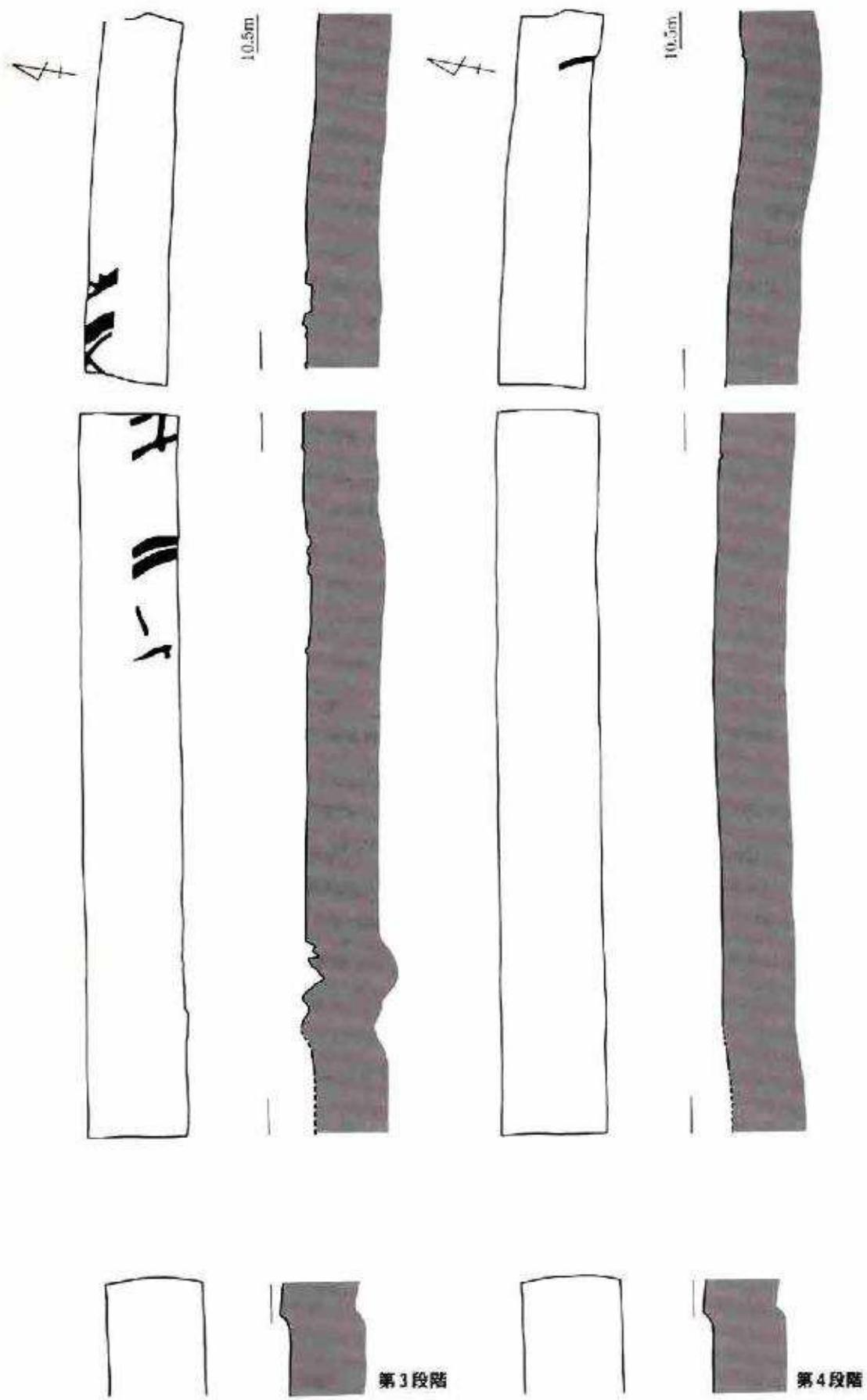
はじめに	今回の調査で、4・5区～7区において、水田跡が複数面にわたって検出されている。第3章では、各地区ごとに報告してきたが、土層・出土土器などをもとに平面的に繋ぎ合わせ、その変遷について検討を加えてみたい。なお以下の分析において、後述するように、弥生時代以降の水田跡についても含まれているが、水田跡の変遷を捉えることを重視して、当節で扱うこととする。
------	--

段階設定	地区ごとの検出面の対応関係については、すでに第1節において検討されている。そこで、その結果をもとに下層から順に4時期に段階設定する。
第1段階	4・5区第4面、6区第6面、7区第5面が対応する。
水田跡	6区においては全面に水田跡を検出したが、4・5区においては東端部に、7区では西端部に限られる。各地区的水田跡も、共通した極細砂に覆われていた。
水田造成	4・5区から7区にかけては、当遺跡の立地する微高地の東縁部にあたり、地形的に東側へ傾斜している。このため、水田造成にあたって、平坦化のための工夫が随所に認められる。
	まず、4・5区においては、集落と水田の境界域にあたるが、集落との約10mほど空閑地を挟んで一段削り込み、以東を水田域としている。続く6区においては、SD113およびこれに平行する大畦畔を境として約23cmの段差を設けている。またこの東側の大溝(SD112)の両側においても、前者ほどではないが高低差が認められ、当溝をもって段差としている。
	以上から、当該期の水田は、4・5区東端から7区西端までの東西約60mの範囲にわたって、大きく3段の平坦面を造成し、各平坦面を畦畔により区画していくものと理解できる。そして、各平坦面は溝あるいは大畦畔をもって境となっている。また、4・5区の畦畔が、他の畦畔と異なり大畦畔からなっている点についても、その西側の集落および空間地との境を明瞭化するためとも考えられる。
灌漑施設	各平坦面の境となっている溝にその機能を求めることができる。特に、大溝については、当水田域の水利施設のなかでは中心的機能をなす溝と考えられる。おそらく、当水田域の上流域(北東側)において、現在7区の東側を流れている祝進堂川からの導水機能を担っていたものと考えられる。そして、SD113については、上流側で大溝から分岐しているのではないかと考えられる。また、当溝の東側にも歴跡がみられる。この施設はSD113から分岐した導水施設と考えられる。
	なお、大溝とSD113については、前述したように、東西両側の水田面に高低差が認められることから、導水・排水の両機能を果していたものと考えられる。つまり、西側の高い側の水田に対しては排水用として、東側の低い側の水田には導水用として機能していたものと考えられる。
	この他、大溝の西側の溝(SD111)についても、周辺の水田畦畔共々大半が攪乱しておりその性格を明確にできないが、水利施設として機能していた可能性も考えられる。
水田区画	各溝および大畦畔に区画された平坦地に小畦畔で区画されている。当段階の各水田の平面の平面形は正方形に近い長方形を基本形態としている。一区画の面積は、最大で約24m ² 、最小で約1m ² 、平均で約9m ² で、いわゆる小区画水田に分類されるものである。
	また、各畦畔は東西・南北方向に通っている。つまり、南北と東西の畦畔は基本的には十字形にクロスしている。これは、平面形が正方形に近いことも合わせて、東西方向および南北方向に同様の傾斜地に立地することを示している。
時期	遺構検出面の繋がりから、弥生時代後期(後期1)に対応する。



第276図 水田跡の変遷(1)

第2段階	6区第4面、7区第4面が対応し、4・5区では検出されなかった。
水田跡	6区東端部と7区西端部に限られる。6区のほぼ中央部で東側に向かってわずかではあるが一段落ち込み、これ以東が水田域となっている。7区の東側については、洪水砂の堆積が顕著であることから、当初水田が造成されたとしても、洪水砂によって押し流されてしまったものと考えられる。ただし、6区中央部から7区中央部までフラットな面となり、それ以東はまた落ち込むことから、当該期の水田域は今回の調査で検出した範囲が、当初からの水田域であったとも考えられる。
灌漑施設	溝および畎畠等は検出されなかった。
水田区画	検出範囲が前段階より限られているため、明確な傾向をつかむことは困難である。大きな傾向としては方形を基本形態としているが、前段階より一筆ごとの区画が不定形である。
時期	6区第4面は、4・5区第2面に対応する。当面は弥生時代後期（後期2～3）とされていることから、当該期に位置付けられる。
第3段階	6区第3面、7区第3面が対応する。4・5区では未検出である。
水田跡	検出範囲は、前段階同様、6区の東端部、7区の西端部に限られる。そして、前段階より一層畦畔の残存状況はよくない。
灌漑施設	溝は検出されなかったが、畎畠を2ヶ所で検出した。いずれも、北西～南東方向にのびるものである。
水田区画	一区画が明確なものは残存しない。畎畠と同様北西～南東方向の畦畔をいくつか検出したのみで、その直交方向の畦畔は一部に限られる。このため、平面形等は明確にできない。ただし、残存する畦畔から判断する限り、一筆ごとの規模は、前段階と大差ないと判断される。
時期	6区第3面は、4・5区第1面に対応し、当面は奈良時代以降に位置付けられている。よって、当段階の水田跡についても当該期に位置付けたい。
第4段階	6区第2面、7区第2面が対応する。4・5区では未検出である。
水田跡	検出範囲は、7区の東端部に限られる。水田跡の検出状況は、前段階より一層悪く、7区で北西～南東方向の畦畔を1本検出したのみである。7区中央部から東側が一段落ち込んでおり、この範囲が当段階の水田域と推定される。
灌漑施設	全く検出されなかった。
水田区画	畦畔1本検出したのみで、全く不明である。
時期	6区第2面は、4・5区第1面に対応し、当面は奈良時代以降に位置付けられている。よって、当段階の水田跡についても当該期に位置付けたい。
小結	以上、今回の調査においては水田跡の変遷を4段階にわけることができた。前項の検討結果を踏まえ、当造跡の水田跡の特徴について、洲本市教育委員会の調査結果を合わせてまとめてみたい。
	なお、ここでは、水田跡が比較的良好に検出された第1段階および第2段階、つまり弥生時代の水田跡を中心に検討していく。
立地	まず指摘できるのは、上石流扇状地に立地することである。これまでの調査例から当該



第277図 水田跡の変遷(2)

期の水田開発は、微高地の縁辺部を主に対象としたことが明らかとなってきた。よって、この事実から当遺跡の水田跡については、立地的に例の少ないものといえる。

範囲

4つの段階を通して、検出したのは4・5区～6区に限られ、その平面的位置は時期を追って東側へ移動している。これは、数次にわたる土石流の堆積による居住域の拡大に伴い、水田域も移動したものと考えられる。また、同じ微高地の縁辺部であっても、微高地の西側では水田跡は検出されなかった。これは、旧地形が西側のはうが急であったこと、中世以降の西側の谷の段丘化（第7章第2節）により遺存できなかつたことによるものと考えられる。詳しくは第7章で検討する。

ただし、中世以降になると、1区から2区にかけて耕溝が検出されている。これは、水田耕作の跡を示すものである。そして、調査直前は、調査地全域が水田であった。したがって、中世以降のある時期以降に、調査地全域に水田が拡大したことを明記しておく必要がある。

灌漑施設

水利施設として、溝と獸歎を検出した。当地域では、志知川沖田南遺跡においても獸歎が検出されていることから、下内膳遺跡においても他地域と同じ灌漑技術水準にあつたことを意味する。

調査範囲が限られているため、両者のシステムを明らかにすることは困難であるが、両者は密接に連動していたものと推定される。また、特に第1段階においては、溝および獸歎が一定の間隔で導かれていることから、両者を通じてそれらに区画された小水田域に導水され、堰等を経て個々の区画に配水されたものと考えられる。ただし良好に残存していた6区においては水口は認められなかったため、配水が水口を通じて行われたのか、オーバーフローによってなされたのかについては明らかにできない。

集落との関係

次に、第1段階～第4段階の各段階とも集落とセットとして検出されたことである。つまり、下内膳遺跡において平面的に牛座城を位置付けることができたことを意味する。

4・5区を中心に集落を検出し、その周縁部にあたる東側の6区・7区を中心に水田域を復元することができる。そして、集落と水田域と平面的に連続して検出することができた。この結果、水田域と集落との間には遺構の検出されない空間地が存在することが明らかとなった。ただし、この空間地については、遺構が検出されなかつただけで、墓地等の存在を考える必要があろう。

また、微地形的みて、水田域は集落域より一段低くなっていることが、景観的に復元できた。これは、微地形的に低くなっているところを平坦化したため、この高低差がより明瞭になったものと考えられる。

第3次調査

なお、当遺跡においては、第3次調査において水田跡が検出されている¹⁷⁾。第2面にわたって検出されており、下層の第4遺構面検出の水田跡は今回の調査の第1段階の水田跡とは同時期に位置付けられる。上層の第2遺構面検出の水田跡は弥生時代後期5に位置付けられる。特に良好な状態で検出できた上層の水田跡については、小規模な不定型区画の水田である。当該期においても、扇状地の東側を生産域としていたことがわかる。

5. 埋葬遺構

- はじめに** 今回の調査では、明らかに埋葬遺構と断定できるものは検出されておらず、第3章の調査報告においても、埋葬遺構として報告した遺構はない。しかし、4・5区第5面検出の土壙のなかに、埋葬遺構ではないかと考えられる遺構がいくつか認められる。以下、これらの遺構について検討を加えたい。
- SK50** 底部を穿孔した広口壺と高环の脚部が各1個体ずつ出土している。4・5区第5面検出の遺構は全体的に検出面からの深さが浅いことを考慮に入れると、広口壺を棺、高环を蓋とした土器棺であった可能性が高い。広口壺の頸部より上がない点も、当初から打ち欠かれていたことも考えられる。
- SK51** SK50同様、底部を穿孔した広口壺と直口壺が1個体ずつ出土している。当土壙は、平面形が溝状を呈しているため、直接土器棺墓と断定することは困難である。しかし、少なくとも埋葬に関連した遺構である可能性も十分考えられる。
- SK56** 平面形がSK50に類似する。また、当遺構出土土器のなかに底部を穿孔した壺が出土している。よって、当遺構についても、SK50同様の性格が考えられる。
- この他、同様の平面形を有するSK38・SK39・SK41についても、埋葬に関連した遺構の可能性が考えられる。
- SK57** 体部中央部を穿孔した壺が正立した状態で出土している。埋土等の分析はできなかったが、壺棺墓の可能性が極めて高い。
- その他** 以上の土壙群を検出するにあたって出土した広口壺(637)についても、体部下半に穿孔が認められる。よって、この土器も本来は遺構に伴うもので、土器棺として使用されていたものと考えられる。
- 小結** 以上の検討結果から、当面検出の土壙のなかに、土器棺墓もしくはそれに類する遺構と考えられるものが多く認めることができた。また、これらの土壙と同じ一群で検出された土器が出土しなかった土壙についても、土器墓の可能性が大いに考えられる。
- 以上から、4・5区第5面検出の土壙群については、墓域であったと考えたい。
- なお、当該期の土壙としては、4・5区第5面検出の土壙群以外にも多く検出されている。各土壙について詳しく検討することはできないが、いくつかの土壙については土器墓等になる可能性を否定するものではない。

6. まとめ

以上、水田跡を中心に当該期の遺構について概観してきた。調査範囲が限定されていたため、面的には十分な成果を得ることはできなかった。しかし、当遺跡の立地する畠状地を東西に横断する形で調査できたため、集落と生産域がセットで検出できた点は、当時の景観を復元する上で大きな成果と言えよう。

〔註〕

- (1)別府 洋二・松下 勝「淡路・志知川沖田南遺跡」(兵庫県文化財調査報告書 第40冊) 兵庫県教育委員会 1987
- (2)洲本市教育委員会「下内膳遺跡発掘調査V 略報2」1991
- (3)洲本市教育委員会「下内膳遺跡発掘調査V 略報3」1991

第3節 奈良時代の遺構

1. 概要

今回の調査で検出された奈良時代の遺構は、掘立柱建物跡、溝、その可能性のあるものとして水田、土壙が挙げられる。掘立柱建物跡は遺構面が最も良好に残されていた1区が最も多く、東側は4・5区まで認められる。溝は全体に散在しているが、方向はほぼ南北方向で、地形に沿っている。水田は6区から7区において認められ、土壙は2区においてのみ認められる。この時期における遺跡の範囲は、確認調査の成果では調査区外の東側及び西側には広がらないことが明らかとなっている。西側については、掘立柱建物跡が集中して遺跡の中心であるようであるが、標高は3区、4・5区と比較しても低くなってしまっており、調査区の西外側には遺跡が広がらないため、後世に河道により削平されたか、あるいは当初から遺構が存在せず、扇状地の西側に寄せて掘立柱建物が築かれたなどの可能性が考えられよう。

ここでは、これらの遺構の内、遺跡の最も中心となる掘立柱建物跡についてまとめる。

2. 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は合計16棟が検出された。その内、純柱建物は7棟、側柱建物は9棟である。しかし、後世の削平（主に旧淡路鉄道）や、調査区の制限などから、完全に検出できたのは1棟のみであり、他の掘立柱建物跡については部分的な検出にとどまる。

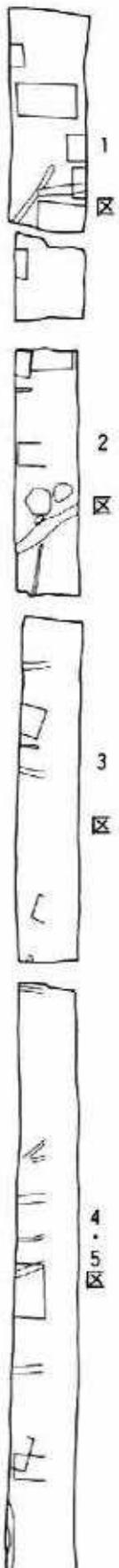
分類

掘立柱建物は、柱の配列により純柱と側柱の2種類に、柱穴の形状により隅丸方形のものと円形のものの2種類に、主軸の方向により（第280図）北から西へ9度から20度振っているもの（A類）と、北に近いもの（B類）の2種類に、それぞれ分類することができる。

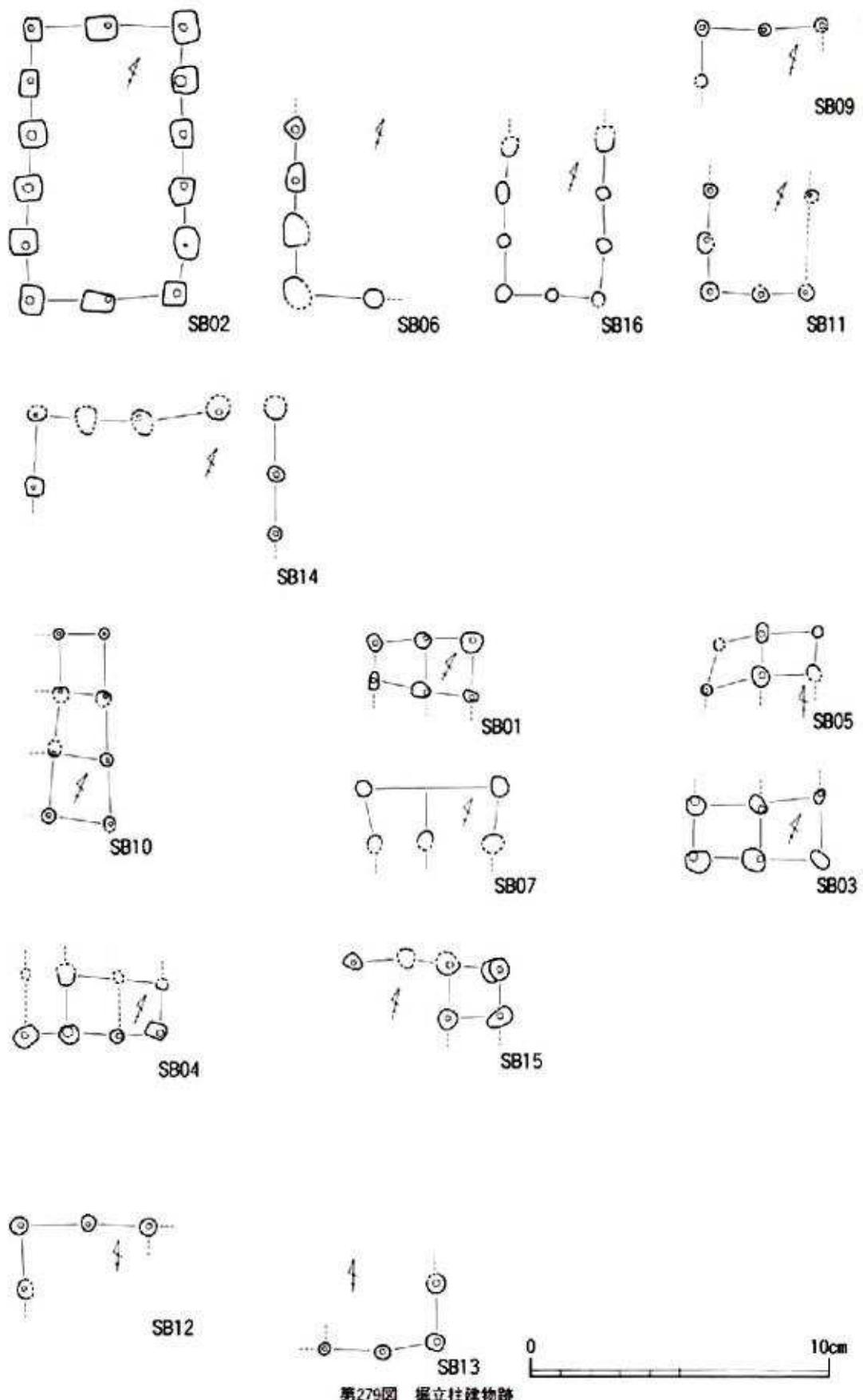
純柱と側柱は各地区に混在しており、特定の場所に集中している状況ではなく、また、柱穴の形状とも関係していない。建物の主軸方向については、北に近いものが2棟しかないが、その2棟とも側柱である。

柱穴の形状は、隅丸方形のものは全て1区に集中しているが、円形のものと混在している。1区の掘立柱建物跡の柱穴は不定形のものが多いが、これは検出面が実際の遺構面と大きく離れているためである可能性がある。主軸方向はA類、柱の配列は純柱と側柱の両者がある。

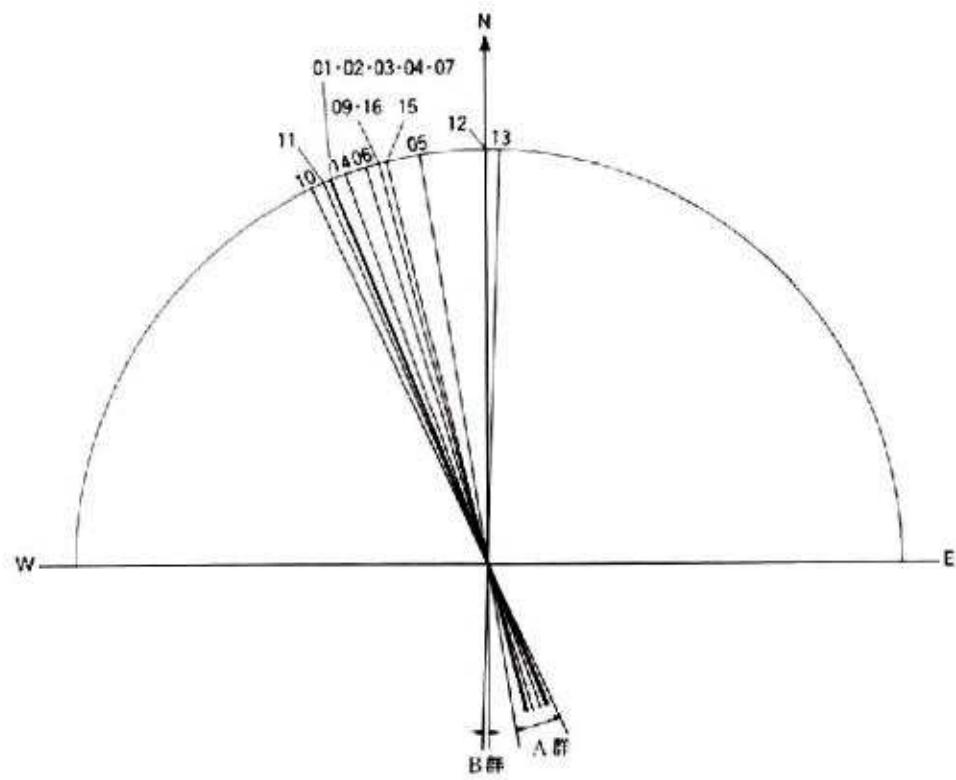
主軸の方向はほとんどが北から西へ9度から20度振っているA類であるが、2棟のみ北に近いB類である。その2棟はいずれも3区で検出されており、地域的にまとまっている。



第278図 配置図



第279図 振立柱建物跡



第280図 掘立柱建物方位図



第281図 掘立柱建物柱穴出土土器

時期

建物の時期は、SB09とSB10、SB15とSB16が重複しており、当然前後関係があるが、柱穴は切り合っておらず、SB09とSB10、及びSB15とSB16の違いは総柱から側柱かのみであり、柱穴の形状、主軸の方向に違いは認められない。

柱穴から出土した遺物は、図示できたものすべてが1区で検出されたもので、他の地区で検出された柱穴からは図示でき、時期のわかる出土遺物はなかった。柱穴から出土しているため、直接掘立柱建物跡の時期を示しているとは言えないが、ある程度の幅を示しているものと考えられる。図示できた遺物はいずれも奈良時代の前半から中頃までを中心とした時期である。この時期は、1区第2面、2区第2面の包含層から出土した遺

第119表 挖立柱建物跡一覧表（かっこ内は現存値）

番号	種類	間数	方向	分類	柱穴の形	規模(m) 桁×梁	面積(m ²)	柱間(m) 桁×梁
SB01	総柱	2×(1)	N22°W	A	円形	4.45×(1.50)	(6.80)	2.23×1.50
SB02	側柱	5×(2)	N22°W	A	方形	8.90×4.90	44.1	1.78×2.48
SB03	総柱	2×(1)	N22°W	A	方形?	4.15×(1.90)	(7.89)	2.09×2.05
SB04	総柱	3×(1)	N22°W	A	方形?	4.55×(1.60)	(7.28)	1.53×1.90
SB05	総柱	2×(1)	N9°W	A	円形	3.30×(1.35)	(4.46)	1.70×1.50
SB06	側柱	(3)×(1)	N17°W	A	方形?	(5.45)×(2.50)	(13.63)	2.50×1.82
SB07	総柱?	2×(1)	N22°W	A	円形	4.28×(1.80)	(7.70)	2.23×1.50
SB09	側柱	2×(1)	N15°W	A	円形	4.05×(1.80)	(7.29)	2.03×1.80
SB10	総柱	3×(1)	N25°W	A	円形	6.35×(1.50)	(9.53)	2.11×1.50
SB11	側柱	2×(2)	N23°W	A	円形	(3.32)×3.2	(10.62)	1.66×1.60
SB12	側柱	2×(1)	N	B	円形	4.25×(2.1)	(8.93)	2.13×2.10
SB13	側柱	(2)×(1)	N2°E	B	円形	(3.70)×(1.90)	(7.03)	1.85×1.90
SB14	側柱	4×(2)	N20°W	A	円形	8.05×(4.25)	(34.21)	2.01×2.12
SB15	総柱?	3×(1)	N14°W	A	円形	4.85×(1.55)	(7.51)	1.61×1.55
SB16	側柱	(3)×2	N15°W	A	円形	(4.85)×3.10	(15.03)	1.61×1.55

* 方向は、桁行・梁行方向に関係なく、北に近い方位で示している。

物の中心となる時期と大きく離れるものではない。

3.まとめ

今回の調査で検出された掘立柱建物跡は、調査区の制限、後世の削平のために明らかにできなかった。また、検出された掘立柱建物跡でも出土遺物跡が限定できないため、建築時期についても奈良時代前半から中頃であることを明瞭化であり、掘立柱建物間の前後関係、あるいは同時性については不明である。

性格

このような状況ではあるが、1区で検出された掘立柱建物群はまとまりを持って整然と並んでおり、同時性を示している可能性が高い。これらの建物群の性格であるが、出土遺物から、円面鏡、畿内産と思われる土師器があることから、また、掘立柱建物自体からも、完全に検出できたSB02から窺えるように面積が44.1m²と比較的大規模で、柱穴も隅丸方形であり、官衙的な性格をもつたものであることが言えよう。

周辺の環境は、地理的には、古代においては海が内陸に入り込み、洲本の港も現在より上流にあったものと思われる。よって下内膳遺跡は舟からの上陸地点に近い位置にあったものと思われる。歴史的には、正確なルートは明確にされていないものの、南海道が当地域周辺に通っていたと考えられ、下内膳遺跡もその影響の下で成立、展開していく可能性が考えられる。

第7章 まとめ

第1節 遺構の変遷

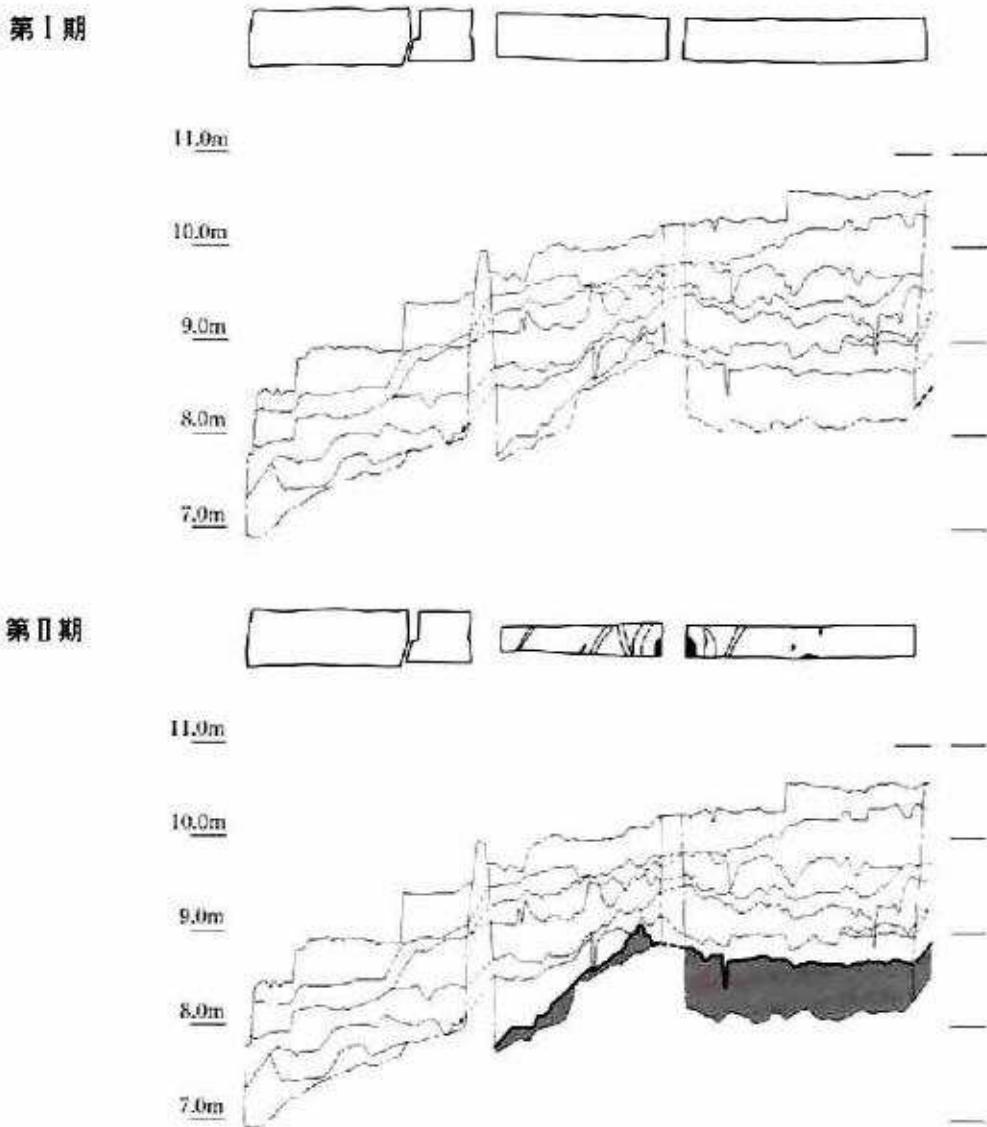
1. はじめに

調査を通じて、弥生時代中期から鎌倉時代までの遺構を検出した。これらの遺構は、1～7区の6地区に分割して検出されたが、調査区全体を一括して概観し、土層関係を中心とした結果（第6章第1節）、第I期から第X期までの10期からなることが明らかとなった。この結果を一覧表にまとめたのが第120表である。

そこで、第120表および第5章・第6章のまとめをもとに、第I期から第X期までを順次概観していくことにする。

第120表 時期別遺構面对照表

時 期		1 区	2 区	3 区	4・5区	6 区	7 区
第I期	弥生中期1・2	—	—	—	第5面	—	—
第II期	弥生後期1	—	第6面	第7面	第4面	第6面	第5面
第III期	弥生後期2	—	—	第6面	第3面	第5面	—
第IV期	弥生後期2	第4面	第5面	第5面	第3面	第5面	—
第V期	弥生後期2	—	第5面	第5面	第3面	第5面	—
第VI期	弥生後期2～3	第3面	第4面	第4面	第3面	第5面	—
第VII期	弥生後期3	—	第3面	第3面	第2面	第4面	第4面
第VIII期	古墳末～奈良	第2面	第2面	第2面	第1面	第3面	第3面
第IX期	奈良時代	第2面	第2面	第1面	第1面	第2面	第2面
第X期	平安・鎌倉時代	第1面	第1面	第1面	第1面	第1面	第1面

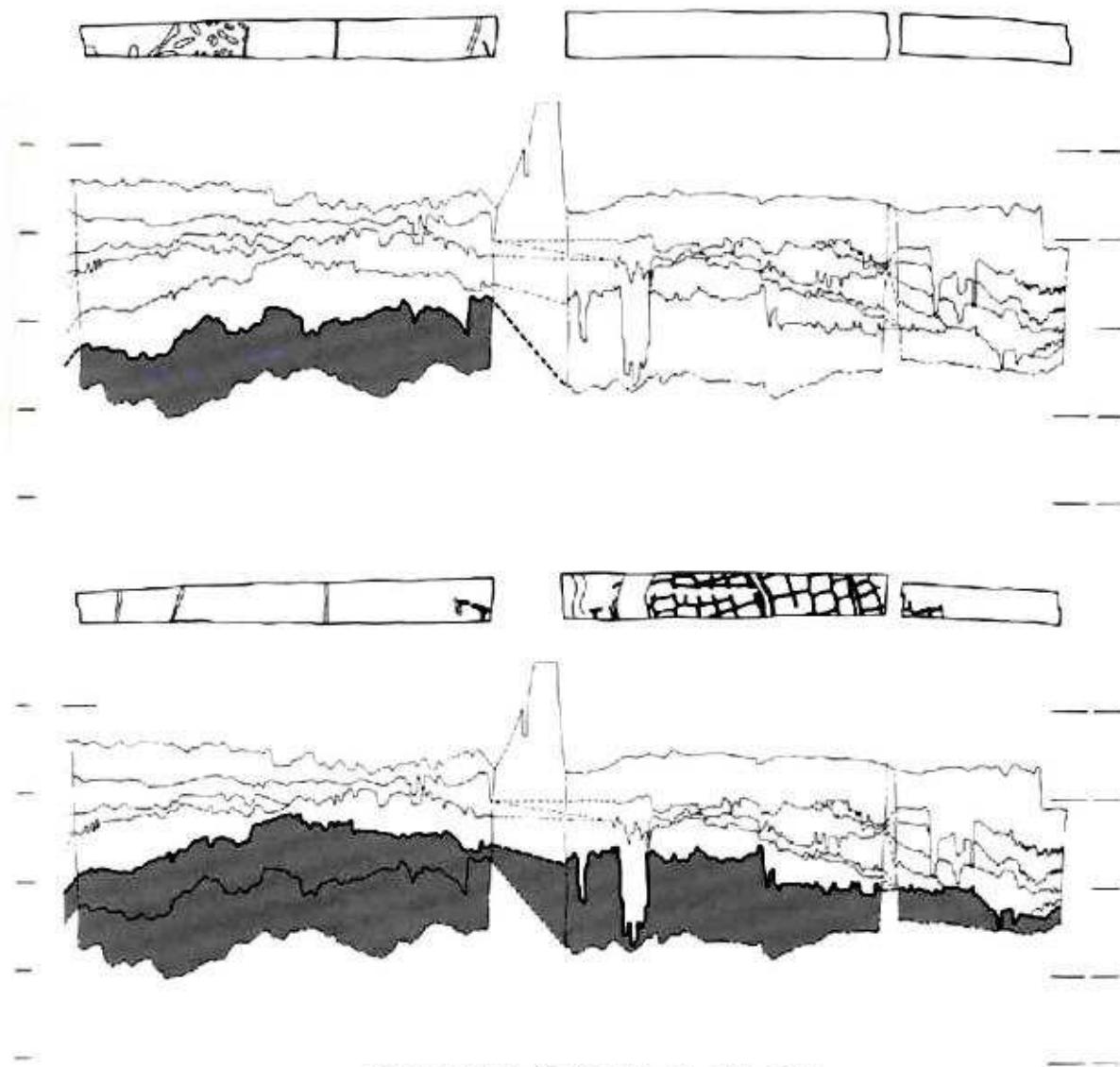


第282図 第Ⅰ期・第Ⅱ期の遺構（1区～3区）

2. 遺構の変遷

第Ⅰ期

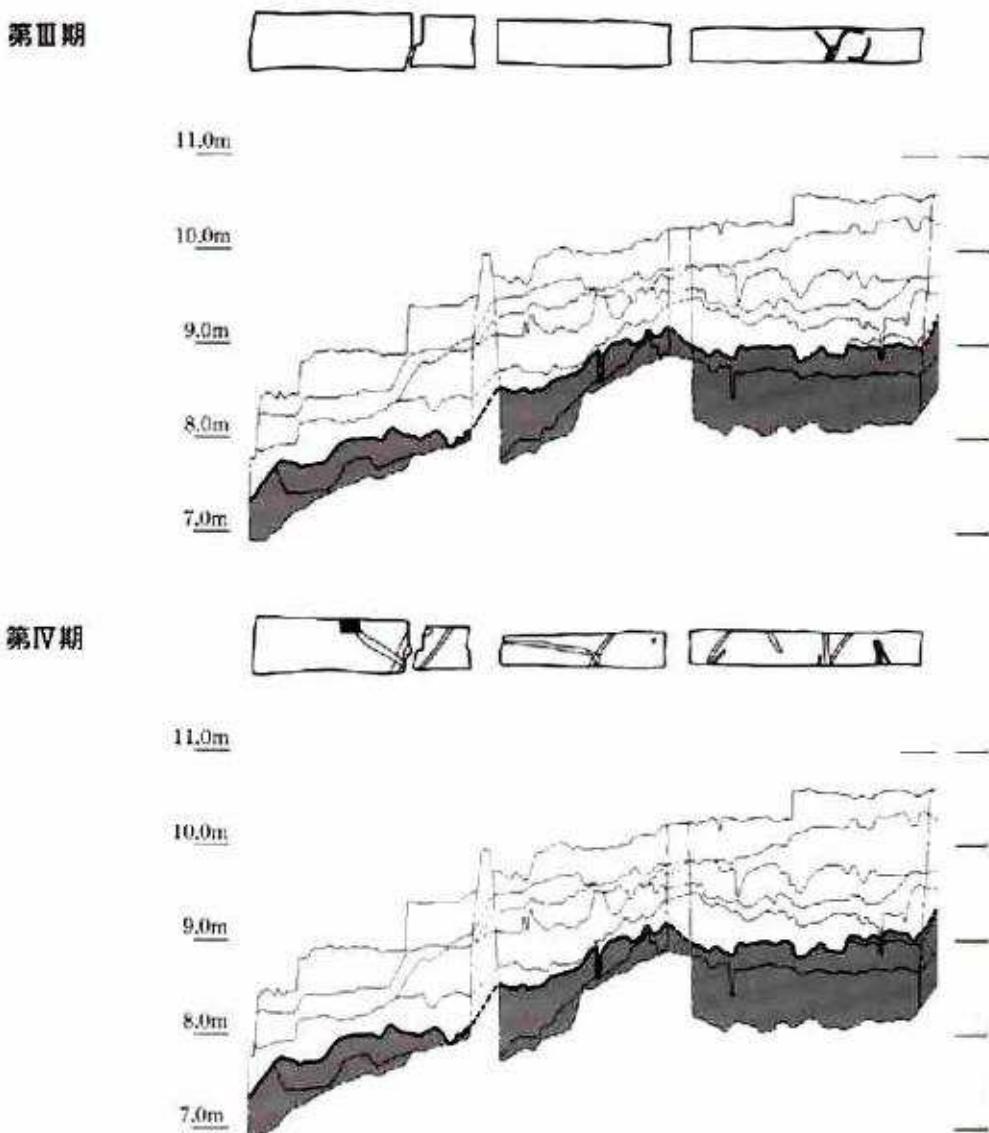
- 範囲** 4・5区第5面のみが該当する。他の地区については、平面的にも、土層観察においても対応する面を確認することはできなかった。
- 遺構** 柱穴・土壙群および溝を検出した。
- 土壙群については、第6章第2節において検討したように、墓域をなすものと考えられる。
- 景観** 上記の状況から、柱穴などが検出されているが、墓域が主体をなす。墓域については、微高地の中央部ではなく、西側へわずかに傾斜した箇所、つまり微高地の縁辺部に築かれている。
- 時期** 当面に伴う土器から、弥生時代中期（弥生中期1・弥生中期2）に位置付けられる。



第283図 第Ⅰ期・第Ⅱ期の遺構（4・5区～7区）

第Ⅱ期

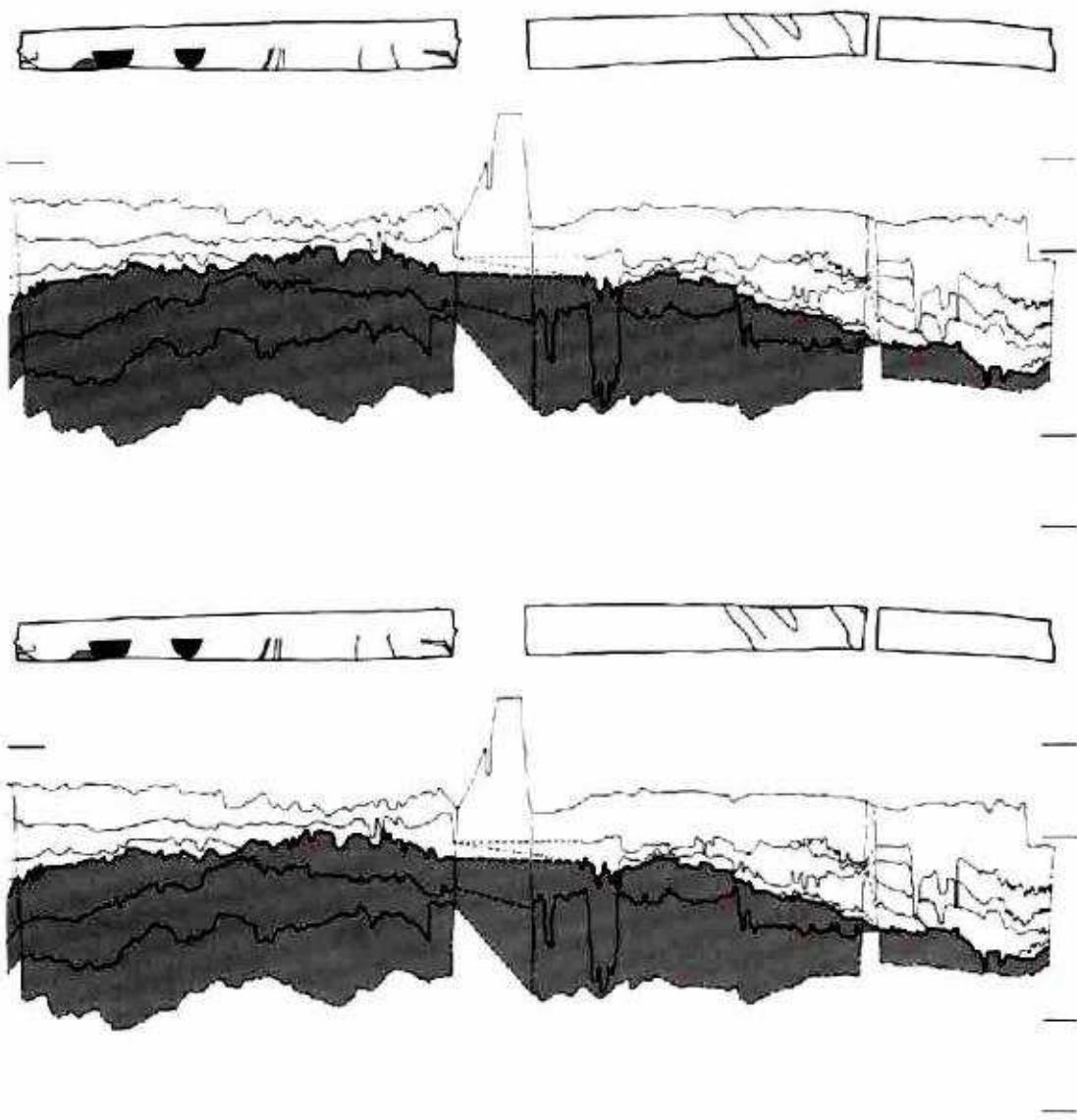
- 範囲** 2区から7区まで広がる。
- 遺構** 大きく2地区に分かれる。
一つは、2区東半部から3区西半部にかけての地区で、両地区で竪穴住居跡2棟(SH01・SH02)を検出している。もう一つは、4・5区東端部から7区かけての地区で、水田跡を検出している。
一方、両地区に挟まれた3区東半部から4・5区東部にかけては、微地形的には微高地の中央部にあたるにもかかわらず、溝状遺構以外に目立った遺構はなく、空閑地的様相を示している。
- 景観** 微高地の尾根部分を挟んだ西側に居住域が、東側には生産域が広がっており、その中間部は空閑地となっている。ただし、この空閑地については、畠地等の可能性が考えられる。
- 時期** 2区および4・5区に伴う遺物から、弥生時代後期初頭（後期第1段階）に位置付けられる。



第284図 第III期・第IV期の遺構（1区～3区）

第III期

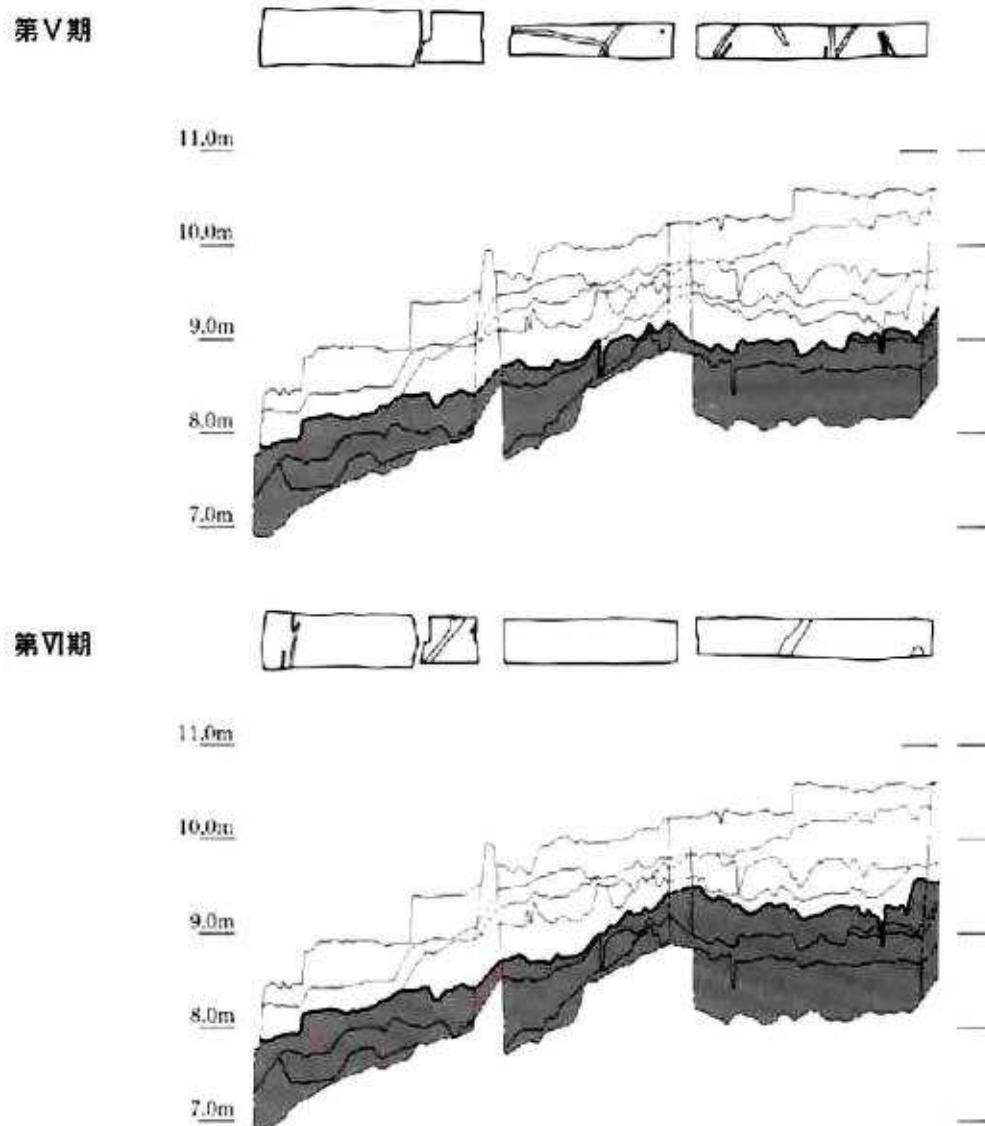
- 範囲** 3区から6区にかけて遺構が広がる。
- 遺構** 当期になると集落の中心は4・5区に移る。竪穴住居跡を3棟（SH03～SH05）検出している。また、建物を復元できなかったが、柱穴を数多く検出している。一方、4・5区に隣接する3区と6区においては、溝状遺構をいくつか検出したにとどまる。特に6区で検出した溝状遺構については、人工的な溝というより、自然流路に近い。3区で検出した溝状遺構については、その性格は不明である。
- 景観** 微高地の中心部にあたる4・5区が居住域となり、その西側・東側の3区・6区は居住域の周縁的様相を示している。
- 時期** 4・5区で検出した竪穴住居跡の時期から判断して、弥生時代後期前葉（後期2）と考えられる。



第285図 第Ⅲ期・第Ⅳ期の遺構（4・5区～7区）

第Ⅳ期

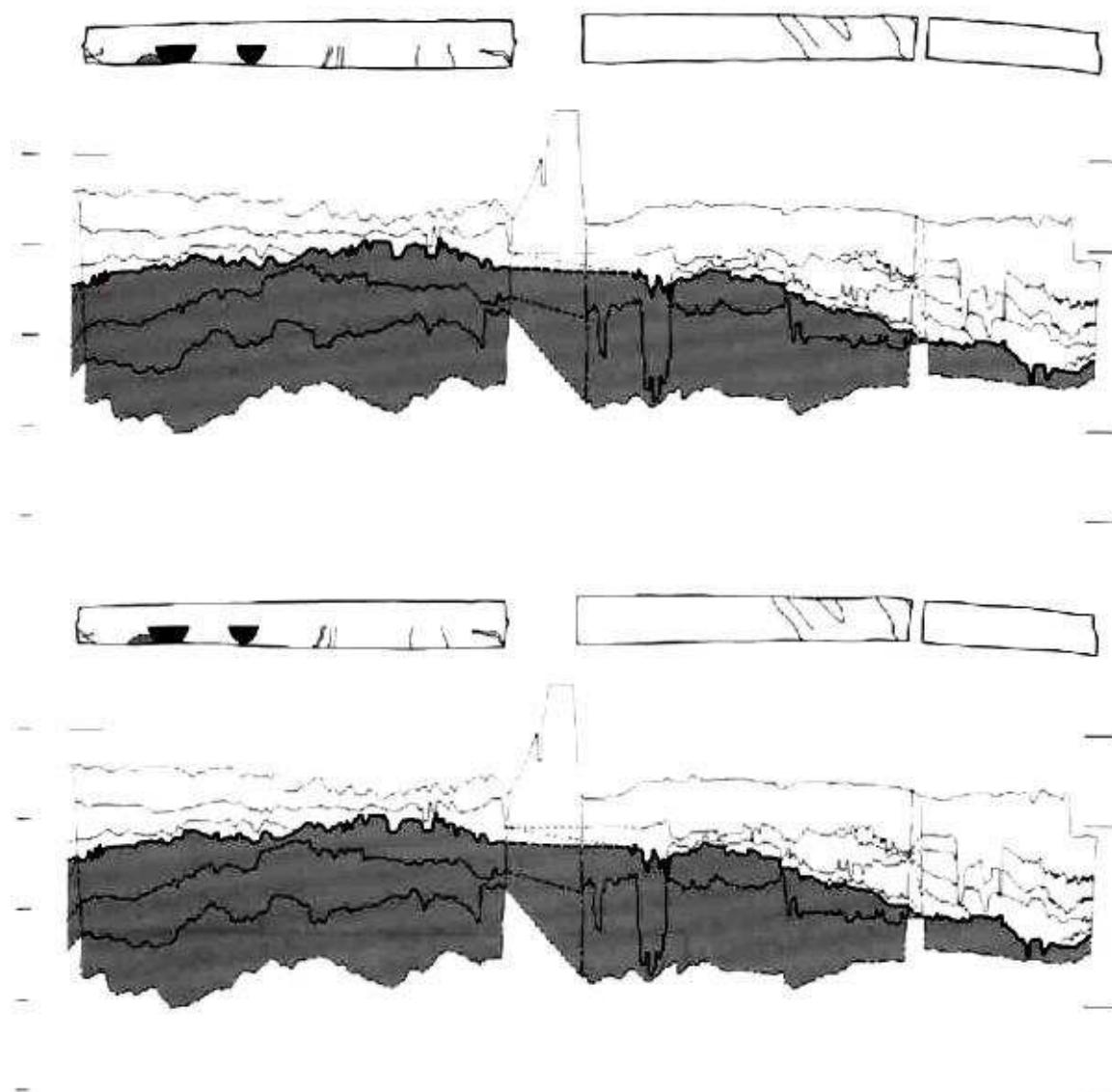
- 範囲** 1区から6区まで広がり、はじめて1区に遺構が認められるようになる。ただし、4・5区と6区においては、検出面は第Ⅲ期と同じである。
- 遺構** 当該期においても、集落の中心は微高地の中心にあたる4・5区と考えられる。ただし第Ⅲ期と検出面が同じため、どの遺構が具体的に該当するのか明確にできない。検出した遺構のなかに切り合い関係が認められることから、いくつかの新しい遺構が該当するものと考えられる。よって、SH03を切るSH04も、当該期に位置付けられる可能性が高い。3区から1区にかけては溝状遺構を中心となる。いずれも小規模な遺構である。このなかで、2区で検出したSD28・SD29から発見されたと考えられる土器が多量に出土した。なお、1区で掘立柱建物跡を1棟検出しているが、集落の中心を示すものではないと考えられる。6区においても、第Ⅲ期から変化は認められない。
- 景観** 4・5区が集落の中心となり、1区・3区は周縁部的様相を示している。
- 時期** 主に2区の遺構に伴う土器から判断して、後期前葉（後期2）に位置付けられる。



第286図 第V期・第VI期の遺構（1区～3区）

第V期

- 範囲** 2区から6区かけて遺構が広がる。4・5区と6区については第IV期同様、同じ検出面である。1区および7区では、調査区南面の断面観察では対応する層を確認できたが、平面的には検出できなかった。
- 遺構** 第IV期に対して、1区において新たな堆積により遺構がなくなる以外は、第IV期と全く同じである。したがって、遺構に関しては変化は全く認められない。ただし、第IV期との比較において、2区・3区の遺構の中に切り合い関係が認められる。よって、この切り合い関係において新しい遺構については、当該期に位置付けられるのではないかと考えられる。4・5区についても同様である。
- 景観** 第IV期と大きな変化は認められない。
- 時期** 時期についても、第IV期と大差ないものと考えられる。



第287図 第V期・第VI期の遺構（4・5区～7区）

第VI期

範囲 1区から6区にかけて遺構がひろがる。4・5区と6区については第V期から引き続き同じ検出面である。

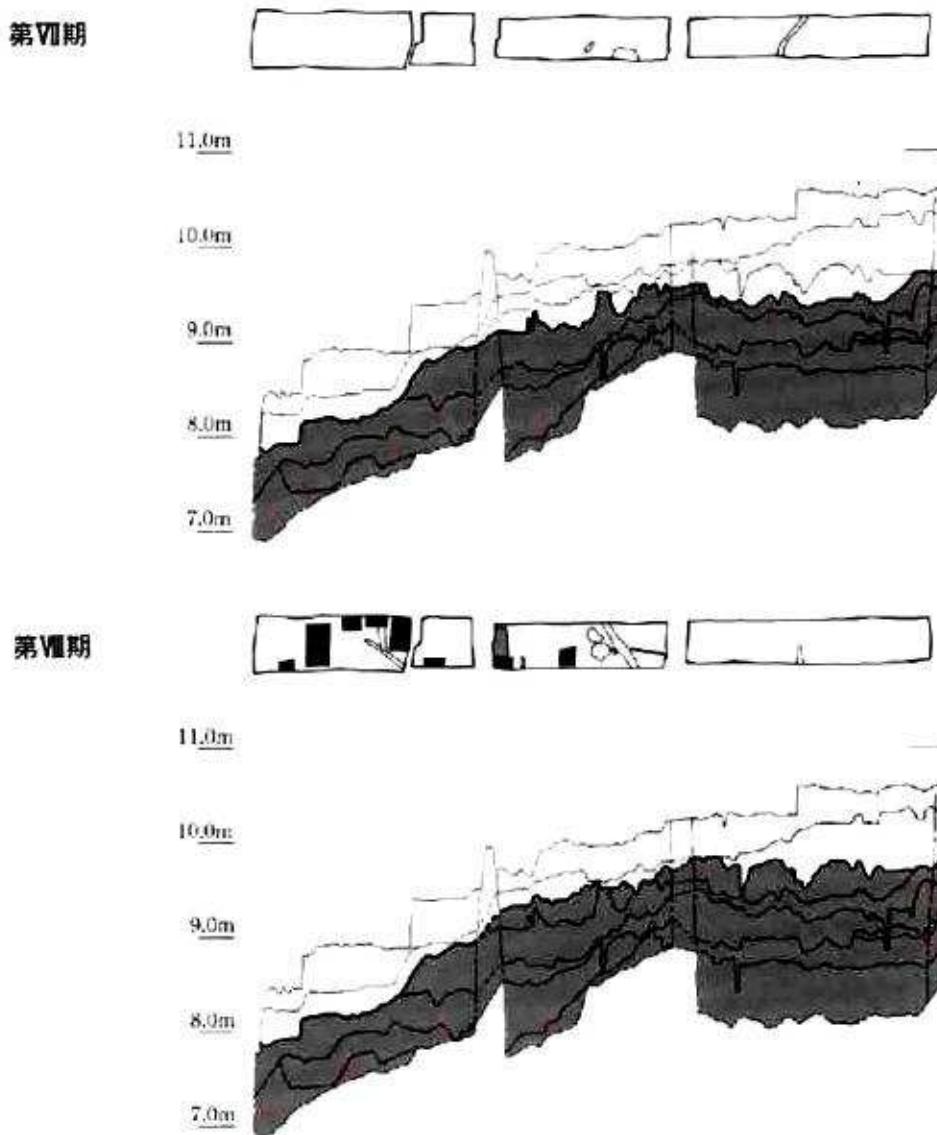
また、2区においては、調査区南側の断面観察において当該期に対応する面を確認できたが、平面的には検出できなかった。

遺構 1区・3区とも溝状遺構を検出したにとどまる。いずれも小規模な溝で、遺物の出土量もわずかである。

4・5区の遺構については、具体的に当該期に該当する遺構を指摘することは困難である。一部の住居跡が当該期に位置付けられる可能性を考えらる。

景観 第V期同様、4・5区が集落の中心に位置付けられ、他の地区についてはその周縁部に位置付けられる。

時期 3区第4面の遺物が後期2～3を示していること、4・5区第3面の最も新しい遺物が後期3に位置付けられていることから、弥生時代後期前葉～中葉（後期2～3）に位置付けられる。



第288図 第VII期・第VIII期の遺構（1区～3区）

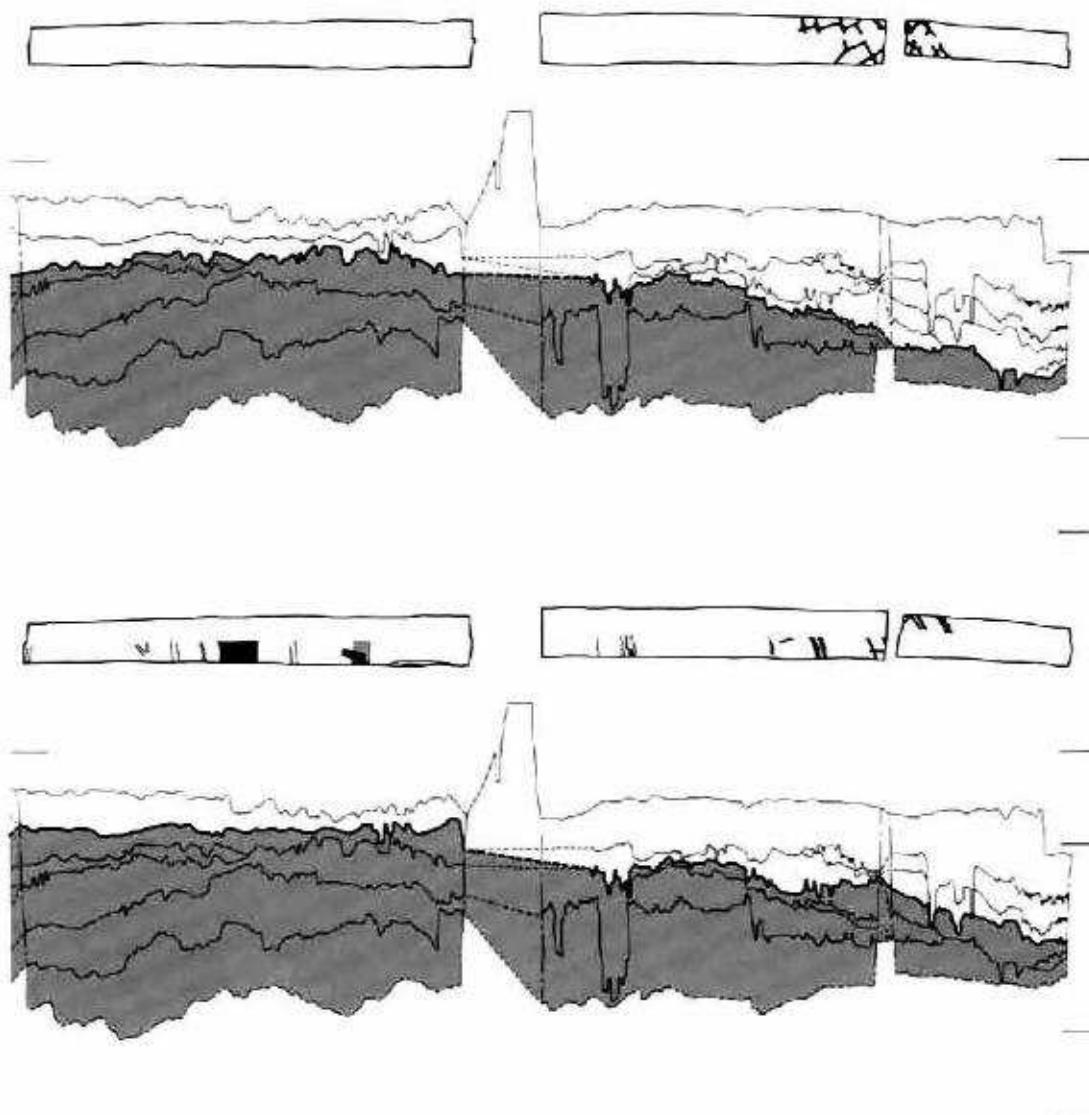
第VII期

範囲 2区から7区にかけて遺構が広がる。1区については、調査区南側の断面観察において当該期に対応する面を確認できたが、平面的には検出できなかった。

遺構 2区で土壙、3区で溝状遺構、6区から7区にかけて水田跡を検出した。この他4・5区では、燒甕に伴う大量の土器が出土したが、遺構は全く検出されなかった。また、3区でも4・5区と同様、燒甕に伴う大量の遺物（土器溜まり出土遺物）が出土している。

景観 当該期においては、集落つまり中心部は認められない。微地形的には4・5区東側にその中心があるが、そこからは遺構は検出されていない。そしてこの微高地の東側（6区～7区）に水田域が広がる。一方西側においては、わずかに溝状遺構・土壙を検出したのみで、集落の周縁部となっている。また、3区および4・5区において認められた土器溜まりについても、集落の周縁的様相を示すものと考えられる。

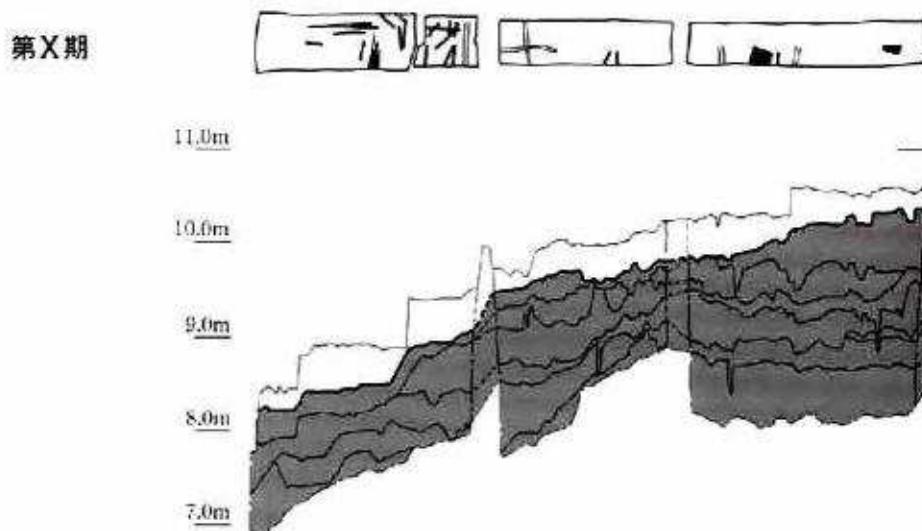
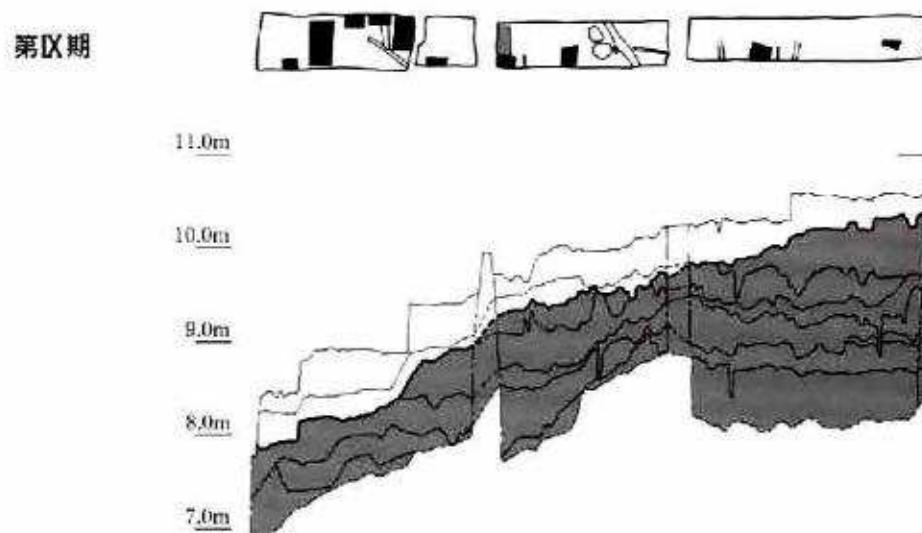
時期 3区および4・5区土器溜まり出土土器から判断して弥生時代後期中期（後期3）に位置付けられる。



第289図 第4期・第5期の遺構（4・5区～7区）

第4期

- 範囲** 当該期になって初めて1区から7区までの全域に遺構が広がる。
- 遺構** 当該期の中心は1区から2区にあたるとみられ、掘立柱建物跡を9棟検出した。一方、微地形的にみて中心にあたる4・5区では溝状遺構を数条検出したにとどまる。そして、6区・7区において、遺存状況は良好とは言いがたいが、水田跡を検出した。
- 景観** 微地形的には微高地の縁辺部にあたるが、1区～2区に中心が認められる。前章第3節で検討したように、集落というより官衙的性格の強い建物群と考えられる。
- これに対して微高地の中心部に位置する4・5区については、柱穴等も検出されており、集落の中心部に近いものと考えられる。また、3区で検出した掘立柱建物跡については、1区～2区のそれと極軸方向が異なり、柱穴が小規模であることから、性格を異にするものと考えられる。一方、6区・7区は生産域となっている。
- 時期** 1区～3区の建物跡、および1区から4・5区で出土した遺物から判断して、古墳時代末～奈良時代と考えられる。



第290図 第IX期・第X期の遺構（1区～3区）

第IX期

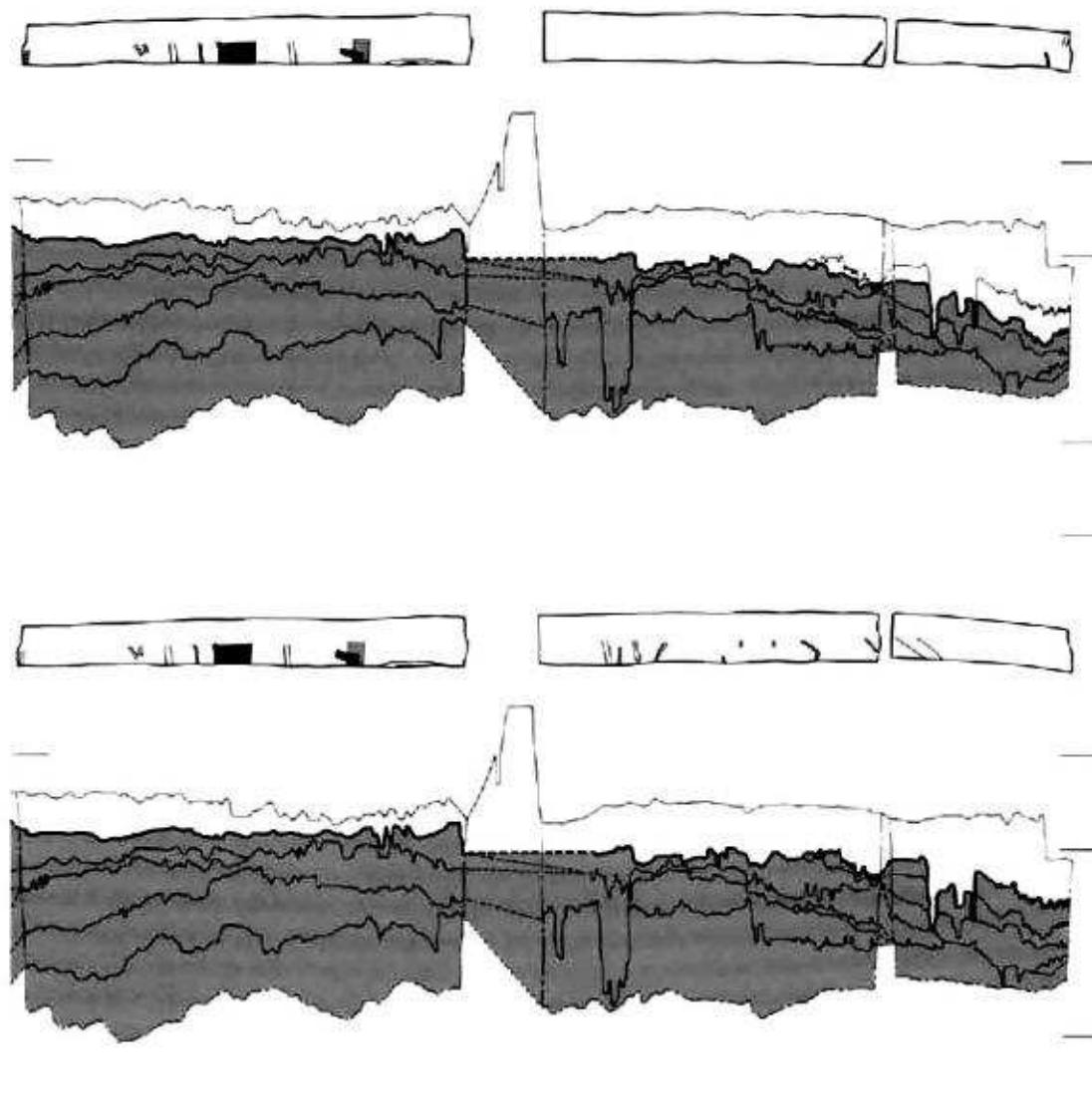
範囲 1区から7区までひろがるが、6区・7区において変化が認められる以外は、第VII期と全く同じである。

遺構 6区・7区における変化は、6区においては、水田跡がなくなり溝状遺構1条のみになり、水田跡は7区に限られてくる。7区の水田跡についても、残存状況は極めて悪く、唯野1本のみである。

1区～3区の官衙的建物群の中にも建物相互の切り合い関係が認められる。したがって、この新しい方の建物が当該期に位置付けられる可能性も考えられる。また、4・5区においても掘立柱建物が認められる。官衙的建物とは異なり、より一般的な居住域に位置付けられるものと考えられる。

景観 基本的には第VII期と同じである。ただし、第VII期に比べて微高地が東側へ拡大したため、生産域がVII期の6区・7区から7区へと移動する。

時期 1区及び4・5区に住む遺物から判断して、奈良時代以降に位置付けられる。



第291図 第IX期・第X期の遺構 (4・5区～7区)

第X期

- 範囲** 1区から7区までひろがる。3区、4・5区においては変化は認められず、第IX期と全く同じである。
- 遺構** 1区では、水田耕作に伴う耕溝を検出した。2区で検出した溝についても、耕溝に近い性格のものと考えられる。6区でも溝状遺構を検出したが、耕溝とは異なり、その機能を明確にすることはできない。7区でも溝を検出した。当該期のなかでは最もしっかりした溝である。
- 景観** 微地形的に調査前の地形に近くなる。微地形的には4・5区を中心となろうが、孤立柱建物跡は当該期には該当せず、集落の周縁部に位置付けられる。生産域は6区、7区を中心であったものが、1区から2区に変わる。逆に6区、7区については、生産域ではなくなるが、居住域まではいかなく、集落の周縁部に位置付けられる。
- 時期** 今回の調査で最も新しい時期、平安時代後半～鎌倉時代初頭に位置付けられる。耕溝から古い遺物が出土しているが、実際には最も時期的に新しい遺構と考えられる。

第2節 地形環境の変化と土地利用の変遷

1. はじめに

第1章において、第1期から第X期の10段階にわたる遺構の変遷をみてきた。この変遷は、数次にわたる土石流の堆積による地形環境の変化による影響が大きい。そこで、主な土石流の堆積による地形環境の変化を画期として捉え、その変化ごとに土地利用がどのように変化したのかについてまとめてみたい。なお、当節をまとめるにあたって、現地にて御指導頂いた高橋一学氏によるところが大きいことを断っておく。

2. 地形環境の変化と土地利用の変遷

ステージ1

地形環境	4・5区東側を中心とした当地に最初の土石流（土石流1）が堆積し、下内膳遺跡の基盤となる微高地が形成される。
土地利用	墓域として利用される。
時期	第1期にあたる。したがって、微高地が形成されたのはこれ以前と考えられる。

ステージ2

地形環境	第1ステージで形成された微高地の東西両縁部に2つの土石流が堆積し、微高地が東西方向に広がる。一つは、3区を中心に2区から4・5区西半部にかけての土石流（土石流2a）である。もう一つは、6区を中心に4・5区東縁部から7区にかけての土石流（土石流2b）である。
土地利用	土石流2aにより西側に微高地が挿入し、堅穴住居跡に代表される集落本体が形成される。一方、土石流2bが堆積した東側においては、水田域が形成される。
時期	第II期が対応する。

ステージ3

地形環境	前ステージ土石流2aが堆積したわずか西側、ほぼ重複する位置に新たな土石流（土石流3）が堆積する。2区、3区を中心に1区から4・5区西半部の範囲である。これにより、当微高地がさらに西側に拡大する。
土地利用	なお、後述するように、当ステージにおいて遺構が5期からなることからも明らかのように、平面的に限定された小規模な土石流堆積が幾度かにわたり繰り返されている。
土地利用	微高地の中心、4・5区では堅穴住居跡に代表されるように、集落本体が形成される。これに対して、微高地の西側は、溝状遺構以外は顯著な遺構は認められず、廃棄された土器が日立つなど集落の周縁部として位置付けられる。
時期	微高地の東側については、前ステージから継続して水田域であったと考えられるが、土石流が頻繁に堆積したため、当ステージ最終段階の水田遺構しか遺存していなかった。

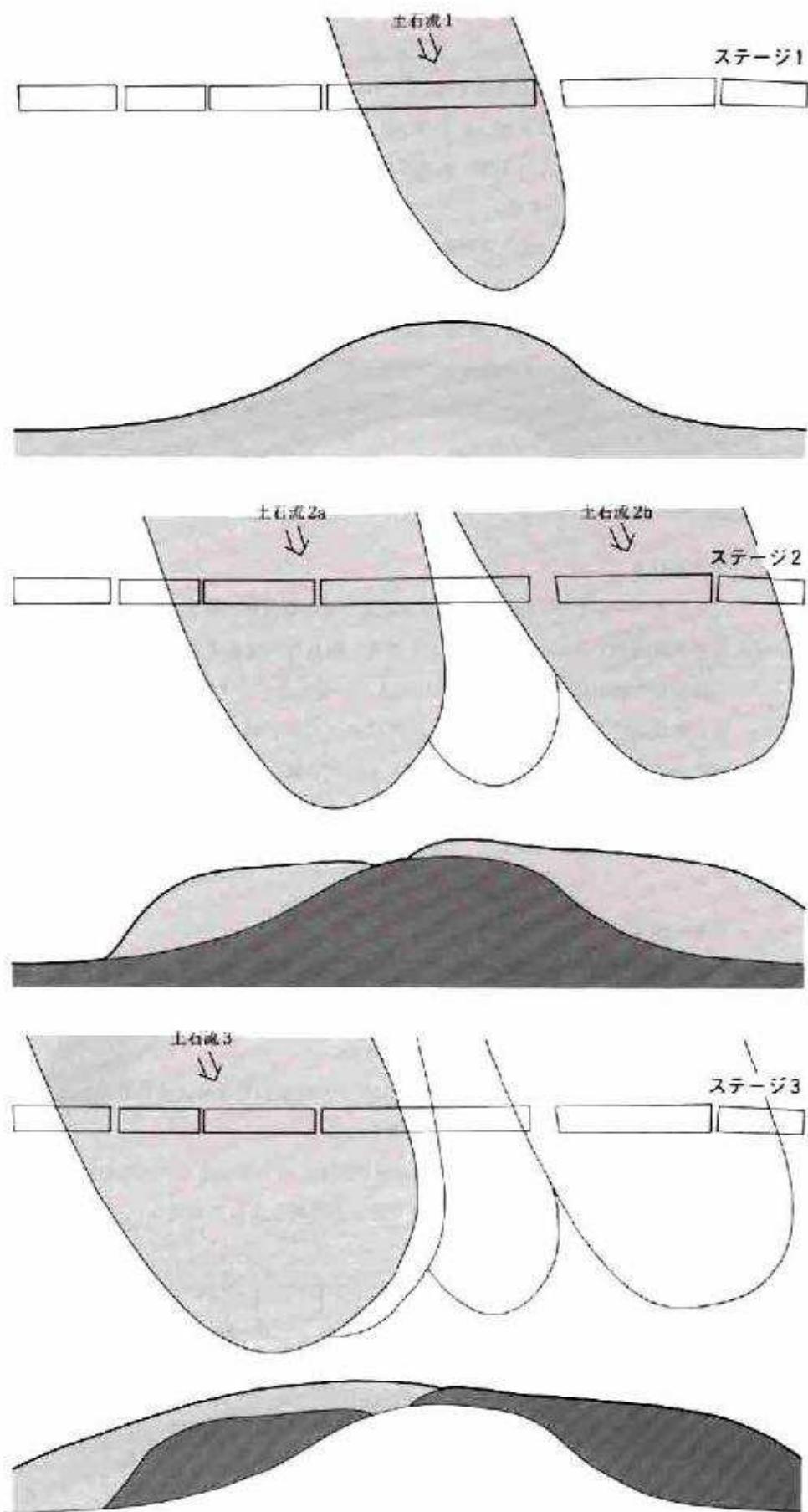


図292 地形環境の変化模式図(1)

ステージ4

地形環境	新たに2つの土石流が堆積する。一つは、2区を中心に1区から3区にかけて堆積するもの（土石流4a）である。もう一つは、6区東半から7区にかけて堆積するもの（土石流4b）である。これにより、当遺跡の立地する微高地が東西に拡大するとともに、微高地の平坦化が進行する。
土地利用	土石流4a上には、掘立柱建物を中心とした建物群が形成される。第6章第3節で考察したように、宮衛的性格を帯びた建物群である。また土石流4bの堆積により微高地が東へ拡大するため、水田域も東側へ移動していく。 一方、土石流4a・土石流4bの堆積後も、微高地の中心は4・5区にあり、掘立柱建物跡を検出している。1区を中心とした掘立柱建物群とは内容が異なるため、一般的な居住域を示すものと考えられる。
時期	第VII期・第IX段階が対応する。

ステージ5

地形環境	第4ステージまでに形成された土石流扇状地の扇端部が洲本川により段丘化する。また、当扇状地西側においても小谷による浸食・段丘化作用を受ける。
土地利用	段丘化の直接的影響を見ることはできない。しかし、1区から2区にかけて耕溝がみられ、生産域となる。3区から4・5区にかけては、前ステージから引き継ぎ掘立柱建物に代表される集落が営まれる。一方、6区・7区においては、生産域にかわって、構造造構に代表されるように、集落の周縁的様相を帯びてくる。
時期	第X段階が対応する。

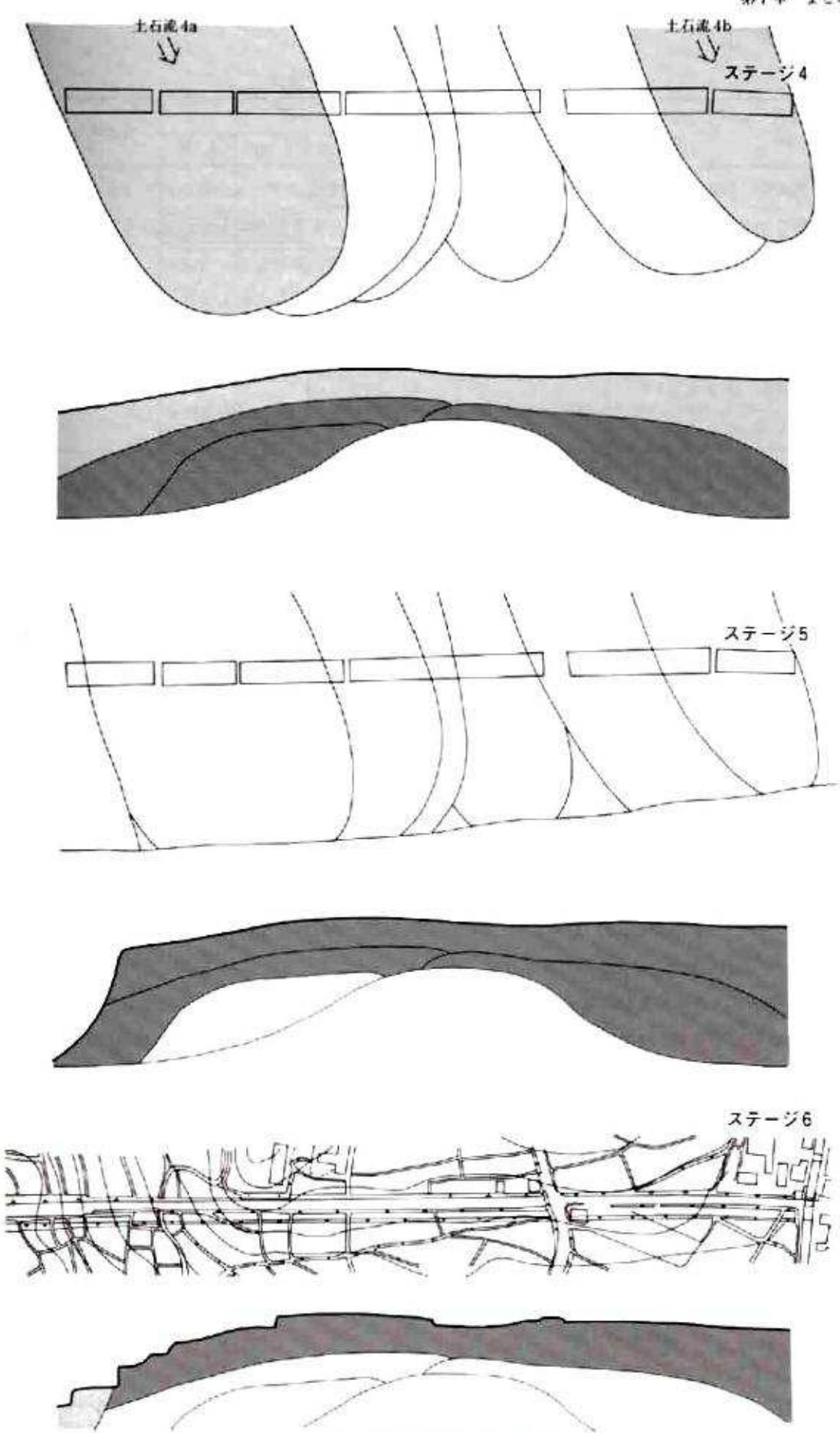
ステージ6

地形環境	前ステージと大きな変化は認められない。調査直前の地割りが形成される。特に、当扇状地の段丘化した箇所については、その後の浸食・崩落・開墾等により段丘崖が小規模化していく。当扇状地の西側に顕著である。
土地利用	全域が生産域となる。ただし、大正11年から昭和41年までは淡路鉄道が通り、当扇状地の一部が削平を受ける。その後は農道となる。
時期	4・5区第1面から近世初頭の唐津焼が出土していることから、この時期以降に転化したものと考えられるが、具体的にいつから生産域となったかについては明確にしれない。

3. 小結

以上、ステージ1からステージ6の6ステージにわけて、地形環境の変化に対する土地利用の変遷を概観してきた。大きくみると、4次にわたる土石流の堆積が認められ、この堆積を期に土地利用の変化を見ることができた。ただし、この間に小規模な土石流が幾度と堆積していたことも無視できない。

以上の状況をまとめたのが、第121表である。



第293図 地形環境の変化模式図(2)

第121表 ステージ別土地利用の変遷表

ス テ ー ジ 時 期	地 区							地形環境の変化
	1 区	2 区	3 区	4・5区	6 区	7 区		
1 第Ⅰ期（弥生中期）	—	—	—	■■■■	—	—	土石流1の堆積	
2 第Ⅱ期（弥生後期1）		■■■■	■■■■	■■■■	■■■■	■■■■	土石流2の堆積	
第Ⅲ期（弥生後期2）				■■■■				
ス テ ー ジ 3 第Ⅳ期（弥生後期2）				■■■■				
第Ⅴ期（弥生後期2）				■■■■			土石流3の堆積	
第Ⅵ期（弥生後期2～3）				■■■■				
第Ⅶ期（弥生後期3）				■■■■				
ス テ ー ジ 4 第Ⅷ期（古墳末～奈良）	■■■■■■■■		■■■■	■■■■	■■■■	■■■■	土石流4の堆積	
第Ⅸ期（奈良時代）	■■■■■■■■		■■■■	■■■■	■■■■	■■■■		
5 第Ⅹ期（平安・鎌倉）	■■■■■■■■						南・西側の段丘化	
6 調査前	■■■■■■■■							



3. 地形環境変化の歴史的位置付け

高橋 学氏は、瀬戸内海臨海部における地形環境分析の結果、縄文海進最盛期以降11ステージの画期が認められるとされている¹⁾。そこで、下内膳遺跡で認められた5ステージの画期が上記の11ステージと対応するかどうか検討してみたい。

- ステージ1　　ステージ5ないし6に対応する。
- ステージ2・3　　ステージ7に対応する。小規模な洪水が繰り返す堆積の少ない時期にあたるとさているようだ。大きな地形環境の変化は認められないが、6期にわたる遺構変遷が認められる。つまり、低速な地形環境の変化が読み取れる。
- ステージ4　　ステージ8に対応する。平坦化が進む段階とされているが、当遺跡においてもこのような傾向が認められる。
- ステージ5　　ステージ9に対応する。
以上から、当遺跡で観察された地形環境の変化は、瀬戸内海臨海平野で認められた変化と一体のものであることが理解できる。

(1)高橋 学「臨海平野における地形環境への変貌と土地開発」『古代の環境と考古学』

第3節 下内膳遺跡における位置付け

今回の調査は、下内膳遺跡の一部を調査したにすぎず、結果として当遺跡が立地する土石流扇状地の中央部を東西方向にトレンチを入れた形となった。第1章で紹介したように、以前から当遺跡の調査が数次にわたって行われ、今回の調査では明らかにできなかった時期の遺構も多く見つかっている。しかし、今回の調査以前の調査地との土層的なつながりをつかむことはできず、前節での分析結果を直接結び付けることは困難である。

そこで、下内膳遺跡全体を視野に入れ、見通しとして今回の調査の位置付けを試みたい。第1章で紹介したように、下内膳の調査は、今回報告する箇所を含めて大きく3地区で調査が行われている。第2次調査・第3次調査そして今回の第4次調査である。そこで、これらの3次の調査を分析対象とする。方法としては、前節で設定したステージを基準に分析していくことにしたい。

ステージ1以前

弥生前期 当遺跡で最も古く位置付けられる遺構は、第2次調査で検出されており、前期新段階まで遡る。溝状遺構が検出されている。集落の中心部とは言いがたく、居住域については未検出である。

土石流1 第2次調査は、4・5区の北側に位置する。したがって、前節の土石流1によって形成された微高地と同じ微高地に位置する可能性も考えられる。この場合、土石流1の堆積が弥生時代前期まで遡ることになる。

弥生中期 第2次調査で第II様式の土器溜まりが検出されている。遺構は未検出であることから、集落の周縁部と考えられる。

ステージ1

景観 第2次調査で土塙および溝状遺構が、第3次調査で方形周溝墓群が、今回の調査で土塙墓・土器棺墓群が検出されている。第2次調査地区は集落の周縁部、第3次調査地区・今回の調査地区は墓域に位置付けられ、居住域・生産域は未検出である。

時期 3地区とも第III様式から第IV様式にかけての遺構で、ほぼ同時期と考えられる。

ステージ2

景観 第2次調査・第3次調査では当該期の遺構は検出されていない。遺構は、今回の調査地区に限られ、前節で検討したように、居住域と生産域が確認されている。

時期 弥生後期初頭に限定される。

ステージ3

景観 第2次調査で居住域およびその周縁部が、第3次調査で居住域およびその周縁部・生産域が、今回の調査で居住域およびその周縁部・生産域が検出されている。

時期 しかし、上記3地区は同時に存在したのではなく、中心となる時間が微妙に異なる。今回の調査地区が弥生後期2～3が中心であるのに対して、第3次調査が弥生後期4、第2調査が弥生後期5が中心となり、居住域が時期ごとに変化している。
この他、第3次調査では古墳時代初頭（布留式期）の集落周縁部も検出されている。

ステージ4

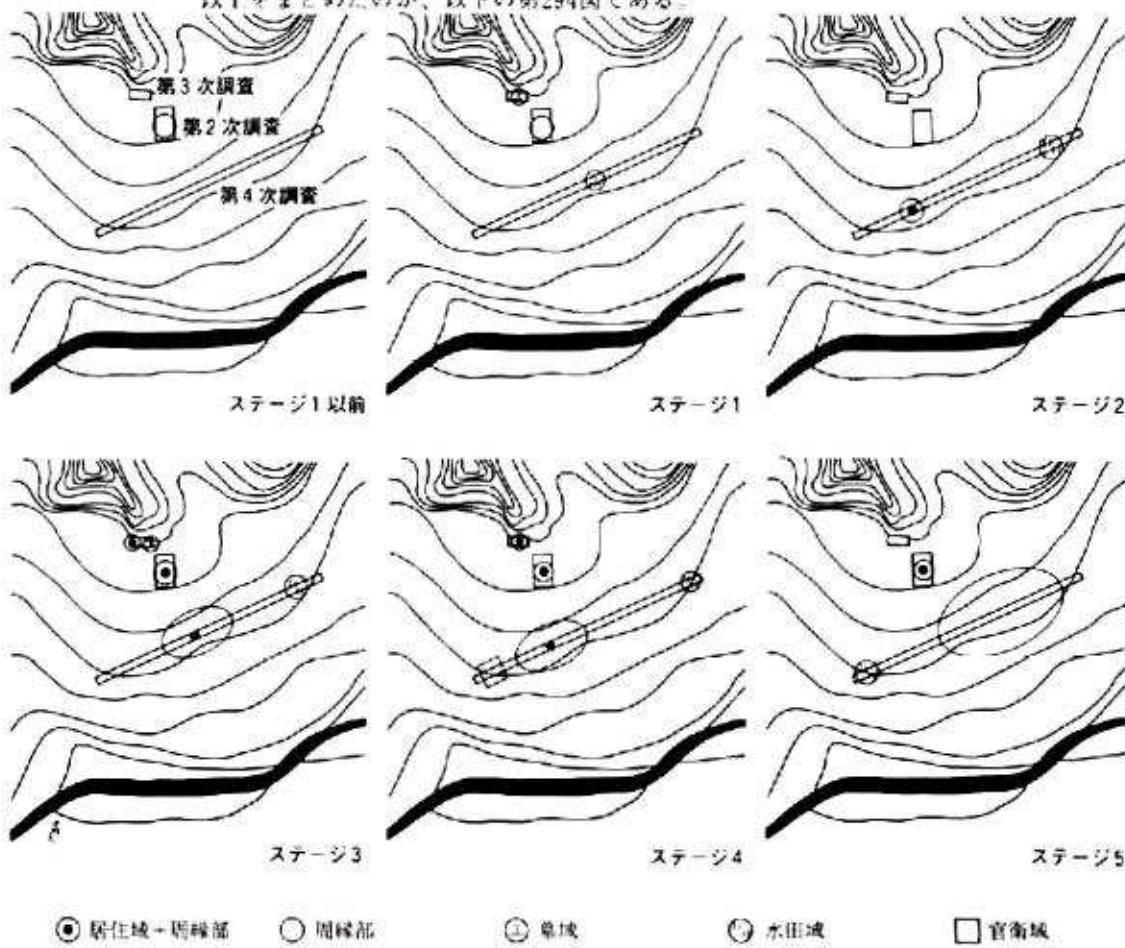
景観 第2次調査・第3次調査で居住域、今回の調査で居住域と生産域が検出されている。今回の調査の居住域については、官衙的色合いが強いものである。

時期 第3次調査は平安時代前半を中心であり、第2次調査・今回の調査と時期的に異なる。

ステージ5

第2次調査で居住域、今回の調査で集落周縁部が検出されている。

以上をまとめたのが、以下の第294図である。



第294図 下内膳遺跡における景観の変遷

3. 小結

以上から、下内膳遺跡は弥生時代前期から始まり鎌倉時代まで、ほぼ絶えることなく続く遺跡であることが明らかとなった。同時に、居住域・墓域・生産域等が弥生時代前期から固定されているのではなく、当遺跡が立地する扇状地内を移動していることが明

らかとなった。そして、その大きな要因となったのが、幾度かにわたる土石流の堆積と考えられる。

ただし、前節でみたような個々の土石流に対する土地利用の変遷を遺跡全体を通してみると、未調査地が多く現時点では困難である。また、今回の調査地と第2次・第3次調査地との層位的関係が不明であるため、第2節での分析には限界があり、今後調査を待つて訂正が必要となろう。

第4節 総括

以上の分析を踏まえ、今回の調査で明らかとなった点を列挙し、まとめとしたい。

- ①下内膳遺跡は土石流崩壊地に立地する。調査は、下内膳遺跡のほぼ中心部を東西方向にトレンチをぬく形で調査したため、地形環境の変化を観察することができ、少なくとも4回の大きな土石流の堆積により崩壊地が形成されたことが明らかとなった。そして、この土石流による地形環境の変化は、瀬戸内海臨海部における地形環境の変化と呼応していることが明らかとなった。
- ②上記の4回の土石流含め、幾度かの土石流の堆積による地形環境の変化の度に、土地利用をこれに対応させている。
- ③上記の行為は、今回の調査では弥生時代中期（第Ⅲ様式）から始まることが明らかとなつたが、下内膳遺跡全体を通しては弥生時代前期に始まる。
- ④今回の調査では、弥生時代中期から鎌倉時代まで10期にわたる遺構の変遷をみることができた。遺構・遺物としては弥生時代後期中葉が中心である。この時期は、これまでの当遺跡の調査においては明らかとなつていなかつた時間であり、一つの大きな成果といえよう。
- ⑤奈良時代の掘立柱建物跡群については、官衙的色合いの強いものであり、今後その具体的な性格をつかむ必要があろうが、下内膳遺跡の歴史的位置付けを行ううえで、重要な発見といえる。

写真図版

図版1 遺跡



1. 洲本平野（東から）



2. 下内膳遺跡遠景
(東から)



3. 下内膳遺跡全景
(東から)

図版2 遺跡



1. 洲本平野（西から）



2. 下内膳遺跡遠景
(西から)



3. 下内膳遺跡全景
(西から)

図版3 遺跡



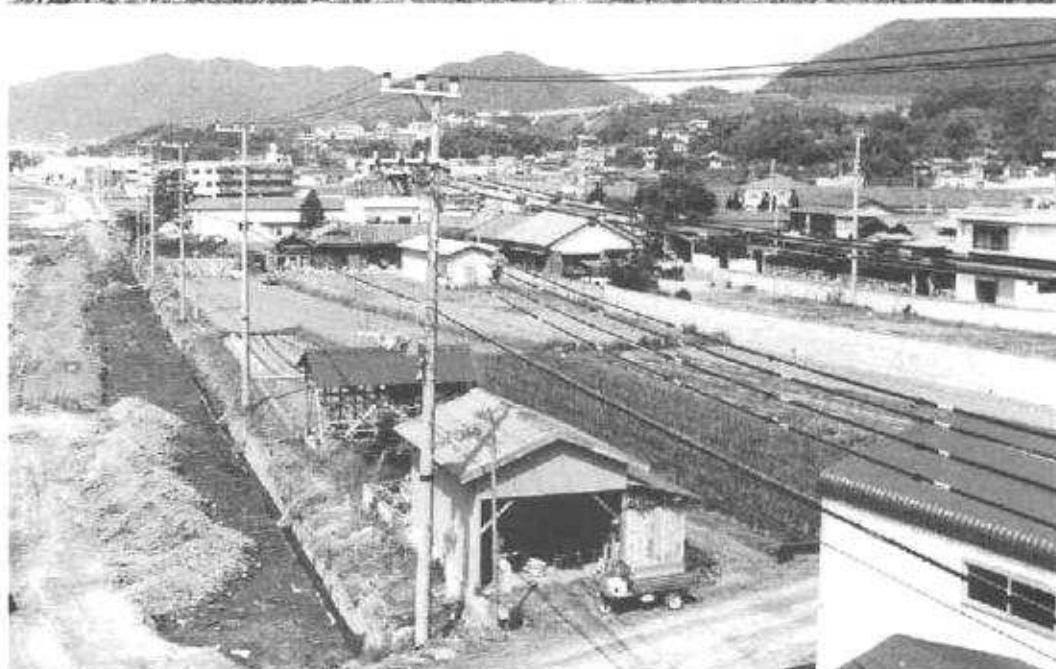
1. 洲本平野（南から）



2. 下内膳遺跡遠景
(南から)



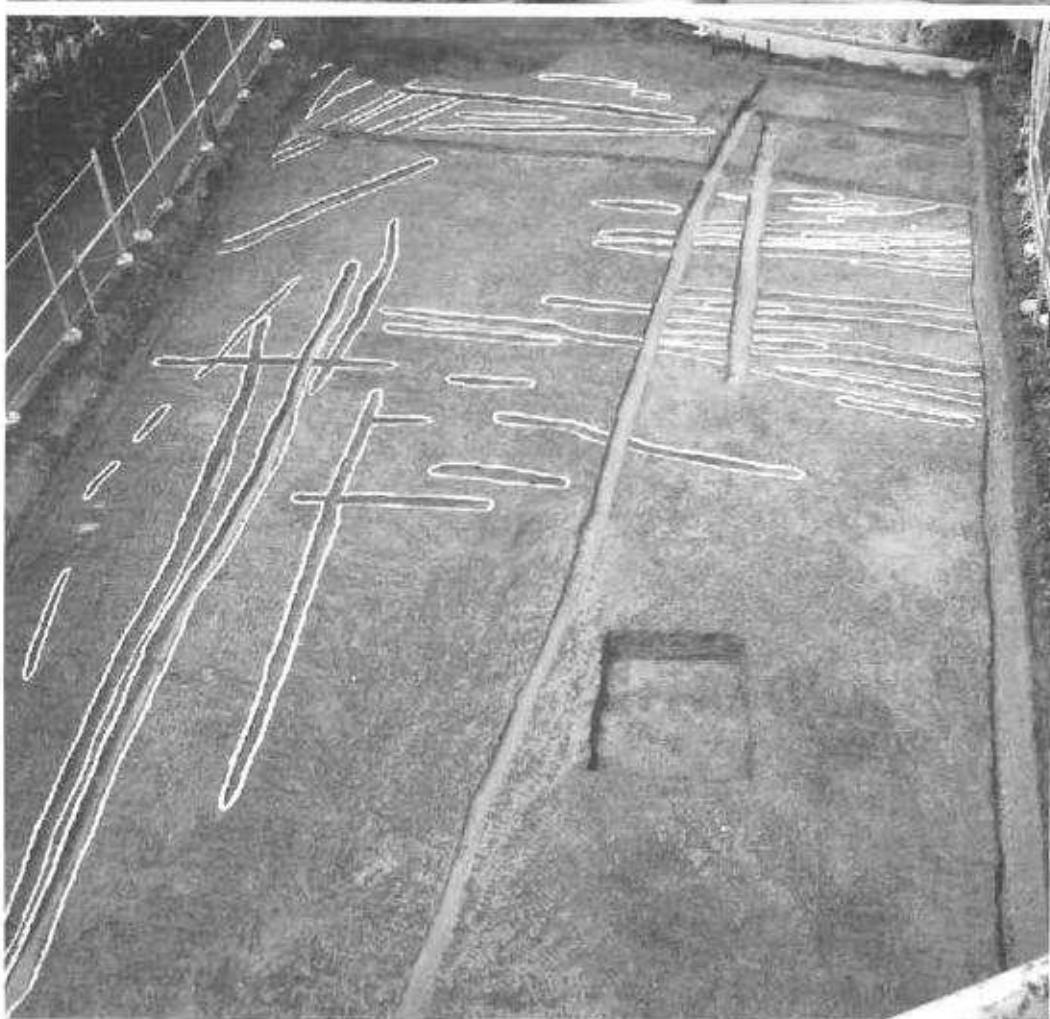
3. 下内膳遺跡全景
(南から)



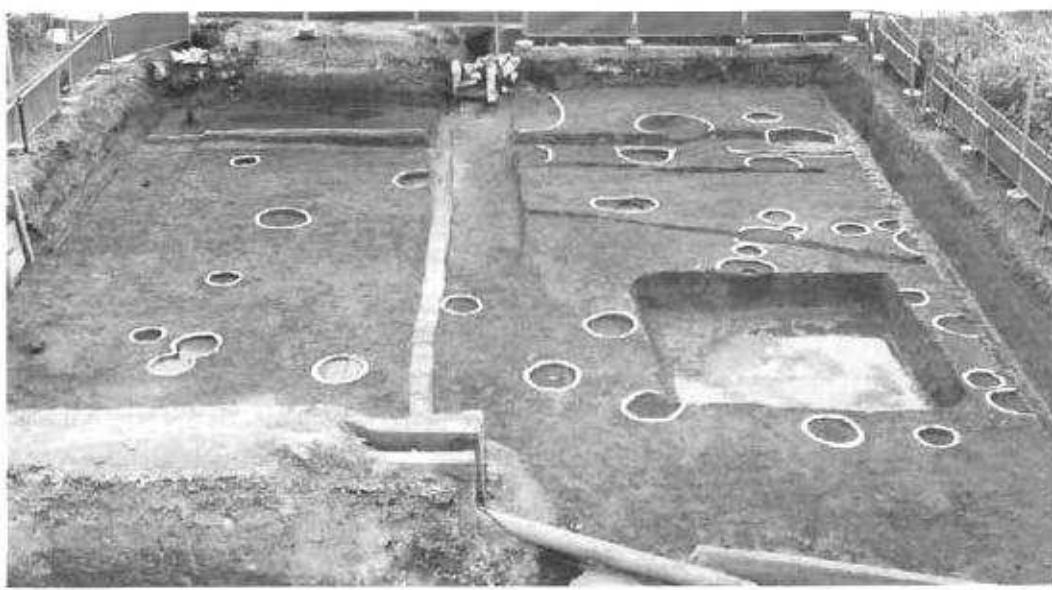
図版5 1区第1面



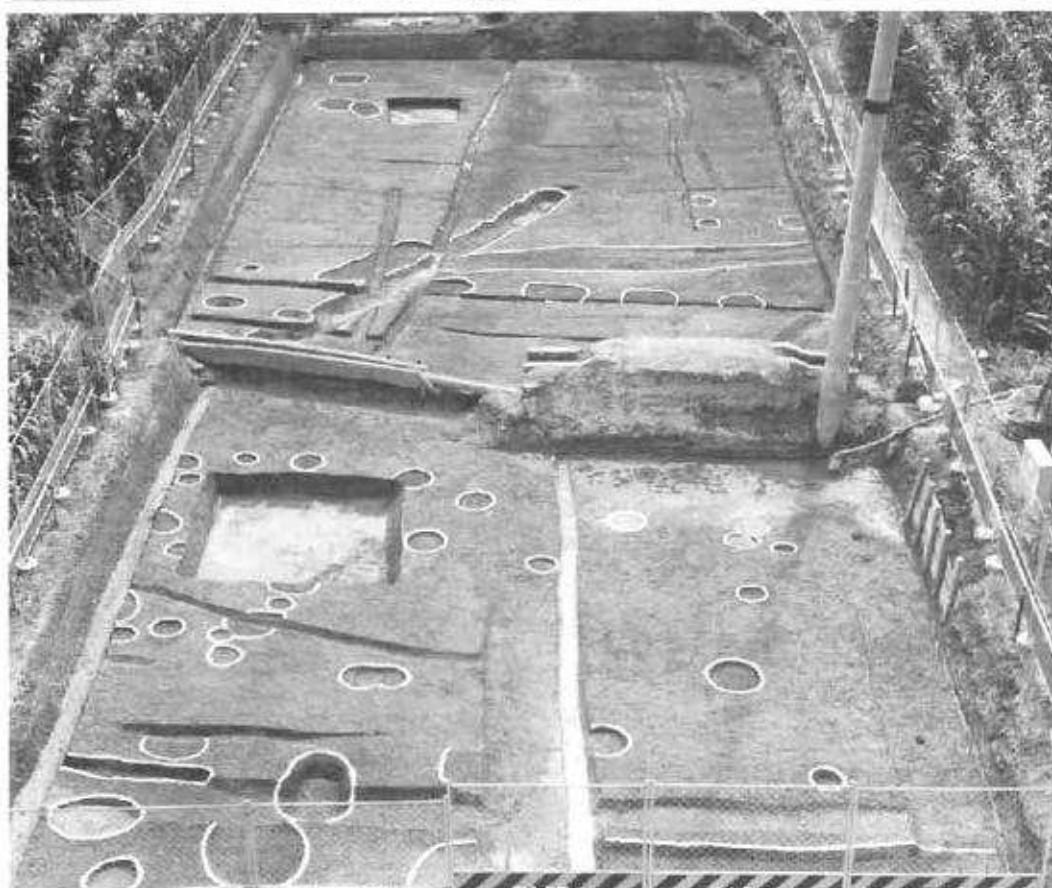
1. 東地区（西から）



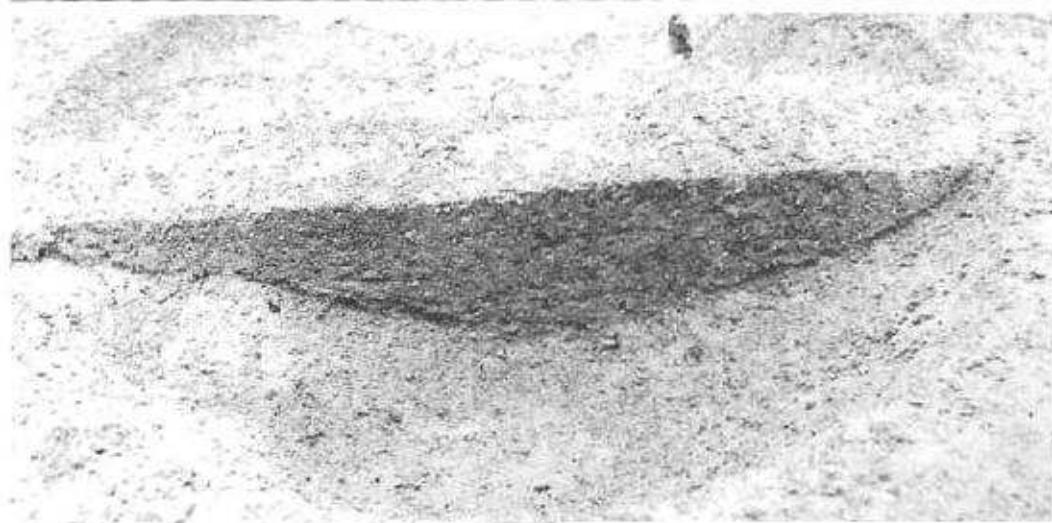
2. 西地区（西から）



1. 東地区（西から）

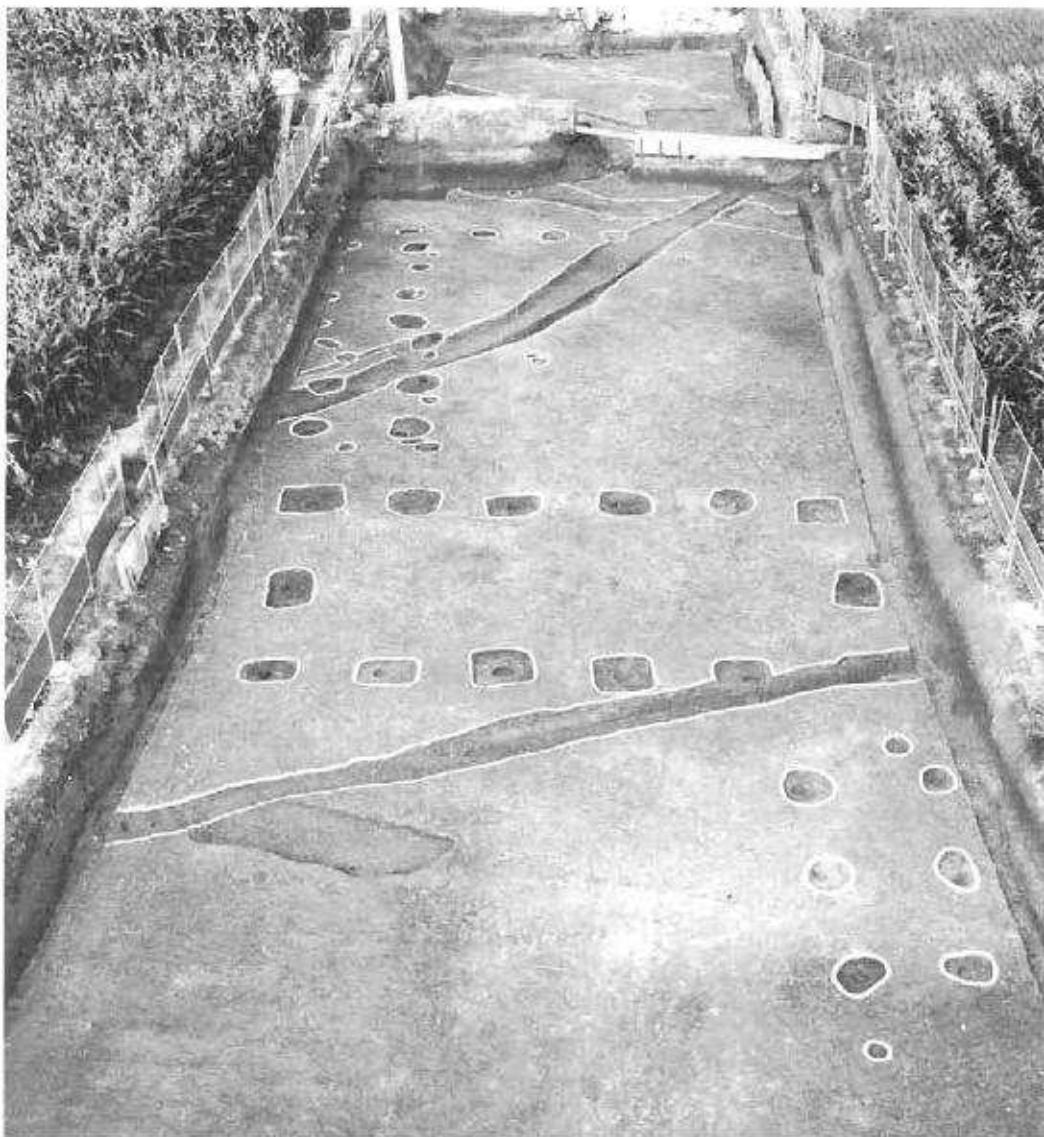


2. 東地区（西から）

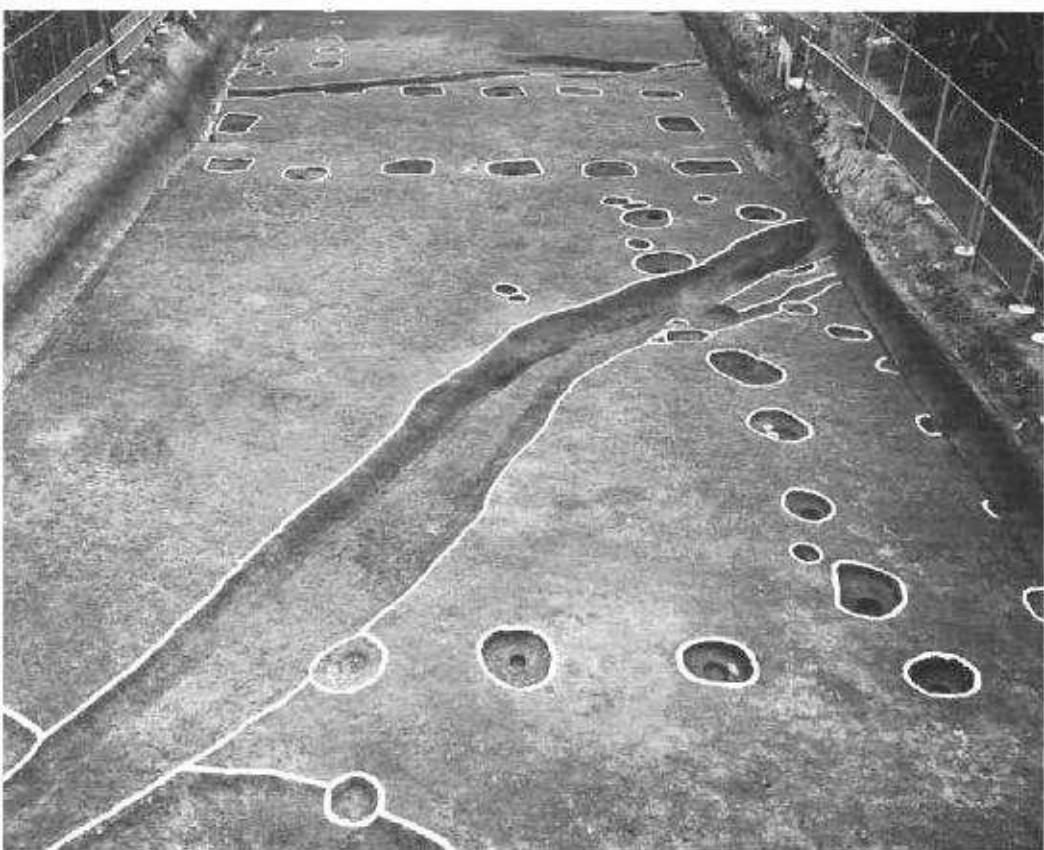


3. SK05（東から）

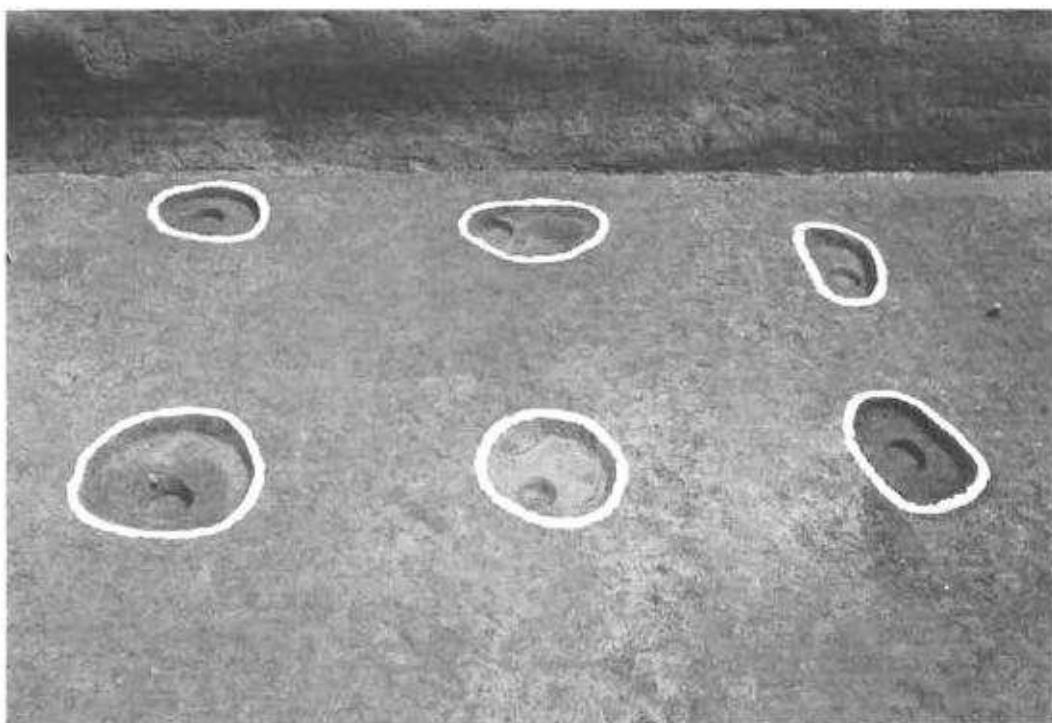
図版7 1区第2面



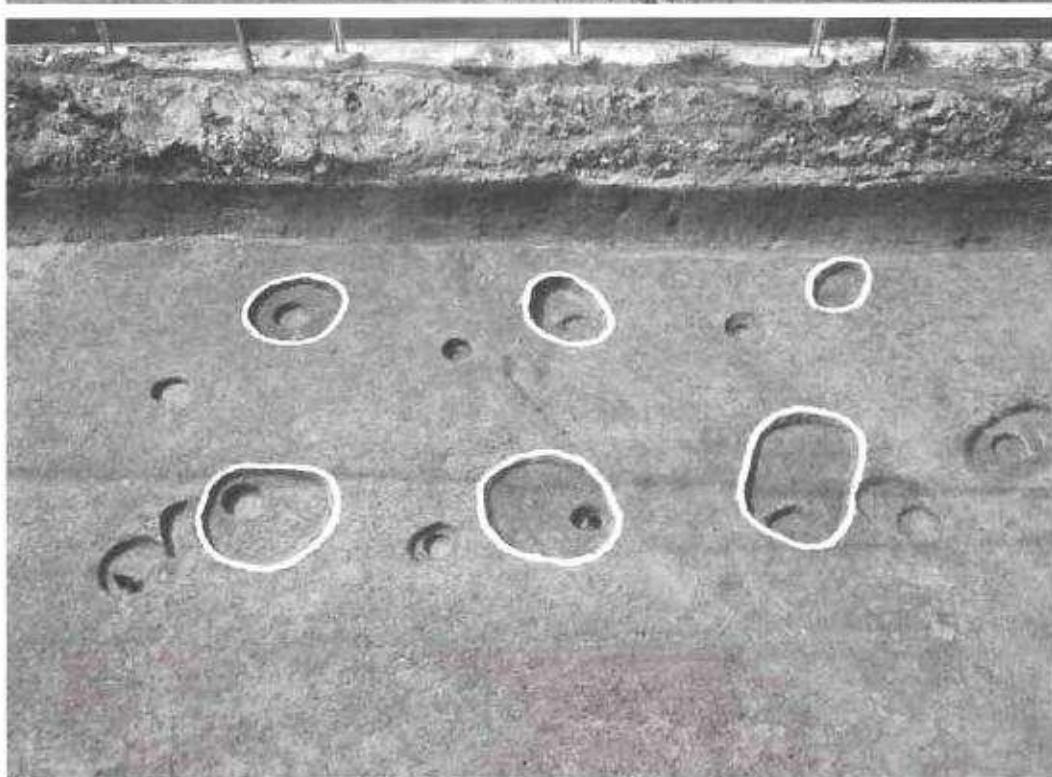
1. SB01~SB04
(西から)



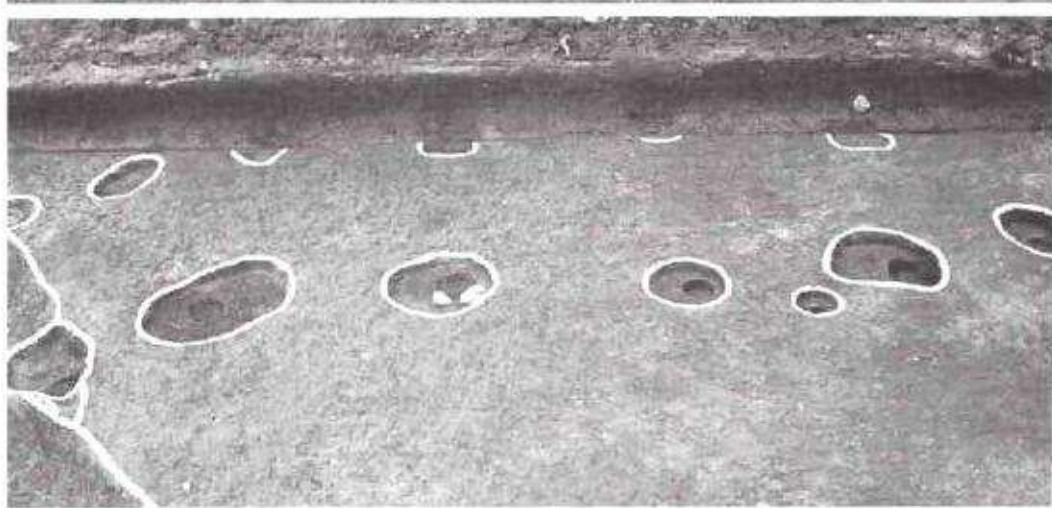
2. SB01~SB04
(東から)



1. SB01 (北から)

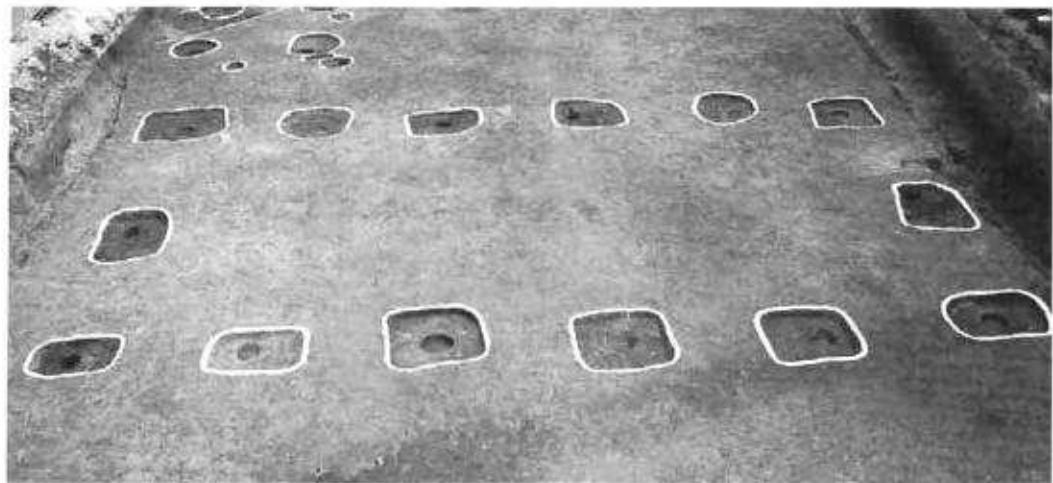


2. SB03 (南から)

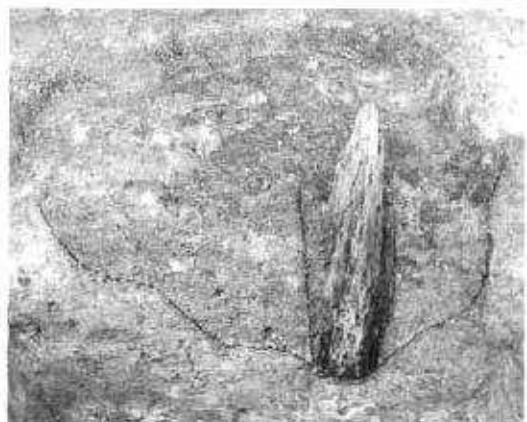


3. SB04 (南から)

図版9 1区第2面



1. SB02 (西から)



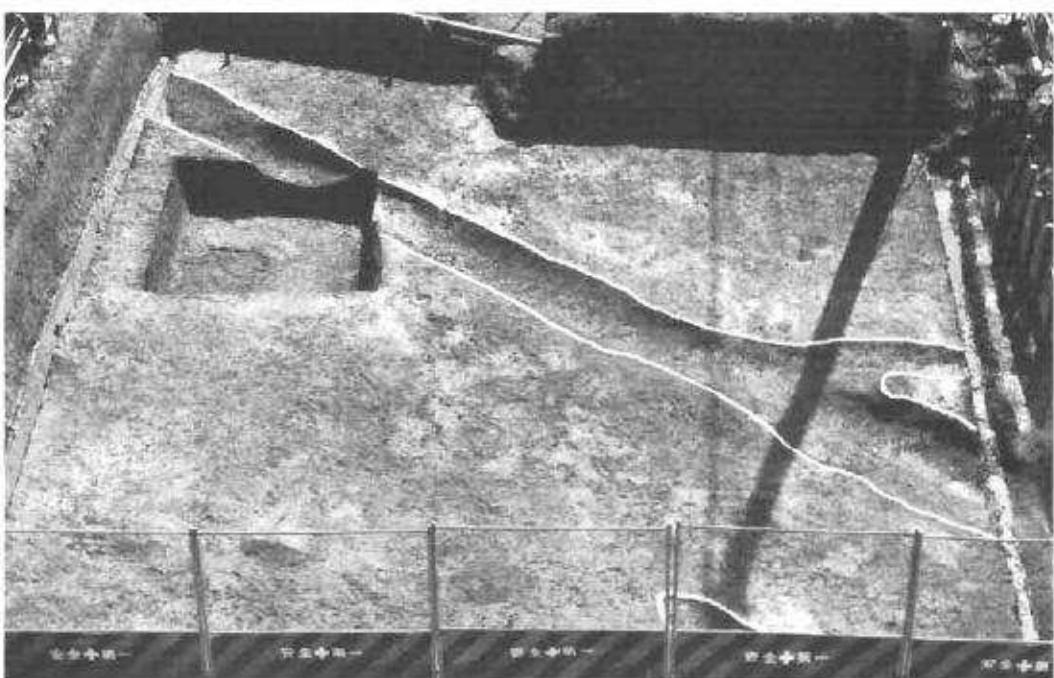
2. SB02 P 4
3. SB02 P 4



4. SB02 P13
5. SB02 P 3



1. SD11(西から)

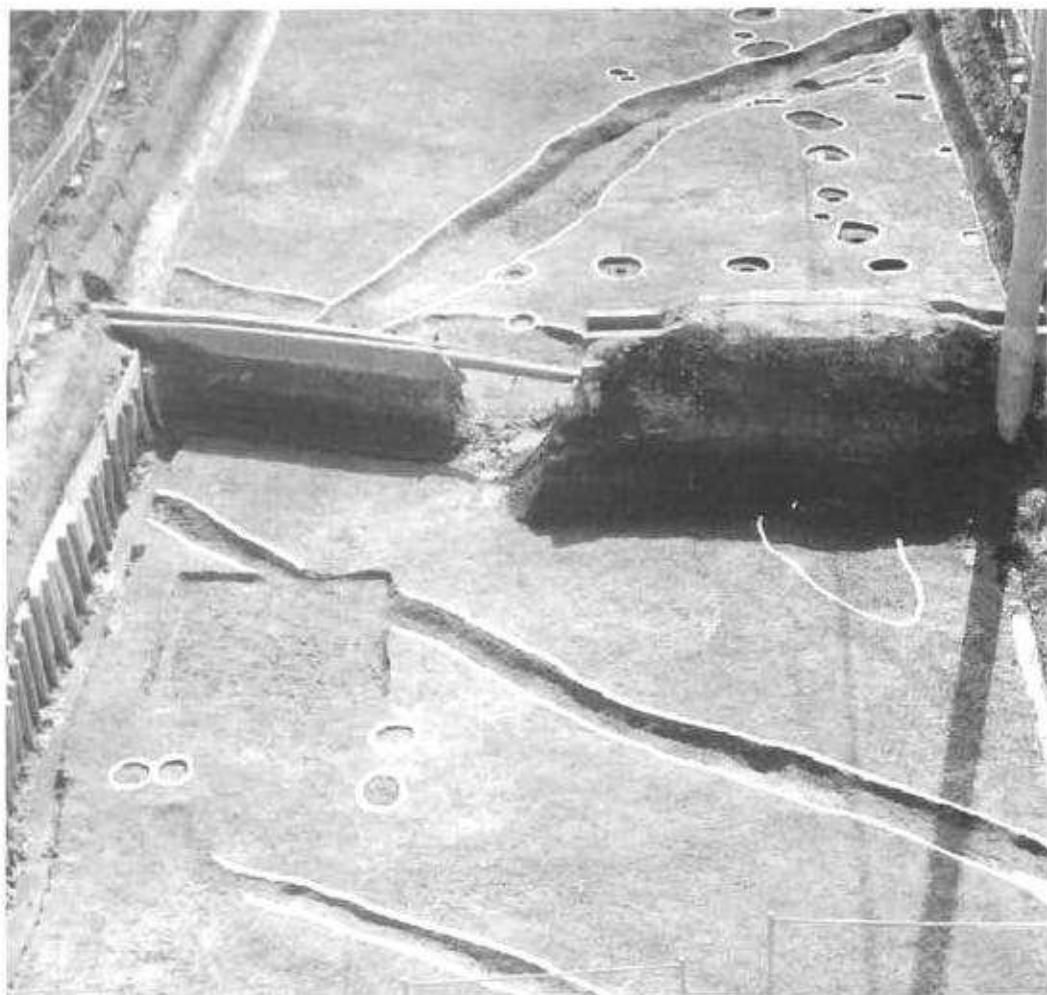


2. SD11(東から)

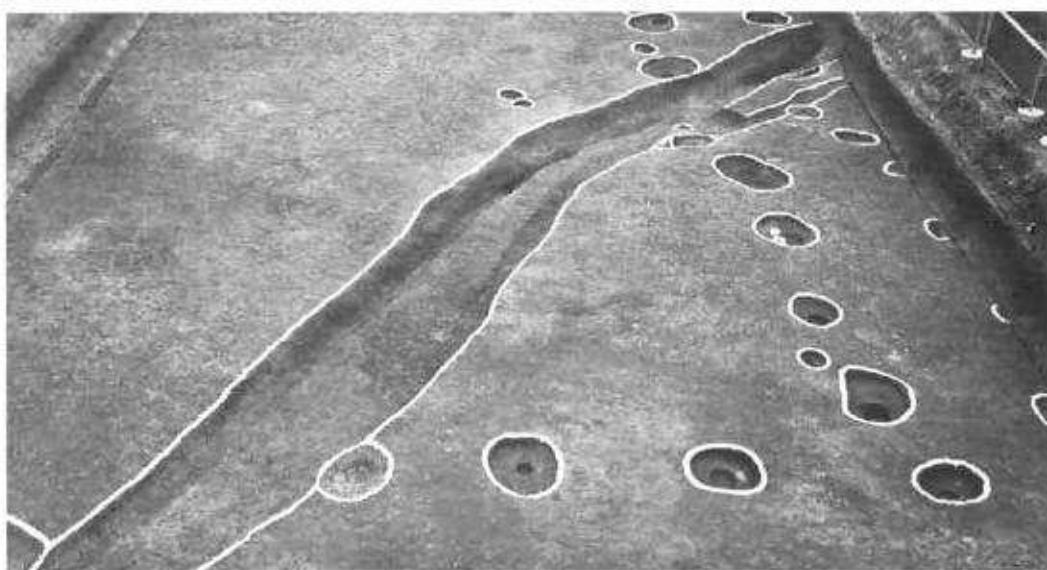


3. SD11断面
(南から)

図版11 1区第4面



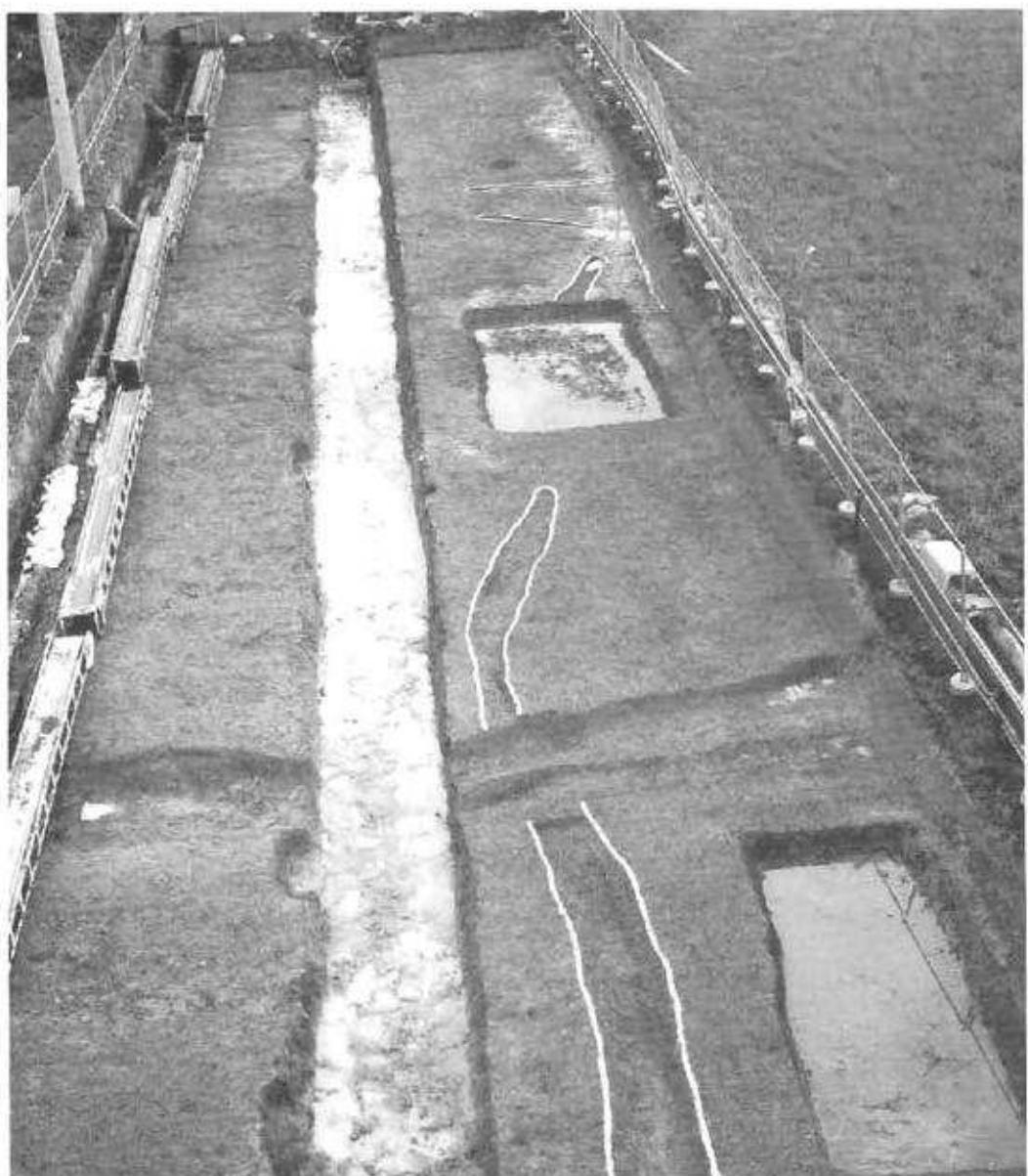
1. 全景（東から）



2. SD14（東から）



3. SD14断面
(南から)

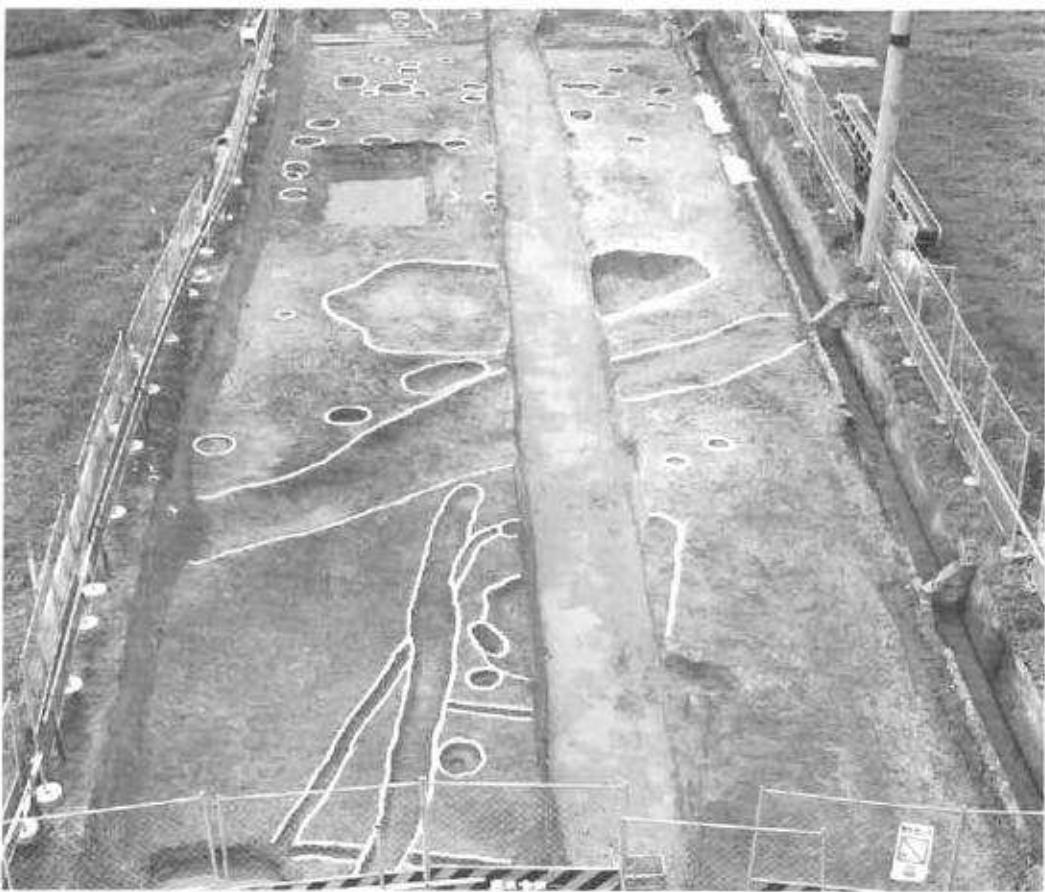


1. 全景(西から)

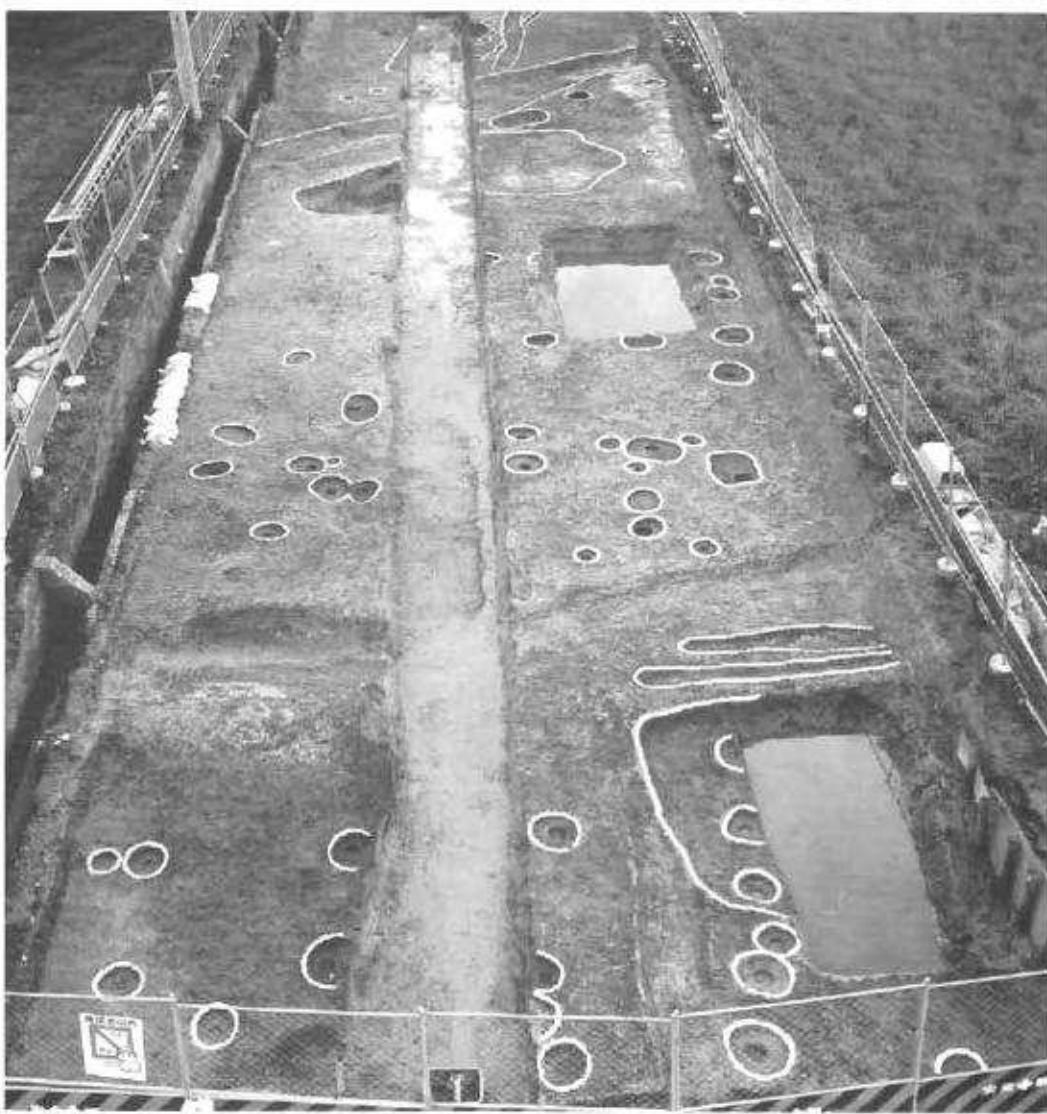


2. 全景(東から)

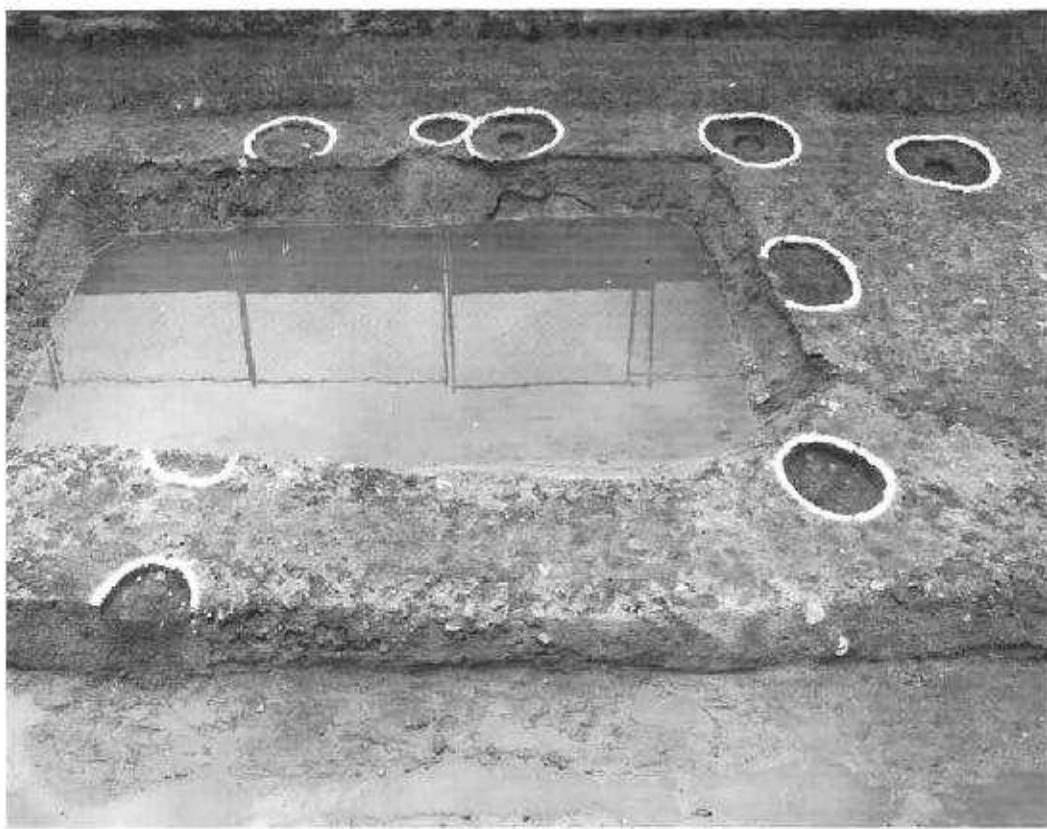
図版13 2区第2面



1. 全景（西から）



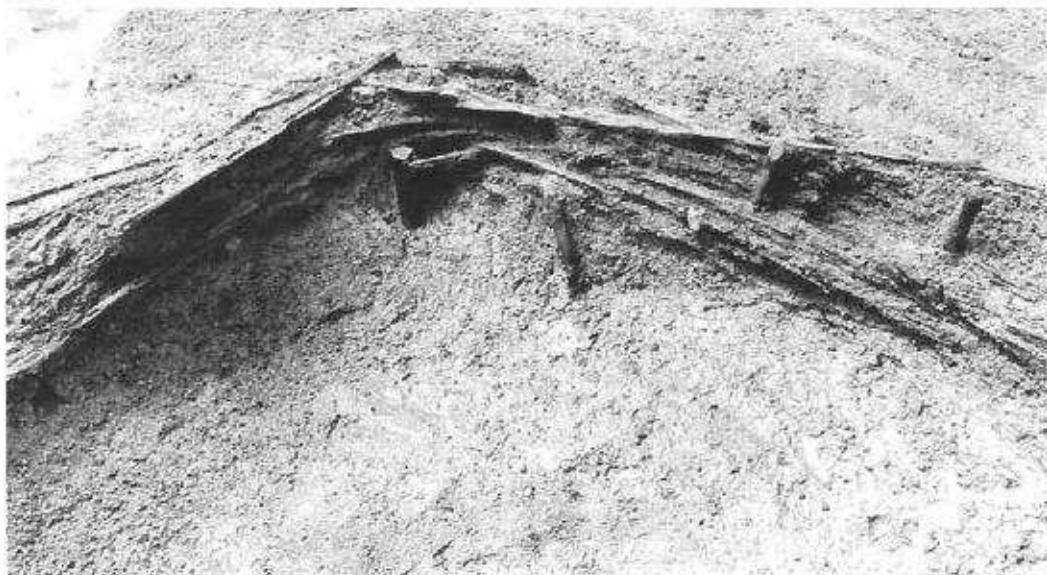
2. 全景（東から）



1. SB09 (北から)

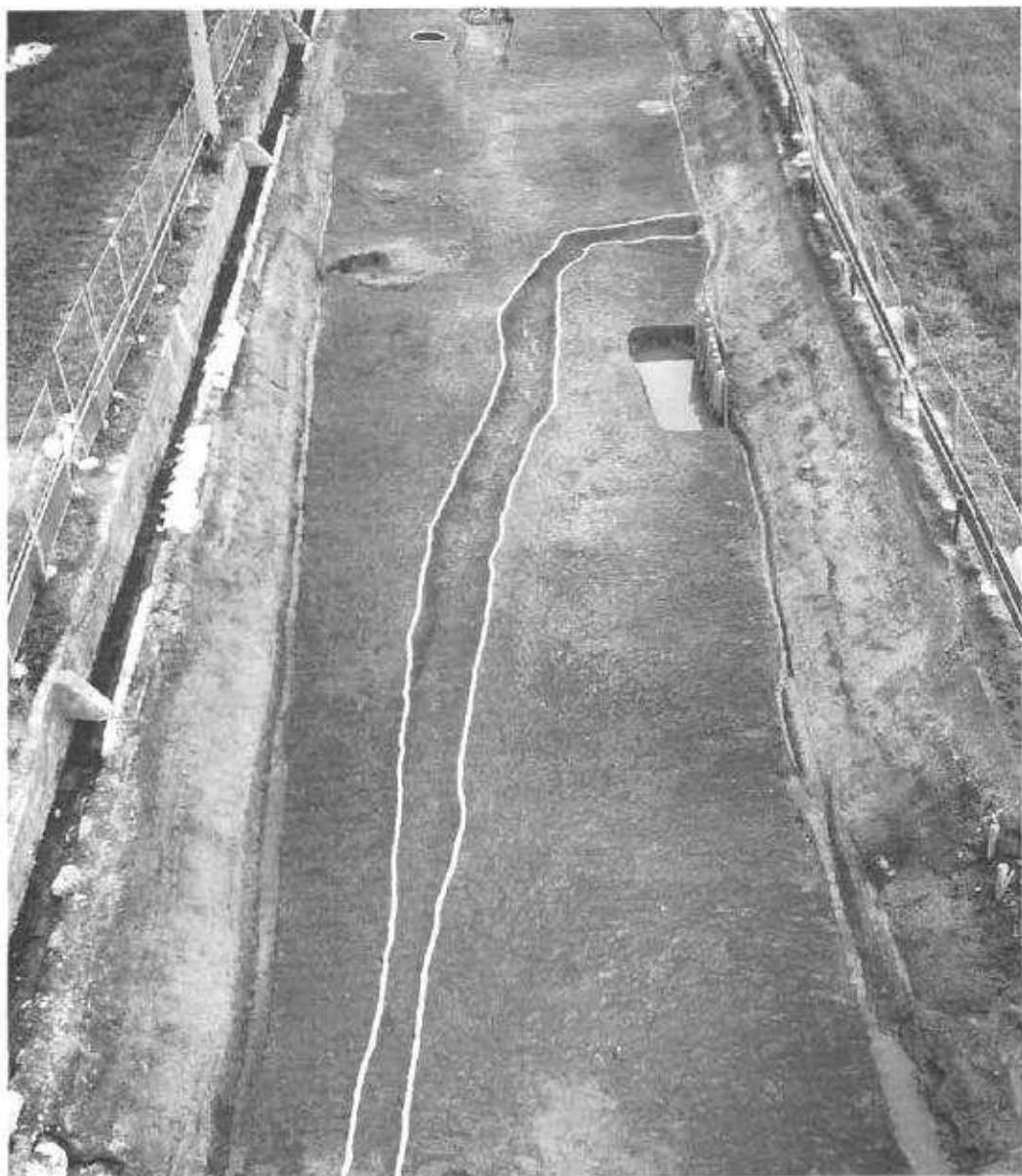


2. SK07 (南から)



3. SK07 (東から)

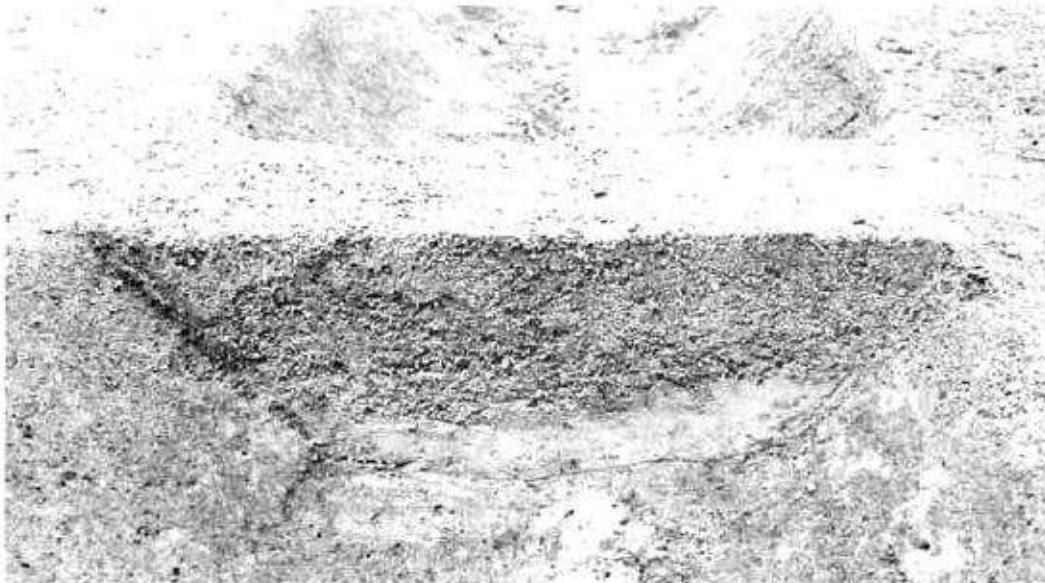
図版15 2区第5面



1. 全景（西から）



2. 全景（東から）



1. SD25断面
(西から)

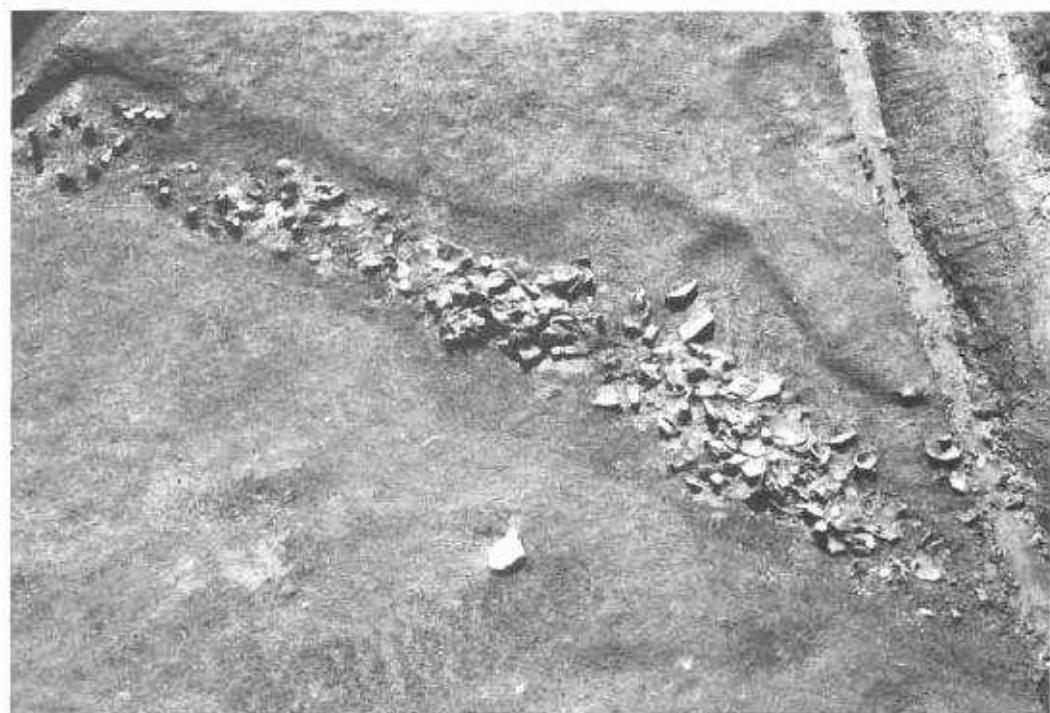


2. SD28土器出土状況
(西から)



3. SD28土器出土状況
(南から)

図版17 2区第5面



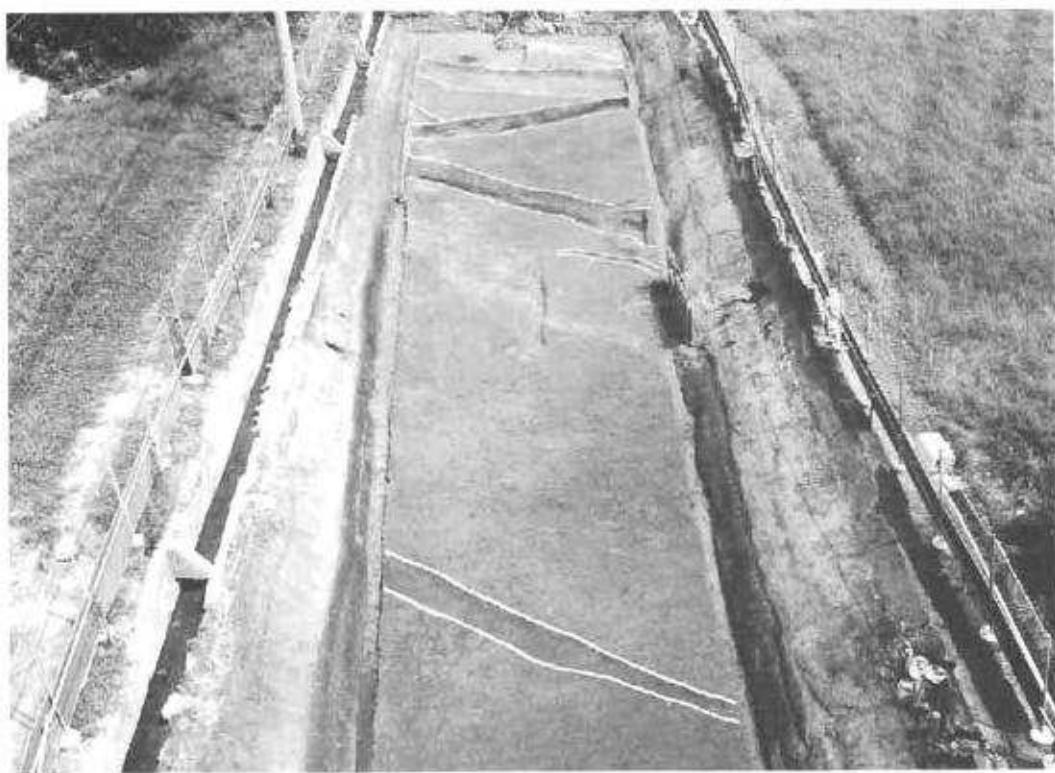
1. SD29土器出土状況
(西から)



2. SD29土器出土状況
(西から)



3. SD29土器出土状況
(西から)



1. 全景（西から）

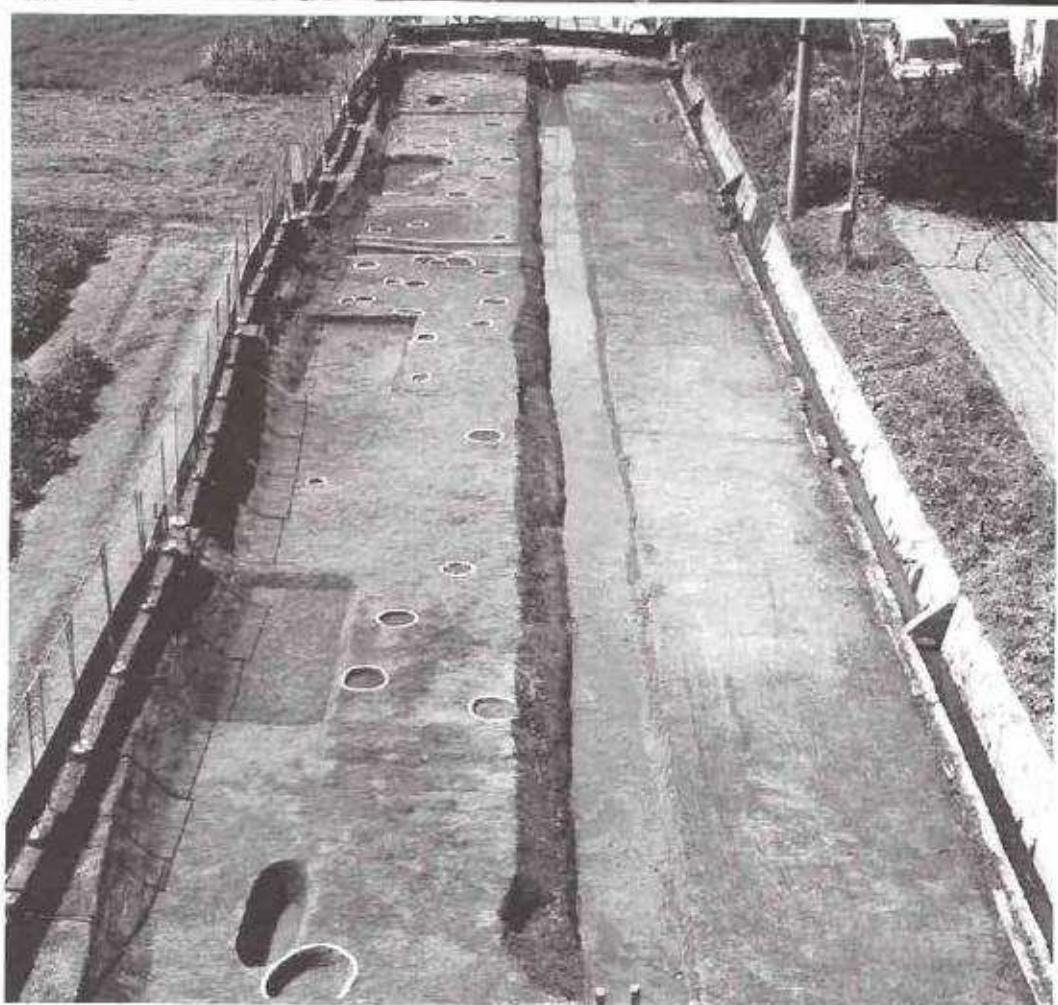
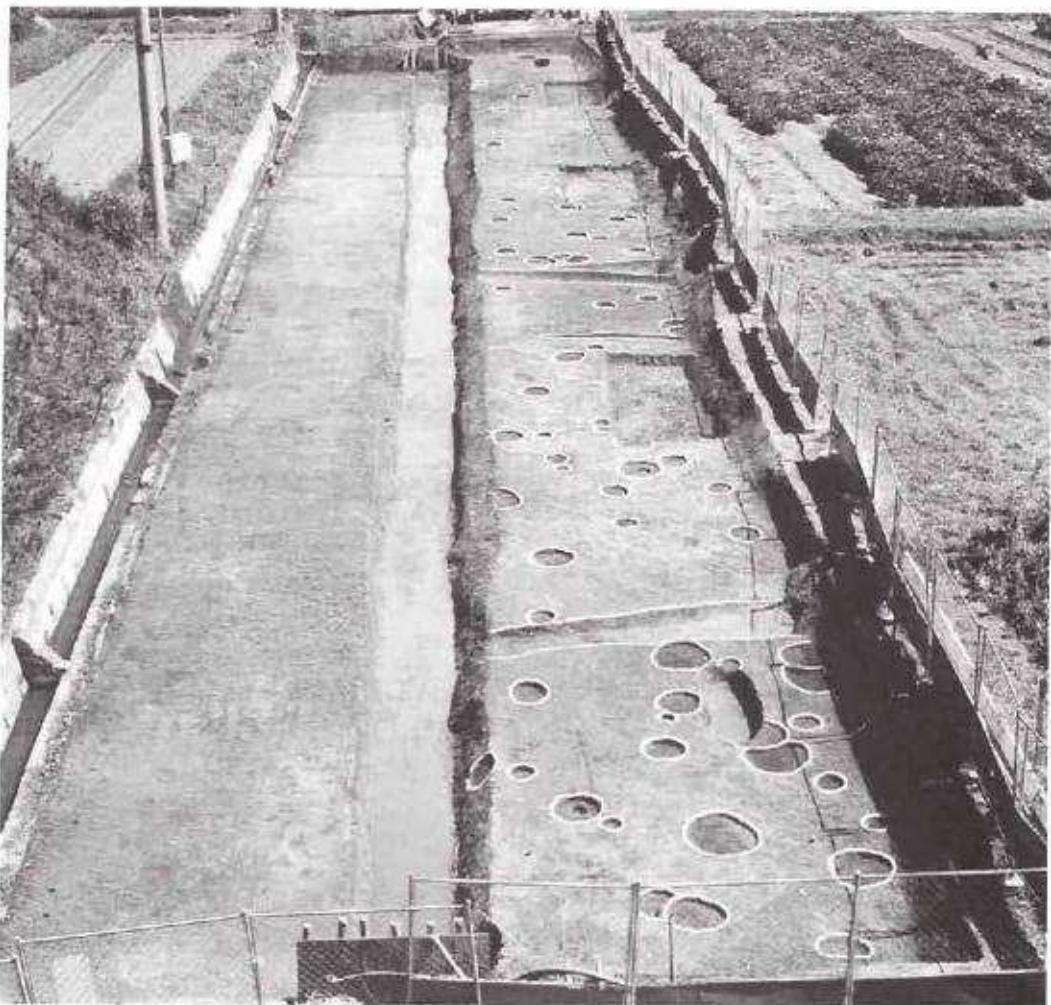


2. SD32・SD33
(西から)



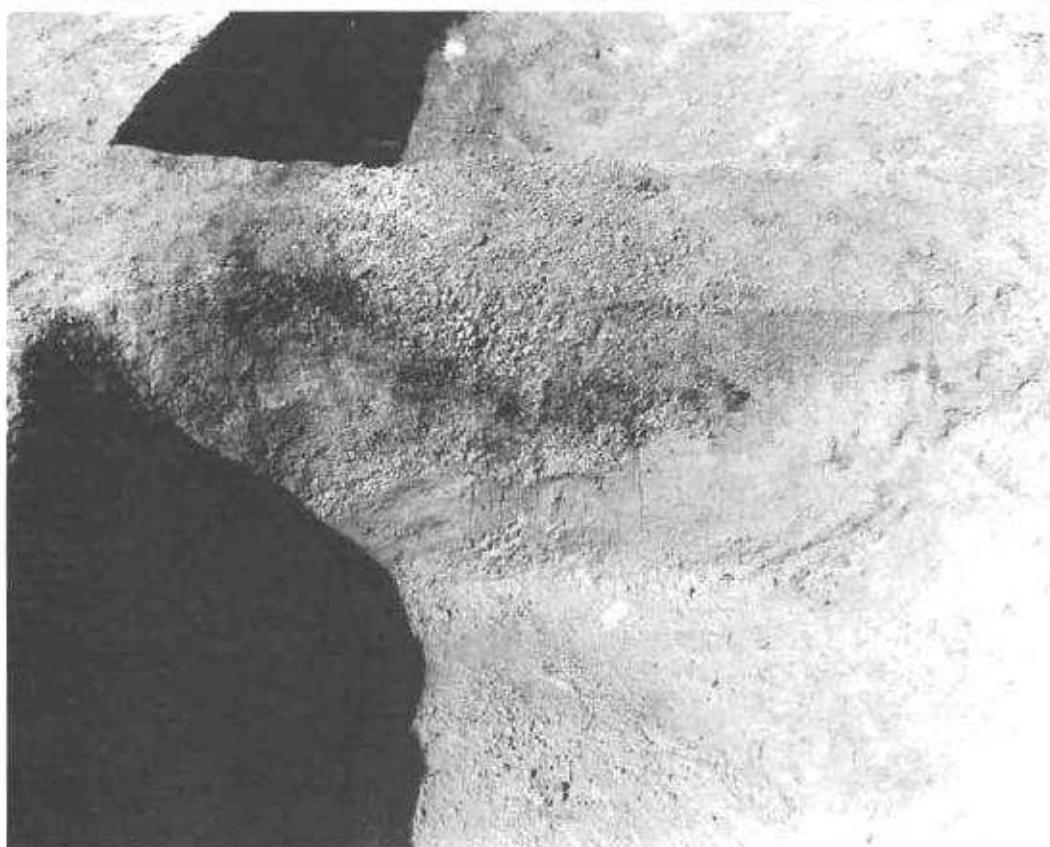
3. SD32断面
(南から)

図版19 3区第1面



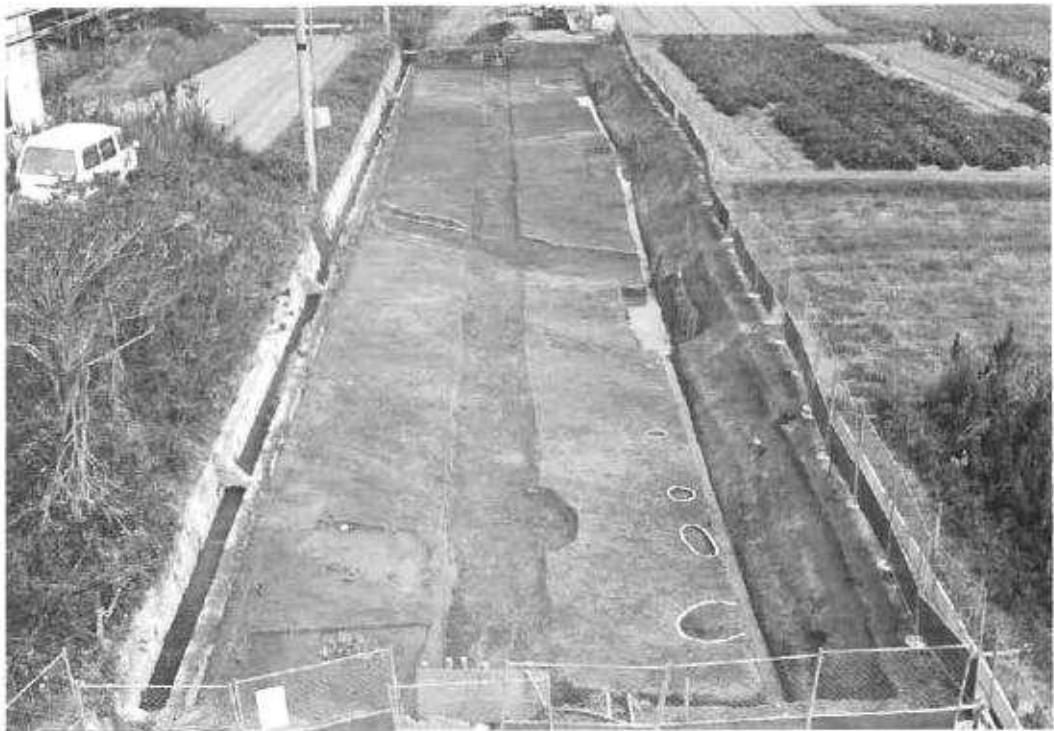


1. SD38 (西から)



2. SD38 (南から)

図版21 3区第4面



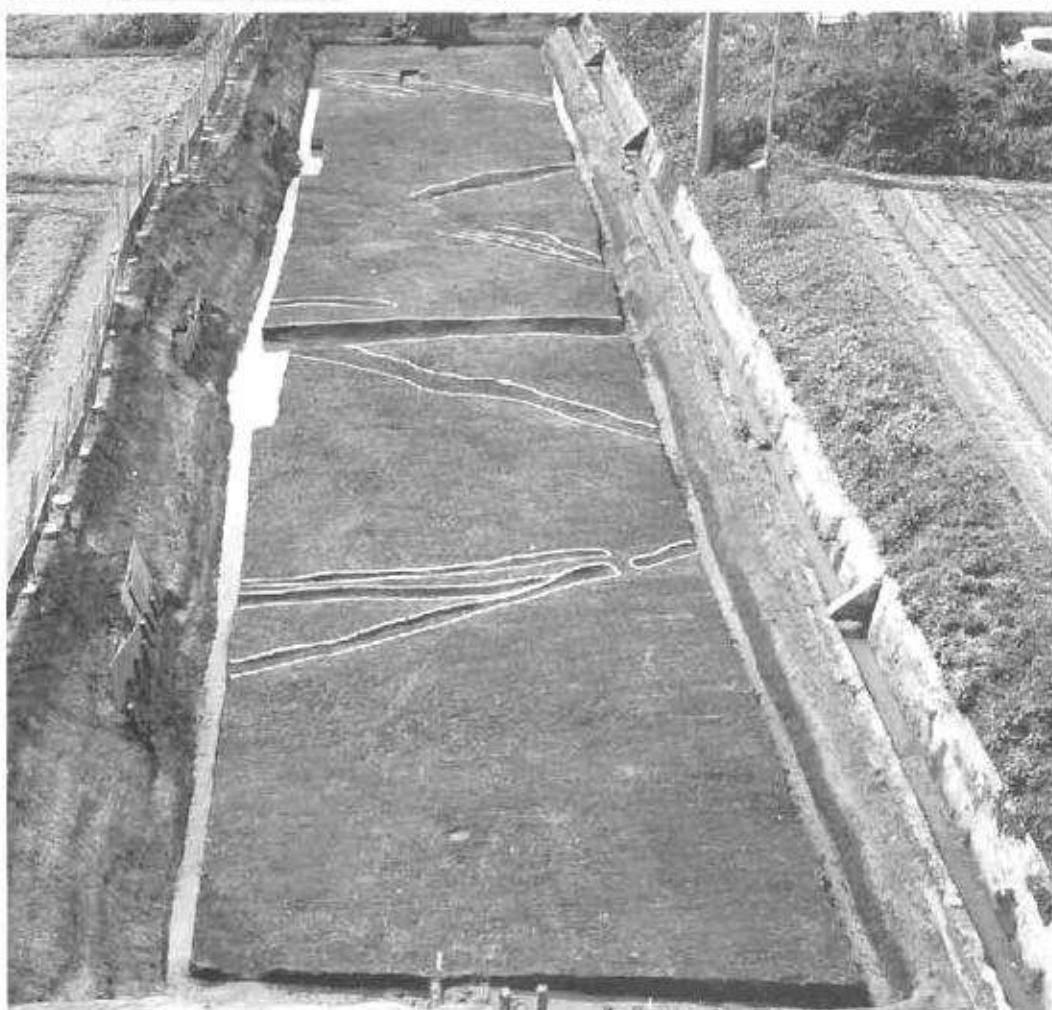
1. 全景（西から）



2. 全景（東から）



3. SK16断面
(南から)



図版23 3区第3面



1. 土器群全景（東から）



2. 土器群E（南から）



3. 土器群F（南東から）



1. 土器群B（西から）



2. 土器群D（西から）



3. 土器群D（南から）

図版25 3区第3面



1. 土器群D（南から）
2. 353出土状況



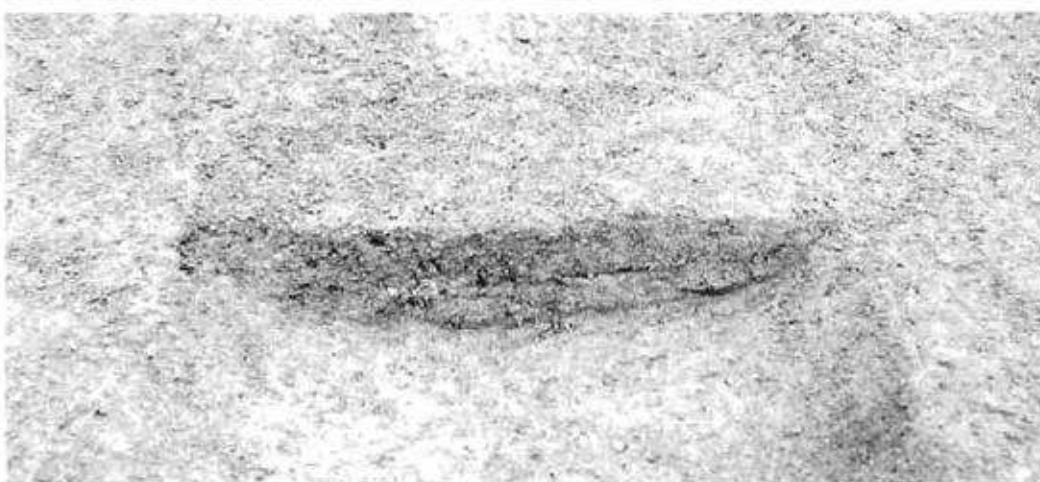
3. 土器群B
4. 356出土状況



5. 土器群A



1. SD44断面
(南から)



2. SD52断面
(南から)



3. SD51断面
(南から)

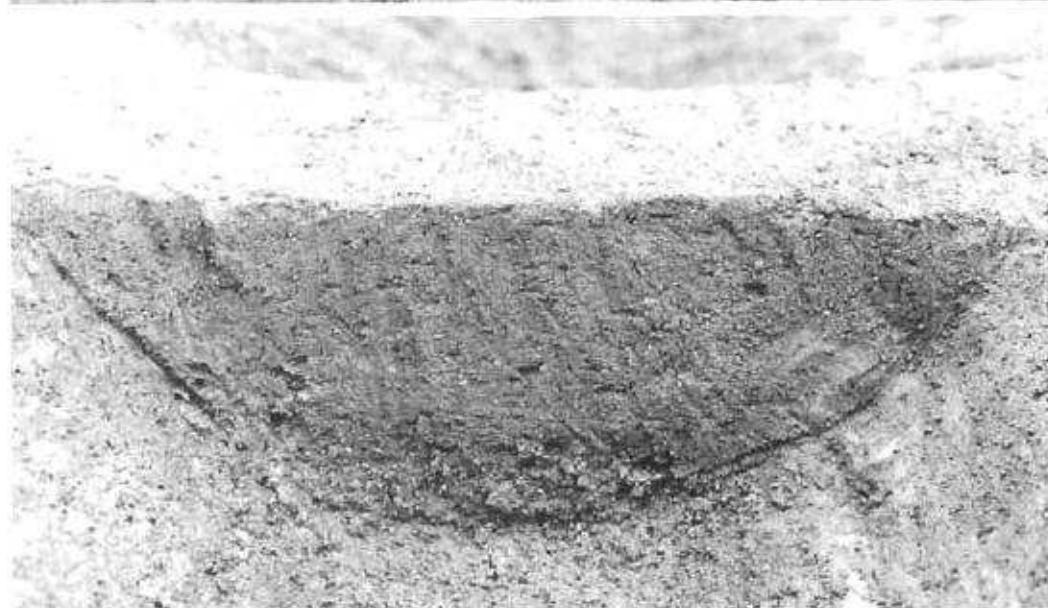
図版27 3区第6面



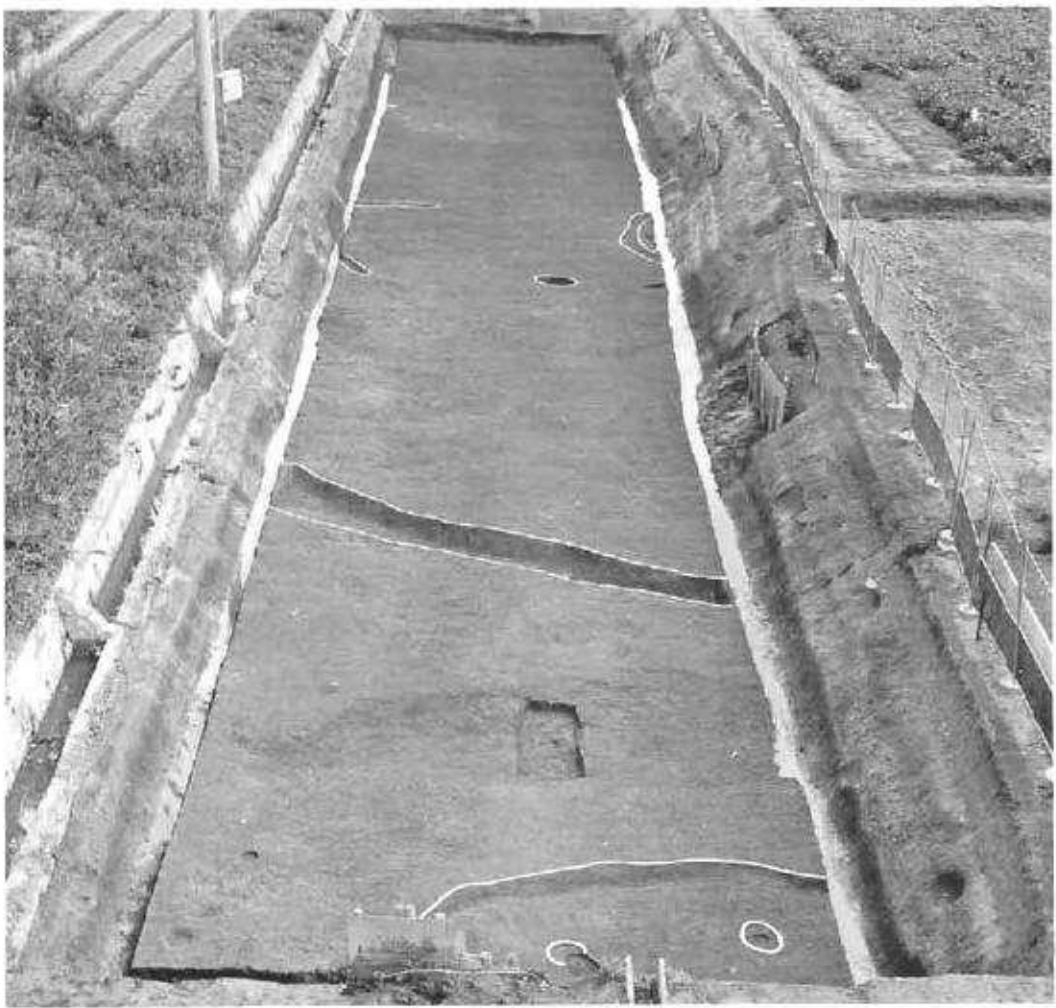
1. SK17断面
(北から)



2. SD58断面
(西から)



3. SD59断面
(東から)



1. 全景（西から）

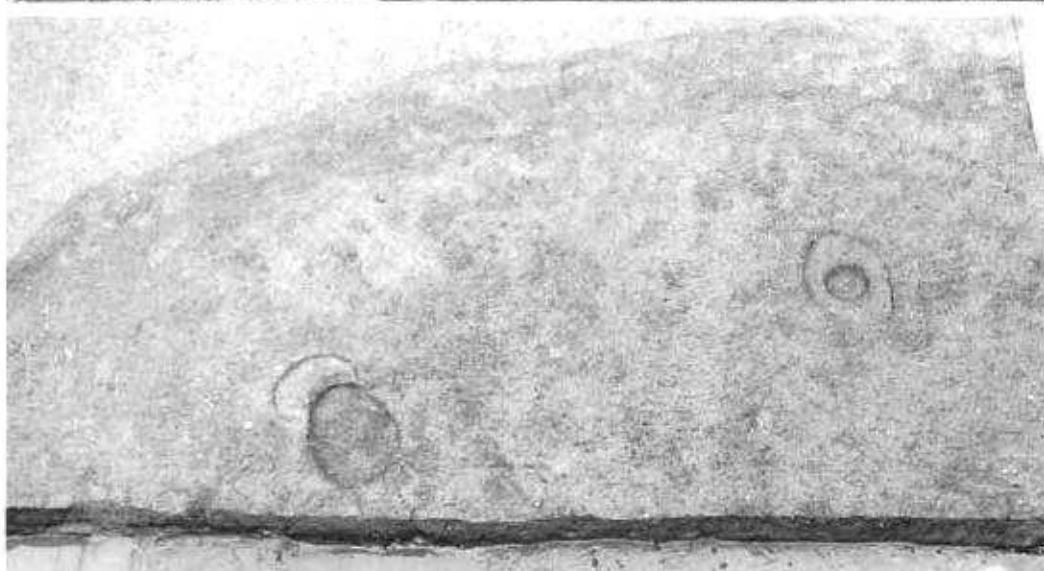


2. 全景（東から）

図版29 3区第7面



1. SH01焼失状況
(西から)

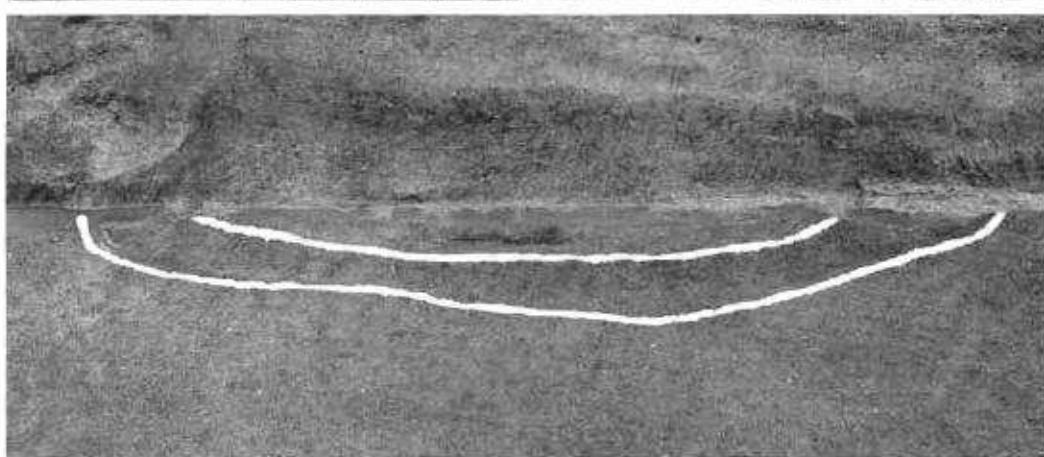


2. SH01 (西から)

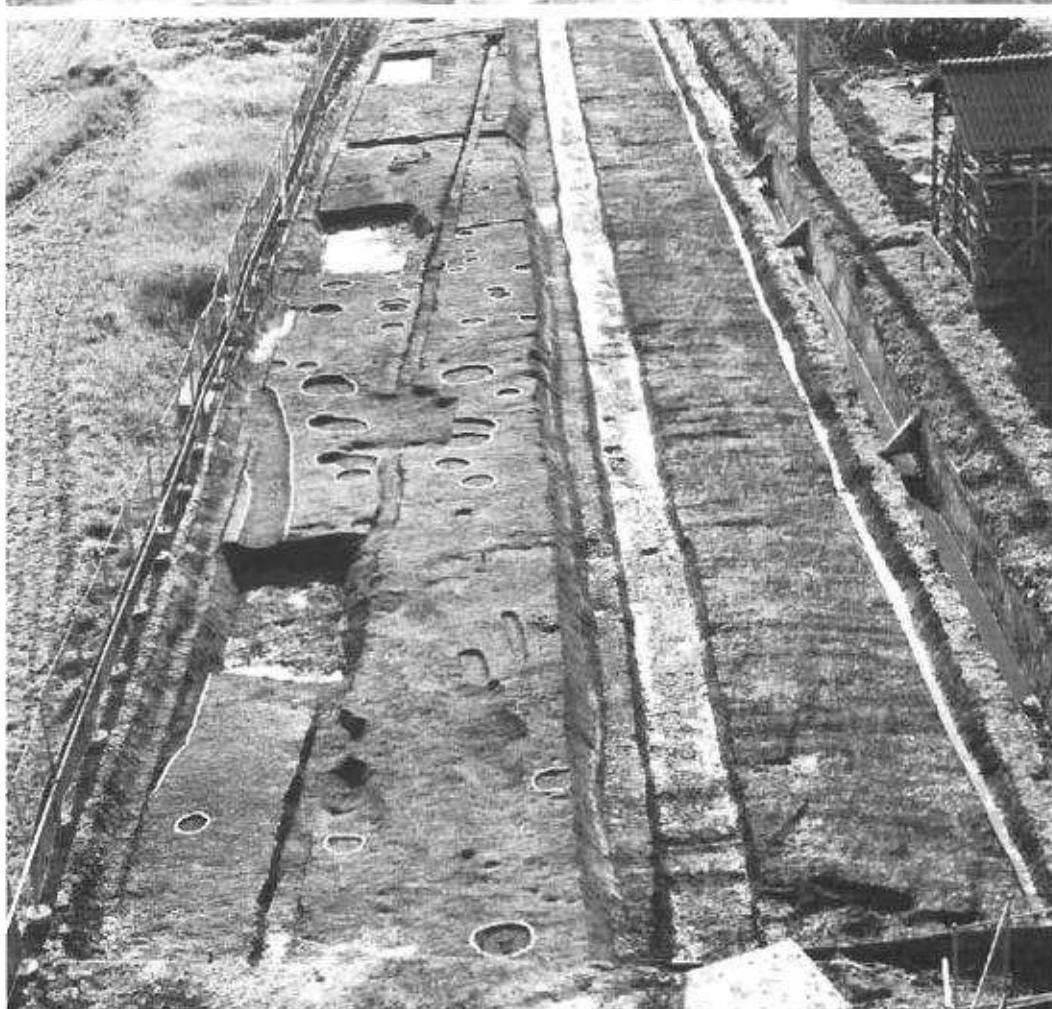
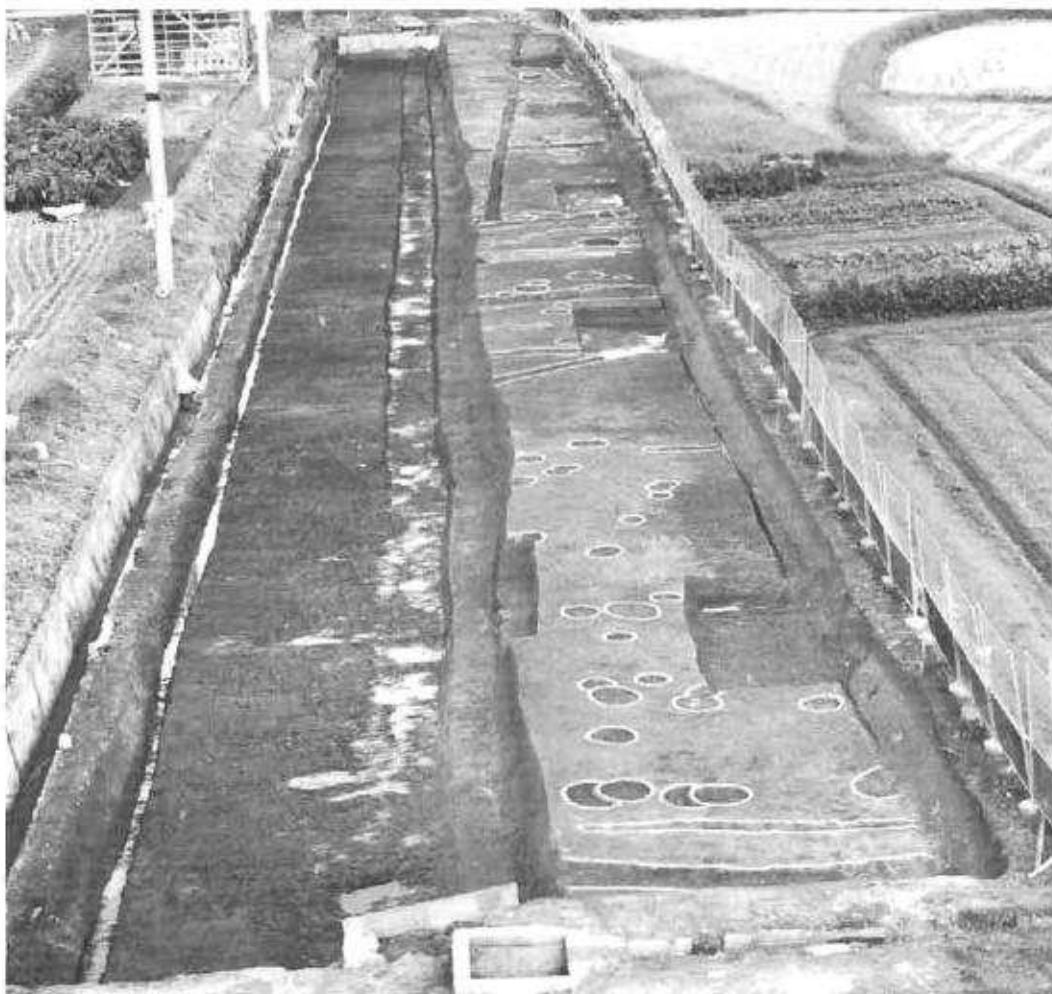


3. SH01 P2
(西から)

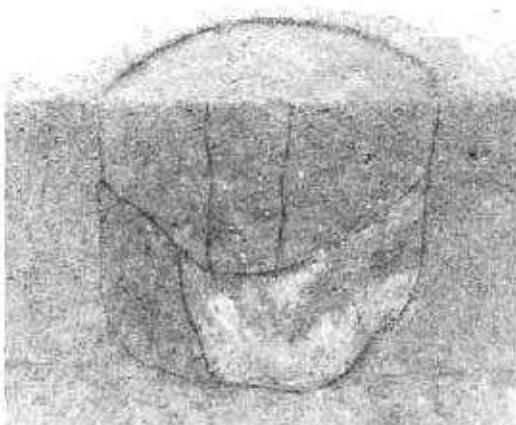
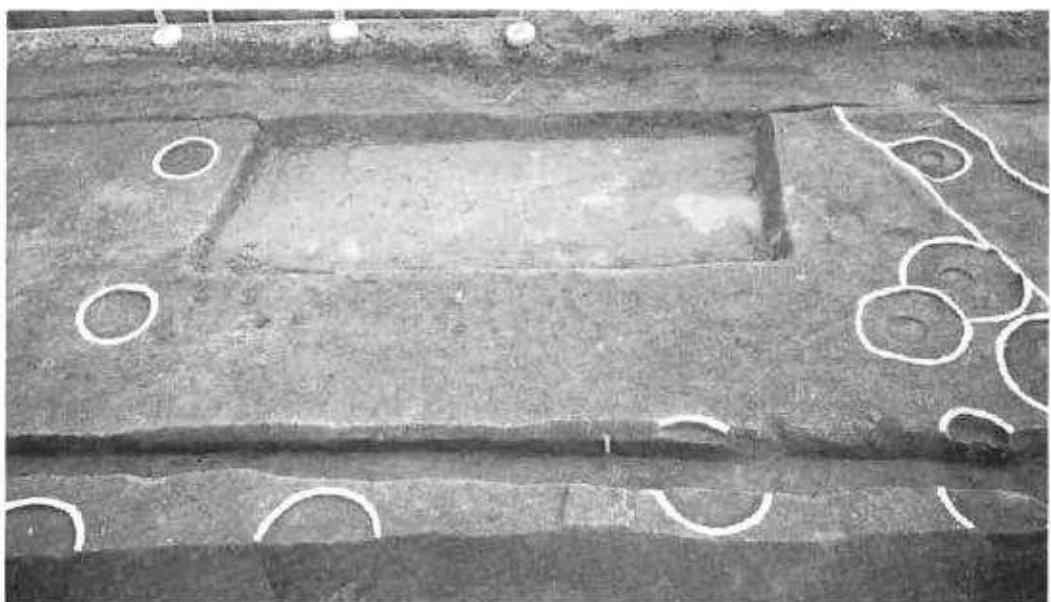
4. SH01 P2
(西から)



5. SH02 (北から)



図版31 4・5区第1面



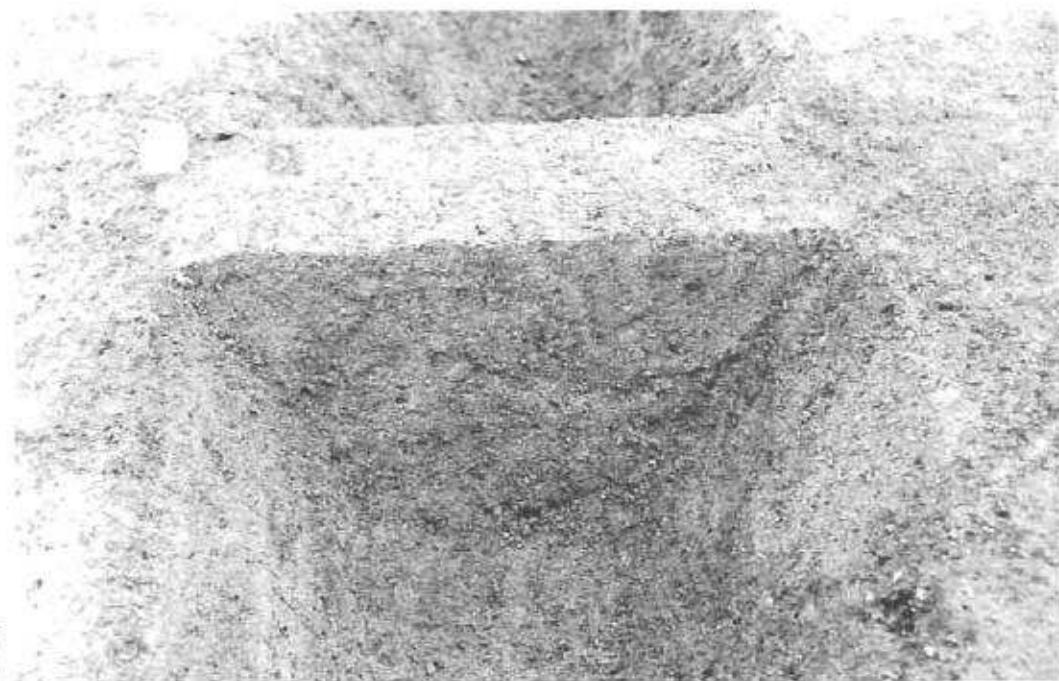
2. SB14 P 5
(北から)
3. P20 (西から)



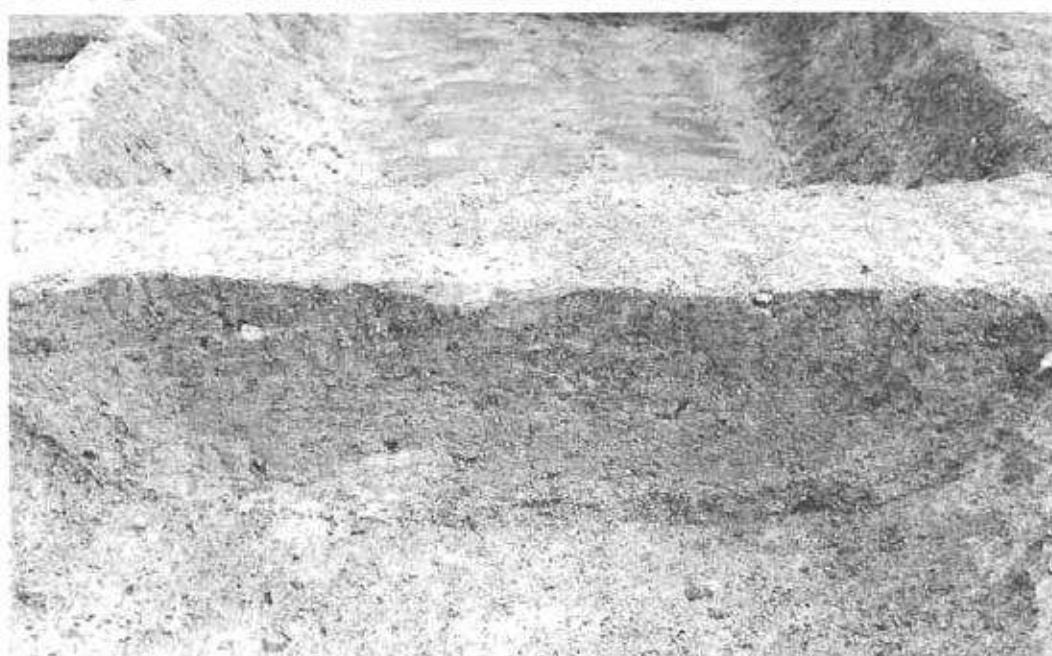
4. SB14 P 3
(北から)
5. SB14 P 4
(北から)



6. SB14 P 1
(西から)
7. SB14 P 8
(東から)



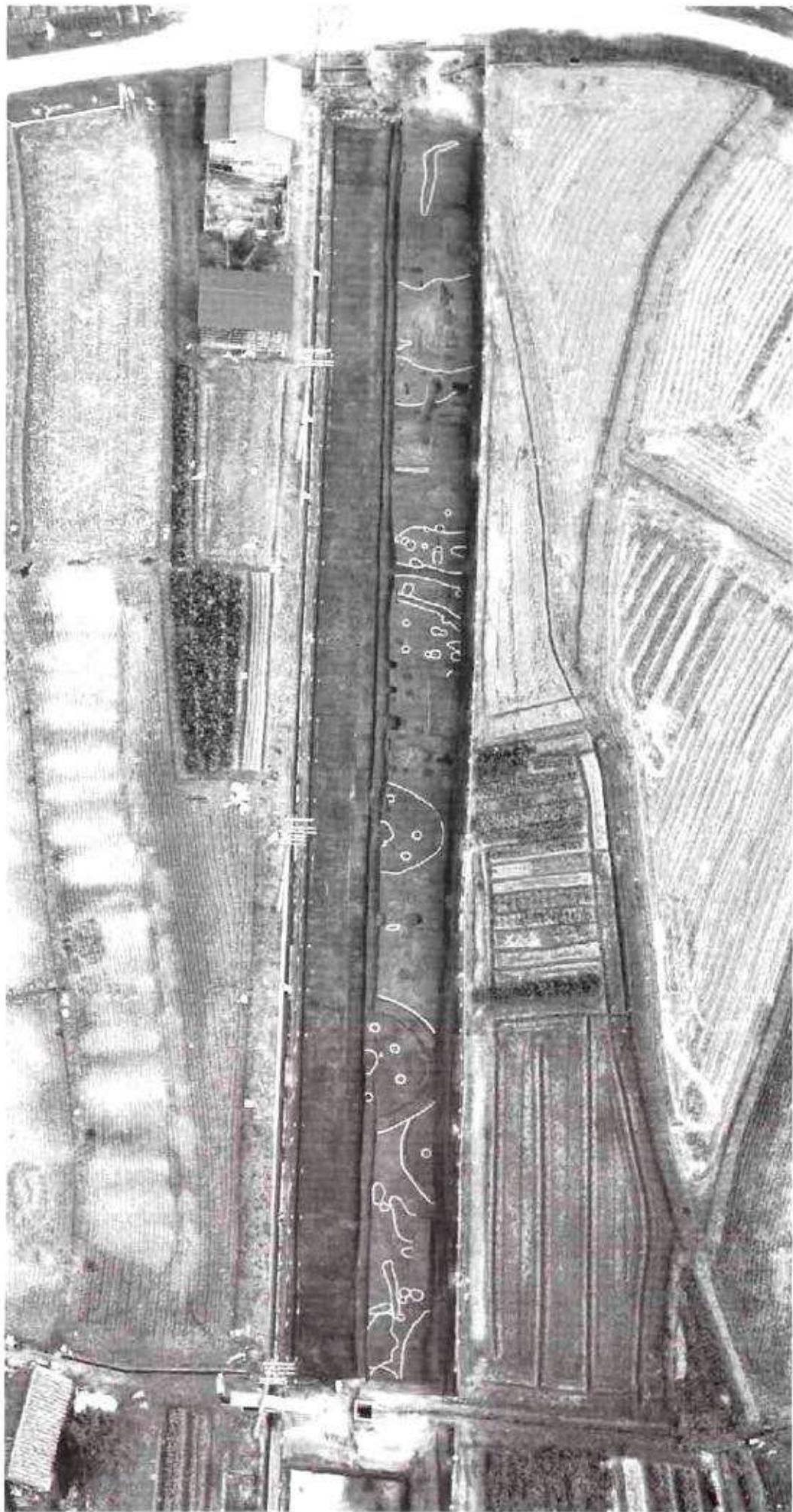
1. SD69断面
(北から)



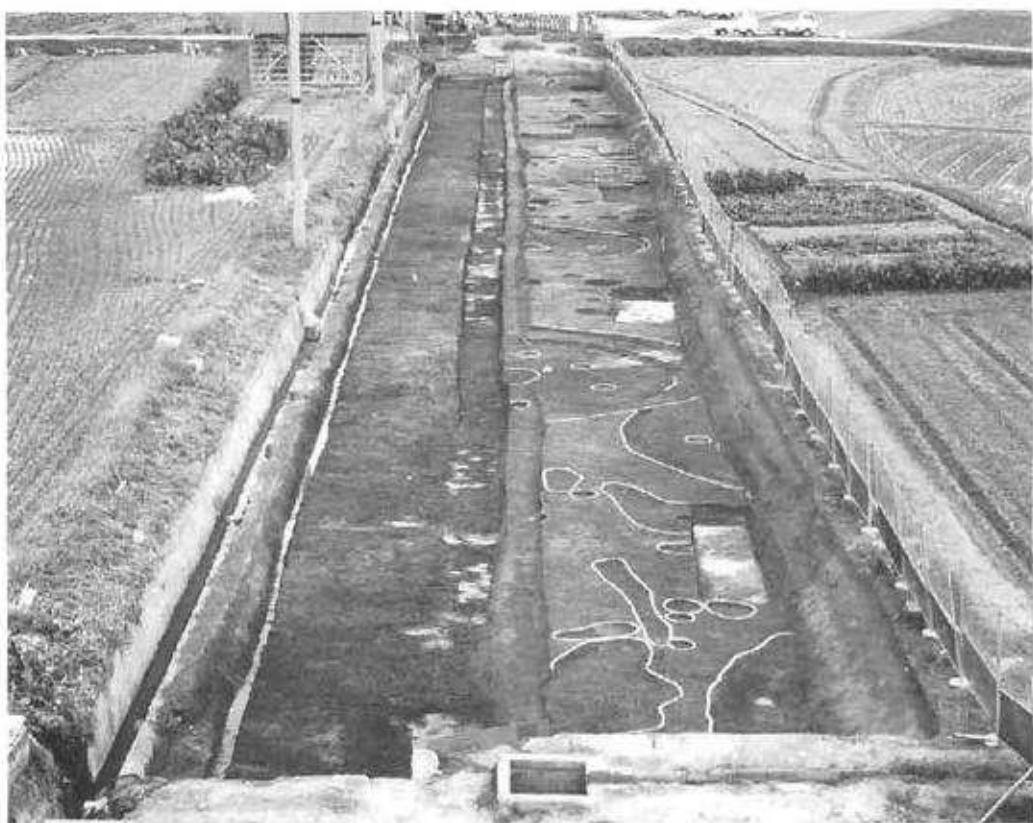
2. SD71断面
(北から)



3. SD75断面
(南から)



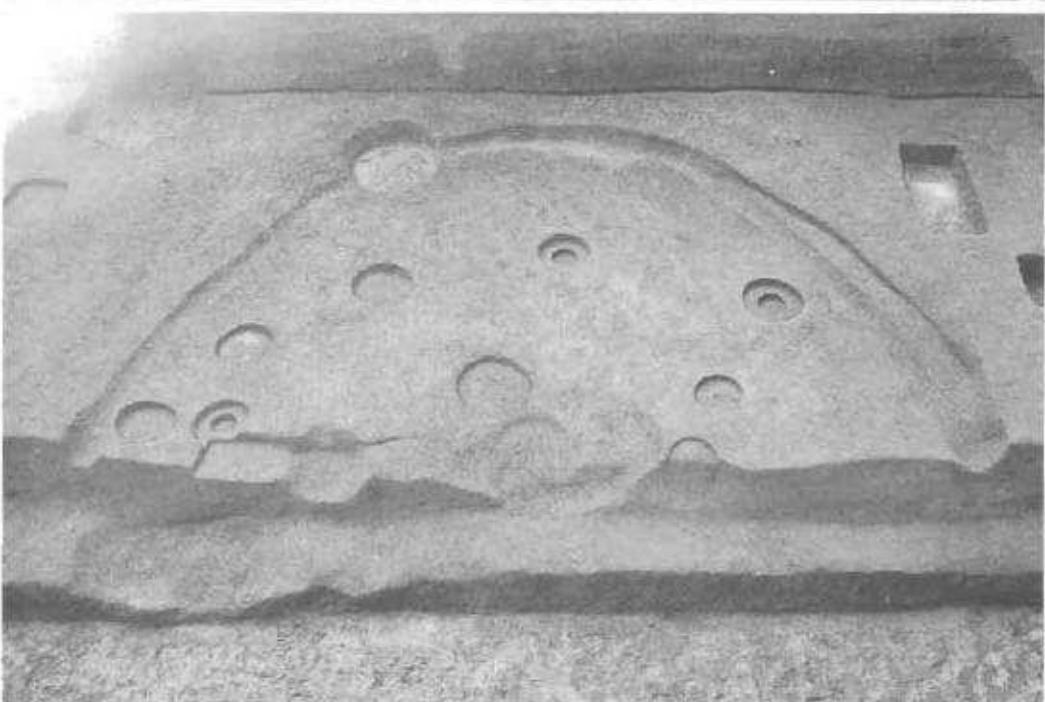
1. 全景(西から)



図版35 4・5区第3面



1. 住居跡群
(北東から)



2. SH05 (南から)



3. SH03 (南から)



1. SH04焼失状況
(南から)



2. SH04 (南から)

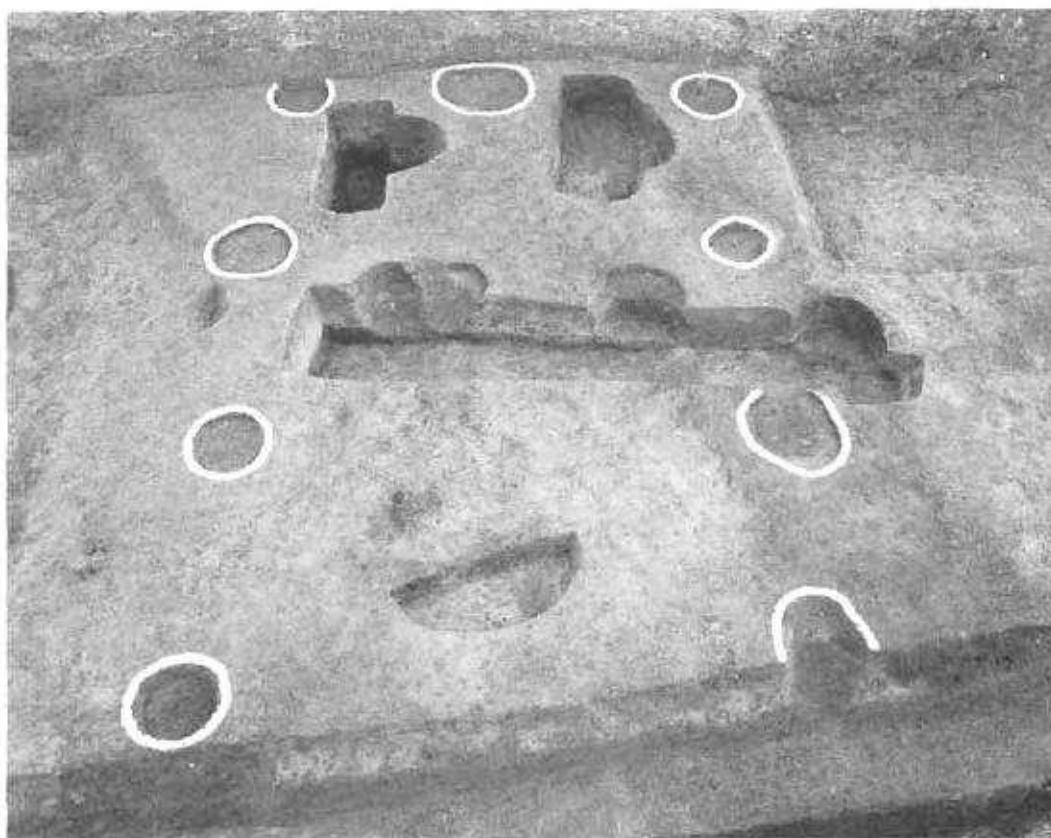


3. SH04土器出土状況
(北から)

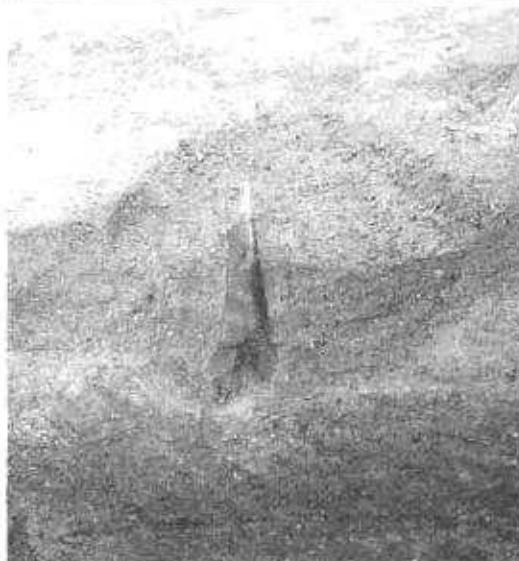


4. SH04土器出土状況
(西から)

図版37 4・5区第3面



1. SB16 (北から)

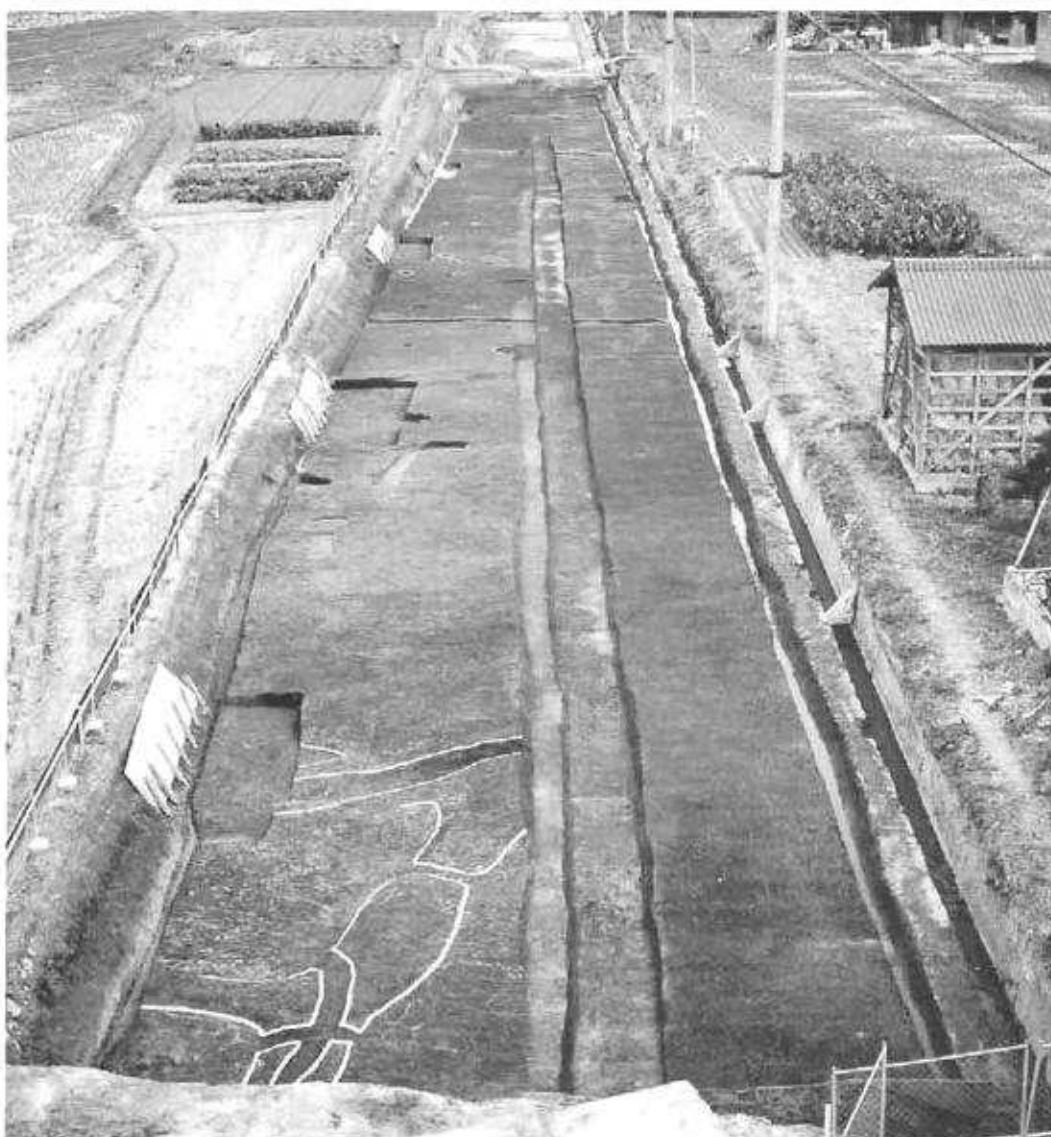
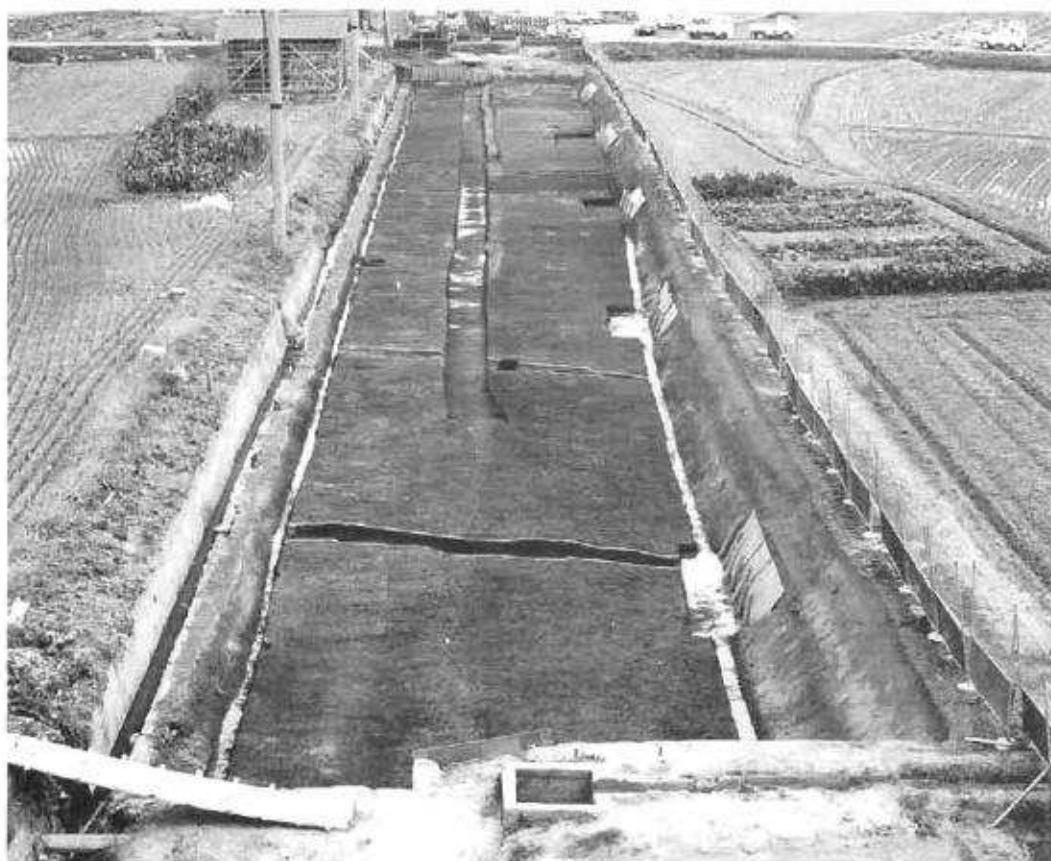


2. SB16 P7
(西から)

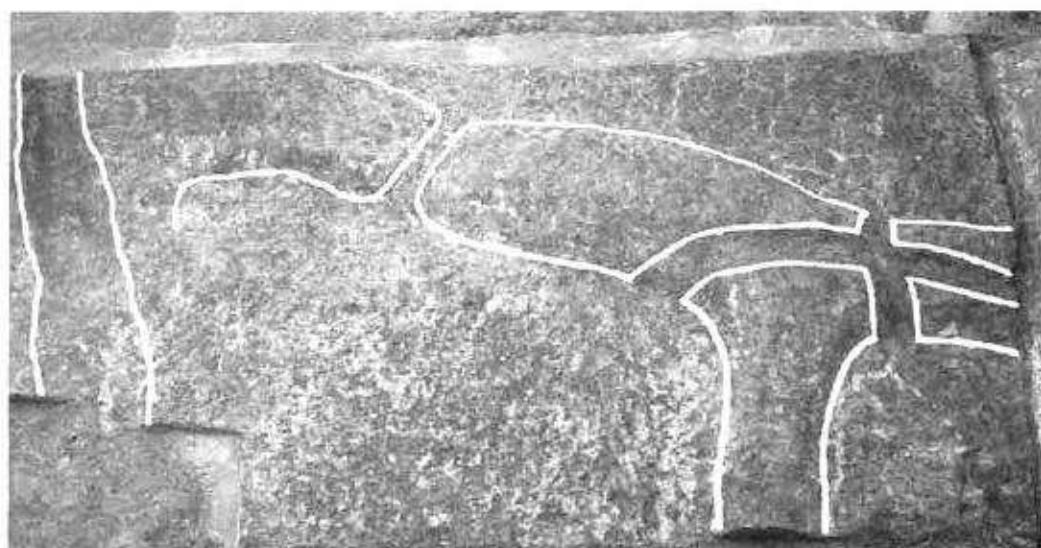
3. SB16 P6
(西から)



4. SD77断面
(東から)



図版39 4・5区第4面



1. 畦畔 (南から)

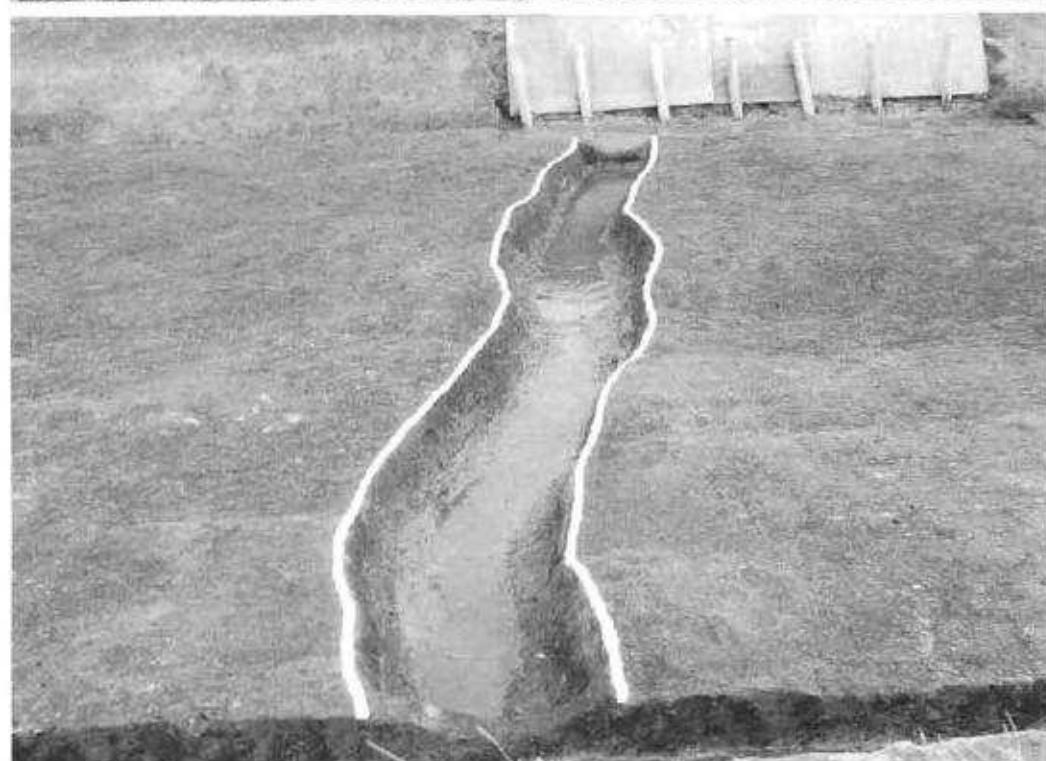
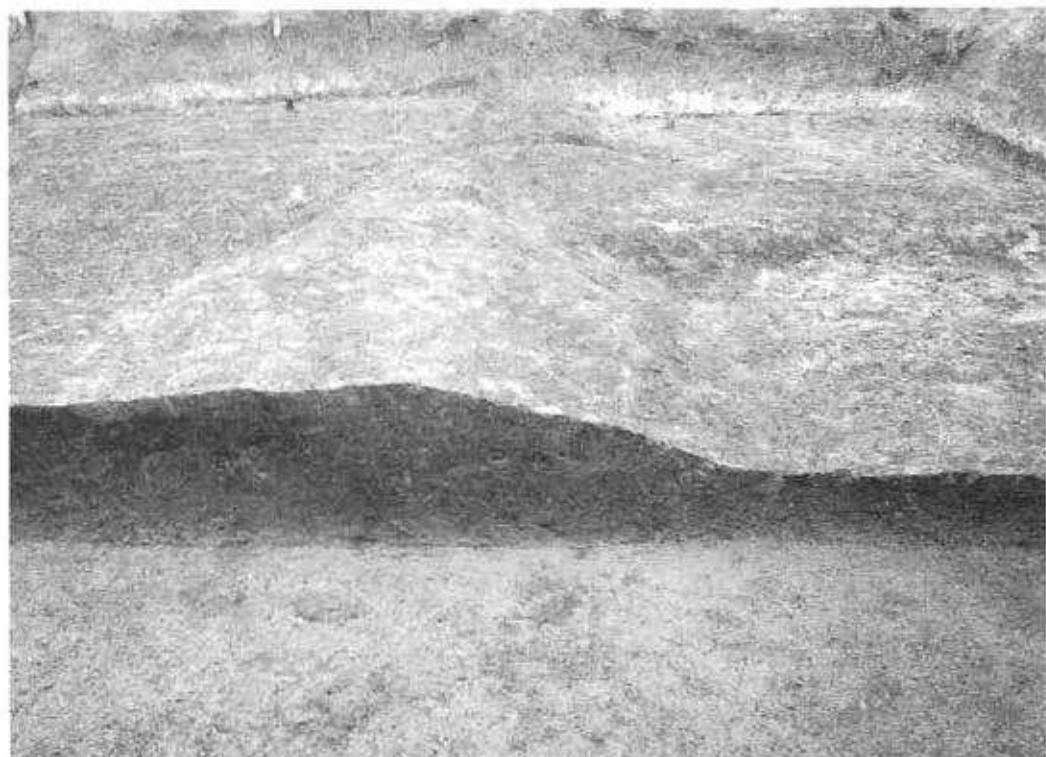


2. 畦畔 (東から)

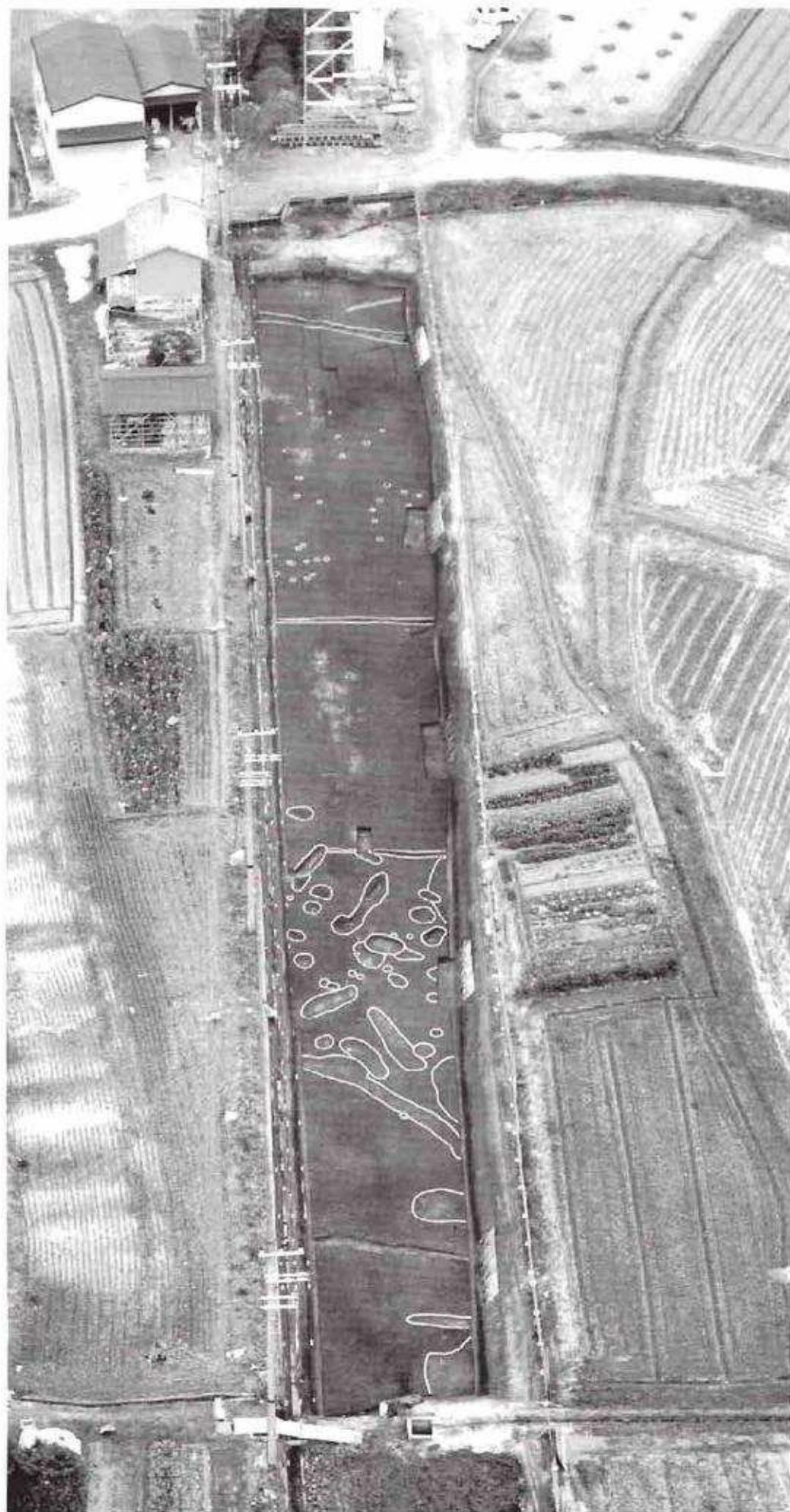


3. 畦畔 (西から)

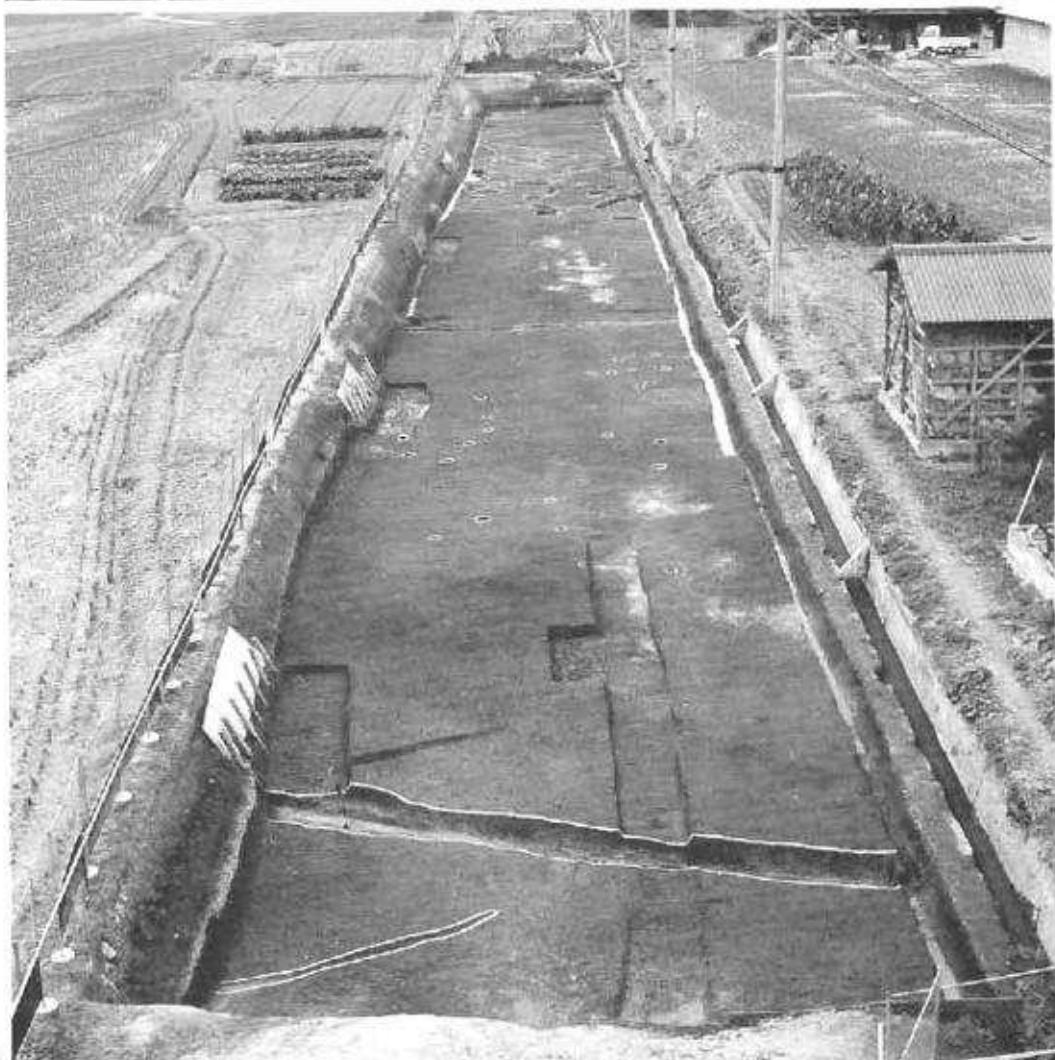
図版40 4・5区第4面



図版41 4・5区第5面



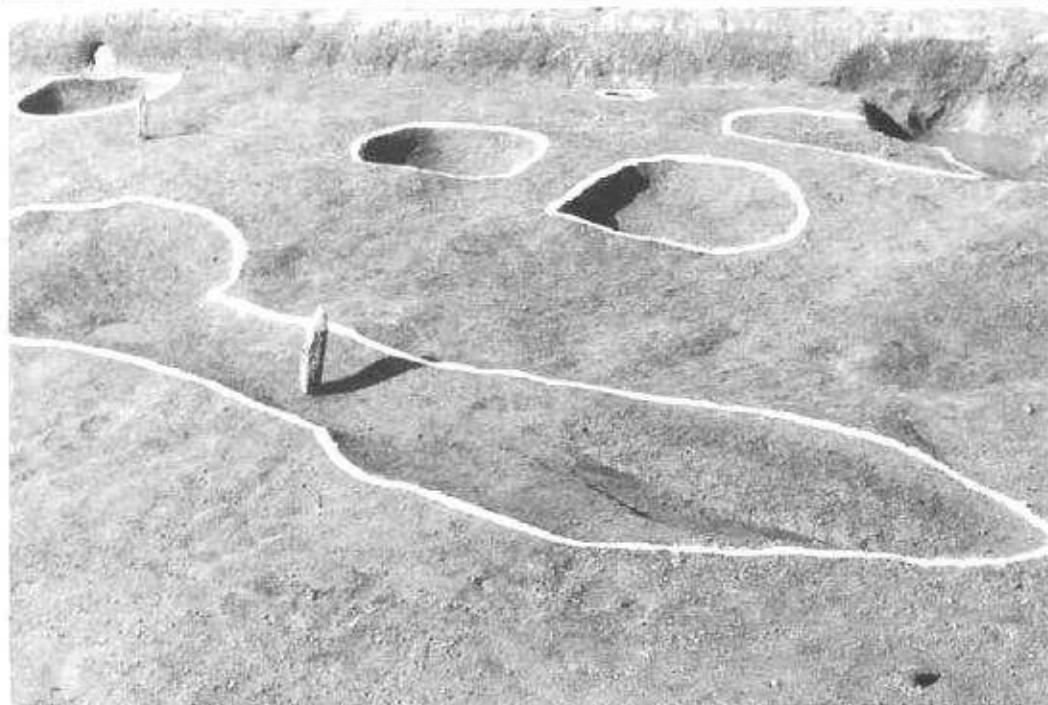
1. 全景（西から）



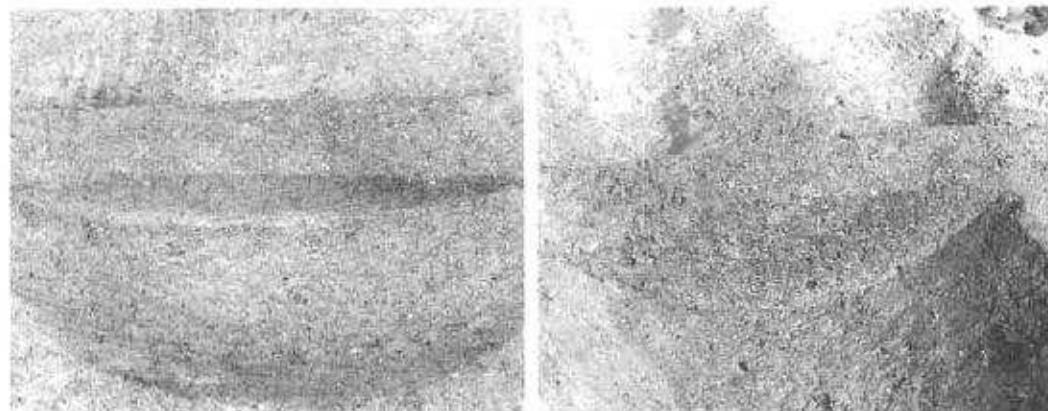
図版43 4・5区第5面



1. 土壌群（東から）

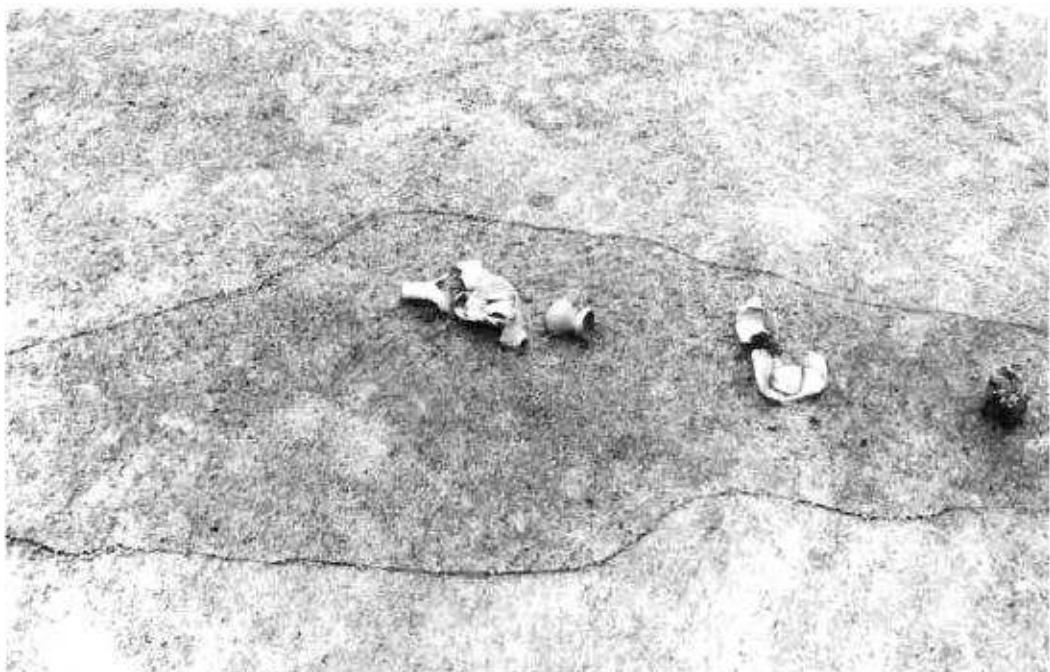


2. SK51（南から）



3. SK47断面
(南から)

4. SK55断面
(南から)



1. SK51土器出土状況
(南から)



2. SK51土器出土状況
(南から)



3. SK51土器出土状況
(南から)

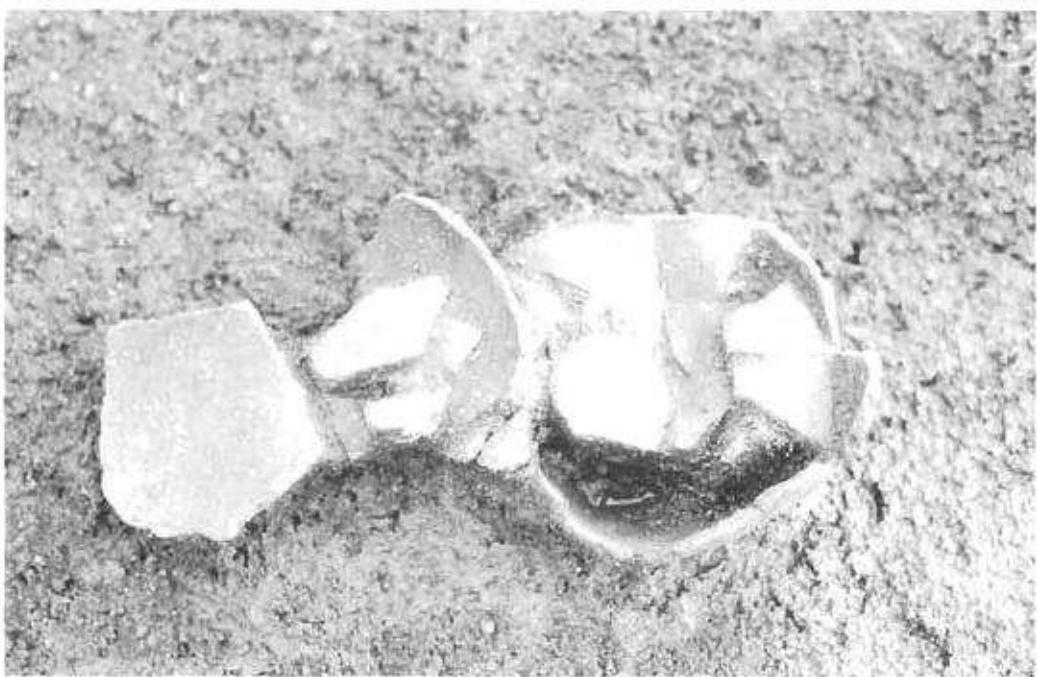


4. SK50土器出土状況
(南から)

図版45 4・5区第5面



1. SK57 (北から)

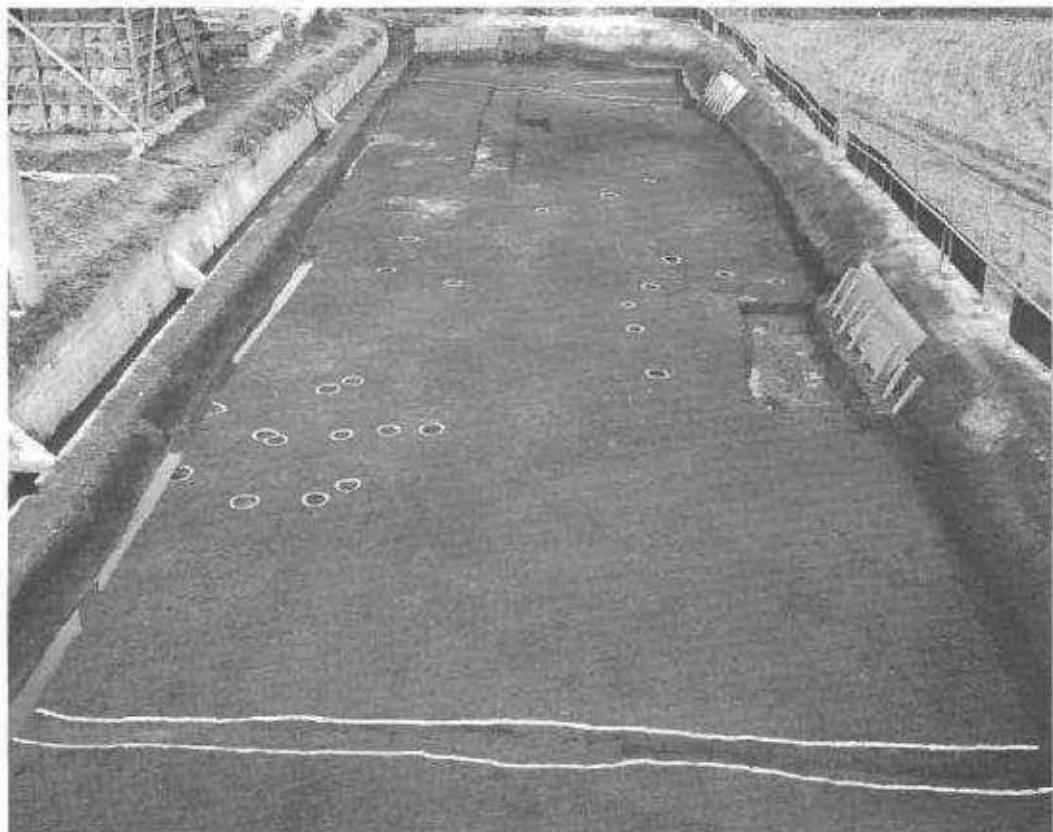


2. SK56土器出土状況
(北から)



3. SK56土器出土状況
(南から)

4. SK56土器出土状況
(北から)



1. 全景（西から）

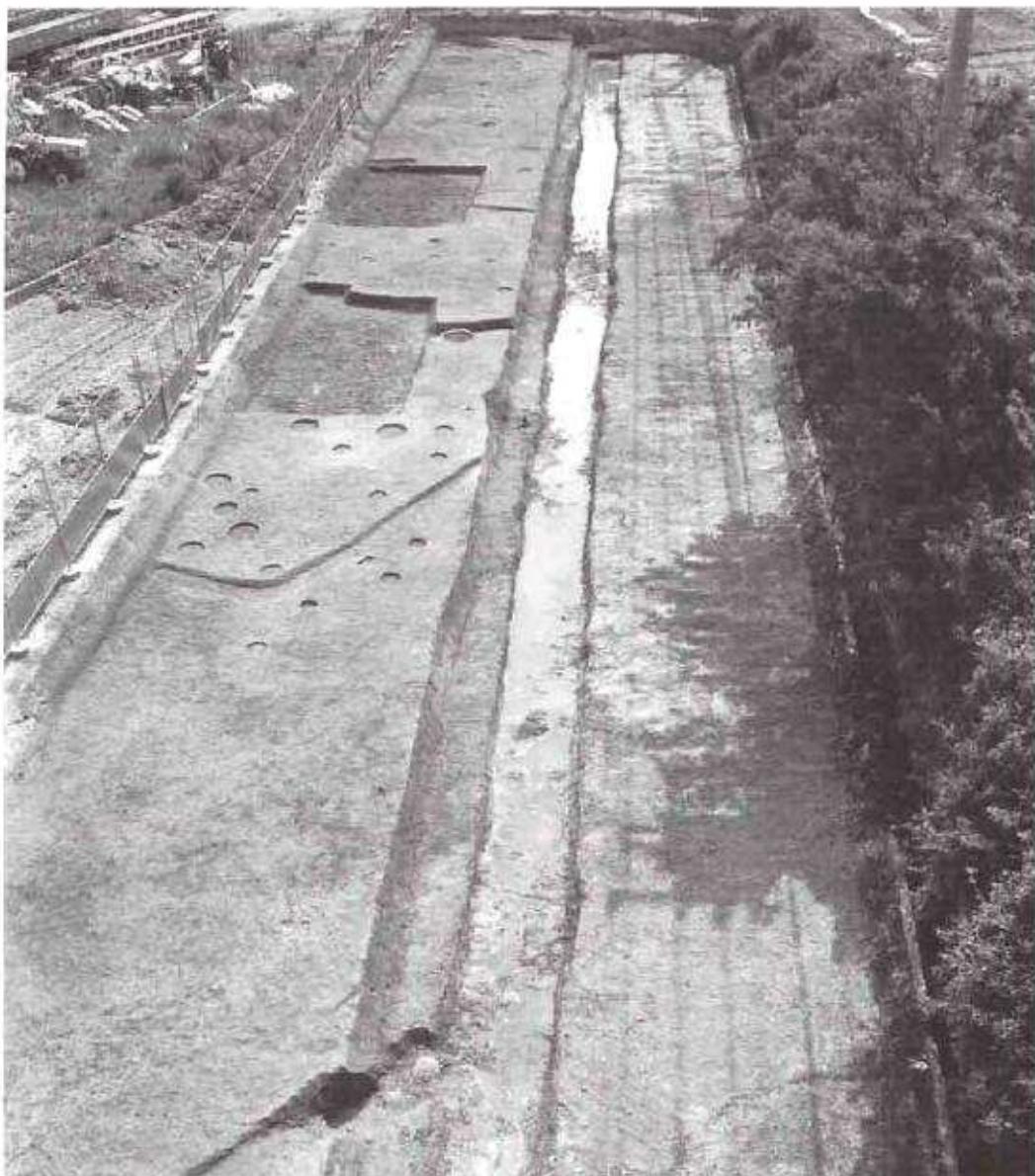


2. P15断面
(西から)



3. P16断面
(西から)

図版47 6区第1面

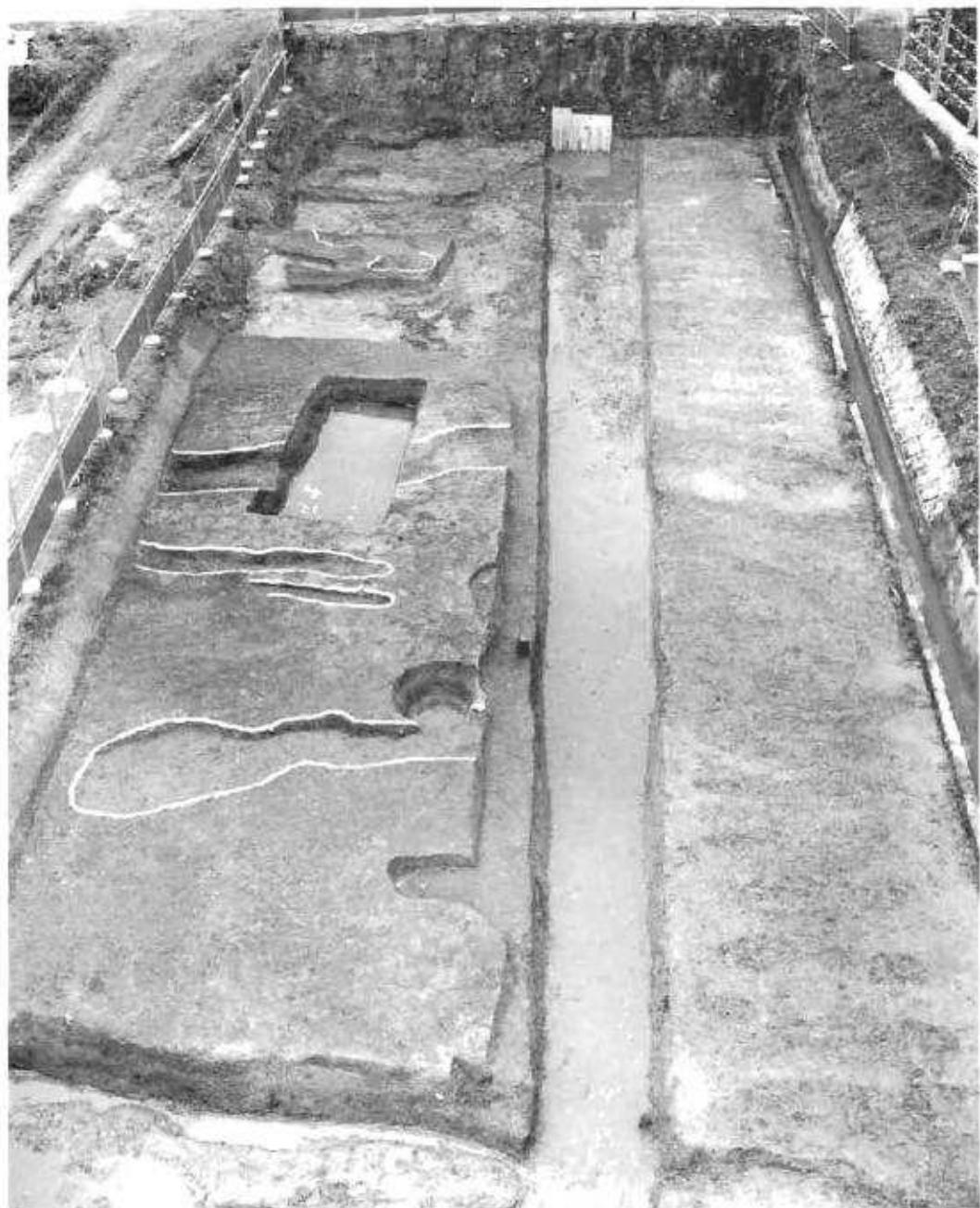


1. 6—I区全景
(東から)



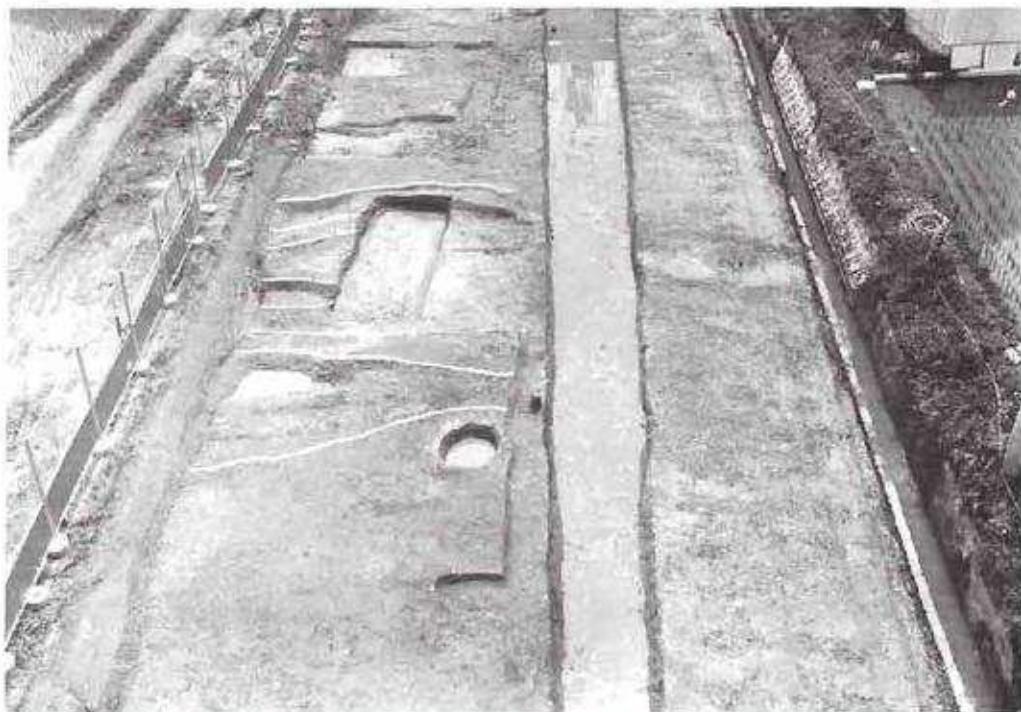
2. 6—II区全景
(西から)

図版48 6区第1面

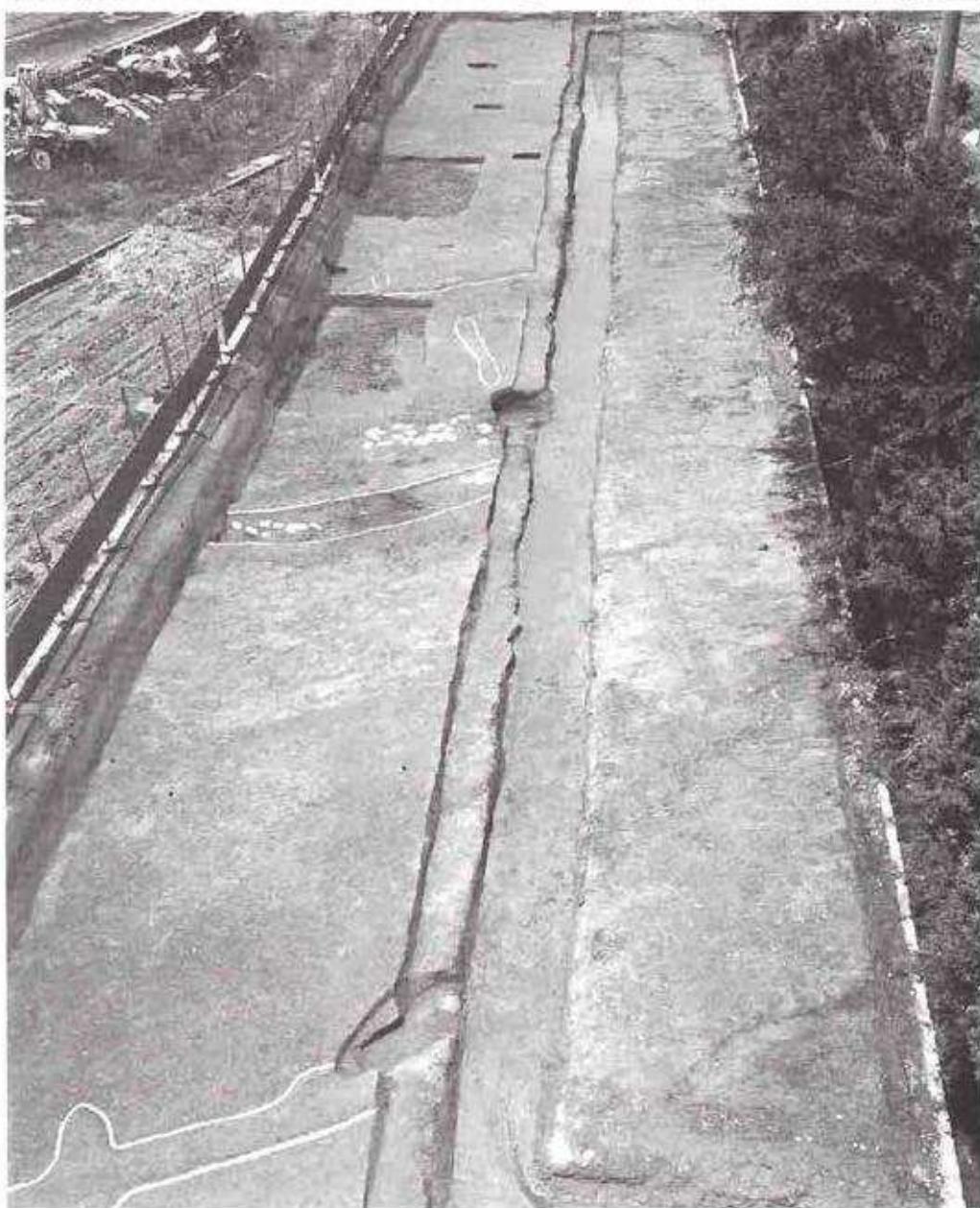


1. 6-1区全景
(東から)

図版49 6区第3面



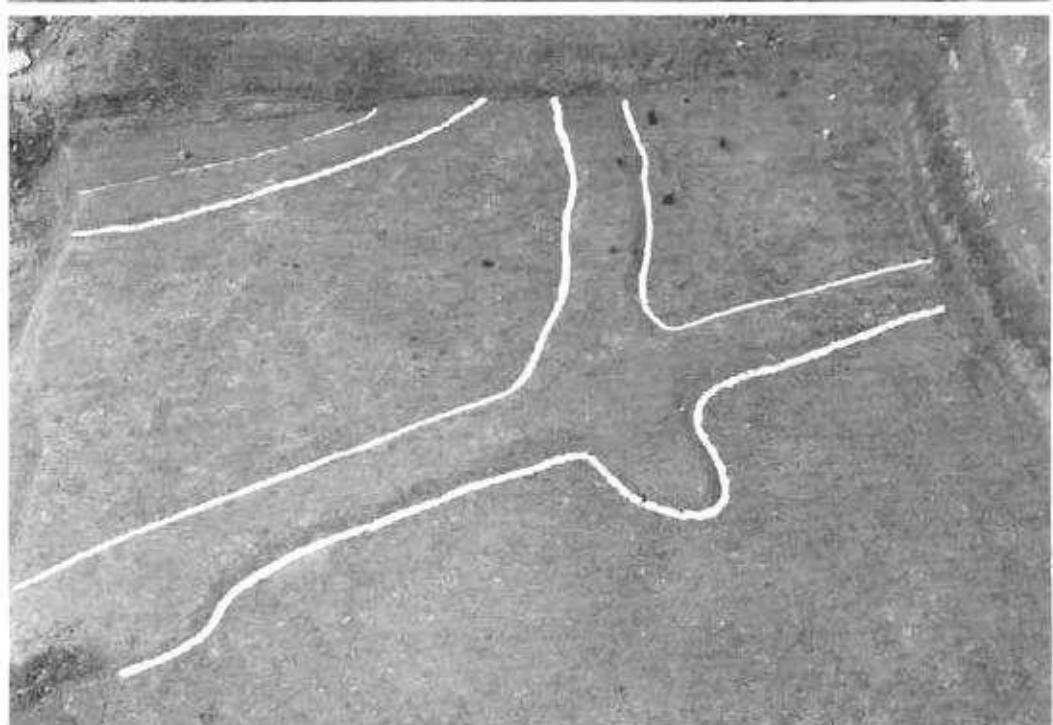
1. 6-II区全景
(西から)



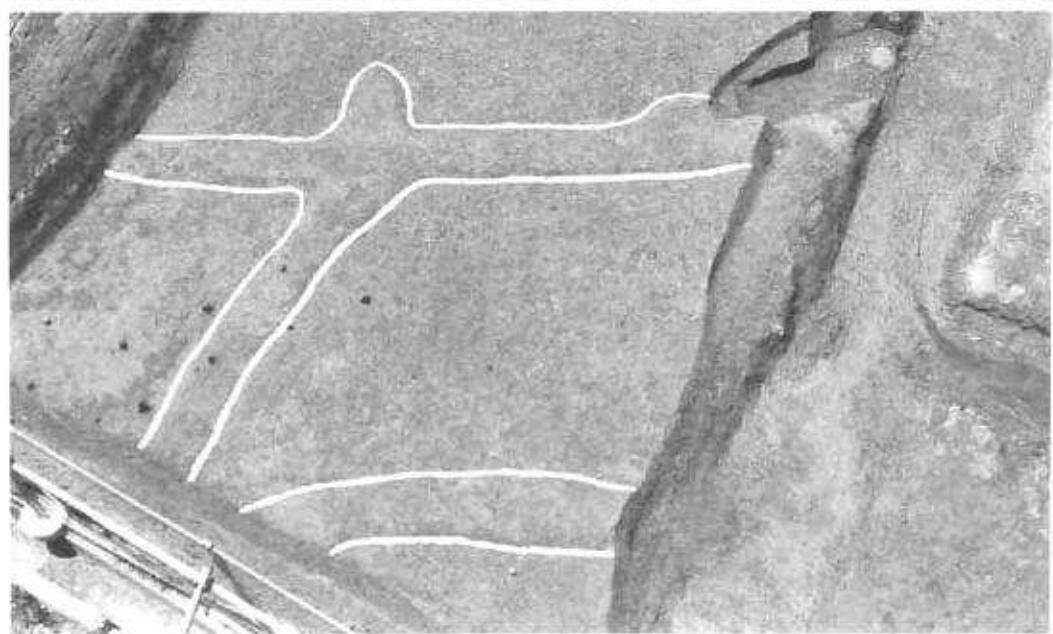
2. 6-I区全景
(東から)



1. 足跡（北から）



2. 水田跡（西から）

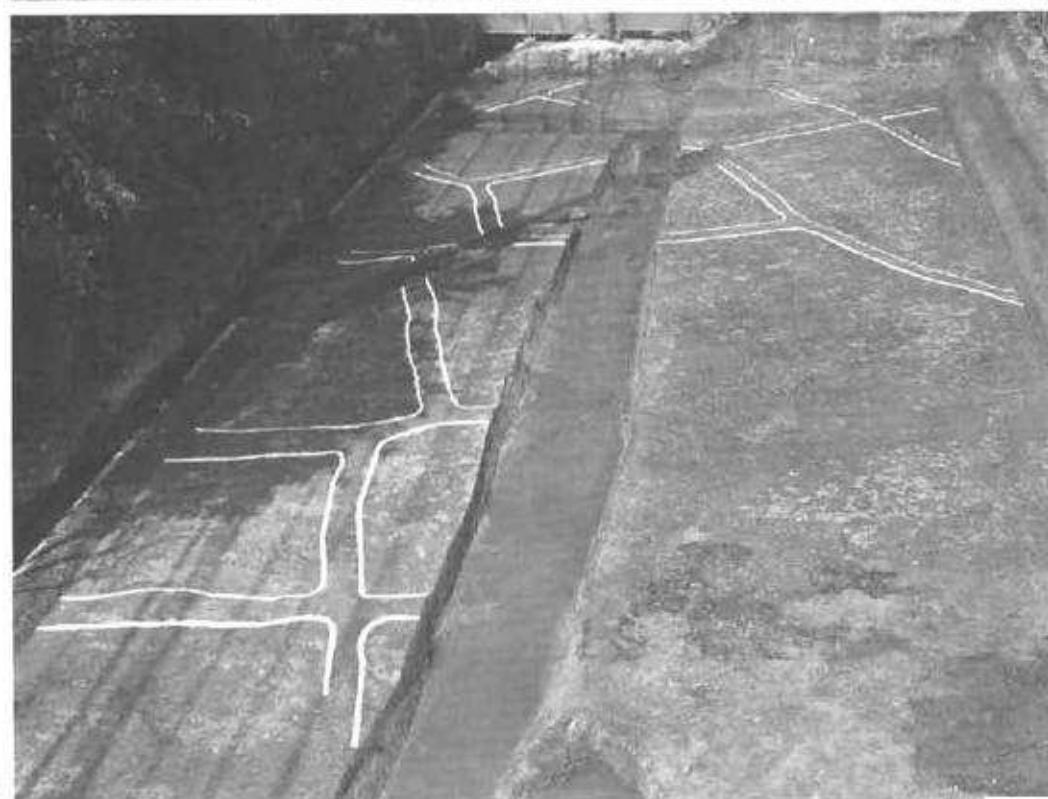
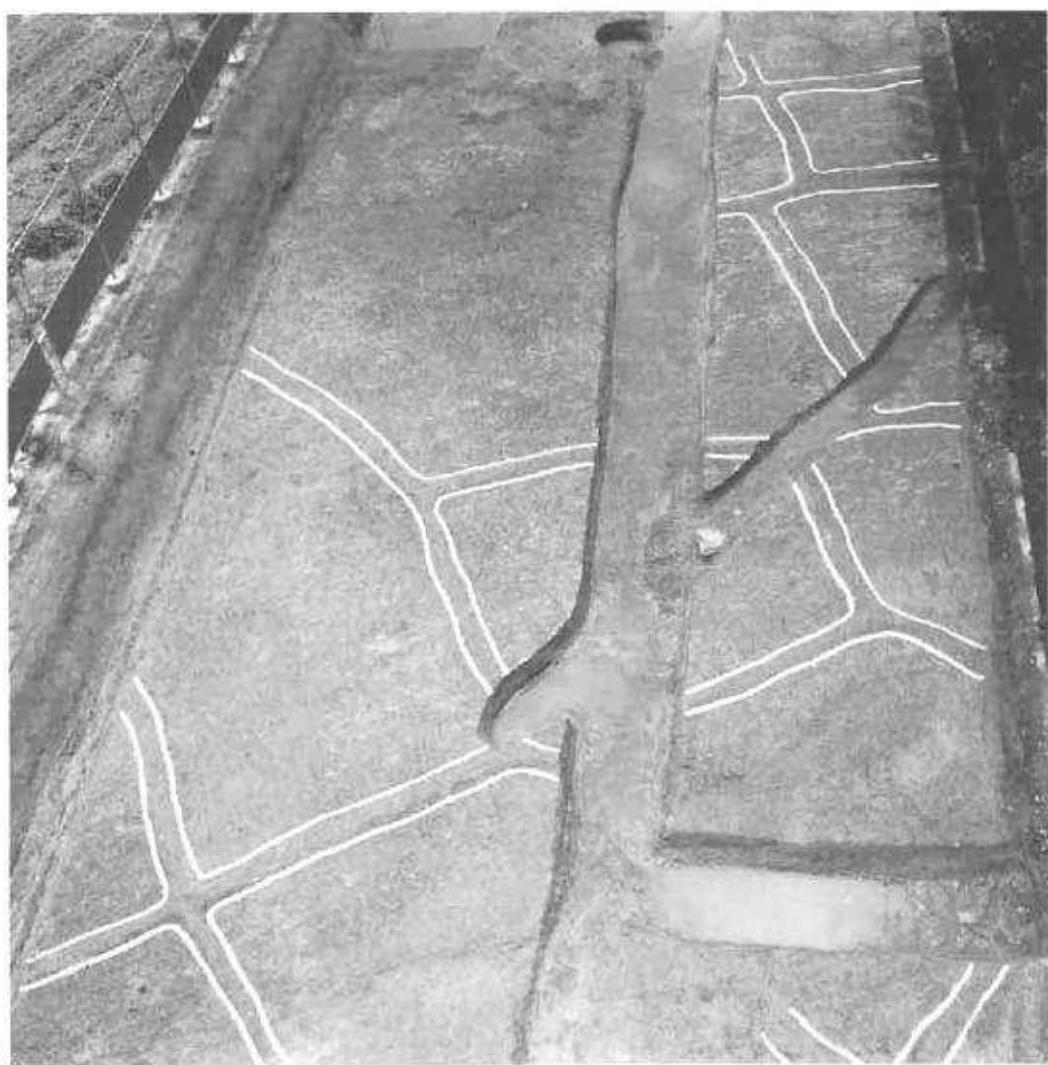


3. 水田跡（東から）

図版51 6区第4面



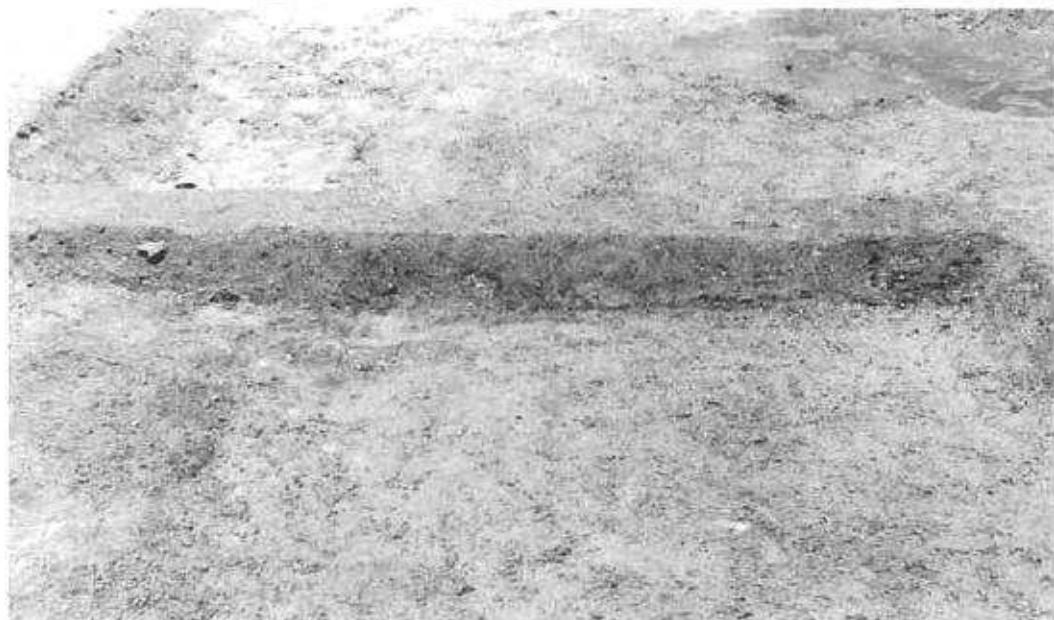
1. 6-I区全景
(西から)



図版53 6区第5面



1. SD108 (東から)



2. SD108断面
(南から)



1. 全景（西上空から）

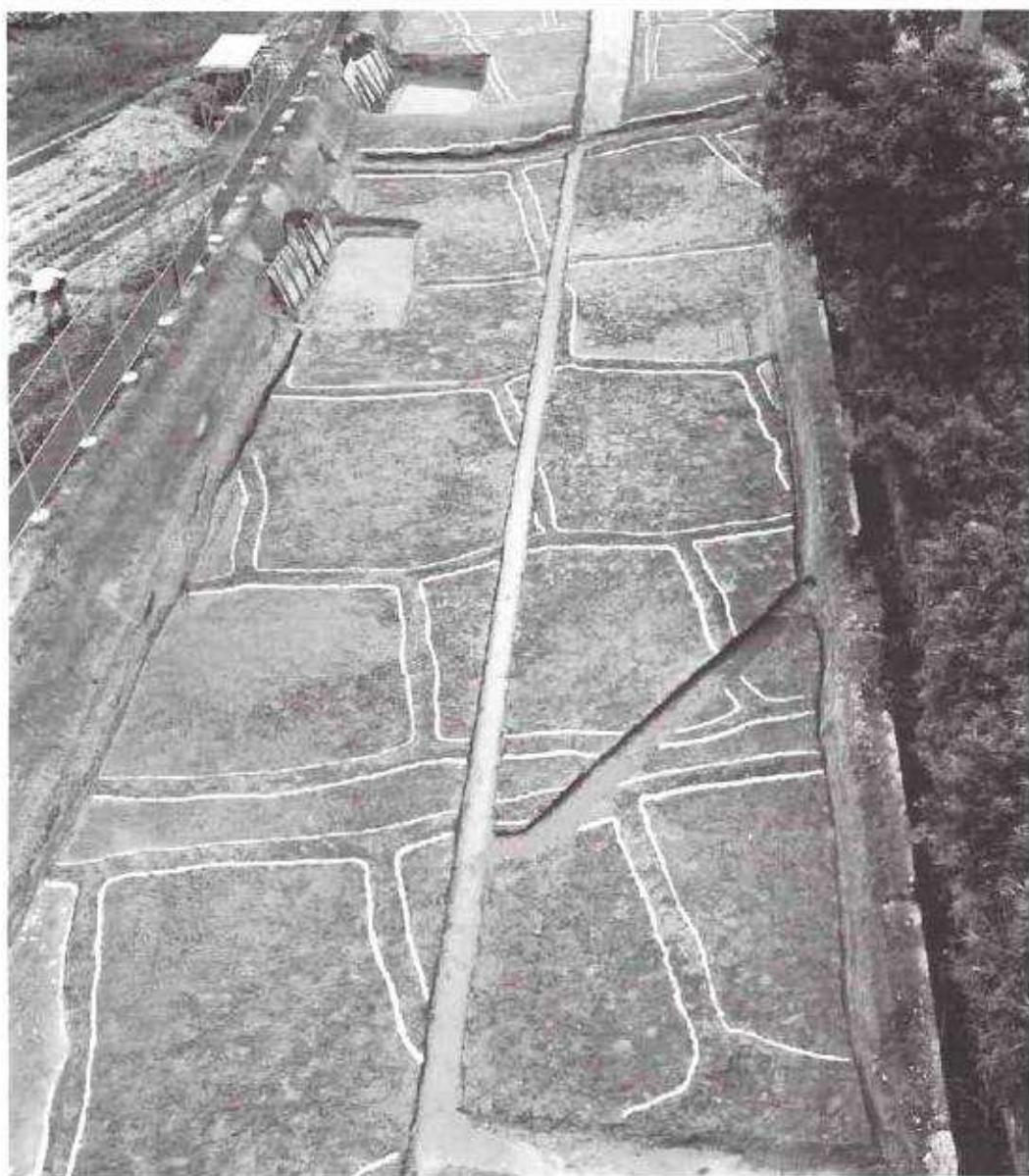
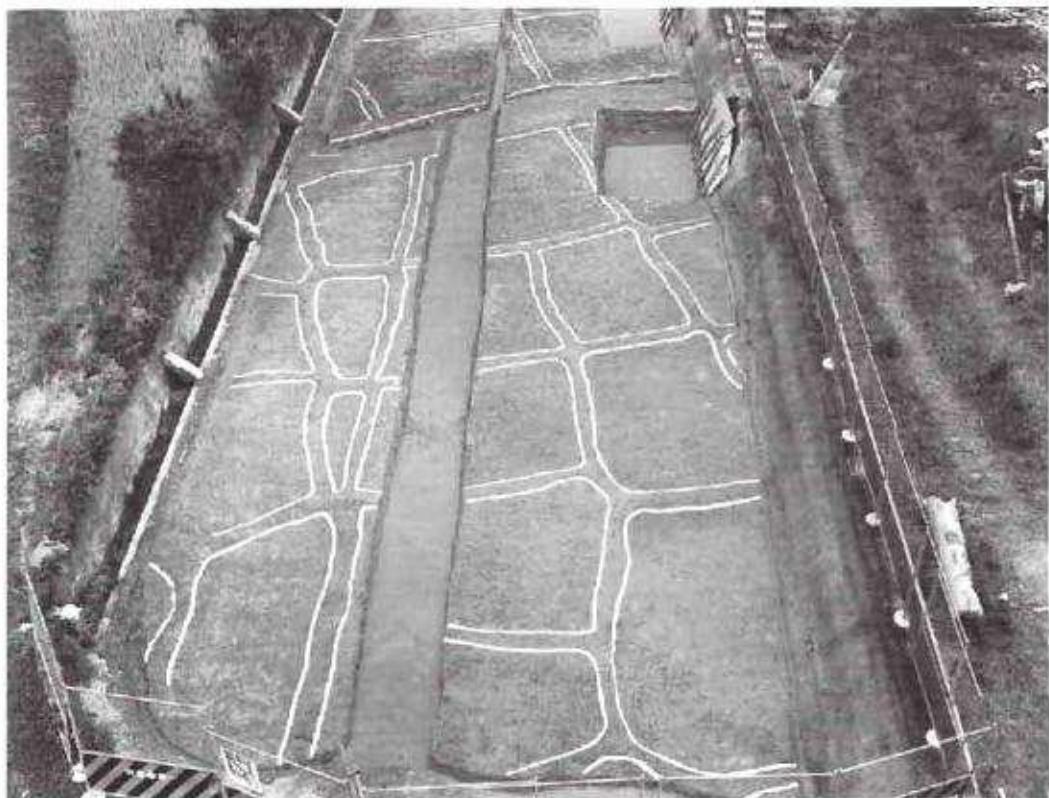
図版55 6区第6面

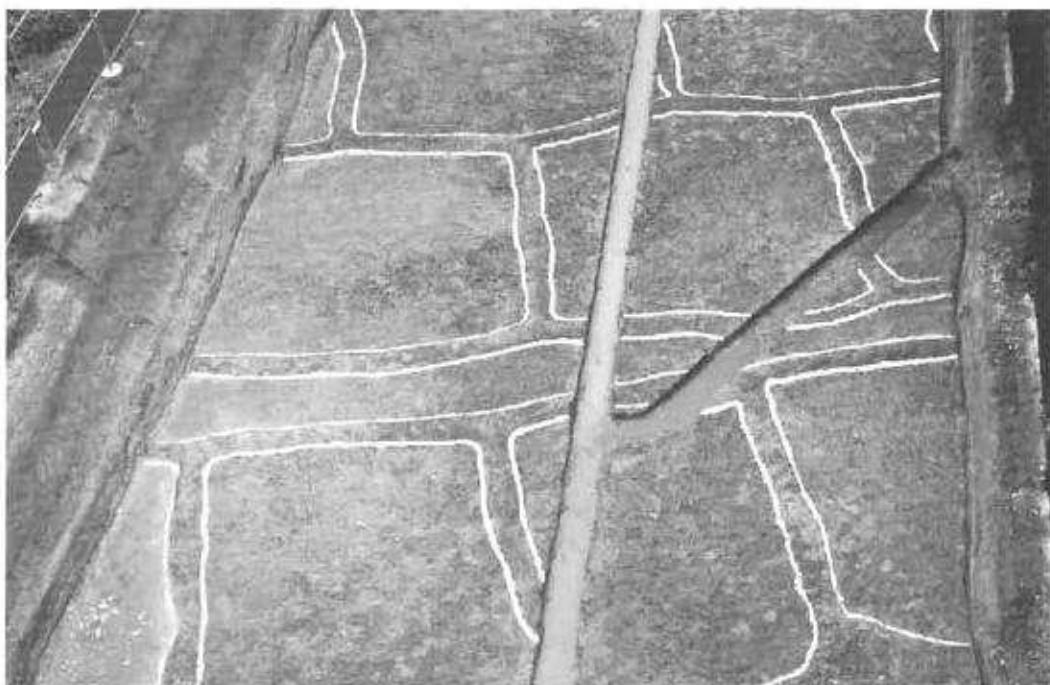


1. 全景（西から）



図版57 6区第6面

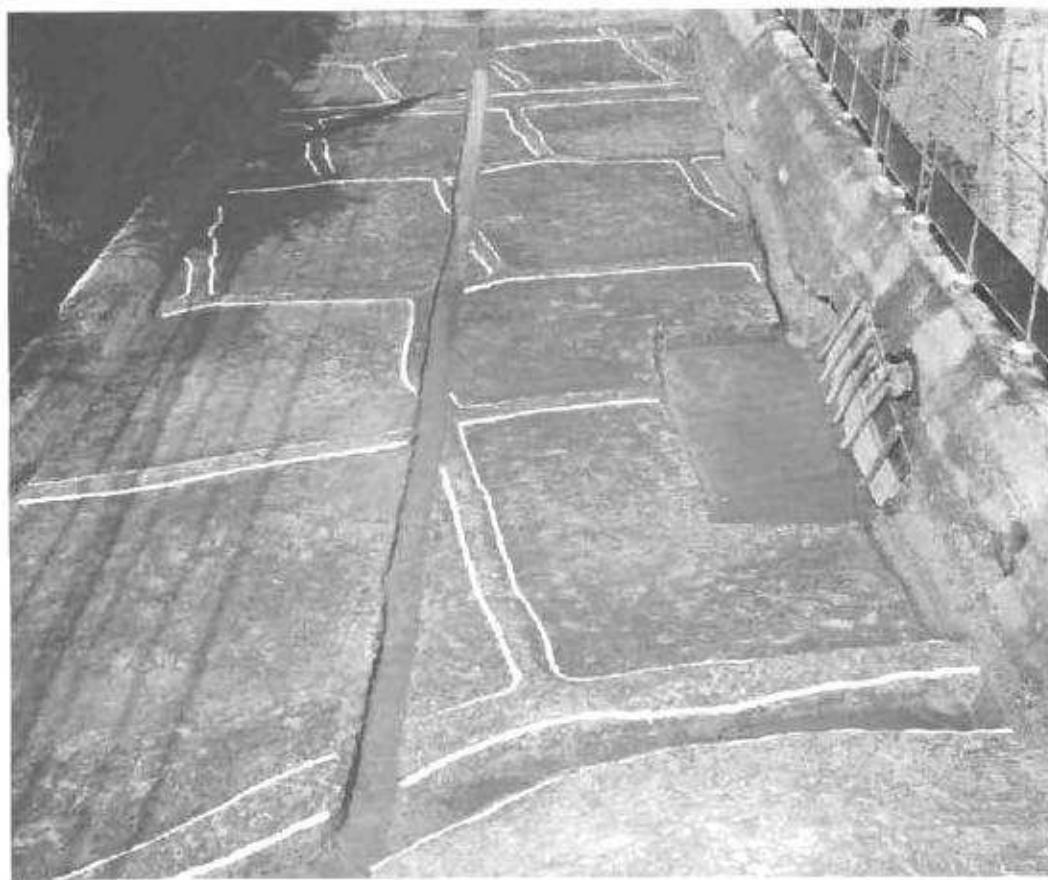




1. 眺瞰（東から）



2. 眺瞰（北から）



1. 大咗畔と水田跡
(西から)



2. 大咗畔と水田跡
(東から)



3. 大咗畔 (東から)



1. 大畦畔 (北から)

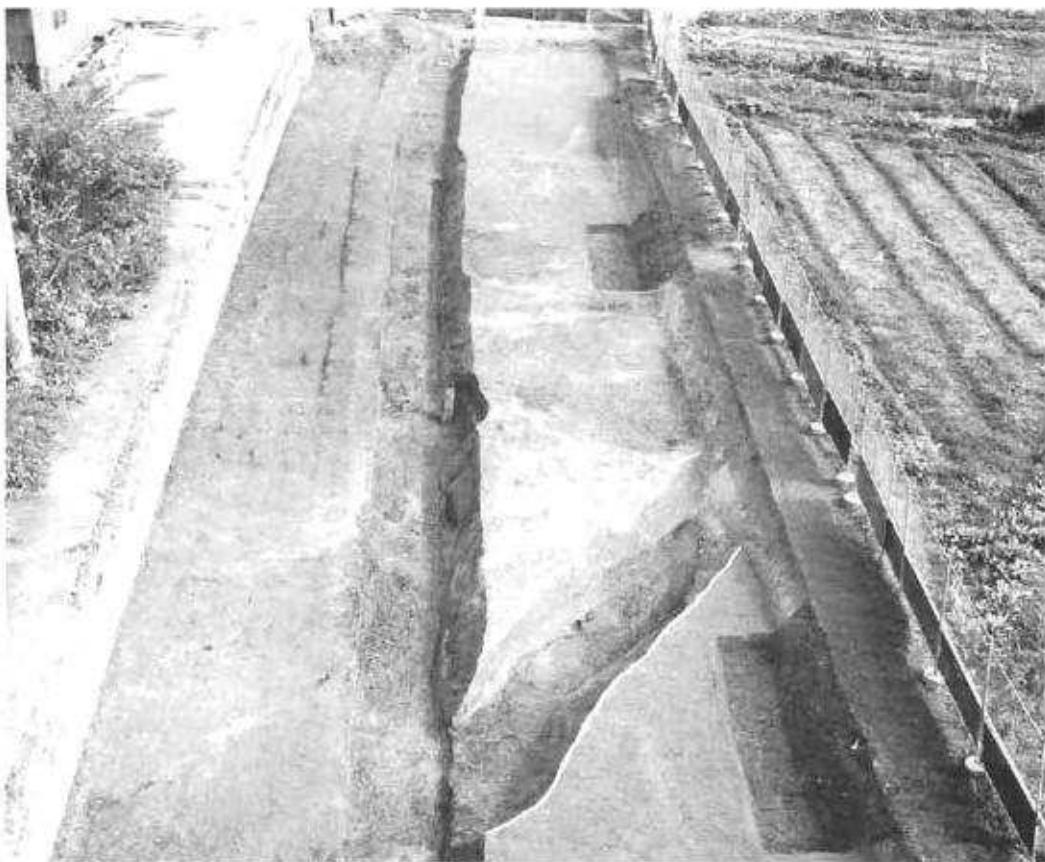


2. SD113断面
(北から)



3. 大畦畔とSD113
(南から)

図版61 7区第1面



1. 全景（西から）



2. SD114（東から）



3. SD114断面
(北西から)



1. 畦畔（南から）

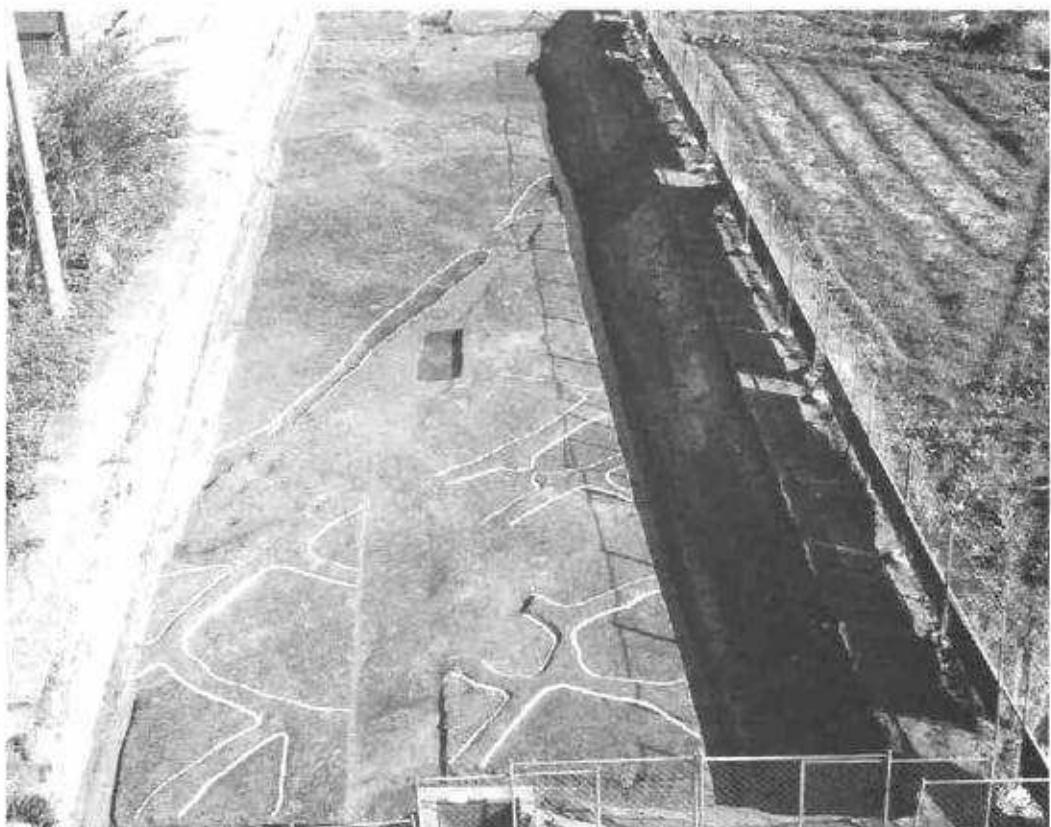


2. 畦畔（東から）



3. 畦畔（西から）

図版63 7区第4面



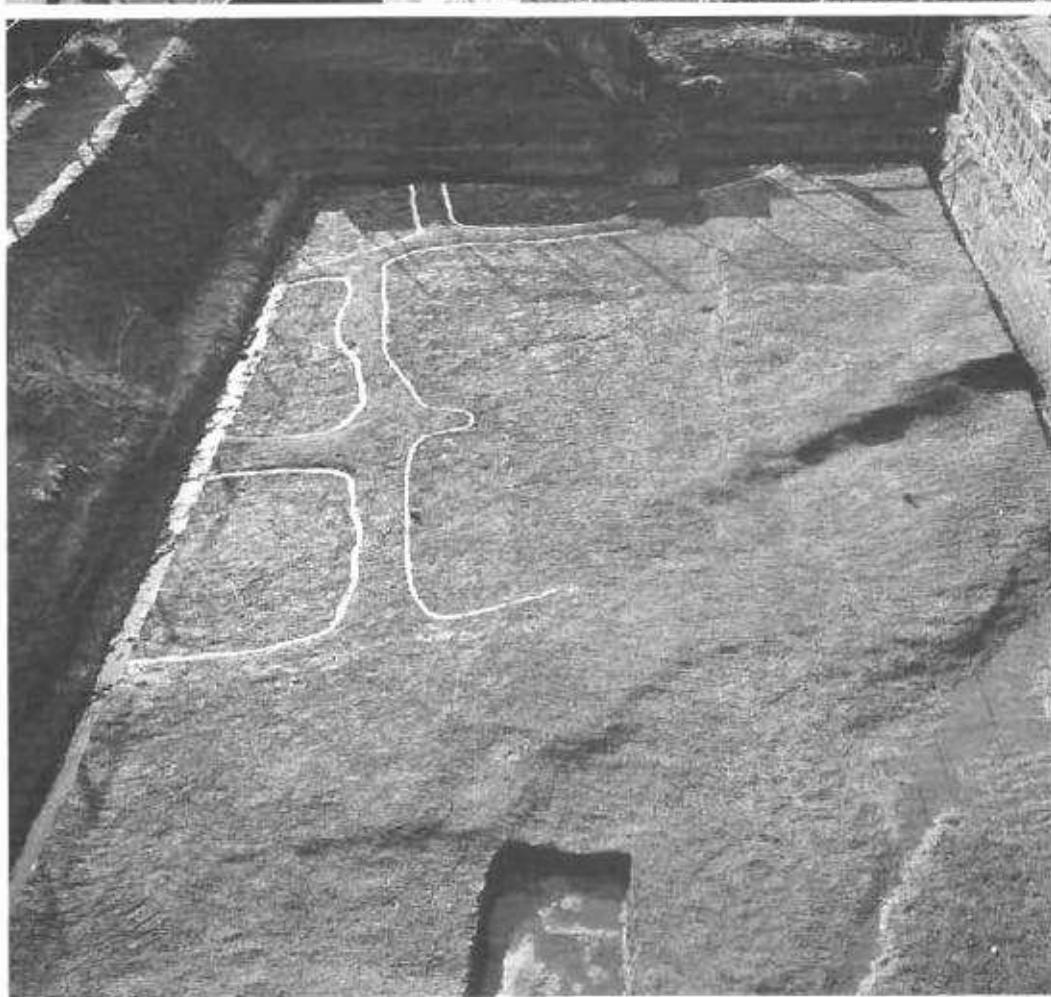
1. 全景（西から）



2. 水田跡（東から）



3. 水田跡（南東から）



図版65 先山駅ホーム



1. 調査前（南東から）

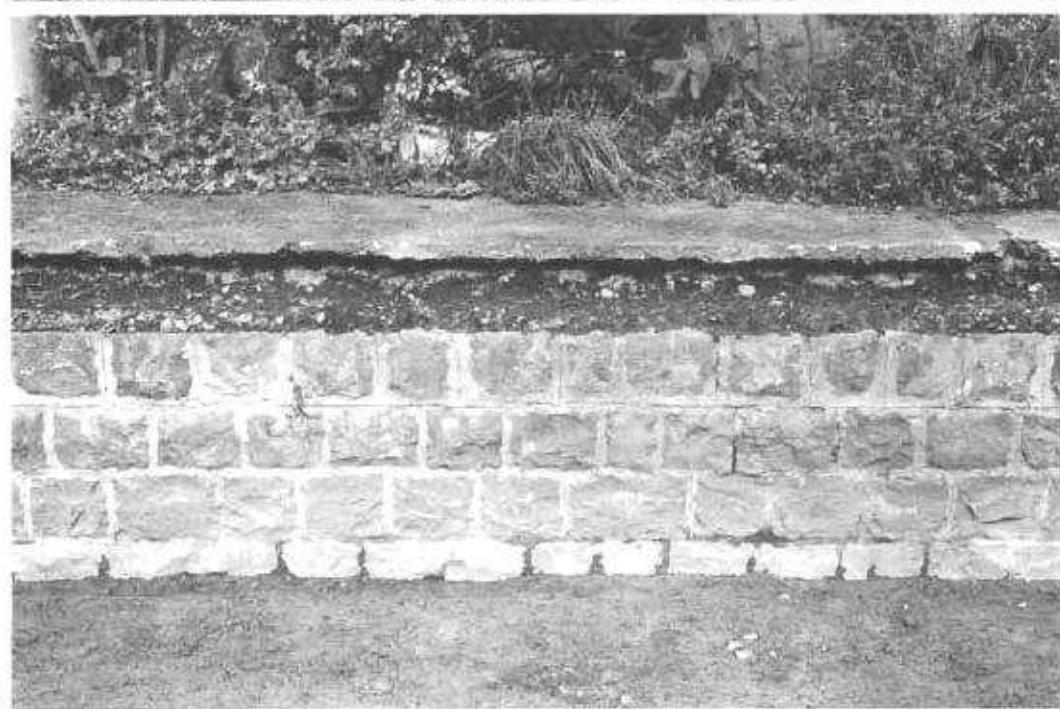
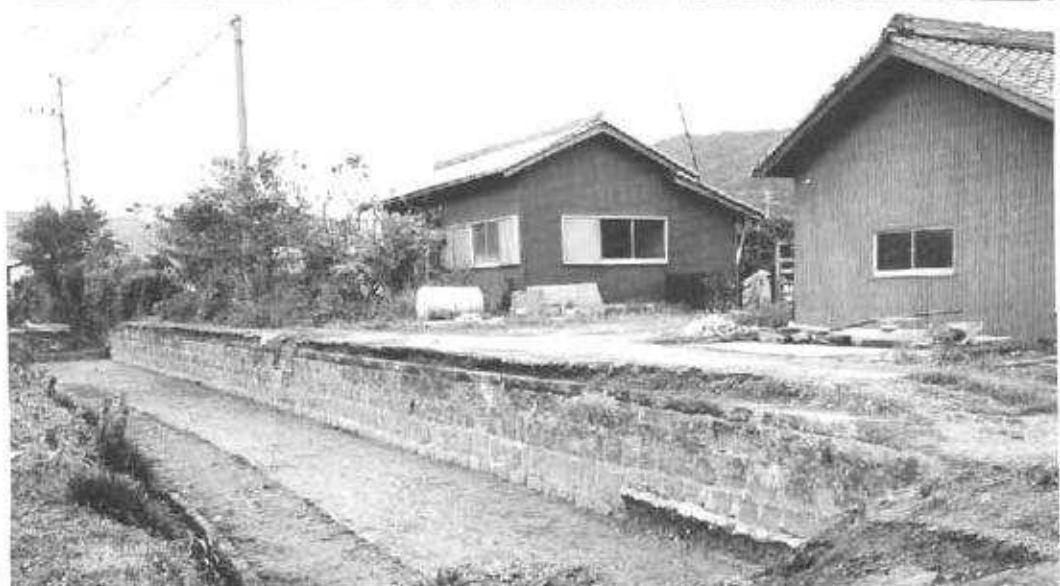


2. 調査前（南西から）

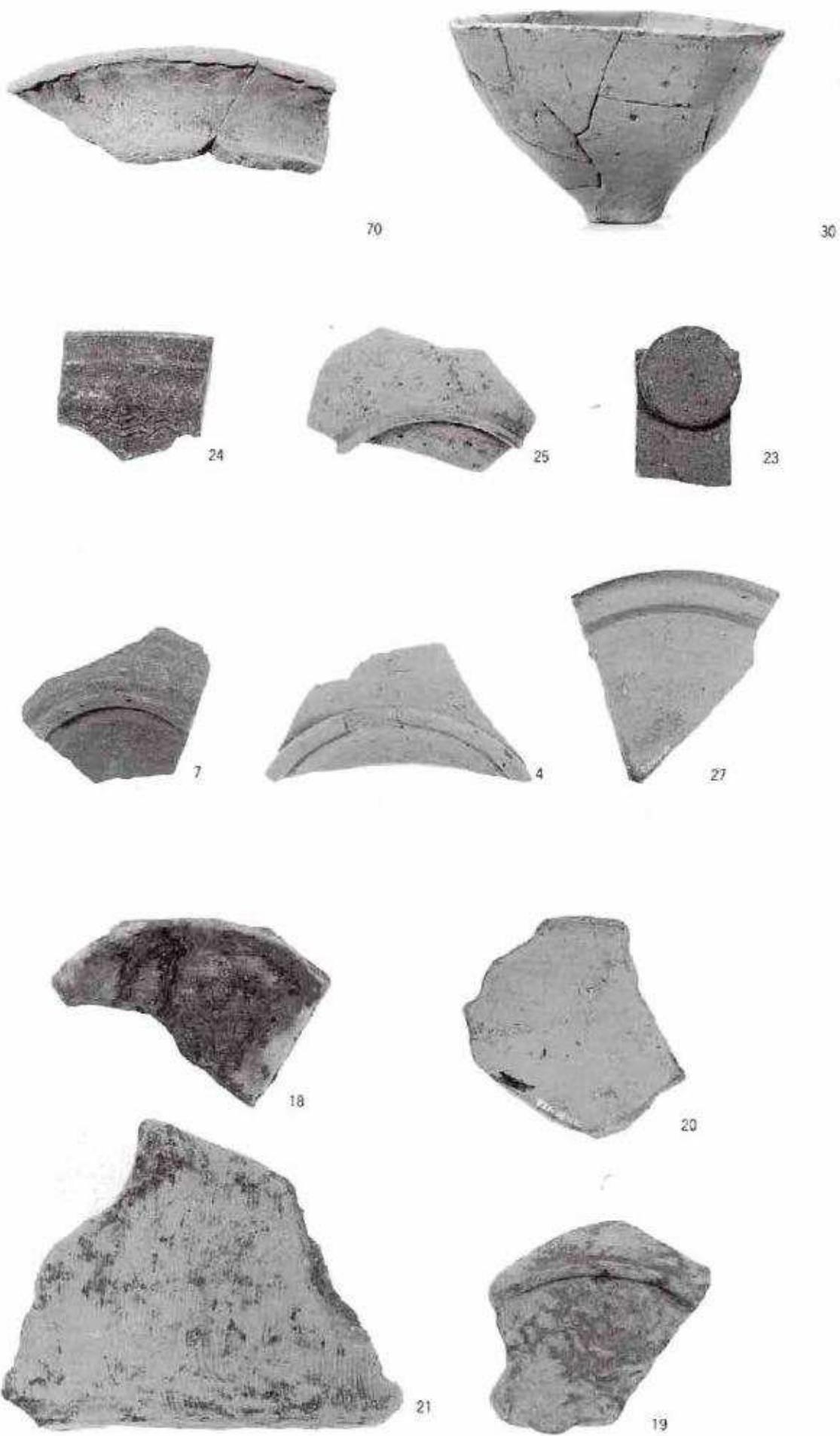


3. 調査後（南西から）

図版66 先山駅ホーム



図版67 1区出土遺物



第1面出土土器(4・7・18~21・23~25・27)

第2面出土土器(30)・第4面出土土器(70)

図版68 1区出土遺物



28



26



35



32



37



36



46



38

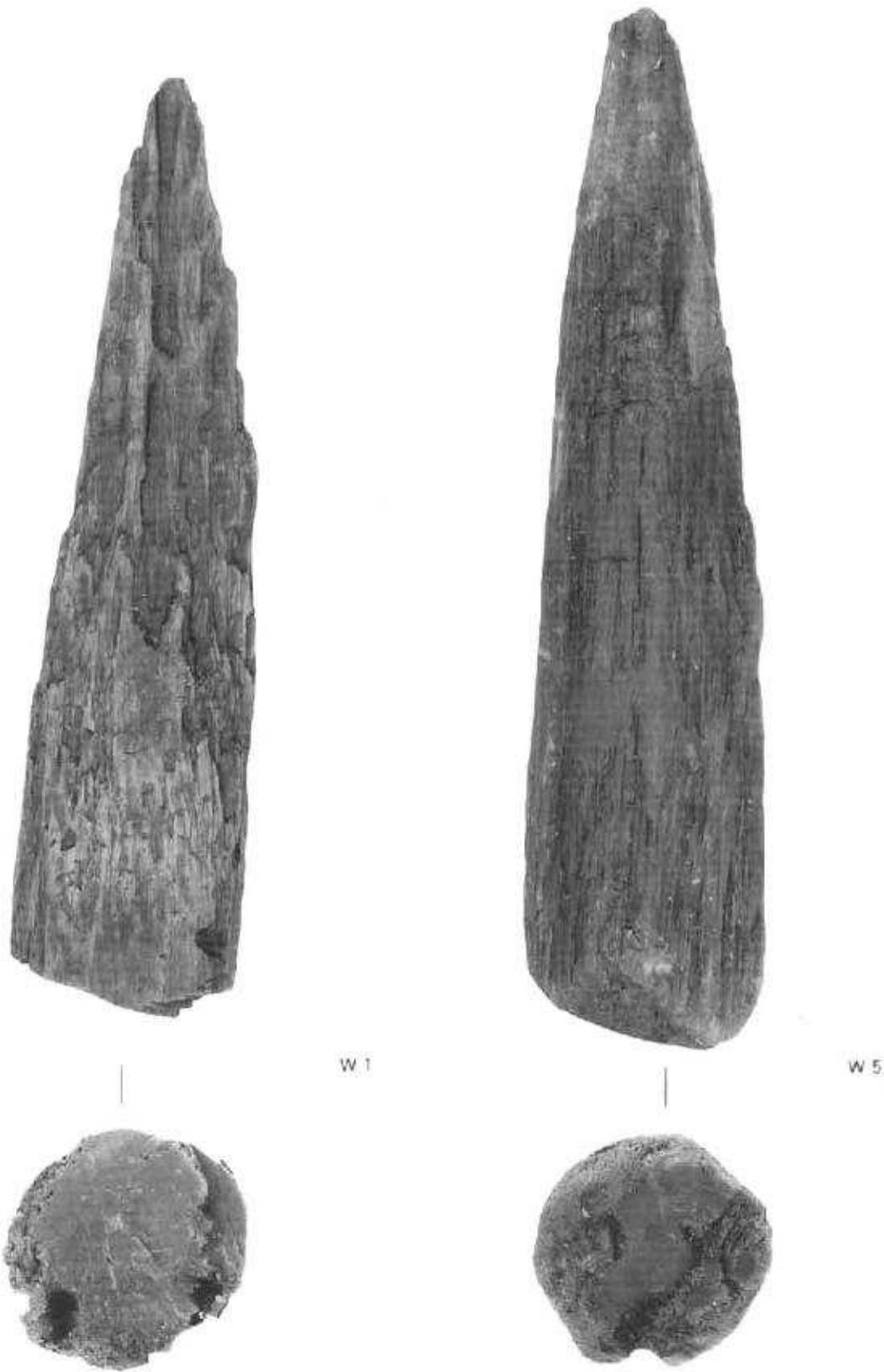


44

第1面出土土器(26・28)

第2面出土土器(32・35~38・44・46)

図版69 1区出土遺物



第2面SB02出土柱根(W1)
第2面SB06出土柱根(W5)

図版70 2区出土遺物



91



92



112



128



124



126



127

第2面出土土器(91・92)・第3面出土土器(112)
第5面出土土器(124・126~128)

図版71 2区出土遺物



131



145



141



146



149



158



160



161

第5面出土土器(131・141・145・146)

第5面SD28出土土器(149・158・160・161)

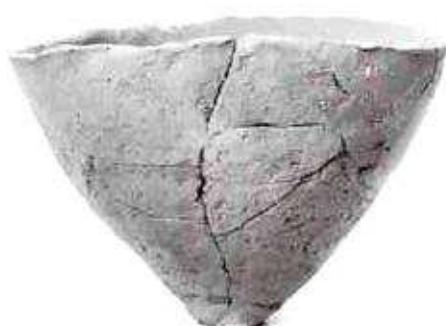
図版72 2区出土遺物



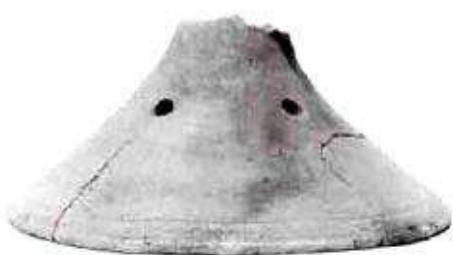
162



165



159



166



162



167

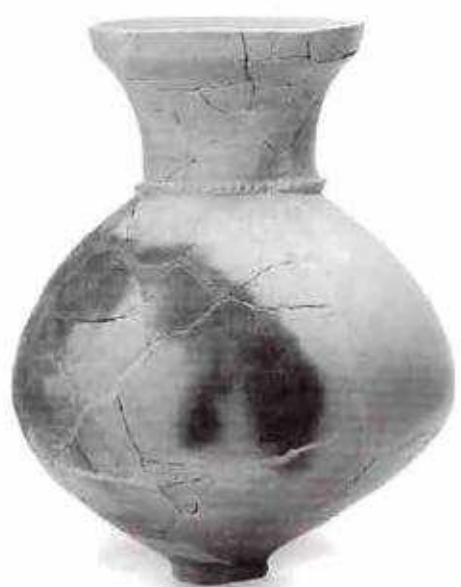


167

第5面SD28出土土器(159・162・165・166)

第5面SD29出土土器(167)

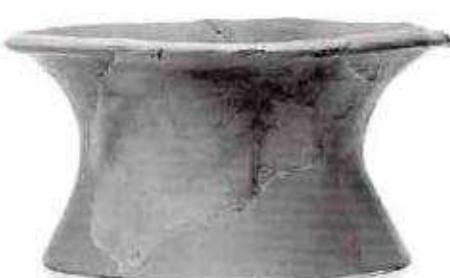
図版73 2区出土遺物



168



176



181



169



184



171



174



184

第5面 SD29出土土器(168・169・171・174・176・181・184)

図版74 2区出土遺物



196



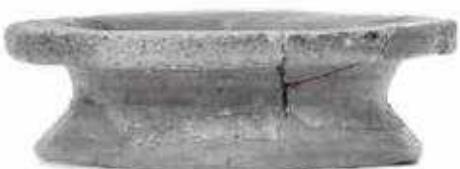
199



197



203



182



198



204

第5面 SD29出土土器(182・196~199・203・204)

図版75 2区出土遺物



209



238



212



239



226



237



240

第5面 SD29出土土器(209・212・226・237~240)

図版76 2区出土遺物



246



250



251



252



89



99



97



99

第6面出土土器(246・250~252)

第1面出土土器(89)・第2面出土土器(97・99)

図版77 2区出土遺物



100



108



103



109



110



111



W 6



S 1

第2面出土土器(100・103・108~111)

第2面出土木製品(W 6)・第5面出土石器(S 1)

図版78 3区出土遺物



278



293



282



292



296



300



287



301

第3面出土土器(278・282・287・292・293・296・300・301)

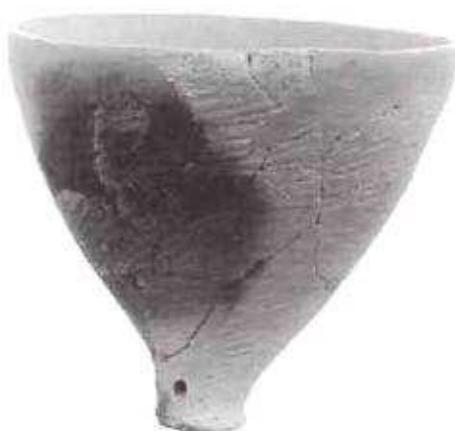
図版79 3区出土遺物



302



304



305



310



309



310

第3面土器群A出土土器(302・304・305)

第3面土器群B出土土器(309・310)

図版80 3区出土遺物



311

313



318

315



319

316

第3面土器群B出土土器(311・313・315・316・318・319)

図版81 3区出土遺物



323



328



321



331



325



332

第3面土器群C出土土器(321・323・325)

第3面土器群D出土土器(328・331・332)

図版82 3区出土遺物



334



335



333



337



336



339

第3面土器群E出土土器(333~337・339)

図版83 3区出土遺物



346



349



350



351



347



348

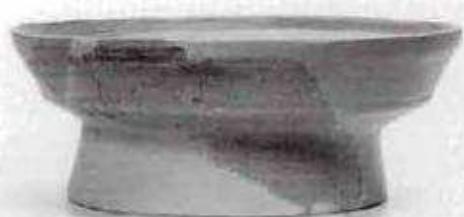


353

第3面土器群E出土土器(346~351)

第3面土器群F出土土器(354)

図版84 3区出土遺物



352



356



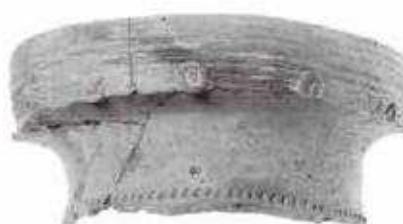
353



357



387



361



363



366



365



367



364

第3面土器群F他出土土器(352・353・356・357)

第4面出土土器(361・363~367・387)

図版85 3区出土遺物



391



393



407



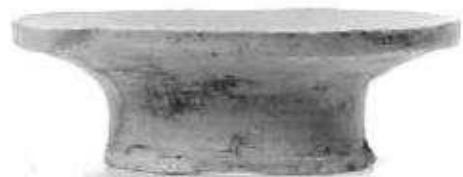
415



409



414



420

第4面 SD40出土土器(391・393)

第5面出土土器(407・409・414・415)

第6面出土土器(420)

図版86 3区出土遺物



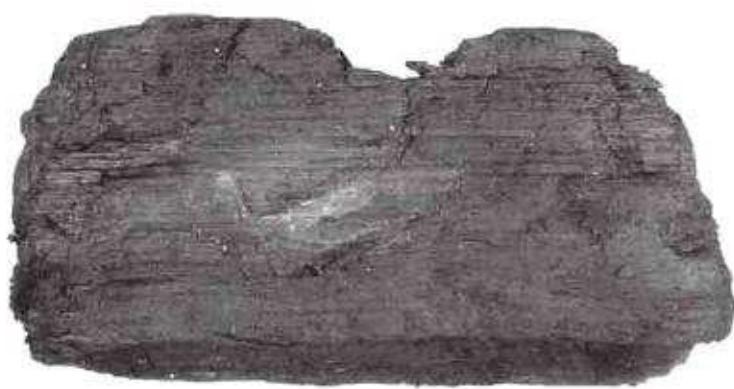
—



—



S 2



W 7

第7面出土石器(S 2)
第7面SH01出土木製品(W 7)

図版87 4・5区出土遺物



459



465



460



472



473



461



474



475

第2面出土土器(459～461・465・472～475)

図版88 4・5区出土遺物



476



486



477



488



478



489



479



490



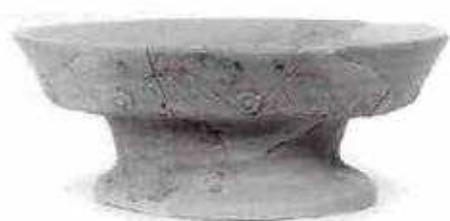
480



487

第2面出土土器(476~480・486~490)

図版89 4・5区出土遺物



493



511



498



500



512



504



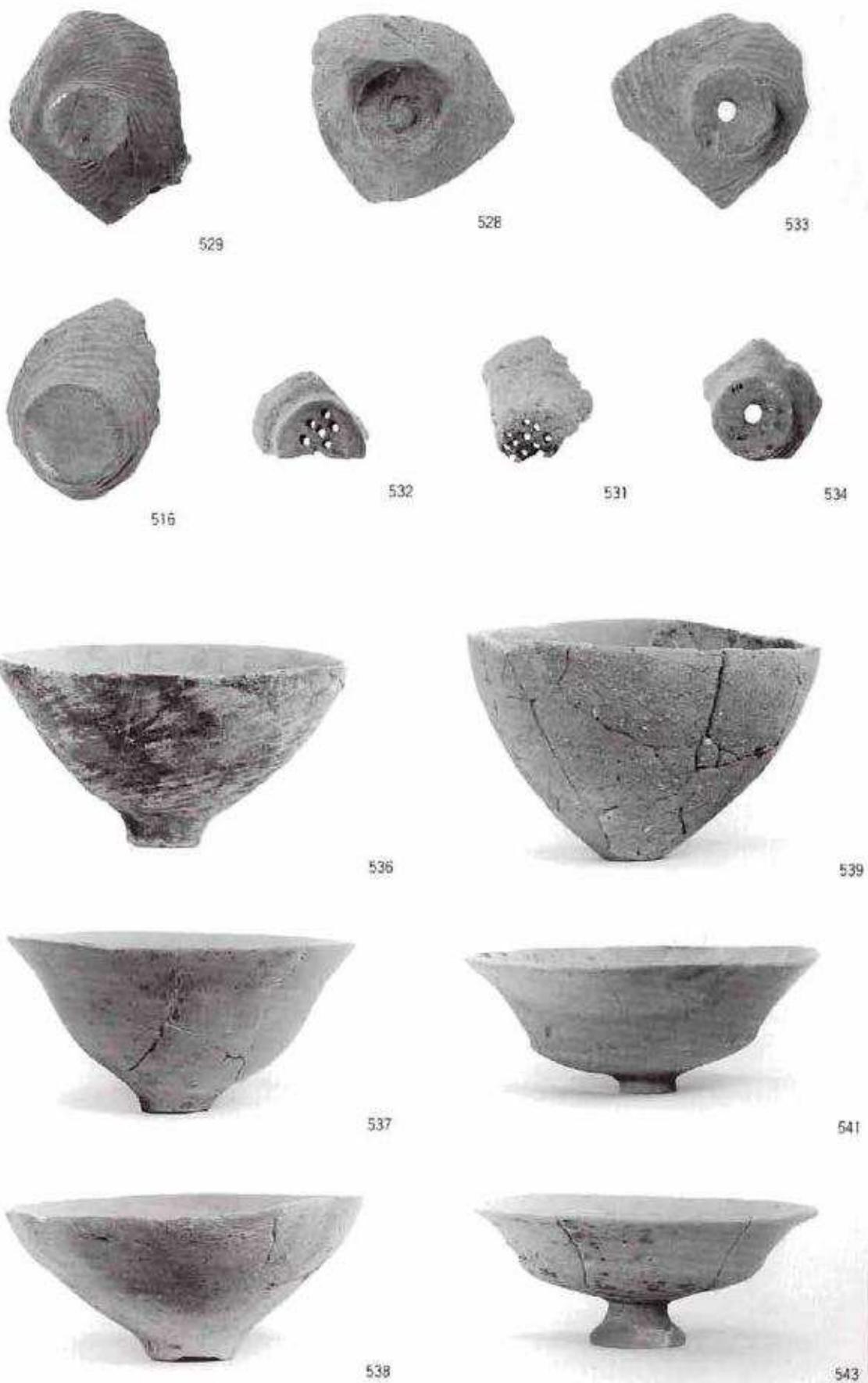
509



514

第3面出土土器(493・498・500・504・509・511・512・514)

図版90 4・5区出土遺物



第3面出土土器(516・528・529・531~534・536~539・541・543)

図版91 4・5区出土遺物



544



547



545



549



553



546



559



558



573



566

第3面出土土器(544~547・549・553)

第3面SH04出土土器(558・559・566・573)

図版92 4・5区出土遺物



第3面SH04出土土器(557・560・562・565・568・569・572・574)

図版93 4・5区出土遺物



726



727



728



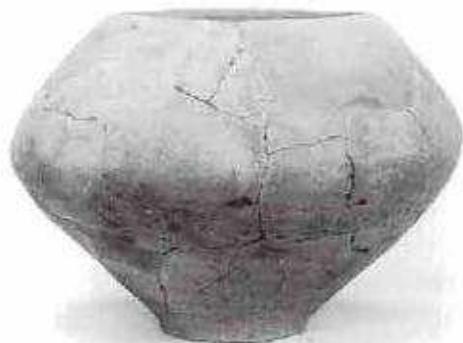
729



637



639



641



642

第4面SD87出土土器(726~729)・第5面出土土器(637)

第5面SK48出土土器(639)・第5面SK50出土土器(641・642)

図版94 4・5区出土遺物



644



643



645



646



648

第5面SK51出土土器(643~646)

第5面SK56出土土器(648)

図版95 4・5区出土遺物



647



650



649



653



656

第5面 SK56出土土器(647・649・650・653・656)



657



W 9



W 10

第5面SK57出土土器(657)

第5面出土柱根(W 9・W 10)

図版97 4・5区出土遺物



S 14

S 3



S 4

第1面P13出土石器(S 3)・第3面柱穴出土石器(S 14)
第3面出土石器(S 4)

図版98 4・5区出土遺物



S 5



S 6



S 7



S 9

第3面SH04出土石器(S 5~S 7・S 9)

図版99 4・5区出土遺物



S8



S10



S11



|



S12

第3面SH04出土石器(S8)

第3面SH05出土石器(S10)・第3面SK21出土石器(S11・S12)

図版100 6区出土遺物



702



712



659



676



665



683



682



672



667



666



679



680



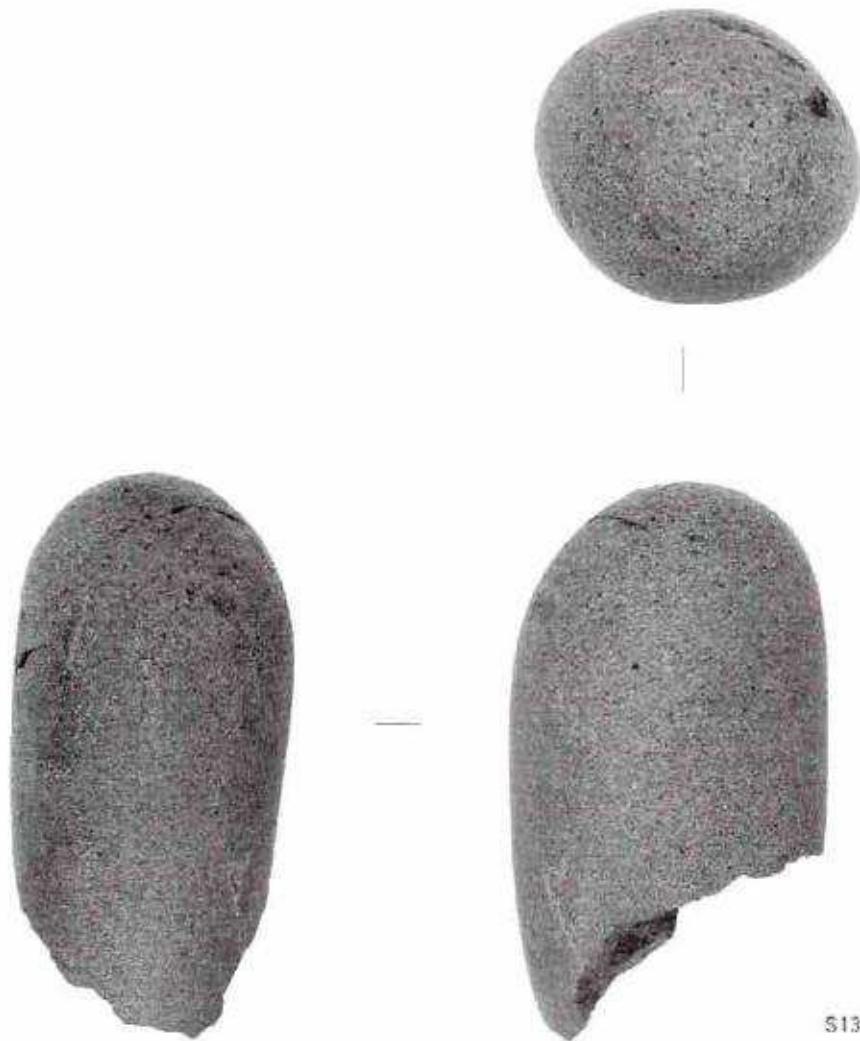
671

第1面出土土器(659・665~667・671・672・676・679・680)

第1面P19出土土器(682・683)

第4面出土土器(702)・第6面SD113出土土器(712)

図版101 6区出土遺物



S13

第1面出土石器(S13)

兵庫県文化財調査報告書 第155冊

下内膳遺跡

平成8年3月25日 印刷

平成8年3月31日 発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番地5号
TEL (078) 531-7011

発行 兵庫県教育委員会
〒652 神戸市中央区下山手5丁目10番地1号
TEL (078) 341-7711

印刷 船場印刷株式会社
〒670 鳴路市定光町4の2
TEL (0792) 96-3535
